

---

熊谷市

---

# 北島遺跡 IV

---

(第14～16地点)

上之調節池建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告

〈第1分冊〉

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（南西より・奥に利根川）



遺跡遠景（北東より・奥に荒川）





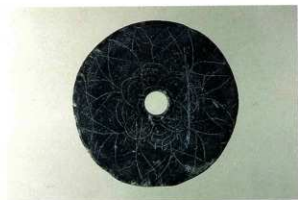
調査区遠景 (南より)



調査区遠景 (北より)



第46(左)・59住居跡紡錘車



紡錘車 (S J 46)

紡錘車 (S J 59)



S D I 土器集中区 (104-90G) 出土遺物



八稜鏡(裏)



八稜鏡(表)

## 序

埼玉県では「環境優先・生活重視」、「豊かな彩の国づくり」を基本理念として、6つの基本施策に沿った政策を進めております。

調節池の整備は、その第1番目の施策「1さわやかで安心して暮らせる環境づくり」の「5災害に強い地域づくり」に基づき進められているものです。

流域の都市化が進む河川の治水対策として、河道の負担を軽減し、治水機能の向上を図るため、公園などの都市施設と複合的に利用することを目的とした調節池の整備を進めていくというものです。

上之調節池の建設も、この施策に基づき、1級河川黒川の洪水対策のために計画されました。

今回報告いたします北島遺跡のある熊谷市は、荒川によって形成された扇状地上に立地しており、北島遺跡をはじめとする中來遺跡群は、この扇状地の扇端部付近に位置しています。

市内には、弥生時代中期の環壕集落である池上遺跡や、日本最古の「出挙」木簡が検出され話題となった小敷田遺跡など、数多くの重要な遺跡が存在しています。

また熊谷市は、源頼朝に従って活躍をした武蔵武士の1人である、熊谷次郎直実ゆかりの地であるほか、市内を中山道や秩父往還が通り、中世以来の交通の要衝・宿場町として栄えたところとして知られております。

今回の調節池建設予定地は、埋蔵文化財の所在が充分に予想されておりました。そこでこの遺跡の取り扱

いについて、関係機関が慎重に協議を重ねて参りましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることになりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県河川課の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代の遺物や、弥生時代中期・古墳時代前期、奈良～平安時代および中近世の遺構や遺物が数多く検出されました。なかでも、120軒の竪穴住居跡や、70棟にものぼる掘立柱建物跡の大部分は奈良時代から平安時代のものであり、これまでに調査されている北島遺跡の調査成果と合わせ、この時期この地域には大規模な集落が広がっていたことを窺わせま

す。本書は、これらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護および普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広くご活用いただけることを願ってやみません。

刊行に当たり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県土木部河川課、熊谷土木事務所、埼玉県北部公園建設事務所、熊谷市教育委員会ならびに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 荒井 桂

## 例言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字上川上字会下後443-1番に所在する北島遺跡に関する発掘調査報告書である。

発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。

平成6年11月28日付け 教文2-122号

平成7年4月18日付け 教文2-13号

平成8年4月16日付け 教文2-9号

- 2 遺跡名の略号はKTJMである。
- 3 発掘調査は上之調節池建設に伴う事前調査である。埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整のもと、熊谷土木事務所の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 本事業は、I-3の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査と整理事業の担当者は以下のとおりである。

発掘調査=平成6年9月1日～平成8年7月31日

日

平成6年度：鈴木孝之、書上元博、  
新屋雅明、大屋道則

平成7年度：磯崎 一、木戸春夫、  
鈴木孝之、山川守男、  
上野真由美

平成8年度：磯崎 一、富田和夫

整理事業=平成8年4月1日～平成10年3月31日

日

平成8年度・9年度：鈴木孝之

- 5 写真撮影は、発掘調査時は各担当者が行い、遺物写真は鈴木・書上・大屋・上野が行った。
- 6 遺物の巻頭カラー写真撮影は小川忠博氏に委託した。
- 7 遺跡の基準点測量、空中写真撮影・測量は、株式会社日成プランに委託した。
- 8 分析・鑑定は下記へ委託した。  
胎土分析：株式会社第四紀 地質研究所  
テフラ・珪藻・花粉・植物珪酸体分析、樹種・種実・貝同定：パリオ・サーヴェイ株式会社  
獣骨鑑定：群馬県立大間々高等学校 宮崎重雄
- 9 出土品の整理および図版の作成は鈴木が行った。本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、IV-1(1)・(2)、VI-1を書上が、IV-1(3)を上野が、そしてVの付編は各委託機関・委託者が行い、その他については鈴木が行った。
- 10 本書の編集は、資料部資料整理第1課の鈴木が行った。
- 11 本書にかかる資料は、平成9年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 12 本書の作成にあたり下記の方々・機関から御教示・御協力を戴いた。(敬称略・五十音順)  
熊谷市教育委員会 金子正之

# 凡例

- 1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土地理院平面直角座標系IX系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位指示は、すべて座標北を表す。

- 2 グリッドについては、北島遺跡においてこれまでに当事業団で実施した3度(第1～13地点)の発掘調査の際に設定した9×9m方眼を、引き続き踏襲した。

呼称は、X・Yともにアラビア数字を用い、北西隅の杭番号(9I-10I……)で代表させた。表記はX方向=東西方向を先に、Y方向=南北方向を後に記した。

- 3 本書の文中・挿図・表などにおける遺構の略号は、下記のとおりである。

SJ……住居跡	SE……井戸跡
SB……掘立柱建物跡	SD……溝跡
SA……柵列跡	SX……性格不明遺構
SK……土壇	

- 4 調査時点において、複数の地点を同時に調査したため、これまでの発掘調査と同様に、各々の遺構名は地点ごとに第1号から命名した。また、同一地点内においても、複数の箇所を同時に調査したため、遺構名は番号順の配列とはならなかった。

そこで、各遺構を検索する際の煩雑さを避けるため、整理作業の段階で、遺構番号を新たに振り直すこととした。ナンバリングは北西から順次、南東へ送る方式を基本とするが、一部これと異なるものもある。

なお溝跡については、III番号をそのまま遺構番号とした。

- 5 遺構の挿図の縮尺は、住居跡・掘立柱建物跡・柵列跡・土壇・井戸跡・ピット：1/60、カマド：1/30、を原則とし、例外的なものについては、スケールで示した。

- 6 遺物挿図の縮尺は、土師器・須恵器等：1/4、石製品・金属製品：1/3を基本とするが、例外的なものにはスケールで示した。

- 7 土層断面図のレベル数値は、海拔標高(m)を示す。

- 8 遺物観察表は次のとおりである。

・口径・器高・底径はcmを単位とし、推定値は( )内に記した。

・胎土は、肉眼観察による混入物を記した。A：赤色粒子 B：石英 C：雲母 D：黒褐色粒子 E：白色粒子 F：光沢のある黒色粒子 G：自然釉 H：白色針状物質 I：その他

・焼成は相対的な3段階で表すが、あくまでも主観的なものである。

・須恵器観察の略号

ロクロ回転方向 R=右 L=左

底部切り離しと調整の分類

全面鏡割り A

周辺鏡割り B 1<2→a

1≥2→b

糸切り離し C

- 9 挿図中のアミ掛けについては、以下のとおりである。

 貼床

 焼土

 粘土

 炭化物

 柱痕跡

# 目次

序  
例言  
凡例  
目次

<第1分冊>

I 調査の概要	1
1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4
II 遺跡の立地と環境	6
III 遺跡の概観	11
IV 検出された遺構と遺物	15
1 縄文晩期末～弥生時代	15
(1) 弥生時代の遺構	15
(2) グリッド出土の土器	18
(3) グリッド出土の石器	25
2 第14地点	31
(1) 住居跡	33
(2) 掘立柱建物跡	130
(3) 柵列跡	178
(4) 土壇	181
(5) 井戸跡	193
(6) 道路状遺構	202
(7) 性格不明遺構(SX)	206
(8) ビット	209
(9) 溝跡	220
(10) グリッド出土遺物・表面採集遺物	259
3 第15地点	261
(1) 住居跡	262
(2) 掘立柱建物跡	317
(3) 土壇	327
(4) 井戸跡	333
(5) ビット	336
(6) 道路状遺構	341

(7) 溝跡	347
--------	-----

(8) グリッド出土遺物・表面採集遺物	360
---------------------	-----

<第2分冊>

4 第16地点	362
(1) 住居跡	363
(2) 掘立柱建物跡	375
(3) 柵列跡	389
(4) 土壇	390
(5) 井戸跡	401
(6) ビット	410
(7) 性格不明遺構(SX)	431
(8) 溝跡	437
(9) グリッド出土遺物・表面採集遺物	472
5 新旧対照表	
(1) 第14地点	474
(2) 第15地点	476
(3) 第16地点	477
V 付編	482
1 胎土分析	482
2 北島遺跡の古環境変遷	489
3 北島遺跡出土の獣骨類	508
VI 結語	511
1 縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器	511
2 北島遺跡の検刻をもつ紡錘車について	516
3 北島遺跡についての小結	529

# 挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県の地形区分	8	第 36 図	第13・14号住居跡	46
第 2 図	遺跡周辺の地形図	9	第 37 図	第13・14号住居跡出土遺物	47
第 3 図	遺跡の位置迅速測図(行田町熊谷驛)	10	第 38 図	第15号住居跡	48
第 4 図	調査区の位置	10	第 39 図	第15号住居跡出土遺物	49
第 5 図	北島遺跡調査地点位置図	12	第 40 図	第16号住居跡	50
第 6 図	グリッド配置図	14	第 41 図	第16号住居跡出土遺物	51
第 7 図	縄文晩期末～弥生中期の土器分布図	16	第 42 図	第17号住居跡出土遺物	52
第 8 図	第1号再葬墓・弥生土壌群	17	第 43 図	第17号住居跡	53
第 9 図	グリッド出土土器(1)	19	第 44 図	第18・19号住居跡	54
第 10 図	グリッド出土土器(2)	20	第 45 図	第20号住居跡	56
第 11 図	グリッド出土土器(3)	21	第 46 図	第21・22号住居跡	57
第 12 図	グリッド出土土器(4)	22	第 47 図	第21号住居跡カマド(1)・(2)	58
第 13 図	グリッド出土土器(5)	23	第 48 図	第21号住居跡出土遺物	58
第 14 図	グリッド出土土器(1)	26	第 49 図	第22号住居跡出土遺物	59
第 15 図	グリッド出土土器(2)	27	第 50 図	第23号住居跡	60
第 16 図	グリッド出土土器(3)	28	第 51 図	第23号住居跡出土遺物	60
第 17 図	グリッド出土土器(4)	30	第 52 図	第24・25・26号住居跡(1)	61
第 18 図	第14地点全体図	31	第 53 図	第26号住居跡(2)カマド	62
第 19 図	基本土層	32	第 54 図	第24号住居跡出土遺物	63
第 20 図	第1号住居跡	33	第 55 図	第27号住居跡	64
第 21 図	第2号住居跡	33	第 56 図	第27号住居跡出土遺物	64
第 22 図	第3号住居跡	34	第 57 図	第28・29号住居跡	65
第 23 図	第3号住居跡出土遺物	34	第 58 図	第28・29号住居跡出土遺物	66
第 24 図	第4・6・7号住居跡	35	第 59 図	第30・31・32・33号住居跡(1)	68
第 25 図	第4号住居跡出土遺物	36	第 60 図	第30・31・33号住居跡(2)カマド	69
第 26 図	第5号住居跡出土遺物(1)	36	第 61 図	第30号住居跡出土遺物	69
第 27 図	第5号住居跡	37	第 62 図	第31号住居跡出土遺物	70
第 28 図	第5号住居跡出土遺物(2)	37	第 63 図	第32・33号住居跡出土遺物	70
第 29 図	第6号住居跡出土遺物	38	第 64 図	第34号住居跡	71
第 30 図	第8・9号住居跡	39	第 65 図	第66図第35号住居跡カマド	73
第 31 図	第8・9号住居跡出土遺物	40	第 67 図	第36号住居跡	73
第 32 図	第10・11号住居跡	41	第 68 図	第36号住居跡出土遺物	74
第 33 図	第11号住居跡出土遺物	42	第 69 図	第37号住居跡	74
第 34 図	第12号住居跡	43	第 70 図	第38号住居跡	75
第 35 図	第12号住居跡出土遺物	44	第 71 図	第38号住居跡出土遺物	76



第72図	第39号住居跡	77
第73図	第39号住居跡出土遺物	78
第74図	第40号住居跡	79
第75図	第40号住居跡出土遺物	80
第76図	第41号住居跡	81
第77図	第42・43号住居跡	82
第78図	第41号住居跡出土遺物	83
第79図	第42号住居跡出土遺物	83
第80図	第44・45号住居跡	84
第81図	第44号住居跡出土遺物	85
第82図	第46号住居跡	86
第83図	第46号住居跡出土遺物	87
第84図	第47・48号住居跡(1)	88
第85図	第47・48号住居跡(2)カマド	89
第86図	第47号住居跡出土遺物	90
第87図	第48号住居跡出土遺物	91
第88図	第49号住居跡(1)	92
第89図	第49号住居跡(2)カマド	93
第90図	第49号住居跡出土遺物	94
第91図	第50号住居跡出土遺物	95
第92図	第50号住居跡	96
第93図	第51・52号住居跡(1)	97
第94図	第51号住居跡(2)カマド	98
第95図	第51号住居跡出土遺物(1)	99
第96図	第51号住居跡出土遺物(2)	100
第97図	第52号住居跡出土遺物	101
第98図	第53号住居跡出土遺物	101
第99図	第53号住居跡	102
第100図	第54号住居跡	103
第101図	第54号住居跡出土遺物	104
第102図	第55・56号住居跡出土遺物	105
第103図	第57号住居跡(1)	106
第104図	第57号住居跡(2)掘方	107
第105図	第57号住居跡出土遺物	107
第106図	第58号住居跡	108
第107図	第59・60号住居跡(1)	109
第108図	第58号住居跡出土遺物	110

第109図	第60号住居跡(2)カマド	110
第110図	第59号住居跡出土遺物(1)	111
第111図	第59号住居跡出土遺物(2)	112
第112図	第60号住居跡出土遺物	113
第113図	第61号住居跡出土遺物	114
第114図	第61・62号住居跡	115
第115図	第62号住居跡出土遺物	116
第116図	第63・64・65号住居跡	117
第117図	第63～65号住居跡出土遺物	118
第118図	第66号住居跡出土遺物	119
第119図	第66・67・68・69号住居跡	120
第120図	第66号住居跡	122
第121図	第67号住居跡	123
第122図	第67・68号住居跡出土遺物	123
第123図	第68・69号住居跡	124
第124図	第66・67・68・69号住居跡掘方	125
第125図	第70号住居跡(1)	126
第126図	第70号住居跡(2)掘方	127
第127図	第71・72号住居跡	128
第128図	第71・72号住居跡出土遺物	129
第129図	道路状遺構	130
第130図	第1号掘立柱建物跡	131
第131図	第2号掘立柱建物跡	132
第132図	第2号掘立柱建物跡出土遺物	132
第133図	第3号掘立柱建物跡	133
第134図	第4号掘立柱建物跡	134
第135図	第5号掘立柱建物跡	135
第136図	第6号掘立柱建物跡	136
第137図	第7号掘立柱建物跡	137
第138図	第8号掘立柱建物跡	138
第139図	第7号掘立柱建物跡出土遺物	139
第140図	第9号掘立柱建物跡	139
第141図	第10号掘立柱建物跡	140
第142図	第11号掘立柱建物跡	141
第143図	第12号掘立柱建物跡	142
第144図	第13号掘立柱建物跡	143
第145図	第14号掘立柱建物跡	144

第146区	第15号掘立柱建物跡……………	145	第183区	第3号槽列跡……………	179
第147区	第15号掘立柱建物跡出土遺物……………	145	第184区	第4号槽列跡……………	179
第148区	第16号掘立柱建物跡……………	146	第185区	第5号槽列跡……………	180
第149区	第17号掘立柱建物跡……………	147	第186区	第6号槽列跡……………	180
第150区	第18号掘立柱建物跡……………	148	第187区	土壌(1)……………	182
第151区	第19号掘立柱建物跡……………	149	第188区	土壌(2)……………	184
第152区	第20号掘立柱建物跡出土遺物……………	150	第189区	土壌(3)……………	186
第153区	第20号掘立柱建物跡……………	151	第190区	土壌(4)……………	188
第154区	第21号掘立柱建物跡……………	152	第191区	第4・17・25・27・61・76・77号 土壌出土遺物……………	190
第155区	第22号掘立柱建物跡……………	153	第192区	井戸跡(1)……………	195
第156区	第21・22号掘立柱建物跡出土遺物……………	154	第193区	井戸跡(2)……………	197
第157区	第23号掘立柱建物跡……………	155	第194区	第5・10・16号井戸跡出土遺物……………	199
第158区	第24号掘立柱建物跡……………	156	第195区	道路状遺構位置図……………	203
第159区	第25号掘立柱建物跡……………	157	第196区	道路状遺構……………	204
第160区	第24～27号掘立柱建物跡出土遺物……………	158	第197区	道路状遺構……………	205
第161区	第26号掘立柱建物跡……………	159	第198区	道路状遺構付近出土遺物……………	205
第162区	第27号掘立柱建物跡……………	160	第199区	第1・2号性格不明遺構……………	207
第163区	第28号掘立柱建物跡……………	161	第200区	第3・4号性格不明遺構……………	208
第164区	第29号掘立柱建物跡……………	162	第201区	ビット(1)……………	209
第165区	第30号掘立柱建物跡……………	163	第202区	ビット(2)……………	210
第166区	第31号掘立柱建物跡……………	164	第203区	ビット(3)……………	211
第167区	第32号掘立柱建物跡……………	166	第204区	ビット(4)……………	212
第168区	第33号掘立柱建物跡……………	167	第205区	ビット(5)……………	213
第169区	第34号掘立柱建物跡……………	168	第206区	ビット(6)……………	214
第170区	第34号掘立柱建物跡出土遺物……………	168	第207区	ビット(7)……………	214
第171区	第35号掘立柱建物跡……………	169	第208区	ビット(8)……………	215
第172区	第36号掘立柱建物跡……………	170	第209区	ビット(9)……………	216
第173区	第37号掘立柱建物跡……………	171	第210区	第14地点溝跡断面図……………	220
第174区	第38号掘立柱建物跡……………	172	第211区	溝跡(1)……………	222
第175区	第39号掘立柱建物跡……………	173	第212区	溝跡1断面図……………	223
第176区	第38号掘立柱建物跡出土遺物……………	174	第213区	溝跡(2)……………	224
第177区	第40号掘立柱建物跡……………	174	第214区	溝跡2断面図……………	225
第178区	第41号掘立柱建物跡……………	175	第215区	溝跡(3)……………	226
第179区	第42号掘立柱建物跡……………	176	第216区	溝跡3断面図……………	227
第180区	第43号掘立柱建物跡……………	177	第217区	溝跡(4)……………	228
第181区	第1号槽列跡……………	178	第218区	溝跡4断面図……………	229
第182区	第2号槽列跡……………	178			

第219回	溝跡(5)	230	第256回	第5号住居跡出土遺物	271
第220回	溝跡(5)断面図	231	第257回	第7号住居跡	272
第221回	溝跡(6)	232	第258回	第7号住居跡出土遺物	273
第222回	溝跡(6)断面図	233	第259回	第8号住居跡	273
第223回	溝跡(7)	234	第260回	第8号住居跡出土遺物	274
第224回	溝跡(7)断面図	234	第261回	第9号住居跡	275
第225回	第14地点遺物出土状況	235	第262回	第9号住居跡出土遺物	275
第226回	第1号溝跡出土遺物(1) 集中区	237	第263回	第10・11・12号住居跡	276
第227回	第1号溝跡出土遺物(2) 集中区	238	第264回	第10号住居跡出土遺物	276
第228回	第1号溝跡出土遺物(3) 集中区	239	第265回	第12号住居跡出土遺物	277
第229回	第1号溝跡出土遺物(4)	240	第266回	第10号住居跡	278
第230回	第1号溝跡出土遺物(5)	241	第267回	第11号住居跡	279
第231回	第1号溝跡出土遺物(6)	242	第268回	第12号住居跡(1)	280
第232回	第1号溝跡出土遺物(7)	243	第269回	第12号住居跡(2)掘方	281
第233回	第1号溝跡出土遺物(8)	244	第270回	第13号住居跡出土遺物	282
第234回	第2・3・4号溝跡出土遺物	248	第271回	第13号住居跡	283
第235回	第5号溝跡出土遺物	249	第272回	第14号住居跡	284
第236回	第7・8号溝跡出土遺物	251	第273回	第14号住居跡出土遺物	285
第237回	第17号溝跡出土遺物(1)	252	第274回	第15号住居跡	286
第238回	第17号溝跡出土遺物(2)	253	第275回	第15号住居跡出土遺物	287
第239回	第19号溝跡出土遺物	254	第276回	第16号住居跡出土遺物	287
第240回	第22・32・34・35号溝跡出土遺物	256	第277回	第16号住居跡	288
第241回	第54号溝跡出土遺物	258	第278回	第17号住居跡	289
第242回	グリッド出土遺物	259	第279回	第17号住居跡出土遺物	290
第243回	表面採集遺物	260	第280回	第18号住居跡	291
第244回	第15地点全体図	261	第281回	第18号住居跡出土遺物	292
第245回	第1号住居跡	262	第282回	第19号住居跡	293
第246回	第1・2号住居跡	263	第283回	第19号住居跡出土遺物	294
第247回	第1号住居跡出土遺物	263	第284回	第20号住居跡出土遺物	294
第248回	第2号住居跡出土遺物	264	第285回	第20号住居跡	295
第249回	第2号住居跡	265	第286回	第21号住居跡(1)	296
第250回	第3号住居跡出土遺物	266	第287回	第22号住居跡	297
第251回	第3号住居跡	267	第288回	第23・24号住居跡	298
第252回	第4号住居跡	268	第289回	第21号住居跡(2)掘方	299
第253回	第4号住居跡出土遺物	269	第290回	第21号住居跡出土遺物	300
第254回	第5・6号住居跡(1)	270	第291回	第22・23号住居跡	301
第255回	第5・6号住居跡(2)掘方	271	第292回	第22・23・24号住居跡出土遺物	302

第293区	第25・26号住居跡	304	第329区	ビット(3)	338
第294区	第25号住居跡出土遺物	305	第330区	ビット128出土遺物	339
第295区	第27号住居跡	306	第331区	道路状遺構全体区	342
第296区	第28号住居跡	307	第332区	道路状遺構断面区	343
第297区	第28号住居跡出土遺物	307	第333区	溝跡	344
第298区	第29号住居跡(1)	308	第334区	遺跡断面区	345
第299区	第29号住居跡(2)掘方	309	第335区	第2・3・4・5・6号溝跡出土遺物	348
第300区	第29号住居跡出土遺物	309	第336区	第15号溝跡出土遺物(1)	349
第301区	第30号住居跡	310	第337区	第15号溝跡出土遺物(2)	350
第302区	第30・32号住居跡	311	第338区	第16号溝跡出土遺物(1)灰層上	352
第303区	第30号住居跡	312	第339区	第16号溝跡出土遺物(2)灰層中	353
第304区	第32号住居跡	312	第340区	第16号溝跡出土遺物(3)灰層下	354
第305区	第32号住居跡出土遺物	313	第341区	第19号溝跡出土遺物	356
第306区	第33号住居跡	314	第342区	第20号溝跡出土遺物	357
第307区	第33号住居跡出土遺物	314	第343区	第21・26・28号溝跡出土遺物	358
第308区	第34号住居跡	315	第344区	グリッド・表面採集出土遺物	361
第309区	第34号住居跡出土遺物	316	第345区	第16地点全体区	362
第310区	第1号掘立柱建物跡	317	第346区	第1号住居跡	363
第311区	第2号掘立柱建物跡	318	第347区	第2号住居跡	364
第312区	第3号掘立柱建物跡	319	第348区	第3号住居跡	365
第313区	第4号掘立柱建物跡	320	第349区	第4号住居跡	366
第314区	第5号掘立柱建物跡	321	第350区	第5・6号住居跡(1)	368
第315区	第6号掘立柱建物跡	322	第351区	第5・6号住居跡(2)	369
第316区	第7号掘立柱建物跡	323	第352区	第8号住居跡出土遺物	370
第317区	第5・9号掘立柱建物跡出土遺物	324	第353区	第7・8号住居跡	370
第318区	第8号掘立柱建物跡	324	第354区	第9号住居跡	371
第319区	第9号掘立柱建物跡(1)	325	第355区	第9号住居跡出土遺物	372
第320区	第9号掘立柱建物跡(2)	326	第356区	第10・11号住居跡	373
第321区	土壌(1)	328	第357区	第10号住居跡出土遺物	374
第322区	土壌(2)	329	第358区	第1号掘立柱建物跡	375
第323区	土壌(3)	330	第359区	第2号掘立柱建物跡	376
第324区	第1・6・11・13・17・20号 土壌出土遺物	331	第360区	第3号掘立柱建物跡	377
第325区	井戸跡(1)	333	第361区	第4号掘立柱建物跡	378
第326区	第1・3・4号井戸跡出土遺物	335	第362区	第5号掘立柱建物跡	379
第327区	ビット(1)	336	第363区	第6号掘立柱建物跡	380
第328区	ビット(2)	337	第364区	第7号掘立柱建物跡	381
			第365区	第5・8・12号掘立柱建物跡出土遺物	383

第366図	第8号掘立柱建物跡	382	第398図	ピット00	423
第367図	第9号掘立柱建物跡	383	第399図	第1・2号性格不明遺構	432
第368図	第11号掘立柱建物跡	383	第400図	第3・4号性格不明遺構	433
第369図	第10号掘立柱建物跡	384	第401図	第5・6号性格不明遺構	434
第370図	第12号掘立柱建物跡	385	第402図	第1・3・7号性格不明遺構出土遺物	435
第371図	第13号掘立柱建物跡	386	第403図	第16地点溝跡紙制図	437
第372図	第14号掘立柱建物跡	387	第404図	溝跡(1)	438
第373図	第15号掘立柱建物跡	388	第405図	溝跡(1断面図)	439
第374図	第1・2号櫓列跡	389	第406図	溝跡(2)	444
第375図	上墳(1)	393	第407図	溝跡(2断面図)	445
第376図	上墳(2)	394	第408図	溝跡(3)	448
第377図	上墳(3)	395	第409図	溝跡(3断面図)	449
第378図	上墳(4)	396	第410図	遺出土状況見取図	451
第379図	第7・11・13・17号上墳出土遺物	397	第411図	第16地点遺物出土状況(1)	452
第380図	第23・30・37・45号上墳出土遺物	398	第412図	第16地点遺物出土状況(2)	453
第381図	井戸跡(1)	402	第413図	第1・3・4号溝跡出土遺物	454
第382図	井戸跡(2)	404	第414図	第5号溝跡出土遺物(1)	456
第383図	第1・2・3号井戸跡出土遺物	406	第415図	第5号溝跡出土遺物(2)	457
第384図	第7・8・10・16号井戸跡出土遺物	408	第416図	第8・12～19号溝跡出土遺物	458
第385図	ピット(1)	410	第417図	第30・35号溝跡出土遺物	460
第386図	ピット(2)	411	第418図	第39・54号溝跡出土遺物	461
第387図	ピット(3)	412	第419図	第57・58・66・70・71・73・75・76・ 79号溝跡出土遺物	463
第388図	ピット(4)	413	第420図	第104号溝跡帯金具出土遺物	464
第389図	ピット(5)	414	第421図	第80・81・104号溝跡出土遺物	465
第390図	ピット(6)	415	第422図	第110・111号溝跡出土遺物	467
第391図	ピット(7)	416	第423図	第112・113・115～117・121・125号 溝跡出土遺物	469
第392図	ピット(8)	417	第424図	第100～121・111～112号溝跡出土遺物	470
第393図	ピット(9)	418	第425図	グリッド出土遺物(1)	472
第394図	ピット00	419	第426図	グリッド出土遺物(2)	473
第395図	ピット01	420			
第396図	ピット02	421			
第397図	ピット03	422			

# 表 目 次

第 1 表	遺跡周辺の地形図一覧表	7	第 36 表	第 49 号住居跡出土遺物観察表	94
第 2 表	第 3 号住居跡出土遺物観察表	34	第 37 表	第 50 号住居跡出土遺物観察表	95
第 3 表	第 4 号住居跡出土遺物観察表	36	第 38 表	第 51 号住居跡出土遺物観察表	100
第 4 表	第 5 号住居跡出土遺物観察表	37	第 39 表	第 52 号住居跡出土遺物観察表	101
第 5 表	第 6 号住居跡出土遺物観察表	38	第 40 表	第 53 号住居跡出土遺物観察表	101
第 6 表	第 8 号住居跡出土遺物観察表	40	第 41 表	第 54 号住居跡出土遺物観察表	104
第 7 表	第 9 号住居跡出土遺物観察表	40	第 42 表	第 55 号住居跡出土遺物観察表	104
第 8 表	第 11 号住居跡出土遺物観察表	42	第 43 表	第 56 号住居跡出土遺物観察表	104
第 9 表	第 12 号住居跡出土遺物観察表	45	第 44 表	第 57 号住居跡出土遺物観察表	108
第 10 表	第 13 号住居跡出土遺物観察表	47	第 45 表	第 58 号住居跡出土遺物観察表	110
第 11 表	第 14 号住居跡出土遺物観察表	47	第 46 表	第 59 号住居跡出土遺物観察表	111
第 12 表	第 15 号住居跡出土遺物観察表	51	第 47 表	第 60 号住居跡出土遺物観察表	114
第 13 表	第 16 号住居跡出土遺物観察表	52	第 48 表	第 61 号住居跡出土遺物観察表	114
第 14 表	第 17 号住居跡出土遺物観察表	54	第 49 表	第 62 号住居跡出土遺物観察表	116
第 15 表	第 21 号住居跡出土遺物観察表	59	第 50 表	第 63～65 号住居跡出土遺物観察表	119
第 16 表	第 22 号住居跡出土遺物観察表	59	第 51 表	第 66 号住居跡出土遺物観察表	119
第 17 表	第 23 号住居跡出土遺物観察表	60	第 52 表	第 67 号住居跡出土遺物観察表	123
第 18 表	第 24 号住居跡出土遺物観察表	64	第 53 表	第 68 号住居跡出土遺物観察表	123
第 19 表	第 27 号住居跡出土遺物観察表	64	第 54 表	第 70 号住居跡出土遺物観察表	127
第 20 表	第 28 号住居跡出土遺物観察表	67	第 55 表	第 71・72 号住居跡出土遺物観察表	129
第 21 表	第 29 号住居跡出土遺物観察表	67	第 56 表	第 2 号孤立柱建物跡出土遺物観察表	133
第 22 表	第 30 号住居跡出土遺物観察表	70	第 57 表	第 7 号孤立柱建物跡出土遺物観察表	139
第 23 表	第 31 号住居跡出土遺物観察表	70	第 58 表	第 15 号孤立柱建物跡出土遺物観察表	145
第 24 表	第 32・33 号住居跡出土遺物観察表	72	第 59 表	第 20 号孤立柱建物跡出土遺物観察表	150
第 25 表	第 34 号住居跡出土遺物観察表	72	第 60 表	第 21・22 号孤立柱建物跡出土遺物 観察表	154
第 26 表	第 36 号住居跡出土遺物観察表	74	第 61 表	第 24・25 号孤立柱建物跡出土遺物 観察表	158
第 27 表	第 38 号住居跡出土遺物観察表	76	第 62 表	第 26・27 号孤立柱建物跡出土遺物 観察表	158
第 28 表	第 39 号住居跡出土遺物観察表	78	第 63 表	第 34 号孤立柱建物跡出土遺物観察表	169
第 29 表	第 40 号住居跡出土遺物観察表	80	第 64 表	第 38 号孤立柱建物跡出土遺物観察表	174
第 30 表	第 41 号住居跡出土遺物観察表	83	第 65 表	第 4 号土壇出土遺物観察表	189
第 31 表	第 42 号住居跡出土遺物観察表	83	第 66 表	第 17 号土壇出土遺物観察表	189
第 32 表	第 44 号住居跡出土遺物観察表	85	第 67 表	第 25 号土壇出土遺物観察表	189
第 33 表	第 46 号住居跡出土遺物観察表	87			
第 34 表	第 47 号住居跡出土遺物観察表	91			
第 35 表	第 48 号住居跡出土遺物観察表	91			

第 68 表	第27号土壇出土遺物観察表	190	第105表	第15号住居跡出土遺物観察表	287
第 69 表	第61号土壇出土遺物観察表	190	第106表	第16号住居跡出土遺物観察表	287
第 70 表	第76号土壇出土遺物観察表	190	第107表	第17号住居跡出土遺物観察表	290
第 71 表	第77号土壇出土遺物観察表	190	第108表	第18号住居跡出土遺物観察表	292
第 72 表	14地点土壇一覽表	191	第109表	第19号住居跡出土遺物観察表	294
第 73 表	第 5 号井戸跡出土遺物観察表	199	第110表	第20号住居跡出土遺物観察表	299
第 74 表	第10号井戸跡出土遺物観察表	199	第111表	第21号住居跡出土遺物観察表	300
第 75 表	第16号井戸跡出土遺物観察表	199	第112表	第22号住居跡出土遺物観察表	303
第 76 表	14地点井戸一覽表	201	第113表	第23号住居跡出土遺物観察表	303
第 77 表	14地点ビット一覽表	217	第114表	第24号住居跡出土遺物観察表	303
第 78 表	第 1 号溝跡出土遺物観察表	244	第115表	第25号住居跡出土遺物観察表	305
第 79 表	第 1 号溝跡出土遺物観察表	246	第116表	第28号住居跡出土遺物観察表	309
第 80 表	第 2 号溝跡出土遺物観察表	248	第117表	第29号住居跡出土遺物観察表	310
第 81 表	第 3 号溝跡出土遺物観察表	249	第118表	第30号住居跡出土遺物観察表	310
第 82 表	第 4 号溝跡出土遺物観察表	249	第119表	第32号住居跡出土遺物観察表	313
第 83 表	第 5 号溝跡出土遺物観察表	250	第120表	第33号住居跡出土遺物観察表	315
第 84 表	第 7 号溝跡出土遺物観察表	250	第121表	第34号住居跡出土遺物観察表	316
第 85 表	第 8 号溝跡出土遺物観察表	250	第122表	第 5 号掘立柱建物跡出土遺物観察表	323
第 86 表	第17号溝跡出土遺物観察表	253	第123表	第 9 号掘立柱建物跡出土遺物観察表	323
第 87 表	第19号溝跡出土遺物観察表	255	第124表	第 1 号土壇出土遺物観察表	331
第 88 表	第22号溝跡出土遺物観察表	257	第125表	第 6 号土壇出土遺物観察表	331
第 89 表	第32号溝跡出土遺物観察表	257	第126表	第11号土壇出土遺物観察表	331
第 90 表	第34号溝跡出土遺物観察表	257	第127表	第13号土壇出土遺物観察表	331
第 91 表	第54号溝跡出土遺物観察表	258	第128表	第17号土壇出土遺物観察表	331
第 92 表	グリッド出土遺物観察表	260	第129表	第20号土壇出土遺物観察表	331
第 93 表	第 1 号住居跡出土遺物観察表	263	第130表	15地点土壇一覽表	332
第 94 表	第 2 号住居跡出土遺物観察表	264	第131表	第 1 号井戸跡出土遺物観察表	334
第 95 表	第 3 号住居跡出土遺物観察表	266	第132表	第 4 号井戸跡出土遺物観察表	335
第 96 表	第 4 号住居跡出土遺物観察表	269	第133表	15地点井戸一覽表	335
第 97 表	第 5 号住居跡出土遺物観察表	271	第134表	ビット28出土遺物観察表	339
第 98 表	第 7 号住居跡出土遺物観察表	273	第135表	15地点ビット一覽表	339
第 99 表	第 8 号住居跡出土遺物観察表	274	第136表	第 2 号溝跡出土遺物観察表	348
第100表	第 9 号住居跡出土遺物観察表	275	第137表	第 3 号溝跡出土遺物観察表	348
第101表	第10号住居跡出土遺物観察表	277	第138表	第 4 号溝跡出土遺物観察表	348
第102表	第12号住居跡出土遺物観察表	281	第139表	第 5 号溝跡出土遺物観察表	348
第103表	第13号住居跡出土遺物観察表	282	第140表	第 6 号溝跡出土遺物観察表	348
第104表	第14号住居跡出土遺物観察表	285	第141表	第15号溝跡1区出土遺物観察表	351

第142表	第15号溝跡 2区出土遺物観察表 ……	351	第178表	第12号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第143表	第15号溝跡 3区出土遺物観察表 ……	351	第179表	第13号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第144表	第15号溝跡 5区出土遺物観察表 ……	351	第180表	第14号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第145表	第15号溝跡その他出土遺物観察表 ……	351	第181表	第15号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第146表	第16号溝跡出土遺物観察表 ……	355	第182表	第16号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第147表	第19号溝跡出土遺物観察表 ……	356	第183表	第17号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第148表	第20号溝跡出土遺物観察表 ……	357	第184表	第18号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第149表	第21号溝跡出土遺物観察表 ……	359	第185表	第30号溝跡出土遺物観察表 ……	459
第150表	第26号溝跡出土遺物観察表 ……	359	第186表	第35号溝跡出土遺物観察表 ……	460
第151表	第28号溝跡出土遺物観察表 ……	359	第187表	第39号溝跡出土遺物観察表 ……	462
第152表	グリッド・表探出土遺物観察表 ……	360	第188表	第57号溝跡出土遺物観察表 ……	462
第153表	第9号住居跡出土遺物観察表 ……	372	第189表	第66号溝跡出土遺物観察表 ……	462
第154表	第10号住居跡出土遺物観察表 ……	374	第190表	第70号溝跡出土遺物観察表 ……	462
第155表	第5・8・12号掘立柱建物跡出土遺物 観察表 ……	382	第191表	第71号溝跡出土遺物観察表 ……	462
第156表	第7号土壇出土遺物観察表 ……	397	第192表	第73号溝跡出土遺物観察表 ……	466
第157表	第13号土壇出土遺物観察表 ……	397	第193表	第75号溝跡出土遺物観察表 ……	466
第158表	第17号土壇出土遺物観察表 ……	397	第194表	第79号溝跡出土遺物観察表 ……	466
第159表	第19号土壇出土遺物観察表 ……	397	第195表	第80号溝跡出土遺物観察表 ……	466
第160表	第23号土壇出土遺物観察表 ……	398	第196表	第81号溝跡出土遺物観察表 ……	466
第161表	第30号土壇出土遺物観察表 ……	398	第197表	第104号溝跡出土遺物観察表 ……	466
第162表	第37号土壇出土遺物観察表 ……	398	第198表	第110号溝跡出土遺物観察表 ……	468
第163表	第45号土壇出土遺物観察表 ……	398	第199表	第111号溝跡出土遺物観察表 ……	468
第164表	16地点土壇一覧表 ……	399	第200表	第112号溝跡出土遺物観察表 ……	468
第165表	第1号井戸跡出土遺物観察表 ……	407	第201表	第113号溝跡出土遺物観察表 ……	468
第166表	第2号井戸跡出土遺物観察表 ……	407	第202表	第115号溝跡出土遺物観察表 ……	468
第167表	第3号井戸跡出土遺物観察表 ……	407	第203表	第116号溝跡出土遺物観察表 ……	468
第168表	第8号井戸跡出土遺物観察表 ……	408	第204表	第117号溝跡出土遺物観察表 ……	470
第169表	第10号井戸跡出土遺物観察表 ……	408	第205表	第121号溝跡出土遺物観察表 ……	470
第170表	16地点井戸一覧表 ……	409	第206表	第125号溝跡出土遺物観察表 ……	470
第171表	ピット一覧表 ……	424	第207表	第100～121号溝跡出土遺物観察表 ……	471
第172表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表 ……	436	第208表	第111～112号溝跡出土遺物観察表 ……	471
第173表	第7号性格不明遺構出土遺物観察表 ……	436	第209表	グリッド出土遺物1観察表 ……	472
第174表	第1号溝跡出土遺物観察表 ……	455	第210表	グリッド出土遺物2観察表 ……	472
第175表	第3号溝跡出土遺物観察表 ……	455	第211表	新旧対照表 住居跡 ……	474
第176表	第4号溝跡出土遺物観察表 ……	455	第212表	新旧対照表 掘立柱建物跡 ……	474
第177表	第5号溝跡出土遺物観察表 ……	457	第213表	新旧対照表 土壇 ……	475
			第214表	新旧対照表 井戸跡 ……	475



第215表	新旧対照表	柵列跡	475
第216表	新旧対照表	性格不明遺構	475
第217表	新旧対照表	住居跡	476
第218表	新旧対照表	掘立柱建物跡	476
第219表	新旧対照表	井戸跡	476
第220表	新旧対照表	土壌	476

第221表	新旧対照表	住居跡	477
第222表	新旧対照表	柵列跡	477
第223表	新旧対照表	性格不明遺構	477
第224表	新旧対照表	掘立柱建物跡	477
第225表	新旧対照表	土壌	477
第226表	新旧対照表	井戸跡	477

## 写真図版目次

図版1上	北島遺跡周辺全景航空写真	中	第16号住居跡ピット2 遺物出土状況
下	北島遺跡周辺全景航空写真	下	第17号住居跡
図版2	北島遺跡周辺 (昭和22年撮影・米軍写真)	図版12上	第17号住居跡遺物出土状況
図版3上	14地点全景	中	第17号住居跡遺物出土状況
下	14地点現況	下	第17号住居跡カマド
図版4上	14地点東部全景(東)より	図版13上	第19号住居跡左から右へ
下	14地点現況(東より)	中	第21・22・24・25・26号住居跡
図版5上	第22・23号住居跡下層縄文出土状態	下	第21号住居跡カマド
中	弥生土器集中地点(112-101G)	図版14上	第22・23号住居跡
下	弥生土器集中地点(112-101G)	中	第21(左)・24(奥)・25号住居跡全景
図版6上	弥生土器集中区	下	第24号住居跡カマド
中	弥生土器集中地点遺物出土状況 (112-101G)	図版15上	第27号住居跡
下	第49・51・22・20・21・23号土壌(弥生)	中	第29号住居跡カマド遺物出土状況
図版7上	第51号土壌断面(弥生)	下	第29号住居跡遺物出土状況
中	第13号土壌(弥生)	図版16上	第29号住居跡遺物出土状況
下	第13号土壌遺物出土状況(弥生)	中	左より第33・30・31・32・住居跡
図版8上	第3号住居跡全景	下	第31号住居跡カマド
中	第4・5号住居跡遺物出土状況	図版17上	第33号住居跡カマド
下	第5号住居跡遺物出土状況	中	第36号住居跡
図版9上	第8号住居跡遺物出土状況	下	第38号住居跡
中	第8号住居跡遺物出土状況	図版18上	第39号住居跡カマド
下	第11号住居跡	中	第40号住居跡
図版10上	第12号住居跡遺物出土状況	下	第41号住居跡
中	第15号住居跡	図版19上	第41号住居跡カマド
下	第15号住居跡カマド遺物出土状況	中	第42(奥)・43号住居跡全景
図版11上	第16号住居跡	下	第42号住居跡北カマド
		図版20上	第42号住居跡東カマド
		中	第44・45(奥)号住居跡全景

	下	第44号住居跡カマド	図版33上	第1号掘建柱建物跡
図版21上	上	第45号住居跡カマド	中	第2号掘建柱建物跡
	中	第46号住居跡	下	第4号掘建柱建物跡
	下	第46号住居跡カマド	図版34上	第6号掘建柱建物跡
図版22上	上	第46号住居跡紡錘車出土状況	中	第7号掘建柱建物跡
	中	第47(左)・48号住居跡全景	下	第8号掘建柱建物跡
	下	第47号住居跡カマド	図版35上	第10号掘建柱建物跡
図版23上	上	第47号住居跡カマド1遺物出土状況	中	第13号掘建柱建物跡
	中	第47号住居跡カマド2	下	第14号掘建柱建物跡
	下	第48号住居跡カマド遺物出土状況	図版36上	第15号掘建柱建物跡
図版24上	上	第48号住居跡カマド	中	第16号掘建柱建物跡
	中	第49号住居跡	下	第18号掘建柱建物跡
	下	第49・50(奥)号住居跡全景	図版37上	第19号掘建柱建物跡
図版25上	上	第49号住居跡カマド1	中	第20号掘建柱建物跡
	中	第51(右)・52号住居跡	下	第20号掘建柱建物跡P11
	下	第53号住居跡	図版38上	第20号掘建柱建物跡P6柱材
図版26上	上	第54号住居跡	中	第20号掘建柱建物跡P5
	中	第55(奥)・56号住居跡	下	第21(外側)・22号掘建柱建物跡
	下	第57号住居跡	図版39上	第24(左側)・25号掘建柱建物跡
図版27上	上	第57号住居跡東カマド	中	第26号掘建柱建物跡
	中	第58号住居跡	下	第28号掘建柱建物跡
	下	第59号住居跡	図版40上	第29号掘建柱建物跡
図版28上	上	第59号住居跡カマド1	中	第30号掘建柱建物跡
	中	第59号住居跡カマド2	下	第31号掘建柱建物跡
	下	第61号住居跡	図版41上	第32(奥)・33号掘建柱建物跡
図版29上	上	第62号住居跡	中	第36号掘建柱建物跡
	中	第63(中央)・64・65号住居跡	下	第38号掘建柱建物跡
	下	左より第67・68・69号住居跡	図版42上	第40号掘建柱建物跡
図版30上	上	第67号住居跡遺物出土状況	中	第41号掘建柱建物跡
	中	第67・68・69号住居跡掘り方	下	第43号掘建柱建物跡
	下	第70号下層住居跡	図版43上	第52号土壌遺物出土状況
図版31上	上	第70号住居跡カマド	中	114-96-b内ビット
	中	第70号下層住居跡カマド	下	第18号土壌完掘
	下	第70号住居跡掘り方	図版44上	第2号井戸跡
図版32上	上	第71・72(奥)号住居跡	中	第5号井戸跡
	中	調査区東北部現況	下	第5号井戸跡
	下	現況第14地点から見た16地点	図版45上	第14号井戸跡

	中	第10号井戸跡完掘	図版58	グリッド出土土器
	下	北西部遺構群	図版59	グリッド出土土器
図版46上		第1号溝(上層)	図版60	グリッド出土土器
	中	北西端部(南より)	図版61	グリッド出土土器
	下	第1号溝	図版62	グリッド出土土器
図版47上		第1号溝完掘	図版63	グリッド出土石器
	中	第1号溝北部遺物出土状況	図版64	グリッド出土石器
	下	第1号溝北部遺物出土状況	図版65	第4号住居跡出土遺物
図版48上		第1号溝北部遺物出土状況		第5号住居跡出土遺物
	中	第1号溝遺物出土状況(八稜鏡)	図版66	第5号住居跡出土遺物
	下	第1号溝遺物出土状況(八稜鏡)		第8号住居跡出土遺物
図版49上		第2号溝	図版67	第8号住居跡出土遺物
	中	第2号溝		第11号住居跡出土遺物
	下	第2号溝北壁断面		第12号住居跡出土遺物
図版50上		第3号溝遺物出土状況	図版68	第12号住居跡出土遺物
	中	第3号溝緑釉陶器出土状況		第13号住居跡出土遺物
	下	第7号溝(110-96G)馬歯出土状況		第15号住居跡出土遺物
図版51上		第7号溝(110-96G)馬歯出土状況	図版69	第15号住居跡出土遺物
	中	第17号溝遺物出土状況		第16号住居跡出土遺物
	下	第17号溝遺物出土状況		第17号住居跡出土遺物
図版52上		第4号井戸跡	図版70	第17号住居跡出土遺物
	中	第19・53号溝		第21号住居跡出土遺物
	下	第32号溝北端部		第24号住居跡出土遺物
図版53上		第35号溝	図版71	第24号住居跡出土遺物
	中	第39・40号溝		第27号住居跡出土遺物
	下	第54号溝遺物出土状況	図版72	第28号住居跡出土遺物
図版54上		第54号溝遺物出土状況		第29号住居跡出土遺物
	中	調査区東半部全景	図版73	第31号住居跡出土遺物
	下	調査区東半部全景		第33号住居跡出土遺物
図版55上		道路状遺構(北より)		第34号住居跡出土遺物
	中	道路状遺構馬歯		第36号住居跡出土遺物
	下	道路状遺構(西より)		第38号住居跡出土遺物
図版56上		道路状遺構馬歯		第39号住居跡出土遺物
	中	道路状遺構(南より)	図版74	第39号住居跡出土遺物
	下	道路状遺構七層断面		第40号住居跡出土遺物
図版57上		第1号再葬墓出土土器		第41号住居跡出土遺物
	下	グリッド出土土器		第42号住居跡出土遺物

図版75	第42号住居跡出土遺物	図版87	第1号溝跡出土遺物
	第44号住居跡出土遺物	図版88	第1号溝跡出土遺物
	第46号住居跡出土遺物	図版89	第1号溝跡出土遺物
	第47号住居跡出土遺物	図版90	第1号溝跡出土遺物
図版76	第47号住居跡出土遺物	図版91	第1号溝跡出土遺物
	第48号住居跡出土遺物	図版92	第1号溝跡出土遺物
	第49号住居跡出土遺物		第2号溝跡出土遺物
図版77	第49号住居跡出土遺物		第3号溝跡出土遺物
	第50号住居跡出土遺物		第4号溝跡出土遺物
	第51号住居跡出土遺物		第5号溝跡出土遺物
図版78	第51号住居跡出土遺物	図版93	第5号溝跡出土遺物
	第52号住居跡出土遺物		第7号溝跡出土遺物
	第53号住居跡出土遺物	図版94	第7号溝跡出土遺物
	第54号住居跡出土遺物		第17号溝跡出土遺物
図版79	第54号住居跡出土遺物	図版95	第17号溝跡出土遺物
	第55号住居跡出土遺物	図版96	第17号溝跡出土遺物
	第58号住居跡出土遺物	図版97	第19号溝跡出土遺物
	第59号住居跡出土遺物	図版98	第22号溝跡出土遺物
図版80	第59号住居跡出土遺物		第32号溝跡出土遺物
	第61号住居跡出土遺物		第34号溝跡出土遺物
	第62号住居跡出土遺物		第19号溝跡出土遺物
図版81	第63～65号住居跡出土遺物	図版99	第19号溝跡出土遺物
図版82	第63～65号住居跡出土遺物		第2号性格不明遺構出土遺物
	第66号住居跡出土遺物		第1号溝跡出土遺物
	第67号住居跡出土遺物	図版100	第1号溝跡出土遺物
	第70号住居跡出土遺物		第5号井戸跡出土遺物
	第61号土壇出土遺物		第46号住居跡出土遺物
	第5号井戸跡出土遺物		第59号住居跡出土遺物
図版83	第47号住居跡出土遺物	図版101上	第14地点紡錘車
	第20号掘立柱建物跡出土遺物	下	第15・16地点紡錘車
	第21・22号掘立柱建物跡出土遺物	図版102上	第14地点土錘
	第24号掘立柱建物跡出土遺物	下	第15・16地点土錘
	第1号溝跡出土遺物	図版103上	第14～16地点貝穴或泥岩
図版84	第16号井戸跡出土遺物	下	第14～16地点砥石
	第1号溝跡出土遺物	図版104上	第14地点鉄製品
図版85	第1号溝跡出土遺物	下	第14・15地点鉄製品
図版86	第1号溝跡出土遺物	図版105上	第15地点全景(南より)

	下 第15地点現況 (南より)	中 第30号住居跡掘り方
図版106上	第3号溝 (西より)	下 第33号住居跡
	下 第15地点現況	図版119上
図版107上	第1 (左)・2・3 (手前) 号住居跡	第1号掘建柱建物跡
	中 第2号住居跡カマド	中 第2号掘建柱建物跡
	下 第3号住居跡	下 左より第3・4・5号掘建柱建物跡
図版108上	第3号住居跡カマド	図版120上
	中 第4・5 (奥)・6 (左) 号住居跡	第4号掘建柱建物跡
	下 第7号住居跡出土状況	中 第5号掘建柱建物跡
図版109上	第8号住居跡	下 第6号掘建柱建物跡
	中 第8号住居跡カマド	図版121上
	下 第9号住居跡	第7号掘建柱建物跡
図版110上	第10 (内側)・11号住居跡	中 第8号掘建柱建物跡
	中 第10・11・12号住居跡	下 第9号掘建柱建物跡と道路状遺構 (東より)
	下 第10号住居跡カマド	図版122上
図版111上	第13号住居跡	第9号掘建柱建物跡 (東より)
	中 第13号住居跡カマド	中 第9号掘建柱建物跡と道路状遺構 (西より)
	下 第14号住居跡	下 第9号掘建柱建物跡と道路状遺構 (西より)
図版112上	第14号住居跡カマド	図版123上
	中 第15・16 (内側) 号住居跡	第3号溝 (東より)
	下 第15号住居跡カマド	中 第3号溝土層断面
図版113上	第17号住居跡遺物出土状況	下 第3号溝埋跡か
	中 第17号住居跡カマド	図版124上
	下 第18号住居跡	第15号溝5区灰層
図版114上	第18号住居跡カマド	中 第16号溝灰層
	中 第19号住居跡	下 第16号溝
	下 第19号住居跡カマド	図版125上
図版115上	第20号住居跡検出状況	第16号溝5区遺物出土状況
	中 第18 (奥)・19・20 (中央)・21号住居跡	中 第16号溝灰軸出土状況
	下 第20号住居跡カマド	下 第16号溝1区馬歯出土状況
図版116上	第22 (奥)・23号住居跡	図版126上
	中 左より第25・26・27号住居跡	第19号溝3区遺物出土状況
	下 第28号住居跡	中 第19号溝3区遺物出土状況
図版117上	第28号住居跡カマド	下 調査区全景 (南東より)
	中 第29号住居跡	図版127上
	下 第30号住居跡	道路状遺構検出状況 (南より)
図版118上	第30号住居跡カマド	中 第16号溝道路状遺構 (南より)
		下 道路状遺構検出状況 (西より)
		図版128上
		道路状遺構北辺 (東より)
		中 道路状遺構曲部部分 (北東より)
		下 道路状遺構路床断面
		図版129上
		道路状遺構付近遺物出土状況
		中 道路状遺構路床溝土層断面

	下 馬骨出土状況 (東辺)	図版141	第16号溝跡出土遺物
図版130上	第1号土壌	図版142	第21号溝跡出土遺物
	中 第4号土壌遺物出土状況		第9号溝跡出土遺物
	下 第11号土壌		第19号溝跡出土遺物
図版131上	第13号土壌		第16号溝跡出土遺物
	中 第17号土壌遺物出土状況	図版143	第21号溝跡出土遺物
	下 第2号井戸跡		グリッド7出土遺物
図版132上	ビット114		ビット124出土遺物
	中 ビット124		グリッド
	下 ビット127		表面採集
図版133	第2号住居跡出土遺物	図版144	第15号住居跡出土遺物
	第3号住居跡出土遺物		第25号住居跡出土遺物
	第5号住居跡出土遺物		第21号溝跡出土遺物
	第10号住居跡出土遺物		第15号溝跡出土遺物
	第12号住居跡出土遺物	図版145上	調査区全景 (東より)
図版134	第12号住居跡出土遺物		下 調査区現況 (東より)
	第13号住居跡出土遺物	図版146上	調査区全景 (南北より)
	第14号住居跡出土遺物		下 調査区現況 (西より)
	第15号住居跡出土遺物	図版147上	調査区東部 (右にS D35)
図版135	第16号住居跡出土遺物		下 調査区土層断面
	第17号住居跡出土遺物	図版148上	第1号住居跡 (掘り方)
	第18号住居跡出土遺物		中 第2号住居跡 (掘り方)
図版136	第20号住居跡出土遺物		下 第3号住居跡 (掘り方)
	第21号住居跡出土遺物	図版149上	第4号住居跡 (掘り方)
	第22号住居跡出土遺物		中 第5 (右側)・6号住居跡
図版137	第24号住居跡出土遺物		下 第9号住居跡・第32号土壌遺物出土状況
	第28号住居跡出土遺物	図版150上	第9号住居跡遺物出土状況
	第29号住居跡出土遺物		中 第10・11 (左)号住居跡
	第33号住居跡出土遺物		下 第10 (右)・11号住居跡カマドA・B遺物 出土状況
図版138	第5号掘立柱建物跡出土遺物	図版151上	第1・2 (手前)号掘立柱建物跡
	第9号掘立柱建物跡出土遺物		中 第3号掘立柱建物跡
	第17号土壌出土遺物		下 第5号掘立柱建物跡
	第1号井戸跡出土遺物	図版152上	第6号掘立柱建物跡
図版139	第15号溝跡出土遺物		中 第7号掘立柱建物跡
図版140	第15号溝跡出土遺物		下 第8号掘立柱建物跡
	第16号溝跡出土遺物	図版153上	第9号掘立柱建物跡

	中 第10号掘建柱建物跡		第2号井戸跡出土遺物
	下 第11号掘建柱建物跡		第8号井戸跡出土遺物
図版154上	第12号掘建柱建物跡		第3号性格不明遺構出土遺物
	中 第13号掘建柱建物跡	図版166	第10号井戸跡出土遺物
	下 第14号掘建柱建物跡		第1号性格不明遺構出土遺物
図版155上	第32号土壇遺物出土状況		第1号溝跡出土遺物
	中 第2号井戸跡中層遺物出土状況		第3号溝跡出土遺物
	下 第3号井戸跡遺物出土状況		第4号溝跡出土遺物
図版156上	第5号井戸跡	図版167	第4号溝跡出土遺物
	中 第8号井戸跡		第5号溝跡出土遺物
	下 第10号井戸跡	図版168	第5号溝跡出土遺物
図版157上	第11号井戸跡		第12号溝跡出土遺物
	中 第12号井戸跡		第13号溝跡出土遺物
	下 第20号井戸跡	図版169	第14号溝跡出土遺物
図版158上	第4(左)・5号溝		第17号溝跡出土遺物
	中 第5号溝(98-104G)遺物出土状況		第30号溝跡出土遺物
	下 第7(右)・9(左)・30号溝	図版170	第39号溝跡出土遺物
図版159上	第30・111号溝		第66号溝跡出土遺物
	中 第35号溝	図版171	第66号溝跡出土遺物
	下 第35号溝上層断面		第70号溝跡出土遺物
図版160上	第39号溝		第71号溝跡出土遺物
	中 第58(手前左)・59(手前右)・60号溝		第73号溝跡出土遺物
	下 第100号溝		第80号溝跡出土遺物
図版161上	第30(右)・100号溝		第104号溝跡出土遺物
	中 第104号溝	図版172	第104号溝跡出土遺物
	下 第104号溝遺物出土状況		第110号溝跡出土遺物
図版162上	第104号溝		第111号溝跡出土遺物
	中 第104号溝馬骨出土状況	図版173	第113号溝跡出土遺物
	下 第104号溝遺物出土状況		第121号溝跡出土遺物
図版163上	第109(右)・110号溝		第111～112号溝跡出土遺物
	中 第30・110号溝	図版174	第111～112号溝跡出土遺物
	下 第111号溝	図版175	表面採集・グリッド
図版164上	第111・112(手前)号溝合流部	図版176	第104号溝跡出土帯金具
	中 第111・112号遺物出土状況		北島遺跡周辺(昭和22年撮影・米軍写真)
	下 第115・124・125号溝	図版177	北島遺跡遠景(北より)
図版165	第9号住居跡出土遺物		北島遺跡遠景(北東より)
	第1号井戸跡出土遺物		北島遺跡から北東方向を望む

# I 調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。水環境の保全・再生に関しても河川流域を一つの圏域とした総合的な水環境の整備を進めている。

県内には利根川・荒川の2大水系に含まれる152の一級河川があり、下流には広大な低地部が存在している。急激な都市化に伴う雨水の流出量の増大、河川流域の保水、遊水機能の低下などにより、中小河川のはん濫や市街地のたん水被害が頻発している。不慮の水害から人命及び財産を守るために治水対策を進める必要があり、熊谷市上之調節池もこうした治水事業の一環として計画されたものである。県教育局生涯学習部文化財保護課ではこのような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

北島遺跡についてはすでにスポーツ文化公園事業に伴う発掘調査が、埋蔵文化財調査事業団によってな

れており、周囲の状況についてある程度の見通しが得られている。

上之調節池についても調整を重ねたが、事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。文化財保護課では止むを得ず発掘調査する部分について、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成6年度・7年度・8年度の3年にまたがって行われた。文化財保護法にもとづき、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘調査届が提出された。それに対する指示通知は以下の通りである。

平成6年11月28日付け 教文第2—122号

平成7年4月18日付け 教文第2—13号

平成8年4月16日付け 教文第2—9号

(文化財保護課)



## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 調査の方法

北島遺跡の発掘調査は1994(平成6)年9月1日から1996(平成8)年7月31日まで行われた。

今回の北島遺跡の発掘調査は、上之瀬跡池建設に伴うものである。

しかし、北島遺跡そのものについてはこれ以前に、スポーツ文化公園建設に伴った3度の発掘調査が実施されており、当事業団が発掘調査と整理作業を実施した。

そこで混乱を避けるため、便宜上これまで3回の調査を第1次～第3次調査、今回を第4次調査と呼称することとした。

第1次～第3次調査は、スポーツ文化公園に関わる諸施設予定地の調査であり、調査地点は複数に及んでいた。

そのため第1次調査開始時点で、発掘調査に着手した順に、第1地点・第2地点・第3地点……と調査地点名を付すという方針が決定された。第3次調査までに調査されたのは、第1地点～第13地点である。

今回の調査は、以前の調査と調査原因が異なるが、遺跡名が同じで位置的にも隣接しているため、地点名もこれまでのものに続けて付すこととした。

またグリッドの設定方法やグリッド番号についても、過去3回調査で使用されたものから継続させ、座標値もこれに合わせた。

即ち調査グリッドは、第1次調査において調査地点全域を網羅する9×9mの方眼を設定し、これに西北端から、東西方向・南北方向ともにアラビア数字を振り当てたものである。

国上方眼座標による第IX座標系に従って基準点を設定したもので、座標値X=18,640、Y=-38,920を基点とする。

表記に際しては、第1次調査時点でグリッドの北西コーナーで交点となる数値をグリッド名とし、X軸(東西)方向を先行させ、Y軸(南北)を後続させた。そして、今回の第4次調査でもこれを踏襲した。

グリッド名の表記で、若干統一を欠く例も存在したが、今回の整理事業では当初の表記法に倣うこととした。

これまでにおける北島遺跡の発掘調査の期間と、調査地点は以下のとおりである。

第1次：1985(昭和60)年11月1日

～1987(昭和62)年6月30日まで

第1地点～第8地点

第2次：1988(昭和63)年9月1日

～1989(平成元)年3月31日まで

第9地点～第11地点

第3次：1989(平成元)年10月1日

～1990(平成2)年3月31日まで

第12地点～第13地点

第4次：1994(平成6)年9月1日

～1996(平成8)年7月31日まで

第14地点～第16地点 (今回)

### (2) 発掘調査

平成6年度 調査期間：平成6年9月1日～平成7年  
3月31日まで

調査面積：10,000㎡

平成6年9月1日 埼玉県教育局文化財保護課・埼玉県熊谷土木事務所・埼玉県北部公園建設事務所および財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の四者にて、調査の行程・方法などについて打ち合わせ。この際に、第14地点から調査に入る旨決定される。

9月 調査事務所設置、器材・重機搬入と平行して、各調査地点にトレンチを設定し、第一次調査のための準備を行った。

10月 重機によるトレンチ掘りを行い、第1次調査を開始した。排水作業のための動力工事を実施。

第1次調査と平行して、第14地点から本調査のための、重機による表土除去作業を開始。

11月 第一次調査を終了し、第14地点は本調査のみとなる。

平成7年3月 第14地点の空中写真撮影・測量を実施した。第14地点の調査と平行して、第15地点の表土除去作業のための準備開始。

平成7年度 調査期間：平成7年4月1日～平成8年3月31日まで

調査面積：18,830㎡

平成7年4月 第15地点において、重機による表土除去作業を開始。以後、遺構の調査を開始した。

7月 第14地点の空中写真撮影・測量を実施した。

8月 第16地点において、重機による表土除去作業を開始。第16地点の遺構の調査を開始した。

10月 第15地点の空中写真撮影・測量を実施した。

平成8年1月 自然科学分析のためのサンプリングを実施した。

2月 調査事務所周辺の調査の準備に合わせ、事務所の撤去・移設を行なう。旧事務所周辺の表土除去作業を実施。次いで、遺構の調査に入る。

第14・16地点の空中写真撮影・測量を行う。

平成8年度 調査期間：平成8年4月1日～平成8年7月31日まで

調査面積：3,000㎡

平成8年4月 調査事務所設置、器材・重機搬入。第14地点（旧調査事務所周辺）の表土除去作業を開始し。その後、遺構の調査にはいる。

7月 第14地点の空中写真撮影・測量を行う。

旧調査事務所周辺の調査を終了。危険個所の埋め戻

し、各器材の撤収および調査事務の撤去を行い、すべての調査を終了した。

### (3) 整理事業

平成8～9年度にかけて実施された。

平成8年度

平成8年4月 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団本部にて整理作業を開始した。

本年度は、遺物の水洗い・註記をすべて終了し、遺物の接合復元を8割まで終了した。接合・復元の終わった遺物については、調査地点順に実測を開始した。

凶面類については、原因の修正を終了し、第二原因作に入った。そして第二原因化の終わったものから、順次トレースを開始した。

調査中に撮影した写真の整理も行い、終了した。

平成9年度

4～10月 遺物復元を終了の後、遺物実測を終了した。次いで、写真撮影を行う遺物の選定して、色塗りを行った。

遺構凶面は、前年度に引き続きトレースを行い、これと平行して遺物凶面のトレースを行い終了した。

事実記載関係の原稿執筆を開始した。

11月～平成10年1月 遺構・遺物の版組と割付を行い、遺物の写真撮影を実施した。そして、これらと平行して原稿執筆を行った。印刷業者を決定。

入稿後校正作業を行い、3月に報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

#### (1) 発掘調査 平成6年(1994)度

理事 長 荒井 桂  
副理事 長 富田 真也  
専務理事 杉原 嗣雄  
常務理事 兼 加藤 敏明  
管理 部  
理事 兼 小川 良祐  
調査 部 兼 長  
管理 部  
庶務課 長 及川 孝之  
主 査 市川 勇三  
主 事 長 滝 美智子  
主 事 菊池 久  
専門調査員 兼 関野 栄一  
経 理 課 長  
主 任 江田 和美  
主 事 福田 明美  
主 事 腰塚 雄二

#### 調査部

調査部 副部長 高橋 一夫  
調査第一課 長 坂野 和信  
主任 調査員 鈴木 孝之  
主任 調査員 書上 元博  
主任 調査員 新屋 雅明  
調 査 員 大屋 道則

#### (2) 発掘調査 平成7年(1995)度

理事 長 荒井 桂  
副理事 長 富田 真也  
専務理事 吉川 國男  
常務理事 兼 新井 秀直  
管理 部  
理事 兼 小川 良祐  
調査 部 兼 長  
管理 部  
庶務課 長 及川 孝之  
主 査 市川 勇三

#### 管理 部

庶務課 長 及川 孝之  
主 査 市川 勇三

主 任 長 滝 美智子  
主 事 菊池 久  
専門調査員 兼 関野 栄一  
経 理 課 長  
主 任 江田 和美  
主 任 福田 明美  
主 任 腰塚 雄二

#### 調査部

調査部 副部長 高橋 一夫  
調査第一課 長 坂野 和信  
主任 調査員 磯崎 一  
主任 調査員 木戸 春夫  
主任 調査員 鈴木 孝之  
主任 調査員 山川 守男  
調 査 員 上野 真由美

#### (3) 発掘調査・整理事業 平成8年(1996)度

理事 長 荒井 桂  
副理事 長 富田 真也  
専務理事 吉川 國男  
常務理事 兼 稲葉 文夫  
管理 部  
理事 兼 小川 良祐  
調査 部 兼 長  
管理 部  
庶務課 長 依田 透  
主 査 西沢 信行  
主 任 長 滝 美智子  
主 事 菊池 久  
専門調査員 兼 関野 栄一  
経 理 課 長  
主 任 江田 和美  
主 任 福田 明美  
主 任 腰塚 雄二

#### 管理 部

庶務課 長 依田 透  
主 査 西沢 信行  
主 任 長 滝 美智子  
主 事 菊池 久  
専門調査員 兼 関野 栄一  
経 理 課 長  
主 任 江田 和美  
主 任 福田 明美  
主 任 腰塚 雄二

#### 調査部 (発掘調査)

調査部 副部長 高橋 一夫

調査第一課長	坂野和信
主査	磯崎一
主任調査員	富田和夫
資料部(整理事業)	
資料部長	梅沢太久大
主幹兼資料部副部長	谷井彪
専門調査員兼資料整理第一課長	今泉泰之
主任調査員	鈴木孝之

## (4) 整理事業 平成9年(1997)度

理事長	荒井桂
副理事長	富田真也
専務理事	塩野博
常務理事兼常務管理部	稲葉文夫
理事兼調査部	梅沢太久大

## 管理部

庶務課長	依田透
主査	西沢信行
主任	長滝美智子
主任	腰塚雄二
専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田明美
主任	菊池久

## 資料部

資料部長	谷井彪
主幹兼資料部副部長	小久保徹
専門調査員兼資料整理第一課長	坂野和信
主任調査員	鈴木孝之

## II 遺跡の立地と環境

北島遺跡は、埼玉県熊谷市大字上川上字全下後に位置する。熊谷市は、埼玉県の北部に位置しており、県北部地域の交通・経済等をはじめとして、さまざまな分野について中心的役割を担って現在に至っている都市であるといえる。

熊谷市の南には荒川が東流しており、この北側約0.7キロメートルのところにJ R高崎線の熊谷駅がある。熊谷の市街地はこの熊谷駅を中心として形成されており、今も拡大を続けている。

現在この市街地は、J R熊谷駅の北約2.5キロメートルの地点を通過する国道17号線の熊谷バイパス付近にまで及んでいる。そして、この熊谷バイパスの北側には水田地帯が広がっており、北島遺跡はこの一角に位置しているのである。

熊谷市の大部分は荒川によって形成された扇状地上に立地している。熊谷市北東部の、上中乗・大塚・今井一带の表沼低地には中乗遺跡群が広がっているが、北島遺跡はこの中乗遺跡群を構成する遺跡の1つであり、その南半部にあたる。

中乗遺跡群周辺には荒川の旧河道と推定される痕跡がよく残り、これらの複雑な旧河道によって形成された自然堤防が分布している。

北島遺跡は、こういった自然堤防のうちの1つに立地しているといえる。また、扇状地形の扇端部に特徴的にみられる湧水地が、本遺跡の西側地域においても存在しており、自然堤防地形に加えて、水利面でも自然的な好条件を兼ね備えていたと考えられるのである。

これらの好条件は、北島遺跡が比較的長期間に亘って続くことになった要因の1つと考えられるのである。

しかし、この一帯は以上にみえてきた地形的・自然的環境によって、河川の氾濫は度重なるものであったと思われ、古代の地形を推定するのはきわめて困難である。

北島遺跡は、調査原因が異なるものの、これまで当

事業団による調査は4度目となるため便宜上、第4次調査と仮称することとする。

第4次調査地点は、利根川の南西約4.8キロメートル、荒川の北東約3.3キロメートルの位置にあたり、利根川と荒川が最も接近する地域に相当するといえよう。J R高崎線熊谷駅からは、北東へ約3キロメートルの距離にあたる。

北島遺跡は、やや断片的ではあるものの縄文時代(晩期)から平安時代、さらに中世にかけて長期的に営まれた大規模な集落跡である。

近年、国道17号線熊谷バイパスや国道125号線、スポーツ文化公園、ミニ工業団地関係などの発掘調査が行われ、周辺の地域についての立地・環境や、そこに存在している話遺跡についての様相が次第に明らかにされつつある。

弥生時代の遺跡としては、弥生時代中期の環壕集落である池上遺跡や、関東地方では最も古い段階の須和田期の方形周溝墓が検出された小敷田遺跡などの、きわめて重要な遺跡が所在している。これらの中核的な集落の周辺部に形成された小規模な遺跡として、天神遺跡・平戸遺跡、および北島遺跡第2地点が挙げられる。

今回の第4次調査では、第14～16地点から縄文晩期末～弥生時代中期の土器が検出され、さらに北島遺跡の上層がさかのぼることが明らかとなった。

弥生時代後期については、東沢遺跡・小敷田遺跡・池守遺跡および北島遺跡第9地点が挙げられる。

古墳時代については、前期では天神遺跡・雷電遺跡・榎現山遺跡・東沢遺跡・池上遺跡・池守遺跡・小敷田遺跡、および北島遺跡第5・12・14地点などが挙げられる。とくに小敷田遺跡では、機内地方や東海地方など外来系の土器が多数出土しているほか、この時期の方形周溝墓群が検出されている。また、東沢遺跡・小敷田遺跡では、河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具が出土しており注目される。

古墳時代中期については、他の時期に較べ不明点が多いが、権現山遺跡・常光院東遺跡・女塚古墳南側周辺部のほか、北島遺跡第4地点などが挙げられる。古墳時代後期の集落については、中島遺跡・光屋敷遺跡・北島遺跡に加えて、諏訪木遺跡が挙げられる。

集落跡のほか、周辺では古墳も多数分布している。北島遺跡の北側では鑑塚古墳・女塚古墳群、権現山古墳・大家古墳などからなる中条古墳群、南西側では肥塚古墳群が位置している。

奈良～平安時代については、中条遺跡群では北島遺跡のほか、天神遺跡・中島遺跡・常光院東遺跡・光屋敷遺跡などを挙げる事ができるが、北島遺跡を除いて小規模なものが多いといえる。この点から、この地域では北島遺跡が中心的な意味を持っていたと思われる。また周辺では、7世紀末～8世紀初頭銀貨の稲の貸付けを記した「出挙」木簡が出土したことで大きく注目された小敷田遺跡や、整然と配された9世紀代の掘立柱建物群の検出された池上遺跡などが所在している。

またこれらの遺跡のほか、近年確認された諏訪木遺跡もまた、この地域の歴史を考える上で欠くことのできない遺跡の内の1つであると思われる。

諏訪木遺跡は北島遺跡の南約1キロメートルに位置する古墳時代・奈良～平安時代、さらに中近世に亘る大規模集落であり、北島遺跡と時期的に重なる部分が多い。とくにこの遺跡では、古墳時代から平安時代に亘る水辺の祭祀と思われる痕跡が人溝で確認されるなど、注目すべき資料が多数出土している。

上にみた遺跡とはまた別に、周辺の低湿地帯では、中条桑里・小敷田桑里・南河原桑里など桑里制に関わる遺構が痕跡をとどめている。

周辺には、中世館跡が数多く確認されており、その大半は中条遺跡群でも北方に位置している。そして、これらの多くは中条氏関連と推定されるものである。

遺跡としては中条館跡・光屋敷遺跡・常光院東遺跡・権現山遺跡などがあり、これらの遺跡は主として中世前半の館跡と思われる。

また上記の遺跡の他に、北島遺跡でも第3・4地点から15世紀後半の館跡に伴うと思われる堀跡が検出されている。北島遺跡第14地点で検出された溝の中には、古代から中近世までおよんでいた溝跡や、さらに現代にまで痕跡をとどめていた溝跡も存在した。

第16地点では、時期は確定できないものの、明らかに区画溝であると思われる遺構も検出されている。

さらに、中世と思われる掘立柱建物跡や井戸跡なども、第1次から第4次までを通じて検出されているのである。

北島遺跡を含むこの周辺では、古代から中世まで継続する集落跡は少なく、本遺跡はこういった点からも周辺の遺跡とは異なっており、中心的な役割を担っていた遺跡であるとも推定される。そしてこういった集落は、遺構の疎・密の違い、規模の大小はあるものの近世・近代、さらに現代にまで続いたものと推測される。

また見方を変えるならば、遺跡の分布が時代によって一定しておらず、時代とともに推移していったとも考えられる。これは、扇端部付近に位置する自然堤防上という、水利面に恵まれた環境とは裏腹に、水による被害にもまた近い位置にある、ということに因るのであろうか。

実際にこの地域一帯には、旧河川の複雑な痕跡が実に数多く残されており、河川による地理的環境への影響の大きさを物語っている。そしてこの水による影響は、地理的なもののみではなく、幅広い意味での住環境へも大きく作用したと考えられるのである。そうしてこの環境変化の中で、その時々により生活の場を移動させていったのであろうか。

従来、自然堤防の形成が盛んであった地域では、主にその自然堤防上に遺跡の存在を求めがちであった。しかし、こういった自然堤防上のみではなく、その周辺の低湿地にも遺跡が広く存在する場合が珍しくない、という調査例が次第に明らかとなって久しい。

中条遺跡群内における北島遺跡も、その典型的な事例といえよう。そして北島遺跡を例に取るならば、こ

れまで調査を行った各地点は、調査開始以前の地形はほとんど起伏のみられない平坦地であった。この点については、明治陸軍による迅速測図（第3図）にも微高地としては表現されておらず、また昭和22年撮影の米軍写真（写真図版2）を観察してもそれらしい微地形はみられない。

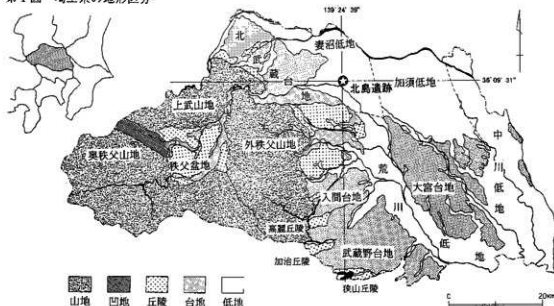
しかし、調査にあたって表土除去を行ってみると、現地表面からは窺い知ることのできなかつた微地形が現れ、その微高地には集落跡が存在していたのである。現地表面で確認できる自然堤防上ばかりではなく、

現地表面に隠れた標高の低い自然堤防上にも、大規模な集落は存在する可能性が大きくなったことにより、中条遺跡群の様相もまた異なることとなる。

もちろん、この事柄は今回初めて分かったものではない。第1～3次の調査段階で毎度のように確認された事柄であり、今回もそれを再確認しつつ北島遺跡の広がりを追ったに過ぎない。

今後、この周辺の発掘調査が行われる度ごとに、現地表面だけからでは推測できない様相がさらに浮かび上がってくるといえよう。

第1図 埼玉県地形区分



### 参考文献

- 浅野晴樹 1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第81集  
 大谷 徹 1991『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第103集  
 金子正之 1988『天神遺跡』熊谷市教育委員会  
 金子正之・梅田宣行ほか 1997『6 熊谷市諏訪木遺跡の調査』『第29回遺跡発掘調査報告会 発表要旨』埼玉考古学会  
 川口 潤 1989『光原敷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第82集  
 寺社下博 1980『中条遺跡群・中島遺跡』熊谷市教育委員会  
 寺社下博 1981『鍛塚古墳』熊谷市教育委員会  
 寺社下博 1982『中条遺跡群Ⅲ・糠現山遺跡・常光院東遺跡』熊谷市教育委員会  
 寺社下博 1983『めすか』熊谷市教育委員会  
 寺社下博 1984『中条遺跡群 昭和52年度～昭和56年度調査遺跡概略 昭和58年度調査・光原敷遺跡』熊谷市教育委員会  
 中島 宏・杉崎茂樹 1984『池守・池上』埼玉県教育委員会  
 小村倉司 1990『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第88集  
 並木 隆 1979『中条集里遺跡調査報告書』熊谷市教育委員会

第2図 遺跡周辺の地形図

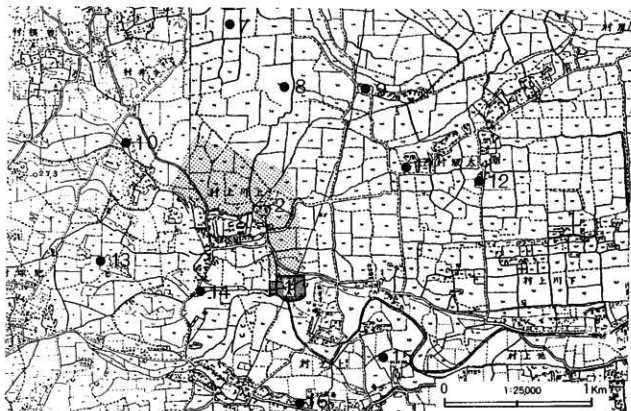


第1表 周辺遺跡地名表

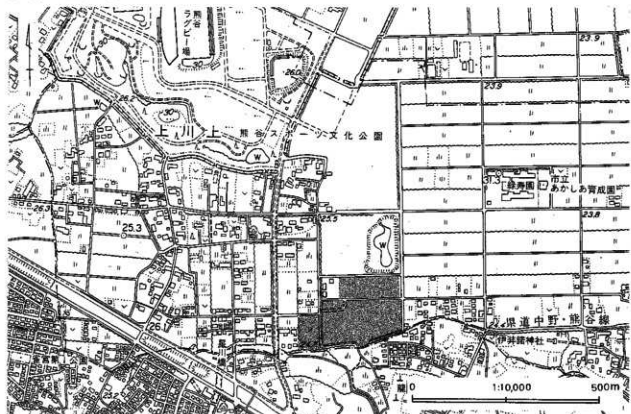
1 北島遺跡 (No.14~16地点)	2 北島遺跡 (No.1~13地点)	3 光岡敷遺跡	4 中条氏館跡	5 極現山古墳
6 中条古墳群	7 女塚古墳	8 楢塚古墳	9 中島遺跡	10 天神遺跡
11 大塚古墳	12 東沢遺跡	13 肥塚古墳群	14 河上氏館跡	15 熊谷市No.59遺跡
16 成川氏館跡	17 福田氏館跡	18 池上遺跡	19 小敷田遺跡	



第3図 遺跡の位置迅速測図(行田町熊谷驛)



第4図 調査区の位置



### III 遺跡の概要

北島遺跡およびその周辺は現在、水田域に集落が点在するという景観を呈する。この地域は、利根川と荒川が最も接近する地点であり、利根川の南約4.0キロメートル、荒川の北約3.6キロメートルにあたる。この一帯は、両河川の支流によって形成された自然堤防が数多く分布し、これらの自然堤防上には多数の遺跡が立地している。そのうちの1つである北島遺跡は、位置的・地形的にみて、荒川の支流である旧河川によって形成された自然堤防上に立地していると考えられる。

但し、低湿地面や河川との高低差の小さな自然堤防であるため、明治陸軍の迅速測量(第3図)にも表現されておらず、また昭和22年撮影の米軍写真(写真図版2)にもそれらしい微地形はみられない。現在の北島遺跡およびその周辺は平坦面に近く、地形的な起伏は少ないが、今回の調査において表土の除去を行なった結果、南東方向に開く谷地形が検出された。

そして第1～3次の調査においても、表土除去を行なった結果、調査開始以前にはみられなかった凹凸をもった旧地形が検出されている。往時の周辺地形は、今以上には起伏に富んでいたといえよう。

北島遺跡の調査では、第1～4次のいずれの場合も水に悩まされ、雨の多い時期には、水中ポンプで24時間排水し続ける状態であった。湧水も豊富で、降雨のために冠水した住居跡床面に小孔が開き、水が湧き出しているということもしばしばであった。

水の豊富さに関して地元の方々に伺ったところ、「子供の頃から排水の心配をしたことはあるが、用水の心配はしたことがない」とのことであった。

北島遺跡の中心をなす平安時代に、住居床面から湧水したとは思われないが、立地的にみて水は豊富であったと思われる。今回の調査では実に多くの溝跡が検出されたが、これらの溝跡の多くは用水・排水とは無縁ではなかったと思われる。

第16地点の南西端部から、第14地点にかけて南西方向に広がる谷地形などからみて、今回調査を行った第

14～16地点は、概ね東西に延びる自然堤防の南東端部に相当すると思われる。調査地点は、現：新岸川の河川敷のすぐ北側に位置しており、北島遺跡全体の中で最南端部にあたる。北島遺跡をのせる東西に延びる自然堤防の形成には、この河川の作用が大きく作用したものとえよう。

今回の調査では、第14～16地点をとおして縄文時代晩期～弥生時代中期の遺物が出土した。特に第14地点においては再葬墓のほか、覆土に焼土塊や被熱した骨片を含む土塊、さらに遺物が出土しなかったため断定はできないが、弥生時代中期と思われる住居跡が1軒検出された。次いで古墳時代前期の住居跡が、これも1軒ではあるか確認されている。今回の調査区における中心は、8世紀から12世紀に至る集落跡で、時期的にはさらには中近世まで及んでいたと考えられる。

特徴としては、住居跡が8～9世紀代を中心としており、掘立柱建物跡も多くはこれに伴う時期と考えられるに対し、溝跡は10～12世紀まで続いているものが多いと思われ、時期的にややずれている。

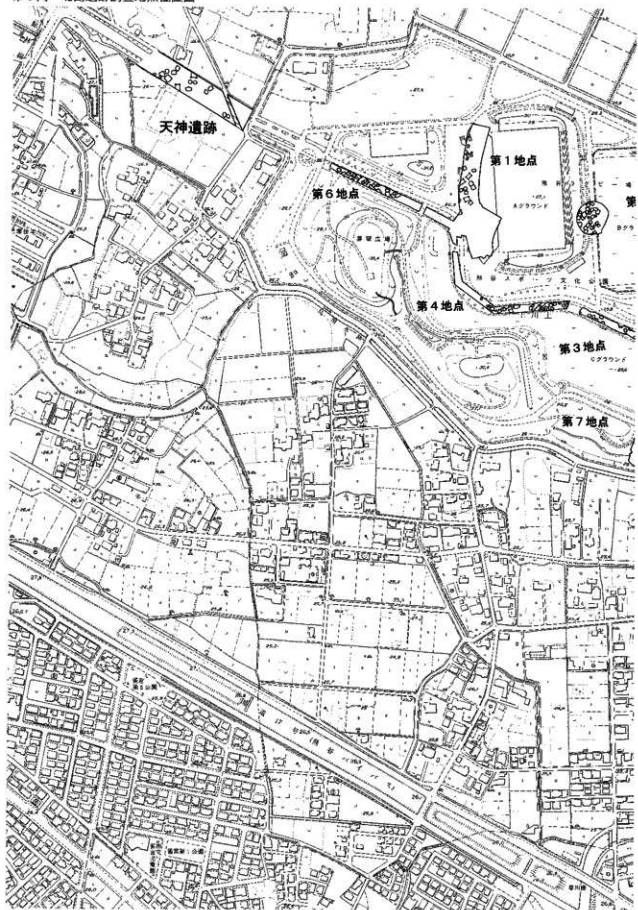
第14地点では住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡等が西半部に集中し、この中を中世まで続くと思われる南北方向の溝跡と、東西方向の溝跡が河川に向かって貫流する。西半部には、谷に向かう溝跡が多数みられる。

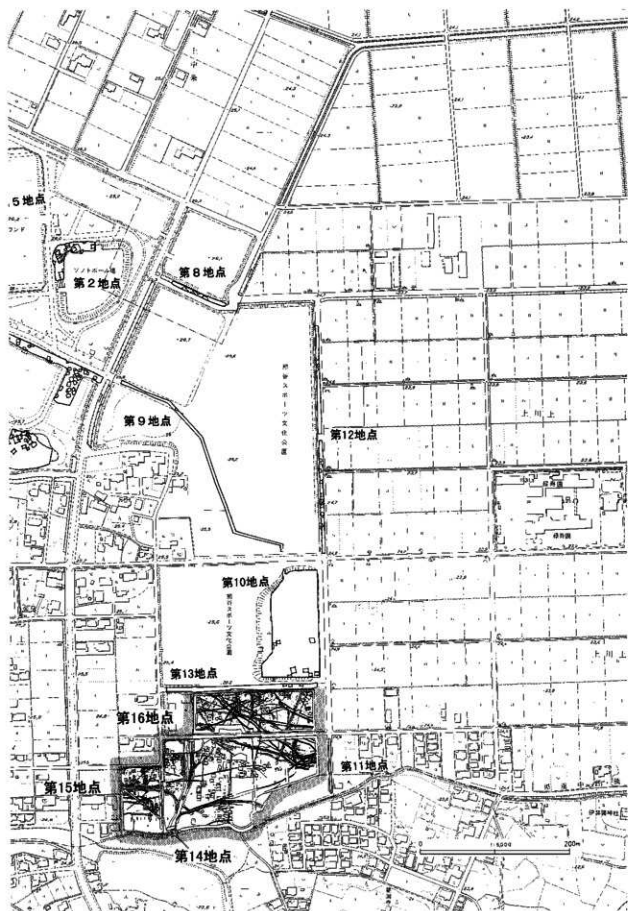
第15地点の遺構出土状況を見ると、集落はさらに北側と西側に広がっていると推定される。特徴となる遺構としては、河川方向から北上し大きく屈曲して西に向かう古代の道路状遺構がある。この屈曲する箇所の内側には大型の掘立柱建物跡があり、両者は併存していた可能性が高い。また河川との関連も興味深い。

第16地点での住居跡や掘立柱建物跡は疎らで、分散する傾向がみられる。最も特徴となるのは溝跡群で、基本的に水路の可能性が高いが、水の流れた痕跡のないもの、地割り溝とみられる溝なども存在する。

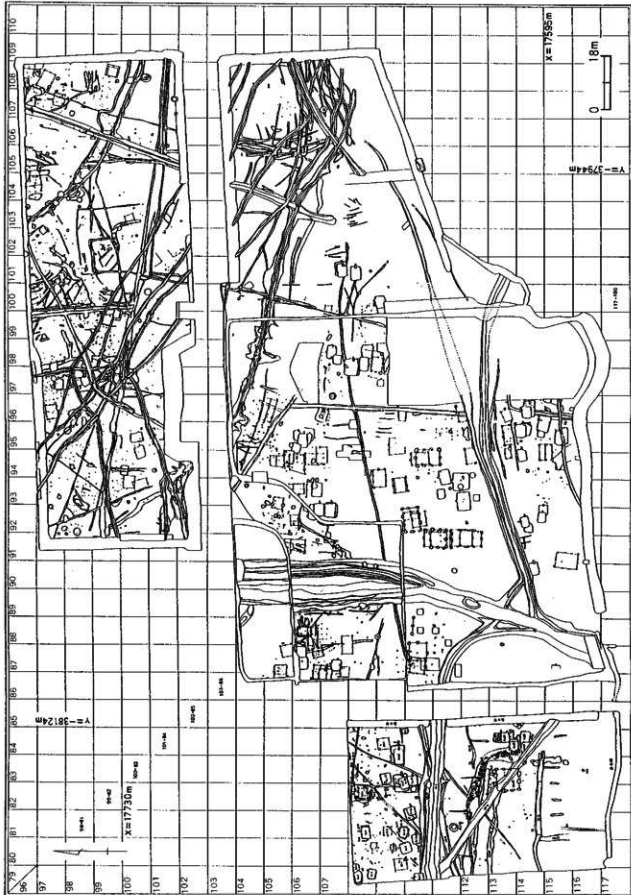
さらに、谷地形に面した水場的様相を見せる箇所もあり、水との関連の深さを伺わせている。

第5図 北島遺跡調査地点位置図





第6図 グリッド配置図



## IV 検出された遺構と遺物

### 1. 縄文晩期末～弥生時代

#### 概 要

これまでに実施された北島遺跡の発掘調査では、第2・9・10・12・13の各地点で、弥生時代中期を主体とする弥生土器が出土しているが、弥生時代の遺構の有無については不明であった。

今回調査の第14地点では、弥生時代中期の再葬墓1基と土壌群が検出された。それぞれ、埋納土器・焼土塊が露出したために遺構の存在が確認されたものであり、以後、確認に努めたが、他に弥生時代の遺構は検出されなかった。

第14地点では、原則として、基準上層V層（黒褐色土）とVI層（黄褐色土）上面で遺構の確認を行った。V層は浅い谷地形を覆う土層で、上面には塊状のF.A.火山灰が顕著に見られた。

なお、第14・15・16地点の調査では、遺構には伴わないものの、縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器および石器が多く出土している。これらについては、「グリッド出土」として一括して後述することにする。

#### (1) 弥生時代の遺構

##### 第1号再葬墓（第8図）

112-93グリッドに位置する。第40号住居跡の貼床下で埋納土器上端が検出された。墓塚上半部は、第40号住居跡が掘られた際に破壊されたと考えられる。さらに、一部擾乱も受けているようであった。

墓塚は、V層内から掘り込まれていると考えられたが、V層部分での立ち上がりは不明瞭であった。VI層上面で確認した墓塚下部の規模・形態は、長径0.55m、短径0.25～0.30mの不整形円形である。

埋納土器は、甕が1個体であった。甕は、墓塚底面に10cmほど土を敷いて埋納されたものと推定された。

なお、墓塚内では他の出土遺物は無く、また、埋納土器内部から人骨等は検出されなかった。

##### 出土遺物（第8図1）

1は甕で、口縁部～胴部上半を欠く。胴部下半には、半裁竹管を束ねたような工具で横位から斜位に条痕を施す。胴部最大径付近には、LR縄文が横転がしに施され、残存部上端付近には、文様帯を区画する沈線がみえる。施文順位は、条痕→縄文→沈線である。内面は、幅広のヘラ状工具でナデが施される。底面には、木葉灰が残る。胎土は、茶褐色で粗い彩粒がめだつ。

この甕の時期については、弥生時代中期初頭～中期前半と推定される。

##### 弥生時代土壌群（第8図）

108-94グリッドに位置する。第1号再葬墓からは、北北東に約40m離れている。VI層上面で焼土塊の一部が露出した状況で確認された。

土壌群は、ほぼ円形の大小の土塊6基から成り、ほぼ南北に重複しながら連なる。いずれの土塊も、覆土上層は地山VI層に近似する上であるが、下層には焼土粒や骨片を含む。

最大の弥生SK1はほぼ円形の土塊で、規模は、直径1.1～1.2m、深さ56cmである。覆土には、10cm前後の大きな焼土塊や被熱した骨片を多量に含む。土層断面の観察では、土塊を何度も掘り返しながら、焼土塊や骨片を含む土を投棄した状況が観察された。

骨片については、分析を行ったが、遺存状況が不良で、動物の種類や部位などの特定はできなかった。

弥生SK1の底面付近では、壺1点が出土している。

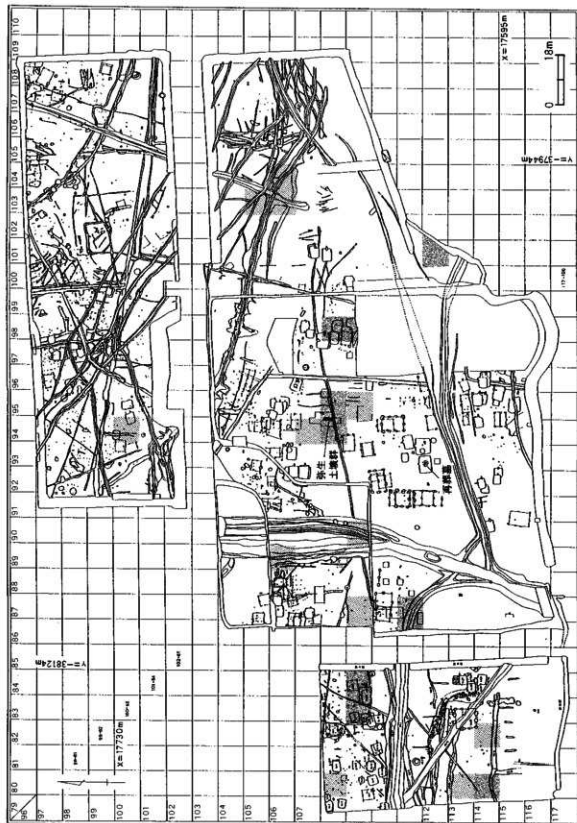
##### 出土遺物（第8図2・3・4）

2・3は、壺の頸部付近、4は壺の胴下半部で、接合はしないが、淡黄色で緻密な胎土が共通し同一個体と考えられる。いずれも器面の風化・剥落が著しい。

2は、2本の区画沈線下に撚り不明の細かい縄文が見える。3は、区画沈線の下に縦走羽状沈線文がくる。4については、条痕等の施文の有無は不明である。

この壺の時期については、弥生時代中期前半と推定される。

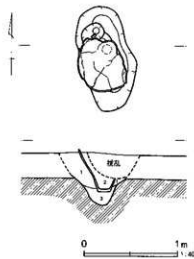
第7図 縄文晩期末～弥生中期の土器分布図



縄文晩期末～弥生中期の土器が特に多く出土したグリッド

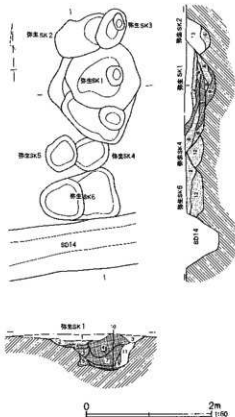
縄文晩期末～弥生中期の土器が出土したグリッド

第8図 第1号再葬墓・弥生土墳群



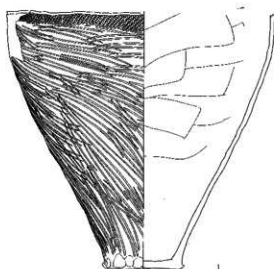
第1号再葬墓

- 1 暗褐色土 基層土層のV層と近接、土層の立ち上り不明確
- 2 黒褐色土 土層内部底面の上
- 3 暗褐色土 基層土層VI層との境は明確、若干VI層底面の小ブロックを埋入



弥生時代土層群

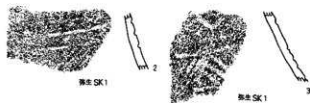
- 1 灰褐色土 13層、VI層との境界が不明確、地山VI層と近接
- 2 暗灰褐色土 焼土粒及び微細な骨片をごくわずか混入
- 3 暗褐色土 焼土粒をわずかに混入
- 4 暗褐色土 φ10cmの橙色の焼土板を30~40%混入、微細な骨片少
- 5 暗褐色土 微細な焼土粒、骨片をやや多
- 6 暗褐色土 焼土粒・骨片ごくわずか混入
- 7 暗赤褐色土 焼土が密に認められている、層の下面から10cm位の幅で層状に骨片が集中する
- 8 灰褐色土 5層内のブロック（地殻層）
- 9 明褐色土 粘土がぎっしり認められている、若干骨片混入
- 10 黒褐色土 9層の下に層状に炭化物の層あり、若干焼土混入
- 11 暗灰褐色土 ごくわずかに焼土混入、骨片混入なし
- 12 暗褐色土 焼土粒少、骨片ごくわずか
- 13 灰褐色土 1層、VI層との境界が不明確（地山土層に近接）



第1号再葬墓



第1号再葬墓



実測図・撮影形影

0 5cm 1/12

その他の形影

0 10cm



## (2) グリッド出土の土器

縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器は、V層内やVI層上部など明確な遺構に伴わずに検出されており、また、他の時期の遺構覆土内からも出土している。

ここでは、その内容について述べることにする。

縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器が、特に集中して検出された区域は、以下のとおりである。

【第14地点】① 111-87 (VI層・溝跡覆土)

② 108-9495 (VI層；弥生土壌群周辺)

③ 112-101 (V層)

④ 108・109-98 (V層)

【第15地点】① 109-83・84 (住居跡覆土)

② 114-80 (溝跡覆土)

### 第14地点①集中区 (第9図1～5)

1～4はSD3覆土内、5はVI層上部の出土である。

1は浅鉢の口縁部である。口縁下を1条の沈線で区画した下に三分岐の浮線網状文を描く。連結部以外では隆線部と沈線部の幅は変わらず、浮線文としての作出不充分である。口縁部内面には沈線1条をめぐらす。外面には赤彩の痕跡が見られる。

2は石肩の浅鉢の口縁部である。肩部はヘラ状工具で何度も強くナテられて、屈曲部の隆線が強調される。屈曲部下の沈線のさらに下には、結節により断絶される短沈線がめぐらされる。隆線部は、沈線部よりも幅広く断面三角形で際どい。口縁部内面には沈線1条をめぐらす。外面には赤彩の痕跡が見られる。

3は鉢か。2と同様に、隆線部は、沈線部よりも幅広く断面三角形である。

4は鉢の体部。3条の平行沈線を描いた後、最も下の沈線を上にえぐり込んで、2条の隆線部を密接させπ字状文を作出する手法が見られる。隆線部は、断面台形状である。

5も鉢の体部。4と同様の手法によるπ字状文が施される。外面には赤彩の痕跡が見られる。

### 第14地点②集中区 (第9図7～11・17、第11図33)

7～11および17は、いずれも弥生土壌群周辺のVI層上部からの出土である。直接に接合はしないが、文様

構成や胎土は極めて近似しており、同一個体である可能性が高い。ここでは、代表として17について述べる。

17は深鉢である。口縁部直下から4条の幅広い平行沈線が施される。口縁および沈線間の隆線部は、沈線部に比べて幅狭く断面三角形形状であるため、4条の平行浮線としての効果を持つ。最も口縁に近い沈線は結節を持ち、それにより上下の浮線が連結される。結節部は、左右の沈線端部から粘土が押されて器面より若干突出する。結節は、8単位程度と思われる。平行沈線の下には、斜め方向に細密条痕が施される。施文順序は細密条痕→平行沈線である。内面には幅広いヘラ状工具によるナテが施される。

第11図33の底部も、胎土が近似しており同一個体の可能性がある。また、第9図6は、出土地点がやや離れるが、上記と同様の特徴を持つ口縁部破片である。

### 第14地点③集中区 (第9図15・16、第10図18～24、第11図31・32・36)

いずれも、谷地形縁部のV層の出土である。

15・16は壺の口縁部か。ともに粘土帯を貼付して肥厚された口縁部で、粘土帯下端は、ナテられた後、沈線1条が引かれる。肥厚部には、カナムグラ回転施文のような痕跡も見られるが、風化のため不明確である。

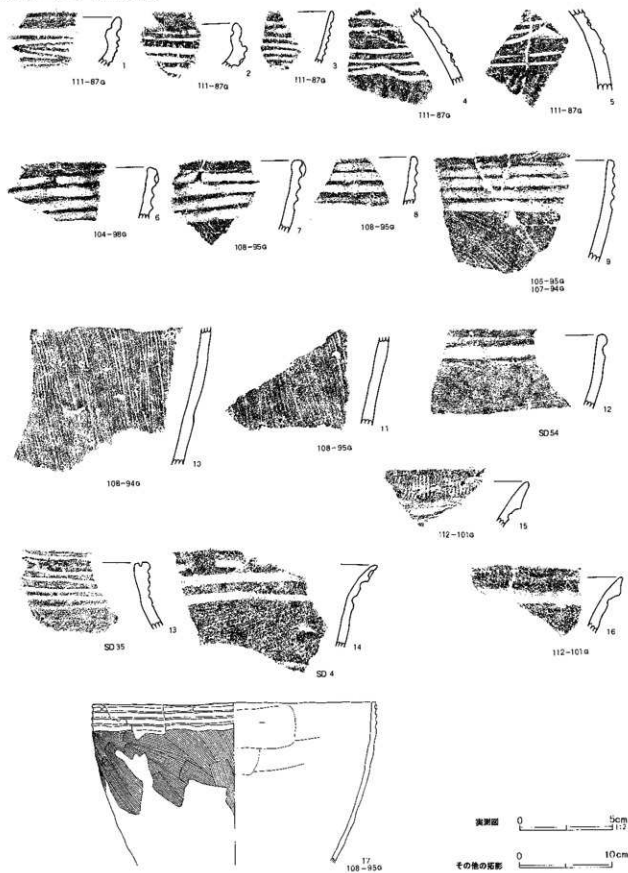
18・19・21・22・24は、同一個体と推定される。頸部～口縁部がほぼ直立し、胴部上半にやや肩を持つ壺である。

口縁付近はわずかに肥厚しており、沈線をめぐらして幅1cmほどの文様帯をつくりL形縄文を横回転に施す。頸部は無文。胴部上端には3条の平行沈線を施文する。頸部と胴部上半の境には段か作出されているが、これは平行沈線の上段の沈線の上側の縁を頸部の曲線に合わせて削り取っているためである。

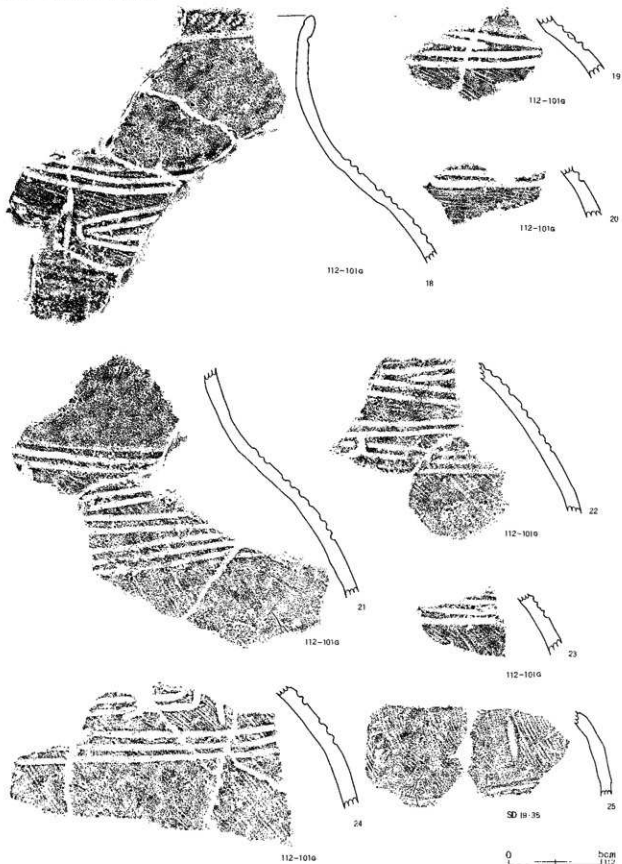
主要な文様は、この平行沈線と、幅約4cmほど間をおいてめぐらされる3条の平行沈線とに区画される。中心となるモチーフは、2重の沈線による三角連繫文で、文様帯を更に縦方向の沈線で区画した中に描かれる。

三角形の頂部は、上部の平行沈線の2条目に接する。三角形の下辺からは下部の平行沈線の2条目に連結す

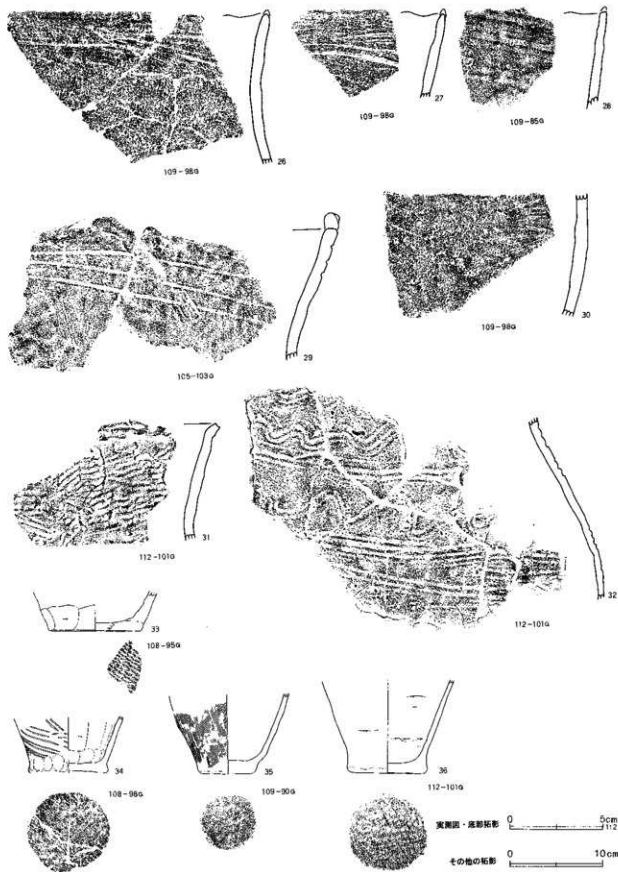
第9図 グリッド出土土器(I)



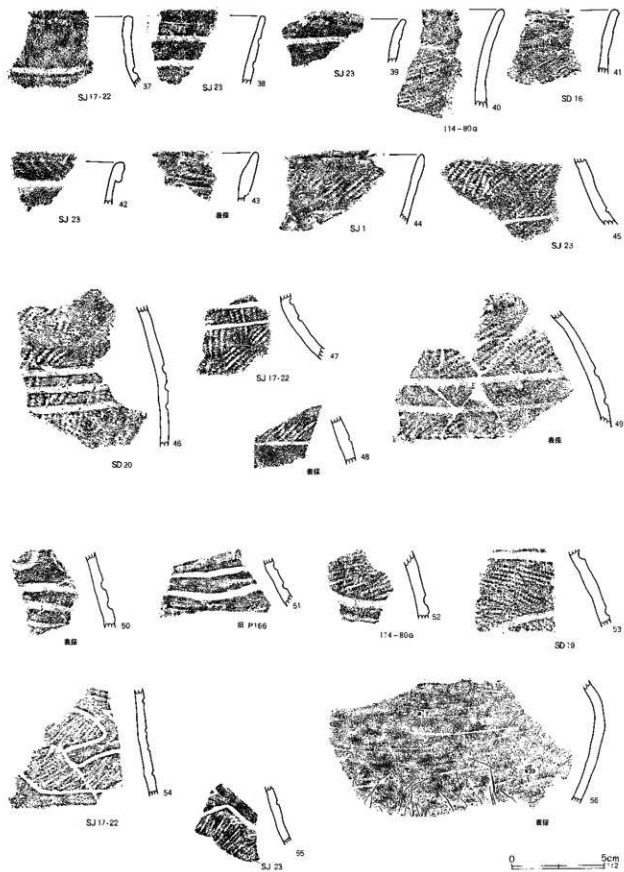
第10図 グリッド出土土器(2)



第11図 グリッド出土土器(3)



第12図 グリッド出土土器(4)



る縦沈線がのびて「」字文を形成する。

胴部以下は、沈線文様帯の内外を問わず、斜め方向の細密条痕が施されており、磨り消し等は明確でない。

20・23についても、近似する胎土を持つ。

第11図31は、甕の口縁部か。口唇部には沈線状のくぼみが認められる。外面にはL無節縄文が施文されているが、回転方法が不規則である。

32は条痕文系の壺の胴部上半である。屈曲を持たず、なだらかに頸部～胴部へ移行する器形と思われる。

文様は、貝殻と思われる原体で、4条程度を単位として、上から、波状文・波状文・横区画文・波状文と施文され、それ以下は横方向の条痕文を施す。器壁は壺としては比較的薄い。

36は甕の底部である。器壁の風化が著しく、施文の

有無は不明である。底面には網代痕が見られる。

第14地点④集中区（第11図26・27・30・34）

いずれもV層からの出土である。

26・27・30は甕で、同一個体と推定される。

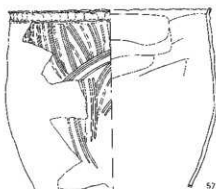
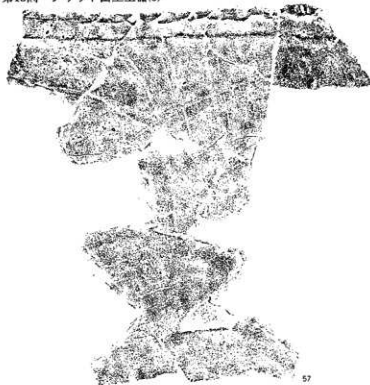
26・27は口縁部破片で、緩い波状口縁と思われる。外面には、半裁竹管を束ねたような工具で横位から斜位に条痕を施す。30は胴部破片である。

34は甕の底部で、外面には、半裁竹管を束ねたような工具で横位から斜位に条痕を施す。底面には木葉痕が見られる。

第14地点出土のその他の土器

第9図6か、②集中区出土の深鉢に近似した特徴を持つことは前に述べた。12は深鉢の口縁部で、口縁下に幅広い沈線1条をめぐらす。13は、口縁がほぼ直立

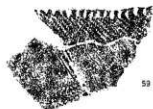
第13図 グリッド出土土器(5)



SD 19



SJ 17-22-23



59



条痕

59

真割四・底割拓影 0 5cm 1:1.2

その他の拓影 0 10cm

する壺か。口縁下に半截竹管状工具による細い平行沈線が2単位4条が施され、口唇にも細く鋭い沈線が施される。第10図25と出土地点が近く、胎上が近似する。25は胴部破片で、細密条痕の上から横区画・縦区画・菱形(?)などの沈線文が施される。14は甕の口縁部。口縁はわずかに肥厚され、その下に2条の平行沈線がめぐり、口縁肥厚部には、かなり間隔をあけて短沈線が施される。第11図28は甕の口縁部。貝殻と思われる原体で、斜め方向の条痕が施される。29は甕の口縁部で、2個1単位の山形の突起を持つ。外面には細く浅い沈線が3条、斜めに施文される。35は甕の底部か。外面には斜め方向に細密条痕が施される。底面はナデられており、無文である。

**第15地点①集中区** (第12図37~39・42・45・47・54・55・58)

いずれも平安時代の住居跡であるS J 17・22・23の覆土及び床下の出土である。

37は小型の細頸壺の口縁部。短く直立する無文の口縁部下に沈線1条がめぐり、赤彩の痕跡が見られる。38・39は同一個体で、甕の口縁部。やや外反して開く口縁で、外面に断面コ字状の沈線が2条施文される。42は甕の口縁部か。口縁には幅狭の粘土帯が貼付され複合口縁とする。粘土帯下端は調整されない。45は壺の頸部→胴部上端。R L縄文が縦回転で施された後、沈線が施文される。47も壺の頸部→胴部上端で、地文はR L縄文の縦・斜め回転。54・55は同一個体で、いわゆる筒形土器と思われる。細い沈線で入り組んだ文様を描き、細かなL R縄文を充填する。58は壺の底部か。底面には木葉痕が残る。

**第15地点②集中区** (第12図40・46・52・53、第13図57)  
グリッド周辺の溝跡覆土の出土の遺物が主体である。

40は甕の口縁で、外面には粗い条痕が施される。46は甕の胴部か。R L縄文縦回転を地文とし、3条の平行沈線が施文される。52は壺の胴部。太い沈線とL R縄文による磨消縄文の文様を持つ。赤彩の痕跡有り。53は壺の胴部。R L縄文を地文とし、太く深い沈線で文様が描かれる。

57は碇形形の深鉢で、口縁下に断面三角形の微隆起線を作出する。口縁と微隆起線の間は丁寧に指押さえがなされる。口唇には、ヘラ状工具で強く押してキザミを施す。微隆起線の下には、半截竹管を束ねたような工具で縦方向・斜方向の条痕を施す。内面は幅広いヘラ状工具によりナデ調整が加えられる。

#### **第15地点出土のその他の土器**

41は甕の口縁部。微かに条痕が見える。43は肥厚された甕の口縁で、横方向の条痕が施される。44も甕の口縁で、L R縄文が横回転に施される。48は壺の胴部でL R縄文を用いた磨消縄文、49は甕の胴部で、R L縄文を地文とし、平行沈線の間を磨り消す。50・51は沈線文のみの破片である。56は壺の胴部で、横方向の粗い条痕が見られる。

#### **第16地点出土の土器** (第13図59)

59は表面採集による。59は細頸壺の頸部である。残存部の上端には刺突列点文がめぐり、その下はR L縄文横回転、更に鋸歯状沈線文が施文される。施文順序は、縄文→刺突文、縄文→沈線文で、鋸歯状沈線文の下に縄文は磨り消される。

## (3) グリッド出土の石器

北島遺跡から出土している石器は、地山や住居跡の床面下などの出土が多くを占め、また住居跡や溝跡から出土した石器も、明確に遺構にともなうものではなく、流れ込みと考えられた。そこで出土した石器は、遺構ごとではなく、すべてを一括してグリッド出土石器として報告することとした。また石器の時期については調査区内から、縄文時代晩期から弥生時代中期の土器が出土していることから、石器の時期も同様であると考えられる。

石器は打製石器がほとんどを占めており、明確な磨製石器は検出されていない。

## 剥片・石核 (第14回1~4)

北島遺跡の14地点、15地点からは、石材がチャートやホルンフェルスの剥片や砕片が出土している。ホルンフェルスの剥片などは打製石斧などの製品の製作過程で、生じたものと考えられた。しかしながらチャート製の定形的な石器は、今回の調査では出土しておらず、剥片、砕片については、特定の石器と結びつけては考えられなかった。また剥片同士で接合するものもなかった。剥片の中には縁辺に刃こぼれなどの、痕跡が認められるものもあり、簡単な搔器として利用するため剥片事体を作り出していた、可能性も考えられた。そこで鋭い縁辺を持ち、そこに刃こぼれ状の痕跡を持つ剥片を3点と、それらの剥片の母岩として利用されたと考えられるチャート製の石核を1点、図示することとした。

1は14地点の弥生包含層より出土した縦長の剥片で、長さ4.1cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ10.13gである。石材はチャートである。脛面には主要剥離面が大きく残るもので、右側縁には刃こぼれ状の痕跡がある。2は14地点の108-98Gから出土した縦長の剥片で、長さ4.1cm、幅2.9cm、厚さ1.4cm、重さ12.21gである。石材はチャートである。剥離によって鋭く割かれた右側縁に刃こぼれ状の痕跡がある。3は15地点の110-83グリッドから出土したもので、長さ4.0cm、幅4.

5cm、厚さ0.8cm、重さ12.15gである。石材はチャートである。左側縁には刃こぼれ状の痕跡がある。1と2は石質が似ており、同一母岩である可能性もある。

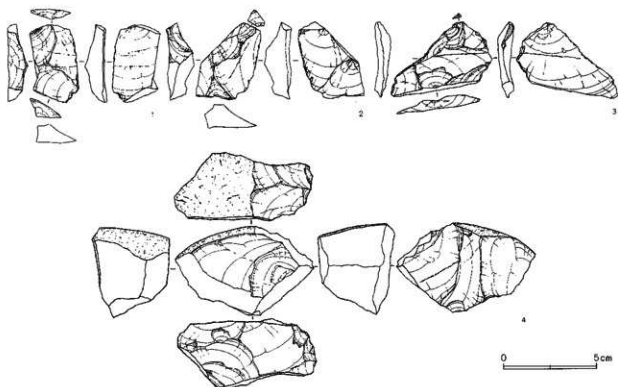
4は14地点109-98グリッドから出土した石核で、面の一部に自然面が残るものである。長さ4.8cm、幅7.4cm、厚さ4.1cm、重さ146.33gで、石材はチャートである。出土している剥片と接合はしなかった。108-98グリッドからは、石質が似ているチャート製の剥片が出土していることから、1~3のような剥片を作る、剥離作業を行っていた可能性が考えられる。

## 打製石斧 (第15回5~10、第16回11~12)

8点出土している。5~8は大形のもので、いわゆる石鎌と呼ばれる石器である。大きさ、基部の作り出しや、刃部の形状など9~12の他の打製石斧とは、分離できるものだが、ここでは打製石斧として大きく分類することとする。5は16地点96・97-104グリッドより出土した。長さ18.4cm、幅9.9cm、厚さ1.6cm、重さ390.49gで、石材はホルンフェルスである。薄手のもので、基部に自然面を残す。両面とも大きく主要剥離面を残し、調整剥離は側縁より最小限にとどめている。柄に当たる基部には抉りをいれており、刃つぶし状となっている。刃部は丸みを持っている。6は14地点109-96グリッドから出土した。右側半分近くを欠損するもので、残っている計測値は長さ24.6cm、幅9.5cm、厚さ3.0cm、重さ867.68gで、石材は緑泥片岩である。粗い剥離を側縁より行ったのち、調整剥離を基部の抉りを中心に、最小限に行っている。刃部先端の一部を欠損している。出土している打製石斧のなかで一番大形のものである。7は15地点110-81グリッドより出土したもので、長さ20.2cm、幅11.2cm、厚さ3.8cm、重さ852.78g、石材はホルンフェルスである。基部の一部を欠損する。基部の先端に自然面を残すものである。基部には抉りを入れて作り出しており、刃部は丸みをおびる。5と比べ厚手のものである。8は14地点の第5トレンチより出土したものである。刃部のみが残る



第14図 グリッド出土石器(I)



ものであるが、全体の形状は5～7と同様であると考えられる。残存する長さ7.4cm、幅11.9cm、厚さ2.2cm、重さ240.64gで、石材はホルンフェルスである。やや風化が進んでいる。刃部は薄く作り出されており、縁辺は刃こぼれ状になっている。全体の形状がわかる5～7については、製作方法がほぼ同じで形状も似通っている。

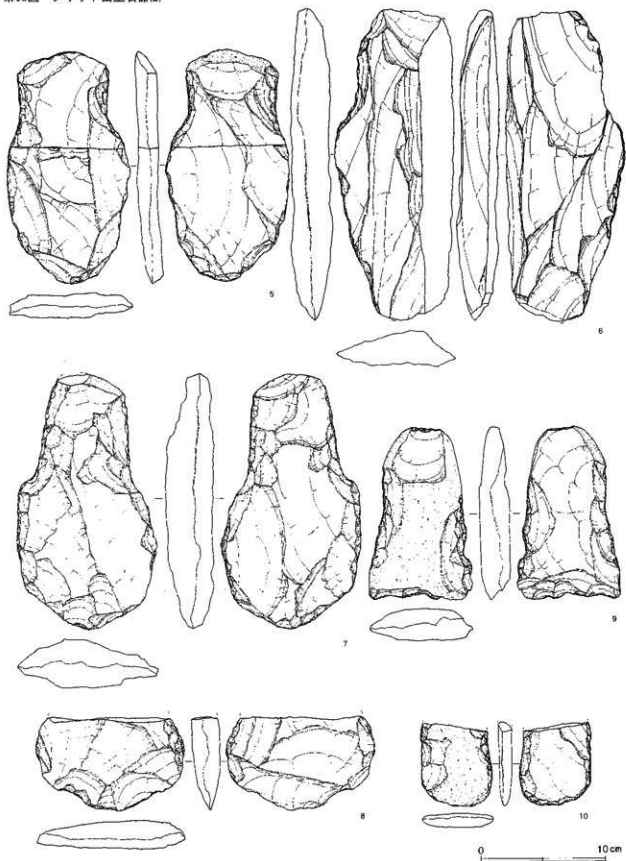
9～12は5～8に比べると、小形のものである。9は15地点の110-81グリッドより出土した。刃部に最大幅があるものである。刃部は直線的である。偏平な原石を利用したもので、第一次剥離後は側縁からの、最小限の調整により形を作り出している。長さ13.6cm、幅8.3cm、厚さ2.4cm、重さ335.99gで、石材は硬砂岩である。10は14地点の108-96グリッドで出土したもので、いわゆる短冊の形をしたものである。表面に大きく自然面を残す。裏面に残る一次剥離面には、擦れたような痕跡が縦方向に認められた。長さ6.6cm、幅5.8cm、厚さ1.0cm、重さ56.35gである。石材は砂岩であ

る。11、12は厚手のもので、礫器に近いものである。11は15地点109-83グリッドより出土したもので、長さは10.2cm、幅は7.5cm、厚さは3.5cm、重さは264.47gで、石材はホルンフェルスである。11は一次剥離後に二次剥離を粗く行い、調整はほとんどされてない。刃部は破損後に、粗く剥離を行ったのみで、刃部として使用されたかは不明である。基部の一部に自然面が残る。12は15地点114-83グリッドより出土したものである。基部側の半分を欠損している。一次剥離後には、粗い二次剥離を行い調整はほとんどされていない。長さ9.5cm、幅9.1cm、厚さ3.3cm、重さ342.85gで、石材はホルンフェルスである。

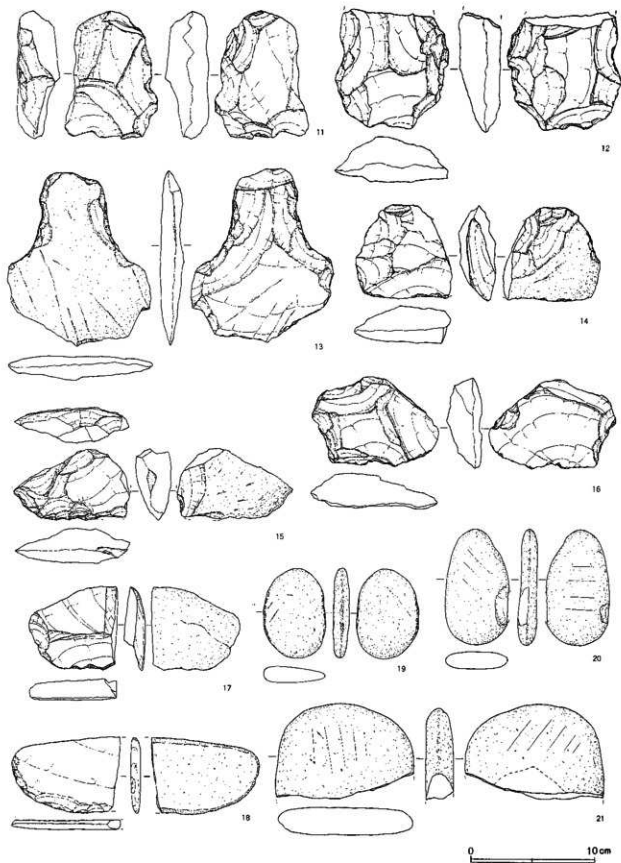
#### 搔器 (第16図13-18)

6点が出土している。石器の一边に鋭い刃部を作り出し使用しているものである。形状は一定ではないが、ここではすべて搔器として一括した。それらの中には弥生時代において特徴的な石器として知られる石包丁

第15図 グリッド出土石器(2)



第16図 グリッド出土石器(3)



に類似するものもあった。図示した中では、15～18の横長の剥片を利用したものが、それに当たる可能性も考えられた。特に18については、磨く作業とも考えられる痕跡がみられ、また平面の形状も石包丁に近いもので、磨製石包丁の製作途中であった可能性も考えられた。それらを機能を考えずに形状のみで、石包丁とすることもできたが、15～17のような搔器は、縄文時代にも存在することや、確実な時期も不明な出土状況から、ここにおいては搔器として分類した。

13は15地点の84-114グリッドで出土したもので、右側縁部が欠損している。形状は三角形に近いもので、刃部は直線的で刃こぼれ状になっている。長さ7.5cm、幅7.7cm、厚さ2.8cm、重さ168.30gで、石材はホルンフェルスである。14は15地点の80-113グリッドから出土したものである。母岩から切り取った人形の剥片の一边を、そのまま刃部として使用しており、表面に大きく自然面を残す。基部には調整を加え、抉りを作り出して形を整えている。やや風化が進んでいる。刃部は外湾するもので、平面の形状はいわゆる石匙とされるものである。長さ13.9cm、幅11.5cm、厚さ1.9cm、重さ267.54gで、石材はホルンフェルスである。15は15地点114-83グリッドから出土したものである。欠損のため形は明確ではないが、横長のものと考えられる。刃部はやや外湾するもので、刃部の調整は表面側からのみ行い、表面には大きく自然面が残るものである。長さ5.6cm、幅9.2cm、厚さ2.8cmで、重さ137.19gである。石材はホルンフェルスである。全体的にやや風化が進んでいる。16は15地点の80-113グリッドから出土したもので、横長の剥片を利用している。刃部は直線的で、調整剝離などは行われておらず、剥片の一边をそのまま利用している。背に当たる部分はおぼろげな面を作り出して、使用している。長さ7.2cm、幅10.1cm、厚さ3.1cm、重さ173.58gである。石材はホルンフェルスである。17は15地点の80-113グリッドから出土したものである。右半分を欠損しているが、横長の剥片を利用しているものである。一次剝離後は、剝離側からのみ剝離、調整を行い、裏面にはそのまま自然

面が残されている。刃部は残存部分から、やや外湾するものと考えられる。長さ6.6cm、幅7.1cm、厚さ1.7cm、重さ80gで、石材はホルンフェルスで、全体的に風化が観察される。18は14地点の108-98グリッドから出土したもので、右側を欠損している。一次剝離によって母岩から比較的薄く切り離された、剥片の形をそのまま利用し、調整は刃部の作り出しにのみ行っている。調整剝離はすべて一次剝離側側から行っており、裏面にはそのまま自然面が残っている。表裏面ともに擦れた痕跡があり、磨きの作業の工程の途中であった可能性もある。長さ8.5cm、幅5.8cm、厚さ0.7cm、重さ68.84gである。石材は砂岩である。

#### 磨石 (第16図19・20、第17図22)

磨石については、ひとつの石器で磨石の機能と敲石の機能をもつ石器が多く、厳密に区別することは困難である。北島遺跡出土のものも同様であることから、ここでは一括して磨石として分類することとした。

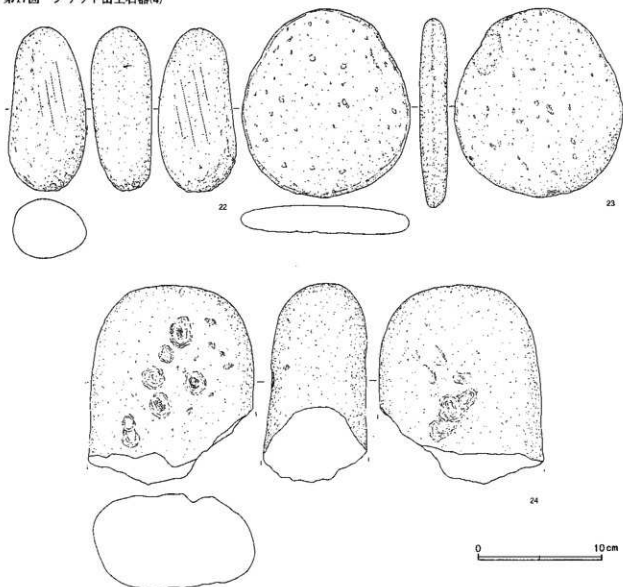
19は14地点の108-96グリッドから出土したもので、小形の偏平な磨石である。磨面は表裏面の二面と考えられるが、方向など痕跡は明確ではない。周縁は敲打痕が残る。長さ7.1cm、幅4.9cm、厚さ1.3cm、重さ64.14gである。石材は硬砂岩である。20は15地点110-82グリッドから出土したもので、長さ9.2cm、幅4.9cm、厚さ1.5cm、重さ98.57gである。石材は砂岩である。19と同様に薄手の偏平なもので、磨面は表裏面の二面である。周縁には敲打痕が認められた。22は14地点の108-87グリッドから出土したものである。偏平であった19、20とは異なり、棒状のものである。磨面は表裏面と左側面の3面を使用している。また上下の端部には敲打痕があり、下部は詩符に顕著に見られた。敲石として主に使われていたと考えられる。

#### 石皿 (第16図21、第17図23)

置いた状態で使用されたものと考えられる比較的大形のもの、石皿として分類した。

21は15地点の第16号溝から出土したもので、半分を

第17図 グリッド出土石器(4)



欠損するものである。長さ7.3cm、幅10.8cm、厚さ2.2cm、重さ274.79gで、石材は硬砂岩である。23は14地点の108-98グリッドから出土したものである。表裏面の2面を磨面として使用している。長さ15.0cm、幅13.5cm、厚さ2.2cm、重さ634.81gである。石材は安山岩である。

凹石 (第17図24)

24は15地点の第114ビットから出土したもので、長さ15.8cm、幅13.0cm、厚さ8.3cm、重さ2182.25gで、石材は砂岩である。側面には磨面が残る。

## 2. 第14地点

### 概要

今回調査を行った3地点のなかで、第14地点は最も面積の大きい調査地点である。そしてこれは第1～16地点全体を通していえる事柄である（第5図）。

今回の調査を便宜上第4次調査と呼称するが、第4次調査の調査地点は、これまでの調査地点全体からみれば、第11地点（第2次調査）とともに最も南東に位置することになる。

第14地点と第15地点のすぐ南は現：新星川であり、両地点とも河川敷に面した位置にあたる。

なお、今回の調査区内である上之調節池の建設用地は、この新星川を挟んだ南側にまで及んでいる。

この調節池建設用地内の新星川兩岸において、河川に直行するかたちで15～20mおきにトレンチを設定し、遺構の有無の確認調査が行われた。その結果、いずれのトレンチにおいても、客土や耕作上の直下は粘土層または砂礫層であり、遺構は検出されなかった。

第4次調査地点は、東西に展開する自然堤防上に立

地し、その南端部に位置するといえよう。そして第14地点は、第15地点とともに北島遺跡全体の中においても南端部に相当する表現できよう。

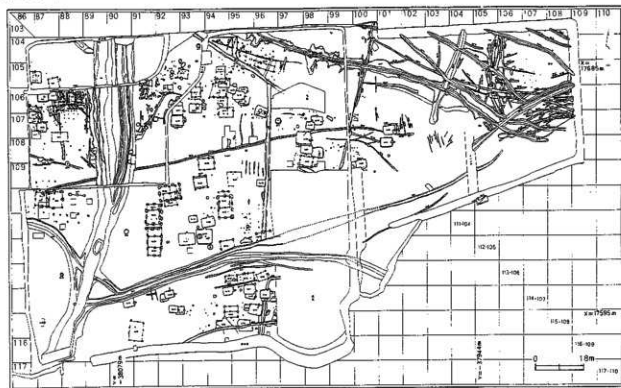
第16地点南西端付近を谷頭とする谷地形が、現在集落の広がっている方向に向かって、北西から南東に広がっている。そのためこの周辺では、谷地形に向かう溝跡が多数みられる。

この谷を埋めている黒褐色土（基本土層のV層・第19段）の直上に、部分的ではあるがFA分布している。このことからFA降下時にも浅い谷地形であり、湿地状を呈していたと推定される。またこの湿地状の範囲内ではほとんど遺構は検出されず、遺物も他の箇所と比較してきわめて少なかった。

概ねこの地点は東半分が浅い谷地形であり、西半分は平坦面であるといえる。

第14地点で検出された遺構は、8世紀後半から12世紀に亘る。この中で、住居跡は主として8世紀後半から9世紀代を中心とするのに対し、溝の大部分は9世

第18図 第14地点全体図



紀後半から10世紀、もしくはそれ以降にまで及び、住居跡を切り込んでいる例が多い。

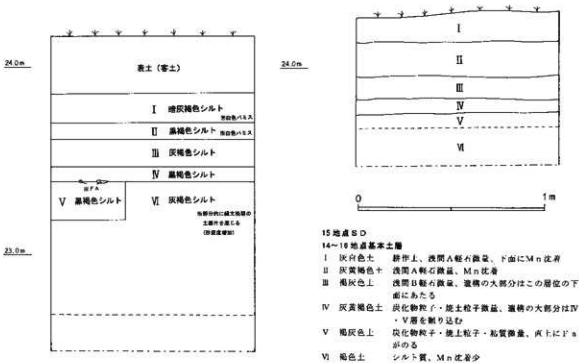
検出された遺構は、弥生時代中期の再葬墓1基・土壇6、弥生時代中期と思われる住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡1軒を始め、奈良～平安時代の住居跡72軒、掘立柱建物跡43棟、欄列跡6基、井戸跡15基、溝跡102条、土壇78基、ピット358基である。

本地点の特徴の1つに、弥生時代中期の再葬墓と土壇群の問題がある。これらの問題についての資料はきわめて少なく、今回の調査で新たな知見が加わったといえる。この成果に関しては本報告書中の「結論1・2」を参照願いたい。

奈良・平安時代については、コ字形に配された掘立柱建物群と、その内側に設けられた住居群というセット関係をもつ例が存在した。また、既期の住居跡から出土した線刻をもつ石製紡錘車は、類例の少ない花弁を意匠としており注目される。

これらの他に、第1号溝で検出された土師質土器の坏の集中出土も、本地点の特徴の1つとして挙げられる。このタイプの土器は、他の遺構でも確認されているものであるが、他の遺跡における類例を探し出すことはできなかった。類例の蓄積が待たれる資料といえる。また、その出土の仕方とも一特性があり興味深い。

第19図 基本土層



- 注1 V層は、浅い谷状地形の土で、全面に存在するわけではない。V層上面には、ブロック状にF Aがのっている。平安の遺構は、この層の上面で確認できる。(V層のないところはV層七層)
- 注2 VI層は、深さを増すごとに砂質となる。平面的には、調査区南側にゆくに促って砂質の度を増し南端部付近では、同じ標高でも、ほぼ完全な細砂層となる。後期の遺物を含む(まげらに)のは、北平のシルト質の配分である。
- 注3 弥生中期の遺構は、VI層上面で確認できるはずであるが、極めて見つけにくい。

## (1) 住居跡

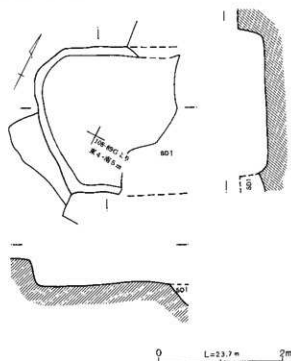
第14地点において検出された住居跡は72軒である。この他にも、住居跡の痕跡の可能性が考えられる例が1～2存在した。

しかしこれらは、住居跡の掘り方が部分的に遺存するものであったり、壁面のごく一部分が断片的に遺存していると推定されるものであって、住居跡と確定するには至らなかった。そのため、これらの痕跡については残念ながら住居跡としてここに掲載することを差し控えることにした。

## 第1号住居跡 (第20図)

108-89グリッドに位置する。SD 4に遺構の大部分を切られており、北壁と西壁の一部と隅丸を呈する北西コーナーが遺存していたにとどまる。調査し得た範囲は南北方向が2.32m・東西方向2.24mであり、深さは0.43mであった。主軸方向はN-28°-Wを指すと思われる。

第20図 第1号住居跡



砂粒を主体とする地山を床面としており、比較的平坦である。柱穴・周壁溝・炉および貯蔵穴などは検出されなかった。

覆土の様相から、弥生時代中期の住居跡と推定される。

## 第2号住居跡 (第21図)

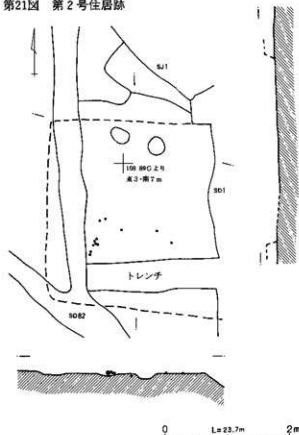
108-89グリッドに位置する。SD 1・82と2基のピットに切られる。

遺構の遺存度はきわめて悪く、部分的に床面が残っていたのみであり、壁面の立ち上がりは検出されなかった。プランは方形を呈すると思われる。調査し得た範囲は南北3.06m・東西2.76m・深さは0.6mである。主軸方向はN-1°-Eと推定される。

砂粒を主体とする地山を床面としている。

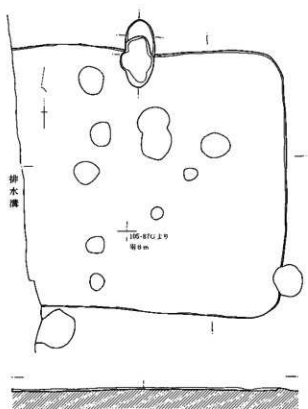
古墳時代前期 (五領式期) の土器片が出土したが、図化し得た遺物はなかった。

第21図 第2号住居跡





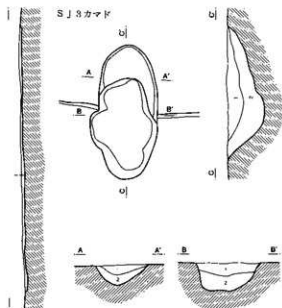
第22図 第3号住居跡



第3号住居跡土層

- 1 灰褐色土 地山灰褐色粘土を主体とする層、炭化物  
 粒子(φ0.1~0.3cm)・焼土粒子(φ  
 0.2~1cm)若干

0 L=23.7m 2m



第3号カマド

- 1 灰褐色土 炭化物粒子・焼土粒子若干、  
 しまりや中砂・粘性やや弱  
 2 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少、  
 石灰粒子微量、しまり・粘性  
 やや弱

0 L=23.6m 1m

第3号住居跡 (第22・23図)

西側を排水溝に切られており、検出できた東西規模は4.27m、主軸方向の規模は4.21m、深さは0.1mである。主軸方向はN-1°-Eである。

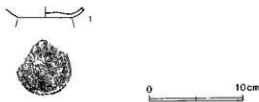
カマド1基が検出されており、長さ1.06m・幅0.47m・深さ0.22mを測る。カマド内はあまり焼けておらず、焼土や炭化物も少量であった。

遺存状況はきわめて悪く、部分的には遺構確認面で床面が検出された。住居跡内に11基のピットが検出さ

れているが、いずれも住居跡を切っている。

出土遺物は土師器環と須恵器環の破片が検出され、共に墨痕が認められたが判読できなかった。

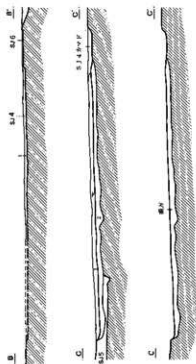
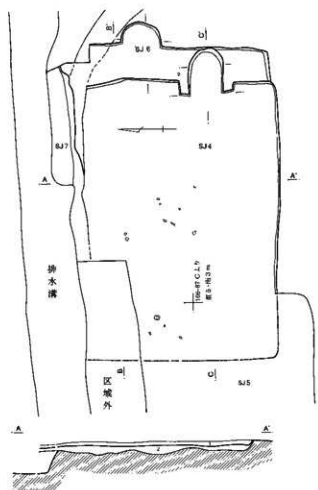
第23図 第3号住居跡出土遺物



第2表 第3号住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	—	1.2	5.8	CEH	青焼	灰褐色	底85	A 底部に墨書 文字不明

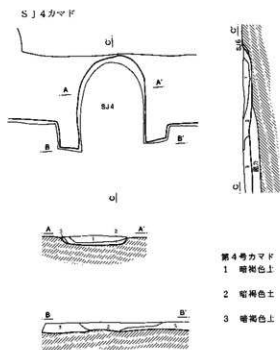
第24図 第4・6・7号住居跡



第4・6・7号住居跡土層

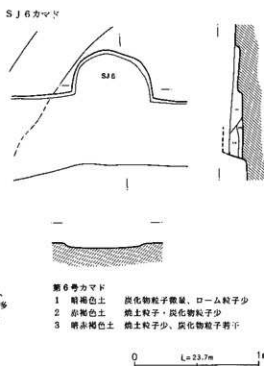
- 1 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多
- 2 暗褐色土 焼土粒子やや少、炭化物粒子やや多

0 L=23.5m 2m



第4号カマド

- 1 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多
- 2 暗褐色土 焼土粒子やや少、炭化物粒子やや多
- 3 暗褐色土 焼土粒子、炭化物粒子



第6号カマド

- 1 暗褐色土 炭化物粒子微量、ローム粒子少
- 2 赤褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少
- 3 暗赤褐色土 焼土粒子少、炭化物粒子若干

0 L=23.7m 1m

第4号住居跡 (第24・25図)

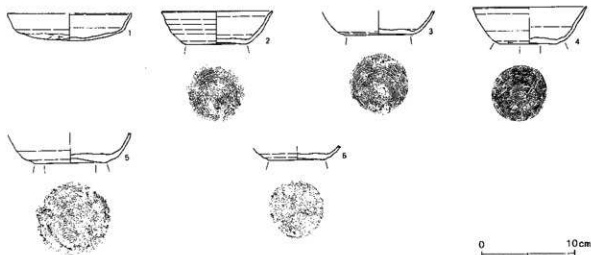
106-87グリッドに位置する。S J 4・6を切る。住居北側部分を排水溝によって切られる。S J 7・SD 79との新旧関係は不明である。プランは長方形を呈すると思われる。規模については、東西方向は4.44mであるが南北方向は3.06mまでしか検出できなかった。

深さは8cmである。

カマドが東壁中央より南寄りに1基検出された。全長0.84m・焚口幅0.84mを測る。2層は焚口へ煙出しに相当すると思われる。住居跡は灰褐色土を充填して床面を構築している。

図化した遺物は、計6点であった。

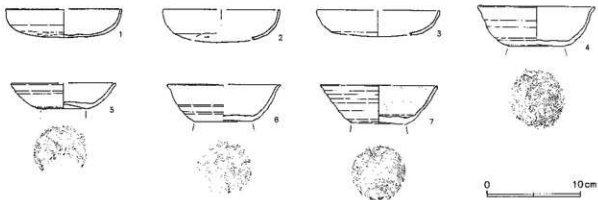
第25図 第4号住居跡出土遺物



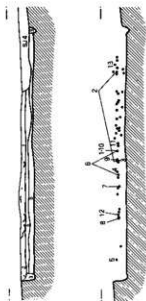
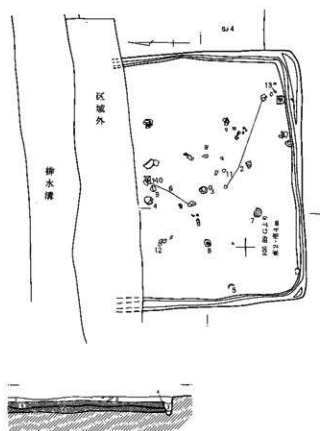
第3表 第4号住居跡出土遺物観察表(第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土俵器環	(13.2)	2.9	—	ACEFH	普通	明褐色	D25	器面風化 口:内外面とも横ナデ 体(外):荒削り (内):ナデか
2	須恵器環	11.8	3.6	6.5	ABH	普通	灰褐色	底100	口クロ成彩 C 貼床内
3	須恵器環	—	2.6	6.7	BEH	良	灰褐色	底100	口クロ成彩 C 貼床内
4	須恵器環	12.1	3.9	6.0	EH	良	灰褐色	口65	口クロ成彩 B a 貼床内
5	須恵器碗	—	3.2	7.7	EH	普通	灰褐色	底100	口クロ成彩 R B b 貼床内
6	須恵器環	—	1.5	6.1	BEII	良	青灰色	底100	口クロ成彩 RC

第26図 第5号住居跡出土遺物(1)



第27図 第5号住居跡

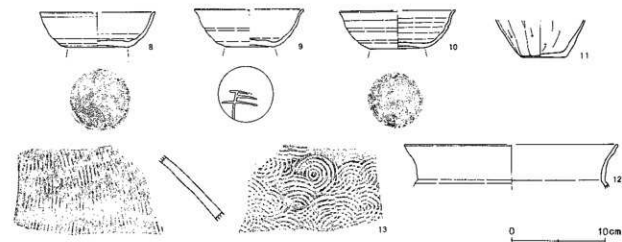


第5号住居跡土層

- 1 黒褐色土 炭化物粒子・灰・焼土粒子多、2次的  
収束遺物多
- 2 暗褐色土 焼土粒子・ロームブロック多
- 3 灰褐色粘質土 焼土粒子少(壁障型土)
- 4 明褐色粘質土 灰化粘質土、焼土粒子少(普通層土)
- 5 明褐色粘質土 ロームブロック・炭化物粒子・焼土粒子少、  
(人工的埋土、土層に陥没あり)
- 6 灰褐色粘質土 ロームブロック多、焼土粒子・炭化物粒子少、  
(上面に陥没あり)

0 L=23.8m 2m

第28図 第5号住居跡出土遺物(2)



第4表 第5号住居跡出土遺物観察表(第26・28図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.4)	3.0	—	AEH	普通	明褐色	口45	器面風化 口:内外面とも横ナデ 体(外):露削り(内):ナデか
2	土師器環	(12.2)	3.5	—	CEH	普通	暗褐色	口30	器面風化 口:内外面とも横ナデ 体(外):露削り(内):ナデか
3	土師器環	(13.1)	(2.8)	—	EH	普通	暗褐色	口25	器面風化 口:内外面とも横ナデ 体(外):露削り(内):ナデか
4	須恵器環	12.6	4.2	6.0	AEH	普通	灰白色	底100	口クロ成形 RC

5	須恵器環	(11.2)	2.7	5.9	BEH	普通	灰褐色	底65	ロクロ成形 RC
6	須恵器環	(12.0)	3.9	6.1	AEH	不良	灰褐色	底100	ロクロ成形 RC
7	須恵器環	12.4	4.1	5.8	BEGH	良	灰褐色	底100	ロクロ成形 C 内色に自然釉
8	須恵器環	(12.3)	3.7	6.4	BEH	良	青灰色	底100	ロクロ成形 C
9	須恵器環	(11.8)	4.0	(5.4)	BEH	普通	灰褐色	底45	ロクロ成形 C 外面:スス付着
10	須恵器環	12.4	4.0	6.0	EH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 RC
11	土師器甕	—	4.0	4.1	ACEH	普通	明褐色	底95	外面:スス付着 (外):甕割り(内):寛ナデ
12	土師器甕	(22.8)	4.7	—	ACEFH	普通	暗茶褐色	口30	内外面:スス付着 口:内外面とも横ナデ 胴(外):甕割り(外):平行叩き目文(内):青海波文 貼床面
13	須恵器甕	—	—	—	ABEGH	良	緑灰色	—	—

### 第5号住居跡 (第26~28図)

106-87グリッドに位置する。S J 4に切られる。住居跡北側は、調査区外に続く。規模は、東西方向は4.02mであるが、南北方向については3.04mまで調査できたにとどまる。このため、プランは方形か長方形であるかは不明である。カマドは検出されていない。もし北カマドが存在するとすれば、主軸方向はN-0°となる。

幅8~20cm・深さ10~20cmの周溝が巡る。床面は3枚検出された。1次床面は最下面で、この上面にロームブロックを含む灰褐色土(9層)を厚さ5~15cmほど充填して2次床面を造り、さらにこの上面に明褐色砂質土(8層)を5~20cmほど充填して3次床面を構築しているのが観察された。1・3次床面は比較的平

坦であるが、2次床面はやや凹凸がある。

図化し得たのは土師器8、須恵器5の計13点である。

### 第6号住居跡 (第24・29図)

106-87グリッドに位置する。S J 4に切られるが、SD 7との新旧関係は不明である。北側については排水溝に切れ、さらにその北側は調査区外である。住居跡の規模は南北3.35m・東西0.5mまで確認できたにとどまる。深さは8cmである。N-90°-Eを指す。

床面はプラン確認の段階で、大部分が失われていた。カマド1基が、東壁に検出されている。全長0.68m・幅0.64mを測る。カマドの覆土は、焼土粒子と炭化物粒子が若干含まれている程度であり、内部の焼け方は弱い。

図化し得た遺物は少なく、計3点であった。

### 第29図 第6号住居跡出土遺物



第5表 第6号住居跡出土遺物観察表(第29図)

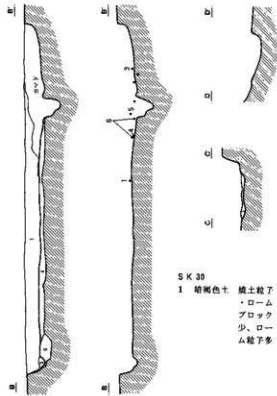
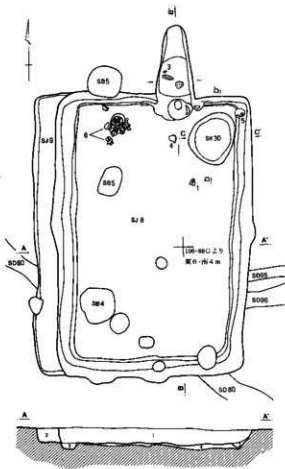
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.6)	(2.9)	—	AEH	普通	茶褐色	口15	器面風化 口:内外面とも横ナデ 体(外):甕割り(内):ナデか
2	土師器甕	—	2.2	(4.6)	AEFH	普通	黒褐色	底35	外面スス付着 (外):甕割り(内):寛ナデ

3:棒状鉄製品。用途は不明である。錆化著しく、原形を大きく失っている。両端部を欠損しており、長さは不明。現存長4.6cm。断面形は0.5×0.5cmの方形を呈する。

### 第7号住居跡 (第24図)

106-87グリッドに位置する。S J 4・6と重複しているが、新旧関係については不明である。排水溝によって遺構の大部分を失っており、南壁の一部が遺存しているのみである。壁面の立ち上がりは37cmである。なお、SB 1検出時には本住居跡は確認されていない。

第30図 第8・9号住居跡



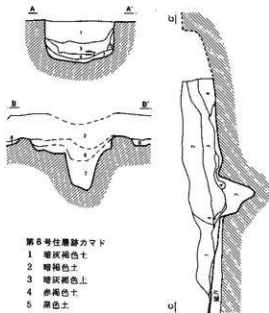
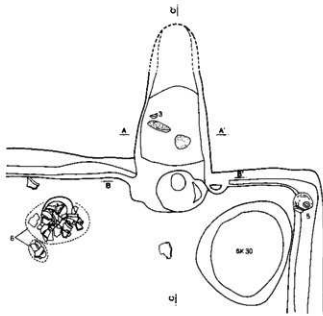
SK 30  
I 黄褐色土 粘土粒子  
・ローム  
ブロック  
少、ロー  
ム粒子多

第8・9号住居跡土層

- 1 暗褐色土 灰褐色土・黄褐色土ブロック・ロームブロック多
- 2 黒褐色土 灰褐色粘土をブロック状に少(SJ9覆土)
- 3 暗褐色土 粘土粒子・カーボン多、黄褐色土若干
- 4 黄褐色土 灰褐色土ブロック・焼土粒子・カーボン多(随方)
- 5 黄褐色土 灰褐色土ブロック・黄褐色土の層台土(随方)

0 L=23.8m 2m

SJ8カマド



第8号住居跡カマド

- 1 暗灰褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 赤褐色土
- 5 黒色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗灰褐色土

0 L=23.7m 1m

土師器環の小破片が出上しているが、図化するには至らなかった。

#### 第8号住居跡 (第30・31図)

SJ 9、SD80・96を切り、SB4も切っていると思われる。確定はできないがSD95・96には切られているかも知れない。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは4.56×3.25×0.27mである。主軸方向はN-1°Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より東寄りに設けられている。全長1.48m・焚口幅0.6mを測る。7層は焚口部・燃焼部、4層は煙道部、2層は天井崩落土に相当すると思われる。僅かに残る袖の

下面にまで炭化物が及んでおり、袖部の造り替えてであろうか。燃焼部・煙道部の側面は、両面とも非常によく焼けている。住居掘り方内に、灰色粘土ブロックを含む黄褐色土を充填して構築されている床面は比較的平坦である。カマド脇の土壌は床面では確認できなかったもので、床下土壌の可能性が考えられる。

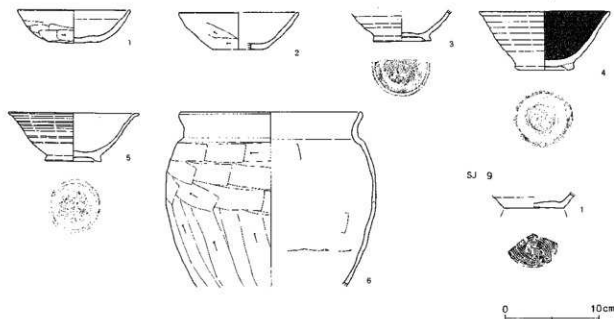
図化し得た遺物は、計6点であった。

#### 第9号住居跡 (第30・31図)

106-96グリッドに位置する。SD80を切っていると思われる。規模は南北4.43m、東西は不明、深さは0.27mである。主軸方向はN-1°Eを指す。遺物の出土は少なく、図化し得た遺物は、1点のみであった。

#### 第31図 第8・9号住居跡出土遺物

SJ 8



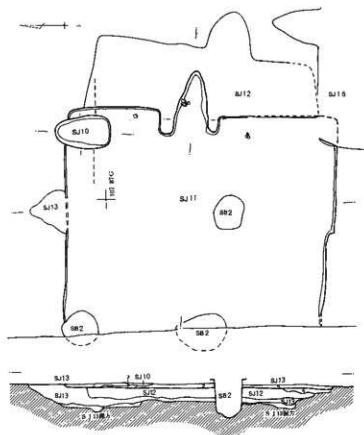
第6表 第8号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師質環	12.0	3.5	5.4	ADE	不良	白橙色	口85	器面風化 口:内外面とも横ナデ 体・底(外):蹴割りか
2	土師質環	(12.8)	3.9	(5.7)	AEH	普通	白橙色	口30	器面風化 内外面ともナデか カマド
3	須恵高台環	—	3.2	6.2	ABEH	普通	灰褐色	台50	ロクロ成形 底:糸切り離し後 高台貼付け カマド
4	須恵高台環	(13.9)	6.2	6.2	ACE	不良	暗橙褐色	台95	ロクロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付け
5	土師高台環	14.0	5.1	5.9	CEH	不良	橙褐色	台100	ロクロ成形 器面風化著 C 後貼付け高台 2 次的に火を受ける
6	土師器壁	19.3	18.5	—	AEF	普通	橙褐色	口90	口:内外面とも横ナデ 胴(外):蹴割り(内):籠ナデ

第7表 第9号住居跡出土遺物観察表(第31図)

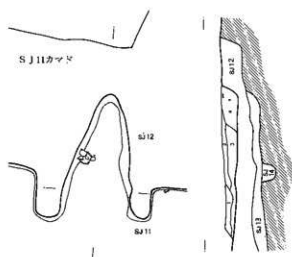
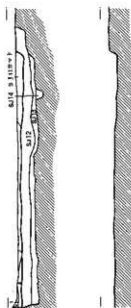
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	—	1.7	(6.4)	EII	普通	橙褐色	底25	ロクロ成形 C

## 第32回 第10・11号住居跡

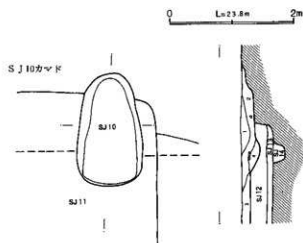


第11号住居跡土層

- 1 暗褐色土 炭化物粒子少、ローム粒子多
  - 2 暗褐色土 灰褐色粘土・炭化物粒子・焼土粒子(φ0.8cm)少
  - 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.2cm)粘土少
  - 4 暗褐色土 炭化物粒子・焼土ブロック多
  - 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土・炭化物粒子少
  - 6 灰褐色土 ロームブロック・灰色粘土ブロック少
- SJ11 紐方



SJ11カマド



SJ10カマド

第11号住居跡カマド

- 1 暗灰褐色土 炭化物粒子・焼土粒子多
- 2 暗灰褐色土 炭化物粒子・焼土ブロック少
- 3 黒色土 炭化物粒子・焼土ブロック多
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子少

第10号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 灰土ブロック・灰・炭化物粒子多(天井部編み土)
- 2 黒褐色土 灰・炭化物粒子多
- 3 褐色土 ローム粒子・焼土粒子含、SJ11埋土
- 4 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子含(紐方)



### 第10号住居跡 (第32図)

106・107-86・87グリッドに位置する。北カマド1基のみが遺存していた。S J 11-14を切る。S B 2との新旧関係については不明である。

遺存していた範囲内の規模は、全長1.0m・幅0.52mを測る。カマドの主軸方向はN-1°-Eを指す。

4層はカマド掘り方、2層は燃焼部・煙道部、1層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部は浅く楕円状に窪み、緩やかに立ち上がりながら煙道部へ続く。カマドの焼け方は弱い。

土師器・須恵器の小破片が少量出土しているが、凶化し得る遺物はなかった。

### 第11号住居跡 (第32・33図)

106・107-86・87グリッドに位置する。S J 12-14を切り、S J 10・S B 2に切られる。また住居跡西端部は調査範囲外に続く。プランについては、西端部を欠くため方形か長方形であるかは不明である。

南北方向は4.35mであるが、東西方向は3.58mまでしか確認できなかった。深さは8cmである。主軸方向はN-1°-Eである。

カマド1基が発出されている。カマドは東壁中央よ

第8表 第11号住居跡出土遺物観察表(第33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	(11.9)	3.2	5.0	AEH	普通	黒灰色	底100	ロクロ成形 RC 確認面

### 第12号住居跡 (第34・35図)

106・107-86・87グリッドに位置する。プランはやや歪んだ長方形を呈する。S J 13・14を切り、S J 10・11・15およびS B 2に切られる。また、本住居跡の西端部は調査範囲外に続いている。

南北方向は3.78mであるが、主軸方向は4.65mまでしか調査できなかった。深さは0.2mである。主軸方向はN-90°-Eである。

カマド1基が発出されている。カマドは東壁中央よりやや南寄りに構築されており、全長0.98m・幅0.74mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部をS B 2によって切られている。

3層は燃焼部、2層は煙道部から煙出し部に相当す

りやや北寄りに設けられている。全長1.22m・焚口幅0.63mを測る。

袖部を遺存する。袖部は地山の掘り残し部分に粘土を貼り付けたものであろうか。3層は焚口部・燃焼部、4層は煙出し部、2層は天井崩落土に相当すると思われる。底面カマドの焼け方は弱い。焚口部底面が僅かに窪む程度で、燃焼部・煙道部はおおむね平坦面である。煙出しの部分は比較的急勾配で立ち上がる。

カマドの南側床面には、焼上粒子を混入する炭化物層が分布していた。

本住居跡は、S J 12の2次床面をロームブロックと、ローム粒子を混入する褐色土で埋め戻して床面として

いる。床面は比較的平坦である。遺物の出土はきわめて少なく、凶化し得たのは須恵器環1点のみであった。

第33図 第11号住居跡出土遺物



ると思われる。

煙道部→煙出し部は20°程の勾配で立ち上がる。カマド内部の焼け方は弱い。

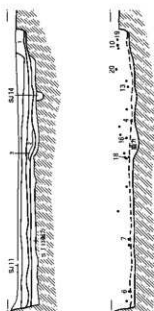
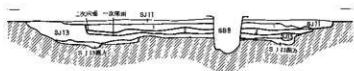
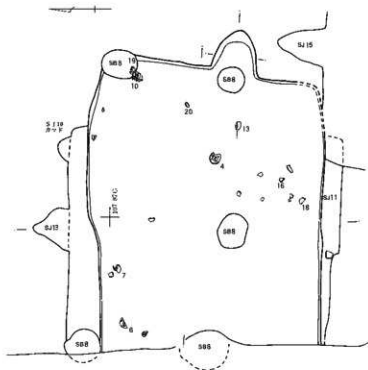
本住居跡は床面が2枚検出された。

1次床面は、S J 13床面の上面にロームブロックと灰色粘土ブロックからなる灰褐色土を充填している。

2次床面は、ロームブロック・灰色粘土ブロック・炭化物・焼上粒子からなる暗灰色土を充填して床面を構築している。1次床面はおおむね平坦であり、部分的に貼り床面を補修していると考えられる箇所(3層)が観察された。

凶化し得た遺物は、土師器環1・甕2、須恵器蓋4・環12、その他1の、計20点であった。

第34図 第12号住居跡

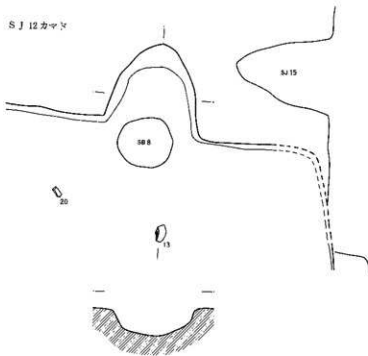


第12号住居跡土層

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒下の混合土、埋め戻しか
- 2 暗褐色土 灰色粘土ブロック・ローム粒下、ロームブロックの混合土
- 3 黄褐色土 ロームブロック主体、筋床

0 L=23.8m 2m

S J 12 カマド

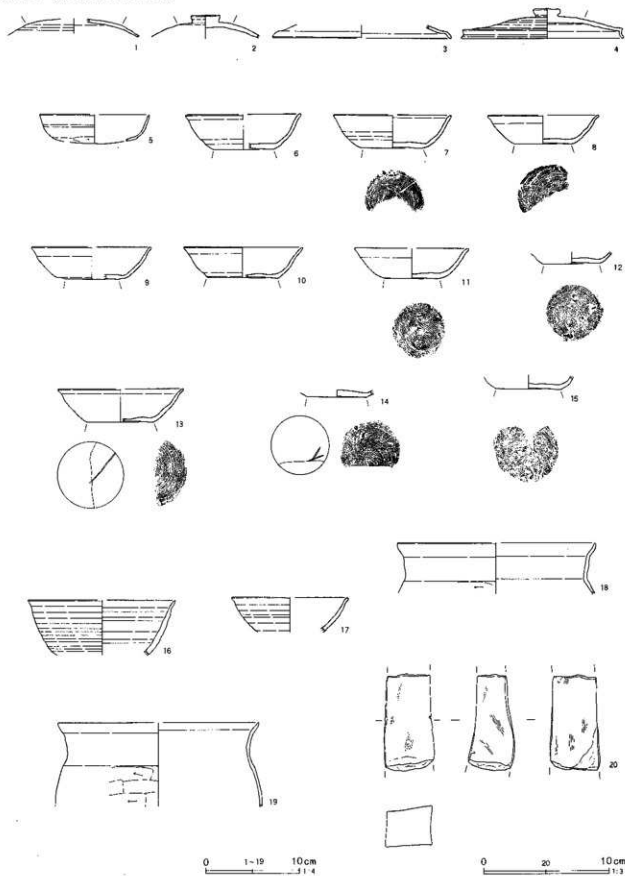


第12号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒下少
- 2 暗褐色土 灰・炭化物粒下・粘土粒下少
- 3 黄褐色土 焼土粒下少

0 L=23.8m 1m

第35图 第12号住居跡出土遺物



第9表 第12号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	—	—	—	CEH	不良	灰白色	—	クロ成彩 入井部: 施削り(R) 胎床内
2	須恵器蓋	—	2.4	—	CEH	不良	灰白色	—	クロ成彩 天井部: 施削り(R) 後 つまみ貼付 周辺ナテ
3	須恵器蓋	(19.1)	1.4	—	EII	普通	灰褐色	口15	クロ成彩
4	須恵器蓋	17.2	3.2	2.9	CEH	普通	灰白色	100	クロ成彩 天井部: 施削り後 つまみ貼付 周辺ナテ 墨書有
5	土師器環	(11.8)	2.9	—	AEF	普通	明褐色	口45	口(上): 内外面横ナテ 口(下): ナテ 体(外): 施削り 胎床内
6	須恵器環	(12.1)	3.7	(6.5)	EH	良	灰褐色	口50	クロ成彩 C
7	須恵器環	(12.5)	3.5	6.3	DEH	普通	灰褐色	底55	クロ成彩 R C
8	須恵器環	(11.8)	3.0	6.0	DEH	普通	灰褐色	底50	クロ成彩 R C 胎床内 破溝
9	須恵器環	(12.7)	3.4	(5.7)	EH	普通	灰褐色	口25	クロ成彩 C 胎床内
10	須恵器環	12.7	3.2	7.6	DEH	不良	灰褐色	底80	クロ成彩 C 周辺施削りか
11	須恵器環	(12.0)	3.2	5.9	EH	不良	暗灰褐色	底95	クロ成彩 R C 胎床内
12	須恵器環	—	1.3	6.0	CEH	普通	暗灰褐色	底100	クロ成彩 R C 掘方内
13	須恵器環	(13.3)	3.5	(7.0)	DEH	普通	灰褐色	底40	クロ成彩 C 施削り有
14	須恵器環	—	0.8	6.3	EH	普通	灰褐色	底80	クロ成彩 C 施削り有「メ」
15	須恵器環	—	1.5	(6.8)	AEH	不良	黒灰色	底70	クロ成彩 R C 胎床内
16	須恵器環	(15.7)	5.8	—	EII	良	灰白色	口30	クロ成彩
17	須恵器環	(12.3)	3.7	—	DEH	普通	灰褐/茶褐	口25	クロ成彩 胎床内
18	土師器蓋	(21.1)	5.4	—	ADEFH	普通	茶褐色	口15	器面風化 口: 内外面横ナテ 胴(外): 施削りか(内): 施ナテか
19	土師器蓋	(21.5)	8.9	—	ACEH	普通	茶褐色	口25	口: 内外面とも横ナテ 胴(外): 施削り (内): 施ナテか

20: 砥石(淡緑色の凝灰岩製)。全面にスス付着。両端部を欠損。砥石の4面ともに使用しており、細かな条線がみられるが、表面は比較的滑らか。現存長7.2cm・幅4.0cm・厚さ3.3cm。

#### 第13号住居跡(第36・37図)

106・107・86・87グリッドに位置する。S J 14を切り、S J 10-12・S B 2に切られる。住居跡西端部は調査区外に続く。プランは歪んだ長方形を呈すると考えられる。規模は、南北方向3.87mであるが、東西方向は4.06mまで検出できたとどまる。深さは0.34mである。主軸方向はN-90°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より東寄りに設けられている。全長1.05m・幅0.78mを測る。

3・4層は焚口部・燃焼部、2層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部は凹凸が多いが平坦面に近く、煙道は30度程度の勾配で煙出しの部分へと続く。内面の焼け方は弱い。

住居跡のプランは歪んでおり、特に東壁で顕著である。また、北壁もカマドを境にして壁面が食い違っている。掘り方に、焼土粒子を混入する砂質の褐色土を充填して、床面を構築している。

出土した遺物は少なく、図化し得たのは土師器蓋2、須恵器蓋1・環2の、計5点であった。

#### 第14号住居跡(第36・37図)

106・107・86・87グリッドに位置する。S J 10-13・S B 2に切られる。住居西端部は調査区外に続く。プランは長方形を呈する。規模は南北方向は3.38mであるが、東西方向は3.57mまで調査できたとどまる。深さは主軸方向はN-1°-Wである。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より南寄りに設けられている。全長1.37m・幅0.47mを測る。

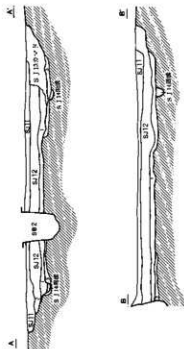
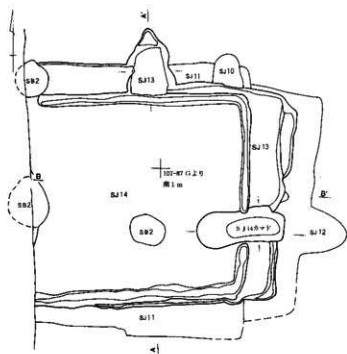
7層は焚口部・燃焼部、6層は煙道部・煙出し部に相当すると思われる。燃焼部は浅く窪むが比較的凹凸が多い。内部の焼け方は弱い。

このカマドの北約1mの位置に、東西約1m・南北約0.7mの土塊状のプランが検出された。覆土は灰褐色粘土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗灰色土であり、検出状況からみてこのカマドを埋め戻した可能性が考えられる。

幅10-20・深さ10cm程の周壁溝が巡る。

図化し得た遺物は土師器環2、須恵器1の計3点である。

第36図 第13・14号住居跡

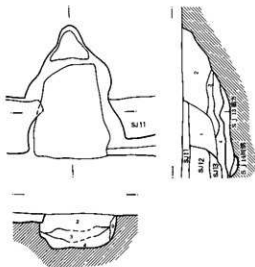


第13-14号住居跡土層

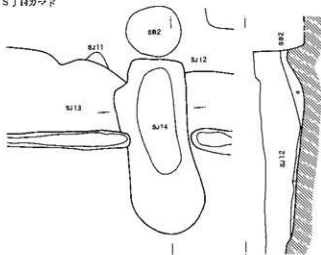
- 1 灰褐色土 ロームブロック・灰色粘土ブロック下
- 2 褐色土 砂質土、焼土粒不多
- 3 灰褐色土 ロームブロック・粘土ブロック多

0 L=23.8m 2m

S J13カマド

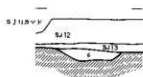


S J14カマド



第13-14号住居跡カマド

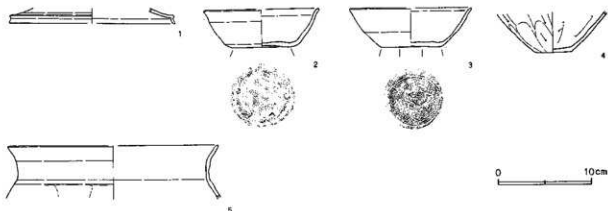
- 1 灰褐色土 焼土粒子若干
- 2 灰褐色土 焼土粒子多、天井部陥落土
- 3 暗褐色土 灰層、焼土粒子少、灰・炭化物粒子少
- 4 黒色土 灰層、灰・炭化物粒子多
- 5 赤褐色土 被熱により赤色化、硬化した粘土層
- 6 明赤褐色土 焼土粒多、炭化物粒子若干、しまり強・粘性やや弱
- 7 黒色土 灰層



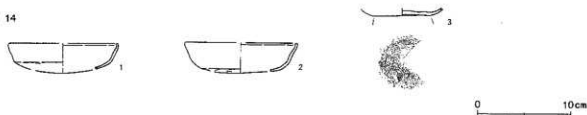
0 L=23.7m 1m

## 第37図 第13・14号住居跡出土遺物

SJ 13



SJ 14



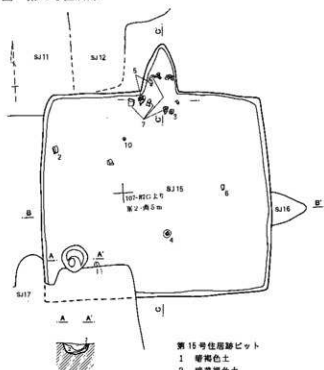
第10表 第13号住居跡出土遺物観察表(第37図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	17.7	1.7	—	EH	普通	灰褐色	口25	ロクロ成形
2	須恵器環	(12.3)	4.0	6.0	BEII	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 RC
3	須恵器環	(13.0)	4.2	6.4	BEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 Bb 壁溝
4	上野器鉢	—	4.3	4.1	ACH	普通	茶褐色	底75	外: 甍削り 内: 甍ナテ
5	土師器甕	(22.2)	5.7	—	ACEFH	普通	茶褐色	口15	口: 内外面横ナテ 胴(外): 甍削り (内): 甍ナテか

第11表 第14号住居跡出土遺物観察表(第37図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	上野器環	(11.7)	(3.2)	—	AEH	普通	茶褐色	口15	器面風化 口: 内外面横ナテ 体(内・外): ナテか・甍削り 壁溝
2	土師器環	(12.0)	(3.2)	—	AEH	普通	茶褐色	口15	口: 内外面とも横ナテ 体(内・外): ナテ・甍削り
3	須恵器環	—	0.8	6.0	BEH	普通	灰褐色	底70	ロクロ成形 RC

第38図 第15号住居跡

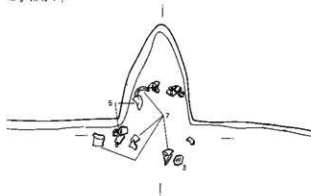


第15号住居跡ピット

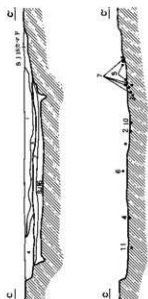
- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 暗褐色土



S J 15 カマド



1C



第15号住居跡土層

- 1 暗褐色土 褐色砂質土多、炭化物粒子少
- 2 褐色土 炭化物粒子少
- 3 黒色土 炭化物粒子体層、焼土ブロック・焼土粒子少
- 4 褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少、黄褐色粘質土多
- 5 暗褐色土 炭化物・ロームブロック多
- 6 黒色土 炭化物層
- 7 暗褐色土 2次床面粘床

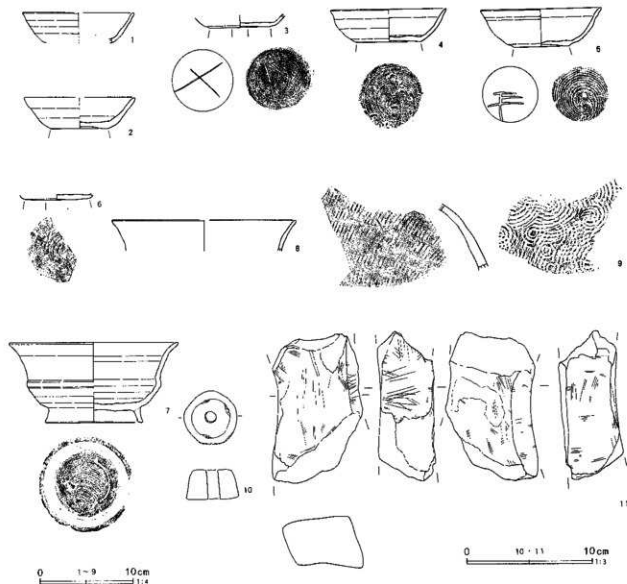
0 L=23.8m 2m

第15号住居跡カマド

- 1 褐色土 焼土ブロック多(式井部崩壊)
- 2 暗褐色土 焼土少、ローム粒子少(混入土少)
- 3 黒色土 灰・炭化物多、焼土少

0 L=23.8m 1m

第39図 第15号住居跡出土遺物



## 第15号住居跡 (第38・39図)

107-87グリッドに位置する。S J 11・12・16を切り、S J 17に切られる。プランは方形を呈する。長径×短径×深さは3.69×3.26×0.20mである。主軸方向はN-4°-Eである。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。全長1.07m・焚口幅0.59mを測る。袖部は検出されなかった。

3層は焚き口部・燃焼部、1層は大井崩落土、そして2層は混入土に相当すると思われる。カマドの焼け方は弱い。

本住居跡は、S J 16の2次床面の上位に、ロームブロックを多く含んだ暗褐色土を10cm前後の厚さに充填して、床面を構築している。

床面直上には、炭化物を主体として焼土ブロックや焼土粒子を混入する土層が、2~10cm前後の厚さで分布していた。

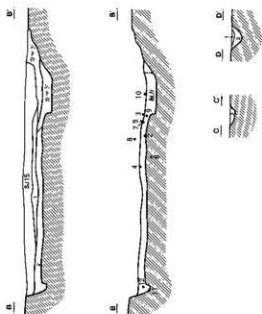
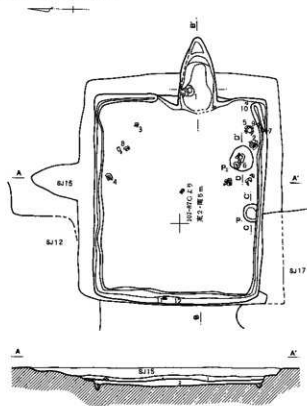
また、床面頂上に小範囲ではあるが、敷物状の痕跡をとどめた炭化物が検出されている。

本住居跡はS J 16を拡張したものであろうか。

図化し得た遺物は、土師器1、須器8、石製品2の計11点であった。



第40図 第16号住居跡

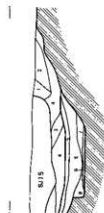
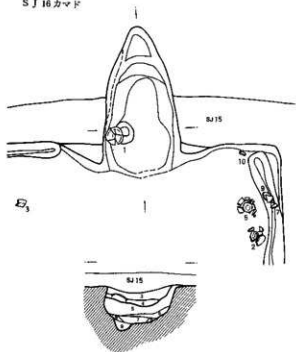


第16号住居跡土層

- 1 暗褐色土 F層面に灰色灰層が一面に堆積する (S J 16一次床面)
- 2 暗灰色土 ロームブロック多、人為的埋め戻し (S J 16二次床面)
- 3 暗褐色土 灰色粘質土(壁層土)

0 L=23.8m 2m

S J 16カマド



第16号住居跡カマド

- 1 暗灰色土 粘質土、ロームブロック多、人為的に埋め戻して灰色灰土を堆積する(S J 16二次床面)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・灰化物少(S J 16天井部崩落上)
- 3 暗褐色土 ローム・横上ブロックや中多(S J 16天井部崩落上)
- 4 暗褐色土 灰層、灰・炭化物粒子極めて多、炭土粒子少
- 5 黄褐色土 砂質強、天井部構築土か
- 6 黄褐色土 土床、カマド2次床面
- 7 黒色土 灰層、黄褐色土若干、炭化物粒子・横上粒子少
- 8 黄褐色土 灰少
- 9 黒色土 灰・横上粒子少

0 L=23.7m 1m

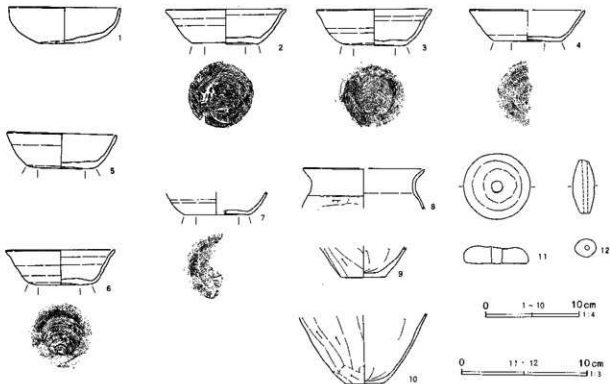
第12表 第15号住居跡出土物観察表(第39回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	色調	残存	備考
1	須恵器環	(11.7)	(3.2)	—	EH	良	灰褐色	口35	ロクロ成形 カマド
2	須恵器環	(11.8)	3.3	(6.2)	CDFPH	不良	灰白色	底35	器面風化 ロクロ成形 C
3	須恵器環	—	1.3	6.4	AEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 Ba
4	須恵器環	12.3	3.5	6.9	FH	普通	灰褐色	完形	ロクロ成形 RC
5	須恵器環	12.7	3.5	5.9	EH	普通	灰褐色	95	ロクロ成形 C (筧か)記号有
6	須恵器環	—	0.7	(6.9)	CEH	普通	灰褐色	底45	ロクロ成形 Ba
7	須恵高台碗	(18.2)	8.5	10.5	EH	普通	暗灰青色	台90	ロクロ成形 RC 高台貼付 佐波理模様
8	土師器壺	(19.8)	3.3	—	ACEH	不良	暗橙褐色	口115	口:内外面とも横ナデ 器面風化 カマド確認向
9	須恵器壺	—	—	—	EGII	良	暗灰褐色	—	外:半円印き目文 内:青海波文

10: 紡錘車(凝灰岩製)。ほぼ完形。表面にスス付着。  
上径3.0cm・下径4.2cm・厚さ2.3cm、重さ54.1g。

11: 砥石(凝灰岩製)。両端部を欠損する。4面とも  
使用しており、細かな条線がみられる。

第41図 第16号住居跡出土物



## 第16号住居跡 (第40・41図)

107-87グリッドに位置する。S J 15に切られる。プランは長方形を呈する。長さ×短径は3.32×2.75m、壁面での深さは18cm、カマドでの最深部では40cmを測る。主軸方向はN-91°-Eである。カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、僅かに南よりに設けられている。全長1.19m・焚口幅0.62mを測る。使用面は2枚確認された。1次カマドは6-9層で、焚き口部・燃焼部に相当すると思われる。灰層はきわ

めて厚い。2次カマドは、1次カマドの灰層の上に黄褐色土を貼って床面としている(5層)。4層は焚口部～煙出し部、1・2層は天井崩落土、3層はカマド構築土に相当すると思われる。5層の北端部で、煙道がやや屈曲しているのは、2次カマド構築際にさらに煙道を長くした痕跡であろうか。軸の下面にまで灰層が続いているのは、1次カマドの灰層の上に構築したためと考えられる。床面もカマドに対応して2面検出された。1次床面は、掘り方内に地山ブロックを含む明燭

第13表 第16号住居跡出土遺物観察表(第41回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	11.9	3.9	—	AEFH	普通	茶褐色	完形	器面風化 口・体:内外面横ナテ・ナテ 底(外):笠削り カマド
2	土師器環	12.8	3.7	7.1	CEH	普通	灰白色	底95	ロクロ成形 R B b 1次貼床内
3	須恵器環	12.3	3.8	6.9	ADEH	普通	暗灰褐色	底100	ロクロ成形 B b 1次床
4	須恵器環	(12.3)	3.3	7.2	DE	普通	灰褐色	底50	ロクロ成形 R B b 貼床内
5	須恵器環	11.6	3.7	7.4	CEH	不良	灰白色	底90	器面風化普 ロクロ成形 B b 1次床
6	須恵器環	11.6	3.7	6.8	AEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 R B b 1次貼床内
7	須恵器環	—	2.4	6.8	AEH	普通	橙褐色	底45	ロクロ成形 R B b 貼床内
8	土師器環	(12.8)	4.2	—	ACEFH	普通	茶褐色	口45	外面スス付着 口:内外面横ナテ 胴:内外笠削り・ナテ 貼床内
9	土師器環	—	—	4.6	AEFH	普通	明褐色	底100	外:笠削り 内:籠ナテ 貼床内
10	土師器環	—	7.3	4.0	AEFH	普通	茶褐色	底100	外:笠削り 内:籠ナテ 1次貼床内

色土を充填して床面を造っている。2次床面は、1次床面上にロームブロックを多く含む暗褐色土による貼り床で、表面は硬化している。

図化し得た遺物は、計12点であった。

11:紡錘車。ほぼ完形であるが、表面は荒れている。

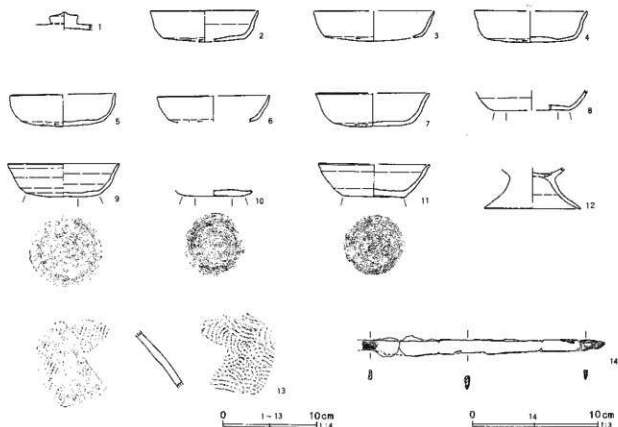
側面に線刻の痕跡か。上径3.9cm・孔径0.9cm・重さ66g。凝灰岩製。貼り床内出土。

12:土錘。茶褐色。焼成:普。ABE。重さ11g。

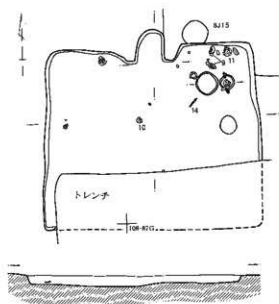
第17号住居跡(第42・43回)

107・108-86・87グリッドに位置する。S J 15・16を切り、2基のビットに切られる。住居跡南部はトレンチによって失われている。プランはやや隅丸の方形を呈する。長径×短径×深さは3.49×2.79×0.18mである。主軸方向はN-1°Eである。カマド1基が検

第42回 第17号住居跡出土遺物



第43図 第17号住居跡

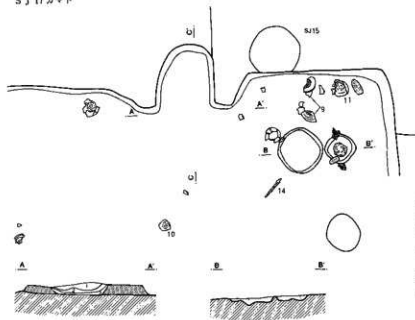


第17号住居跡土層

- 1 灰褐色土 造山ブロック・焼土粒子・粘土ブロック少、炭化物多

0 L=23.8m 2m

S J 17カマド



第17号住居跡カマド

- 1 黄褐色土 灰層、炭化物粒子・灰多
- 2 褐色土 ロームブロック・炭化物粒子・焼土粒子少、炭方か
- 3 黒色土 灰層、しまり弱・粘性强

第17号住居跡ヒット土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子やや多、炭方か

0 L=23.7m 1m

出されている。カマドは北壁中央に設けられている。全長0.70m・焚口幅0.48mを測る。僅かに袖の部分が遺存していた。3層は焚口部に相当すると思われる。

この使用面（3層）を埋め戻し（2層）、新たに使用面（1層）としていると思われる。どちらの使用面も焼け方は弱く、僅かに焼土や炭化物がみられる程度で

あった。図示してある床面まで掘り下げていく過程で、黄褐色粘土粒子を少量含む、ごく薄い土層を確認した。確認を得るには至らなかったが、貼り床面の可能性が考えられる。カマドの使用面が2面あるのと同連するのであろうか。

図化し得た遺物は、総計14点であった。

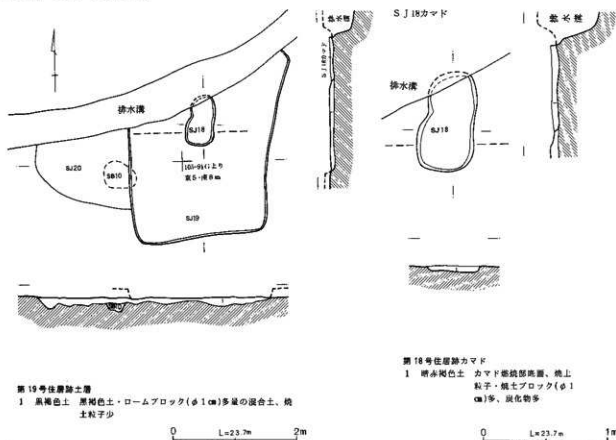
第14表 第17号住居跡出土遺物観察表(第42図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	2.7	1.9	—	EH	普通	灰白色	輪95	ロクロ成形
2	土師器環	11.4	3.3	—	ACEFH	普通	茶褐色	口55	口:内外面とも横ナテ 体(外):甕削り(内)ナテ
3	土師器環	(12.8)	(3.2)	—	ADE	普通	茶褐色	口20	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):甕削り(内):ナテか
4	土師器環	(12.0)	3.3	—	ACEFH	普通	茶褐色	底70	口:内外面とも横ナテ 体(外):甕削り(内):ナテ
5	土師器環	(11.1)	3.4	—	ABDEFH	普通	茶褐色	口35	口:内外面とも横ナテ 体(外):甕削り(内):ナテ
6	土師器環	(12.0)	2.8	—	ACDEF	普通	明褐色	口20	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):甕削りか(内):ナテか
7	土師器環	(12.0)	3.5	—	DEFH	普通	暗茶褐色	口45	口:内外面とも横ナテ 体(外):甕削り(内):ナテ
8	須恵器環	—	2.2	(8.0)	FH	普通	灰白色	底15	ロクロ成形 B b カマド
9	須恵器環	11.8	3.4	—	CEH	普通	灰褐色	口75	ロクロ成形 B a
10	須恵器環	—	0.7	6.7	DEH	普通	灰褐色	底85	ロクロ成形 B b
11	須恵器環	11.8	3.5	6.3	AEH	普通	暗灰褐色	底100	ロクロ成形 RC
12	土師台付甕	—	4.4	10.2	ACEFH	普通	暗茶褐色	口65	器面風化 脚台部:内外面とも横ナテ
13	土師器鉢	—	—	—	AEH	普通	黒灰色	—	外:平行押き目文 内:青海波文

14: 鉄製小刀。錆化著しく小破片化しており、復元  
実測である。切先付近と基部に木質付着。平棟造り、

片閃造りか。現存長19.3cm・推定刃長17.6cm・刀身棟幅  
0.2~0.3cm・最大刃幅1.2cm・茎幅0.7cm・茎厚0.3cm。

第44図 第18・19号住居跡



## 第18号住居跡 (第44図)

105-91グリッドに位置する。S J 19・20を切る。発掘調査時に設けた排水溝に切られる。

カマド1基のみの遺存である。本カマドと、S J 19・20との位置関係からみて、a：これらの住居跡に伴うとは考えられないこと、b：本カマド底面がS J 19の床面を切っていることなどから、これらとは別個の住居跡に伴うカマドであると判断した。その場合は北カマドになると推定される。

カマドは煙出し部分が失われている。現存長は0.74 m・現存幅は0.46 m・深さは5 cmを測る。

遺存状況のみから見る限り、主軸方向はN-1°-Eとなる。

遺物は出土しなかった。

## 第19号住居跡 (第44図)

105・106-91グリッドに位置する。S J 20・S B 10を切り、S J 18と排水溝に切られる。プランは全体的に大きく歪んだ隅丸長方形を呈する。

プランが大きく歪んでいるのは、別の住居跡のプランの痕跡の可能性が考えられるが、カマドとの位置関係からみてS J 18の可能性は低い。S J 20、あるいはここには痕跡をとどめていない全く別の住居跡のプランであろうか。

プランの歪みが大きいため規模が確定は困難である。検出段階における、南北方向の最長部分は2.83 m・東西幅の最大部は1.29 mを測る。

遺構の遺存状況はきわめて悪く、プラン確認の段階で、床面もしくは掘り方が現れてしまっていた。本住居跡の南西コーナー周辺は遺存状況が最も悪く、壁面は残っていなかった。

カマドは検出されていない。住居跡の西壁の北半分、または北辺に存在していたとしても、すでに失われてしまった可能性が高い。

残されていたプランからみる主軸方向は、N-1°-Eである。

周辺の地山は砂流を主体とする暗黄褐色土であり、乾燥するとヒビ割れる土質である。

本住居跡の掘り方はややドーナツ状を呈するもので、比較的凹凸が多い。掘り方の深さは浅い部分で5 cm前後、深いところ15 cm前後である。

掘り方内に、径1 cm程のロームブロックと黒色土の混合上を充填して床面を造っている。

本住居跡はS J 20と重複しているが、S J 19・20はほぼ同様の掘り方をもっており、土質も非常に近い。

そのため、平面観察からも土層断面観察からも、S J 19・20の掘り方を分離することはできなかった。そこで断面図上にも、S J 20を切っているはずである本住居跡の掘り方の立ち上がりを図示することができなかった。

遺物は出土しなかった。

## 第20号住居跡 (第45図)

105-91グリッドに位置する。S J 18・19および調査時に掘削した排水溝に切られる。プランは隅丸方形を呈すると思われる。

S J 18・19と同様に住居跡の遺存度はきわめて悪く、遺構確認面のレベルで床面、ないしは掘り方が現れている状況であった。

北西コーナー付近は、遺構の時点ですでに失われていた。

規模は、東西方向が3.46 mであったが、南北は方向は2.41 mまでしか残されていなかった。

カマドは検出されていない。東壁には確認されず、北壁はプランと床面がすでに失われていることから、カマドをもっていたとすれば北カマドであった可能性が高い。北カマドの場合、主軸方向はN-8°-Eを指すことになる。

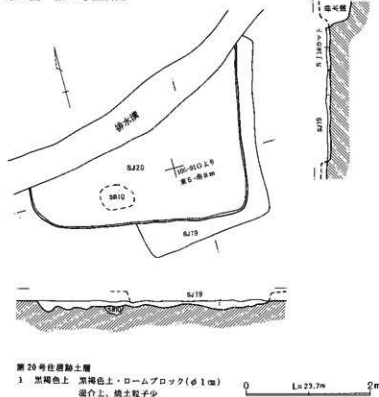
掘り方をもつ。掘り方は比較的凹凸が多く、深さは浅い部分で8 cm程、深い部分で20 cm程である。

掘り方内に、径1 cm程のロームブロックと、黒色土の混合上を充填して床面を造っている。

S J 19・20は重複しているものの、掘り方の土質は似ており、向住居跡の掘り方を分層することはできなかった。

遺物は出土しなかった。

第45図 第20号住居跡



第20号住居跡土層

1 黒褐色土 茶褐色土・ロームブロック(径1cm)  
凝灰土・焼土粒多

0 1m 2m

#### 第21号住居跡 (第46～48図)

106・107・92・93グリッドに位置する。S J 22を切り、S J 24および発掘調査時に掘削した排水溝に切られている。

プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは4.26×3.45×0.17mである。主軸方向はN-92°Eである。

カマド2基が検出されている。カマド(1)は東壁中央よりやや南寄りに設けられている。全長1.71m・幅0.52mを測る。6層はカマド掘り方、4・5層は焚き口部、5層は燃焼部から煙り出し部に相当すると思われる。掘り方には径3～5cm程の地山ブロックと暗褐色土との混合土を充填している。

焚き口部は僅かに窪む程度であるが、燃焼部はやや平坦な擋鉢状を呈し、煙道部で一旦ビット状に窪んだ後、急勾配で煙り出し部分へ向かう。

カマド(1)は遺構確認の段階で検出されたのに対し、カマド(2)は本住居跡の床面下から検出された。

この点から、両カマドは併存していたのではなく、初めに設けた北カマドであるカマド(2)を廃棄して、カマド(1)を東カマドとして新たに構築したものと推定される。カマド内面の焼け方は弱い。

カマド(2)は、北壁中央より東寄りに設けられている。当初、床面精査の段階では検出されておらず、掘り方精査の時点で確認された。従って、初めに北カマドとして設置されたのを廃棄され、カマド(1)が東カマドとして設けられたと考えられる。

現存長1.38m・幅0.56mを測る。2・4層は焚口部・燃焼部・煙出し部に相当すると思われる。燃焼部は擋鉢状を呈してやや窪み、長く平坦な煙道部へと続く。

確認面から燃焼部の最深部までは16cm、煙道部の最深部までは10cmと、ごく浅い。カマド内部の焼け方は弱い。

東壁部で一部分途切れるが、ドーナツ状の掘り方をもち、その他の部分は彩粒主体の地山を床面としている。

掘り方の底面は比較的平坦で、そこに地山粒子を含む暗褐色土を充填して床面を造っている。

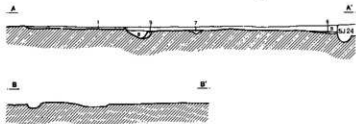
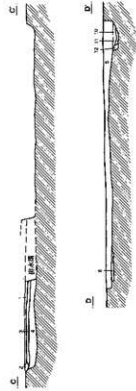
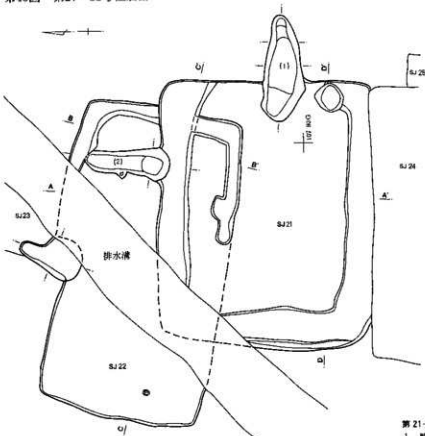
南東コーナー部分に、長径×短径×深さが45×45×10cmのビット状の遺構が確認された。覆土には焼土粒子や灰が認められた。灰ビットもしくは貯蔵穴であろうか。

出土した遺物は、今回の発掘調査で検出した住居跡の内では、比較的多い部類にはいるが、遺物の遺存率は低い。

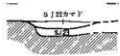
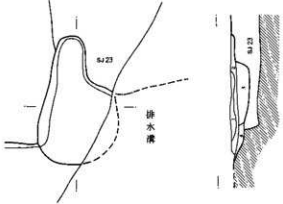
実測し得た遺物は、土師器環5・甕3、須恵器蓋1・環2のほか、土鉢1の、計12点であった。

2・9・11はカマド内からの出土である。

第46図 第21・22号住居跡



S J 22カマド



第21・22号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子多、炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 暗灰褐色粘土少、木炭か
- 3 暗褐色土 灰褐色粘土多(煎方)
- 4 褐色土 カーボン多、焼土粒子少(煎方)
- 5 灰色粘土 造山主体、焼土粒子(φ0.3cm)・炭化物粒子(φ0.3cm)多
- 6 暗黄褐色土 S J 26 煎方
- 7 暗褐色土 粘質シルト
- 8 暗褐色土 S J 26 噴瀝
- 9 暗褐色土 S J 26 煎方
- 10 暗褐色土 焼土少
- 11 暗褐色土 造山層
- 12 暗褐色土 焼土粒子貯蔵穴

0 L=23.6m 2m

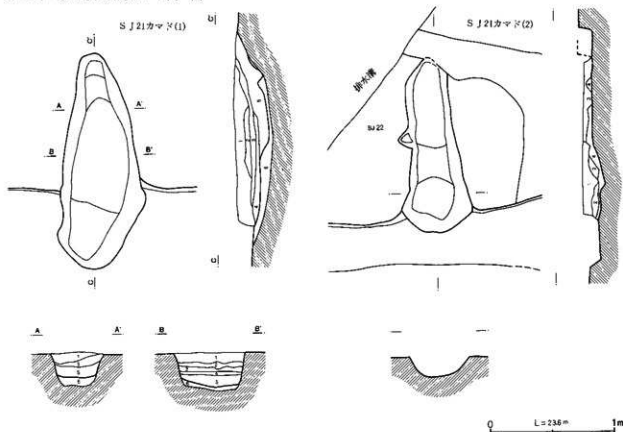
第22号住居跡のカマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.2cm)多、焼土少、天井部か
- 2 黒褐色土 炭化物粒子・焼土粒子(φ0.8cm)・焼上ブロック(φ0.1~0.2cm)多
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(φ0.1~0.2cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少、硬質、焼成部煎方埋め土
- 4 暗褐色土 灰褐色粘土少、ローム粒子(φ0.8cm)多、硬質、焼成部煎方埋め土

0 L=23.6m 1m



第47図 第21号住居跡カマド(1)・(2)



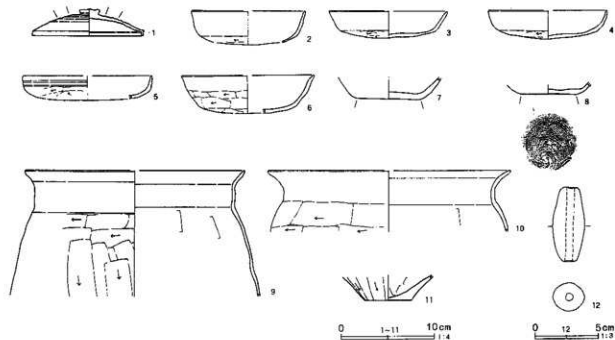
第21号住居跡カマド(1)

- 1 暗黄褐色土 粘土ブロック多(天井礫高土)
- 2 赤褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多
- 3 黒色土 灰層
- 4 暗褐色土 ローム粒子・カーボン若干
- 5 赤褐色土 焼土ブロック・カーボン多
- 6 暗黄褐色土 礫方

第21号住居跡カマド(2)

- 1 暗灰褐色土 シルト質・焼土粒子・炭化物粒子・灰多
- 2 褐色土 シルト質・焼土粒子多・炭化物粒子少
- 3 暗褐色土 シルト質・焼土粒子・炭化物粒子少
- 4 灰褐色土 シルト質・焼土粒子・炭化物粒子少

第48図 第21号住居跡出土遺物



第15表 第21号住居跡出土遺物観察表(第48回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	11.9	2.8	揃 2.1	CEH	良	灰褐色	口75	口口成形 天井部: 施削り(R) 端部: 横ナテ 覆上
2	土師器杯	(12.2)	3.6	—	CEFH	普通	茶褐色	口15	器面風化 口: 内外面横ナテ 体: 内外ナテか・施削り カマド一式
3	土師器杯	(12.7)	2.9	—	AEH	普通	橙褐色	体60	器面風化 口: 内外面横ナテ 体: 内外ナテか・施削り 覆上
4	土師器杯	(12.6)	3.0	—	ADEH	普通	橙褐色	口25	器面風化 口: 内外面横ナテ 体: 内外ナテか・施削り 覆上
5	土師器杯	(13.7)	2.6	—	AEFH	普通	茶褐色	口25	口: 内外面とも横ナテ 体(外): 施削り (内): ナテ 覆上
6	土師器杯	(14.7)	(4.1)	—	ACEFH	普通	茶褐色	口20	口(上): 内外面横ナテ 口(下) 体(外): 施削り(内): ナテ 覆上
7	須恵器杯	—	2.4	6.7	CEFH	不良	暗灰褐色	口10	器面風化著しい 口口成形か C 覆上
8	須恵器杯	—	1.0	6.1	EH	普通	灰白色	底100	口口成形 RC 覆上
9	土師器甕	(23.4)	13.4	—	ACDEH	普通	橙褐色	口25	風化 口: 内外面横ナテ 胴: 内外面ナテ・削り カマド 覆上
10	土師器甕	(25.7)	6.5	—	ACEH	普通	茶褐色	口20	器面風化 口: 内外面横ナテ 体: 内外面ナテ・施削り 覆上
11	土師器甕	—	2.8	5.1	ACEH	普通	橙褐色	底55	胴(外): 施削り (内): 施ナテ カマド一括

12: 土師。完形。黒灰色。焼成: 普通。胎土: AEH。表面は荒れており、ザラザラしている。法量は長さ5.9cm・最大径2.5cm・孔径0.6cm、重さ34.0gを測る。掘り方内からの出土である。

## 第22号住居跡(第46・49回)

106-92・93グリッドに位置する。S J 23を切り、S J 21および排水溝に切られる。プランはやや歪んだ隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは5.01×2.75×0.04mである。主軸方向はN-8'-Eである。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央よりやや西寄りに設けられている。全長1.02m・幅0.62mを測る。3・4層はカマド掘り方か。2層は燃焼部・燃道部に、そして1層は天井部崩落土に相当すると思われる。カマド内部の焼け方は弱い。

本住居跡は短辺(南北方向)と長辺(東西方向)と

の比率が大きいのが特徴の1つといえよう。

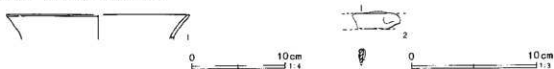
本住居跡の遺存度はきわめて悪く、遺構確認面とはほとんど同じレベルで、床面が現れてしまう状況であった。北壁は、カマドの西側と東側とはプランがややズレている。これについては、排水溝を境界として、発掘調査年度が異なったことによって、遺構確認面のレベルに若干の差が生じてしまったことにも起因するかも知れない。

掘り方をもつ。掘り方は住居の範囲全体を掘り下げているが、住居跡の東側部分では壁面際をドーナツ状に、他の箇所よりも深く掘っている。

そしてそこに、内容物の異なる2種類の土(4・3層)充塞して床面を造っている。

出土遺物はきわめて少なく、土師器甕1、刀子1の計2点であり、どちらも小破片であった。

第49回 第22号住居跡出土遺物



第16表 第22号住居跡出土遺物観察表(第49回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器甕	(19.8)	2.7	—	ABCEFH	普通	橙褐色	口10	口: 内外面ともに横ナテ 覆上

2: 鉄製刀子の断片であると思われる。錆化著しく、原形をとどめていない。切先と基部を欠損しており、

刃部のごく一部分のみの遺存である。刃幅1.2cm・棟幅0.3cmを測る。

### 第23号住居跡 (第50・51図)

106-92・93グリッドに位置する。S J 21と排水溝に切られる。プランは長方形を呈すると思われる。

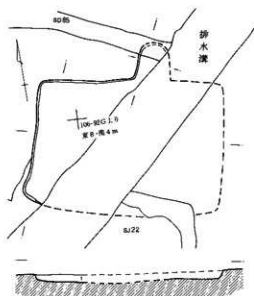
規模は南北方向が1.95mであるが、東西方向は1.55mまで遺存しているのみであった。深さは0.13m。主軸方向はN-6°-Eである。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁に設けられている。1層は燃焼部に相当すると思われる。カマド内部の焼け方は弱い。

凹凸の多い掘り方に褐色土を充填して床面とする。

円化し得た遺物は、須恵器環の小破片2点であった。

第50図 第23号住居跡

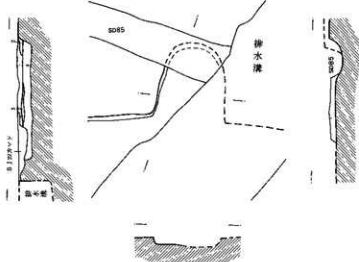


#### 第23号住居跡土層

- 1 暗褐色土 灰褐色粘土粒子・焼土粒子(φ0.8cm)・ローム粒子(φ0.5~0.8cm)少
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.3~0.5cm)多、ロームブロック(φ1cm)少
- 3 褐色土 褐色上ブロック・粘土ブロック層下、炭化物粒子少
- 4 黄褐色土 暗褐色土・粘土ブロック混合上、炭化物粒子少

0 L=23.7m 2m

S J 23カマド



#### 第23号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子(φ0.5~0.8cm)多、焼土ブロック(φ1cm)少

0 L=23.8m 1m

第51図 第23号住居跡出土遺物

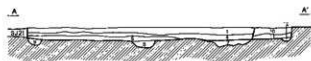
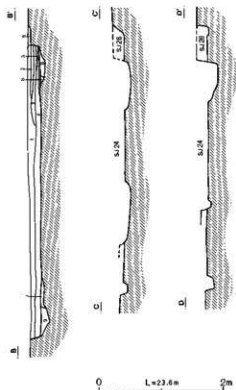
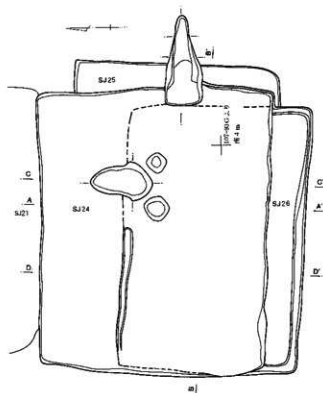


0 10cm

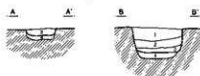
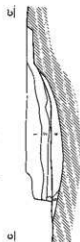
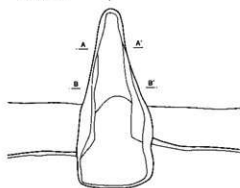
第17表 第23号住居跡出土遺物観察表(第51図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	—	1.7	6.0	BEH	良	灰褐色	底100	ロクロ成形 R B a
2	須恵高台環	—	1.8	(7.9)	ACE	不良	灰褐色	台25	ロクロ成形 底:糸切り離し後 付高台 カマド

第52図 第24・25・26号住居跡(1)



S J 24カマド



## 第24・25号住居跡土層

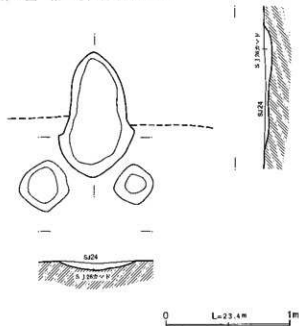
- 1 灰色粘土 地山主体、焼土粒子多
- 2 灰色粘土 第1層に準じる、灰・炭化微粒子・炭埋構造
- 3 灰色粘土 第1層に準じる
- 4 灰色粘土 第1層に準じる、第1層より焼土粒子少
- 5 灰色粘土 炭化物粒子・灰の埋埋構造を若干
- 6 灰色粘土 地山主体
- 7 暗赤褐色土 地山と暗褐色土、S J 27 配方
- 8 暗赤褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多、炭化物粒子少、S J 43 カマド 脇の灰ビットか
- 9 暗赤褐色土 S J 27 の壁溝、地山土
- 10 暗褐色土 ローム地層・炭化物粒子少、しまり強・粘性弱
- 11 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子若干、しまり強・粘性弱
- 12 黒褐色土 ローム粒子少、しまり強・粘性弱

## 第24号住居跡カマド

- 1 暗赤褐色土 焼土粒子・炭化物粒子、しまり強・粘性弱
- 2 赤褐色土 焼土ブロック多、炭化物若干、しまり強・粘性弱
- 3 黒色土 炭化物層中に焼土粒子少、しまり強・粘性弱
- 4 暗褐色土 地山と暗褐色土の混合土(カマド 配方)
- 5 暗褐色土 S J 43 周溝か

0 L=23.5m 1m

第53図 第26号住居跡(2)カマド



#### 第24号住居跡 (第52・54図)

107-92・93グリッドに位置する。S J 21・25・26を切る。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは4.65×3.82×0.22mである。主軸方向はN-90°Eである。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央よりやや南寄りに設けられている。全長1.41m・焚口幅0.6mを測る。5層はS J 26の間壁薄覆土、4層はカマド掘り方、2・3層は燃焼部・煙道部・煙出し部に相当すると思われる。

カマド掘り方は楕円状に掘り深められ、砂粒を多く含む地山ブロックと、暗褐色土からなる混合土が充填されている。

燃焼部の窪みは緩やかに立ち上がり、煙道部へと続く。煙道は平坦面に近く、煙出しの部分で急勾配に立ち上がる。カマド内部の焼け方は弱い。

本住居跡はドーナツ状の掘り方をもつ。掘り方は、北辺・東辺・西辺では幅15～20cm、深さ5～15cm、南辺では85～90cm・深さ10cm前後を測る。掘り方底面は、比較的凹凸が多い。但し、調査時点では掘り方と判断したが、南辺をのぞく他の3辺については、その形状・規模から、掘り方の可能性のみではなく、周壁溝の可

能性も否定し切れない。

それ以外の箇所については、砂粒主体の地山を床面としており、床面の硬化は少なかった。

土層断面の8層は焼上ブロック・焼土粒子・炭化物粒子、および灰を多く含む灰ビット状の遺構で、S J 26に帰属すると考えられる。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは土師器環1・甕1、須恵器環8・甕1の、計11点である。

2と11はカマド内からの出土、その他は覆土からの出土であった。

#### 第25号住居跡 (第52図)

107-92・93グリッドに位置する。S J 24に切られる。S J 26との新旧関係については、調査段階での断面観察からの推定である。

本住居跡は、北東コーナーと南東コーナーのみの遺存である。規模については、南北方向が3.29mであるが東西方向については不明であり、S J 24・26のプラン内に収まると思われる。

遺構の遺存度はきわめて悪く、遺構確認面から4cm前後掘り下げれば、床面が現れてしまうという状況であった。

調査し得た範囲内においては、掘り方は認められず、暗灰褐色の砂粒を主体とした地山を床面としている。床面の硬化は少ない。

住居跡の覆土は、地山を起源とする灰色粘土粒子を主体とする十層である。

S J 24の調査時点においても、東壁にはカマドは1基しか検出されておらず、これはS J 24に帰属するものであった。

また、S J 24の床面や掘り方の精査の段階でも、掘り方の下位(北壁近く)に、カマドが1基検出されたのみであった。

そしてこのカマドは、S J 24～26との位置関係からみて、S J 26に帰属すると推定された。

S J 25にはカマドが存在しなかった、という可能性も無論否定できないが、S J 24のカマドはS J 25のカマドと共通ではないか、というのが発掘調査時におけ

る印象であった。

その場合、S J 24はS J 25を拡張した住居跡という関係になり、遺構として連続することになる。この仮定に立てば、本住居跡はS J 26に切られるのではなく、逆に切っていると判断すべきであろう。

但し残念なことに、S J 24を調査をしている段階ではS J 26の存在を意識しておらず、S J 26との新旧関係までは捉えることはできなかった。

遺物はまったく出土しなかった。

#### 第26号住居跡 (第52・53図)

107-92-93グリッドに位置する。S J 24に切られる。本住居跡は遺構確認段階では確認されず、S J 24の掘り方を調査している際に検出された。S J 25との新旧関係については、S J 24-26の検出状況からS J 25に切られている可能性が高い。

プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは4.

19×2.92×0.15mである。主軸方向はN-90°-Eを指す。

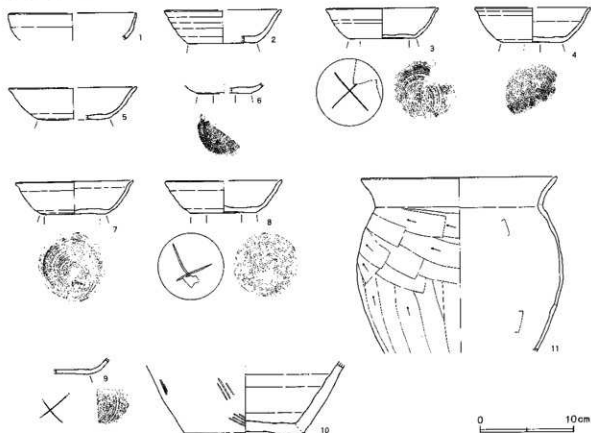
カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より東寄りに設けられていた。カマドは燃焼部から煙道にかけての最下面が僅かに遺存しているという状況であった。全長0.99m・焚口幅0.6mを測る。

焚口と覚しき位置付近に2基のピットが検出された。覆土は焼土粒子・焼土ブロック・炭化物を含む暗赤褐色土で、灰ピットであろうか。

南東コーナーから南西コーナーにかけてと、北壁に周壁溝が確認された。幅は13~25cm・深さは10cm前後である。遺構の検出状況からみて、S J 24に切られている部分には、検出した範囲以外にも周壁溝が巡らされていた可能性が高い。掘り方はもたず、砂粒を主体とする暗灰褐色の地山を床面としている。

遺物はまったく出土しなかった。

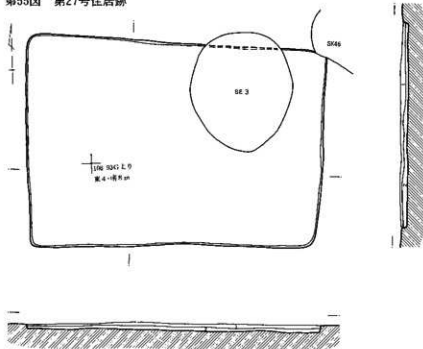
第54図 第24号住居跡出土遺物



第18表 第24号住居跡出土遺物観察表(第54図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(13.5)	2.9	—	ABEH	普通	橙褐色	口20	器面風化著 口:内外面横ナテカ 体:内外ナテ・底削り 覆土
2	須恵器環	(12.5)	3.5	(7.2)	CDEH	不良	灰白色	L25	器面風化著 ロクロ成形か C カマド 覆土
3	須恵器環	12.0	3.2	7.1	DEH	普通	灰褐色	底85	ロクロ成形 R B b 底記号有 覆土
4	須恵器環	(12.3)	3.7	6.3	CFH	普通	暗赤灰色	底75	ロクロ成形 B a 覆土
5	須恵器環	(13.7)	3.4	(7.7)	EII	普通	青灰色	口20	ロクロ成形 A 覆土
6	須恵器環	—	1.1	(5.8)	DPH	普通	灰褐色	底35	ロクロ成形 B b 覆土
7	須恵器環	12.6	3.5	7.1	EII	普通	灰褐色	底95	ロクロ成形 R B b 覆土
8	須恵器環	(12.6)	3.4	7.1	CEH	普通	灰褐色	底95	ロクロ成形 R B b 底記号有 覆土
9	須恵器環	—	1.7	—	CEH	普通	灰白色	—	ロクロ成形 R C 底記号有 覆土
10	須恵器甕	—	8.1	12.6	EGH	普通	灰褐色	底95	ロクロナテ 胴:外面平行印き口文 内面に自然軸付着 覆土
11	土師器甕	20.9	19.5	—	ACEFH	普通	橙褐色	L155	口:内外面横ナテ 胴(外):底削り (内):底ナテ カマド覆土

第55図 第27号住居跡



第27号住居跡土層

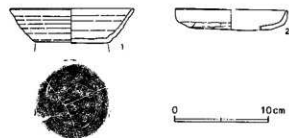
- 1 灰黒色土 地山上層を起源とする。地山上層の黒色ブロック(φ0.2~0.3cm)を多、全体に不均一だが構成粒子の風化はかなり進んでいる。
- 2 灰黒色土 1層に準じるが地山最上層黒色ブロックは1層に比べて少

第27号住居跡(第55・56図)

106・107-93グリッドに位置する。SK46・SE3に切られる。プランはやや歪んだ隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは4.8×3.36×0.13mである。軸方向はN-0°-Eである。カマドは検出されていない。

掘り方はもたず、地山を床面としており、硬化も少なかった。出土した遺物は少なく、図化し得たのは2点である。1は底部に墨書をもつか判読できなかった。

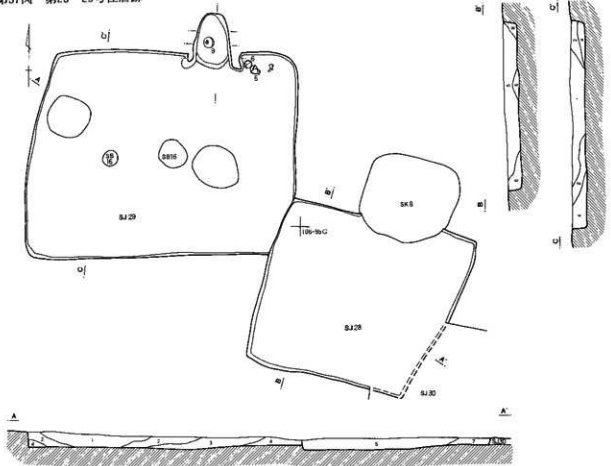
第56図 第27号住居跡出土遺物



第19表 第27号住居跡出土遺物観察表(第56図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	13.3	3.6	7.8	—	普通	灰白色	底100	ロクロ成形 LA 墨書有 覆土
2	土師器環	(12.0)	(2.1)	—	ACEH	普通	暗褐色	口25	口:内外面横ナテカ 体(外):底削り (内):ナテ 覆土

## 第57図 第28・29号住居跡

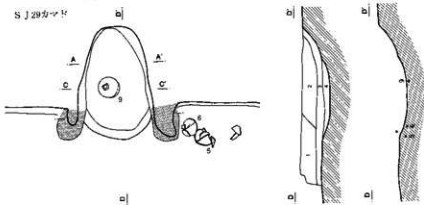


## 第28・29号住居跡土層

- |                                       |                       |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1 灰褐色土 黒色土ブロック(φ0.5cm)少               | 5 灰褐色土 黒色土ブロックを含まず    |
| 2 灰褐色土 黒色ブロック(φ0.8cm)多                | 6 灰褐色土 地山層上層の黒色土ブロック少 |
| 3 灰褐色土 黒色土ブロック(φ1.0cm)多               | 7 灰褐色土 地山層上層の黒色土ブロック少 |
| 4 灰褐色土 黒色土ブロック少、黒色ブロックの量は1層よりやや多2層より少 |                       |

0 L=23.8m 2m

## S J29カット



## 第29号住居跡のカット

- |                               |
|-------------------------------|
| 1 灰褐色土 地山層上部の黒色ブロック少          |
| 2 黒色土 焼土粒 $\gamma$ -灰褐色土粒子・灰少 |
| 3 灰褐色土 黒色土ブロック少量              |
| 4 灰褐色土 黒色土ブロック少量              |
| 5 灰色粘土 粘り強、粘部                 |
| 6 灰色粘土 天井部残存土                 |

0 L=23.4m 1m



第28号住居跡 (第57・58図)

105・106・94・95グリッドに位置する。S J 29・S J 30を切り、S K 8に切られる。やや歪んだ方形を呈する。長径×短径×深さは3.11×2.71×0.18mである。主軸方向はN-16°-Eである。カマドは検出されなかった。

S J 28-34は浅い埋没谷を切って造られており、黒色の遺構確認面の中に、灰褐色の覆上をもつ住居跡が浮かび上がって検出されるという状況であった。

本住居跡は、谷を埋めている黒色土を取り除き、谷の底面(=砂粒を主体とする地川)を床面としている。

実測し得た遺物は4点である。4は須恵器坏底面を転用した紡錘車である。内面側に墨書があるが、不鮮明なため判読できなかった。

第29号住居跡 (第57・58図)

105・106・94グリッドに位置する。SB16・SB17に切られる。プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは4.33×3.3×0.24mである。主軸方向はN-1°-Wである。

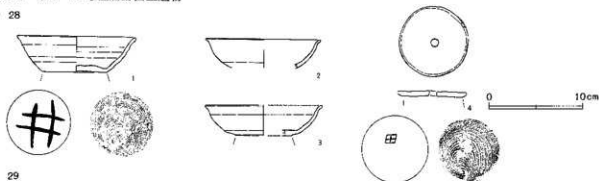
カマド1基が検出されている。全長0.89m・焚口幅0.56mを測る。5層は灰色粘土でカマドの袖部、3層は燃焼部・煙道部、6層は天井部の崩落上に相当すると思われる。カマド内部はあまり焼けていない。燃焼部のほぼ中央に台付き竈9が口縁部を下に向けた状態で検出された。

埋没谷の底面を住居の床面としており、平坦で地盤自体も堅固であった。

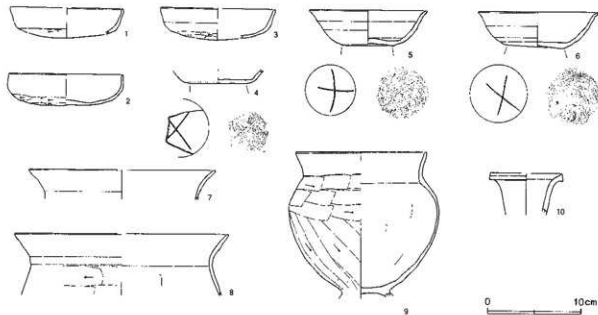
実測し得た遺物は、計10点である。

第58図 第28・29号住居跡出土遺物

SJ 28



SJ 29



第20表 第28号住居跡出土遺物観察表(第58図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	12.7	3.8	6.8	EII	普通	黒/灰褐色	底100	ロクロ成形 C 黒書有(非カ) 覆土
2	須恵器環	(12.3)	3.1	—	CEH	良	暗灰褐色	口15	ロクロ成形 覆土
3	須恵器環	(12.4)	3.2	6.0	CEII	普通	暗灰褐色	底15	ロクロ成形 C 覆土

4 : 紡錘車。須恵器環の底部を穿孔し、欠け口の面取りをして転用したもの。底部は全面回転糸切り離し。

灰褐色、DFH、焼成：普。内面側に黒書有り、田+田または西カ。直径7.3cm・厚さ0.6cm・重さ43.0g。

第21表 第29号住居跡出土遺物観察表(第58図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.1)	(3.2)	—	ABCDEH	普通	暗褐色	口30	口：内外面とも横ナテ 体(外): 施削り(内): ナテ
2	土師器環	12.1	3.4	—	AEFH	普通	暗褐色	—	外面スス付者 口：内外面横ナテ 体：内外ナテ・施削り カマド
3	土師器環	(12.3)	(3.4)	—	AEFI	普通	暗黒/黒褐色	口30	口：内外面とも横ナテ 体(外): 施削り(内): ナテ
4	須恵器環	—	1.5	(6.0)	DE	普通	灰褐色	底45	ロクロ成形 C 施削り有 覆土
5	須恵器環	12.6	3.7	5.4	CDEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 R C 施削り有 カマド周辺
6	須恵器環	12.8	3.8	6.1	DEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 R C 施削り有 カマド周辺
7	土師器環	(19.8)	3.1	—	AEFH	普通	茶褐色	口20	器面風化著しい 口：内外面とも横ナテ 床直
8	土師器環	(22.7)	6.6	—	ACDEF	普通	橙褐色	口25	口：内外面とも横ナテ 網(外): 施削り(内): 施ナテ 床直
9	土師台付鉢	14.1	15.5	—	ACEF	普通	暗茶褐色	口95	口：内外面横ナテ 胴部→方向施削り スス付者 カマド内
10	須恵長頸壺	(7.6)	4.8	—	EII	良	灰青白	口35	ロクロナテ 内外面とも口縁部付近に自然粘 床直

## 第30号住居跡 (第59・60・61図)

106-95グリッドに位置する。S J 31-33を切り、S J 28に切られる。

プランは西側に広がる隅丸長方形を呈する。東壁と西壁では長さの違いが大きく、約70cmになると思われる。長径×短径×深さは4.51×3.24×0.14mである。主軸方向はN-94°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央に設けられている。全長1.03m・焚口幅0.5mを測る。4・5層はカマド掘り方、2・3層は燃焼部・煙出し部に相当すると思われる。燃焼部は若干窪み、煙出し部は緩やかに立ち上がる。内部の焼け方は弱い。

埋没谷の底面を掘り上げて床面としており、掘り方をたない。床面は凹みが多い。地山は比較的堅固である。

図化し得た遺物は土師器環1・甕1、須恵器蓋2・環4・長頸壺1、土鏝1の計10点で、大部分は小破片であった。

## 第31号住居跡 (第59・60・62図)

106-95グリッドに位置する。長方形を呈すると思われる。カマドの西側がプランの屈曲しているが、形状

からみてコーナーである可能性は低く、歪みをもったプランはさらに北側まで続くと考えられる。規模は主軸方向で3.44m、南北方向ではカマド北側の屈曲点までが1.7mである。深さは7cmを測る。主軸方向はN-101°-Eである。

カマド1基、東壁に設けられている。全長0.98m・幅0.62mを測る。2層は燃焼部・煙道部に相当すると思われる。カマド内部の焼け方は弱い。

住居跡の遺存度は低く、壁面の立ち上がりは不明瞭であった。

遺物の出土は少なく、実測し得たのは土師器環3、須恵器環3点の計6点であるが、いずれも小破片であった。1・4・6は床面直上からの出土である。

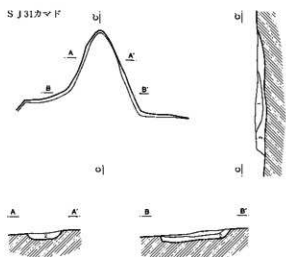
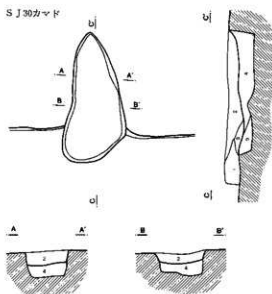
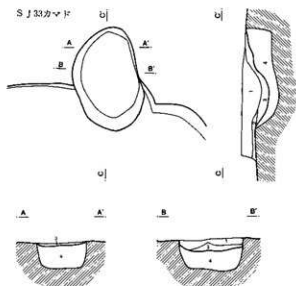
## 第32号住居跡 (第59・63図)

106-95グリッドに位置する。S J 30-32に切られる。北東コーナー付近は埋没谷の肩部に位置しており、床面・壁面ともに検出できなかった。埋没谷の黒色土をそのまま床面としていたのであろうか。その他の部分は谷の地山を床面としているが、掘り込みが浅いためS J 28やS J 30程明確ではなかった。

プランは隅丸であるが、方形か長方形であるかは不



第60図 第30・31・33号住居跡(2)カマド



## 第33号住居跡カマド

- 1 灰褐色土 黒色土ブロック(φ5cm)若干
- 2 黒色土 炭化物粒子多、灰褐色土若干
- 3 黒色土 炭化物粒子・焼土多、灰褐色土ブロック少
- 4 暗褐色土 炭化物粒了少、粘性やや強

## 第30号住居跡カマド

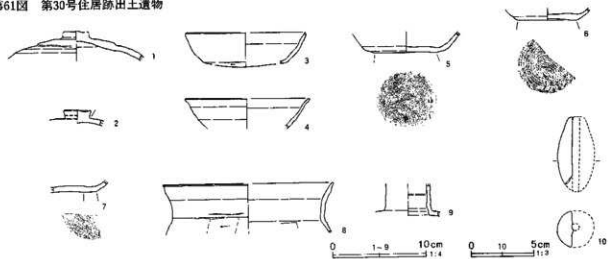
- 1 褐灰色土 黒色ブロック若干
- 2 黒色土 焼土粒子・褐灰色土ブロック少
- 3 褐灰色土 炭化物粒子・焼土粒子少
- 4 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少
- 5 灰褐色土 炭化物粒子少

## 第31号住居跡カマド

- 1 褐灰色土 焼土粒下・炭化物粒了多
- 2 褐灰色土 焼土粒子・炭化物粒子少

0 L=23.4m 1m

第61図 第30号住居跡出土遺物



浅谷底面の地山を掘り進めて床面としており、掘り方を  
もたない。

遺物の出土はきわめて少なく、実測し得たのは僅かに  
1点のみであった。

第22表 第30号住居跡出土遺物観察表(第61図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	—	3.2	2.9	AEH	普通	灰褐色	底65	ロクロナテ 天弁部: 施削りか つまみ: 貼付け 成形塗 覆土
2	須恵器蓋	—	1.6	2.9	DEH	普通	灰白色	底95	ロクロ成形 天弁部: 施削り(R) 覆土
3	土師器環	(12.8)	(3.6)	—	ACDEFH	普通	橙褐色	口35	器面風化著 口: 内外面横ナテ 体(外): 施削りか(内): ナテか
4	須恵器環	(13.3)	3.2	—	CEH	普通	灰褐色	口15	ロクロ成形
5	須恵器環	—	2.2	6.3	ACEH	普通	暗灰色	底85	ロクロ成形 RC 覆土
6	須恵器環	—	1.3	(6.2)	EH	普通	灰褐色	底55	ロクロ成形 RC 覆土
7	須恵器環	—	1.2	—	DE	普通	白灰色	—	ロクロ成形 底: 回転糸切り離し後 周辺施削り 覆土
8	土師器環	(18.1)	5.3	—	ACEFH	普通	明褐色	口15	器面風化 口: 内外面横ナテ 胴(外): 施削り(内): 施ナテ 覆土
9	須恵長頸壺	—	3.3	頸(4.8)	EII	良	黒灰色	—	ロクロ木挽き成形

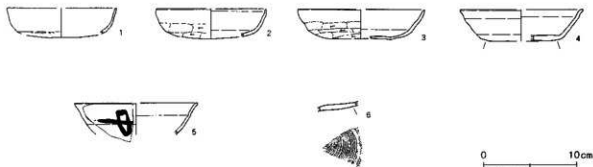
10: 土師。残存率35パーセント。明褐色、焼成: 普  
通。胎土: ACEH。

長さ(6.1)cm・最大幅(2.9)cm・孔径(0.6)cm、  
現存重量19.6gを測る。

第23表 第31号住居跡出土遺物観察表(第62図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(11.6)	(3.1)	—	ACEFH	普通	茶褐色	口20	器面風化 口: 内外面横ナテ 体(外): 施削り(内): ナテ 床面
2	土師器環	(11.7)	(3.2)	—	ACEFH	普通	橙褐色	口15	器面風化著 口: 内外面横ナテ 体(外): 施削り(内): ナテ 覆土
3	土師器環	(13.5)	(3.1)	—	ACDEH	普通	橙褐色	口35	口: 内外面横ナテ 体(外): 施削り(内): ナテ 覆土
4	須恵器環	(13.2)	3.3	(7.6)	EII	普通	灰褐色	口15	ロクロ成形 C 床直
5	須恵器環	(13.1)	3.4	—	ACEH	不良	灰褐色	口15	ロクロ成形 外面に墨書「中」 覆土
6	須恵環(底)	—	—	—	EH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 底: 回転糸切り離し 外面に墨書 床直

第62図 第31号住居跡出土遺物



第63図 第32・33号住居跡出土遺物

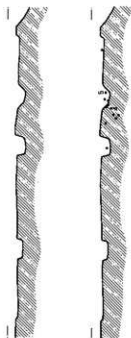
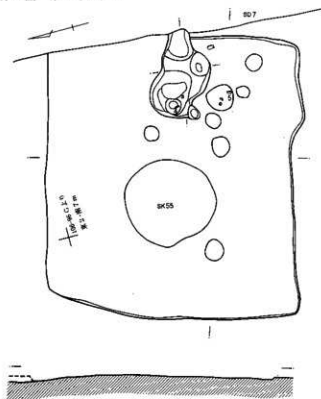
SJ 32



SJ 33

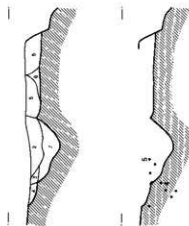
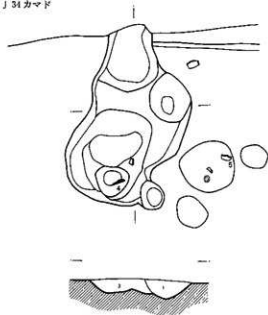


第64図 第34号住居跡



0 L=23.5m 2m

S J 34カマド



0 L=23.5m 1m

第34号住居跡カマド

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 黒色土 カarbonと灰が混同、焼土ブロック多、しまりやや弱・粘性やや強</p> <p>2 暗灰白色土 灰層中に焼土ブロック(φ2cm)少、しまりやや強・粘性強</p> <p>3 暗灰白色土 灰層中に焼土ブロック(φ2cm)少</p> <p>4 黒褐色土 焼土ブロック(φ5cm)少、しまり強・粘性やや強、カマド側方</p> | <p>5 黒褐色土 焼土粒子少、しまり強・粘性やや強、カマド側方</p> <p>6 黒褐色土 焼土粒子、Carbon多、しまり強・粘性やや弱、煙道・煙出</p> <p>7 暗黄褐色土 焼土粒子・Carbon混量、しまり強・粘性やや弱</p> |
|---|--|

第24表 第32・33号住居跡出土遺物観察表(第63図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	—	3.3	7.8	DEH	普通	灰褐色	底20	ロクロ成形 B b S J 32
1	土師器環	12.1	3.5	—	AEII	普通	茶褐色	口55	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):筥割(内):ナテ 覆土

第34号住居跡(第64・65図)

106・107-96グリッドに位置する。SD7・SK55および7基のピットに切られる。

プランはおおむね方形を呈するが、かなり歪んでおり、南壁では東側が外に向かって屈折している。長径×短径×深さは4.48×4.1×0.05mである。主軸方向はN-104-Eである。

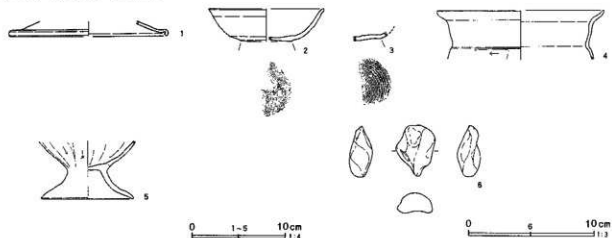
カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央に設けられており、煙出しの部分を欠く。現存長1.42m・

幅0.88mを測る。4・7層はカマド掘り方、2・3層は焚口部・燃焼部、5・6層は煙道部・煙出しに相当すると思われる。燃焼部は楕円状に窪み、煙道部は平坦である。カマド内部の焼け方は弱い。位置的にみて、焚口部・燃焼部がかなり内側にある。

住居跡の遺存度はきわめて悪く、とくに北壁では確認面と床面がほとんど同レベルであった。掘り方をもち、地山を床面としている。

遺物は少なく、実測し得たのは計6点である。

第65図 第66回第35号住居跡カマド



第25表 第34号住居跡出土遺物観察表(第65図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(16.9)	1.6	—	EH	普通	灰褐色	口10	ロクロ成形
2	須恵器環	(12.4)	3.4	(5.5)	AEII	良	暗灰色	底20	ロクロ成形 C
3	須恵器環	—	—	—	CEH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 C カマド一括
4	土師器環	(17.8)	5.2	—	ACEFH	普通	茶褐色	口25	口:内外面横ナテ 胴(外):筥割り(内):筥ナテか
5	土師台付甕	—	6.2	脚9.9	ABCEF	普通	黒褐色	脚100	器面風化 胴下半1方向筥割り 脚部:内外面横ナテ カマド

6は貝果穴状泥岩の可能性が考えられるため、ここに掲載したが明確ではない。土器などの焼成遺物ではなく、被熱の痕跡もみられない。

不明瞭ではあるが、縦に割れた貝果穴の一部と思われる箇所が観察されたこと、今回の北島遺跡の調査に

おいて、明確に貝果穴状泥岩といえる例が存在することなどから、本例もその類別とした。

現存部分の長さは4.0cm・幅は3.0cm・厚さは1.8cm、重さは10.7gを測る。明橙褐色。

## 第35号住居跡 (第66図)

115-87グリッドに位置する。主軸方向はN-3°-Eである。カマドは1基、東壁に設けられており全長0.93m・幅0.53mを測る。1層は燃焼部、2層は煙道部に相当すると思われる。

住居跡の遺存度はきわめて悪く、床面も大部分が失われていた。調査し得た範囲内では掘り方はもたず、地山を床面としている。遺物は検出されなかった。

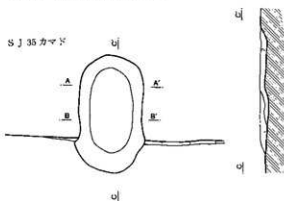
## 第36号住居跡 (第67・68図)

109・110-96グリッドに位置する。SD7に切られる。長方形を呈する。規模は南北方向は2.52m・深さは0.14mであるが、東西方向は3.26mまでしか遺存していなかった。

カマドは検出されなかった。カマドをもったとすれば、平面形態からみて東壁にあったとは考えにくい。東カマドであろうか。主軸方向はN-93°-EもしくはN-3°-Eと考えられる。掘り方はなく、砂粒を主体とする地山を床面としている。北・南・西の3辺を幅10~20cm・深さ5cm前後の周壁溝が巡る。

遺物は少なく、実測し得たのは須恵器環2点である。

## 第66図 第35号住居跡カマド

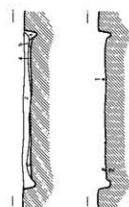
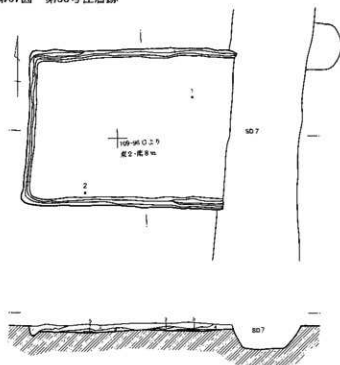


## 第35号住居跡カマド

- 1 灰色粘土 地山上主体、炭化物  
砂子・焼上砂子少
- 2 灰黒色土 灰砂子(φ0.1cm)・  
焼土砂子(φ0.5cm)  
多、煙道からの流入  
土層

0 L=2.38m

## 第67図 第36号住居跡



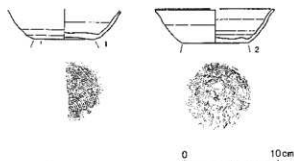
## 第36号住居跡土層

- 1 黒褐色土 カーボン・焼土粒子微量、  
しまり強・粘性弱
- 2 暗茶褐色土 砂粒ブロック多、カーボン  
少、しまり強・粘性弱
- 3 黒色土 炭・灰層、しまり強
- 4 黒褐色土 焼土砂子少、しまり強
- 5 茶褐色土 鉄分多、しまり強・粘性弱

0 L=23.6m



第68図 第36号住居跡出土遺物



第26表 第36号住居跡出土遺物観察表(第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	上縁器環	—	3.2	6.3	CEGH	普通	灰褐色	底50	ロクロ成形 B b 体部に自然釉付着
2	須臾器環	(12.7)	3.6	7.1	BEH	不良	黒灰色	底100	ロクロ成形 A (静止か)

第37号住居跡 (第69図)

111-93グリッドに位置する。北東コーナー付近を、ビット状に攪乱を受けている。プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは3.32×2.67×0.1mである。主軸方向はN-11-Wである。

カマドは検出されていない。

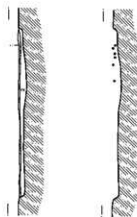
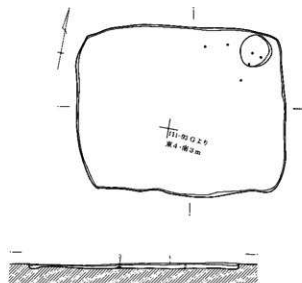
住居跡はきわめて遺存度が悪く、遺構確認面と床面とのレベル差がほとんどなかったため、壁面の立ち上がりを検出しづらかった。そのためか、プランを検出

し終わった段階で壁面はやや垂んだものとなってしまった。

住居範囲全体を、比較的平坦に掘り下げた後、暗灰褐色土を5-12cmほど充填して床面を造っているのが観察された。地山は黒褐色土であり、掘り方直下にFAが認められた。床面には部分的にはあるが、硬化した箇所が検出された。床面は比較的平坦である。

遺物の出土はきわめて少なく、図化し得た遺物はなかった。

第69図 第37号住居跡

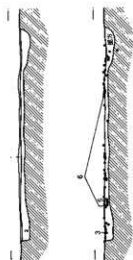
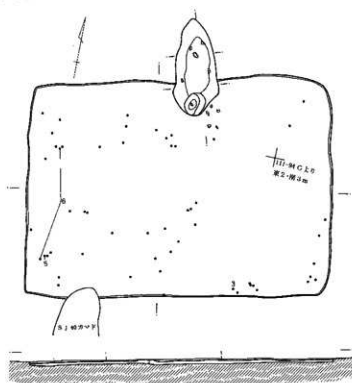


第37号住居跡土層

- 1 灰褐色土 焼上粒子・カーボン少、しまり強・粘性弱
- 2 暗灰褐色土 カーボン豊富、しまり強・粘性弱、腐方
- 3 黒褐色土 地山表上にFA

0 L=23.5m 3m

## 第70図 第38号住居跡

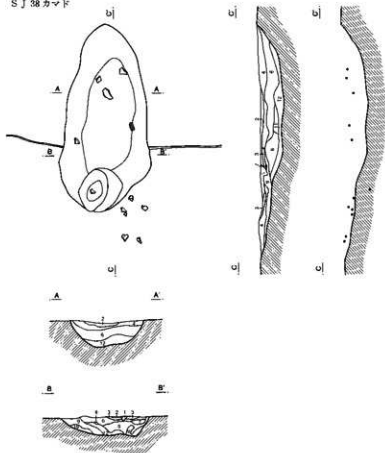


## 第38号住居跡土層

- 1 暗褐色土 焼土ブロック、しまり強・粘性弱
- 2 暗褐色土 カーボン少

0 L=23.5m 2m

## S J 38 カマド



## 第38号住居跡カマド

- 1 灰白色土 焼土粒子・カーボン少、しまり弱・粘性やや強
- 2 黒色土 焼土粒子・焼土粒子、しまり弱・粘性やや強
- 3 黒色土 粘土ブロック・カーボン少、しまり弱・粘性やや強
- 4 暗灰褐色土 粘土ブロック層中に、炭化物粒子・焼土粒子多、しまり強・粘性やや強
- 5 暗茶褐色土 焼土ブロック、しまり強・粘性弱
- 6 黒色土 焼土粒子少、しまり弱・粘性強
- 7 黄褐色土 カーボン・焼土粒子少、しまり強・粘性弱
- 8 暗黄褐色土 カーボン・焼土粒子少、しまり強・粘性弱
- 9 黒褐色土 軽度土ブロック(φ0.3cm)・焼土粒子・カーボン少
- 10 黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭多、しまり強・粘性弱
- 11 暗黄褐色土 焼土粒子・カーボン・焼土粒子少
- 12 暗茶褐色土 灰・焼土粒子多、しまり強・粘性弱

0 L=23.5m 1m

第38号住居跡 (第70・71図)

111-93・94グリッドに位置する。長方形を呈する。ただし北東コーナーと南東コーナーは隅丸に近い。長径×短径×深さは4.88×3.53×0.08mである。主軸方向はN-13°-Wである。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より、僅かに東寄りに設けられている。全長1.48m・焚口幅0.74mを測る。

4・6層が焚口部、8・11・12層が燃焼部・煙道部に相当すると思われる。焚口部は緩やかに下降して、燃焼部に続く。焚き口部はビット状を呈する灰の掻き出しによるものであろうか。燃焼部は溜鉢状に窪み、

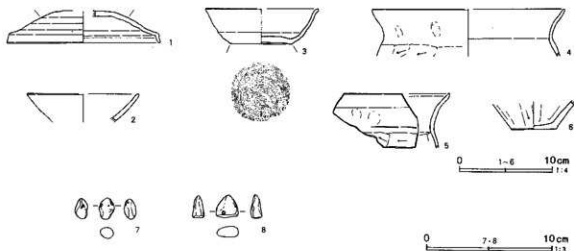
煙道部は緩やかに立ち上がって煙り出し部に続いている。

住居跡の遺存度はきわめて悪く、遺構確認前から2～3cm掘り下げると床面に達するという状況であり、壁面の検出は困難であった。

掘り方をもち、ややドーナツ状に近い。住居の範囲全体を掘り下げたのち、暗灰褐色土を充填して床面を作り出しており、床面は部分的に硬化している箇所も認められた。

小破片が比較的多く出土しているが、接合率は低かった。実測し得た遺物は土師器甕3、須恵器蓋1・坏2、貝巣穴泥岩2の計8点であった。

第71図 第38号住居跡出土遺物



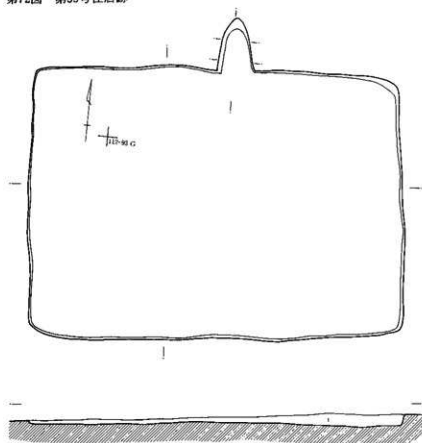
第27表 第38号住居跡出土遺物観察表(第71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(16.1)	3.4	—	EH	普通	灰褐色	Π45	ロクロ成形 天井部彫削り 端部横ナテ 掘方C
2	須恵器坏	(12.0)	3.0	—	CEH	良	灰褐色	□15	ロクロ成形 掘方d
3	須恵器坏	(12.2)	3.7	6.4	CEII	普通	褐色	底100	R C
4	土師器甕	(20.5)	5.0	—	ACDEH	普通	茶褐色	□20	器面風化 口:内外面横ナテ 胴:内外面ナテ・鋭削り 掘方d
5	土師器甕	—	5.8	—	ACDE	普通	白褐色	Π10	口:端内外面横ナテ 頸:内外ナテ 胴:内外面ナテ・鋭削り カマド
6	土師器甕	—	2.9	4.8	ACEF	普通	黒褐色	底55	器面風化 胴(外):鋭削り(内):横ナテ 底(外):ナマカ カマド

7・8は貝巣穴泥岩であると思われる。貝巣穴と思われる孔はきわめて小さいが、貝巣穴泥岩の可能性を考えて掲載した。明オリープ色をしており、二次

的に被熱していると思われる。7は貝巣穴2箇所が観察される。1.6×1.2×0.9cm、1.2g。8は貝巣穴2箇所が観察される。1.8×1.8×0.8cm、1.4g。

第72図 第39号住居跡

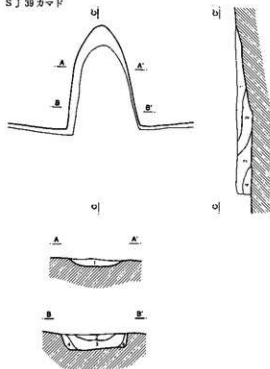


第39号住居跡土層

- 1 灰色粘土 地山上層上体、炭化物粒子・焼土粒子含まず均。

0 L=23.5 2m

S J 39 カマド



第39号住居跡カマド

- 1 黄褐色土 地山上層を上体とする。焼土粒(φ0.1~1cm)多、やや均。(天井部の編瓦土層か)  
 2 黄褐色土 1層に近似、炭化物(φ0.1~1cm)多。灰・焼土粒子若干(煙道からの流入土層か)  
 3 黄褐色土 2層に近似、灰・炭化物・焼土やや不均。(流入土層か)  
 4 黄褐色土 2層に近似、灰・炭化物・焼土微量均。(流入土層か)

0 L=23.4m 1m

### 第39号住居跡 (第72・73図)

111・112-92・93グリッドに位置する。プランは隅丸長方形を呈する。壁面はやや歪んでいるが、床面は比較的平坦である。長径×短径×深さは5.96×4.33×0.2mである。主軸方向はN-5°-Wを指す。

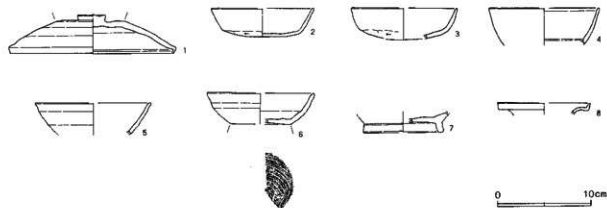
カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央よりやや東寄りに設けられている。全長1.32m・幅0.58mを測る。1層は天井からの崩落土、2～4層は焚口

部・燃焼部に相当すると思われる。カマド内部の焼け方は弱い。

住居跡の遺存度は悪く、とくに西壁では壁面の検出は困難であった。掘り方をもたず、砂粒を主体とした暗褐色土の地山を床面としている。床面は部分的に硬化している箇所が認められるほかは、全体的に軟質である。

図化し得た遺物は少なく、計8点であった。

第73図 第39号住居跡出土遺物



第28表 第39号住居跡出土遺物観察表(第73図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	17.3	4.1	幅 3.0	ACEH	不良	灰褐色	L455	器面風化著しい。天井部彫削り。ロクロ成形か? 覆土
2	土師器杯	(10.9)	3.0	—	ACEH	普通	茶褐色	体30	器面荒れる。口:内外面横ナテ 体(外):寛削 (内):ナテ 覆土
3	土師器杯	(11.2)	(3.4)	—	ACEF	普通	橙褐色	L425	器面荒れる。口:内外面横ナテ 体(外):寛削 (内):ナテ 覆土
4	須恵器杯	(11.6)	3.9	—	EGH	良	黒灰色	F120	ロクロ成形 覆土
5	須恵器杯	(12.2)	3.3	—	CEH	普通	灰褐色	口15	ロクロ成形 覆土
6	須恵器杯	(11.5)	3.3	(6.4)	DEH	普通	暗灰色	底25	ロクロナテ C 覆土
7	須恵高台杯	—	2.2	(8.4)	CEH	不良	灰褐色	吉35	器面風化著。ロクロ成形。底:回転切り難し後 貼付高台 覆土
8	須恵長頸壺	(9.9)	1.2	—	BE	良	灰褐色	L420	内面に自然釉付着。ロクロ成形 覆土

### 第40号住居跡 (第74・75図)

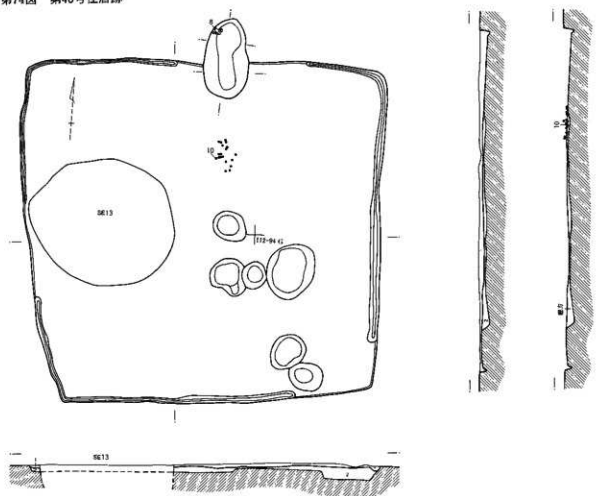
111・112-93・94グリッドに位置する。SE13に切られる。プランは東西にやや長い方形を呈する。長径×短径×深さは5.82×5.41×0.25mである。主軸方向はN-0°を指す。ピットもしくは土壌状の遺構が検出されたが、覆土が住居跡のものと共通していたため、本住居跡に帰属すると見なしたが、性格については不明である。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より、やや東寄りに設けられている。カマドは全長1.24m・幅0.72mを測る。

中央を浅く掘り窪めた掘り方をもつが、掘り方底面には焼上粒子を多く含む炭化物粒子が分布しているのが観察された。意図的に入れたものであるのか否か、については不明である。

遺物は少なく、図化し得たのは計10点であった。

第74図 第40号住居跡

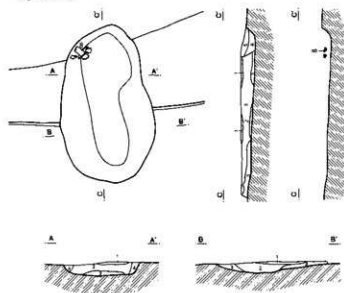


第40号住居跡土層

- 1 黒褐色土 焼土粒子・カーボン少、しまり強、粘性弱
- 2 黒褐色土 焼土粒子・カーボン少、しまり・粘性強(SJ9 層方)

0 L=23.5m 2m

S J 40 カマド

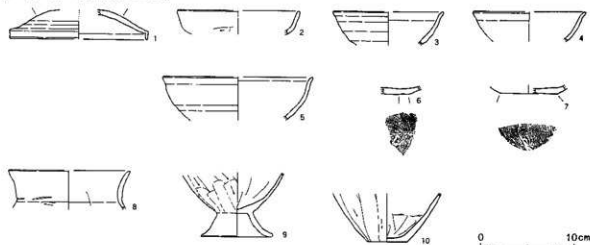


第40号住居跡カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒子少、しまり・粘性弱
- 2 黒褐色土 しまり・粘性やや強
- 3 暗褐色土 黒褐色土上アロック・焼土粒少量、しまり・粘性やや強
- 4 暗褐色土 灰化物粒子・焼土粒子混じり、しまり・粘性やや弱
- 5 暗褐色土 焼土粒子多、産物混入、しまり・粘性弱
- 6 暗褐色土 焼土粒子少量、しまり・粘性やや弱

0 L=23.5m 1m

第75図 第40号住居跡出土遺物



第29表 第40号住居跡出土遺物観察表(第75図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(14.6)	3.1	—	CEH	普通	灰褐色	口20	口クロ成形 入井部施削り
2	土師器環	(12.9)	2.5	—	ABEH	普通	明褐色	口20	口:内外面横ナデ 体(外):施削りか C区割方内
3	須恵器環	(11.8)	3.5	—	CEH	普通	灰褐色	口20	口クロ成形 C区割方内
4	須恵器環	(12.1)	3.1	—	CH	普通	灰白色	口15	口クロ成形 掘方内
5	須恵器環	(16.0)	4.6	—	CEH	良	暗灰褐色	口20	口クロ成形
6	須恵器環	—	—	—	CEH	普通	灰褐色	—	B b
7	須恵器環	—	—	(6.2)	CEH	普通	灰白色	底40	R C
8	土師器甕	(12.9)	4.0	—	ACEFH	普通	茶褐色	口20	口:内外面横ナデ 胴(外):施削り
9	土師台付甕	—	6.8	7.7	AEF	普通	黒褐色	台35	外側スス付者 胴(外):施削り (内):施ナデ 脚台部:横ナデ
10	土師器甕	4.4	5.2	4.4	ACDE	普通	黒褐色	口50	外:施削り(スス付者) 内:施ナデ

第41号住居跡 (第76・78図)

114-90グリッドに位置する。北側をSD4に切られる。遺存状況はきわめて悪く、確認面から5~10cm程で床面が検出された。

住居跡の主軸方向の規模は4.13m、南北3.06m、深さは0.16mである。主軸方向はN-80°-Eである。

検出された東カマドは、住居跡の南東コーナー近くに位置している。カマドの長さは1.31m・幅は0.63m・深さは0.18mを測る。

部分的に周壁溝をもち、幅は10~15cm、幅広い箇所では28cmであり、深さは5~10cmを測る。遺存範囲内では南東コーナーと東壁側に周壁溝は存在しなかった。

ごく部分的に貼り床されているが、大部分は地山を床面としており、硬化も少ない。カマド内は焼土・炭化物が少なく、焼け方も少なかった。出土遺物はきわめて少なく、実測し得た遺物はいずれも破片で、土師器環1点・甕1点、須恵器環4点の計6点である。

第42号住居跡 (第77・79図)

114-92グリッドに位置する。S J43を切る。

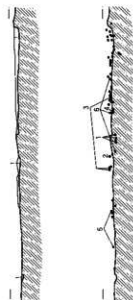
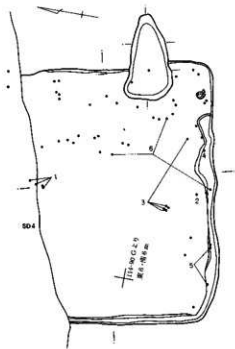
プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは3.53×2.73×0.13mである。主軸方向はN-13°-Wである。カマド2基が検出されている。

カマド(1)は東壁の南寄りに設けられ、全長1.1m・幅0.57mを測る。3・4層は燃焼部に相当すると思われる。カマド(2)は北壁のやや東寄りに設けられ、全長1.63m・幅0.58mを測る。2・3層が燃焼部と、それに続く煙道部に相当し、燃焼部は楕円状を呈す。両カマド共に内部はあまり焼けていない。

住居跡の床面は、部分的に貼り床の痕跡が観察できたが大部分は地山を床面としており、床面の硬化も少ない。

遺物の出土は少ないが、大部分は床面直上であった。実測可能な遺物は、土師器環1、須恵器環3点の計4点である。

第76図 第41号住居跡

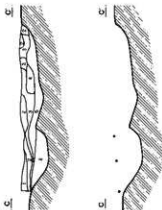
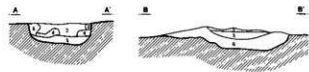
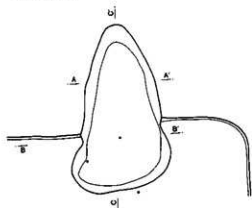


第41号住居跡土層

- 1 暗褐色土 焼土粒子・カーボン塵埃、しまりやや面
- 2 黒褐色土 焼土粒子・カーボン、しまりやや面

0 L=23.5m 2m

SJ41カマド



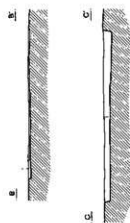
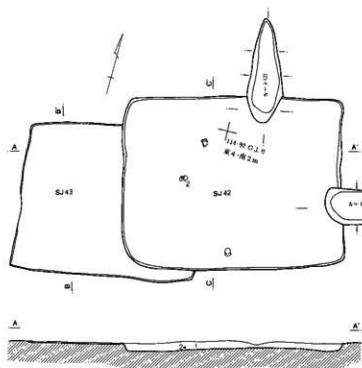
第41号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土粒子若干
- 3 黒褐色土 炭化物多、焼土微量、しまり強(灰層)
- 4 暗褐色土 炭化物・焼土粒子微量・黄褐色砂質土底(天井部)
- 5 暗褐色土 焼土粒子微量、しまり強
- 6 暗褐色土 焼土ブロック(φ1cm)多

0 L=23.5m 1m



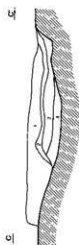
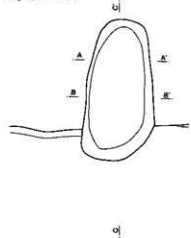
第77図 第42・43号住居跡



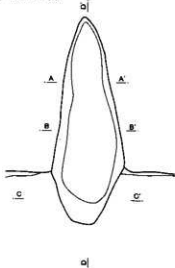
第42号住居跡土層  
1 灰褐色土 焼土粒子・緑灰色の粘土粒下少



S J 42 カマド(1)



S J 42 カマド(2)



A A'



第42号住居跡カマド(1)

- 1 暗褐色土
- 2 暗赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 黒色土

B B'



第42号住居跡カマド(2)

- 1 暗赤褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 黒色土

C C'



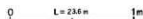
A A'



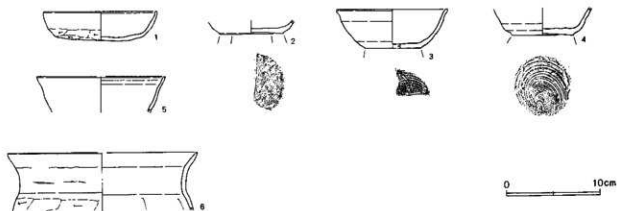
B B'



C C'



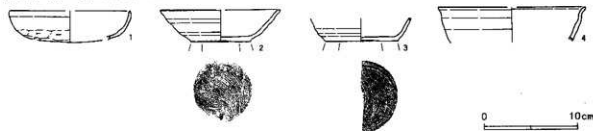
第78図 第41号住居跡出土遺物



第30表 第41号住居跡出土遺物観察表(第78図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	上脚器環	12.2	3.1	—	ABCF	普通	赤褐色	体80	器面は摩滅
2	須恵器環	—	1.5	(6.6)	E	普通	灰褐色	底45	R B b
3	須恵器環	(11.9)	4.1	(6.0)	DEH	普通	灰褐色	口25	L C
4	須恵器環	—	3.0	6.5	—	普通	灰褐色	底100	R C
5	須恵器環	(14.0)	3.8	—	CEH	普通	灰黒/灰褐色	口20	ロクロ成形
6	土師器甕	(20.3)	6.3	—	ACEF	普通	暗茶褐色	口30	風化している 口:内外横ナデ 胴(外):篋割り (内):篋ナデ

第79図 第42号住居跡出土遺物



第31表 第42号住居跡出土遺物観察表(第79図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	上脚器環	(12.9)	3.0	—	ADEH	普通	茶褐色	口35	器面風化 口:内外面横ナデ 体(外):篋割り
2	須恵器環	(12.9)	3.4	6.3	CEII	普通	灰褐色	底100	R B b 覆土
3	須恵器環	—	2.4	(7.6)	CEH	普通	灰褐色	底45	B b
4	須恵器環	(15.7)	3.6	—	CEII	普通	灰褐色	口25	ロクロ成形 覆土

第43号住居跡(第77図)

114-92グリッドに位置する。S J 41の東約10m、S J 44の北西約2.4mの距離に相当する。S J 42に切られる。

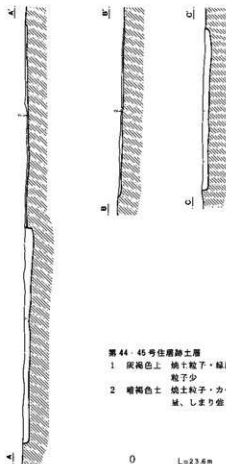
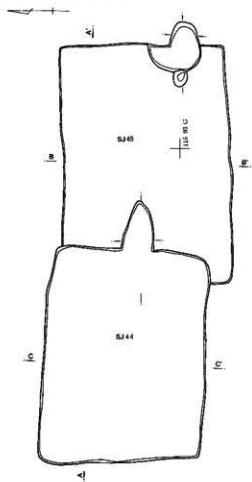
やや正方形に近い長方形を呈し、コーナー部分は明瞭に屈曲する。長径×短径×深さは2.95×2.38×0.02 mである。主軸方向はN-14°-Wを指す。

住居跡の遺存度はきわめて悪く、遺構確認面と住居跡床面はほとんど同レベルであり、壁面の検出は困難であった。

北壁の東側半分と東壁の大部分が失われており、カマドも検出されなかった。掘り方は検出されず、地山を床面としており、床面の硬化も少なかった。

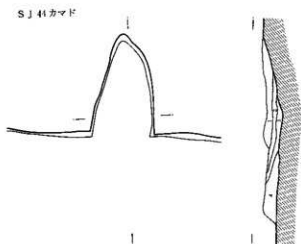
遺物はまったく検出されなかった。

第80図 第44・45号住居跡

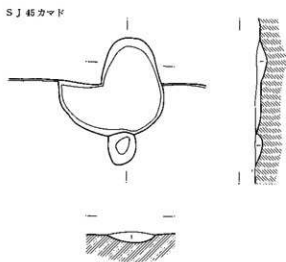


第44・45号住居跡土層

- 1 灰褐色土 焼土粒子・緑灰色粘土  
粒子少
- 2 暗褐色土 焼土粒子・カーボン  
質、しまり盛・粘性弱



SJ44カマド



SJ45カマド



第44号住居跡カマド

- 1 赤褐色土 焼土粒子多、カーボン  
少、しまり・粘性弱
- 2 暗褐色土 焼土粒子多、カーボン  
少、しまり・粘性弱
- 3 灰褐色土  
カーボン多、しまり・  
粘性弱

第45号住居跡カマド

- 1 赤褐色土 焼土粒子多、しまり・粘性弱

0 L=23.5m 1m

## 第44号住居跡 (第80・81図)

114・115-92グリッドに位置する。S J 42・43の南約2.4m、S J 46の西18m、S J 53の北西約16mの距離にあたる。S J 45を切る。

プランは主軸方向に長い隅丸の長方形を呈する。長径×短径×深さは3.46×2.62×0.16mである。主軸方向はN-91°-Eである。

カマド1基が、東壁のほぼ中央に検出されている。カマドは全長1.49m・幅0.51mを測る。3・4層は燃焼部に相当する。灰層は比較的厚く、他の住居跡に比べてカマド内部は焼けている部類にはいる。

壁面付近にごく部分的に貼り床されているのが観察されたが、大部分は砂地を主体とする地山をそのまま床面として使用していると思われる。また、床面の硬化も少ない。床面は比較的凹凸が少なく、平坦である。

出土した遺物は少なく、図化したのは土師器環1・甕2、須恵器環1の計4点である。

## 第45号住居跡 (第80図)

114・115-92・93グリッドに位置する。主軸方向に長い長方形を呈し、コーナー部分は比較的明瞭に屈曲する。長径×短径×深さは3.78×2.73×0.1mである。主軸方向はN-88°-Eである。

カマドが1基、東壁の南東コーナー寄りに検出されている。カマドは全長約0.76m・焚口幅0.48mを測る。前庭部に26×22cm・深さ6cmのピットがあるが、覆

土はカマドと同じであり、焚口施設あるいは掻き出し穴などのカマドに伴う施設であろう。

住居跡の遺存状況はきわめて悪く、遺構確認面と住居跡床面はほとんど同じレベルであり、壁面の立ち上がりはごく僅かであった。

S J 44と同様に、砂地を主体とする地山を、住居床面として使用していると思われる。

遺物は出土しなかった。

## 第46号住居跡 (第82・83図)

114-94・95グリッドに位置する。主軸方向に長い長方形を呈する。長径×短径×深さは4.19×2.94×0.22mである。主軸方向はN-79°-Eである。

東壁は北側半分(=カマド北側)が、コーナー部分に丸味をもちながら0.7mほど張り出す。

北東コーナーと南東コーナーに小穴があるが、前者は遺物が検出されていることから貯蔵穴と推定した。

途中途切れはするものの、周壁溝が南壁・西壁・北壁に巡らされている。周溝は幅10~15cm・深さ10cm程である。カマド1基が東壁中央より僅かに南寄りに検出されている。カマドは現存長1.59m・焚口幅0.63m、標出部をピットに切られている。住居跡は砂地を主体とする地山を床面としているが、カマドは掘り方をもつ(10層)。6層・7層は焚口から煙出に相当する。

出土遺物は少数で、土師器環3・甕1、須恵器環1、鉄製刀子1と線刻をもつ石製紡錘車1の計7点である。

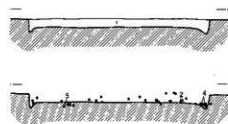
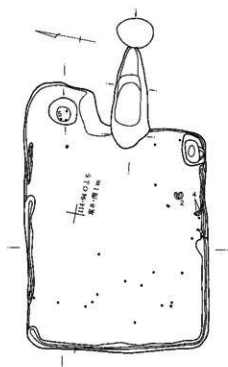
第81図 第44号住居跡出土遺物



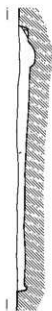
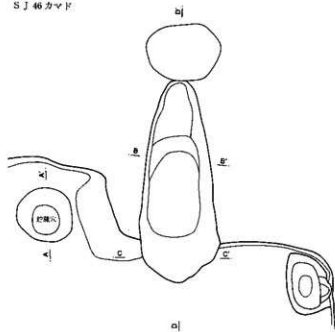
第32表 第44号住居跡出土遺物観察表(第81図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.5)	2.5	—	ADEH	普通	橙褐色	Π20	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):寛削りか 覆土
2	須恵器環	(12.0)	3.0	—	DEH	普通	青灰色	Ⅱ15	ロクロ成形 覆土
3	土師器甕	(20.9)	8.2	—	ACE	普通	茶褐色	Π20	風化著 口:内外面横ナテ 胴(外):底削り(内):底ナテか 覆土
4	土師器甕	—	7.5	—	ABCEF	普通	茶褐色	Ⅱ15	風化著 口:内外面横ナテ 胴(外):底削りか(内):底ナテか

第82図 第46号住居跡



SJ 46 カマド



第45号住居跡土層

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・マンガシ
- 2 暗褐色土 暗黄褐色土(透土上)ブロック遺入

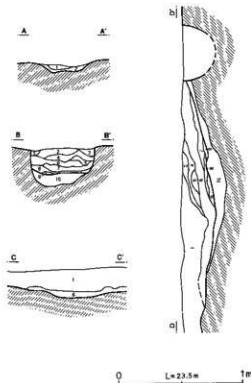
第45号住居跡カマド

- 1 暗黄褐色土 暗褐色土ブロック若干、しまり・粘性やや弱
- 2 暗黄褐色土 1層に類似するが、焼土粒子の混入あり、しまり・粘性やや弱
- 3 黄褐色土 ほぼ地山、カマド側壁、天井のオーバー・ハング部分、内面が若干焼けている、しまりやや弱、粘性弱
- 4 暗黄褐色土 1層に類似、焼土粒子混入なし、しまり・粘性やや弱
- 5 暗黄褐色土 下面に焼土粒子多
- 6 暗灰褐色土 焼土粒子微量(灰層1)
- 7 暗黄褐色土 全体的に被熱のため若干赤色化している、しまり・粘性やや弱
- 8 暗灰褐色土 焼土粒子2~3%混入、しまりやや弱・粘性弱(灰層2)
- 9 暗黄褐色土 全体的に被熱のため、若干赤色化している(灰層の焼けた部分か)しまり強・粘性やや弱
- 10 暗黄褐色土 砂土粒子をブロック状に多、しまり・粘性やや弱、10層以上が使用面か(掘方)

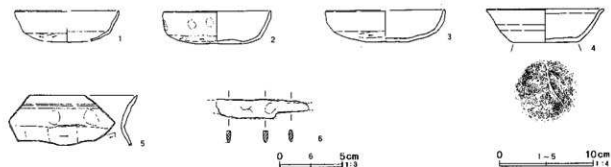
第46号住居跡貯蔵穴土層

- 1 暗褐色土 しまり弱、粘性やや弱
- 2 暗灰褐色土 焼土粒子、しまり・粘性弱

0 L=23.6m 2m

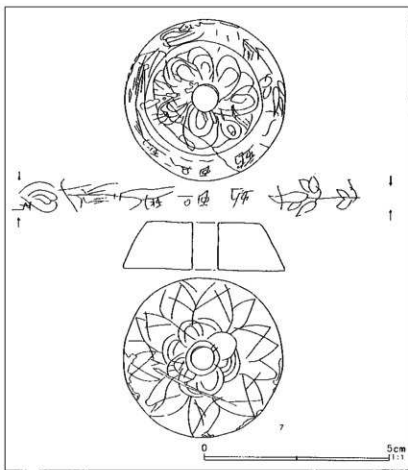


第83図 第46号住居跡出土遺物



6は鉄製（鍛造）の刀子の一部と思われるが、錆化著しく原形をとどめていない。刃部と基部の一部分と思われる。現存長7.4cm・現存刃幅1.6cmを測る。

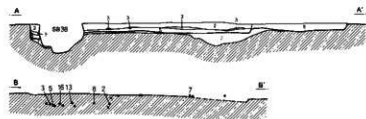
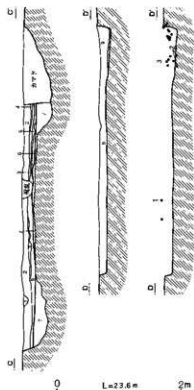
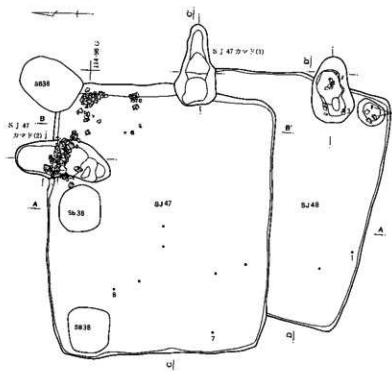
7は紡錘車である（凝灰岩製）。ほぼ完形。上径3.2cm・下径4.3cm・厚さ1.2cm・孔径0.7cm、重さ37.1gを測る。実測図は本来広い面を上にするべきとの意見もあるが、側面の線刻を正位とすることを優先した。3面ともに線刻をもつ。上・下面の意匠は花卉で線刻も比較的明瞭である。下面是蓮華であろうか。側面の線刻は不明瞭で、内容の判読も困難である。植物を側面から描いたようなものと、文字・記号状の、1つ1つか独立して描かれているものとが存在する。



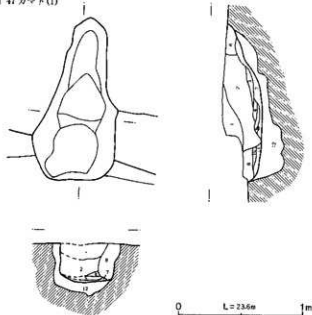
第33表 第46号住居跡出土遺物観察表(第83図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	(11.1)	(3.3)	—	ABCDEF	普通	茶褐色	口20	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):艶削りか (内):ナテか
2	土師器杯	11.4	3.5	—	ACFHI	普通	灰褐/黒斑	口80	口:内外面横ナテ 体(外):艶削り (内):ナテ
3	土師器杯	(12.6)	3.4	—	ACDEFH	普通	橙褐色	体30	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):艶削りか (内):ナテか
4	須恵器杯	12.5	3.6	6.4	—	不良	灰褐/橙褐	底95	口:クロ成形 RC
5	土師器甕	—	5.3	—	ADEF	普通	暗茶褐色	口10	口:罐部内外横ナテ 頸:内外ナテ 胴(外):艶削 (内):艶ナテ

第84図 第47・48号住居跡(1)



S J 47 カマド(1)



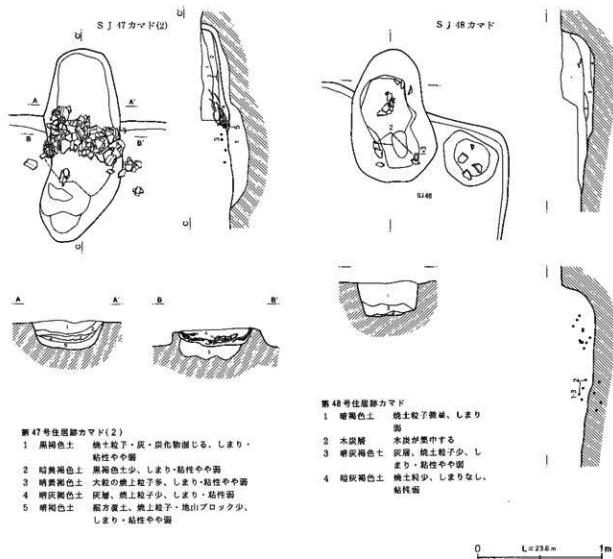
第47・48号住居跡土層

- 1 無褐色土 焼土粒子・灰濁入
- 2 暗褐色土 焼土灰土・炭化物粒子微量
- 3 黄褐色土 上層に薄い灰層あり(カマド付近)
- 4 炭化物層 炭化した木質の炭化層
- 5 暗褐色土 2層に近似
- 6 黄褐色土 3層に近似
- 7 暗褐色土 地山ブロック多(風刀)
- 8 暗黄褐色土 地山に近似、粘性あり
- 9 炭化物層 4層に近似

第47号住居跡カマド(1)

- 1 暗褐色土 焼土粒子微量、しまり・粘性やや弱
- 2 暗茶褐色土 地山ブロック・赤色下したブロック少  
しまり・粘性やや弱、天井部か
- 3 暗褐色土 地山土混入、しまり・粘性やや弱
- 4 暗赤褐色土 暗褐色土が被熱のため赤化した層、しまり・粘性やや弱
- 5 暗灰褐色土 灰層、焼土粒子30~40%混入、しまり・粘性弱
- 6 暗褐色土 焼土粒子少、しまり・粘性弱、煙突部分か
- 7 暗灰褐色土 硬質純粋な灰層、焼土粒子少、しまり・粘性弱
- 8 暗褐色土 焼土粒子少、しまり・粘性やや弱
- 9 暗茶褐色土 地山ブロック若干、しまり・粘性やや弱
- 10 暗茶褐色土 焼土粒子少、しまり・粘性やや弱
- 11 暗灰褐色土 灰層、焼土粒子少、しまり・粘性弱
- 12 暗褐色土 地山ブロック多(風刀)

## 第85図 第47・48号住居跡(2)カマド



## 第47号住居跡 (第84~86図)

113・114-95・96グリッドに位置する。S J 48を切り、S B38に切られる。プランは主軸方向にやや長い隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは4.32×3.55×0.23mである。主軸方向はN-89°-Eである。

カマド2基が検出されている。カマド(1)は東壁中央よりやや南寄りに設けられている。全長1.28m・焚口幅0.66mを測る。掘り方は12層、10・11層は焚口部、4・5層は燃焼部、6層は煙出部に相当し、2層は天井部からの崩落土と思われる。内部はよく焼けている。カマド(2)は全長1.5m・焚口幅0.61mを測る。掘り方は5層、燃焼部は3・4層に相当すると思われる。内部

はよく焼けている。

平面図には図化されていないが、ドーナツ状の掘り方をもつ。貼り床は5層直下で、黄褐色粘土粒子を主体とするが、非常に薄いため図化し得なかった。3層もこれと類似しており、2次床面の可能性がある。

カマド(2)~北東コーナーにかけて土師器環・甕の破片が床面から浮いた状態でまとまって出土している。

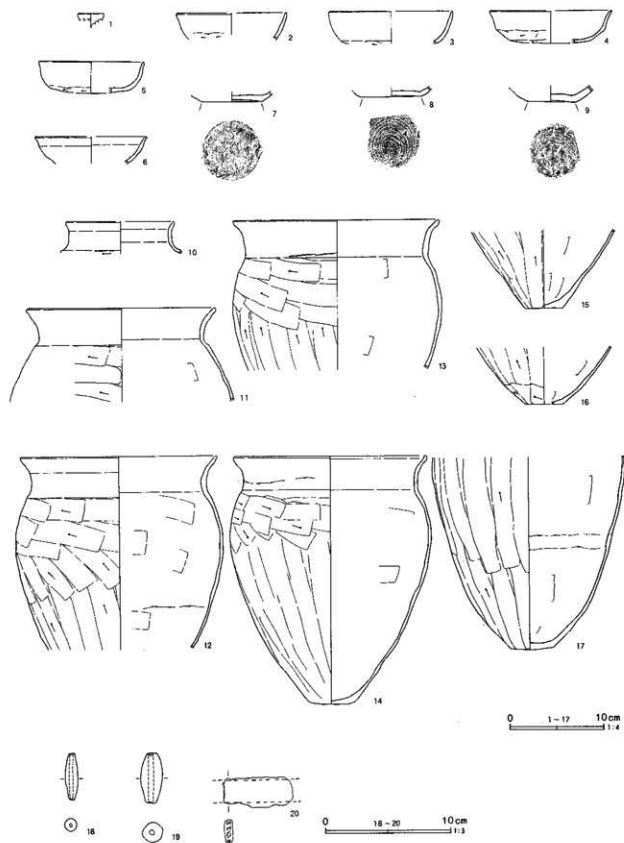
## 第48号住居跡 (第84・85・87図)

114-95グリッドに位置する。S J 47に切られる。主軸方向に長い長方形を呈すると考えられる。長径3.79m、短径は2.90mまで確認できた。深さ0.17mを測る。

東壁は中央付近でやや屈折しており、西壁のプラン



第86图 第47号住居跡出土遺物



と平行しない。主軸方向はN-103°-Eである。

東壁付近は浅い掘り方をもち、貼り床されている(9層)が、その他の部分は砂地を主体とした地山を床面としている。

カマド1基が東壁中央より南寄りに設けられている。カマドは全長1.05m・焚口幅0.59mを測る。3・4層は燃焼部に相当すると思われる。カマドに向かっ

て右側、南東コーナーに存在する楕円形の小穴は平面規模は0.46m・0.36m、深さは8cmを測る。遺物も出土していることやその位置・形状等から貯蔵穴と推定した。

図化し得た遺物は土師器環1・台付き甕1、須恵器蓋1、土鍾1の計4点である。

第34表 第47号住居跡出土遺物観察表(第86図)

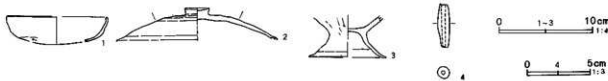
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	—	—	—	EH	普通	灰褐色	—	クロコ成形
2	土師器環	11.8	2.8	—	ACEFH	普通	茶褐色	—	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):甕割りか (内):甕ナテか
3	土師器環	(13.1)	3.4	—	ACEFH	普通	茶褐色	口15	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):甕割り
4	土師器環	(13.1)	(3.5)	—	ACEF	普通	茶褐色	口15	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):甕割り (内):ナテか
5	土師器環	(11.6)	(3.4)	—	AEF	普通	茶褐色	口35	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):甕割り(内):ナテか カマド2
6	須恵器環	(11.9)	2.8	—	EH	普通	灰褐色	口20	クロコ成形
7	須恵器環	—	1.1	6.3	AEH	良	暗灰褐色	底100	クロコ成形 A
8	須恵器環	—	1.1	(6.2)	EII	普通	灰褐色	底80	クロコ成形 RC
9	須恵器環	—	1.8	3.3	AEH	普通	灰褐色	底95	クロコ成形 RC カマド
10	土師器環	(11.4)	3.4	—	ACEF	普通	茶褐色	口30	口:内外面横ナテ 胴(外):甕割り (内):甕ナテか カマド2
11	土師器環	20.1	9.9	—	AEH	普通	茶褐色	口80	口:内外面横ナテ 胴(外):甕割り (内):甕ナテ カマド2
12	土師器環	21.0	22.0	20.4	EH	普通	明褐色	口90	口:内外面横ナテ 胴(外):甕割り (内):甕ナテ カマド2
13	土師器環	22.0	15.7	—	ACEFH	普通	橙褐色	口70	口:内外面横ナテ 胴(外):甕割り スス付き (内):甕ナテ
14	土師器環	20.6	26.4	4.8	ACE	普通	明茶褐色	底100	口:内外面横ナテ 胴-長(外):甕割り (内):甕ナテ
15	土師器環	—	8.3	4.0	EII	普通	明褐色	底50	(外):甕割り (内):甕ナテ カマド2
16	土師器環	—	6.1	3.9	AEFH	普通	橙褐色	底80	(外):甕割り (内):甕ナテ
17	土師器環	—	20.6	4.5	ABEH	普通	茶褐色	—	外面スス付き (外):甕割り (内):甕ナテ カマド2

18・19:土鍾。18:茶褐色、完形。焼成:普、AEH。全長3.7cm・径1.0cm・孔径0.2cm、重さ3.9g。a区出土。19:茶褐色、完形。焼成:普、AEH。全長3.9cm・

径1.7cm・孔径0.4cm、重さ3.9g。b区出土。

20:鉄製刀の一部が向端部に欠く。錆化著しく、原形をとどめていない。d区出土。現存長5.5cm。

第87図 第48号住居跡出土遺物



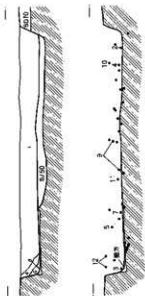
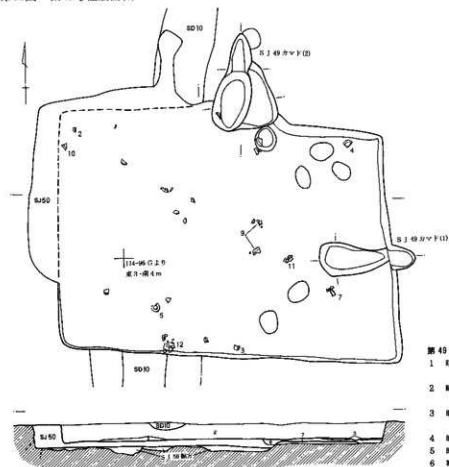
第35表 第48号住居跡出土遺物観察表(第87図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(10.6)	(3.0)	—	ADEH	普通	茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 体(外):甕割りか (内):ナテか
2	須恵器蓋	—	3.6	—	EH	普通	灰白色	体30	クロコ成形 天骨部:甕割り(クロコ右回転) 貯穴
3	土師台付甕	—	4.5	(8.2)	ABCDE	普通	茶褐色	脚25	器面風化 胴:内外面横ナテ 甕割り 脚部:内外面横ナテ カマド

4は土鍾である。橙褐色の表面に黒斑を有する。一方の端部を欠損する。焼成は普通、胎土:ACE。現存

長3.4cm・最大径0.9cm・孔径0.3cm、3.08gを測る。セクション・ベルト内出土。

第88図 第49号住居跡(1)

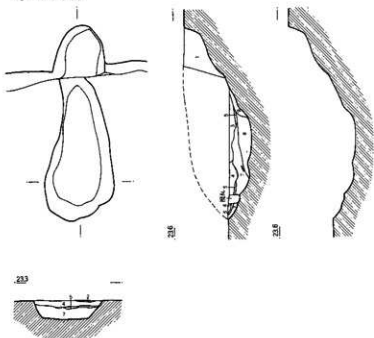


第49号住居跡土層

- 1 暗褐色土 焼土粒子・マンガシ・炭化物粒子少、しまり・粘性弱
- 2 暗褐色土 1層に互傾、地山ブロック(φ5cm)少
- 3 暗灰褐色土 灰層・焼土粒子少、しまり・粘性弱
- 4 暗黄褐色土 しまり・粘性あり
- 5 暗褐色土 3層とほぼ同じ
- 6 暗褐色土 焼土粒子少、SJS0の覆土か
- 7 暗褐色土 覆土、地山ブロック混じる
- 8 暗褐色土 焼土粒子少

0 L=23.7m 2m

S J 49 カマド(1)

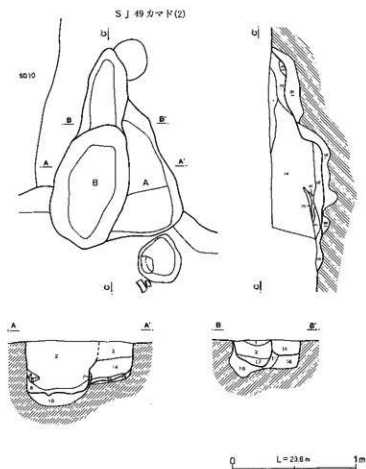


第49号住居跡カマド(1)

- 1 暗褐色土 焼土粒(φ3~4cm)少、しまり・粘性やや弱
- 2 暗灰褐色土 灰層・焼土粒子少、しまりなし、粘性弱
- 3 暗褐色土 焼土粒(φ1cm)少、しまり・粘性ややあり
- 4 暗灰褐色土 地山ブロック・灰・焼土粒少、しまり・粘性やや弱
- 5 暗灰褐色土 灰層、炭化物・焼土粒・上層片少、しまり・粘性やや弱
- 6 暗褐色土 被熱のためやや赤色化している
- 7 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物・灰・上層片少、しまり・粘性やや弱
- 8 暗灰褐色土 6層に近傾、地山ブロック(φ1cm)少
- 9 暗褐色土 焼土粒子少、しまり・粘性やや弱

0 1m

## 第89図 第49号住居跡(2)カマド



- 第49号住居跡カマド(2)
- 1 暗褐色土 焼土粒子微量、しまり・粘性弱
  - 2 暗褐色土 地山小ブロック(φ1.5cm)の腐土層、焼土粒子微量、しまりやや弱
  - 3 暗赤褐色土 2層に近似するが焼熟している、しまり・粘性弱
  - 4 暗赤褐色土 2層に近似するが焼熟している、しまり・粘性弱
  - 5 暗褐色土 焼土粒子(φ1cm)若干
  - 6 暗褐色土 焼土粒子(φ1cm)若干
  - 7 暗灰褐色土 灰層、暗褐色土ブロック(φ1.5cm)・焼土粒子少
  - 8 暗灰褐色土 灰層、焼土粒子(φ0.5~1cm)微量
  - 9 暗灰褐色土 8層に近似するが、焼土粒子ほとんど含まない
  - 10 暗褐色土 カマドを穿りかえたとき壁にはりつけた土か、しまり・粘性弱
  - 11 暗褐色土 カマドを穿りかえたとき壁にはりつけた土か、しまり・粘性弱
  - 12 暗赤褐色土 焼土含まない、しまり・粘性弱
  - 13 黒褐色土 焼土含まない、しまり・粘性弱
  - 14 暗褐色土 焼土粒子(φ1~2cm)若干、しまり・粘性弱
  - 15 暗灰褐色土 灰層、焼土粒子(φ1~2cm)少、しまり・粘性弱
  - 16 暗赤褐色土 焼土粒子微量、しまり・粘性弱(腐方)
  - 17 黒褐色土 炭・焼土ブロック(φ2cm)若干、しまり・粘性やや弱
  - 18 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒子・灰化物少、しまり・粘性やや弱(腐方度十)
  - 19 暗褐色土 焼土粒子少、しまり・粘性やや弱(腐方度十)

## 第49号住居跡 (第88~90図)

114-96グリッドに位置する。S J 50・SD10を切る。長方形を呈する。長径×短径×深さは5.4×4.03×0.38mである。主軸方向はN-1°Eである。

カマド2基が検出されている。カマド(1)は東壁中央よりやや南寄りに設置されており、全長1.53m・焚口幅0.55mを測る。5・7・8層は燃焼部、1層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は楕円状を呈し、煙道部は急勾配に立ち上がって煙出し部に至る。煙出し部は比較的よく焼けている。

カマド(2)はほぼ同じ位置で造り替えが行われており、ともにSD20を切る。1次はAカマドで現状では長さ1.04m・幅0.5mまで確認できた。16層は掘り方、14・15層は燃焼部に相当すると思われる。2次はBカマドで全長1.53m・焚口幅0.58mを測る。17・18層は掘り方、9層は焚口部、7・8層は燃焼部、12・

13層は煙道部、2層は天井の崩落土と思われる。カマド内部はよく焼けている。

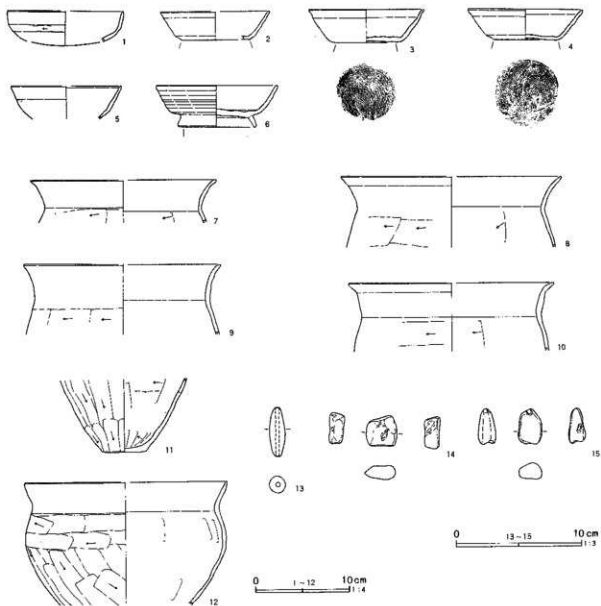
平面図には図示していないが、住居跡東側はごく浅い掘り方をもち貼り床されている(3層)。その他の部分については砂地を主体とする地山を床面として使用していると考えられる。

遺物の出土数は、今回の調査では比較的多い部類に属し、実測し得たのは、土師器7点・須恵器5点の他に土師1点、貝塚穴痕泥岩2点の計15点である。

13は土釜である。黒褐色、完形。焼成は普通である。胎土はACH、長さは3.8cm・径は1.3cm・孔径0.3cm、重さは8.1gを測る。

14・15は貝塚穴痕泥岩であると思われる。どちらも貝塚穴として明確なもののみはみられないが、今回貝塚穴痕泥岩として明確に判断できるものと土質がきわめて近く、二次的に被熱している点でも共通しているため、

第90図 第49号住居跡出土遺物



第36表 第49号住居跡出土遺物観察表(第90図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器 钵	(12.2)	3.7	—	ACE	普通	明褐色	U25	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):施削り(内):ナテカ 覆土
2	須恵器 钵	(11.8)	3.0	(6.3)	EH	普通	灰褐色	F35	ロクロ成形 C
3	須恵器 钵	12.0	3.2	7.0	CEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 RC ベルト
4	須恵器 钵	12.2	3.5	6.4	EH	普通	精灰褐色	—	ロクロ成形 RC 口縁上半(外):黒灰色
5	須恵器 钵	(11.9)	3.5	—	CEH	普通	黒灰色	U20	ロクロ成形
6	須恵器 高台 钵	13.0	4.4	台8.4	CDE	不良	精灰褐色	台75	ロクロ成形 C 高台型付か 底(外):黒書か?
7	土師器 钵	(19.6)	4.5	—	ACEH	普通	暗褐色	U25	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):鏡ナテ
8	土師器 钵	(23.5)	7.5	—	ACEH	普通	茶褐色	U25	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):鏡ナテ カマド
9	土師器 钵	(21.0)	7.4	—	ACEFH	普通	橙褐色	—	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):鏡ナテカ
10	土師器 钵	(21.8)	7.2	—	ACFH	普通	明褐色	—	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):鏡ナテ
11	土師器 钵	—	7.8	4.8	AELI	普通	茶褐色	底95	器面風化 (外):施削り(内):鏡ナテ
12	土師器 钵	(21.5)	13.0	—	ACDEH	普通	明褐色	F30	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):鏡ナテ

貝果穴底底岩の可能性が高いと判断して、ここに掲載することにした。

14: 縦に割れた貝果穴と思われる痕跡が、1箇所ではあるが観察される。暗オリーブ色。2.5×2.4×1.2cm、5.4gを測る。

15: 貝果穴と思われる痕跡が2箇所有り。明赤褐色。2.8×1.8×1.3cm、4.3gを測る。

#### 第50号住居跡 (第88・91・92図)

114-96グリッドに位置する。SD10を切り、S J 49に切られる。プランは隅丸長方形を呈する。

長径×短径×深さは3.88×3.08×0.39mである。主軸方向はN-1-Eである。

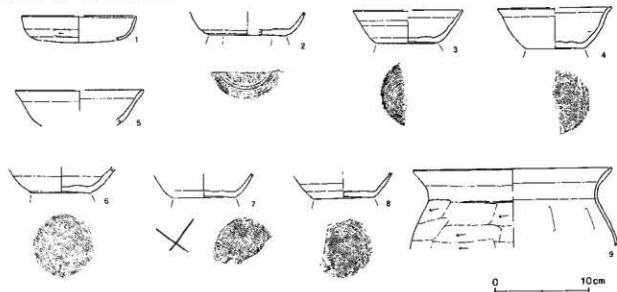
カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央に

設けられており、煙出部は一部擾乱を受けている。全長1.84m・焚口幅0.44mを測る。カマドの遺存状況は比較的良好で、煙道部がトンネル状に残っている箇所もあった。前庭部にある平面規模は38×29cm・深さ22cmの土壇状の深みは、焚口の灰を掻き出すさいにできたものであろうか。9層は掘り方、5・6層は燃焼部～煙道部、1・2層は天井部に相当すると考えられる。

住居跡は掘り方をもち(7層)、黄褐色粘土粒子を主体とした土で貼り床されているが、貼り床自体はきわめて薄いため固化し得なかった。貼り床面は、地山をそのまま床面としている住居跡に較べて若干硬化していた。

出土遺物は少なく、固化し得たのは計9点である。

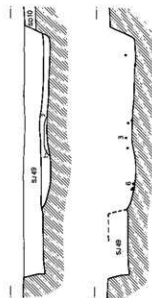
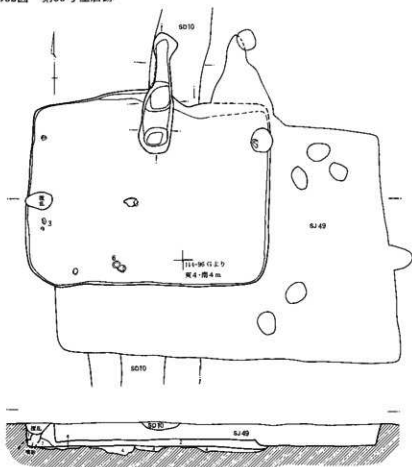
第91図 第50号住居跡出土遺物



第37表 第50号住居跡出土遺物観察表(第91図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	(12.1)	(2.8)	—	ACEH	普通	茶褐色	口25	器面風化 口:内外両横ナデ 体(外):荒削り カマドたき口部
2	須恵器杯	—	2.5	(8.3)	EFH	普通	灰褐色	底40	口口成形 RB b ベルト
3	須恵器杯	(11.7)	3.5	(6.0)	EH	普通	暗灰褐色	口35	口口成形 RC
4	須恵器杯	(12.0)	3.4	6.3	DEH	普通	灰褐色	底55	口口成形 RC
5	須恵器杯	(13.6)	3.7	—	EH	普通	灰褐色	口15	口口成形
6	須恵器杯	—	2.8	6.3	CDEH	普通	灰褐色	底100	口口成形 RC
7	須恵器杯	—	3.5	(6.7)	CFH	普通	暗灰褐色	底50	口口成形 RC 鑑記号有
8	須恵器杯	—	2.7	(6.5)	EH	普通	灰褐色	底60	口口成形 RC 摺方d区
9	土師器甕	21.2	8.3	—	ACEFII	普通	酸褐色	—	器面風化 口:内外両横ナデ 胴(外):荒削り カマド煙突

第92図 第50号住居跡

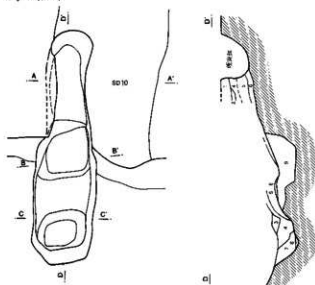


第50号住居跡土層

- 1 暗褐色土 炭化物微量、マンガン沈着、しまり・粘性弱
- 2 暗褐色土 焼土粒子少、重積する住居跡の覆土か
- 3 暗褐色土 焼土粒子少
- 4 暗褐色土 地山ブロック(φ1~1.5cm)少、(黒方)

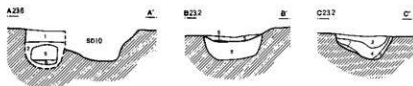
0 L=23.7m 2m

SJ50カマド



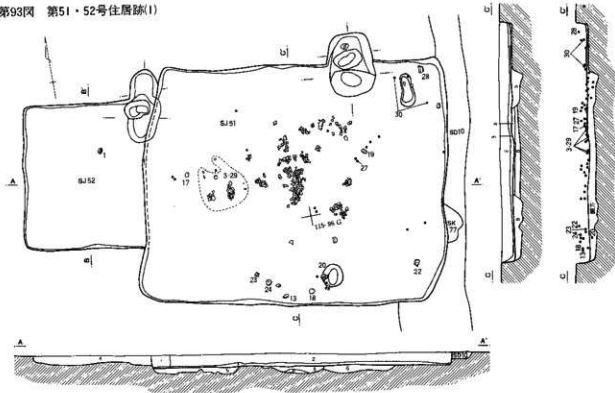
第50号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 しまり・粘性やや弱、犬丹部
- 2 赤褐色土 天井部下面・側面の積れた部分、しまりやや弱・粘性弱
- 3 暗褐色土 地山ブロック若下、しまりやや弱・粘性やや強
- 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物・地山ブロック少、灰層、しまり弱・粘性やや弱
- 5 暗褐色土 焼土粒子若干、しまり・粘性やや強
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少、灰層、しまり弱・粘性やや弱
- 7 褐色土 やや砂質・焼土粒子少、しまり・粘性やや弱
- 8 暗褐色土 しまりやや弱・粘性やや強
- 9 褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少く含まない肥方覆土、しまり・粘性やや弱



0 1m

## 第93図 第51・52号住居跡(1)

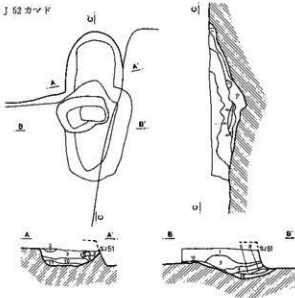


## 第51-52号住居跡土層

- 1 暗褐色土 砂粒ブロック(φ3cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少、しまり強・粘性弱
- 2 灰黄褐色土 砂粒ブロック(φ3cm)少、炭化物粒子微量、しまり強・粘性弱(黏床)
- 3 暗褐色土 地山ブロック少、遺物若干
- 4 暗褐色土 地山ブロック若干
- 5 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少、しまり・粘性強、溝状遺構
- 6 暗褐色土 焼土粒子多、炭化物粒子少、しまり強・粘性弱

0 L=23.6m 2m

## S J 52号カマド



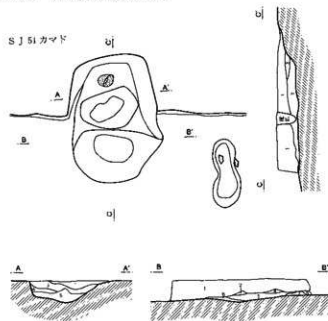
## 第52号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子・黄褐色土ブロック少
- 2 暗黄褐色土 焼土粒子多
- 3 暗黄褐色土 2層よりも色調明るい
- 4 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒子・灰少
- 5 暗黄褐色土 2層に近似、焼土粒子多
- 6 黄褐色土 ほぼ純粋な地山土
- 7 黄褐色土 ほぼ純粋な地山土
- 8 黄褐色土 ほぼ純粋な地山土
- 9 黄褐色土 ほぼ純粋な地山土
- 10 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子若干、灰層
- 11 暗赤褐色土 煙道下面の続いた部分

0 L=23.5m 1m



第94図 第51号住居跡(2)カマド



第51号住居跡カマド

- 1 暗黄褐色土 焼土粒子若干、しまり・粘性やや弱
- 2 暗褐色土 焼土粒子若干、しまり・粘性やや弱
- 3 暗褐色土 灰層、焼土粒子・炭化物粒子若干、しまり・粘性やや弱
- 4 暗灰褐色土 灰層、焼土粒子若干、ほぼ純粋な灰層、しまり・粘性弱
- 5 暗灰褐色土 灰層、暗褐色土若干混じる点で4層と異なる、焼土粒子やや多、しまり・粘性やや弱
- 6 暗褐色土 焼土粒子(φ0.5~1cm)少、しまり・粘性やや弱
- 7 暗黄褐色土 ほほ地山、焼残存部か

第51号住居跡 (第93~96図)

114・115-95・96グリッドに位置する。S J 52・S D 10・S K 77を切る。プランはやや不整形な長方形を呈する。長径×短径×深さは4.86×3.87×0.42mである。主軸方向はN-10°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より東寄りに設けられている。全長1.01m・焚口幅0.71mを測る。カマドは焚口が若干窪みをもつが、全体的に水平面に近く、煙道部は緩やかに立ち上がる。

4・5層は燃焼部、2層は天井部に相当すると思われる。カマド内からは、支脚に使用されたと推定される石が1点出土した。

住居跡は比較的遺存状況が良好で、壁面の立ち上がりは明確である。掘り方(6・7層)は地山ブロックを含む暗褐色上で、砂粒ブロックを含む灰黄褐色の貼り床(3層)との違いは明確である。貼り床面は部分的に硬化していた。

また、この貼り床面の直下には、断面図に図化し得ないほど薄い土層ではあるが、灰褐色粘土粒子を主体とする層が1枚あり1次貼り床面の可能性がある。この場合、3層は2次貼り床面ということになる。

4・21は掘り方内からの出土、その他は2次貼り床

面上からの出土である。

実測し得た遺物は、土師器杯8・甕4、須恵器蓋3・杯14、灰桶陶器1、土鏝1、貝果穴泥岩2、計33点である。

第52号住居跡 (第93・97図)

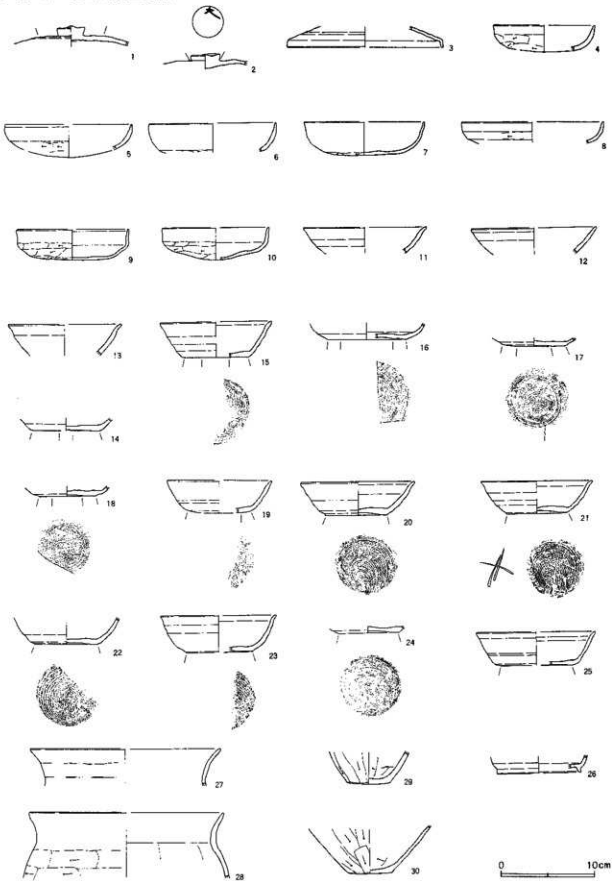
114-95グリッドに位置する。S J 51に切られる。プランは長方形を呈すると思われる。平面規模は主軸方向(南北)に2.35m、東西は2.08mまで計測できた。深さは0.18mである。主軸方向はN-10°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁に設けられているが、中央にあるのか一方によっているかは不明である。カマドは全長1.18m・焚口幅0.52mを測る。10層は燃焼部~煙道部、2・3層は天井部に相当すると思われる。燃焼部は窪みをもつが、灰の掻き出しによるためであろうか。煙道は30度程度の傾斜で立ち上がる。

東側半分をS J 51に切られているほかは、住居跡の遺存度は比較的良好で、壁面の立ち上がりも明確である。住居跡は掘り方をもたず、砂粒を主体とした地山を床面としている。床面には明確な硬化は観察できなかった。

実測し得た遺物は、計2点である。

第95图 第51号住居跡出土物(1)



第96図 第51号住居跡出土遺物(2)



第38表 第51号住居跡出土遺物観察表(第95図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	楕2.9	2.2	—	ACEH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 内弁部: 施削り
2	須恵器蓋	楕3.2	1.5	—	CEH	普通	灰白色	楕100	ロクロ成形 天弁部: 施削り ロクロ右回転 黒吉石「大」か
3	須恵器蓋	16.7	2.3	—	EII	普通	青灰色	—	ロクロ成形 端部横ナデ
4	土師器環	(10.8)	(2.8)	—	ACDEF	普通	赤褐色	口20	器面風化 口: 内外面横ナデ 胴(外): 施削り(内): ナデか 掘方
5	土師器環	(13.6)	(3.5)	—	ACEH	普通	茶褐色	口30	器面風化 口: 内外面丁寧な横ナデ 体: 内外ナデ・施削 掘方
6	土師器環	(13.4)	3.1	—	ACEF	普通	赤褐色	口25	口: 内外面横ナデ 体(外): 施削り(内): ナデか
7	土師器環	(12.8)	3.6	—	ACDEH	普通	橙褐色	口60	器面風化 口: 内外面横ナデ 体(外): 指ナデ・施削り カマド
8	土師器環	(15.0)	2.3	—	ACEFH	普通	赤褐色	口20	器面風化 口: 内外面横ナデ 体(外): 施削り(内): ナデか
9	土師器環	(12.0)	3.3	—	CEF	普通	明褐色	口25	口: 内外面横ナデ 体(外): 施削り(内): ナデ ベルト
10	土師器環	(11.8)	(3.4)	—	ACDEH	普通	明褐色	体25	口: 内外面横ナデ 体(外): 施削り(内): ナデか ベルト
11	土師器環	(13.1)	2.7	—	EH	普通	灰白色	口20	ロクロ成形
12	須恵器環	(13.4)	2.8	—	CDE	小良	橙褐色	口25	器面風化 ロクロ成形 C区カマド
13	須恵器環	(12.2)	3.3	—	CEH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形
14	須恵器環	—	1.4	7.2	AEII	普通	白灰色	底30	ロクロ成形 L B a
15	須恵器環	(11.8)	3.7	16.8	CEH	普通	灰褐色	口40	ロクロ成形 底: 施削り
16	須恵器環	—	1.8	(8.3)	CEII	普通	灰褐色	底35	ロクロ成形 B b
17	須恵器環	—	0.9	6.6	—	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 B b
18	須恵器環	—	1.1	6.1	CEH	普通	灰褐色	底85	ロクロ成形 B b
19	須恵器環	(11.1)	(3.5)	(6.8)	EH	良	暗灰褐色	口35	ロクロ成形 B b
20	須恵器環	12.1	3.5	6.6	CE	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 R C
21	須恵器環	12.0	3.4	6.5	CEII	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 R C 施削り有 a区掘方
22	須恵器環	—	2.7	6.8	AEH	普通	黒灰色	底75	ロクロ成形 R C
23	須恵器環	(12.3)	3.4	7.2	CE	普通	橙灰色	口30	ロクロ成形 C
24	須恵器環	—	0.7	6.3	ACEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 R C
25	須恵器環	(12.7)	3.5	(7.6)	DE	普通	—	底35	ロクロ成形 C
26	灰釉高台杯	—	1.8	(8.9)	E	良	灰白色	口25	ロクロ成形
27	土師器蓋	(20.2)	4.0	—	ADEFH	普通	橙褐色	—	器面風化 口: 内外面とも横ナデ
28	土師器蓋	(20.7)	6.9	—	ACFII	普通	茶褐色	口25	口: 内外面横ナデ 胴(外): 施削り(内): 施ナデ
29	土師器蓋	—	3.4	4.4	ACEH	普通	茶褐色	底95	胴一底(外): 施削り(内): 施ナデ
30	土師器蓋	—	4.9	4.6	ACEH	普通	黒褐色	底100	外面スス付着 胴一底(外): 施削り(内): 施ナデ

31は土鍾である。明褐色、残存率95パーセント。表面は荒れてザラザラしている。完形。焼成は普通。胎土: ACEH。長さは4.3cm・最大径は1.0cm・孔径0.3cm、現存重量は2.9gを測る。

32は貝果穴痕泥岩である。小破片ではあるが、貝果穴と思われる痕跡が1箇所明瞭にみられ、さらに貝果

穴の可能性のある部分が2箇所観察される。二次的焙熱有り。明赤褐色。1.8×1.2×0.9cm、1.3g。

33は貝果穴痕泥岩と思われる。明瞭に貝果穴と判断される痕跡はないが、32の貝果穴痕泥岩との類似点から、本例も貝果穴痕泥岩と判断した。二次的焙熱有り。明赤褐色。3.4×1.9×1.4cm、4.1gを測る。

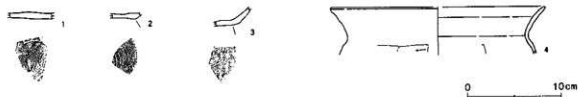
## 第97図 第52号住居跡出土遺物



第39表 第52号住居跡出土遺物観察表(第97図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(7.1)	2.2	2.8	DEH	不良	灰白色	楕 90	ロクロ成形
2	土師器鉢	(19.0)	5.8	—	ACEH	普通	茶褐色	楕 25	器面風化 口:内外面横ナデ 胴(外):寛削り (内):窠ナデカ

## 第98図 第53号住居跡出土遺物



第40表 第53号住居跡出土遺物観察表(第98図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	—	—	—	CEH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 RC
2	須恵器環	—	0.7	—	EH	普通	青灰色	—	ロクロ成形 C トレンチ内
3	須恵器環	—	—	—	CEH	不良	灰褐色	—	ロクロ成形 C
4	土師器鉢	(22.9)	5.1	—	ACDEFH	普通	明褐色	楕 25	器面風化 口:内外面横ナデ 胴(外):寛削り (内):窠ナデ

## 第53号住居跡 (第98・99図)

115-94グリッドに位置する。SX 2・4、SD 8に切られる。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは5.84×4.29×0.04mである。主軸方向はN-1°-Eを指す。

カマドは検出されなかったが、これはSX 2・4に切られているためと思われる。

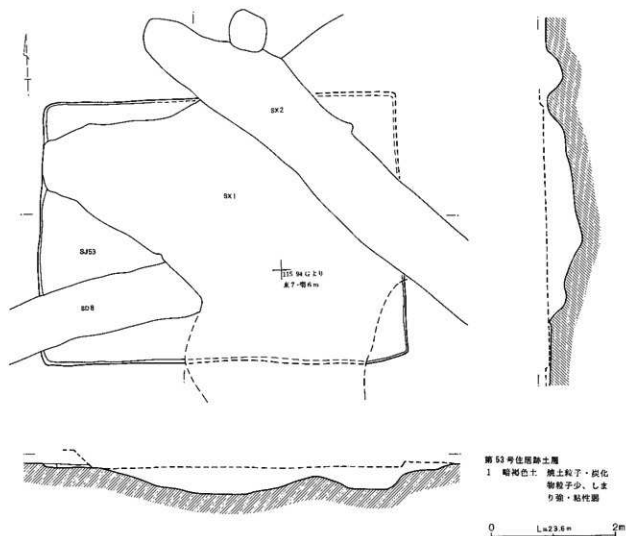
住居跡の遺存度はきわめて悪く、遺構確認面から僅かに掘り下げのみで床面となり、壁面を把握するの

は困難であった。しかし、壁面の大部分が失われているものの、さいわいコーナー部分が3カ所遺存しておりプランと平面規模をとらえることができた。

調査し得た範囲内では掘り方はみられず、砂粒を主体とする地山を床面としていた。床面には、特に硬化している箇所は観察されなかった。

遺物の出土は少なく、図化し得た遺物はいずれも小片で、土師器鉢1、須恵器環3の計4点であった。

第99図 第53号住居跡



第53号住居跡土層

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少、しまり強・粘性弱

#### 第54号住居跡 (第100・101図)

115-95グリッドに位置する。SD 8に切られる。南壁の大部分が失われているが、南西コーナー部分が遺存していたため、平面プランと規模をとらえることができた。プランは主軸方向が僅かに長いが、概ね方形を呈する。また、北西コーナー付近が若干歪むものの、他のコーナー部分では明確に屈曲している。長径×短径×深さは4.41×4.33×0.12mである。主軸方向はN-0°を指す。

カマドが1基、北壁の中央に設けられている。カマドも遺存度が悪く、形状・規模を把握することはできなかった。全長0.87m・焚口幅0.53mを測る。前底部側にある平面規模・深さが0.53×0.43×0.18mの土壇

状の遺構は燃焼部であり、窪んでいるのは灰の掻き出しによるものと思われる(3層)。煙道は緩やかに立ち上がる。

掘り方はなく、砂粒主体の地山を床面としていていると思われる。床面に硬化面は特に認められなかった。

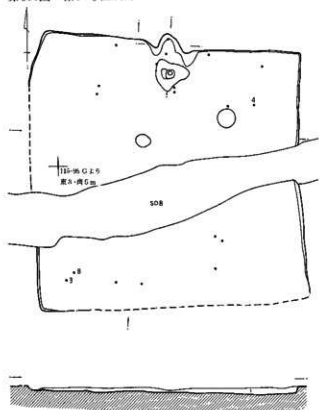
出土した遺物は少なく、燬化し得たのは土師器甕1、須恵器坏7・紡錘車1、土鍾3の、計12点である。

#### 第55号住居跡 (第102図)

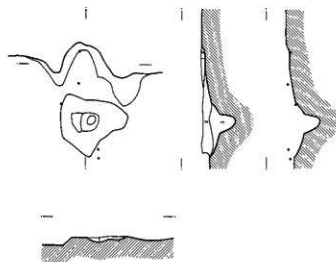
114・115-96グリッドに位置する。SJ 56を切り、住居跡東側の大部分を土取りによって掘乱されている。

プランの大部分が失われているため、方形か長方形であるのかは不明。遺存している2カ所のコーナー部分をみる限り、隅丸を呈する。

第100図 第54号住居跡

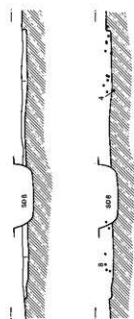


S J 54 カマド



平面規模は、東西は1.58mまで確認できたのにとどまる。南北は2.4m、深さは0.1mである。

調査し得た範囲内においてカマドは検出できなかったため、主軸方向は特定できなかった。主軸方向は、北カマドの場合N-27-E、東カマドの場合N-117-Eとなる。



第54号住居土層

1 暗褐色土 黄褐色土・地山ブロック少、炭化物粒子微量、しまりや中割・粘性弱

0 L=23.5m 2m

第54号住居跡カマド

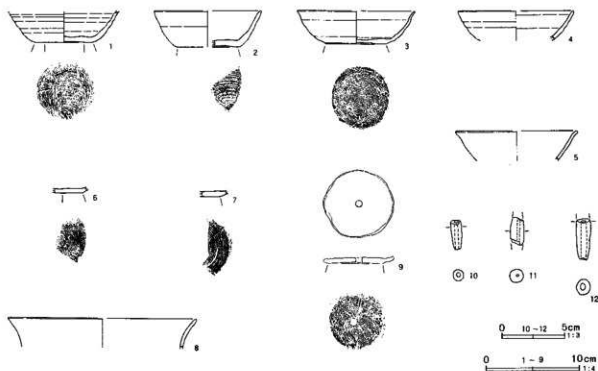
1 暗褐色土 焼土粒子やや多、炭化物粒子若干、しまりや中割・粘性やや強  
2 暗褐色土 焼土粒子微量、しまりやや強・粘性やや弱  
3 暗黄褐色土 焼土粒子微量、炭化物粒子若干、しまりやや弱・粘性やや強

0 L=23.6m 1m

掘り方はもたず、砂殻を主体とする地山を床面としており、硬化は少ない。

出土遺物は少なく、実測し得た遺物は、須恵器環2、鉄製小刀1の、計3点である。2の須恵器環は体部と底部の外面に墨書をもつ。底部の墨書は「春山」と思われるが、体部のものは欠損部分が多く文字不明。

第101図 第54号住居跡出土遺物



第41表 第54号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	—	3.3	6.2	CEH	良	暗灰色	底100	ロクロ成形 RB b 溝
2	須恵器杯	(11.5)	3.8	(6.5)	BDE	普通	灰白色	L15	ロクロ成形 C 溝
3	須恵器杯	(12.5)	3.5	6.4	CDEII	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 RC
4	須恵器杯	(12.3)	3.1	—	CH	良	暗灰褐色	L25	ロクロ成形
5	須恵器杯	(13.1)	3.2	—	EH	不良	灰褐色	口15	ロクロ成形
6	須恵器杯	—	0.7	—	ACEF	普通	灰青色	—	ロクロ成形 B a 溝
7	須恵器杯	—	0.7	—	AEH	普通	灰白色	—	ロクロ成形 A 溝
8	土師器甕	(20.1)	3.1	—	AEF	普通	明茶褐色	口10	L:内外面とも横ナテ

9：紡錘車。須恵器杯底部を転用。欠け口を両取り。  
 底部：回転糸切り離し。EH、灰褐色。重さ44.4g。

11：土錘。DH、二次的被熱か。赤褐色。1.5g。12：  
 土錘。BF、明褐色1.5g。13：土錘。BEH、黒褐色。

第42表 第55号住居跡出土遺物観察表(第102図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	—	—	—	CEH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 C 記号有
2	須恵器杯	—	1.9	7.8	AEII	普通	灰白色	底100	ロクロ成形 RA 体(外):底部意味不明 底:黒痕「泰山か」

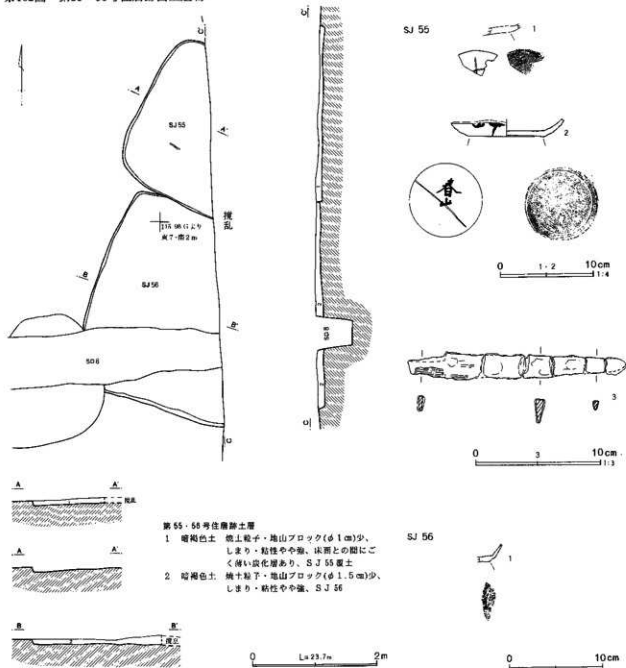
3は小刀か(鉄製)。錆化著しく小破片化しており、  
 遺物取り上げ時にはバラバラになってしまった。茎部

に木質残存。平棟・両開造り。開は直角に近いと思  
 われる。現存長17.4cm・茎部幅0.9cm・厚さ0.3cm。

第43表 第56号住居跡出土遺物観察表(第102図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	—	1.8	—	ACEII	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 RC

第102図 第55・56号住居跡出土遺物



## 第56号住居跡 (第102図)

115-96グリッドに位置する。S.J 55・SD 8・およ  
び上填に切られるほか、S.J 55と同様に住居跡東側の  
大部分を上取りによって攪乱されている。遺構の大部  
分が失われているため、プランが方形であるのか長方  
形であるのかは不明。遺存していた唯一のコーナーか  
らみる限り、隅丸を呈すると思われる。

平面規模は、南北3.21m、東西2.37×0.15mまで確

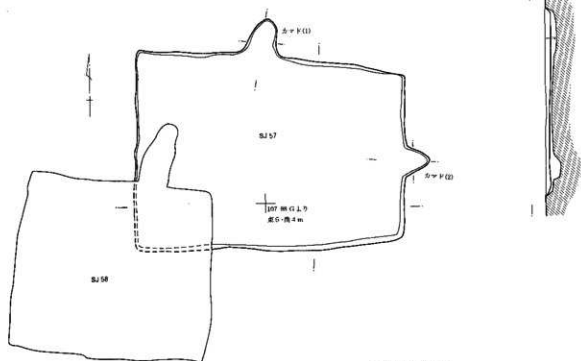
認できたのにとどまる。

調査し得た範囲内においてカマドは検出できなかったため、主軸方向は特定できなかった。北カマドの場合にはN-20°-E、東カマドの場合にはN-110°-Eとなる。掘り方はもたず、砂粒を主体とする地山を床面としており、硬化は少ない。

出土遺物はきわめて少なく、須恵器坏の小破片1点のみである



第103図 第57号住居跡(1)



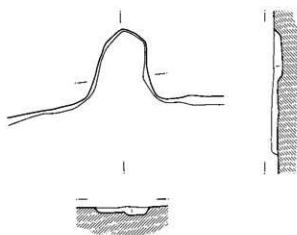
第57号住居跡土層

- 1 灰褐色土 焼土粒(φ0.2~2㎝)、カーボン(φ1~3㎝)散在
- 2 灰褐色土 カーボン少



0 L=23.6m 2m

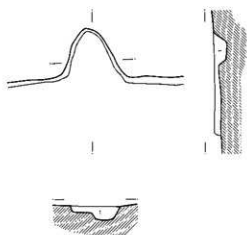
S J 57カマド(1)



第57号住居跡カマド(1)

- 1 暗褐色土 カーボン多、焼土粒子少

S J 57カマド(2)



第57号住居跡カマド(2)

- 1 赤褐色土 焼土粒子少

0 L=23.4m 1m

## 第57号住居跡 (第103~105図)

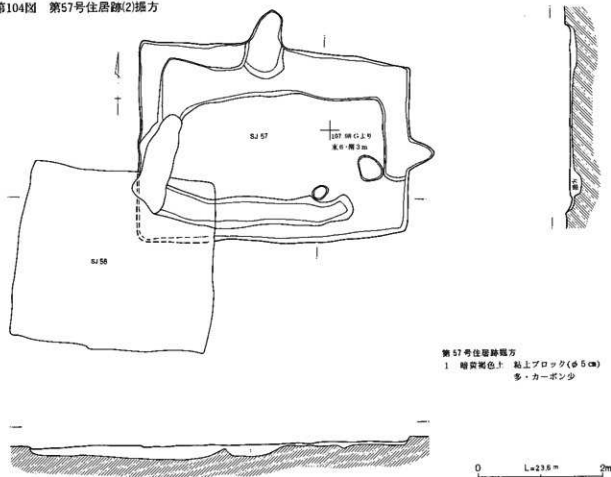
107-98グリッドに位置する。S J 58を切る。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは4.28×3.09×0.08mである。主軸方向はN-1°-Eを指す。

カマド2基が検出されている。カマド(1)は北壁中央よりやや西寄りに設けられている。全長0.99m・焚口幅0.58m、を測る。焚口付近は平坦で、燃焼部は浅い

楕円状を呈する。カマド内部はあまり焼けていない。カマド(2)は東壁中央よりやや南寄りに設置されており、全長0.8m・焚口幅0.55mを測る。焚口付近は平坦で、燃焼部から煙出しにかけて浅い楕円状を呈する。内部はあまり焼けていない。

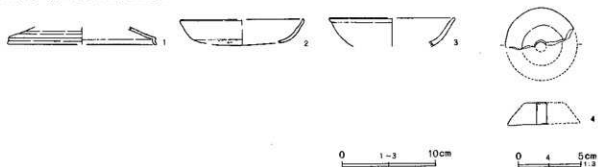
ドーナツ状の掘り方をもち、貼り床は部分的に硬化していた。実測し得た遺物は、計4点である。

第104図 第57号住居跡(2)掘方



第57号住居跡掘方  
1 暗栗褐色土 粘土ブロック(φ5cm)  
多・カーボン少

第105図 第57号住居跡出土遺物



第44表 第57号住居跡出土遺物観察表(第105図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器釜	(15.8)	1.9	—	CEH	普通	灰褐色	口20	ロクロ成形 覆土
2	土師器環	(13.2)	(2.7)	—	ACEH	普通	茶褐色	口15	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):范削(内):ナテか 覆土
3	須恵器環	(13.3)	3.0	—	DEH	普通	灰褐色	口20	ロクロ成形 覆土

4は紡錘車である(土製)。胎土はAEFHである。焼成は普通、橙褐色。上径は推定4.6cm・下径は推定5.8cm・孔径は推定0.8cm・高さは1.7cm、現存重量は29.3gを測る。残存率45パーセント。

第58号住居跡(第106・108図)

107-98グリッドに位置する。S J 57に切られる。東西方向が若干長く方形に近い長方形を呈する。長径×短径×深さは3.21×2.84×0.1mである。主軸方向はN-3°-Eを指す。

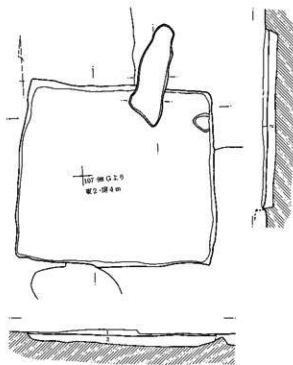
カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央よ

りやや東寄りに設けられている。カマドは全長1.6m・焚口幅0.54mを測る。2層が焚口・燃焼部・煙出しに相当しよう。カマド底面は僅かに窪む程度であり焼けていない。

掘り方は部分的なものではなく住居全城を掘り窪め、粘土ブロックを含む暗黄褐色土を10~15cm程の厚さに敷き積めて床面としている。床面は部分的に硬化している箇所が認められた。

出土遺物は少なく、実測し得たのは土師器環1・須恵器環1の3点で、いずれも破片であった。

第106図 第58号住居跡

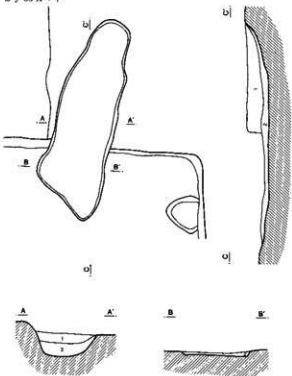


第58号住居跡土層

- 1 灰褐色土 焼土粒(φ1~2cm)・炭化物粒子(φ1~2cm)散在
- 2 灰褐色土 焼土粒子少

0 L=23.5m 2m

S J 58 カマド

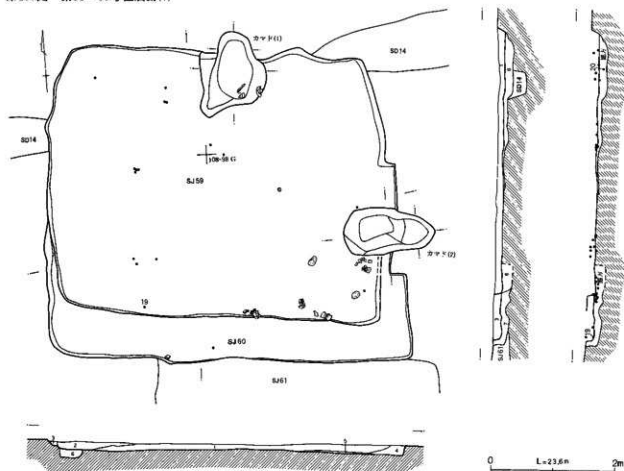


第58号住居跡カマド

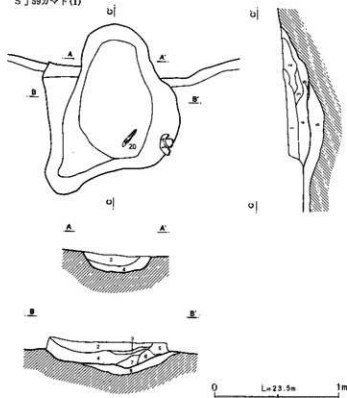
- 1 灰褐色土 造山を基本とし焼土粒子(φ1~2cm)多、炭化物の混入上層
- 2 灰黑色土 炭化物の混合物層

0 L=23.6m 1m

第107図 第59・60号住居跡(1)



S159カマド(1)



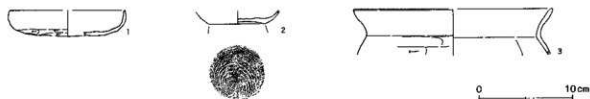
## 第59・60号住居跡土層

- 1 暗褐色土 炭化物粒子・堆山土少、2層との境に区層あり
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・堆山土少、しまり・粘性やや弱
- 3 暗褐色土 炭化物粒子・堆山土少、しまり・粘性やや弱
- 4 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少、しまり・粘性やや弱
- 5 暗褐色土 堆山ブロック多、炭化物粒子少
- 6 暗褐色土 堆山ブロック多、焼土粒子・炭化物粒子若干
- 7 黄褐色土 堆山ブロック多、砂粒多・炭化物粒子少

## 第59号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子若干、しまりやや弱・粘性弱
- 2 暗褐色土 焼土粒子多、炭化物粒子・灰質土、しまりやや弱・粘性弱
- 3 暗褐色土 灰質土、焼土粒子少、しまりやや弱・粘性弱
- 4 暗褐色土 堆山ブロック、焼土粒子少量、しまりやや弱・粘性弱
- 5 暗褐色土 粘質土
- 6 暗褐色土 堆山ブロック層か
- 7 暗褐色土 粘質土
- 8 暗褐色土 炭化物粒子少(層方)

第108図 第58号住居跡出土遺物



第45表 第58号住居跡出土遺物観察表(第108図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.4)	(2.7)	—	ACEFII	普通	明褐色	口30	口:内外面横ナテ 体(外):荒削り(内):ナテ 覆土
2	須恵器環	—	1.4	6.0	CEH	普通	青灰色	底100	ロクロ成形 RC 覆土
3	土師器環	(21.2)	4.9	—	ACEH	普通	茶褐色	口30	外面にスス付着 口:内外面横ナテ 胴(外):荒削り カマド

第59号住居跡 (第107・110・111図)

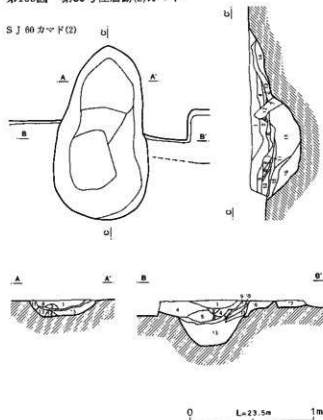
107・108-97・98グリッドに位置する。S J 60・S D 14を切る。やや方形に近い隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは5.59×4.31×0.15mである。主軸方向はN-4-Eを指す。

カマド2基が検出されている。カマド(1)は、北壁中央よりやや東寄りに設けられている。全長1.16m・焚口幅0.92mを測る。8層は住居跡の掘り方、1・2層

は燃焼部から煙道部、6・7層は袖部に相当すると思われる。

カマド(2)は東壁中央より南寄りに設置されている。当初S J 60との関連を考えたが、土層断面の観察から本住居跡に帰属するカマドと判断した。全長1.37m・焚口幅0.77mを測る。13~15層は非常に堅固な土層であり、焼土粒子やカーボンも微量であることから、カマド掘り方の可能性も考えられる。2~11層は、燃焼

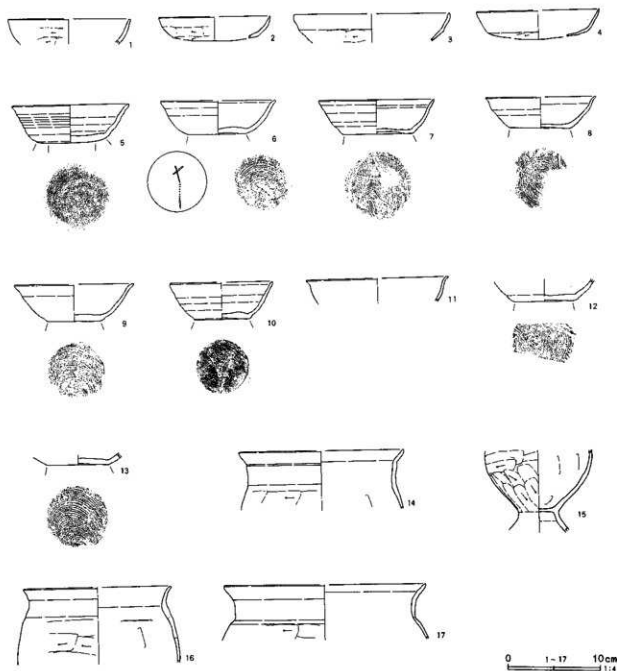
第109図 第60号住居跡(2)カマド



第60号住居跡カマド

- 暗褐色土 焼土粒子若干、カーボン微量、しまり強・粘性弱
- 暗茶褐色土 焼土粒子・カーボン少
- 黒褐色土 焼土粒子・焼土粒子微量、しまり・粘性やや強
- 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・砂粒子少
- 暗灰褐色土 焼土粒子・灰粒少、しまりやや強・粘性やや弱
- 茶褐色土 焼土粒子少、Fe沈着、しまりやや強・粘性やや強
- 暗灰褐色土 灰層中に焼土粒子・炭化物粒子少、しまり・粘性やや強
- 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少
- 暗灰褐色土 灰層中焼土粒子少、しまりやや強・粘性弱
- 暗黄褐色土 焼土粒子・焼土粒子少、しまり強・粘性弱
- 暗灰褐色土 灰層中焼土粒子少、しまりやや強・粘性弱
- 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量、しまり・粘性やや強
- 黒褐色土 焼土粒子若干、焼土粒子・炭化物粒子少、しまり強・粘性やや強
- 暗黄褐色土 炭化物粒子・焼土粒子微量、しまりやや強・粘性やや強
- 暗黄褐色土 焼土粒子微量、しまり非常に強・粘性弱
- 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・焼土粒子微量、しまり強・粘性やや強
- 暗褐色土 焼土粒子少、しまり強・粘性やや強

第110図 第59号住居跡出土遺物(1)



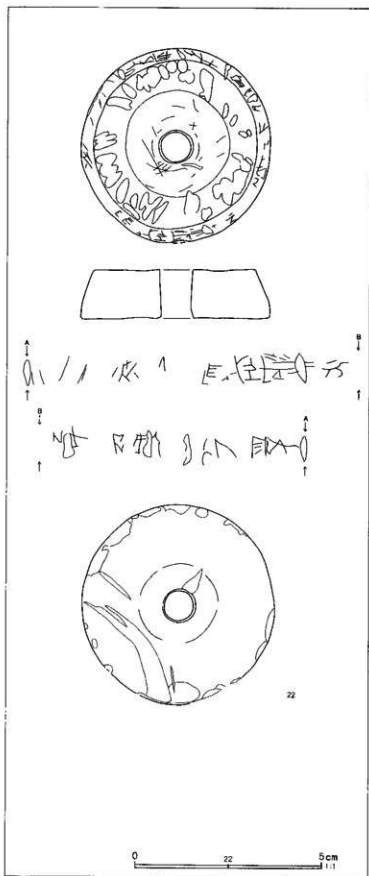
部・煙道部に相当すると思われる。

住居跡はドーナツ状に掘り方をもち、床面には一部硬化した箇所も認められた。また、床面の60パーセン

ト程にわたって薄い灰層が広がっていた。

出土遺物は比較的多く、図化し得た遺物は土師器 8・須恵器 9、その他 5、計 22点である。

第111图 第59号住居跡出土遺物(2)



第46表 第59号住居跡出土土物観察表(第110図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地成	色調	残存	備考
1	土師器環	(13.0)	2.7	—	AEH	普通	赤褐色	口20	外面風化著 口(上半):内外横ナテ 口(下半):外巻削り
2	土師器環	(11.8)	(2.5)	—	ACDEFH	普通	橙褐色	口30	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):巻削り(内):ナテか
3	土師器環	(16.5)	3.5	—	AEFH	普通	橙褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):巻削り(内):ナテか
4	土師器環	(13.1)	(3.1)	—	ADE	普通	茶褐色	口25	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):巻削り(内):ナテか
5	須恵器環	12.6	3.9	7.3	AEH	不良	灰褐色	底95	口口成形 R B 器面磨減
6	須恵器環	(12.2)	3.6	6.2	CDEH	普通	灰褐色	底80	口口成形 C 記号有
7	須恵器環	12.3	3.6	7.2	ABEH	普通	灰褐色	口90	口口成形 RC
8	須恵器環	(11.8)	3.4	6.5	CEH	普通	灰褐色	底55	口口成形 RC
9	須恵器環	(12.7)	3.9	5.7	ACDEH	不良	灰褐色	底100	口口成形 RC
10	須恵器環	(11.0)	3.9	5.8	DEH	普通	灰褐色	底100	口口成形 A
11	須恵器環	(15.2)	2.7	—	BEH	普通	灰褐色	口20	口口成形
12	須恵器環	—	2.3	6.2	AEH	不良	黒褐色	底50	口口成形 RC
13	須恵器環	—	1.2	6.6	CEH	普通	灰褐色	底95	口口成形 RC
14	土師器鉢	(17.5)	6.3	—	ACEFH	普通	茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):巻削り(内):ナテか
15	土師六付鉢	—	8.7	—	ACEG	普通	橙褐色	—	器面風化著 胴台:内外面横ナテ 胴(外):巻削り(内):巻ナテ
16	土師器鉢	(15.8)	8.1	—	ACDEFH	普通	黒褐色	口115	口:内外面横ナテ 胴(外):巻削り(内):巻ナテ(外):スス付着
17	土師器鉢	(21.4)	5.8	—	ACEFH	普通	茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):巻削り(内):巻ナテか

18: 十鉢。ACEH、完形、黒褐色。重さ6.7g。19: 刀子か(鉄製)。平塚・両側造り。関は直角に近い。20: 刀子か(鉄製)。鍛造。錆化著しく原形とどめず。21: 貝巢穴痕泥岩と思われる。貝巢穴の痕跡が2箇所認められる。二次的板熱有り。

22: 紡錘車(蛇紋岩製)。器面は磨減著しく、表面が剥離している部分もある。剥離はとくに上面で顕著である。上面は内側に線刻が僅かに残っているが、磨減が激しく意味不明。側面にも線刻がみられるが、文字・記号・絵のいずれであるのか不明。下面には線刻は行

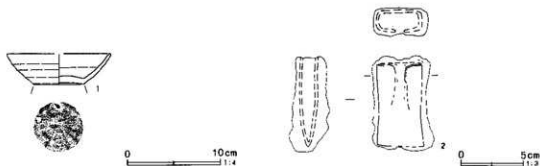
われていないと思われる。ほぼ完形。重さ61.7g。

## 第60号住居跡(第107・109・112図)

108-97-98グリッドに位置する。S J 61を切り、S J 59に切られる。平面規模は東西は5.75mを測るが、南北は3.08mまで確認できたのみである。S J 59のカマド(2)付近で東壁がクランク状を呈する。掘り方をもち、床面には硬化した部分が認められた。

出土遺物は少なく、図化し得たのは須恵器環1、鉄斧1の計2点である。

第112図 第60号住居跡出土土物





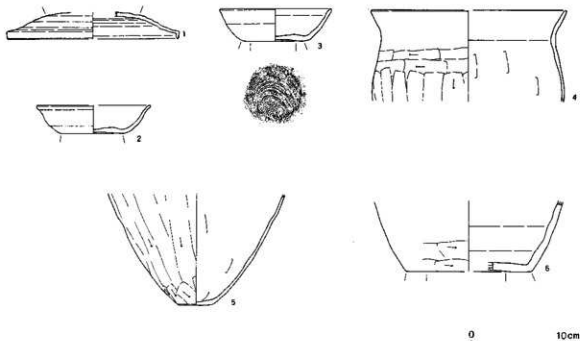
第47表 第60号住居跡出土遺物観察表(第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	(10.9)	3.3	5.4	DEH	良	灰褐色	底100	ロクロ成形 A

2は有袋式鉄斧か(鉄製)。錆化が著しく、しかも鉄斧に堅固にこびり付いていたため、クリーニングしても表面の錆が僅かに落とせる程度であった。また、X線写真でも遺物の輪郭線は不明瞭であった。そのため、

実測図はX線写真による推定線であり、確定的なものではない。刃部は基部よりも若干幅広で、やや湾曲すると思われる。袋部の断面形は隅丸の長方形か。両刃か。現存長6.6cm・刃部幅3.7cm。

第113図 第61号住居跡出土遺物



第48表 第61号住居跡出土遺物観察表(第113図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(18.3)	2.8	-	AEH	普通	暗灰褐色	口30	ロクロ成形 天井部(外):篋削り(R)掘方
2	須恵器杯	(12.1)	3.0	6.5	DEH	不良	灰白色	底100	ロクロ成形 RC
3	須恵器杯	11.8	3.4	6.6	CDEH	不良	灰白色	口70	ロクロ成形 RBb
4	土師器甕	(20.8)	9.6	-	ACDEFI	普通	茶褐色	口120	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り(内):篋ナテ
5	土師器甕	-	11.8	4.0	ACEH	普通	赤褐色	底65	器面風化 胴一底(外):篋削り(内):篋ナテ
6	須恵器甕	-	7.5	(13.4)	CEH	普通	黒灰色	底15	ロクロ成形 胴(下)位:篋削り 底(外):周辺篋削り 掘方

## 第61号住居跡 (第107・113・114図)

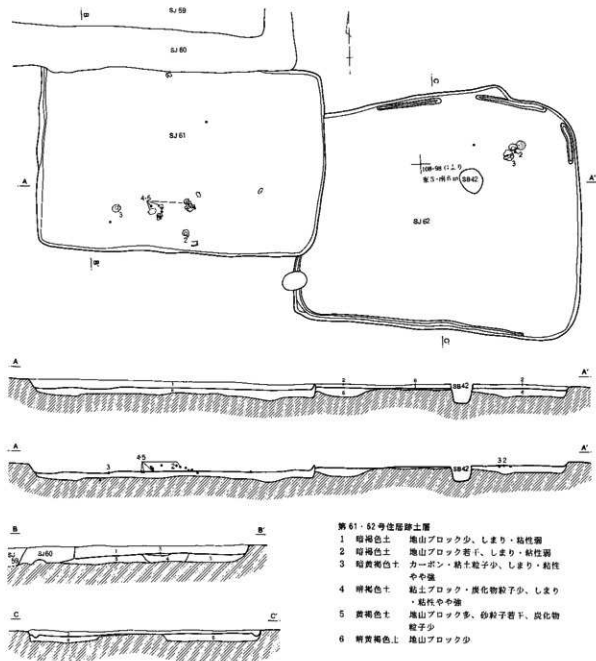
108-97・98グリッドに位置する。S J 62を切り、S J 61に切られる。プランは、やや隅丸の長方形を呈する。S B 41の北80cm、S J 63～65の西北西約17mの位置に相当する。

北壁をみると、東側のコーナーは検出されているが、

西側のコーナーはS J 61のため失われている。このことから、北壁は若干歪んでいたと思われる。また、東壁は外側に向かってやや湾曲している。現況での長径×短径×深さは4.62×2.95×0.15mである。

遺存していた範囲内では、カマドは検出されていない。北壁があったとすれば、主軸方向はN-2°-Eと

第114図 第61・62号住居跡



なる。

壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、とくに西壁では顕著である。

掘り下げを行っている時点では床面は不明瞭で、サブ・トレンチ調査による土層断面の観察によって、ようやく床面を認識できる程度のものであった。

掘り方は住居範囲全体を掘り下げ、壁面付近をドーナツにさらに深くしたもので、地山ブロックを含む暗黄褐色土を充填して床面としている。床面は部分的に硬化している箇所が確認された。

出土した遺物は少ないが、その多くは南壁中央付近に分布していた。全体的に遺存率は低い。

同化し得た遺物は、土師器甕2、須恵器蓋1・坏2・甕1の、計6点である。

1・6は掘り方内から、その他はほぼ床面直上から

の出土である。

#### 第62号住居跡 (第114・115図)

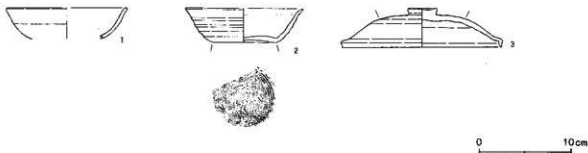
108-98グリッドに位置する。S J 61・SB 42・ピットに切られる。プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは4.56×3.96×0.06mである。主軸方向はN-2°-Eである。

部分的に途切れるが、幅10-15cm・深さ5cm前後の周壁溝が巡っている。北壁中央より東に寄った位置に、屈折しているプランが認められる。このプランは、本住居跡の他の壁面と方位的にズレていないことから、もう1軒別の住居跡が存在しており、その立て替えが本住居跡の可能性も考えられる。

掘り方はドーナツ状で、地山ブロックを含む暗褐色土を充填して床面を造っている。

実測し得たのは、須恵器蓋1・坏2の計3点である。

第115図 第62号住居跡出土遺物



第49表 第62号住居跡出土遺物観察表(第115図)

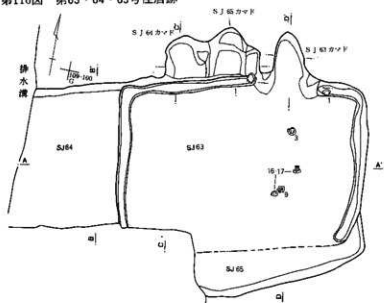
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器坏	(12.4)	3.6	6.8	ACEH	不良	黒灰色	底55	ロクロ成形 RC
2	須恵器蓋	(17.0)	4.1	3.2	CEH	普通	灰褐色	底80	ロクロ成形 天井(外):荒削り(R) 端部:内外面とも横ナデ
3	須恵器坏	(12.7)	3.3	—	DEH	不良	灰白色	口20	ロクロ成形

#### 第63号住居跡 (第116・117図)

108・109-100グリッドに位置する。S J 64・65を切り、土砂採取による擾乱を受けている。プランはやや歪んだ隅丸長方形を呈すると思われる。規模は南北方向は2.75mと推定され、東西方向が3.98m・深さは0.26mを測る。主軸方向はN-11°-Wである。

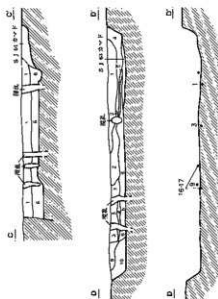
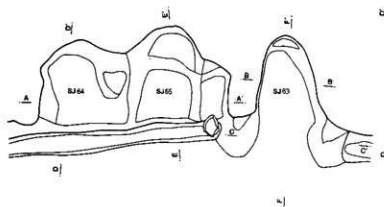
北壁にカマドと思われる施設が3基検出されたが、  
a: カマドの覆土が本住居跡覆土に連続すること、  
b: 周壁溝との位置関係から、東端のカマドを本住居跡に伴うものと判断した。この場合、カマドは北壁中央より東寄りに設けられていることになる。カマドは、全長1.04m・焚口幅0.47mを測る。7・8層は焚き口

第116図 第63・64・65号住居跡



0 L=23.6m 2m

SJ63-64-65カマド



第63-64-65号住居跡土層

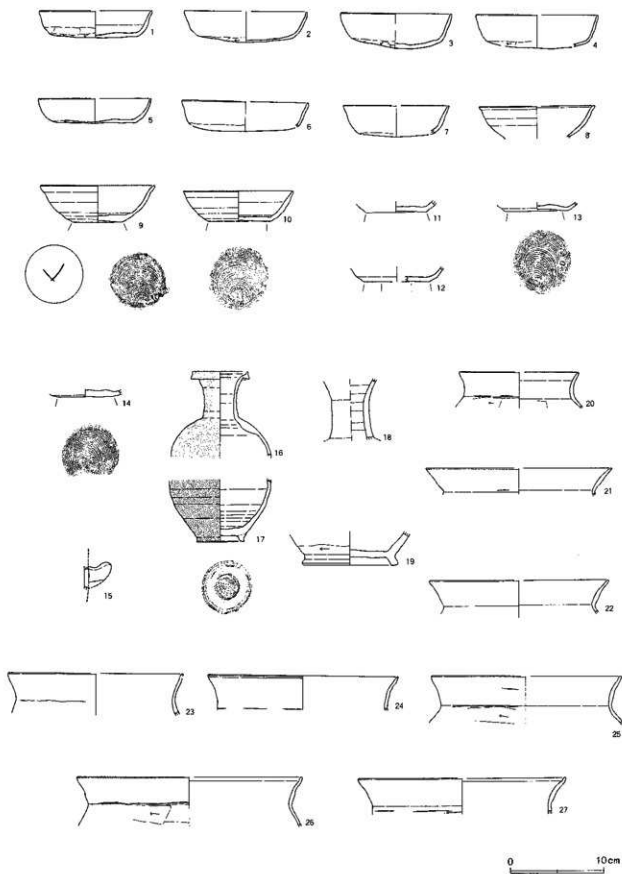
- 1 灰白色土 シルト質、マンガン痕多
- 2 砂層 シルト質
- 3 灰白色土 シルト質
- 4 暗褐色土 シルト質、炭化物粒子少
- 5 炭化物層
- 6 褐色土 マンガン粒子多、焼土粒子少
- 7 灰白色土 マンガン痕多
- 8 砂層
- 9 黄褐色土 カーボン痕量
- 10 暗褐色土 焼土粒子少

第63・64・65号住居跡カマド

- 1 灰白色土 シルト質、マンガン痕多
- 2 暗褐色土 シルト質
- 3 炭層 シルト質
- 4 褐色土 シルト質、炭化物粒子少
- 5 砂層
- 6 灰白色土 マンガン粒子多、焼土粒子少
- 7 赤褐色土
- 8 黒褐色土

0 L=23.6m 1m

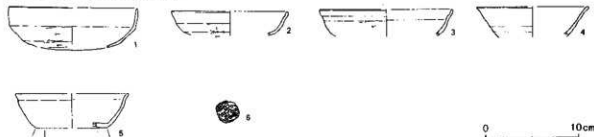
第117图 第63~65号住居跡出土遺物



第50表 第63～65号住居跡出土遺物観察表(第117図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.1)	2.9	—	ACEFII	普通	茶褐色	—	口:内外面横ナテ 体(外):施削り(内):ナテ
2	土師器環	(13.0)	3.3	—	ACDEFH	普通	茶褐色	体50	口:内外面横ナテ 体(外):施削りか(内):ナテか 4区覆土
3	土師器環	11.8	3.7	—	ABCFPH	普通	橙褐色	体85	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):施削り(内):ナテ
4	土師器環	(13.1)	(3.5)	—	AEFH	普通	明茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):施削り(内):ナテか
5	土師器環	(12.1)	2.7	—	AEFH	普通	茶褐色	体70	口:内外面横ナテか 体(外):施削り(内外面に黒灰) 覆土
6	土師器環	(13.5)	(3.1)	—	ACE	普通	茶褐色	口25	器面風化着 口:内外面横ナテか 体(外):施削りか
7	土師器環	(11.4)	3.0	—	AEFH	不良	黒褐色	口30	口上半:内外面横ナテ 下半:内外面ナテ 体(外):施削りか 覆土
8	須恵器環	(12.4)	3.4	—	BEH	良	灰青色	口25	口口成形
9	須恵器環	12.3	3.9	6.0	BEH	普通	灰褐色	底100	口口成形 R C 筆記号「メ」
10	須恵器環	11.7	3.2	6.8	EII	普通	灰褐色	底100	口口成形 R C 覆土
11	須恵器環	—	1.3	(6.3)	BEH	普通	灰褐色	底45	口口成形 R C
12	須恵器環	—	1.6	(6.9)	AEF	不良	灰褐色	底30	口口成形 B a
13	須恵器環	—	0.9	6.3	BEH	普通	灰褐色	底100	口口成形 R C 覆土
14	須恵器環	—	0.6	(6.0)	EH	普通	灰褐色	底85	口口成形 R C
15	土師器瓶	—	—	—	AEH	普通	暗赤褐色	—	内外面スス付着
16	須恵長頸壺	5.9	9.2	—	DEPII	良	青緑灰色	—	口口ナテ
17	須恵小頸壺	—	11.6	5.1	CEGH	良	白灰色	台95	口口水挽成形 底:糸切り難後高台貼付 内外面自然釉付着
18	須恵長頸壺	—	6.5	—	BEH	普通	暗灰色	—	口口成形 覆土
19	須恵高台甗	台10.1	3.6	—	EII	普通	輪灰/紫灰	台95	胴部外面:粗い回転施削り 張り付け高台 覆土
20	土師器甗	(12.8)	3.8	—	ABEFH	普通	茶褐色	口45	口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):施ナテ 覆土
21	土師器甗	(19.9)	2.9	—	ACEFH	普通	橙褐色	口25	口:内外面とも横ナテ 覆土
22	土師器甗	(19.1)	3.6	—	ABEFH	普通	茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):ナテか 覆土
23	土師器甗	(18.7)	4.4	—	AEFII	普通	茶褐色	口15	器面風化 口:内外面横ナテ 覆土
24	土師器甗	20.4	3.6	—	AEFH	普通	茶褐色	口55	口:内外面とも横ナテ 覆土
25	土師器甗	(20.2)	5.1	—	ABEFII	普通	茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):ナテか 覆土
26	土師器甗	(24.1)	5.3	—	ACEFH	普通	橙褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(内):ナテか スス付着 覆土
27	土師器甗	(22.2)	3.8	—	ABEFH	普通	明褐色	口15	口:内外面とも横ナテ 覆土

第118図 第66号住居跡出土遺物



第51表 第66号住居跡出土遺物観察表(第118図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(13.8)	(4.4)	—	ACDEFH	普通	明褐色	口30	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):施削り(内):ナテか
2	土師器環	(12.3)	2.6	—	ACEH	普通	茶褐色	口20	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):施削り(内):ナテか カマド
3	土師器環	(14.1)	2.9	—	ABCDEFH	普通	茶褐色	口20	器面風化着 口:内外面横ナテ 体(外):施削りか(内):ナテか
4	須恵器環	(12.0)	3.2	—	CDEH	普通	灰白色	口20	口口成形
5	須恵器環	(12.0)	3.7	(7.6)	DEII	普通	灰褐色	口15	口口成形 B b

部から焼燥部に相当すると思われる。焼燥部は、床面より僅かに窪んで楕円鉢状を呈し、平坦な煙道部に続く。煙出し部分は、比較的急勾配で立ち上がる。焼燥部から煙道部にかけて、内面は若干被熱のため焼けて

赤褐色化している。

カマド袖部分の基部が遺存していた。焚き口部から北東コーナーにかけて、焼土粒子を含む炭化物層が広がっていた。東壁・北壁・西壁にかけて、幅10～30・

深さ5cm程の周壁溝が巡っているが、南壁においては検出されなかった。東壁はやや湾曲しているため、プランはやや歪む。

調査期間の問題と、当住居跡の調査開始当初2軒の住居跡を想定していたこと、また遺物の出土量が比較的少なく、しかも大部分が覆土からの出土であったこと等々から、ドットを落としての遺物取り上げをほとんどを行わなかった。また、S J 63～65の3軒と判断したが、4軒の可能性も考えられたため遺物の帰属を確定することはできなかった。そこで、S J 63と確定できる遺物とできない遺物とを別図版として掲載することとした。特定し得た遺物は、計4点にとどまった。

#### 第64号住居跡 (第116図)

109-100グリッドに位置する。S J 63に切られているが、S J 65との新旧関係は不明である。また土砂採

取による擾乱と、排水溝によって切られているためプランは不明である。検出できた範囲は、東西1.75m・南北2.24mにとどまり、深さは0.25mである。主軸方向はN-12°-Wを指す。カマドを1基もつと判断した。掘り方から2軒となる可能性が考えられる。

遺物は、帰属する遺構を特定できなかった。

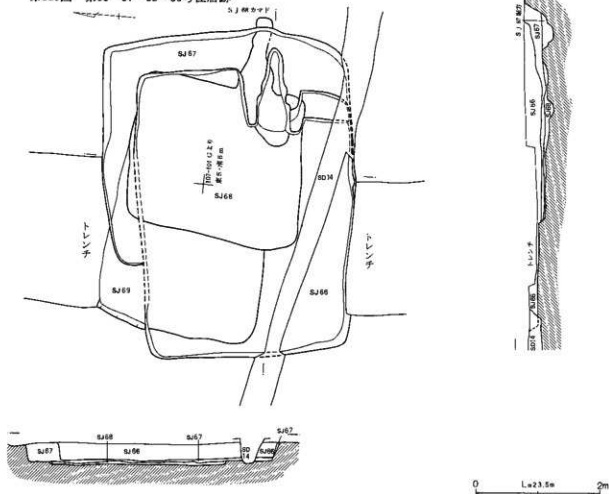
#### 第65号住居跡 (第116図)

109-100グリッドに位置する。S J 65に切れ、また西側に擾乱を受けている。S J 64との新旧関係については確認できなかった。当初S J 63の一部であるとの可能性を考えていたが、南東コーナー付近でプランがズレることから、別の住居跡であると推定した。

位置関係から、中央のカマドを本住居跡のものと考えた。但し、焼け方が弱く疑問も残る。

遺物は、帰属する遺構を特定できなかった。

第119図 第66・67・68・69号住居跡



## 第68号住居跡 (第118-120図)

107-101グリッドに位置する。S J 67-69を切り、S D14に切られる。またこれとは別に、第1次調査によるトレンチによっても切られている。

プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは4.56×3.28×0.33mである。主軸方向はN-80°-Eである。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央よりやや南寄りに設けられている。今回の調査で検出されたカマドの内では遺存度が良好な部類に含まれる。

全長は1.52cm・焚口幅は0.55cmを測る。両軸とも地山を掘り残した部分に、白灰色の粘土を貼り付けたものと考えられる。2層は天井部の懸け口への崩落土、4層は天井部、7層は焚き口部・燃焼部、5・6層は煙道部・煙出し部に相当すると思われる。

カマド内部はよく焼けており、とくに燃焼部では袖部内側が赤色化・硬化していた。焚口から燃焼部にかけて浅く窪み、煙道部は緩やかに上昇し、煙出し部で急勾配に立ち上がる。焚口から住居跡の南東コーナーにかけて、炭化物が分布していた。カマド内からの遺物はほとんどない。

4軒の住居跡の重複は複雑で調査は非常に困難であった。本住居跡は、S J 67の上面を灰褐色土で埋め戻して貼り床したと思われる。東壁のプランは、カマド北側の方が南側よりも35cm程張り出している。

図化し得た遺物は6点で、6はモモの種子である。

## 第67号住居跡 (第119・121・122・124図)

107-101グリッドに位置する。S J 68-69を切り、S J 66・SD14およびトレンチに切られる。プランは方形に近い隅丸長方形を呈する。

長径×短径×深さは4.0×3.52×0.33mである。主軸方向はN-101°-Wを指す。カマドは検出されなかった。

本住居跡の床面は、S J 68を埋め戻して貼り床している可能性が高い。なお、S J 68直上の床面を図示したが、この上位に貼り床の可能性があり、ごく薄い上層2枚が、土層断面に観察された。

南東コーナー付近に、長径×短径×深さが53×40×18cmを測る土塊が検出されている。この土塊は、S J 68を切っておらず、S J 66・68の炭化物粒子が混入していないことなどから、本住居跡に伴うと判断した。貯蔵穴であろうか。

出土した遺物は少なく、図化し得たのは須恵器杯3点のみであった。

## 第68号住居跡 (第123図)

107-101グリッドに位置する。S J 69を切り、S J 66・67およびトレンチに切られる。プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは2.8×2.49×0.15mである。主軸方向はN-99°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より南寄りに設けられている。カマドの遺存度は非常に悪く、カマドは燃焼部底面の一部と煙出し部が遺存しているのみであった。燃焼部の範囲についても、焼土や炭化物の分布範囲から推定したものである。全長1.51cm・幅0.61cmを測る。1層は天井崩落土、2層は煙出しの部分に相当すると思われる。

カマド周辺には5基のビットが検出されているが、いずれも炭化物粒子と焼土粒子が非常に多く混入されていたが、性格については不明である。南東コーナーに位置するビットは貯蔵穴であろうか。

出土した遺物はごく少なく、実測し得た遺物は土師器の甕片1点のみであった。

## 第69号住居跡 (第124図)

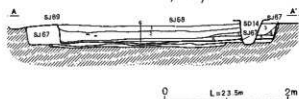
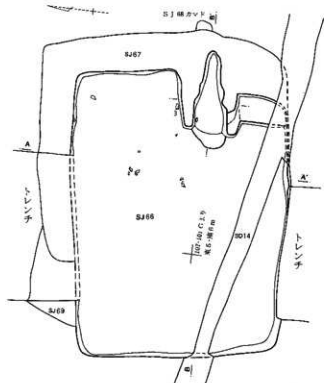
101-107グリッドに位置する。S J 66-68・SD14およびトレンチに切られる。プランは隅丸長方形を呈すると思われる。遺存状況はきわめて悪く、床面の一部分と掘り方が遺存しているのみであり、僅かに確認できた壁面の立ち上がりは5cm程であった。規模は南北方向は2.58mであるが、東西方向は2.55m、深さは0.14mまで確認できたのみである。主軸方向はN-99°-Eを指す。カマドは検出されていない。

凹みの多い掘り方(2・3層)に、ロームブロックを含んだ黒灰色土を充填して床面を造っている。

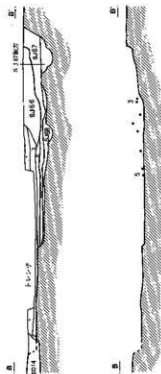
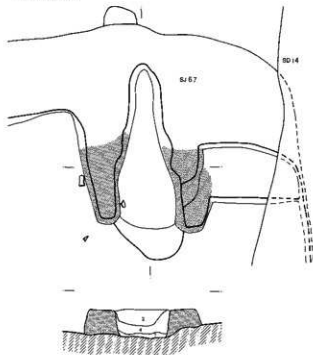
遺物は出土していない。



第120図 第66号住居跡



S J 66 カマド

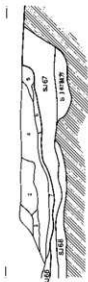


第66号住居跡土層

- 1 暗褐色土 Fe・Mn沈着多 ローム粒子(φ0.2cm)少
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・炭化物・焼土粒子少
- 3 暗褐色土 焼土粒子(φ0.5cm)・焼土ブロック(φ1cm)・炭化物少
- 4 暗灰褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)少
- 5 暗褐色土 焼土ブロック(φ2~3cm)・炭化物多
- 6 暗灰褐色土 筋床

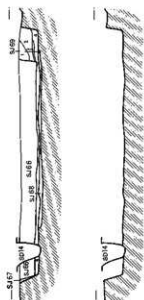
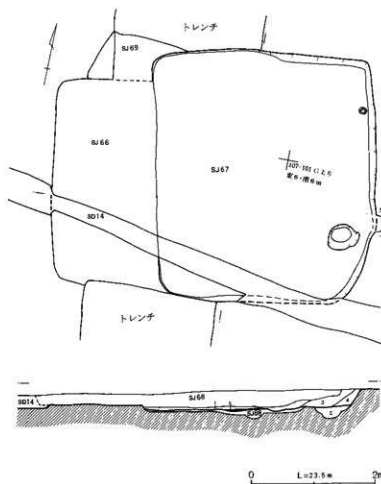
第66号住居跡カマド

- 1 灰褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・焼土粒子(φ0.3~0.5cm)少
- 2 暗褐色土 釜まど懸け口(天井部)陥没土層か、焼土粒子(φ0.5cm)多
- 3 暗褐色土 懸け口、4層に正似、焼土・焼土粒子含まない
- 4 暗灰褐色土 天井部、焼土ブロック(φ1cm)少
- 5 黒褐色土 焼土粒子(φ0.5cm)、焼土ブロック(φ1cm)多、炭化物少
- 6 黒褐色土 砂質、ローム粒子(φ0.2cm)、炭化物多
- 7 黒色土 炭化物多、灰・焼土ブロック(φ1.5~2cm)多



0 L=23.5m 1m

第121図 第67号住居跡

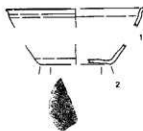


第67号住居跡土層

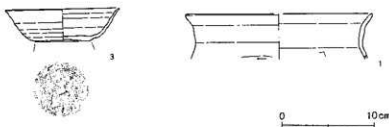
- 1 暗褐色土 ローム起子(φ0.2~0.5cm)多
- 2 暗褐色土 暗灰褐色粘土内む、焼土粒子(φ0.3cm)少
- 3 黒色土 炭化物層、焼土粒子少
- 4 暗褐色土 ローム起子(φ0.5cm)多、ロームブロック(φ2~3cm)少
- 5 灰黒色土 ローム起子(φ0.2~0.3cm)多、粘粒層、Fe沈着、(SJ67壁跡床)
- 6 暗褐色土 灰褐色粘土若F、ローム起子(φ0.8cm)多、ロームブロック(φ1cm)・細方、焼土粒子少

第122図 第67・68号住居跡出土遺物

SJ 67



SJ 68



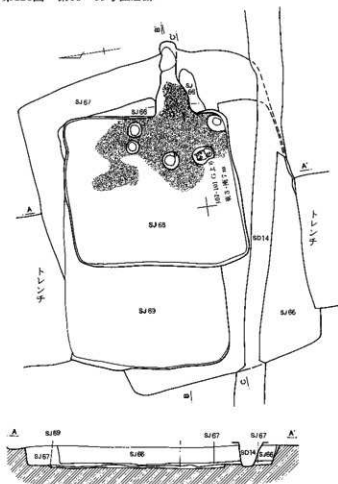
第52表 第67号住居跡出土遺物観察表(第122図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	酒器器杯	(14.8)	2.0	—	EH	普通	灰白色	口10	口クロ成形
2	須恵器杯	—	2.2	(7.5)	DE	普通	白灰色	底25	口クロ成形 B b
3	須恵器杯	12.1	3.4	5.9	ACEH	不良	橙灰色	底100	器面風化著 口クロ成形 RC

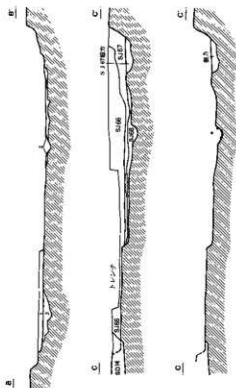
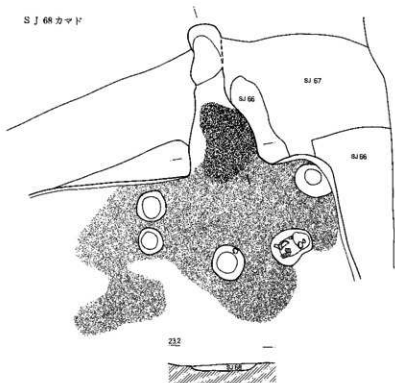
第53表 第68号住居跡出土遺物観察表(第122図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器甕	(19.8)	4.8	—	EPH	普通	橙褐色	口20	口・内外面横ナテ 割(外)・割削り(内)・露ナテ

第123図 第68・69号住居跡



S J 68 カマド



第68・69号住居跡土層

- 1 灰黑色土 灰褐色粘土・ロームブロック(φ1~2cm)多、粘性強
- 2 黒灰色土 粘質土・炭化物多
- 3 黒灰色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、ロームブロック(φ2~3cm)・炭化物粒子・粘土粒子少

0 L=23.5m 2m

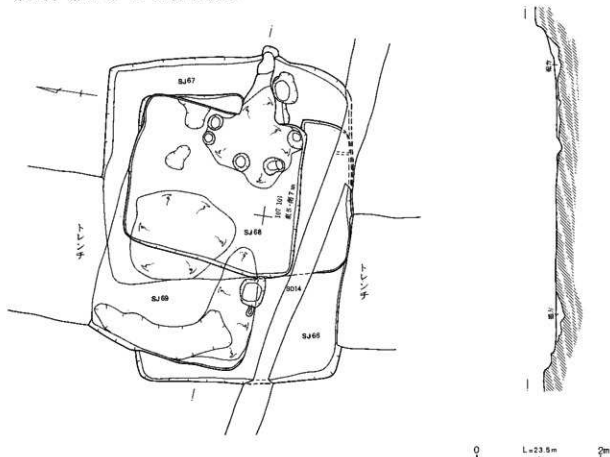


第68号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 灰褐色粘土多、天井部か
- 2 黒褐色土 ローム粒子多、粘土粒子・炭化物粒子少

0 1m

## 第124図 第66・67・68・69号住居跡掘方



## 第70号住居跡 (第125・126図)

107-101グリッドに位置する。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは4.6×3.41×0.15mである。主軸方向はN-90°-Eである。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁のほぼ中央に設けられている。全長1.77m・焚口幅0.67mを測る。

遺存度は比較的良好である。カマド掘り方を埋め戻して焚き口部・燃焼部を作り出している。カマドは掘り残した地山に粘土を貼って構築している。9・10層は焚口部・燃焼部、6・7層は煙道部・煙出し部、1・2層は天井部に相当すると思われる。

焚口部・燃焼部に相当すると思われる2枚の層のうち、19層は袖部の下位面にもぐり込んでいる。このことから、袖部は塗り換えが行われている可能性が高い。カマドの燃焼部・煙道部の内面および底面はよ

く焼けており、被熱のために赤褐色に変色し、硬化している。カマド内部からは、土師器や須恵器の破片が浮いた状態で出土しているが、接合率は低く、図化し得たのは4の土師器環1点のみであった。

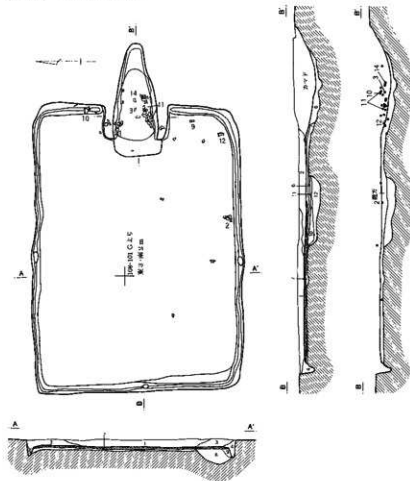
掘り方は、住居範囲全体を掘り下げるタイプであるが、壁面際をさらに深く掘っており、ドーナツ状を呈する。そして、ロームブロックや粘土ブロックを含む灰黒色土を、住居中央では2~5cm・壁面際では8~22cmほど充填（7~9層）し、さらにその上面に、粘土ブロックを含む灰褐色土で貼り床を行っている。

周壁溝を全周させている。幅は10~20cm・深さは約15cmを測る。周壁溝内に小ピットがあるが、壁柱穴が存在したのであろうか。

住居中央に床下土塊が確認された。長径×短径×深さは1.25×1.15×0.15mである。

図化し得た遺物は比較的多く、計15点であった。

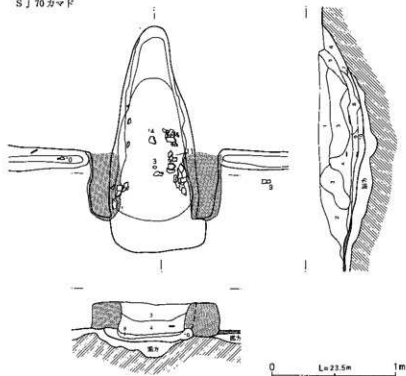
第125図 第70号住居跡(I)



第70号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・焼土粒子少
- 2 灰褐色土 焼土粒子(φ0.5cm)・炭化物粒子少
- 3 灰褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・焼土粒子少  
灰褐色粘土多
- 4 暗褐色土 粘質土・ローム粒子(φ0.3cm)・炭化物少
- 5 灰黒色土 粘質土・ローム粒子(φ0.8cm)多
- 6 灰黒色土 炭化物粒子多・焼土粒子少
- 7 灰黒色土 ロームブロック(φ3~5cm)多
- 8 灰黒色土 ロームブロック(φ2~3cm)多
- 9 灰黒色土 灰褐色粘土層下、炭化物粒子少
- 10 暗灰褐色土 粘土粒子・ロームブロック(φ1~2cm)多
- 11 暗灰褐色土 地山ブロック若干、庭土か
- 12 黒灰色土 灰褐色粘土ブロック(φ3~5cm)・ロームブロック(φ2~3cm)多

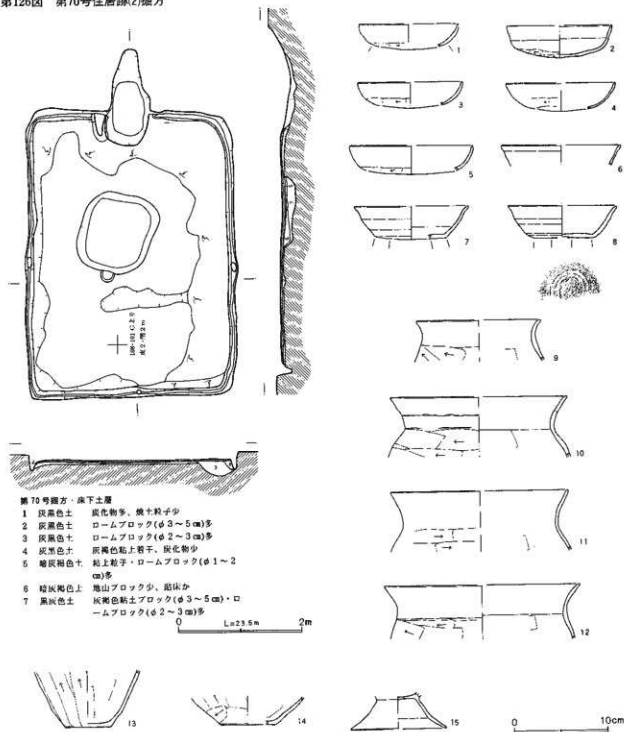
S J 70カマド



第70号住居跡カマド

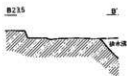
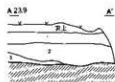
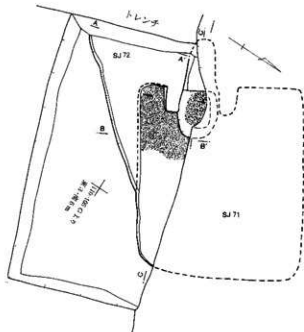
- 1 暗褐色土 焼土ブロック(φ1~2cm)少、天井部
- 2 暗灰褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、焼土ブロック(φ2cm)・炭化物少
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・焼土ブロック(φ1~2cm)少、天井部
- 4 暗灰褐色土 粘質土、焼土粒子(φ0.5cm)・炭化物粒子少
- 5 黒褐色土 焼土粒子(φ0.8cm)多、灰褐色粘土少
- 6 黒褐色土 焼土粒子(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1cm)多、炭化物粒子少
- 7 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)多、焼土粒子(φ0.5cm)・炭化物粒子少
- 8 暗灰褐色土 焼土粒子(φ0.5~0.8cm)・焼土ブロック(φ2cm)少
- 9 黒色土 炭化物層、焼土粒子(φ0.5cm)多
- 10 黒色土 炭化物層、焼土粒子少

第126図 第70号住居跡(2)掘方



第54表 第70号住居跡出土遺物観察表(第126図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	編	考
1	上脚器环	(10.6)	(2.8)	--	ACEH	普通	茶褐色	口30	器面風化著	口:内外面横ナテ 体(外):甕割り(内):ナデか
2	土脚器环	(11.1)	3.4	--	ACEF	普通	茶褐色	体43	器面風化	口:内外面横ナテ 体(外):甕割り(内):ナデか
3	上脚器环	(11.1)	(2.8)	--	CEFII	普通	茶褐色	口25	器面風化著	口:内外面横ナテ 体(外):甕割りか(内):ナデか
4	土脚器环	(11.6)	(3.0)	--	ACDEH	普通	茶褐色	口15	器面風化	口:内外面横ナテ 体(外):甕割り(内):ナデか カマド
5	上脚器环	(13.1)	(3.0)	--	ADEH	普通	茶褐色	口30	器面風化	口:内外面横ナテ 体(外):甕割りか(内):ナデか
6	須恵器环	(12.6)	2.2	--	DEII	不良	灰白色	口20	口クロ成形	

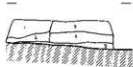
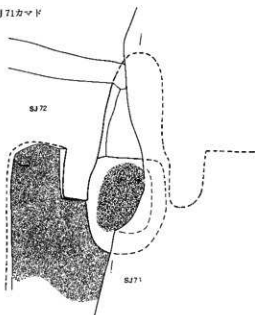


第71・72号住居跡土層

- 1 暗褐色土 Fe・Mn沈着多、硬質
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土少、焼土ブロック(φ1cm)・ローム粒子(φ0.5cm)多、硬質
- 3 暗褐色土 炭化物粒子・ローム粒子(φ0.5~0.8cm)少、硬質

0 2m

SJ71カマド



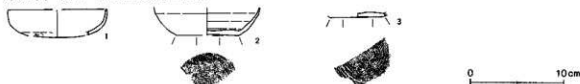
第71号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 堆山に近似
- 3 暗褐色土 焼土粒子(φ0.5cm)少、天井層壁土か
- 4 暗褐色土 炭化物粒子多、天井層壁土か
- 5 黒色土 炭化物層、焼土ブロック(φ1cm)多
- 6 暗褐色土 炭化物粒子・焼土ブロック(φ2cm)少、硬質

0 L=23.4m 1m

7	須恵器環	(12.2)	(3.5)	(7.6)	EH	普通	灰褐色/明茶	円15	口口成形 B b
8	須恵器環	(11.6)	3.4	6.2	BDEII	不良	暗灰褐色	底55	口口ナテ R B a
9	土師器甕	(13.0)	4.4	—	ACEFH	普通	暗灰/黒色	円25	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り(内):篋ナテ
10	土師器甕	(18.6)	6.4	—	ACDEII	普通	暗茶褐色	円25	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り(内):篋ナテ
11	土師器甕	(18.8)	6.4	—	ACEF	普通	茶褐色	円35	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り(内):篋ナテ
12	土師器甕	(20.7)	5.7	—	ADEHI	普通	橙褐色	円30	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り(内):篋ナテ 蓋方
13	土師器甕	—	6.0	5.0	ACEH	普通	茶褐色	底60	(外):篋削り(内):篋ナテ
14	土師器甕	—	2.9	6.0	AEFH	普通	灰褐色	底15	器面風化(外):篋削り(内):篋ナテ
15	土師台付甕	—	5.9	(10.1)	AEFH	普通	明褐色	台15	胴(内):篋ナテ 胴外面:内外面とも横ナテ

第128図 第71・72号住居跡出土遺物



第55表 第71・72号住居跡出土遺物観察表(第128図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(10.5)	(3.0)	—	ABEFH	普通	茶褐色	円15	口:内外面とも横ナテ 体(外):篋削り(内):ナテ 埋土
2	須恵器環	—	3.0	(6.6)	BCDEII	普通	灰褐色	底35	埋土
3	須恵器環	—	0.5	(6.0)	ACDEH	不良	灰白色	底45	口口成形 R B b 埋土

## 第71号住居跡(第127・128図)

110-105グリッドに位置する。S J 72を切る。排水溝に切られる。

今回の発掘調査のために掘削した排水溝の南側壁面に、カマドと住居跡の床面が確認された。そして調査区内と、排水溝の北側壁面には住居跡の痕跡はみられなかった。そこで調査範囲を南側に拡張した結果、2軒の住居跡が検出され、S J 71・72と命名した。

以上の点から、S J 71は排水溝の幅の中に収まる小型住居跡であると考えられる。遺存状況が悪いため、プランが方形であるのか長方形であるのかは不明である。

現状における規模は、東西(主軸)方向が3.3m・南北方向が1.05m・深さは0.22mである。主軸方向はN-121°-Wを指す。

カマドが1基検出された。3・4層はカマド袖部、6層は煙道部に相当すると思われる。5層は焼七粒子を含む炭化物層であるが、この層がカマド袖の下部にまで及んでいた。この点についての可能性としては、1:検出時点ですでに袖部が崩落している場合、2:床面に炭化物が広がっているままの状態、新たにカマドを構築している場合、とが考えられる。

このカマドの袖自体がきわめて堅固なものであり、2つの可能性のうち、後者の可能性がより高いと思われる。

焼土の分布している箇所はカマドの燃焼部に相当すると思われるが、位置的に若干袖部とのズレがみられる。

遺物の出土は少なく、当初1軒の住居跡を想定していたため、結果的に帰属する遺構は決定できなかった。実測し得た遺物は、S J 71・72併せて土師器環1、須恵器環2の計3点であり、いずれも小破片であった。

## 第72号住居跡(第127・128図)

110-105グリッドに位置する。S J 71と排水溝に切られる。S J 71と同様に拡張部分に位置するが、この部分は土山の下にあるため、これ以上調査範囲を広げることができず、ごく狭い範囲の調査にとどまざるを得なかった。住居跡の東壁を部分的に調査できたのみで、その範囲内においてカマドは検出されなかった。

1~3層が覆土に相当すると思われる。しかし調査範囲に制約があるため、断面A-A'では壁面まで掘り広げることができなかった。検出し得た壁面は比較的明瞭で、立ち上がりは15cmまで確認できた。位置的にみて、谷地形の肩部に立地していると思われる。



## (2) 掘立柱建物跡

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、合わせて67棟であった。内訳は第14地点：43棟、第15地点：9棟、第16地点：15棟である。

本地点で検出された掘立柱建物跡の中には、コーナーピットに柱痕が2つある例がみられた（SB38）。床支えのための柱痕であろうか。

### 第1号掘立柱建物跡（第130図）

105・106-87グリッドに位置する。南側を排水溝によって切られている。但し、幅1.0-1.5mの排水溝の南側を調査した際には、本掘立柱建物跡の続き部分は検出されなかった。これらの点から考えられる可能性は3点である。

1：排水溝によって、桁行方向の3間目が失われている。2：柱穴が浅く、遺構確認面の段階でプランが失われている。3：プランは2間×2間である。

1の場合、P5の南側のピットは排水溝によって切られていると推定されるが、P6南側のピットは排水溝よりも南に位置すると考えられる。

最も浅いピットが20cm前後しかないことも含めて、2の可能性が最も高いのではないかと、というのが調査時の印象であった。

3の場合、P5-P6間にピットが存在するはずであるが、検出されなかった。

梁行3.6mであるが、桁行は3.5mまで確認できたにとどまる。規模は3×2間と推定される。主軸方向はN-16-Wである。

土師器の小破片が少数出土しているが、図化し得たものはなかった。

### 第2号掘立柱建物跡（第131図）

106・107-86・87グリッドに位置する。SJ10-13を切り、P7・P8を排水溝に切られている。規模は2×2間でプランは方形を呈する。僅かに規模の大きい東西方向を桁行と推定した。

桁行4.3m・梁行4.2mで、柱間距離は桁行2.1-2.2m、梁行2.1-2.2mであるが、P4-P5間が1.8m、P7-P8間が1.9mといったように、柱間距離に若

干の違いがみられる。

主軸方向は東西方向を桁行とみた場合、N-96-Wである。検出されたピットは8本である。

各柱穴は直径20-40cmの円形もしくは楕円形を呈するが、P3はやや長方形に近い。深度は50-60cmを測り、掘り方も明瞭であった。遺構確認面から10-20cmほど、覆上をスライスするように削っていったが、柱痕跡は検出されなかった。

P1底面には、柱痕と覚しき窪みが2箇所認められるが、柱の立て替えあるいは床支えの柱であろうか。

図化し得た遺物は、土師器襲1・須恵器環1、刀子と思われる鉄製品1であるが、いずれも小破片である。これらの他にも、土師器襲・須恵器環の小破片が1点づつ出土しているが、図化するには及ばなかった。

### 第3号掘立柱建物跡（第132図）

106・107-87グリッドに位置する。SB4、SA1、SD100・101をはじめ12基のピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は2×2間で、桁行3.3m・梁行3.2mを測る。南北方向が僅かに長いが、ほぼ方形を呈する。長径×短径は3.3×3.2mである。主軸方向はN-13-Wを指す。

柱間距離は、桁行方向は1.6-1.7mであるが、P4-P5間は1.1m、P3-P4間は1.9mというように不規則である。あるいはP9としたピットが該当するのであろうか。梁行方向は1.7mを測る。

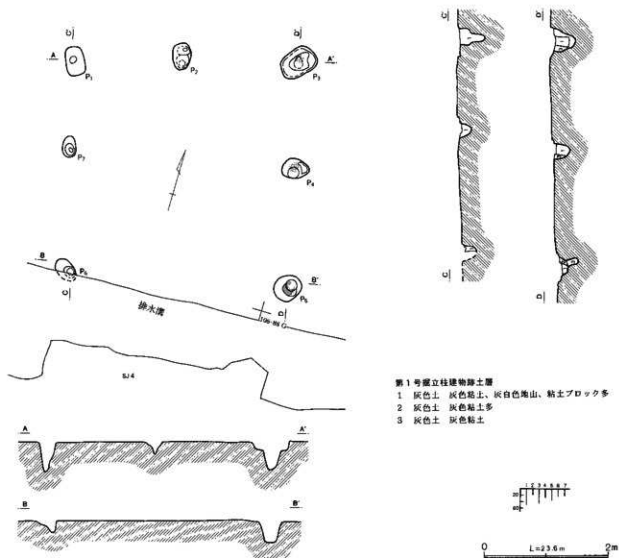
柱穴は直径25-50cm、深度は10cmから深いものでは60cmであるが、全体的に小規模である。掘り方は円形もしくは楕円形を呈する。

柱痕跡はP1のみで検出できた。また平面では検出できなかったものの、上層断面の6層も柱痕に相当すると思われる。

P1-P3の並びは直線的であるものの、桁行方向とはやや歪みがある。

遺物は出土しなかった。

## 第130図 第1号掘立柱建物跡



## 第4号掘立柱建物跡 (第134図)

106-87・88グリッドに位置する。SB 3、SD 80・99-101、SAおよび多数のピットとの重複関係は不明である。S J 8には切られていると思われる。

規模は2×2間で、東西に庇をもつ。当初、西側のみに庇をもつと考えたが、S J 8の掘り方の下位面からピットが検出されたため、東側にも庇を有すると判明した。

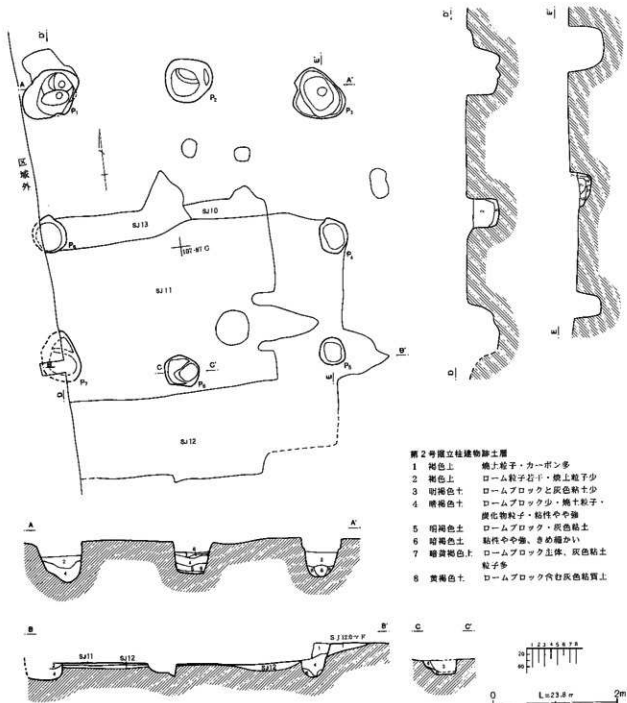
東西3.7m、南北3.4mを測るが、庇を含めた東西規模は7.4mである。西側の南北規模は、東側に比べて小さく、建物のプランはやや歪んでいる。柱間距離は、

東西方向で1.8m、但し東側底部分では2.0mを測り、南北方向では概ね1.6m前後を測る。軸方向は、東西方向ではN-88°-Wであり、南北方向ではN-2°-Eを指す。

柱穴は、直径35×40cm-40×45cmの円形もしくは長方形を呈するものと、45×50cm-50×50cmの方形もしくは長方形を呈するものとが混在している。掘り方は、全体的に小規模である。1層は柱痕に相当すると思われるが、柱の多くは抜き取りであると思われる。

土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、図化するには至らなかった。

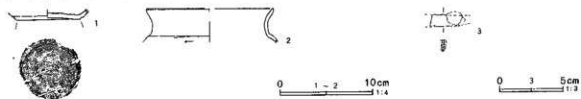
第131図 第2号据立柱建物跡



第2号据立柱建物跡土層

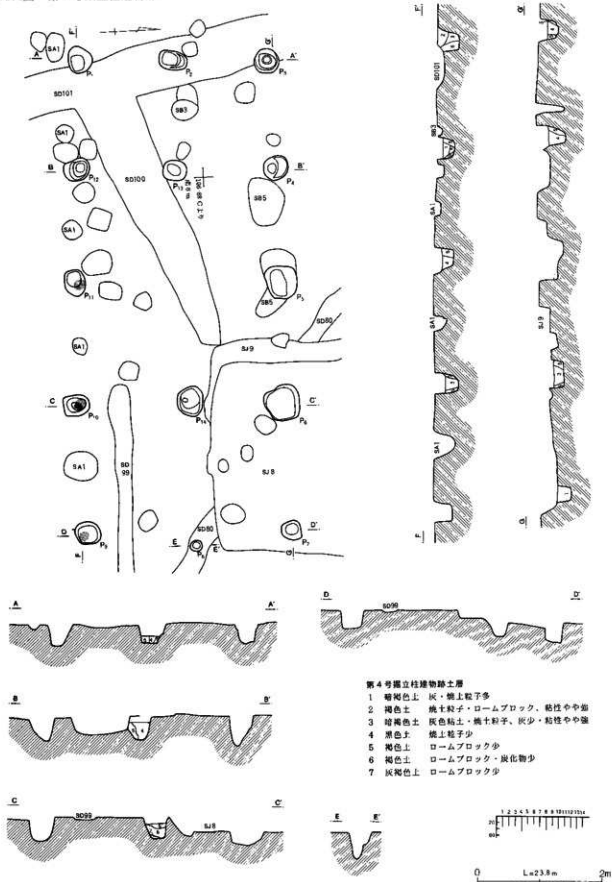
- 1 褐色土 焼土粒子・カーボン多
- 2 褐色土 ローム粒子若干・焼土粒下少
- 3 明褐色土 ロームブロックと灰色粘土少
- 4 暗褐色土 ロームブロック少・焼土粒子・炭化物粒子・粘性やや強
- 5 明褐色土 ロームブロック・灰色粘土
- 6 暗褐色土 粘性やや強、きめ細かい
- 7 暗褐色土 ロームブロック主体、灰色粘土 粒子多
- 8 黄褐色土 ロームブロック内包灰色粘質土

第132図 第2号据立柱建物跡出土遺物

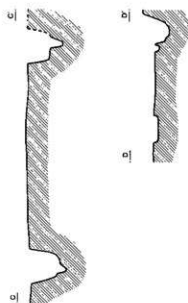
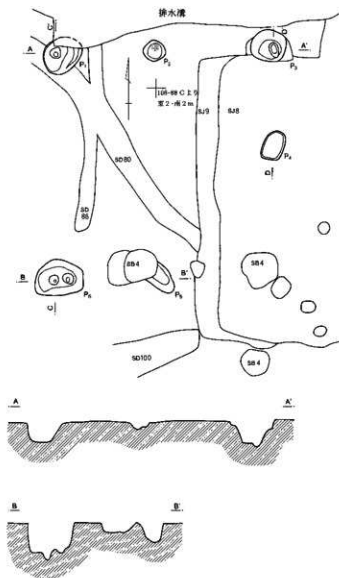




第134図 第4号掘立柱建物跡



第135図 第5号掘立柱建物跡



第6号掘立柱建物跡 (第136図)

107・108・87・88グリッドに位置する。第1次調査時のトレンチによって切られている。SB1～4が他の遺構と重複していたのに対し、本遺構はSD79と重複するのみである。但し、新旧関係は不明である。

規模は3×2間で桁行5.8m・梁行3.6mを測る。主軸方向はN-89°-Eを指す。

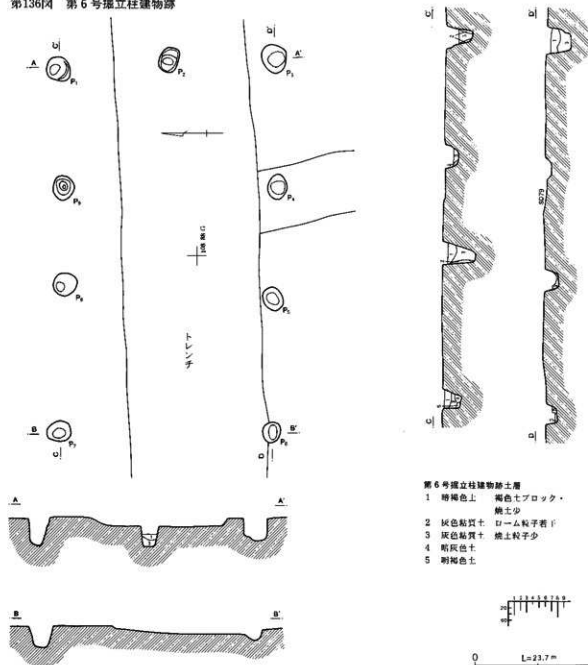
柱間距離は桁行方向で不揃いであり、1.6～2.3mとバラつきがある。なかでもP4-P5間が1.7m、P8-P9間が1.6mで、とくに短いといえる。梁行方向の柱間距離は1.8mである。柱痕は検出できなかった。P

1～P3の並びは直線的であるが、桁行とは若干歪みがある。

P6-P7間に柱穴は検出できなかった。全体的に深度の浅い掘り方であり、さらに第1時調査によるトレンチによってプランが失われてしまったのであろうか。なお、P6・P7以西に柱穴は検出されていない。柱穴の規模は、直径30×40cmもしくは40×50cmの円形ないしは楕円形を呈するもので、全体的に小規模な掘り方といえよう。

土師器環、須恵器環の小破片が出土しているが、図化するには至らなかった。

第136図 第6号掘立柱建物跡



- 第6号掘立柱建物跡土層
- 1 黄褐色土 黄色七ブロック・焼土少
  - 2 灰色粘質土 ローム粒子若干
  - 3 灰色粘質土 焼土粒子少
  - 4 明褐色土
  - 5 明褐色土

第7号掘立柱建物跡 (第137図)

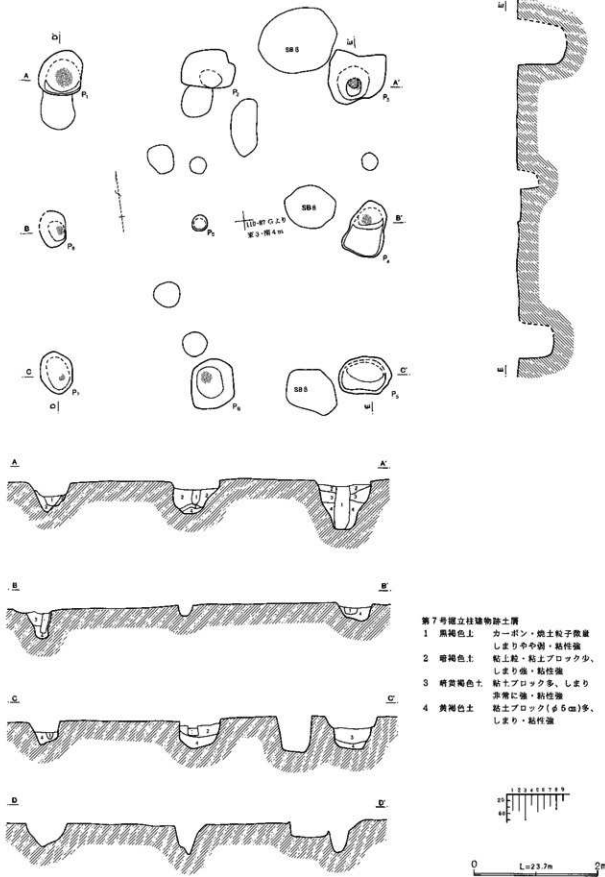
110・86・87グリッドに位置する。SB8と重複するが、新旧関係は不明である。規模は2×2間で、P9も本遺構に帰属して、総柱の掘立柱建物跡になると思われる。桁行・梁行とも4.8mを測り、主軸方向はN-7-Eを指す。

遺構確認面では検出できなかったが、10~15cmほど柱穴内をスライスするように掘り下げた結果、6箇所柱痕跡を平面で確認することができた。土層断面を

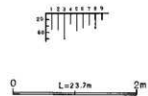
観察すると、柱痕(1層)が、柱穴底面まで届くもの(P1・3)と届かないもの(P2・4・6・7・8)がある。後者の場合、柱痕と底面の間に粘土ブロックを含む堅固な、黄褐色土または暗黄褐色土(3・4層)が貼られていた。掘り方は、直径50×70cm程の円形または長方形を呈すが、P2~4のように長方形に近い形態のものも混在する。

図化した遺物は須恵器環2点である。この他に土師器の小破片が2点出土した。

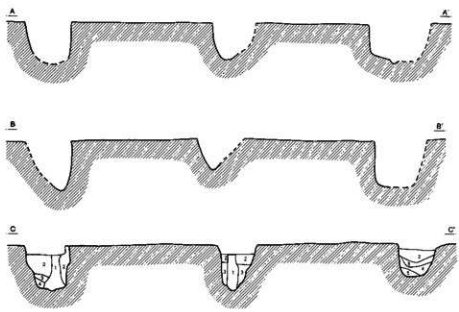
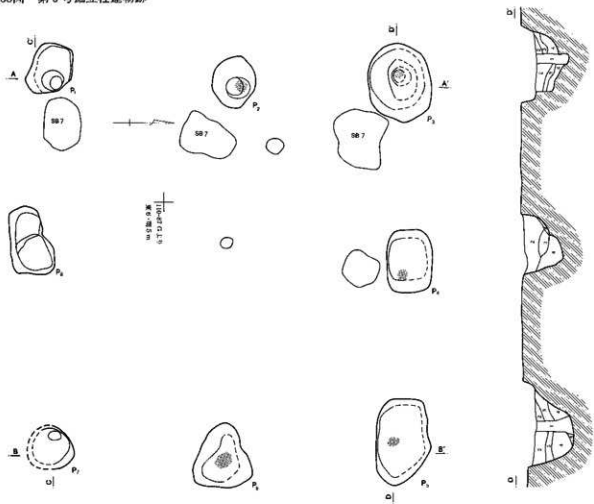
第137図 第7号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡土層  
 1 黒褐色土 カarbon・焼土粒子散見  
 しまりや中弱・粘性強  
 2 暗褐色土 粘土粒・粘土ブロック少、  
 しまり強・粘性強  
 3 暗黄褐色土 粘土ブロック多、しまり  
 非常に強・粘性強  
 4 黄褐色土 粘土ブロック(φ5cm)多、  
 しまり・粘性強







第8号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 カarbon・焼七粒子微量
- 2 暗褐色土 粘土粒・粘上ブロック若干
- 3 暗黄褐色土 粘上ブロック多
- 4 暗黄褐色土 粘上ブロック(φ5cm)多
- 5 灰白色土 灰色粘上ブロック層



0 L=23.6 m 2m

第139図 第7号掘立柱建物跡出土遺物



第57表 第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第139図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	(14.8)	4.6	—	BH	普通	灰地色	L25	ロクロ成形 外面に黒斑
2	須恵器杯	—	1.6	6.2	BH	普通	灰褐色	底30	ロクロ成形 RC

## 第8号掘立柱建物跡 (第138図)

110-87・88グリッドに位置する。SB7と重複するが、新旧関係は不明である。規模は2×2間で、桁行5.8m・梁行5.5mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。

柱間距離は、桁行方向で芯々2.6mと3.1m・梁行方向で芯々2.5mと2.7mと比較的大きい。掘り方は、円形または楕円形を呈するものと、P4・5のように長方形に近い形状のものが混在する。前者は直径70×80cm~100×115cmで、深さ65~80cmを測り、後者は0.75×1.0m・0.8×1.35mで、深さは65~80cmを測り、全体的に掘り方の規模は大きいといえる。

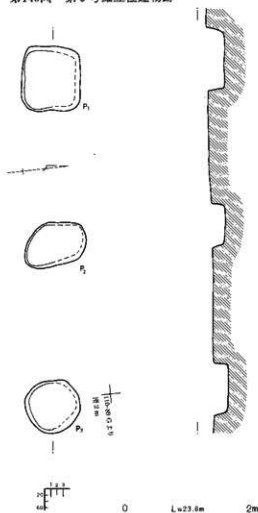
1層が柱痕に相当すると思われるが、検出し得た限りではいずれの柱穴も底面に届いている。2~5層は粘土ブロックを含む版築状の上層で、きわめて堅緻である。

土師器片が数点出土したが、きわめて小さな破片であるため風化には至らなかった。

## 第9号掘立柱建物跡 (第140図)

110-88・89グリッドに位置する。東西方向の1辺、2間分のみを検出である。この範囲内の規模は5.2m、柱間距離は2.6mを測り、掘り方は比較的大きいといえる。この掘り方の規模からみて櫛列の柱穴とは考えにくく、周辺を精査したがやはりプランは検出され

## 第140図 第9号掘立柱建物跡



なかった。各柱穴の深度が浅いことから、表土削平の段階で柱穴がつぶれたものと判断した。

この1辺は、桁行か梁行であるのか不明であるため、

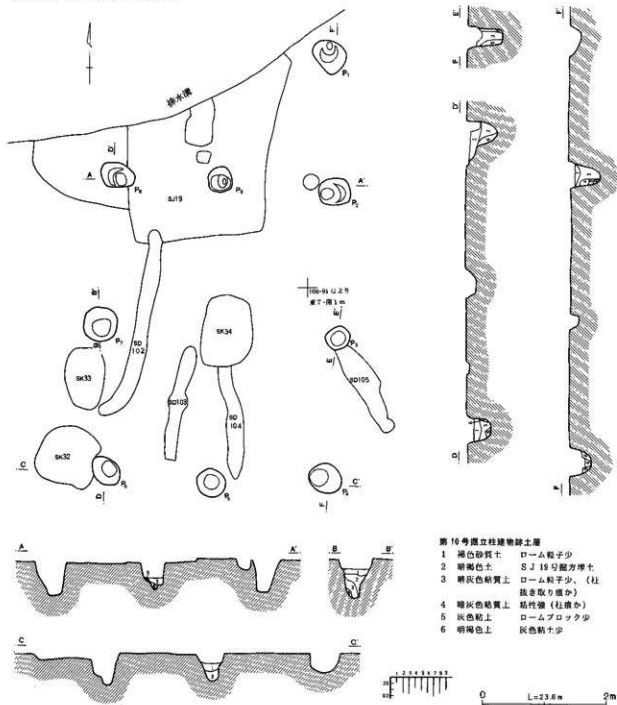
主軸方向も不明であるが、この柱穴の並び自体はN-85°-Wを指す。またこの並びが梁行である場合、主軸方向はN-5°-Eを指すことになる。P 1の規模は1.05×0.95mの隅丸方形を呈し、深さは0.3m、P 2は1.05×0.65mの長楕円形を呈し、深さは0.2m、P 3は0.85×0.65mの円形を呈し、深さは0.25mを測る。

遺物は出土しなかった。

第141図 第10号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡 (第141図)

105・106-91グリッドに位置する。S J 19・20を切っていると思われる。SK32~34、SD102~105との新旧関係は不明である。規模は2×2間であり、排水溝のため柱穴2本が欠われているが、梁行側の北側に庇をもつタイプと考えられる。桁行4.5mで、庇までを含めると6.7m、梁行は3.4mを測る。柱間距離は桁行で

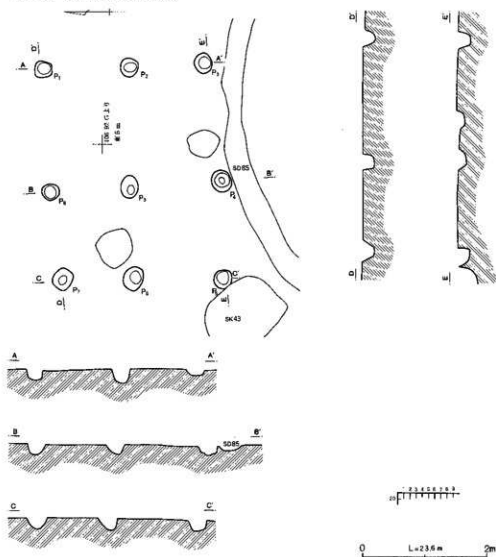


2.2~2.3m、梁行で1.6~1.7m、主軸方向はN-1°-Eを指す。

柱穴は40~60cmの円形もしくは楕円形を呈し、深度は浅いもので20cm前後、深いもので60cm前後を測る。全体的に掘り方は小さいといえる。P3・4は柱痕明確である。その他は抜き取りされているのであろうか。P3は桁行線上からやや外れている。

土師器と須恵器の小破片が数点出土したが、図化するには至らなかった。

第142図 第11号掘立柱建物跡



第11号掘立柱建物跡 (第142図)

105・106-92グリッドに位置する。SK43やビットとの新旧関係は不明である。規模は2×2間の総柱であり、桁行3.3m、梁行2.6mを測る。全体的に歪なプランである。主軸方向はN-89°-Eを指す。

柱間距離は、桁行で1.9m前後と1.5m前後で、ともに西側の柱間距離が短い。梁行では1.2~1.4mでばらつきがある。

柱穴は、直径30~40cmの円形もしくは楕円形を呈し、深度は20cm前後を測る。全体的に掘り方は小規模である。柱痕跡は検出されなかった。

須恵器甕の小破片1点が出土したが、図化するには至らなかった。

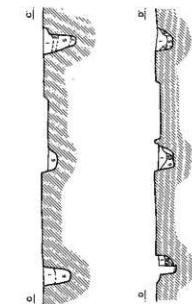
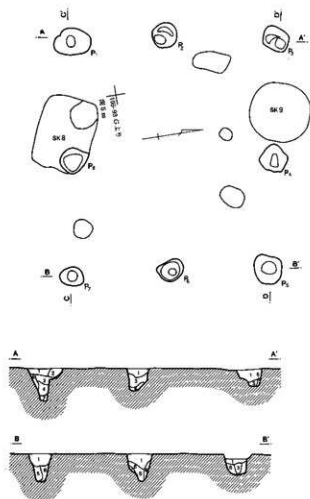
第12号掘立柱建物跡 (第143図)

105-92・93グリッドに位置する。SK8に切られていると思われるが、SK9と5基のビットとの新旧関係は不明である。

規模は2×2間で、桁行3.7m・梁行3.3mを測る。柱間距離は、桁行で1.7~1.9m、梁行1.5~1.8mとばらつきがある。梁行東側の規模が西側に比べて短く、プランはやや歪んでいる。主軸方向はN-81°-Wを指す。

柱穴は、直径30~60cmの円形もしくは長方形を呈する。深度は浅いもので20cm、深いもので55cmを測るが、概ね40cm前後の柱穴が多い。P4・P6を除いて、全体的に掘り方は小規模である。

第143図 第12号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡土層

- 1 暗褐色土 灰褐色粘土、黒褐色土ブロック (φ1cm)少
- 2 黒褐色土 ローム粘子(φ0.5cm)・粘土粒下 灰化物多
- 3 灰褐色土 粘土少、粘土質
- 4 暗灰褐色土 ロームブロック少、粘性強
- 5 暗灰褐色土 ローム粘子(φ0.5cm)多、粘性強
- 6 暗灰褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)多
- 7 灰褐色粘土 ローム粘子(φ0.3cm)少



0 L=23.6m 2m

3層が柱底に相当すると思われる。柱痕が柱穴底面まで届くもの(P3・6)と、届かないもの(P1・4・5・7)がある。後者の場合、柱底と底面の間は、ロームブロックや粘土ブロックを含む堅緻な、灰褐色土または暗灰褐色土である。平面位置で柱痕跡を検出することはできなかった。

遺物は全く出土しなかった。

#### 第13号掘立柱建物跡 (第144頁)

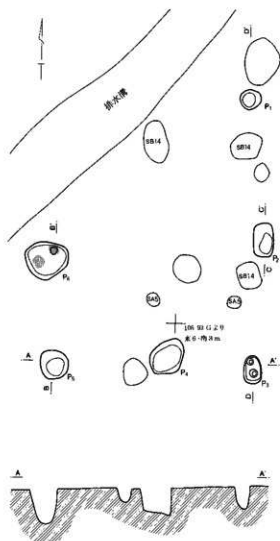
105・106-93グリッドに位置する。梁行北側の柱穴2本を、排水溝によって失っている。SB14・SA5と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は2×2間で桁行4.3m、梁行3.2mを測る。柱間距離は不均等で、桁行がP1-P2間2.3m・P2-P3間2.0m・P5-P6間で1.8m、梁行がP3

-P4間1.4m・P4-P5間1.8mである。主軸方向はN-2°-Wを指す。柱穴の掘り方は、直径30~65cmの円形もしくは楕円形を呈するものと、55×35cm、40×30cmの長方形に近い形状のもの(P2・3)とが混在する。深度は浅い柱穴で約20cm、深いもので55cmであるが、概ね40cm前後である。全体的にみて、掘り方は比較的小規模である。P6において2本の柱底が検出された。今回の調査で、隅柱の柱穴以外に2本の柱底が確認されたのは、本例のみであった。新旧関係は不明であるが、本遺構とSB14は建て替えによるものと思われる。

土師器の小破片が数点出土しているのみで、函化には至らなかった。

## 第144図 第13号掘立柱建物跡

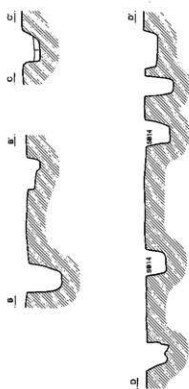


## 第13号掘立柱建物跡土層

1 新製褐色土、粘土ブロック石平、しまり非常に強・粘柱中や腐



0 L=23.6 m 2m



## 第14号掘立柱建物跡 (第145図)

105・106-93グリッドに位置する。排水溝によって、北東の隅柱と桁行西側の柱穴を失っている。

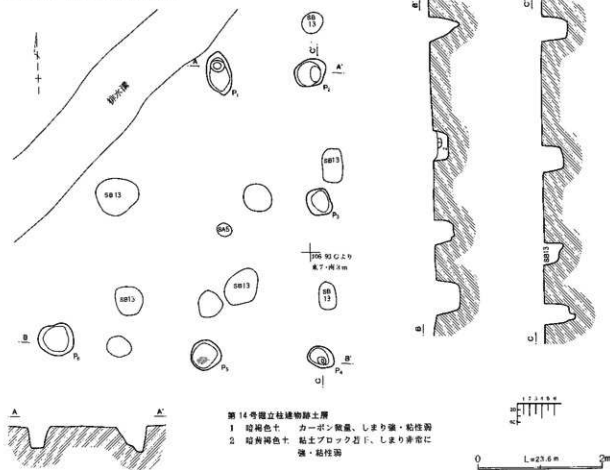
排水溝以西には柱穴は検出されておらず、規模は2×2間と判断した。桁行4.5m、梁行4.3mを測る。柱間距離は非常に不均等で、桁行がP2-P3間2.0m・P3-P4間2.5m、梁行がP1-P2間1.6m・P4-P5間1.9m・P5-P6間2.4mである。P1-P2間・P4-P5間の柱間距離と、P5-P6間のそれとは数値が大きく異なるため、P1-P3の柱穴に東庇の可能性も考えた。しかし前述のように、本遺構は西側にはこれ以上延びることはなく梁行

2間であるということ、さらにP1-P5間に柱穴と思われるビットが存在しないことから、東庇の可能性はないと判断した。主軸方向はN-0°を指す。

梁行の柱穴の並びは、北側と南側が平行になっておらず、プランも歪んでいる。柱穴は、直径30×50cm~40×70cmを測る円形もしくは楕円形を呈するもので、深度は30cm前後~50cm程である。掘り方は比較的小規模である。断面図をみると、柱が底面まで届いていたと思われるビット (P2・P4) と届いていないビット (P5) が存在している。

土師器と須恵器が1点づつ出土しているが、きわめて小さな破片であるため図化には至らなかった。

第145図 第14号掘立柱建物跡



第15号掘立柱建物跡 (第146図)

103・104-94・95グリッドに位置する。排水溝によって、北西隅柱と桁行北側の柱穴1本を失う。SD16を切り、SD18に切られる。SD20との新田関係は不明である。規模は3×2間で桁行6.0m、梁行4.0mを測る。柱間距離は比較的近似で、桁行は1.9~2.1m、梁行は2.0mと2.2m、深さは15~45cmであるが、概ね40cm前後である。主軸方向はN-68°-Wを指す。

柱穴は、40×40cm~75×65cmの円形もしくは長方形を呈する。深度は浅いもので20cm前後、深いもので約50cmを測るが、概ね40~50cmである。

P1・5・8に柱底が検出された。その他は抜き取られているのであろうか。5・6層は柱痕と思われる。

土師器の小破片が僅かに出土しているのみであり、岡化し得た遺物はP6から検出された土師器甕1点のみである。

第16号掘立柱建物跡 (第148図)

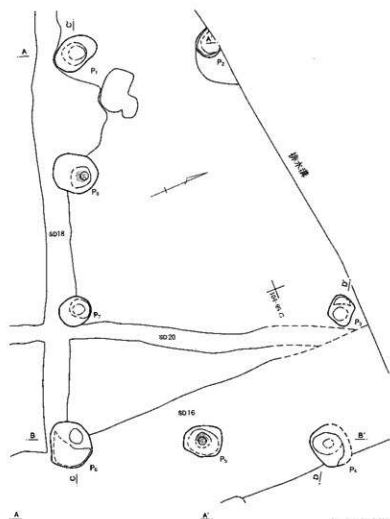
105-94グリッドに位置する。S J 29を切っていると思われるが、SB16やピットとの新田関係は不明である。規模は2×2間で、梁行北側に庇をもつ。桁行4.0m、庇まで含めて5.9m、梁行3.4mを測る。柱間距離はやや不均等であり、桁行で1.9~2.2m、梁行は北側で1.7mであるが、南側のP6-P7間は1.0m、P7-P8間は2.4mを測る。

P7の掘り方は、20×25cmの円形を呈するものできわめて小さい。P7-P8間に、S J 29の床面にまで届かないピットがもう1つあり、入り口部を形成していたのであろうか。主軸方向はN-4°-Eを指す。

P7以外の柱穴は、直径30×30cm~45×45cmの円形を呈し、深度は20cm前後~50cm前後であるが、概ね40cm前後の柱穴が多い。

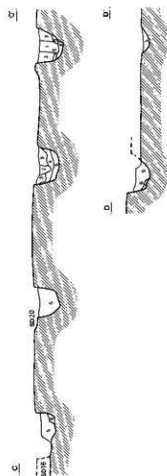
P1・P6で検出された1層が柱痕に相当すると思

第146図 第15号掘立柱建物跡



第15号掘立柱建物跡土層

- 1 暗灰色土 粘土、しまりなく、柱痕
- 2 暗褐色土 シルト質、マンガン、Fe 沈着多、柱痕少
- 3 灰褐色土 シルト質（埋土）地山ブロック多、1層と同埋土
- 4 暗灰色土 シルト質（埋土）地山ブロック多、3層に近似
- 5 暗灰色土 シルト質（埋土）地山ブロック多
- 6 灰白色土 シルト質



われるが、土層断面からみる限り、どちらも柱痕は底面に届いていない柱穴である。

土師器・須恵器の小破片が少数出土しているのみであり、図化するには至らなかった。

第147図 第15号掘立柱建物跡出土遺物

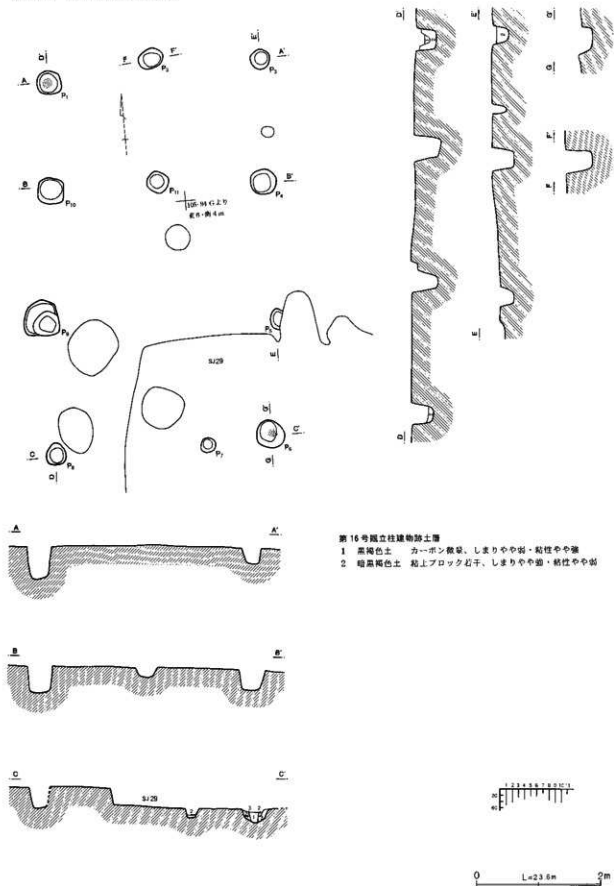


第58表 第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第147図)

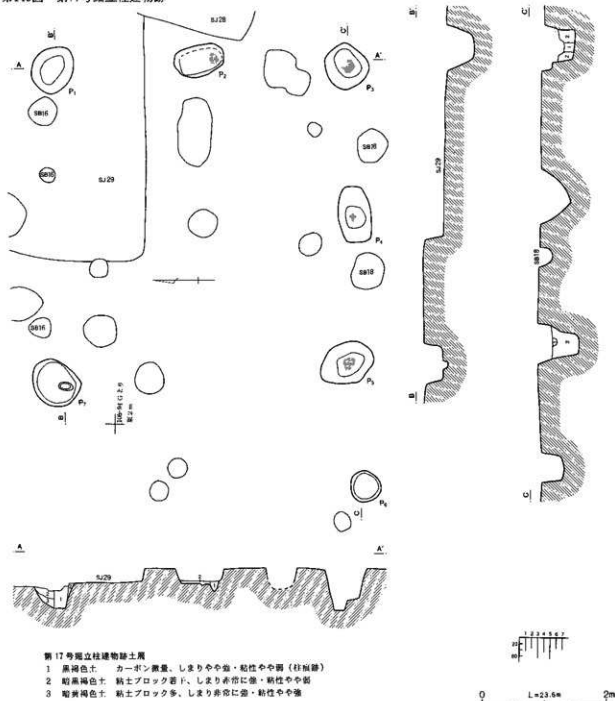
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器甕	(19.3)	6.3	—	ACEFH	管造	茶褐色	口25	外面スス付着 口:内外面横ナテ 胴(外):宛削り (内):宛ナテ



第148図 第16号掘立柱建物跡



第149図 第17号独立柱建物跡



## 第17号独立柱建物跡 (第149図)

105・106-94グリッドに位置する。3本の柱穴を欠いているが、深度が浅いために表土削平時点に失われてしまったのであろうか。S J 29を切っているが、S B 16や上填、およびピットとの新旧関係は不明である。

規模は3×2間であり、桁行6.7m・梁行4.7mを測る。柱間距離は、桁行で2.0mと2.3m、梁行で2.3mを

測る。主軸方向はN-89°-Eを指す。

柱穴は、直径50×50cm～90×65cmの円形もしくは楕円形を呈するものと、80×50cm～85×55cmの長方形を呈するもの(P2・4)とが混在する。

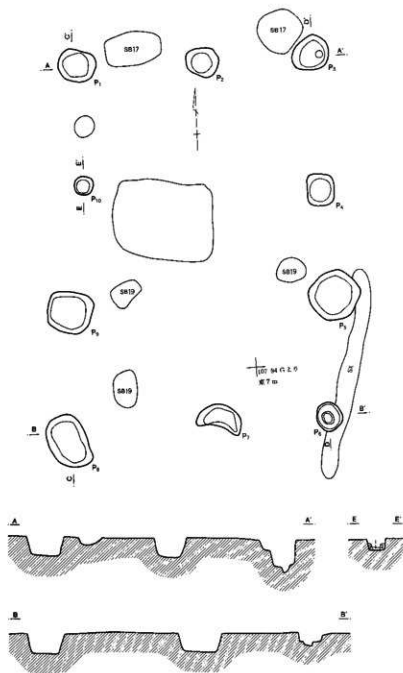
上層断面に柱痕が検出できたのは、7本の柱穴中5本である。またこの他に、エレベーションにおいて確認できた1本を加えれば、検出できなかった柱穴はP

6だけとなる。

1層が柱底に相当すると思われる。柱底の検出できた6本の柱穴の内、柱底が底面まで届いていないのは1例のみであり、この場合底面との間には、粘土ブロックを含む、非常に堅緻な暗褐色土が充填されている。

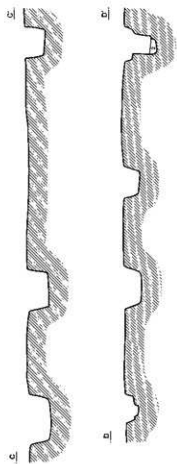
土師器の小破片が数点出土しているのみで、図化するには至らなかった。

第150図 第18号掘立柱建物跡



第18号掘立柱建物跡 (第150図)

106・107-94グリッドに位置する。SB17・19、SK51、SXとの新旧関係は不明である。長方形を呈する。規模は3×2間であり、桁行5.9m・梁行4.2mを測る。柱間距離は、桁行で1.7~2.2m、梁行1.8~2.4mとばらつきがある。相対する辺同士が同規模ではなく、プランは比較的歪みが多い。主軸方向はN-5°



第18号掘立柱建物跡土層

- 1 灰褐色土 カarbon・粘土粒微量  
しまりやや固・粘性や  
や強 (柱底跡)
- 2 暗褐色土 粘土ブロック若干、し  
まり非常に強・粘性や  
や弱



0 L=23.6m 2m

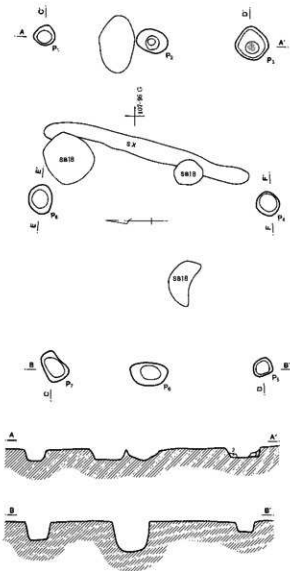
一Eを指す。

柱穴は、20×20cm～80×75cmの円形を呈するもの、50×40cm～90×60cmの長方形を呈するもの、さらに75×35cmの半月形を呈するものなどが混在し、バラエティーに富む。遺構自体の遺存度は悪く、深度は20cm前後～50cm前後であるが、概ね30～40cmの柱穴が多いといえよう。

P10にみられる1層が柱痕に相当すると思われるほか、平面や底面の断面形から柱痕を推定できる柱穴(P3・6)もある。P3・6の掘り方については、柱部分をさらに深く掘り下げている状態が観察できた。

遺物は全く出土しなかった。

第151図 第19号孤立柱建物跡

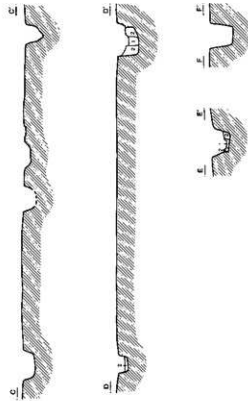


第19号孤立柱建物跡 (第151図)

106・107-94・95グリッドに位置する。S B18・S X 5と重複するか断山関係は不明である。

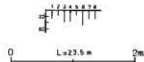
規模は2×2間で、桁行5.2m・梁行3.3mを測る。柱間距離は、桁行では概ね2.6mであるが、梁行では1.5～1.8mというように幅があり、一定しない。

P4・8は桁行線上から外側に外れており、また、P6も梁行線上からやや外側に外れている。プランは全体的にやや歪んでいる。主軸方向はN-91°-Eを指す。柱穴は、直径25×30cm～35×45cmの円形もしくは楕円形を呈するものや、45×45cmの方形、さらに30×50cmの長方形を呈するものなどが混在している。深度



第19号孤立柱建物跡土層

- 1 灰褐色土 粘土粒少、しまり強・粘性やや弱
- 2 暗黄褐色土 粘土ブロック若干、しまり非常に強・粘性強



は20cm前後～50cm程のものまでがあるが、概ね40cm前後の柱穴が多い。掘り方は、比較的小規模であるといえる。

P3・8の上層断面の1層は柱痕に相当すると思われるが、ともに柱痕は柱穴底面まで届いている。P5は検出状況からみて、柱は底面に届いておらず、粘土ブロックを含む堅緻な暗黄褐色土が充填されていた。

遺物は全く出していない。

#### 第20号掘立柱建物跡 (第152・153図)

104・105-95・96グリッドに位置する。SD18や6個のピットとの新旧関係は不明である。

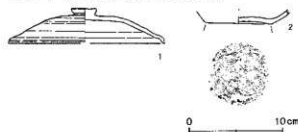
規模は2×2間で、梁行西側に庇をもつ。桁行は5.2mで、庇を含めると7.3m、梁行は4.2mを測る。柱間距離は、桁行2.5～2.7m、梁行2.0mと2.2mを測り、比較的一定している。梁行は西側と東側で若干規模が異なり、全体的にプランはやや歪んでいる。主軸方向はN-72°-Wを指す。

柱穴は、直径45×50cm～75×55cmの円形もしくは楕円形を呈するものや、55×45cmの方形、あるいは70×

55cmの長方形を呈するものが混在している。深さは約30cm～70cm前後であるが、概ね50cm前後の柱穴が多いといえる。11本の柱穴の内、6本で柱痕が検出され、さらにその内の4本(P5・6・8・11)では柱材が遺存していた。また柱材は遺存していなかったものの、P4・7の柱痕(1層)は、柱材が溶けて粘土化しているのが観察された。柱痕は柱穴底面まで届いているものと、そうでないものとが存在する。P10の柱材は抜き取られていると思われる。

岡化し得た遺物は、P5出土の須恵器蓋とP9出土の須恵器杯の、計2点であった。

第152図 第20号掘立柱建物跡出土遺物



第59表 第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第152図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	16.6	3.7	楕2.7	BEH	普通	灰白色	揃100	ロクロ成形 胎:横ナデ 天井(外):同転筒削り(R)つまみ貼付
2	須恵器杯	—	1.6	6.9	BDEH	不良	灰褐色	底85	ロクロ成形 RC

#### 第21号掘立柱建物跡 (第154・156図)

109・110-92・93グリッドに位置する。SB22・23と重複関係にあるか新旧関係については不明である。この3棟は新旧関係は不明であるものの、建て替えによる重複であると思われる。

規模は3×2間で桁行7.6m・梁行5.1mを測る。柱間距離は、桁行で2.4～2.6mであるが概ね2.5mであり、梁行では2.1m・2.4m・2.7mと比較的幅がある。

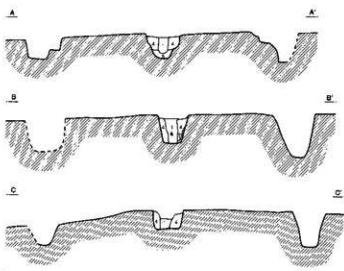
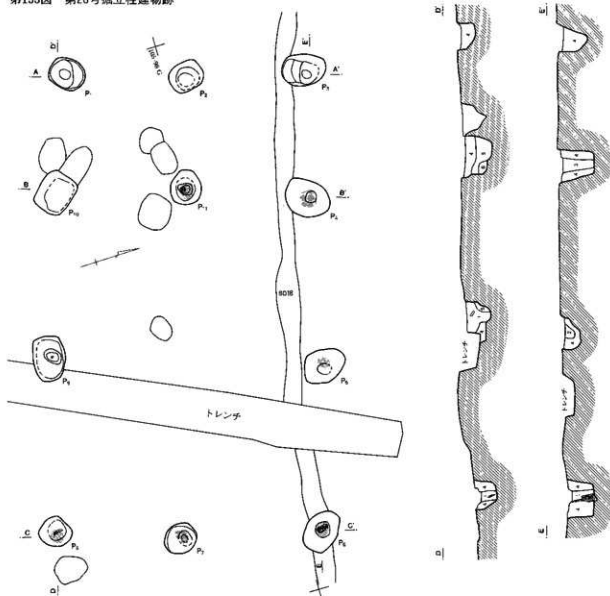
梁行は、西側・東側ともに5.1mであるが、梁行西側のP7-P8間は芯々で2.1mであり、P6-P7間(推定2.4m)、P1-P2間(同2.4m)・P2-P3

間(同2.7m)に比べて柱間距離が小さいといえる。主軸方向はN-82°-Eを指す。

各コーナーの柱穴はいずれも鍵状プランを呈するが、その他の柱穴は長方形を基本とするものである。柱穴の規模は、鍵状を呈するもので1.2×0.6m～0.95×1.45m・深さ0.3～0.7m、長方形の柱穴では70×55cm～145×90cm・深さ40cm前後である。全体的に掘り方は大きいといえる。P3では柱材が遺存していた。

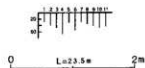
土師器・須恵器が少数出土したが、調査中ピット番号が混乱を来し、SB21・22は遺物の帰属を特定できなかった。そのため、残念ながら一括して掲載する。

第153図 第20号掘立柱建物跡

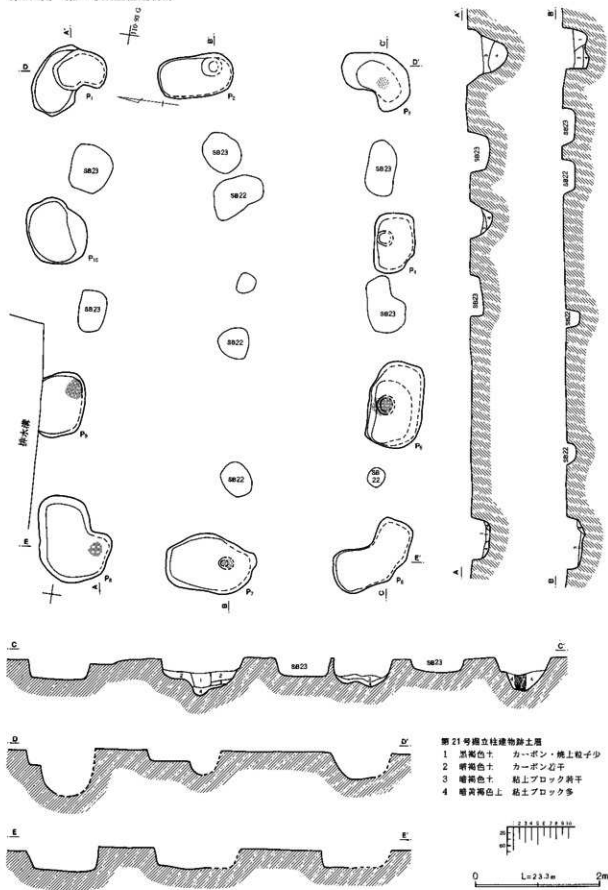


第20号掘立柱建物跡土層

- 1 灰色土 柱底、粘質土しまりなく、非常に柔らかい (P 4・P 5・P 10・P 11では柱材残存)
- 2 黒灰色土 シルト質、炭化物粒子若干、白灰色粘質土
- 3 暗灰褐色土 シルト質～砂質、柱痕かと認められるが1層とは総厚等質なる
- 4 暗褐色土 シルト質、黒色土と地山の混土層、柱穴層土
- 5 暗灰色土 粘質、4層に近似、黒色土粒子少
- 6 灰白色土 粘質、地山土若干



第154図 第21号掘立柱建物跡



## 第22号掘立柱建物跡 (第155・156図)

110-92グリッドに位置する。S B21・23と重複するが、新旧関係は不明である。但し、この2棟とは建て替えの関係にあると思われる。

規模は2×2間で、桁行4.6m・梁行4.4mを測る。柱間距離は、桁行で2.1~2.3m、梁行で2.2mと比較的一定であるといえる。しかし、南北の桁行に若干の違いがあること、P2が梁行線上からずれている点等々から、プランは歪んでいる。主軸方向はN-82-Eを指す。

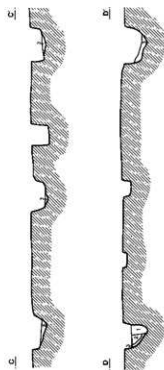
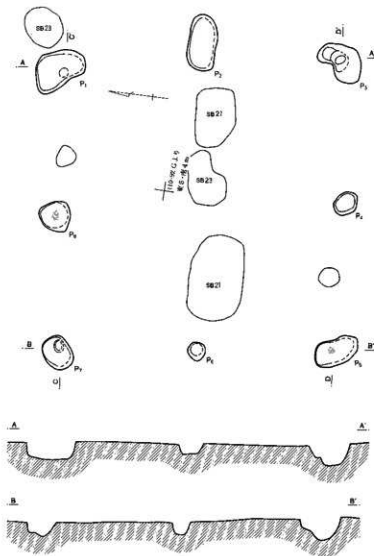
コーナー部分の柱穴はP7を除いて鍵状を呈し、そ

の他の柱穴は、円形もしくは長方形を呈する柱穴である。柱穴の規模は、鍵状を呈するもので75×40cm~85×55cm・深さ20~40cm、円形のは30×30cm~50×50cm・深さ20~30cm、長方形を呈するものは95×45cm・深さ20cm程である。

検出できた2本の柱痕(P5・8)は、ともに直径10cmであった。P5の1層が柱痕に相当すると思われるが、柱痕は柱穴底面にまで届いている。

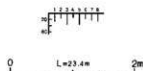
上師器・須恵器が少数出土したが、調査中ビット番号が混乱を来し、S B21・22は遺物の帰属を特定できなかった。そのため、残念ながら一括して掲載する。

第155図 第22号掘立柱建物跡



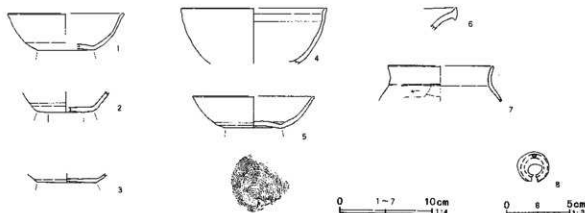
第22号掘立柱建物跡土層

- 1 黄褐色土 カーボン・焼土粒が少、しまりやや弱・粘性強
- 2 暗褐色土 焼土粒・粘土ブロック若干、しまり強・粘性強
- 3 灰白色土 灰色粘土ブロック層、しまり強・粘性強





第156図 第21・22号掘立柱建物跡出土遺物



第60表 第21・22号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第156図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師黄环	(12.4)	3.9	(6.0)	AEH	普通	黄褐色	口25	口クロ成形	RC
2	須恵器环	—	2.2	(6.0)	EII	良	暗灰色	底45	口クロ成形	RBb
3	須恵器环	—	1.0	(6.2)	DEH	普通	灰白色	底25	口クロ成形	RC
4	須恵器环	(15.5)	5.9	—	BEII	良	暗灰褐色	口25	口クロ成形	
5	須恵器环	(12.9)	3.3	6.0	AEH	普通	暗黄褐色	底75	口クロ成形	RC 墨書有?
6	須恵器甕	—	—	2.3	EII	良	灰白色	—	口クロ水挽き成形	
7	土師付合	(11.2)	3.8	—	ACPFH	普通	茶褐色	口25	外面スス付着	口:内外両側ナデ 胴(外):寛削り (内):ナデカ

8は耳環である。鉄地金銅貼りの鉄地の部分だけが遺存していると思われる。銹化のため、鉄地よりも一廻り大きく錆に覆われており、実測図は推定線に基づく。それぞれ推定で直径2.3cm・芯径0.3cmを測る。

第23号掘立柱建物跡 (第157図)

109・110-92グリッドに位置する。SB21・22と重複するが、新田関係は不明である。但し、この2棟とは建て替えの関係にあるのであろうか。

規模は、調査した限りでは2×1間である。今回の発掘調査において検出された掘立柱建物跡は、大部分が2×2間もしくは3×2間で、この他に1×1間が2棟という内容であり、2×1間というのは本例のみであった。

プランとして不規則であるということ、P1-P5間に柱穴が検出されていないこと等から、遺構はさらに西側に続く可能性も想定された。このため、SB21・

22の遺構確認作業の際にも精査を行ったが、図示してあるビット以外は検出することはできなかった。

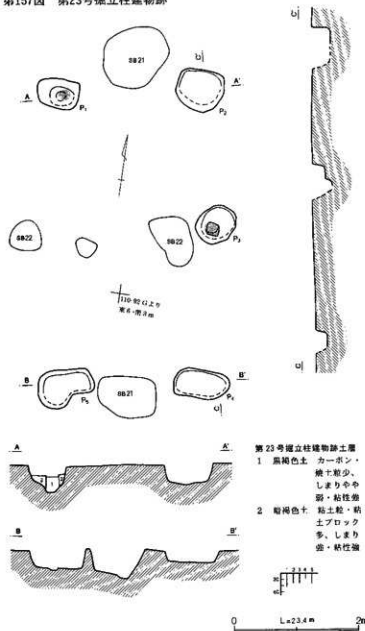
しかし、各ビットの深度が20~30cm前後と比較的浅いことから、西側のビットが失われている可能性を依然として否定し切れない。

またこれらの他にも、P5の掘り方にも疑問点が残る。つまり、掘立柱建物跡のコーナー部分の柱穴が鍵状を呈する場合、その柱穴は建物を取り囲むように鍵状を呈するのが一般的である。柱穴の形状のみをみると、P5は掘立柱建物跡の北西コーナーに相当するかのよう印象を受ける。この想定に基づき精査も行ったがやはり柱穴を検出することはできなかった。

2×1間の想定を基にすれば、規模は桁行4.6m・梁行2.2mを測る。柱間距離は桁行で2.3m、梁行で2.2mと一定している。主軸方向はN-8°-Wである。

遺物は全く出土しなかった。

第157図 第23号掘立柱建物跡



第24号掘立柱建物跡 (第158・160図)

110・111-91・92グリッドに位置する。重複するSB25との新旧関係は不明であるが、向者は建て替えの関係にあると思われる。規模は3×2間であり、桁行7.0m・梁行5.6mを測る。掘り方が大きいので、柱間距離を特定しづらいが、桁行で2.0~2.7mと差が大きい。P1-P11間は芯々で2.0m、P4-P5間は上層断面の柱痕(1層)から2.6mと算出した。梁行で2.5~3.0mを測る。主軸方向はN-0°を指す。

P1-P3間にP2が存在しており、柱痕も検出さ

れた。柱穴内を平面的にスライスするように調査していったが、かなり掘り下げた段階で、柱穴と柱痕が2本になると判明したため、両者の新旧関係は確認できなかった。柱穴の掘り替え、または床支えのためのピットであろうか。柱痕は柱穴底面まで届いているものとそうでないものがあり、後者は柱痕の下に粘土ブロックを含む堅緻な土が充填されていた。各柱穴のピットの深度はばらつきがあるが、概ね40~50cmである。

土師器・須恵器が少数出土したが、調査中ピット番号が混乱を来し、SB24・25は遺物の帰属を特定できなかった。残念ながら一括して掲載する。

第25号掘立柱建物跡 (第159・160図)

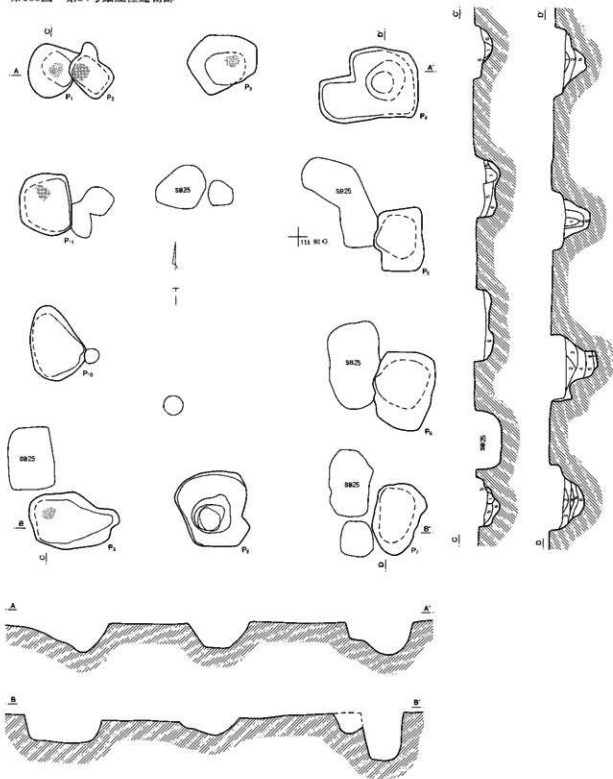
110・111-91・92グリッドに位置する。重複するSB24との新旧関係は不明であるが、両者は建て替えの関係にあると思われる。

規模は3×2間であり、桁行7.0m・梁行4.8mを測る。大規模な掘り方であるため、柱間距離は特定しづらい。平面または断面で確認できた柱痕から算出した柱間距離は、桁行で2.0m・2.3m、梁行はP1-P2間が芯々で2.1mであった。柱穴は、梁行は線上に乗っているが、桁行両側でP9・P10が線上からずれており、プランもやや

歪んでいる。主軸方向はN-1°-Eである。柱穴の掘り方の形状は、不整形・不整形・長方形など様々で、規模は最小のもので80×60cm、最大のものでは140×80cmを測る。コーナーピットの内、P3・6は礎状を呈すると思われる。P5は柱痕(1層)が柱穴底面まで届いておらず、柱痕の下に粘土ブロックを含む堅緻な土が充填されていた。

土師器・須恵器が少数出土したが、調査中ピット番号が混乱を来し、SB24・25は遺物の帰属を特定できなかった。残念ながら一括して掲載する。

第158図 第24号掘立柱建物跡



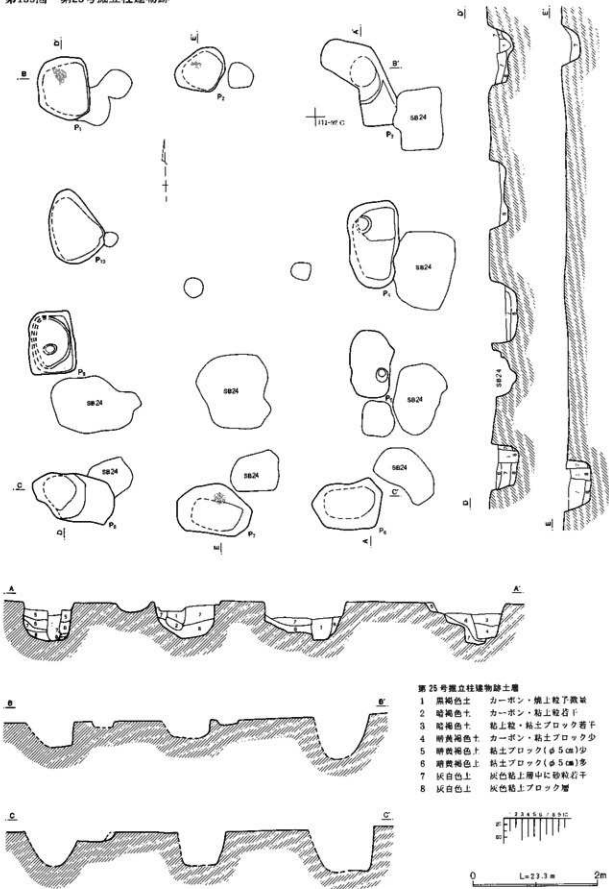
第24号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 カーボン・粘土粒子微量、しまりやや弱・粘性強
- 2 暗褐色土 カーボン・粘土粒子若干、しまりやや弱・粘性強
- 3 暗褐色土 粘土粒・粘土ブロック若干、しまり・粘性強
- 4 暗褐色土 カーボン・粘土粒子少、しまり・粘性強
- 5 暗褐色土 粘土ブロック(φ5cm)少、しまり・粘性強
- 6 暗褐色土 粘土ブロック(φ5cm)多、しまり非常に強・粘性強



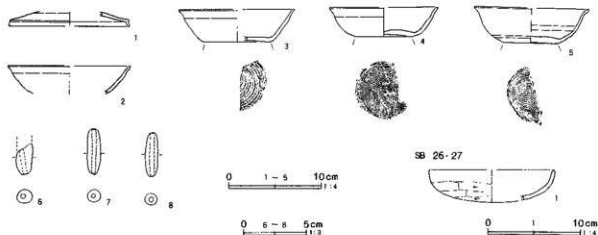
0 L=23.3 m 2m

第159図 第25号掘立柱建物跡



第160図 第24～27号掘立柱建物跡出土遺物

SB 24-25



第61表 第24・25号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第160図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(12.9)	1.6	—	EH	良	暗灰色	口25	口クロ成形 天弁部・面転置削り
2	須恵器杯	(13.0)	3.0	—	BFH	普通	暗灰色	口25	口クロ成形
3	須恵器杯	(12.3)	3.4	(7.0)	EH	普通	灰白色	底40	口クロ成形 C
4	須恵器杯	(11.6)	3.1	6.0	BFH	普通	灰褐色	底60	口クロ成形 RC
5	須恵器杯	(12.2)	3.2	(5.8)	DEH	良	暗灰色	底45	口クロ成形 RC

第62表 第26・27号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第160図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	(13.2)	3.5	—	ACEFH	普通	橙褐色	口25	口：内外面横ナデ 胴(外)：彫削り (内)：ナデか

6：土鉢。胎土：AEH、橙褐色。焼成：普通。現存長3.2cm・最大径1.7cm・孔径0.5cm、現存重量8.2g。

7：土鉢。ADEH、橙褐色。焼成：普通。長さ4.7cm・最大径1.4cm・孔径0.4cm、重量9.4g。完形。P5。

8：土鉢。ABEH、暗褐色。焼成：普。長さ4.6cm・最大径1.3cm・孔径0.4cm、重量8.1g。完形。

第26号掘立柱建物跡(第160・161図)

111・112-91・92グリッドに位置する。SB27を切っていることから、本遺構はSB27の建て替えと思われる。規模は3×2間であり、桁行6.7m・梁行4.7mを測る。柱間距離は、桁行・梁行方向ともに2.2mと一定している。P2が梁行北側の縁から若干外側にずれているほかは、比較的整った柱穴配置といえる。主軸方

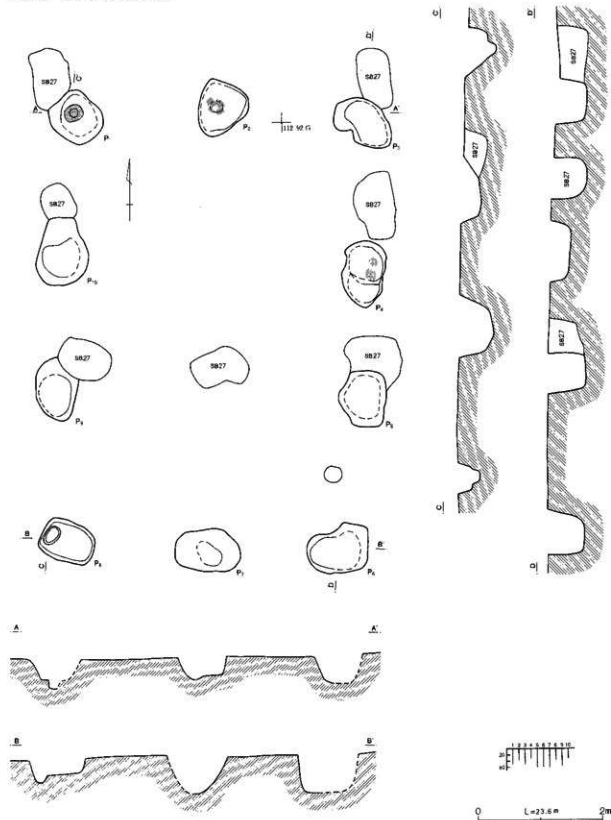
向はN-2°-Eを指す。

柱穴は、やや不揃いではあるが長方形を基本としていると思われるが、P3・6のコーナービットは鍵状を呈する。柱穴の規模は、長方形を呈するものが80×70cm～105×80cm、鍵状を呈するものが100×60cmと100×70cm、深度は40～50cm前後のビットが多い。全体的に掘り方は大規模であるといえる。

検出された柱痕は、直径15～20数cmであった。なお、P4では2本の柱痕が検出されている。

今回調査した、大部分の掘立柱建物跡について表現できることではあるが、柱穴の掘り方に柱を入れ、周囲を埋め戻す際に非常に突き固めたらしく、ビット内の掘り下りは非常に困難な作業であった。

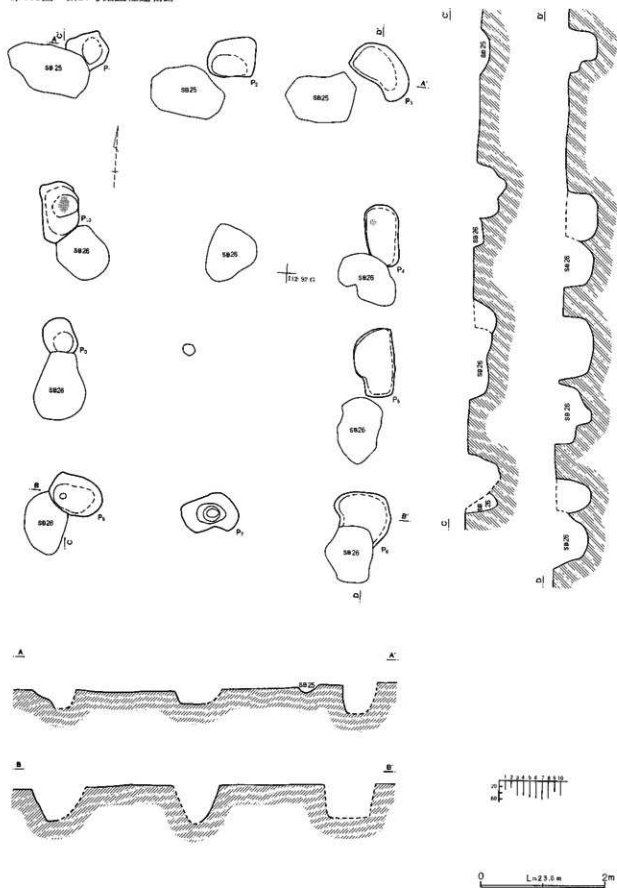
第161図 第26号掘立柱建物跡



上師器の小破片以外で陶化し得た遺物は、環1点のみであった。しかし残念ながら、調査中にピット番号

が混乱を来し、SB 26・27のいずれに帰属するのが特定できなくなってしまった。

第162图 第27号掘立柱建物跡

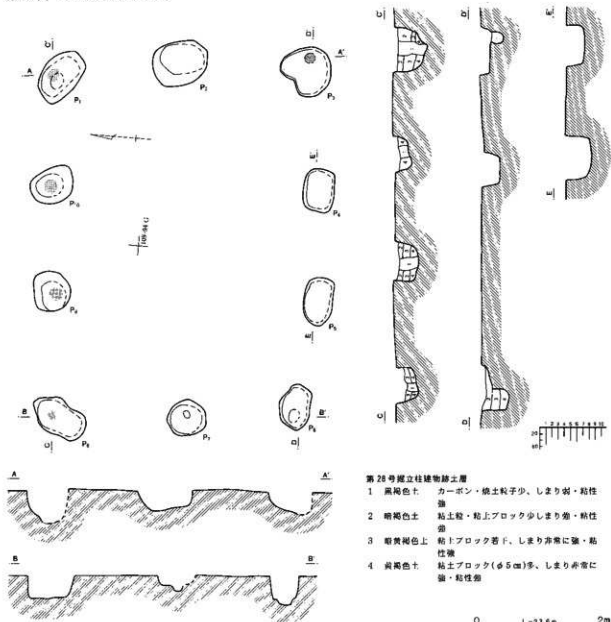


## 第27号掘立柱建物跡 (第160・162図)

111・112-91・92グリッドに位置する。SB26に切られているが、本遺構からの建て替えと思われる。

規模は3×2間であり、桁行7.1m・梁行4.8mを測る。柱間距離は、桁行で2.1~2.6mと幅があるが、梁行では一定しており2.4mを測る。P9・10は桁行線上から外(西)側にずれている点を除けば、プランは比較的整っているといえよう。主軸方向はN-1°-Wを指す。柱穴は、基本的な方形もしくは長方形を呈し、コーナー部分の柱穴のうち、P3・6は鍵状を呈する。

第163図 第28号掘立柱建物跡



第28号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 カークボン・焼土粒子少、しまり弱・粘性強
- 2 暗褐色土 粘土粒・粘土ブロック少ししまり強・粘性強
- 3 暗黄褐色土 粘土ブロック若干、しまり非常に強・粘性強
- 4 黄褐色土 粘土ブロック(φ5cm)多、しまり非常に強・粘性強

柱穴の規模は、50×60cm~110×65cmまであり、不揃いである。柱穴の深度は約20~60cmであるが、おおむね50cm前後といえる。

非常に堅い柱穴内を、スライスするように掘り下げていったが、柱痕を検出できたのはP4・P10だけであった。

土師器の小破片以外で図化し得た遺物は、環1点のみであった。しかし残念ながら、調査中にビット番号が混乱を来し、SB26・27のいずれに帰属するのか特定できなくなりました。

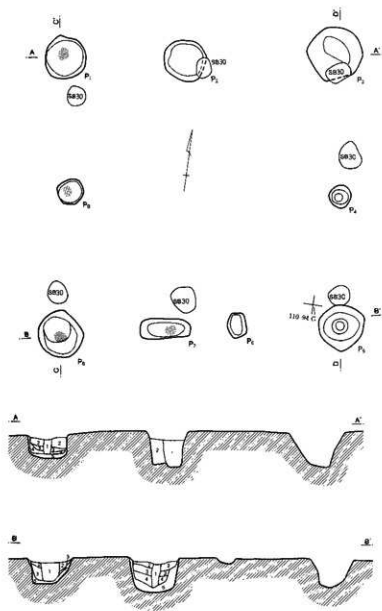


第28号掘立柱建物跡 (第163図)

108・109-93・94グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。規模は3×2間で、桁行5.5m・梁行4.1mを測るが、桁行が東西で規模が異なること、P4・5が桁行線上から外(南)側にずれているなど、プランはやや歪んでいる。柱間距離は、桁行で芯々1.7~1.9m、梁行で芯々1.8と2.1mである。主軸方向はN-85°-Eを指す。

柱穴は、直径50×50cm~70×60cmの円形もしくは楕

第164図 第29号掘立柱建物跡



第29号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 カーボン微量、しまり強・粘性やや弱(柱痕跡)  
粘土ブロック若干、しまり非常に強・粘性やや弱
- 2 暗褐色土 粘土ブロック多、しまり非常に強・粘性やや弱
- 3 暗黄褐色土 粘土ブロック多、しまり非常に強・粘性やや弱
- 4 暗褐色土 粘土ブロック少、カーボン微量、しまり非常に強・粘性やや弱
- 5 暗褐色土 粘土ブロック多、しまり非常に強・粘性やや弱

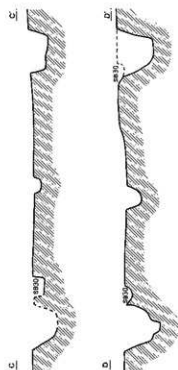


0 L=2.5m 2m

円形を呈するものと、40×60cm前後の長方形を呈するものが混在する。また、コーナー・ピットの1つであるP3は、80×70cmの鍵状を呈する。柱穴の深度は15~55cmとばらつきがあるが、概ね30~40cmである。

P1・3・8~10において柱痕(1層)が検出されたほか、P6・7もエレベーションで柱痕を推定できる。この範囲内でみれば限り、柱痕は柱穴底面にまで届くタイプであり、埋め戻しは堅緻であった。

遺物は全く出土しなかった。

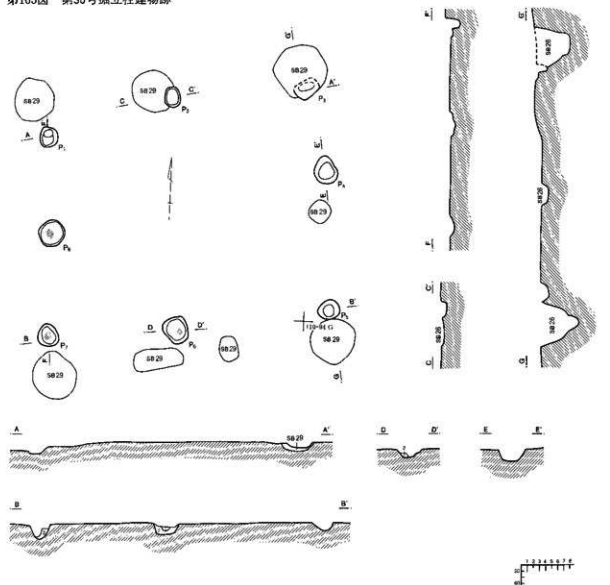


## 第29号掘立柱建物跡 (第164図)

109・110-93・94グリッドに位置する。S B30との新旧関係は確定できなかったが、遺構内の色調などから本遺構が切っているのではないかと、というのが調査時の印象であった。

規模は2×2間であり、桁行南側のみコーナー・ピットから等間隔(1.6m)に柱穴が入り、3間となっている。P6-P7間は入り口部であろうか。柱間距離は、桁行で芯々2.1mと2.2m、梁行で北側が2.0mと2.3m、南側のP6-P7間は1.2mを測る。主軸方向はN

## 第165図 第30号掘立柱建物跡



## 第30号掘立柱建物跡土層

- 1 暗褐色土 カarbon・粘土粒子豊富、しまり強・粘性弱(柱痕跡)
- 2 暗黄褐色土 粘土ブロック多、しまり非常に強・粘性弱

—8°-Wを指す。

柱穴の規模は、35×35cm～70×70cmの円形を呈するものと、30×30cm、80×30cmの方形もしくは長方形を呈するものとが混在している。柱穴の深度は約10～60cmとばらつきがあるが、概ね40～60cmであった。

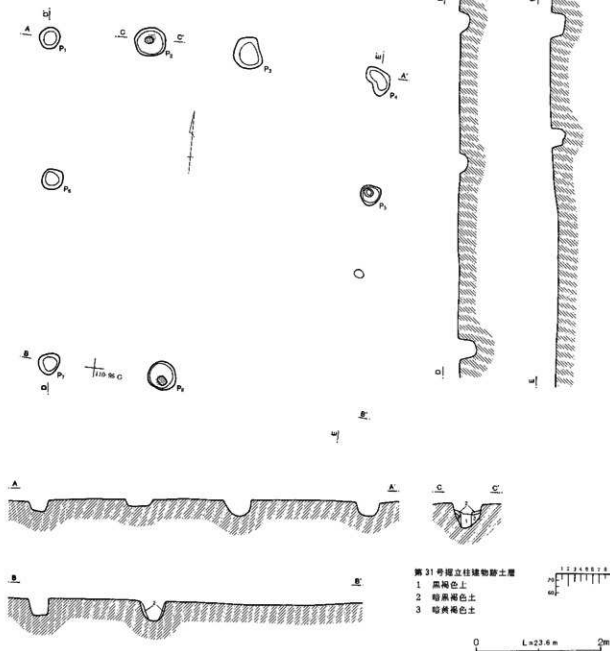
1層は柱底と思われるが、柱頂が柱穴底面に届いているものとそうでないものとが認められる。後者の場合、柱底の下に粘土ブロックを含む堅緻な暗褐色土が充填されていた。

遺物は全く出土しなかった。

第30号掘立柱建物跡 (第165図)

109・110・93・94グリッドに位置する。SB29との  
 新旧関係は確定できなかったが、遺構内の色調などか  
 らSB29に切られているのではないかと、というのが調  
 査時の印象であった。規模は2×2間であり、桁行4.  
 5m・梁行3.6mを測る。柱間距離は、桁行で2.0~2.4  
 m、梁行1.4~2.1mというようにばらつきがある。桁  
 行の北側と南側は平行しておらず、梁行も西側と東側  
 は平行していない。プランは全体的に歪んでいる。主

第166図 第31号掘立柱建物跡



軸方向はN-2'-Wを指す。

柱穴は、30×30cm~40×40cmの円形を呈するもの  
 と、35×25cm~40×30cmの長方形を呈するものとが混  
 在している。柱穴の深さは10~20cmで、掘り方は小規  
 模であるといえる。柱穴の配置のみからみれば、他の  
 ビットの方が位置的に相応しいものも存在したが、柱  
 穴の掘り方・柱穴内の埋戻し土の色調などから、図示  
 したビットの方がより可能性があると判断した。

遺物は全く出土しなかった。

## 第31号掘立柱建物跡 (第166図)

109・110・94・95グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

規模は2×2間であり、桁行5.3m・梁行5.1mを測る。主軸方向はN-7°Wを指す。遺構としての遺存度は非常に悪く、掘り方の下位面のみがかりうじて遺存しているという状況で、桁行南側の柱穴2本がすでに失われていた。

柱間距離は、桁行でP1-P2間1.6m・P2-P3間1.6m・P3-P4間2.1m・P6-P7間1.8m、梁行ではP4-P5間1.8m・P7-P8間2.9m・P8-P1間2.2mといったように非常にばらつきがあり、プランは平行四辺形を呈しており歪みは大きいといえる。

柱穴は、35×35cm～45×50cmの円形を呈するものであるが、北東のコーナービットであるP4は30×50cmの楕円状を呈している。柱穴の深度は10～30cm前後であるが、概ね20cm前後ときわめて浅い。

P2・6では柱底が検出されたが、その直径は約15cmであった。一層は柱底に相当し、その周囲に充填された暗黄褐色土はきわめて堅緻であった。

遺物は全く出土しなかった。

## 第32号掘立柱建物跡 (第167図)

110・111・94・95グリッドに位置する。SB33と重複関係にある。遺構としては重複するものの、柱穴同士の重複箇所は少なく、新旧関係の推定は困難であった。さらに重複箇所についても、土層の色調の相違点が小さい上に、掘り方内に充填された土がきわめて堅緻であり、掘り下げるのも困難をきわめた。

しかし、本遺構のP10と、SB33のP10との重複箇所の土層断面(第167図土層断面C-C')を観察した結果、本遺構はSB33に切られていると判断した。

規模は3間×2間であり、桁行7.5m・梁行4.9mを測る。すべての柱穴で柱底を検出することができた。柱間距離は、桁行でP3-P4間=2.6m・P4-P5間=2.2m・P5-P6間=2.7m・P8-P9間=2.4m・P9-P10間=2.4m・P10-P1間=2.6m、梁

行でP1-P2間=2.6m・P2-P3間=2.4m・P6-P7間=2.4m・P7-P8間=2.5mというように、比較的一定しており、プランも整っているといえる。主軸方向はN-2°Wを指す。

柱穴は、直径100×80cm～160×130cmの円形もしくは楕円形を呈するものと、110×130cm～110×65cmの方形または長方形を呈するものとが混在している。深度は0.5m～0.75mであるが、概ね60cm前後である。

遺物は全く出土しなかった。

## 第33号掘立柱建物跡 (第168図)

110・94グリッドに位置する。SB32と重複する。しかし、遺構としては重複するものの、柱穴同士の重複箇所は少なく、新旧関係の推定は困難であった。さらに重複箇所についても、土層の色調の相違点が小さい上に、掘り方内に充填された土がきわめて堅緻であり、掘り下げ作業も困難をきわめた。

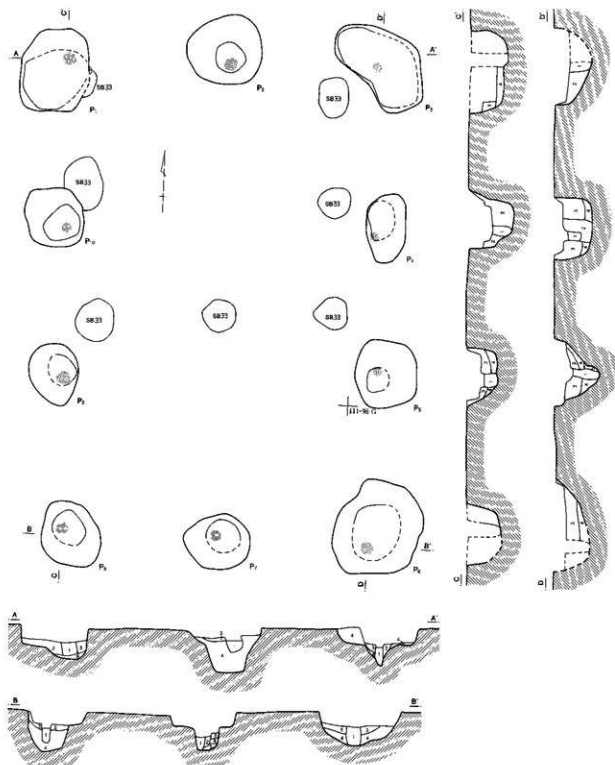
しかし、本遺構のP10と、SB32のP10との重複箇所の土層断面(第168図土層断面C-C')を観察した結果、本遺構はSB32を切っていると判断した。本遺構は、SB32の建て替えによる掘立柱建物跡であろうか。

梁行の北側と南側では若干規模が異なっているため、プランはやや歪んでいる。主軸方向はN-5°Wを指す。

規模は3×2間であり、桁行5.6m・梁行3.8mを測る。すべての柱穴で柱底を検出することができた。柱底の直径は概ね15～20cm前後であるが、P9では20×25cmであった。柱間距離は、桁行でP3-P4間=2.1m・P4-P5間=1.8m・P5-P6間=1.6m・P8-P9間=2.0m・P9-P10間=1.7m・P10-P1間=1.8m、梁行でP1-P2間=2.1m・P2-P3間=1.8m・P6-P7間=1.9m・P7-P8間=1.9mを測る。柱間距離に若干ばらつきがあるものの、プラン自体は比較的整っているといえる。

柱穴は、直径50×50cm～70×60cmの円形もしくは楕円形を呈するものから、60×45cm～105×65cmの長方形を呈するものとが混在しているほか、コーナー・ビットの1つであるP3は120×55cmの楕円状を呈してい

第167図 第32号掘立柱建物跡



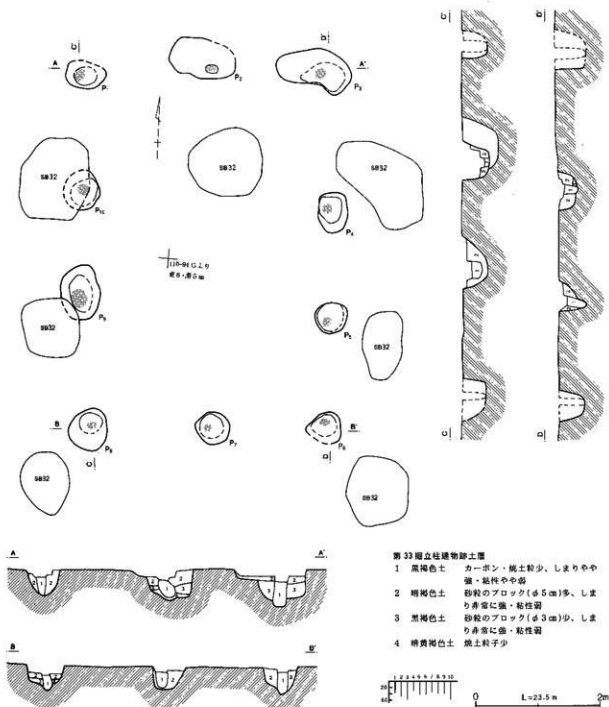
第32号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色土 カarbon・焼土粒子、しまり・粘りや中強（柱痕跡）
- 2 暗灰褐色土 砂粒子ブロック（ $\phi 3\text{cm}$ ）多、カarbon少、しまり強・粘りや中強
- 3 黒褐色土 砂粒子ブロック（ $\phi 5\text{cm}$ ）多、しまり強・粘りや中強
- 4 暗灰褐色土 砂粒子ブロック（ $\phi 5\text{cm}$ ）非常に多、しまり強・粘りや中強
- 5 灰褐色土 砂粒子ブロック（ $\phi 5\text{cm}$ ）層中に黒色土（地山上）少
- 6 灰褐色土 砂層



0 L=23.4m 2m

第168図 第33号掘立柱建物跡



る。柱穴の深度は、約40～60cmであるが、概ね40cm前後であった。全体的にSB32に比べて、掘り方および建物そのものは小規模である。

土層断面図の観察から1層は柱痕に相当すると思われる。柱痕には掘り方底面にまで届いているもの(P

1・3～6・8・10)と、そうでないものが認められた。後者は、柱痕と底面との間に非常に堅緻な暗黄褐色土(4層)が充填されていた。また、この層以外の充填土(2・3層)も、非常に堅緻なものであった。遺物は全く出土しなかった。

第34号掘立柱建物跡 (第169・170図)

112-94・95グリッドに位置する。プランの南側を、SD 4によって切られることによって失っているため、建物の規模は不明である。南へ、もう1間ないしは2間続いていたと思われる。

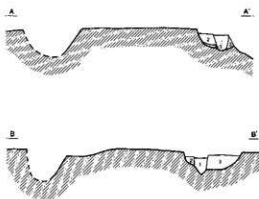
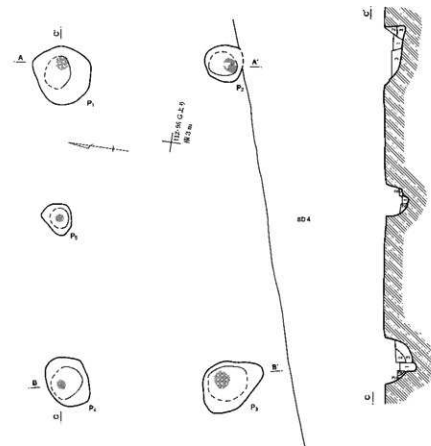
東西方向の規模は5.1m・南北方向は不明。すべての柱穴に柱痕を検出できた。柱痕の直径は、10×10cm～20×20cmと幅がある。柱間距離はいずれも芯々で、南北方向：P 1-P 2間=2.7m・P 3-P 4間=2.5m、東西方向：P 4-P 5間=2.6m・P 5-P 1：間=2.4mを測り、比較的一定であるといえよう。東西方向の柱穴の並びをみても、柱痕は一直線線上に乗っており、遺存している範囲内から判断する限り、建物跡のプランは整っている。主軸方向はN-81°-EまたはN-9°-Wを指すと思われる。

柱穴は、直径50×55cm～105×75cmの円形もしくは楕円形を呈するもので、深度は35～50cmであるが、概ね35cmのものが多いといえる。

1層は柱底に相当すると思われるが、いずれも柱穴底面にまで届くタイプである。

須恵器環3点が出土したがいずれも小破片で、図化し得たのは2点であった。

第169図 第34号掘立柱建物跡



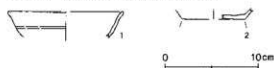
第34号掘立柱建物跡土層

- |         |                                  |
|---------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土  | 焼土粒子・炭化物粒が少、しまりやや弱・粘りやや弱         |
| 2 暗褐色土  | 焼土粒子濃密、砂粒ブロック(φ3cm)若干・しまり強・粘りやや弱 |
| 3 暗黄褐色土 | 砂粒のブロック(φ5cm)多、しまり非常に強・粘りやや弱     |



0 L=23.5m 2m

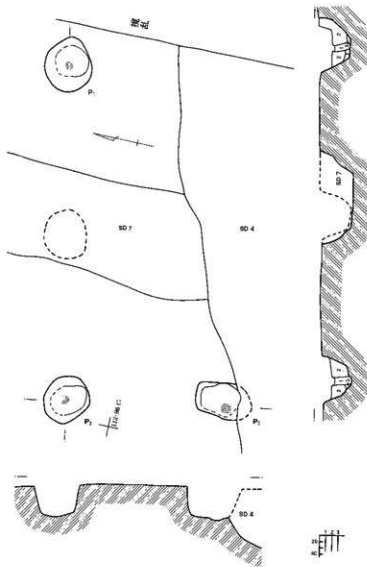
第170図 第34号掘立柱建物跡出土土遺物



第63表 第34号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第170図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	(12.3)	2.8	—	EII	普通	灰褐色	口15	ロクロ成形
2	須恵器杯	—	1.2	(6.6)	DE	普通	灰褐色	底15	ロクロ成形 C

第171図 第35号掘立柱建物跡



第35号掘立柱建物跡土層

- 1 灰褐色土 カarbon・焼土粒子微量、しまりやや強・粘性やや弱
- 2 暗褐色土 砂粒のブロック(φ5cm)少、しまり強・粘性やや弱
- 3 暗黄褐色土 砂粒のブロック(φ5cm)多、しまり強・粘性やや弱

0 L=23.5m 2m

り攪乱されている。

遺存していた柱穴は3本にとどまる。遺構としては南側に続き、東側にも続く可能性があるが、プランが不明であるため、残念ながら規模も不明である。

P1-P3間には、SD7に切られた柱穴が存在していたと思われる。その場合、検出されている範囲において、東西規模は2間分で5.3m、南北規模は1間分で2.5m、主軸方向はN-79°-EもしくはN-11°-Wが考えられる。

柱間距離は、東西方向の柱穴が等間隔であった場合で約2.6mであり。南北方向(P2-P3間)は芯々で2.5mを測る。

柱穴P1・P3は、直径80×65cmと90×75cmの円形を呈する。P2はSD4に切られているため長さは不明であるが、幅55cmで長方形を呈すると思われる。深度はいずれも約50cmであった。全体的にやや大きな掘り方といえる。

3ビットとも立面で柱痕が検出できた。柱痕の直径は、P1で約10×10cm、P2・P3では約15×15cmである。P1・P3の上層断面では、1層か柱痕に相当すると思われるが、どちらも柱痕が柱穴底面にまで届くものであった。柱痕の周囲の充填土(2・3層)は、暗褐色土もしくは暗黄褐色土であり、きわめて堅緻であった。

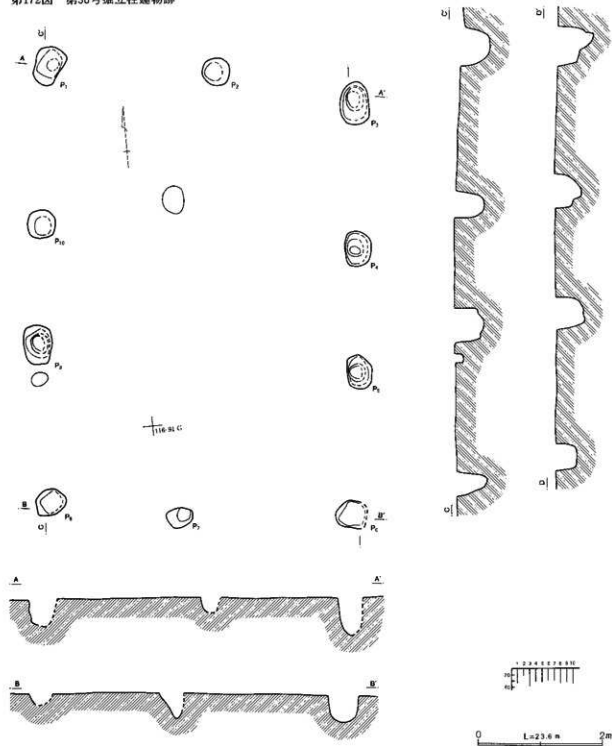
第35号掘立柱建物跡(第171図)

111・112-96グリッドに位置する。南側をSD4に、中央部をSD7に切れ、さらに東側を上砂探掘によ

土師器・須恵器が少数出土したが、いずれもきわめて小さな破片であり、残念ながら図化するには至らなかった。



第172図 第36号掘立柱建物跡



第36号掘立柱建物跡 (第172図)

115・116-90・91グリッドに位置する。今回の発掘調査において検出された、最も南に位置する掘立柱建物跡である。他の遺構との重複関係はない。

規模は、3×2間であり、桁行6.9m・梁行4.8mを

測る。柱間距離は、桁行で1.9~2.5m、梁行で2.1~2.7mとばらつきがある。

桁行は、東側と西側とでは規模が異なっている。また、桁行東側では柱穴の並びが整っているが、西側ではP9・P10が外(西)側にずれている。梁行南側で

はP7が外(南)側にずれており、全体的にプランは歪んでいる。

当初、P4-P10間にあるピットを含めて、2×2間で梁行側の北側に庇を有する掘立柱建物跡の可能性も考えた。しかし、このピットの覆土と、P1-P10内部の土との違い、そして各ピットとの位置関係などからみて、本遺構に帰属するピットの可能性はないと判断した。主軸方向はN-5°-Eを指す。

柱穴は、直径40×30cm~45×45cmの円形もしくは楕円形を呈するものと、50×45cm~60×45cmの方形あるいは長方形を呈するものとが混在している。掘り方は、比較的小規模であるといえよう。各柱穴内部の堅緻な土層をスライスするように掘り下げていったが、柱痕を検出することはできなかった。但し、P3~5・P9には柱痕を伺い知ることができた。

土師器・須恵器が少数出土したが、いずれもきわめて小さな破片であり、残念ながら図化するには至らなかった。

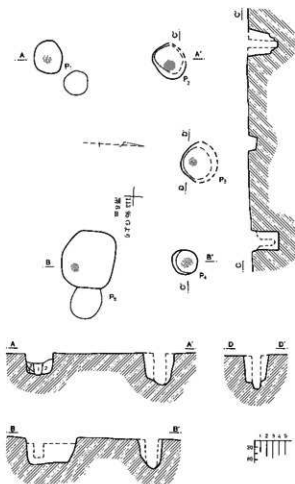
### 第37号掘立柱建物跡 (第173図)

113-94・95グリッドに位置する。柱穴の配置からみて、2×1間の規模とは考えにくく、さらに南に伸びていると思われる。そこで、南側を中心として周囲を精査したが、ピットは検出されなかった。また、S J 46の調査時点においても、ピットは確認されなかった。深度の浅いピットが、S J 43・S D 12に切られたのであろうか。検出し得たピットは5本で、規模は東西は2間3.3mであるが、南北については1間のみ(2.0m)の確認となる。

検出された5本の柱穴すべてに、柱痕が確認された。柱間距離はそれぞれそれぞれ、東西方向が1.6m、南北方向は1.8mと1.9mを測る。

数値的には一定に近いが、P6は東西線上から外(北)側にずれており、また南北の並びとは直角を呈していない。さらにP1・P5の対峙関係にもズレがあるなど、柱穴の配置は乱れており、プランは歪んだものであったと推定される。主軸方向はN-98°-Wを指す。

第173図 第37号掘立柱建物跡



#### 第37号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 焼土・炭子・カーボン少、しまり・粘姓やや強 (柱痕跡)
- 2 黒褐色土 砂粒をブロック状に若干、カーボン少、しまり強・粘姓やや強
- 3 暗黄褐色土 堆山に近状、しまり強・粘姓やや強

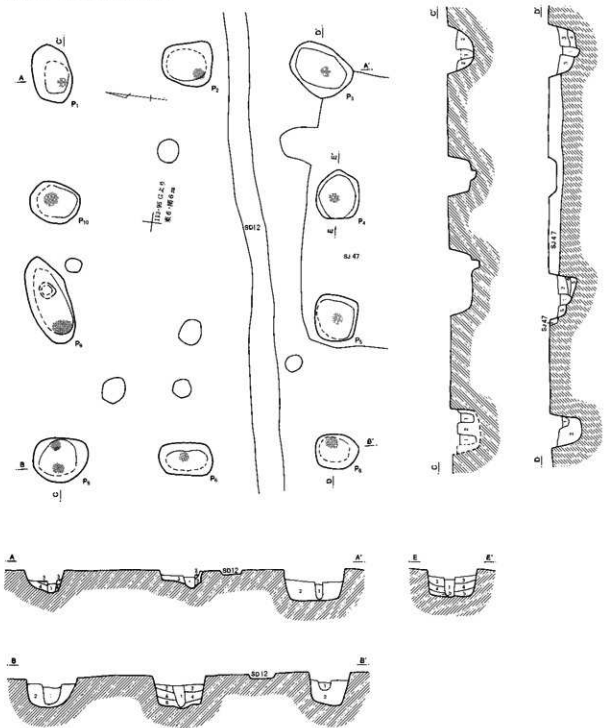
0 L=2.0m 2m

柱穴は、直径40×40cm~45×50cmの円形を呈するものと、40×55cm~80×90cmの方形または長方形を呈するものとが混在している。深度は、40cm弱~60cmである。掘り方の規模については、P5を例外として全体的に小規模といえる。

1層は柱痕に相当すると思われる。柱痕の周囲の充填土(2・3層)は、地山に近い非常に堅緻な暗黄褐色土であった。

遺物は全く出土しなかった。

第174図 第38号掘立柱建物跡



第38号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 粘土粒子・カーボン少、しまり強・粘性やや強（柱痕跡）
- 2 暗灰褐色土 カーボン微量、しまり強・粘性やや強
- 3 黒褐色土 粘土粒子・カーボン少、しまり強・粘性やや強
- 4 暗灰褐色土 粘土土（暗灰褐色土）をブロック状に多、しまり強・粘性やや強
- 5 黒褐色土 カーボン・粘土土をブロック状に少、しまり強・粘性やや強



0 L. 23.8 m 2m

## 第38号掘立柱建物跡 (第174・176図)

113・114-95・96グリッドに位置する。S J 47を切るが、SD12および6本のピットとの新旧関係は不明である。

規模は3×2間であり、桁行は北側6.1m・南側5.9m、梁行は東側4.2m・西側4.4mを測る。すべての柱穴で柱底が検出された。柱底の直径は概ね15×15cm、太いもので30×30cmであった。北西のコーナー・ピットであるP 8においては、柱底が2本検出されたが、1本は床支えの柱底であろうか。

柱間距離はいずれも芯々で、桁行方向で1.9~2.2m、梁行方向で2.0~2.3mを測る。柱底は、桁行・梁行ともに線上に比較的良好に乗っているといえよう。主軸方向はN-83-Eを指す。

1層は柱底に相当するが、柱底には柱穴底部にまで届くものと、そうではないものがみられる。後者の場合でも、柱底と柱穴底面の中間層(2・5層)は、非常に堅緻な暗灰褐色もしくは黒褐色土であった。また、柱穴内の充填土は全体的に堅緻であるといえる。

土師器と須恵器が少数出土したが、小破片が多く凶化し得た遺物は土師器甕1、須恵器甕1・坏1の、計3点であった。

## 第38号掘立柱建物跡 (第175図)

113-96グリッドに位置する。柱穴の数と配置から、

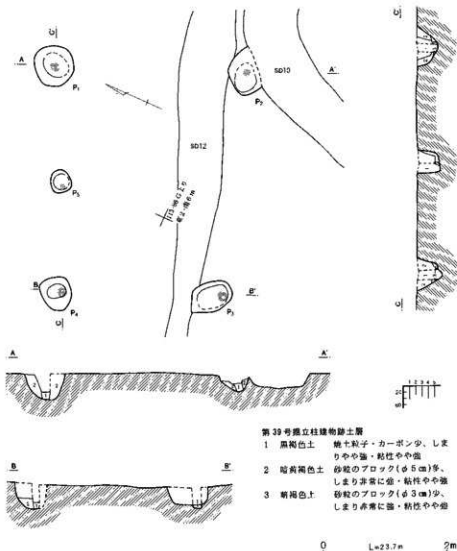
遺構はさらに南に続くと思定される。SD10との新旧関係は確認できなかった。

遺存していたのは東西の2間(3.6m)と、南北方向の1間(2.5mと3.0m)のみで、深度は30~40cmであった。南北方向を桁行と想定すれば、主軸方向はN-26°-Wを指す。

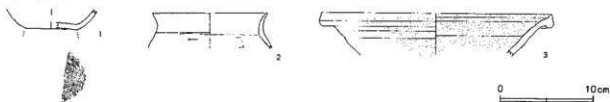
柱穴は円形を呈するもの他に、長方形のものも混在するが、掘り方は比較的小規模である。柱底はすべて柱穴底部にまで届くものである。

遺物は全く出土しなかった。

第175図 第39号掘立柱建物跡



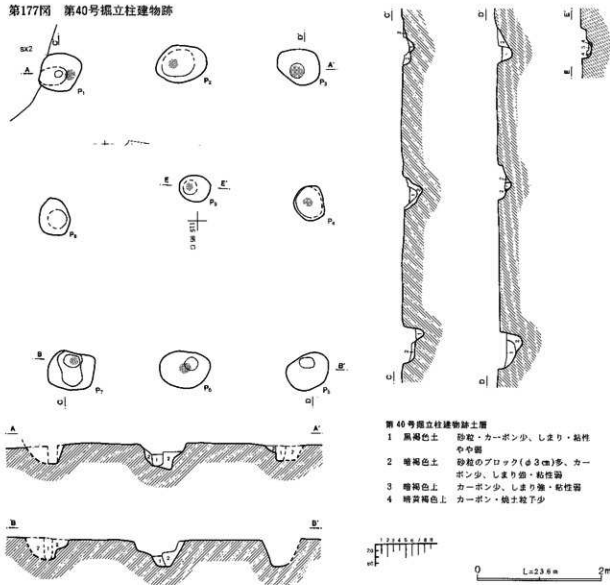
第176図 第38号掘立柱建物跡出土遺物



第64表 第38号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第176図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	—	2.2	(5.7)	EH	普通	灰褐色	残25	ロクロ成形 RC
2	上峰台付甕	(12.2)	3.8	—	ACEF	普通	茶褐色	残25	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):荒削り (内):荒ナテ
3	須恵器甕	(24.4)	4.5	—	EH	普通	精灰褐色	残20	ロクロ成形 内外面とも自然塗

第177図 第40号掘立柱建物跡



第40号掘立柱建物跡土層

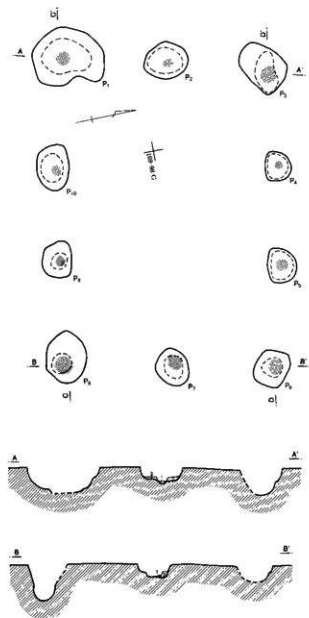
- 1 黒褐色土 砂粒・カーボン少、しまり・粘性やや弱
- 2 暗褐色土 砂粒のブロック(φ3cm)多、カーボン少、しまり強・粘性弱
- 3 暗褐色土 カーボン少、しまり強・粘性弱
- 4 精灰褐色土 カーボン・焼土粒下少

## 第40号獨立柱建物跡 (第177図)

114・115-94・95グリッドに位置する。SX 2に切られていると思われる。規模は2×2間の総柱で、芯々で桁行4.5m・梁行3.8mを測る。9本の柱穴の内、7本で柱痕を検出できた。柱間距離は、桁行で2.0~2.5m、梁行で1.8~2.0mとばらつきがある。柱の並びは悪く特にP 9は大きくずれており、全体的にプランは歪む。主軸方向はN-90°-Wを指す。

柱穴は、50×40cm~80×55cmの円形もしくは長方形を呈するものと、75×55cmの長方形を呈するもののが

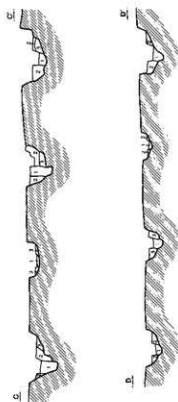
第178図 第41号獨立柱建物跡



混在している。深度は20~40cmである。柱穴の掘り方は、比較的大きい部類にはいるが、深度的には浅いといえよう。

1層は柱痕と想定されるが、柱痕には柱穴底面に届くものと届かないもの(P 8)とがある。柱穴内に充填されているのは(2~4層)、砂粒ブロックや焼土粒子を含む非常に堅緻な暗褐色土もしくは暗黄褐色土であった。

土師器環の小破片が出土したが、図化し得るには至らなかった。



第41号獨立柱建物跡土層

- 1 黄褐色土 埴山ブロック少、しまり・粘性弱(柱痕跡)
- 2 黒褐色土 埴山ブロック多、しまり・粘性弱
- 3 黒褐色土 埴山ブロック多、しまり・粘性弱



#### 第41号掘立柱建物跡 (第178図)

108-109-97-98グリッドに位置する。直接重複する遺構はないが、柱穴列が南北1方向しか検出できなかったS B 42が、西側に展開している場合、本遺構と重複することになる。

規模は3×2間であり、桁行4.8m・梁行3.4mを測る。柱間距離はいずれも芯々で、桁行で1.4~1.7mとやや幅があるが、梁行では1.6mまたは1.7mと一定している。

桁行の中間柱P 4・5、P 9・10はやや外側にずれるが、全体的にプランは整っているといえる。主軸方向はN-80°-Wを指す。

すべての柱穴で柱痕を検出できた。柱穴は、50×40cm~80×60cmの円形もしくは楕円形を呈するものと、55×50cm~80×60cmの方形または長方形を呈するものとが混在する。また、南西のコーナー・ビットであるP 1は110×85cmの鍵状を呈する柱穴である。柱穴の掘り方は、一部のビットを除いて小規模な部類にはいる。

1層は柱痕に相当すると思われるが、すべての柱痕が柱穴底部にまで届いているのが観察できた。柱穴内の充填土は、いずれも地山ブロックを含む黒褐色土であった。

土師器甕と須恵器環の小破片が少数出土したが、図化するには至らなかった。

#### 第42号掘立柱建物跡 (第179図)

108-109-98グリッドに位置する。S J 39を切る。南北方向に2間のみが検出されたにとどまる。周辺の精査を繰り返したが、残念ながら、これ以外のビットを確認することはできなかった。

検出された2間の規模は、4.6mであり、柱間距離はP 1-P 2間=2.7m、P 2-P 3間=1.9mを測る。

遺存度はきわめて悪く、柱穴の深度はP 1=10cm、P 2=26cm、P 3=24cmである。

周辺を精査したにも関わらず、全くビットを検出できなかったのは、各ビットの遺存度が悪く、既に失われてしまっていたか、あるいは今回の発掘調査による

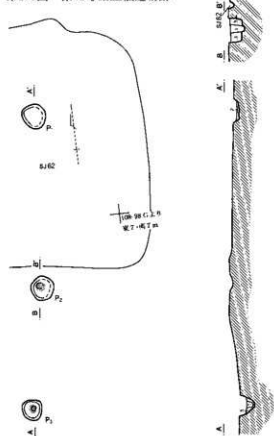
表土削平のためビットが失われてしまった可能性も考えられる。本遺構のビット列の軸方向はN-7°-Eである。

3本の柱穴の内、2本で柱痕が検出できた。柱痕の直径は、P 2・P 3ともに約15×15cmであった。

1層が柱痕に相当すると思われる。P 2は、柱痕が柱穴底面にまで届くもので、柱痕の間隙には、粘土粒子を少量含む、比較的均質な暗黄褐色土(3層)が充填されていた。P 3では、柱痕は柱穴底面まで届かないものであり、柱痕の間隙は、P 2と同様の充填土であった。柱穴の掘り方は小規模である。

土師器と須恵器の小破片が1点づつ出土したが、いずれも図化するには至らなかった。

第179図 第42号掘立柱建物跡



第42号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 焼土粒子・カーボン少、しまり強・粘性やや強
- 2 暗褐色土 カーボン少、しまりやや強・粘性やや弱
- 3 暗黄褐色土 粘土粒了少、しまり・粘性やや強



0 L=23.5m 2m

## 第43号掘立柱建物跡 (第180団)

107-99・100グリッドに位置する。SD15と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は1×1間であり、桁行はP2-P3間=2.7m・P4-P1間=3.2m、梁行はP1-P2間・P3-P4間ともに2.2mを測る。

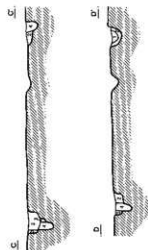
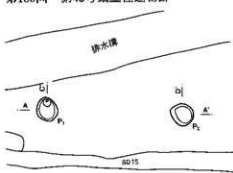
桁行は、北側と南側では規模が異なり、梁行は、東側と西側が平行していない。さらに、桁行と梁行は直角を呈していないため、建物のプランは大きく歪んでいる。主軸方向はN-82°-Wを指す。

本遺構西側には、今回の発掘調査のために排水溝を掘削した。このため、もし梁行西側に庇を有していた場合、排水溝によって、庇の柱穴が失われた可能性が高いことになる。

柱穴の規模を平面規模×深度・平面形態の順に列挙すると、P1=40×35×20cm・楕円形、P2=35×35×20cm・円形、P3=40×40×45cm・円形、P4=45×35×40cm・円形である。遺構の遺存度が悪いものの、掘り方は全体的に小規模であるといえる。

4本の柱穴の内、P2を除く3本で、土層断面上に柱痕が検出された。1層が柱痕に相当すると思われる。柱痕は、比較的軟らかいシルト化した暗褐色上で、柱痕周囲の充填土(2・3層)は比較的堅緻な暗褐色土もしくは灰黄褐色上であった。このため、柱痕と充填土との識別は比較的容易であった。

## 第180団 第43号掘立柱建物跡



第43号掘立柱建物跡土層

- 1 暗黄褐色土 シルト質
- 2 暗褐色土 暗褐色土と灰白色粘質土の混合土
- 3 灰褐色土 シルト質
- 4 暗褐色土 シルト質



0 L=23.4m 2m

P2にみられる暗褐色(4層)は、柱の抜き取り痕内部への流入土であろうか。

上層断面の観察から、P1・P3・P4の柱痕は柱穴底面に届く範囲であると認められる。

P2については、4層が柱の抜き取り痕でなかったとしても、柱痕そのものとは思われない。そのため、P2は柱痕が柱穴底面まで及んでいなかったと推定される。

遺物は全く出土しなかった。



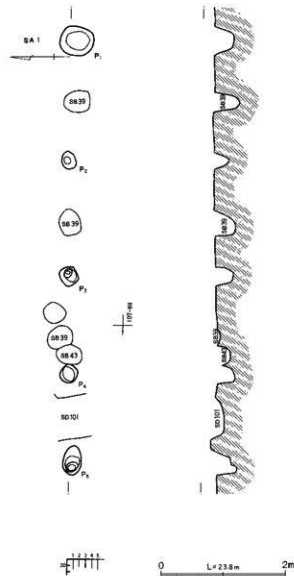
### (3) 柵列跡

第14地点で検出された柵列跡、もしくは柵列跡と思われる遺構は6基であった。柵列跡とした根拠はきわめて弱く、柱穴列が一方のみであること、しかも掘り方がごく小規模で、掘立柱建物跡とするには積極的になれない遺構を柵列跡として扱った。

#### 第1号柵列跡 (第181図)

106-87・88グリッドに位置する。位置的にSB3・4と重複するが、新旧関係については不明である。東西方向に4間分検出された。

規模は6.7m、柱間距離は不均一でP1-P2間1.9m・P2-P3間1.8m・P3-P4間1.6m P4-P



5間1.5mを測る。主軸方向はN-90°-E(またはW)を指す。各柱穴の深さは25~40cmと比較的浅い。重複関係にあるS J 3・4の主軸方向は、各々N-13°-W、N-88°-Wを指す。本柵列は、S J 4と主軸方向が近似であるといえよう。本遺構の柱穴はSB4の柱穴と互い違いの状況で分布しており、関連性が想定される。柱底は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

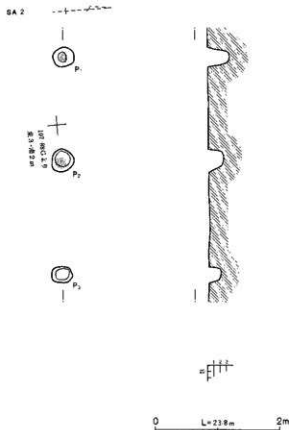
#### 第2号柵列跡 (第182図)

107-88グリッドに位置する。他の遺構との新旧関係はない。柵列跡・掘立柱建物跡、両方の可能性を想定して周辺の遺構確認を繰り返したが、この東西2間分以外の柱穴は検出されなかった。

規模は3.4m、柱間距離は各々1.6m・1.8mである。主軸方向はN-84°-Wを指す。柱穴の規模は概ね30×30cmの円形もしくは楕円形、深さは17~35cmと浅い。

柱底を2箇所検出できた。太さは10~15cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第182図 第2号柵列跡



## 第3号柵列跡 (第183図)

109-87グリッドに位置する。他の遺構との新旧関係はない。SA2と同様に柵列跡・掘立柱建物跡、両方の可能性を想定して周辺の遺構確認を繰り返したが、この東西2間分以外の柱穴は検出されなかった。掘立柱建物跡の、他の柱穴がすでに失われた状態との可能性も否定できない。

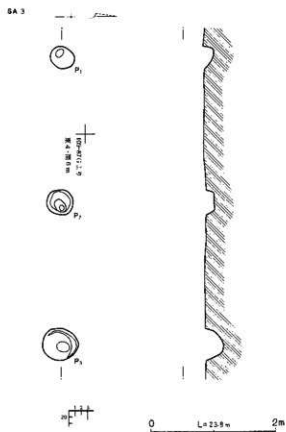
この2間分の規模は4.6m、柱間距離はP1-P2間2.4m・P2-P3間2.2mである。主軸方向はN-90°-E (またはW) を指す。柱穴の規模は概ね30×40cmと50×55cmを測る。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、深度は15-30cmと浅い。

因みに、南3mに位置するSB2・3の主軸方向は、各々N-96°-E、N-13°-Wである。

柱痕は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第183図 第3号柵列跡



## 第4号柵列跡 (第184図)

105-92グリッドに位置する。SK4・5と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

SA2・3と同様に柵列跡・掘立柱建物跡、両方の可能性を想定して周辺の遺構確認を繰り返したが、この南北2間分以外の柱穴は検出されなかった。掘立柱建物跡の、他の柱穴がすでに失われた状態との可能性も否定できない。

この2間分の規模は3.6m、柱間距離はP1-P2間1.7m・P2-P3間1.9mである。

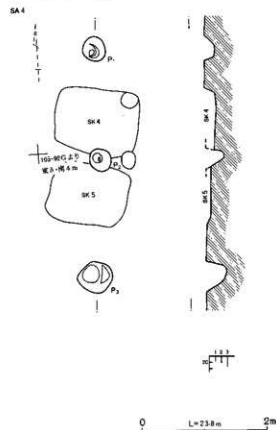
主軸方向はN-4°-Eを指す。柱穴の規模は概ね35×35cmと50×55cmを測る。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、深度は15-35cmと比較的浅い。

因みに、本遺構の東2mに位置するSB12の主軸方向はN-81°-Wであり、南2mに位置するSB11ではN-89°-Eを指す。

柱痕は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第184図 第4号柵列跡



### 第5号柵列跡 (第185図)

106-93グリッドに位置する。本遺構はSB13・14の南約1mに位置するが、新旧関係はない。

他の柵列跡と同様に柵列跡・掘立柱建物跡、両方の可能性を想定して周辺の遺構確認を繰り返したが、この東西2間分以外の柱穴は検出されなかった。掘立柱建物跡の、他の柱穴がすでに失われた状態との可能性も否定できない。またこの他に、近在するSB13・14と命名した遺構と関連して別な遺構であった可能性も考えられるが、この点については確定できなかった。

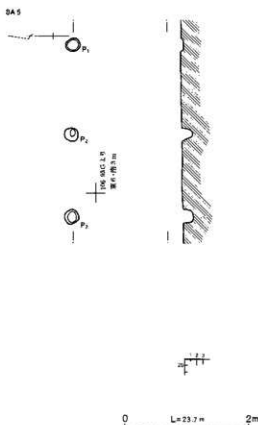
この2間分の規模は2.7m、柱間距離は1.3mと1.4mである。主軸方向はN-88°-Wを指す。柱穴の規模は概ね20×20cmを測る。柱穴の平面形状は円形を呈し、深度は10-20cmと浅い。

因みに、SB13・14の主軸方向はN-2°-Wと、N-0°である。

柱痕は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第185図 第5号柵列跡



### 第6号柵列跡 (第186図)

106-88グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。本遺構は当初SB4の一部であると考えていたが、その後SB4のプランが確定したためこの部分のみ柵列跡と推定した。

他の柵列跡と同様に柵列跡・掘立柱建物跡、両方の可能性を想定して周辺の遺構確認を繰り返したが、この東西2間分以外の柱穴は検出されなかった。

この2間分の規模は3.4m、柱間距離は1.7mである。主軸方向はN-87°-Wを指す。

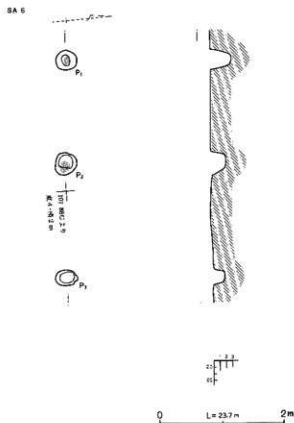
柱穴の規模は概ね25×35cmと30×35cmを測る。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、深度は20-30cmと比較的浅い。P1・P2において柱痕が検出された。柱痕の径は、10cmないしは15cmであった。

因みに、SB4の主軸方向はN-88°-Wである。

柱痕は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第186図 第6号柵列跡



**(4) 土 壤**

今回の発掘調査で検出された土壌は、第14地点：78基、第15地点：28基、第16地点：48基の計154基であった。各地点の土壌数の比率は、第14地点：51パーセント、第15地点：18パーセント、第16地点：31パーセントである。

全体的に各土壌からの出土遺物は少なく、図化し得る遺物が出土した土壌はさらに少数であった。なお、ここで土壌として扱った中には、ビットとした方が良いと思われるもの、あるいは1基の土壌として数えたが、複数の土壌が存在している可能性をもつ遺構も存在する。さらに、遺構ではなく窪み状の微地形である可能性をもつ例も少なからず存在する。しかし、これらについても敢えてそのままとした。

以下順を追って記述していくこととする。

**第1号土壌 (第187図)**

105-92グリッドから検出した。SD95との新旧関係は不明。規模は139×62×3cm。主軸方向はN-12°Eを指す。平面形状は楕円形を呈す。土師器環の小破片が出土したが、図化には及ばなかった。

**第2号土壌 (第187図)**

105-92グリッドから検出した。規模は72×55×11cm。主軸方向はN-10°Wを指す。平面形状は円形を呈す。土師器環の小破片が出土したが、図化には及ばなかった。

**第3号土壌 (第187図)**

105-92グリッドから検出した。SD108との新旧関係は不明。規模は119×27×38cm。主軸方向はN-25°Eを指す。平面形状は不整形を呈す。土師器の小破片が出土したが、図化には及ばなかった。

**第4号土壌 (第187・191図)**

105-92グリッドから検出した。規模は134×105×21cm。主軸方向はN-80°Wを指す。平面形状は長方形を呈す。土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、図化し得たのは1点であった。

**第5号土壌 (第187図)**

105-92グリッドから検出した。規模は122×92×12

cm。主軸方向はN-80°Wを指す。平面形状は長方形を呈す。土師器の小破片が出土したが、図化には及ばなかった。

**第6号土壌 (第187図)**

104-92-93グリッドから検出した。規模は76×56×5cm。主軸方向はN-63°Wを指す。平面形状は長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第7号土壌 (第187図)**

105-92-93グリッドから検出した。規模は131×90×12cm。平面形状は不整形を呈す。土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

**第8号土壌 (第187図)**

105-106-95グリッドから検出した。SD17との新旧関係は不明。規模は117×88×13cm。主軸方向はN-63°Wを指す。平面形状は長方形を呈す。土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

**第9号土壌 (第187図)**

105-93グリッドから検出した。SD75との新旧関係は不明。規模は98×92×9cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第10号土壌 (第187図)**

105-93グリッドから検出した。規模は105×105×15cm。平面形状は不整形円形を呈す。土師器環の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

**第11号土壌 (第187図)**

105-93グリッドから検出した。規模は119×119×15cm。平面形状は不整形方形を呈す。土師器環の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

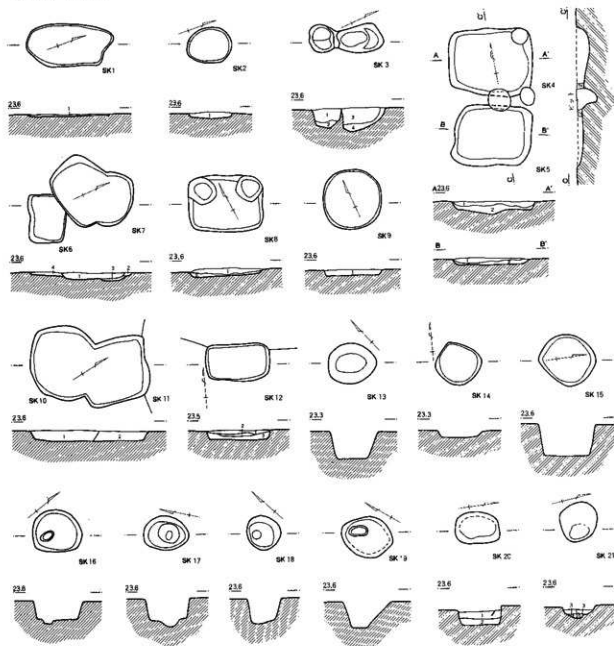
**第12号土壌 (第187)**

104-105-93グリッドから検出した。規模は103×55×15cm。主軸方向はN-86°Wを指す。平面形状は長方形を呈す。土師器環の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

**第13号土壌 (第187図)**

105-94グリッドから検出した。規模は77×63×43cm。主軸方向はN-50°Wを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

第187図 土坑(i)



第1・2号土坑土層

- 1 暗褐色土 Fe沈着、ローム粒子少
- 2 暗褐色土

第3号土坑土層

- 1 暗褐色土 灰褐色粘土ブロック、ロームブロック少、ビット状
- 2 暗褐色土 ロームブロック、ビット状
- 3 暗褐色土 灰褐色粘土、ローム粒子少
- 4 暗褐色土 粘性強、ロームブロック(φ2cm)少

第4号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック(φ1~2cm)少

第5号土坑土層

- 1 暗褐色土 硬質、ローム粒子・粘土粒子
- 2 暗褐色土 1層よりやや暗い

第6・7号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少
- 2 暗褐色土 1層よりやや暗い

第8号土坑土層

- 1 暗褐色土 粘質土
- 2 暗褐色土 灰褐色粘土

第8号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少、Fe沈着
- 2 暗褐色土 1層よりローム粒子・ロームブロック多

第9号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少、Fe沈着

第10・11号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子・ロームブロック少
- 2 暗褐色土 灰褐色粘土

第12号土坑土層

- 1 褐色土 Fe沈着、ローム粒子少
- 2 黒褐色土 ローム粒子若干
- 3 灰黒色土 Fe沈着、粘性

第20号土坑土層

- 1 暗灰色土 シルト質、均一土層
- 2 黒褐色土 シルト質、黒色土と堆山ブロック多、柱穴埋土

第21号土坑土層

- 1 黒褐色土 シルト質、黒色土と堆山ブロック多、柱穴埋土
- 2 暗褐色土 粘質シルト
- 3 灰褐色土 粘質シルト、黒色土と堆山の灰白色土混入

0 2m

**第14号土壌** (第187図)

105-94グリッドから検出した。規模は73×63×11 cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第15号土壌** (第187図)

105-94グリッドから検出した。規模は90×75×52 cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第16号土壌** (第187図)

105-94グリッドから検出した。規模は80×64×36 cm。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第17号土壌** (第187・191図)

105-94グリッドから検出した。規模は72×53×46 cm。主軸方向はN-25°-Wを指す。平面形状は楕円形を呈す。灰釉陶器陶器片1点が出土した。

**第18号土壌** (第187図)

105-94グリッドから検出した。規模は55×50×40 cm。主軸方向はN-13°-Eを指す。平面形状は円形を呈す。

**第19号土壌** (第187図)

104-95グリッドから検出した。規模は87×65×41 cm。主軸方向はN-13°-Wを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第20号土壌** (第187図)

105-95グリッドから検出した。規模は72×48×29 cm。主軸方向はN-6°-Eを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第21号土壌** (第187図)

105-95グリッドから検出した。規模は65×51×19 cm。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第22号土壌** (第188図)

105-95グリッドから検出した。規模は63×54×31 cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第23号土壌** (第188図)

105-95グリッドから検出した。規模は78×66×35 cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第24号土壌** (第188図)

105-95グリッドから検出した。規模は146×98×13 cm。主軸方向はN-57°-Wを指す。平面形状は隅丸長

方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第25号土壌** (第188・191図)

105-106-95グリッドから検出した。S J 28を切っている。規模は150×136×30cm。平面形状は不整形を呈す。図化し得たのは須恵器3点であるが、この他に周辺へ削りの須恵器環の底部小破片、土師器甕・坏の小破片も出土した。

**第26号土壌** (第188図)

104-98グリッドから検出した。規模は82×74×35 cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第27号土壌** (第188・191図)

104-98グリッドから検出した。規模は57×51×32 cm。平面形状は円形を呈す。緑釉陶器皿の底部と思われる小破片1点が出土したが、図化し得た遺物は土師器甕1点のみであった。

**第28号土壌** (第188図)

104-98グリッドから検出した。規模は96×85×12cm。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第29号土壌** (第188図)

104-100グリッドから検出した。規模は133×75×10 cm。主軸方向はN-10°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第30号土壌** (第188図)

106-87グリッドから検出した。規模は65×65×10 cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第31号土壌** (第188図)

107-89グリッドから検出した。SD4との新旧関係は不明。規模は96×93×91cm。平面形状は円形を呈す。土師器甕と須恵器甕の小破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

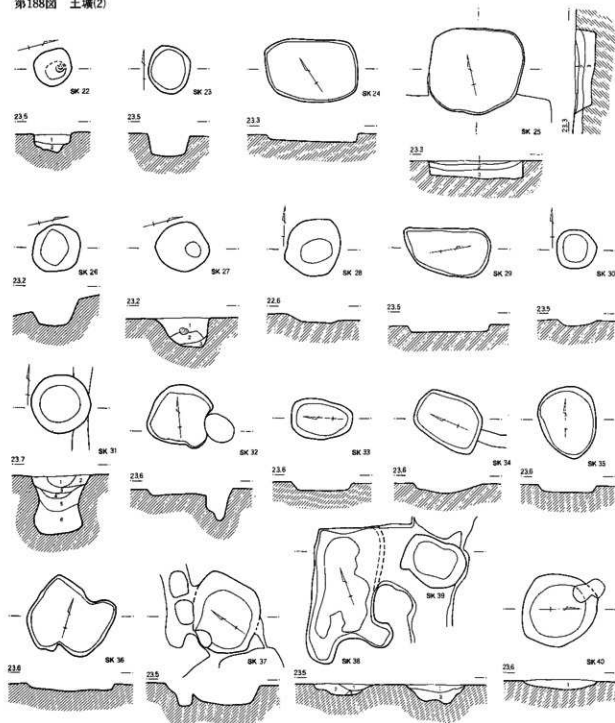
**第32号土壌** (第188図)

106-91グリッドから検出した。SB49を切っていると思われる。SD99-100との新旧関係は不明。規模は94×93×20cm。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第33号土壌** (第188図)

106-91グリッドから検出した。規模は97×57×13

第188図 土壌(2)



第 22 号土壌土層

- 1 暗灰色土 シルト質、均一な上層
- 2 黒褐色土 シルト質、黒色土と堆山ブロッケン状埋土

第 25 号土壌土層

- 1 黒色土 焼土粒子若干
- 2 灰色土 焼土粒子少
- 3 黒色土 堆山の灰褐色土のブロック少

第 27 号土壌土層

- 1 明灰色土 炭化物粒子・焼土粒子少
- 2 灰白色土 炭化物粒子少、堆山ブロック多

3 暗灰色土 砂質土に炭化物を顆状に多

第 31 号土壌土層

- 1 黒褐色土 炭・炭化物・焼土粒子多
- 2 黒褐色土 炭・炭化物・暗灰色粘土ブロック少
- 3 明褐色土 灰色粘土ブロックと褐色ロームブロックの混土層
- 4 暗灰色土 灰色粘土若干
- 5 暗灰色土 灰色粘土半体、焼土粒子・炭化物少
- 6 明灰色粘土 黒色有機質土若干

第 38-39 号土壌土層

- 1 明灰色土 ロームブロック・焼土粒子の混土層土か
- 2 暗褐色土 暗褐色土とロームブロックの混土層
- 3 明褐色土 砂質土、暗褐色土ブロック(φ2~3cm)少

第 40 号土壌土層

- 1 明褐色土 灰褐色粘土ブロック・ブロック少

0 2m

cm。主軸方向はN-5°-Wを指す。平面形状は長楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第34号土壌 (第188図)

106-91グリッドから検出した。SD105・160と重複するが、新旧関係は不明。規模は108×80×16cm。主軸方向はN-6°-Eを指す。平面形状は長方形を呈す。土師器の小破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

#### 第35号土壌 (第188図)

106-91グリッドから検出した。SD30との新旧関係は不明。規模は115×89×12cm。主軸方向はNを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第36号土壌 (第188図)

107-91グリッドから検出した。SD109との新旧関係は不明。規模は139×115×14cm。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第37号土壌 (第188図)

107-91グリッドから検出した。SK46をはじめとして、幾つかの遺構と重複しているが、それぞれ新旧関係は不明。規模は115×(115)×35cm。主軸方向についても不明である。平面形状は不整形を呈す。土師器甕や須恵器環の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

#### 第38号土壌 (第188図)

107-91グリッドから検出した。SD109との新旧関係は不明。規模は210×(110)×16cm。主軸方向はN-30°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第39号土壌 (第188図)

107-91グリッドから検出した。SD112との新旧関係は不明。規模は100×71×30cm。主軸方向はN-45°-Wを指す。平面形状は不整形楕円形を呈す。土師器甕や須恵器環の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

#### 第40号土壌 (第188図)

106-92・93グリッドから検出した。SD94との新旧関係は不明。規模は123×111×16cm。平面形状は楕円

形を呈す。土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

#### 第41号土壌 (第189図)

107-91・92グリッドから検出した。SD109との新旧関係は不明。規模は168×65×16cm。主軸方向はN-6°-Eを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第42号土壌 (第189図)

106-92グリッドから検出した。SD118との新旧関係は不明。規模は111×63×8cm。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第43号土壌 (第189図)

106-92グリッドから検出した。規模は129×99×31cm。主軸方向はN-39°-Wを指す。平面形状は略長方形を呈す。土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

#### 第44号土壌 (第189図)

106-92グリッドから検出した。S J 25を切るが、SD99・112との新旧関係は不明である。規模は79×-×23cm。平面形状は不明。土師器甕の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

#### 第45号土壌 (第189図)

107-93グリッドから検出した。規模は94×59×15cm。主軸方向はN-70°-Wを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第46号土壌 (第189図)

106-93グリッドから検出した。規模は173×86×13cm。主軸方向はN-35°-Wを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第47号土壌 (第189図)

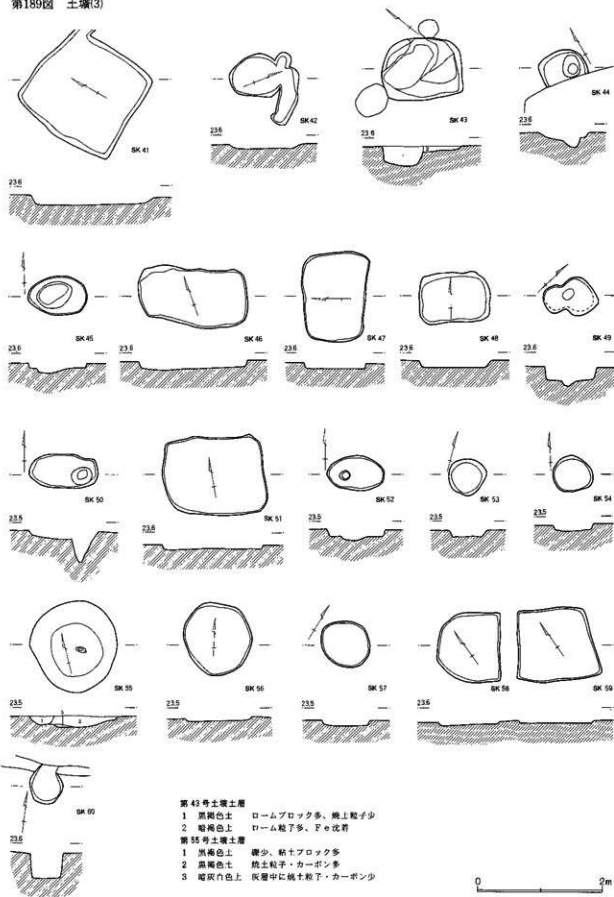
106-93グリッドから検出した。土壌の規模は150×98×8cm。主軸方向はN-88°-Eを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

#### 第48号土壌 (第189図)

106-93グリッドから検出した。規模は114×78×11cm。主軸方向はN-90°-Eを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。



第189図 土壇(3)



第43号土壇土層

- |        |                          |
|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロック多、焼土粒少            |
| 2 暗褐色土 | ローム粒下多、F <sub>o</sub> 沈着 |

第55号土壇土層

- |         |                |
|---------|----------------|
| 1 黒褐色土  | 炭少、粘土ブロック多     |
| 2 黒褐色土  | 焼土粒多、カーボン多     |
| 3 暗灰白色土 | 灰層中に焼土粒下・カーボン少 |

0 2m

**第49号土墳 (第189図)**

106-94グリッドから検出した。柱穴の可能性が考えられる。規模は87×37×31cm。主軸方向はN-41°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第50号土墳 (第189図)**

106-94グリッドから検出した。規模は110×53×48cm。主軸方向はN-90°-Eを指す。平面形状は長楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第51号土墳 (第189図)**

106-94グリッドから検出した。規模は152×121×8cm。主軸方向はN-80°-Wを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第52号土墳 (第189図)**

106-95グリッドから検出した。規模は92×55×17cm。主軸方向はN-90°-Eを指す。平面形状は長楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第53号土墳 (第189図)**

107-95グリッドから検出した。規模は60×55×10cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第54号土墳 (第189図)**

107-95グリッドから検出した。規模は64×54×9cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第55号土墳 (第189図)**

106-107-96グリッドから検出した。SB1を切る。規模は147×132×18cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第56号土墳 (第189図)**

107-97グリッドから検出した。規模は117×105×5cm。平面形状は円形を呈す。土師器製の小破片が出土したが、図化には至らなかった。

**第57号土墳 (第189図)**

107-98グリッドから検出した。規模は83×71×9cm。主軸方向はN-84°-Wを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第58号土墳 (第189図)**

107-99グリッドから検出した。規模は112×98×6

cm。主軸方向はN-35°-Eを指す。平面形状は略台形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第59号土墳 (第189図)**

107-99グリッドから検出した。規模は119×116×6cm。主軸方向はN-34°-Eを指す。平面形状は略台形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第60号土墳 (第189図)**

107-102グリッドから検出した。SD14との新旧関係は不明。規模は56×(63)×40cm。平面形状は不明である。土師器製の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

**第61号土墳 (第190・191図)**

108-88グリッドから検出した。規模は75×61×75cmであった。主軸方向はNを指す。平面形状は楕円形を呈す。出土した遺物はごく少数で、図化し得たのは1点であった。

**第62号土墳 (第190図)**

108-95グリッドから検出した。規模は162×43×11cm。主軸方向はN-25°-Eを指す。平面形状は長楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第63号土墳 (第190図)**

108-95グリッドから検出した。規模は78×70×6cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第64号土墳 (第190図)**

108-101グリッドから検出した。規模は100×90×20cm。平面形状は楕円形を呈す。土師器製と須恵器製の小破片が1点ずつ出土したが、図化には至らなかった。

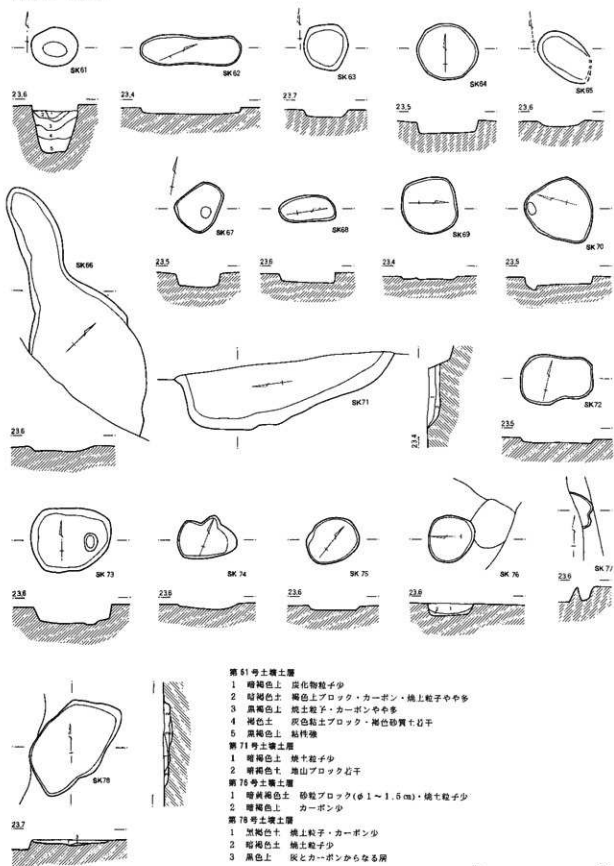
**第65号土墳 (第190図)**

109-98グリッドから検出した。SD7との新旧関係は不明。規模は(96)×62×10cm。主軸方向はN-29°-Wを指すと思われる。平面形状は長楕円形を呈すと思われる。

**第66号土墳 (第190図)**

109-98グリッドから検出した。土墳の規模は426×-×9cm。主軸方向はN-75°-Wを指すと思われる。平面形状は不整形を呈すと思われる。遺物は出土しなかった。

第190図 土塊(4)



0 2m

## 第67号土壌 (第190図)

111-87グリッドから検出した。規模は83×65×20 cm。主軸方向はN-57°-Wを指す。平面形状は不整形円形を呈す。遺物は出土しなかった。

## 第68号土壌 (第190図)

110-87グリッドから検出した。92×43×17 cm。主軸方向はN-10°-Eを指す。平面形状は楕長円形を呈す。遺物は出土しなかった。

## 第69号土壌 (第190図)

110-94グリッドから検出した。規模は88×87×8 cm。平面形状はL形を呈す。土師器の小破片が少数出土したが、凶化には至らなかった。

## 第70号土壌 (第190図)

111-93グリッドから検出した。規模は110×98×20 cm。主軸方向はN-10°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

## 第71号土壌 (第190図)

110-96グリッドから検出した。SD 7と重複しているが、本土壌が切られていると思われる。規模は340×(93)×19 cm。遺存部分における主軸方向はN-2°-Eを指す。平面形状は、現状では略楕円形を呈す。土師器製の小破片が1点出土したが、凶化には至らなかった。

## 第72号土壌 (第190図)

112-92グリッドから検出した。規模は115×70×7 cm。主軸方向はN-77°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

第65表 第4号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵長頸壺	—	2.4	—	EG	普通	暗灰色	—	ロクロ成形	自然釉付着

第66表 第17号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	灰輪皿	—	2.1	6.7	DE	普通	灰白色	底95	ロクロ成形	RC 高台貼付

第67表 第25号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器杯	(12.6)	3.2	—	EH	普通	灰白色	1125	ロクロ成形	
2	須恵器杯	—	1.1	(6.4)	EH	普通	灰白色	底30	ロクロ成形	RC
3	須恵器壺	—	3.3	—	EGH	良	暗灰色		ロクロ水挽き成形	内面:自然釉付着

## 第73号土壌 (第190図)

114-94グリッドから検出した。規模は131×108×30 cm。主軸方向はN-62°-Eを指す。平面形状は長楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

## 第74号土壌 (第190図)

114-94グリッドから検出した。規模は94×55×9 cm。主軸方向はN-69°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

## 第75号土壌 (第190図)

115-94グリッドから検出した。規模は85×70×8 cm。主軸方向はNを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

## 第76号土壌 (第190・191図)

11-95・96グリッドから検出した。規模は80×71×18 cmであった。平面形状はL形を呈す。土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、凶化し得たのは4点であった。

## 第77号土壌 (第190・191図)

115-96グリッドから検出した。遺構の遺存範囲がきわめて限られているため、深さ18cm以外に規模は不明。土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、凶化し得たのは1点であった。

## 第78号土壌 (第190図)

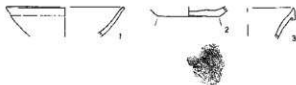
115-96グリッドから検出した。SD10と重複しているが、新旧関係は不明。規模は164×101×10 cm。主軸方向はN-45°-Eを指す。平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

第191図 第4・17・25・27・61・76・77号土壌出土遺物

SK 4

SK 17

SK 25



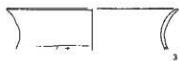
SK 27



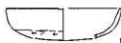
SK 76



SK 61



SK 77



0 10cm

第68表 第27号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器鉢	(18.9)	5.3	—	ACEFH	普通	橙褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):寛削り(内):寛ナテ	

第69表 第61号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器小皿	8.6	3.2	5.1	ACD	普通	明褐色	底100	器面風化著 ロクロ成形か 底:寛削りか	

第70表 第76号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器鉢	(12.4)	3.2	—	ACEF	普通	明茶褐色	口15	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):ナテ 底(外):寛削りか	
2	土師器鉢	(13.9)	3.8	—	ABEFH	普通	茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):寛削りか(内):ナテか	
3	土師器鉢	(18.2)	4.4	—	AEFH	普通	茶褐色	口25	口:内外面横ナテ 胴(外):寛削り(内):寛ナテか	
4	土師器鉢	(23.0)	5.0	—	ACEFH	普通	茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):寛削り(内):寛ナテ	

第71表 第77号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器鉢	(12.3)	3.1	—	ADEFH	普通	茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):寛削りか(内):寛ナテか	

第14地点土壌一覽表 (第187~190図)

番号	目番	検出グリッド	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	備 考
1	34	105-92	楕円形	1.39	0.62	0.03	N-12°-E	SD95
2	35	105-92	円形	0.72	0.55	0.11	N-10°-W	
3	36	105-92	不整形	1.19	0.27	0.38	N-25°-E	SD108
4	30	105-92	長方形	1.34	1.05	0.21	N-80°-W	
5	31	105-92	長方形	1.22	0.92	0.12	N-80°-W	
6	27	105-92-93	長方形	0.76	0.90	0.12	N-63°-W	
7	26	105-92-93	不整形	1.31	0.56	0.05	—	
8	25	105-93	長方形	1.17	0.88	0.13	N-63°-W	SD17
9	24	105-93	円形	0.98	0.92	0.09	—	SD75
10	29	105-93	不整正方形	1.19	—	0.15	—	
11	28	105-93	不整円形	1.05	—	0.15	N-59°-W	
12	23	104-105-93	長方形	1.03	0.55	0.15	N-86°-W	
13	㊸	105-94	円形	0.77	0.63	0.43	N-30°-W	
14	㊹	105-94	円形	0.73	0.63	0.11	—	
15	㊺	105-94	円形	0.90	0.75	0.52	—	
16	㊻	105-94	楕円形	0.80	0.64	0.36	—	
17	㊼	105-94	楕円形	0.72	0.53	0.46	N-25°-W	
18	㊽	105-94	円形	0.55	0.50	0.40	—	
19	㊾	105-95	楕円形	0.87	0.65	0.41	N-13°-W	
20	㊿	105-95	楕円形	0.72	0.48	0.29	N-6°-E	
21	㊽	105-95	円形	0.65	0.51	0.19	—	
22	㊾	105-95	円形	0.63	0.54	0.31	—	
23	㊿	105-95	円形	0.78	0.66	0.35	—	
24	㊽	105-95	隅丸長方形	1.46	0.98	0.13	N-57°-W	
25	7	105-106-95	不整円形	1.50	1.36	0.30	—	S J 32を切る
26	㊽	104-98	円形	0.82	0.74	0.35	—	
27	㊾	104-98	円形	0.57	0.51	0.32	—	
28	㊿	104-98	不整円形	0.96	0.85	0.12	—	
29	㊽	104-100	不整	1.33	0.75	0.10	N-10°-E	
30	01	106-87	円形	0.65	0.65	0.10	—	
31	21	107-89	円形	0.96	0.93	0.91	—	SD 4
32	39	106-91	楕円形	0.94	0.93	0.20	—	SB 49・S D 99・100
33	38	106-91	長楕円形	0.97	0.57	0.13	N-5°-W	
34	37	106-91	長方形	1.08	0.80	0.16	N-6°-E	
35	42	106-91	楕円形	1.15	0.89	0.12	N	SD 30
36	41	107-91	不整形	1.39	1.15	0.14	—	SD109
37	45	107-91	不整形	1.15	(1.15)	0.35	—	SK 46
38	47	107-91	不整形	2.10	(1.10)	0.16	—	SD109
39	46	107-91	不整楕円形	1.00	0.71	0.30	N-45°-W	SD112
40	32	106-92-93	楕円形	1.23	1.11	0.16	—	SD 9 4
41	40	107-91-92	略方形	1.68	0.65	0.16	N-6°-E	SD109
42	43	106-92	不整形	1.11	0.63	0.08	—	SD118
43	33	106-92	略長方形	1.29	0.99	0.31	N-39°-W	

番号	旧番	検出グリッド	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
44	44	106-92	—	0.79	—	0.23	—	S J 25・S D 99・112
45	㊸	107-93	楕円形	0.94	0.59	0.15	N-70°-W	
46	㊹	106-93	略長方形	1.73	0.86	0.13	N-35°-W	
47	㊺	106-93	略長方形	1.50	0.98	0.08	N-88°-E	
48	㊻	106-93	略長方形	1.14	0.78	0.11	N-90°-E	
49	㊼	106-94	不整形	0.87	0.37	0.31	N-41°-E	
50	㊽	106-94	略楕円形	1.10	0.33	0.48	N-90°-E	
51	㊾	106-95	略長方形	1.52	1.21	0.08	N-80°-W	
52	㊿	106-95	略楕円形	0.92	0.55	0.17	N-90°-E	
53	㊽	107-95	円形	0.60	0.55	0.10	—	
54	㊾	107-95	円形	0.64	0.54	0.09	—	
55	5	106-107-96	円形	1.47	1.32	0.18	—	S B 1 を切る
56	18	107-97	円形	1.17	1.05	0.05	—	
57	㊿	107-98	楕円形	0.83	0.71	0.09	N-84°-W	
58	㊽・1	107-99	略台形	1.12	0.98	0.06	N-35°-E	
59	㊾・2	107-99	略台形	1.19	1.16	0.06	N-34°-E	
60	23・3	107-102	—	0.56	(0.63)	0.04	—	S D 14
61	22	108-88	楕円形	0.75	0.61	0.75	N	
62	㊽	108-95	長楕円形	1.62	0.43	0.11	N-25°-E	
63	㊾	108-95	円形	0.78	0.70	0.06	—	
64	2・22	108-101	楕円形	1.00	0.90	0.20	—	
65	10	109-98	長楕円形か	0.96	0.62	0.10	N-29°-W	
66	9	109-98	不整形	4.26	—	0.09	N-75°-W	
67	㊽・2	111-87	不整形円形	0.83	0.65	0.20	N-57°-W	
68	㊾	110-87	長楕円形	0.92	0.43	0.17	N-10°-E	
69	11	110-94-95	円形	0.88	0.87	0.08	—	S J 11・S D 35
70	㊿	111-93	不整形	1.10	0.98	0.20	N-10°-E	
71	4	110-96	—	3.40	—	0.19	N-2°-E	
72	㊽・2	112-92	不整形	1.15	0.70	0.07	N-77°-E	
73	㊾	114-94	長楕円形	1.31	1.08	0.30	N-62°-E	
74	㊿	114-94	不整形	0.94	0.55	0.09	N-69°-E	
75	㊽	115-94	楕円形	0.85	0.70	0.08	N	
76	1	115-95-96	円形	0.80	0.71	0.18	—	S D 10
77	2	115-96	—	—	—	0.18	—	
78	3	115-96	不整形	1.64	1.01	0.10	N-45°-E	S D 10・S B 1

## (5) 井戸跡

14地点において検出された井戸跡、または井戸跡の可能性のあるものは、併せて16基であった。以下、順を追って述べていくこととする。

なお、文中における( )付の数値は、平面規模を表す場合は推定値を、深さを表す場合は掘り下げ得た深さを意味する。

## 第1号井戸跡(第192図)

104-93グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。崩落の恐れと、湧水のため完掘には至らなかった。

掘り下げは確認面から約210cmまで行ったが、壁面の崩落の可能性を考え、土層断面は140cmまでで図化を断念した。

規模は1.54×1.34×(1.43)mを測る。平面形状は円形、断面形状は筒状を呈する。下位面に比べ、上位面の方が径が大きいの、壁面の崩落に伴うものと思われる。

自然型変と推定されるが、土層断面の1～3層は、埋め戻しの可能性が考えられた。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

図化し得た遺物はなかった。

## 第2号井戸跡(第192図)

105-105グリッドに位置する。SD39と重複関係にあるが、調査期間の都合上SD39は小型のバックホーで掘削してしまったため、残念ながら本井戸跡との新旧関係を捉えることはできなかった。このほかに、SD55と道路上遺構とも重複しているが、どちらも本井戸跡が切れていると思われる。

深度から、井戸跡と判断するには若干の疑問が残るが、平面規模や断面形状から、井戸跡として扱うこととした。

規模は(1.20)×113×0.8mを測る。遺存部分からみて、平面形状は楕円形を呈すると思われる。断面形状はロータ状を呈する。断面形状については、度重なる壁面の崩落によって、大きく変わっているものと思わ

れる。井戸跡最下面の標高値は22.52mである。

自然埋没と思われる。8層は粘質土であるが、その他の土層はいずれもシルト質である。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

図化し得る遺物は出土しなかった。

## 第3号井戸跡(第192図)

106-93グリッドに位置する。SJ29を切っている。遺構の遺存度は比較的良好であり、井戸側や水溜めの壁面はほぼ直立した状態で検出された。

湧水はほとんどなく、底面まで完掘することができたが、逆に井戸としての機能を持ち得たのかについては疑問が残った。

しかし、底面には水溜めと思われる窪みが存在しており、この部分(6層)の上質は、滞水のために粘土化しているのが観察できた。これらの点から、水を集め溜めるための施設=井戸であると判断した。

水溜めは位置的に、井戸の中央より、やや北側寄りに設けられている。

規模は2.21×1.94×1.65mを測る。また、水溜め部分のみの規模は0.92×0.8×0.48mを測る。平面形状は円形、断面形状は円筒状に水溜めの付属する2段掘りである。井戸跡最下面の標高値は21.74mである。4層は地山の崩落上と思われる。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

本遺構は水溜めが明確で、井戸跡とする根拠が明確であった。

緑泥片岩の破片が出土したほかのみで、土器や石器などの遺物は出土しなかった。

## 第4号井戸跡(第192図)

106-103グリッドに位置する。SD19とSD35の合流部分に位置しており、この両者と重複関係にあるが、調査期間の都合上SD19・SD35は小型のバックホーで掘削してしまったため、残念ながら本井戸跡との新旧関係を捉えることはできなかった。

規模は0.84×0.66×0.74mを測る。平面形状は楕円



形を呈する。断面形状は袋状を呈しているが、6・7層以下は滯水した水面の、上下移動の繰り返しによって壁面が崩落した結果であると思われる。本来の断面形状は、円筒状であったと推定される。

本遺構は深度的には74cmとごく浅いが、遺構の検出面がSD19の底面であったことによる。

井戸跡最下面の標高値自体は21.74mを測る。これは今回の調査で検出された井戸跡の内で、底面まで完掘し得た井戸跡中SE3と並んで、最も低い標高値であった。

3・4層中に浅間B軽石が検出されており、特に4層では多量に含まれていた。浅間B軽石の存在から、本井戸跡はSD19と同時存在の可能性と、SD19の覆土を掘り込んでいる可能性の両方が考えられることになるが、その内のどちらであるのかは判断できなかった。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

10~25cm程の可礫石が2個出土したのみで、土器や石器などの遺物は検出されなかった。

#### 第5号井戸跡 (第192・194図)

107-96・97グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。湧水のため、完掘には至らなかった。また、井戸跡壁面と土層断面に崩落の恐れが生じたため、土層断面の図化を断念せざるを得なかった。その結果、エレベーション図のみの図示となってしまった。

規模は2.31×2.20×(1.05)mを測る。平面形状は円形を呈し、断面形状についてはルート状を呈すると思われる。

確認面から約130cm、言い換えれば断面形状が、錐鉢状から円筒状に変化する位置まで掘り下げてまもなく、曲物の痕跡が検出された。まず上面からの観察によって、水性の沈着による鉄分が円形に巡っているのが確認された。この箇所を内側から掘り下げると、この鉄分の部分を境として、覆土が唼かれ落ちるという状況であった。

そしてこの沈着した鉄分の下に、ごく僅かで図化や

遺物取り上げに至らないほどの、曲物の痕跡が認められた。湧水によって井戸跡底面が冠水してしまうため、短時間の観察によるのみではあるが、本井戸跡は掘り方をもつと考えられる。

まずルート状の掘り方を掘り、曲物の二回り程の大きさの範囲を残して、粘土ブロックを含んだ土を充填する。その後、曲物を底面に据え、曲物と充填土の間に裏込めを行ったのではないかと、というのが調査時の印象であった。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

図化し得た遺物は、今回の調査で検出された井戸跡中ももっとも多く、計7点であった。

#### 第6号井戸跡 (第192図)

106-106グリッドに位置する。SD66を切っていると思われる。井戸跡底面まで完掘することができた。

規模は1.13×1.10×0.85mを測る。平面形状は円形、断面形状は錐鉢状を呈する。底面付近での径は45×50cm程で、平面形状は円形を呈する。井戸跡最下面の標高値は22.35mである。規模からみて、井戸跡とするには若干の疑問があるが、底面の標高値が、完掘し得た井戸跡と近似値であるため、井戸跡として扱うこととした。

形状や埋没状況は、SE7と類似しているといえよう。本井戸跡とSE7の距離は、約3mである。

2層以下は自然埋没、1層以上は人為的埋め戻しと思われる。1層中には、浅間B軽石の混入が認められた。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

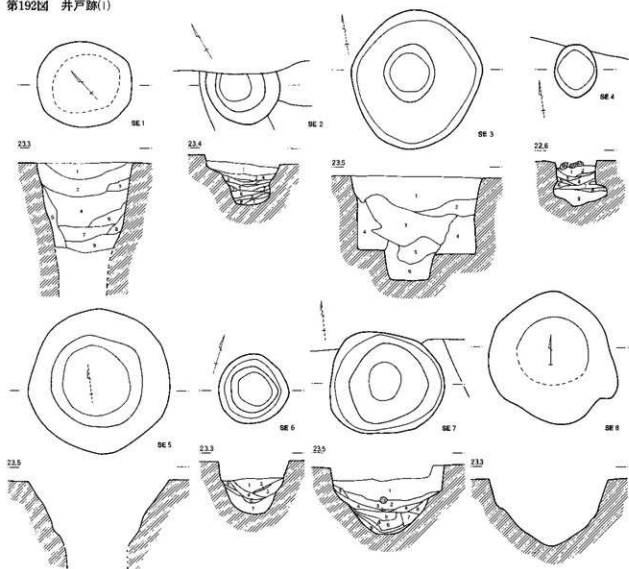
遺物は出土しなかった。

#### 第7号井戸跡 (第192図)

106-106グリッドに位置する。SD44と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。本井戸跡は、SE6の北東約3mに位置する。井戸跡底面まで完掘することができた。

規模は1.82×1.60×1.07mを測る。平面形状は楕円

第192図 井戸跡(1)



## 第1号井戸跡土層

- 1 暗褐色土 礫少、砂質
- 2 暗褐色土 Fe沈着多
- 3 暗褐色土 粘土ブロック多
- 4 灰黒色土 風味強い、粘質土
- 5 暗灰色土 礫層薄十か
- 6 暗灰色土 黒色土ブロック少
- 7 灰黒色土 4層に近似、粘る
- 8 暗灰色土 5・6層より粘る
- 9 暗灰色土 7層に近似、粘性強

## 第2号井戸跡土層

- 1 灰黄褐色土 シルト質、Fe多
- 2 暗灰色土 シルト質
- 3 暗灰色土 シルト質、2層より灰白色シルトブロック少
- 4 灰白色土 シルト質
- 5 暗灰色土 シルト質、灰白色シルトブロック
- 6 暗灰色土 シルト質、4層より灰白色シルトブロック少
- 7 灰白色土 シルト質、灰白色・暗褐色シルトブロック少
- 8 暗灰色土 粘土質、灰白色シルトブロック多

## 第3号井戸跡土層

- 1 暗褐色土 暗黄褐色土ブロック多
- 2 黒褐色土 暗黄褐色土ブロック少
- 3 黒褐色土 粘土粗少、Fe多
- 4 暗黄褐色土 Fe多
- 5 黒色土 粘質土、Fe多
- 6 暗灰色土 粘質土

## 第4号井戸跡土層

- 1 暗灰色土 粘質土、B軽石・炭化物・灰色シルトブロック少
- 2 灰白色土 シルト質、暗灰色シルトブロック少
- 3 暗灰色土 粘質土、B軽石少
- 4 黒褐色土 粘質土、B軽石多、黄灰色粘土ブロック少
- 5 暗灰色土 粘質土、炭化物少
- 6 灰黄褐色土 粘質土、Fe多
- 7 暗灰色土 粘質土、炭化物少
- 8 暗灰色土 粘質土、青色粘土ブロック・砂炭化物粗子少
- 9 黒褐色土 粘質土、黄灰色粘土ブロック少

## 第6号井戸跡土層

- 1 暗灰色土 粘質土、B軽石少
- 2 黒褐色土 炭化物多
- 3 暗灰色土 灰色シルトブロック少
- 4 暗灰色土 シルト質
- 5 灰白色土 砂質
- 6 暗灰色土 粘質土、シルトブロック少
- 7 灰白色土 粘質中に暗灰色土少

## 第7号井戸跡土層

- 1 暗灰色土 シルト質、B軽石・暗褐色土・シルトブロック少
- 2 暗灰色土 粘質土、灰白色シルトブロック少、礫多
- 3 黄褐色土 シルト質
- 4 暗黄褐色土 シルト質、混入物なし
- 5 暗灰色土 シルト質、暗褐色土とシルトの互層
- 6 灰白色土 粘質・灰色粘土が互層状
- 7 暗灰色土 粘質土、粘土ブロック
- 8 暗灰色土 粘質土、6層の砂が混入
- 9 黄褐色土 砂質、混入物なし

0 2m

形を呈しているが、これは壁面の崩落による変形であり、本来は円形であったと思われる。断面形状は、部分的に段をもつか擋鉢状を呈する。底面付近での径は50×60cm程で、平面形状は楕円形を呈する。

2層以下は自然埋没、1層以上は人為的埋戻しと思われる。また1層中には、浅間B軽石の混入が認められた。

規模は異なるものの本井戸跡とSE6は、形状や埋没状況において類似点がみられる。また、井戸跡の深度についてはSE6が0.85m、本井戸跡が1.07mと若干の開きがあるものの、底面の標高値からみればSE6が22.35m、本井戸跡が22.26mとほとんど同レベルといえる。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

2層中に礫が混入していたのみで、土器や石器などの遺物は出土しなかった。

#### 第8号井戸跡 (第192図)

111-90グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。井戸跡底面まで完掘することができた。

規模は1.41×1.30×0.90mを測る。平面形状は不整形円形を呈しているが、これは井戸跡壁面の崩落による変形であり、本来は円形を呈していたと考えられる。断面形状は擋鉢状を呈する。底面付近での径は100×110cm程で、平面形状は円形を呈すると思われる。

下場線の南側半分が推定線になっているのは、南側を上層断面の観察用に残し、北側半分のみを掘ったことによる。上層断面の実測以前に、上層断面の多くの部分が崩落したため、断面実測をできなかった。

井戸跡底面の標高値は22.1mを測り、完掘し得たほかの井戸跡の底面レベルにきわめて近い。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

#### 第9号井戸跡 (第193図)

107-107グリッドに位置する。SD46を切っていると思われる。

規模は2.22×1.63×(1.60)mを測る。平面形状は楕円形、断面形状はロート状を呈する。平面・断面ともに、壁面の崩落によって形状・規模が変化しているものと思われる。円筒状になる部分での規模は70×85mを測り、平面形状は楕円形を呈する。

湧水と壁面の崩落の恐れがあるため、確認面から約160cmまで調査した段階で、掘り下げを中止した。

4層以下は自然埋没で、4層中には浅間B軽石が混入していた。1～3層は、人為的な埋戻しと思われる。なお、3層中にも浅間B軽石の混入が確認された。

6層以下には、浅間B軽石は混入していないと思われる。

本井戸跡は、井戸跡が埋まり切る以前の段階において、自然埋没層の最上面に浅間B軽石が混入している。そして、埋まり切っていない部分を、浅間B軽石を含んだ土で人為的に埋戻していると推定される。

こういった埋没状況が観察できる井戸跡はSE6・7も同様で、SE6—SE7間は約3m、本井戸跡—SE6・7間は約10mと位置的にもきわめて近いといえる。また形状についても、SE6・7は擋鉢状、本井戸跡はロート状を呈している。

ロート状の井戸は、井戸穴を掘削する際にまず上部を擋鉢状に掘り上げ、さらに中央を円筒状に掘り下げたものと推定される。この点から、断面形状からみても3基の井戸跡は類似しているといえよう。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

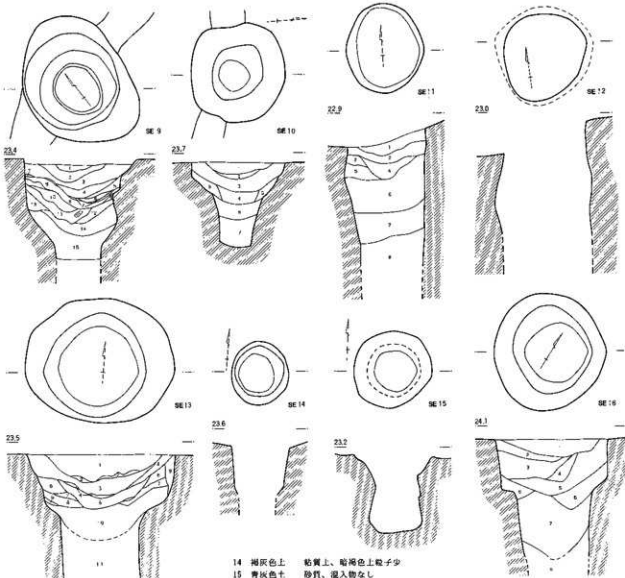
礫が混入していたのみで、土器や石器などの遺物は出土しなかった

#### 第10号井戸跡 (第193・194図)

108-109-88グリッドに位置する。SD83を切っている。底面まで完掘することができた。遺構の遺存状況は、比較的良好といえよう。

規模は1.65×1.45×1.35mを測る。平面形状については、平面図上ではSD83との重複箇所やや湾曲しているが、本井戸跡はSD83を切っており、遺構確認の際に、円形を呈しているのが明瞭に検出された。断

第193図 井戸跡(2)



14 褐灰色土 粘質上、暗褐色土粒子少  
15 青灰色土 砂質、混入物なし

第10号井戸跡土層

- 1 褐色土 焼土粒子・灰少
- 2 黒色土 灰層、炭化物・焼土若干
- 3 褐色土 焼土粒子少
- 4 灰色粘質土 粘上ブロック若干、焼土粒少
- 5 暗褐色土 ローム粒子若干
- 6 灰色有機質土 ロームブロック少
- 7 黒色有機質土 ロームブロック多

第11号井戸跡土層

- 1 淡灰色土 黒色土をブロック状に少
- 2 暗灰色土 黒色土が粒状堆積
- 3 緑灰色土 粘質土、黒色土粒子少
- 4 暗褐色土 緑灰色土ブロック少
- 5 暗緑灰色土 3層に共通、やや暗い
- 6 暗緑灰色土 粘質土、7層に近似
- 7 緑灰色土 粘質土、8層に近似
- 8 黒色土 有機質土上

第13号井戸跡土層

- 1 黒褐色土 粘上ブロック若干
- 2 暗褐色土 砂粒子多
- 3 黒褐色土 粘上粒子多、砂粒子・カーボン若干

第4号井戸跡土層

- 1 灰黄色土 粘上ブロック多、砂粒子・カーボン若干
- 2 暗褐色土 粘上ブロック若干
- 3 暗褐色土 粘上ブロック・焼土粒子・カーボン少
- 4 黒褐色土 粘質土、カーボン多
- 5 暗褐色土 粘質土、カーボン多
- 6 暗褐色土 粘質土、カーボン多
- 7 暗褐色土 粘質土、カーボン多
- 8 暗褐色土 粘質土、カーボン多
- 9 暗褐色土 粘質土
- 10 暗褐色土 粘質土、カーボン多
- 11 青灰色土 粘質土、砂粒子少

第16号井戸跡土層

- 1 暗褐色土 粘上ブロック若干
- 2 暗褐色土 粘上ブロック若干
- 3 暗褐色土 粘上ブロック・焼土粒子・カーボン少
- 4 黒褐色土 灰層、カーボン多
- 5 暗褐色土 粘上ブロック少
- 6 暗褐色土 砂質粘上ブロック少
- 7 暗褐色土 粘上層中に砂粒上ブロック (φ5cm)多
- 8 青灰色土 粘上ブロック層

0 2m

第9号井戸跡土層

- 1 灰黄褐色土 粘質土、B粒石少量
- 2 黄褐色土 シルト質、灰白色シルトに暗褐色土ブロック混入
- 3 灰黄褐色土 粘質土、B粒石少量、灰白色シルトブロック混入
- 4 暗灰色土 粘質土、B粒石少量
- 5 灰黄褐色土 粘質土、灰白色シルトブロック多、Fe多
- 6 褐灰色土 粘質土、4層に近似、B粒石含まない
- 7 灰白色土 砂質、混入物なし
- 8 灰黄褐色土 粘質土、Fe多
- 9 灰白色土 シルト質、Fe多
- 10 褐灰色土 粘質土、8層に近似、Fe少
- 11 灰白色土 シルト質、9層に近似
- 12 褐灰色土 粘質土、灰白色シルトブロック少
- 13 灰白色土 砂質、西塚からの埋山崩落土

面形状はロート状を呈する。

断面形状が、播鉢状から円筒状に変わる部分の規模は80×95mで楕円形を呈し、底面での規模は40×50cmで円形を呈する。井戸跡最下面の標高値は22.24mである。

因みに、完掘し得た井戸跡の底面の標高値は、

第14地点：SE 2 = 22.52m、SE 3 = 21.74m、SE 4 = 21.74m、SE 6 = 22.35m、SE 7 = 22.26m、SE 8 = 22.1m、SE 10 = 22.24m、SE 15 = 21.85m  
第15地点：SE 2 = 22.18m

第16地点：SE 3 = 22.37m、SE 9 = 21.85m  
であった。標高値の最も低い第14地点SE 3・4と、最も高い第14地点SE 2との標高差は約80cmある。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

凶化し得た遺物は計2点であった。

#### 第11号井戸跡（第193図）

108・109-90グリッドに位置する。SE 12の北約3mに位置する。SD 2を切る。井戸跡壁面に崩落の恐れがあるため、確認面から約220cmの段階で掘り下げを断念した。

規模は1.43×1.23×(2.20)mを測る。平面形状は楕円形、断面形状は円筒形を呈する。平面形状が楕円形を呈し、井戸跡の両側壁面がややオーバーハングしているのは、井戸跡壁面の崩落による結果であると思われる。

本井戸跡の、掘り下げ得た最下面の標高値は20.5mである。8層は有機質を含む土層であった。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

#### 第12号井戸跡（第193図）

108-90・91グリッドに位置する。SE 11の南約3mに位置する。SD 2と重複するが、新旧関係については不明である。確認面が、図の左右で異なっているのは、SD 2の斜面部に位置していることによる。井戸跡壁面と土層断面に崩落の恐れがあったため、完掘に

は至っていない。

規模は1.44×1.28×(1.83)mを測る。平面形状は楕円形、断面形状はオーバーハングする円筒状を呈しているが、これは井戸跡壁面の崩落による結果であり、本来は平面形は円形、断面は通常の円筒状を呈していたと思われる。

本井戸跡の、掘り下げ得た最下面の標高値は21.1mである。

本井戸跡の上位面では、上層断面上に土壌状の掘り込みが検出されたが、その性格については不明である。井戸跡の上面近くでは、青灰色の粘土ブロックが多量に混入しており、中位では炭化物粒子や炭化物ブロックが多量に含まれていた。掘り下げ得た最下層は、黒色味の強い砂質層であった。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

#### 第13号井戸跡（第193図）

111・112-93グリッドに位置する。S J 40を切っている。井戸跡壁面の崩落の可能性と湧水のため、確認面から約130cmの位置で掘り下げを断念した。また土層断面も一部崩落し始めたため、実測を断念せざるを得なかった。

規模は2.38×2.00×(2.30)mを測る。平面形状は円形を呈し、断面形状はロート状を呈すると思われる。

井戸跡下半の、円筒状を呈する部分は比較的原形をとどめていると思われるが、上半は崩落によって変形していると推定される。

井戸跡上半部の、段を有する部分（10層上面）での規模は1.60×1.60×0.9mを測り、平面形状は円形を呈する。また掘り下げを行った最下面では、径1.20×1.25mの円形を呈する。

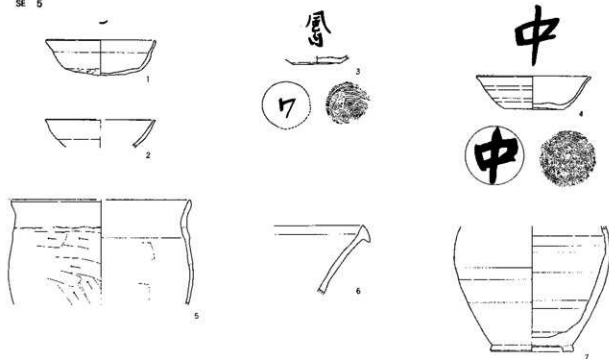
本井戸跡の、掘り下げ得た最下面の標高値は21.4mである。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

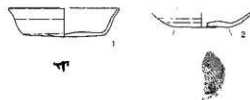
緑泥片岩の破片が出土したが、土器や石器などの遺

第194図 第5・10・16号井戸跡出土遺物

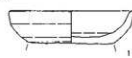
SE 5



SE 10



SE 16



0 10cm

第73表 第5号井戸跡出土遺物観察表(第194図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	11.7	3.2	—	AE	普通	明褐色	U75	器面風化 U:内外面横ナテ 体:内外面ともナテ 墨痕有
2	須恵器杯	(11.8)	3.0	—	EH	普通	灰褐色	U15	ロクロ成形
3	須恵器杯	—	0.9	5.1	EH	普通	暗灰色	底80	ロクロ成形 C 内:黒色 外:黒記号有
4	須恵器杯	12.0	3.6	6.3	AEH	普通	灰褐色	底100	ロクロ成形 RC 底部内外面に墨書「中」
5	土師器鉢	19.0	6.1	—	ACDEH	不良	明茶褐色	U30	器面風化著 U:内外面横ナテ 胴(外):黒割り (内):黒ナテ
6	須恵器甕	—	7.3	—	BEH	普通	灰褐色	—	ロクロ水挽き成形
7	陶器甕	—	13.3	台8.8	AE	良	暗茶褐色	台100	ロクロ成形 底:回転糸切り難しか 貼付高台

第74表 第10号井戸跡出土遺物観察表(第194図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	11.7	3.1	—	ACE	普通	明茶褐色	U45	U:内外面横ナテ 体:内外面ナテ 底:黒割り 墨着有
2	須恵器杯	—	1.7	(5.7)	ADEH	不良	灰白色	底40	ロクロ成形 RC

第75表 第16号井戸跡出土遺物観察表(第194図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器皿	13.1	3.5	9.2	ACE	不良	明茶褐色	底100	ロクロ成形 Cか 器形やや歪む 器面風化著しい

物は出土しなかった。

#### 第14号井戸跡 (第193図)

111-95グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

井戸跡壁面の崩落と湧水のため、底面まで完掘することはできなかった。また土層断面についても、崩落の危険性が生じたため半截ではなく丸掘りに変更し、実測は断念した。

規模は $1.01 \times 0.91 \times (0.7)$  mを測る。平面形状は円形を呈する。断面形状については、実測図上では円筒状に近いが、調査時の印象ではロート状を呈すると思われた。本井戸跡の、掘り下げ得た最下面の標高値は22.6 mである。

ロート状の断面の、段を有する部分の規模は $0.75 \times 0.80 \times 0.70$  mを測り、平面形状は円形を呈する。この部分から、円筒状に移行し始める箇所、掘り下げを断念せざるを得なかった。

本井戸跡は、今回の調査で検出された井戸跡の中で、最も規模の小さなものの一つであった。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

#### 第15号井戸跡 (第193図)

113-88グリッドに位置する。SE 8の南西約27 m、SE 10の南約40 m、第15地点SE 3の東約40 mに位置する。

第14地点において検出された井戸跡の中で、最も南に位置する井戸跡であった。他の遺構との重複関係はない。

規模は $1.30 \times 1.17 \times 1.23$  mを測る。平面形状は円形、断面形状はロート状を呈する。井戸跡上半部の、楕円状から円筒状に移行する段をもった部分の規模は $0.60 \times 0.65 \times 0.30$  mを測り、平面形状は円形を呈する。また底面の規模は $0.65 \times 0.70$  mを測り、平面形状

は他の部位と同様に円形を呈する。

断面の円筒状を呈する部分が、一部オーバーハンクしている。これは主に、湧水によって潜水した水面の、上下移動の繰り返しによって、壁面が崩落した結果であると思われる。

上半部の楕円状の部分も他の部分と同様に、壁面の崩落によって変形していると推定される。

本井戸跡の、底面における標高値は21.85 mである。遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

凶化し得る遺物は出土しなかった。

#### 第16号井戸跡 (第193・194図)

112-94グリッドに位置する。SE 13の南東約3 m、SE 14の南西約14 m、またSE 8の東南東約30 mに位置する。他の遺構との新旧関係はみられなかった。

湧水と、井戸跡壁面の崩落の危険性のため、底面まで完掘することはできなかった。

規模は $1.85 \times 1.75 \times (1.90)$  mを測る。平面形状は円形を呈するが、断面形状についてはロート状を呈すると思われる。

上段部分の規模については、 $1.35 \times 1.15 \times 0.85$  mを測り、平面形状は楕円形、断面形状は楕円状を呈する。

また、円筒部分の掘り下げ得た最下部の規模は $0.9 \times 0.85$  mを測り、平面形状は円形を呈する。円筒部分の掘り下げ得た深度は1.0 mであった。

本井戸跡の、底面における標高値は22.1 mである。

平面図をみると、井戸の芯(水溜め)がやや東にずれている。これは、井戸跡上半部の崩落が西側でより大きかったため、結果的に東にずれているかのような様相を呈しているものと思われた。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

凶化し得た遺物は1点のみであった。

第76表 14地点井戸一覧表 (第192~193図)

番号	田番	検出グリッド	平面形状	断面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
1	15	104-93	円形	円筒状	1.54	1.35	(1.43)	N-90°-E	
2	7・12	105-105	円形	ロート状	(1.20)	1.13	0.80	N-33°-W	S D39-55
3	6	106-93	円形		2.21	1.94	1.65	N-14°-E	S J 29を切る
4	8	106-103	円形	円筒状	0.84	0.66	0.74	N-6°-E	S D19-35
5	5	107-96-97	円形	ロート状か	2.31	2.20	(1.05)	N-2°-E	
6	10	106-106	円形	楕円状か	1.13	1.10	0.85	N-7°-W	
7	9	106-106	円形	楕円状か	1.82	1.60	1.07	N-46°-W	S D44
8	新1	111-90	円形か	楕円状か	1.41	1.30	0.90	N-51°-W	
9	11	107-107	円形	ロート状か	2.22	1.63	(1.60)	N	S D43
10	13	108-109-88	円形	ロート状か	1.65	1.45	1.35	N-37°-W	
11	14	108-109-90	円形	円筒状	1.43	1.23	(2.20)	N	S D 2
12	16	108-90-91	円形	円筒状か	1.44	1.28	(1.83)	N-42°-E	
13	3	111-93	円形か	円筒状	2.38	2.00	(2.30)	N-83°-E	S J 9を切る
14	1	111-95	円形	円筒状か	1.01	0.91	(0.90)	N	
15	7	113-88	円形	ロート状か	1.30	1.17	1.23	N-42°-E	
16	4	112-94	円形	ロート状か	1.85	1.75	(1.90)	N-32°-W	



## (6) 道路状遺構

今回の発掘調査では、第14地点で1箇所、第15地点で1箇所の、計2箇所(第195図)で道路状遺構が検出された。道路状遺構は、第1～3次調査では検出されておらず、今回の調査で初めて検出された遺構である。

本地点の道路状遺構はほぼ南北方向であり、第15地点の道路状遺構は河川(現:星川)から北上したのち屈曲して、西に向かう。両者の距離は約200mである。

### 第1号道路状遺構(第195～198図)

103・105・106グリッドから106・105・106グリッドにかけて検出された。この道路状遺構はほぼ南北に走っている。道路の痕跡が確認されたのは、北側は第14地点の調査区境界線までであり、第16地点では検出されなかった。

南側については、北西から南東に走るSD39との重複点までで、これ以南では道路の痕跡は検出されておらず、またSD39に沿っていく様相もみられない。

道路状遺構とした根拠は、波板状の凹凸をもつ掘り方や皿状ビットの存在であり、これらの凹凸面の分布範囲やその周辺を道路状遺構と考えた。

また、これら波板状の掘り方や皿状ビットの周辺には、遺構確認面よりも低く、小さくはあるが段差や高低差のみられる箇所があり、路床部の可能性が考えられる。

この道路状遺構の遺存度はきわめて悪く、波板状凹凸面や皿状ビットには不明瞭なものが多い。波板状凹凸面や皿状ビットと推定できるものは、大小合わせて37箇所であった。

またこれらの他にも波板状凹凸面や皿状ビットの可能性が考えられるものが幾つか存在する。

以上の点から、道路状遺構と判断した範囲内での長さは11.3mで、ほぼ直線状を呈する。

この道路状遺構の軸方向はN-11°Eを指す。重複している溝跡にはいずれも切られていると思われる、この道路状遺構に伴う備置はないと思われる。

道路状遺構の大部分が、他の溝跡に切られているため断定はできないが、路肩部分が比較的良く残っていると推定される調査区境界線付近の上層断面(第197

図A-A'・B-B')を観察した結果、側溝は伴わないと思われた。また、この地点での道路幅は4.2mであった。

本道路状遺構の特徴の1つとして、南北に連続して並んでいる皿状ビットの内、6箇所から計8点の馬歯が検出された(第196図)。そして、これらのビットの内2箇所では、馬歯が2本ずつ検出された。

これらの馬歯は、出土の状況からみて皿状ビットへの単なる流れ込みではなく、埋納の可能性が高いと思われる。これらは、道路を構築する際に行われた、何らかの地鎮祭連の祭祀行為の痕跡であろうか。

次いで、土層断面をみていくこととする。まずはじめに、基本土層の上層詳記にあるII層は正しくはIV層であり、ここに訂正しておきたい。

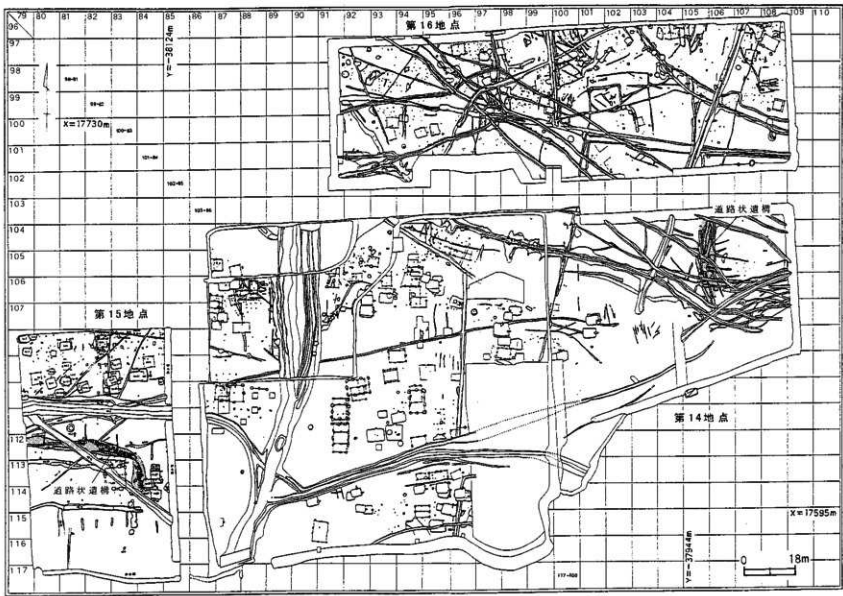
II層は、SD23を人為的に埋め戻したと思われる褐灰色土層であり、10・14層は波板状凹凸面の掘り方への充填土である。

基本的に波板状凹凸面や皿状ビットへの充填土は、10・15・16層である。馬歯を出したビットは他のビットよりも深く、馬歯の入っていた15層中には、礫や土器片が混入していた。そして馬歯を含むこの14層の上面には、混入物のないシルト質の灰白色土がのっていた。

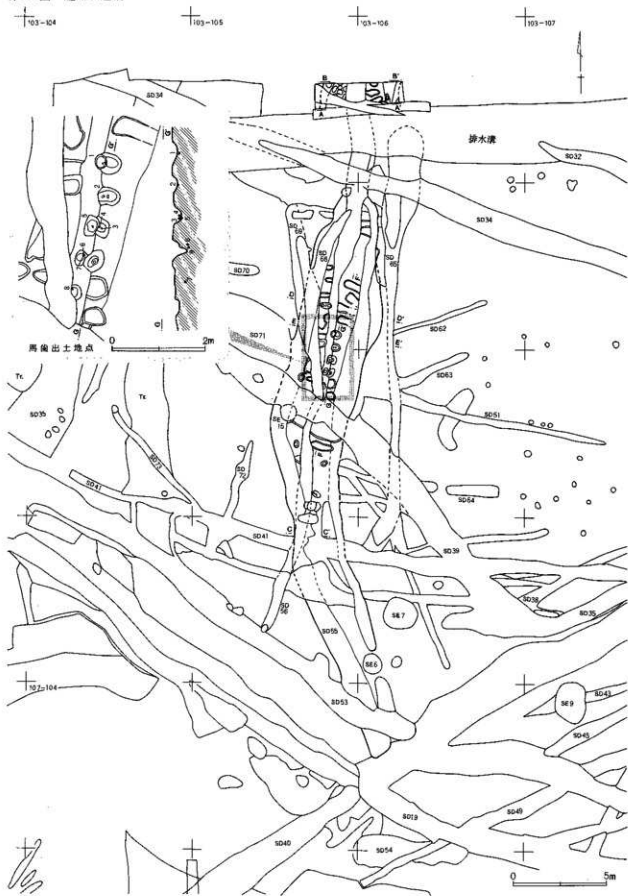
波板状凹凸面や皿状ビットへの充填土は、概ね褐灰色土または灰白色で、礫や砂、土器片などはほとんどみられず、僅かに馬歯を含む土層で礫や土器片が出土したのみであった。

波板状凹凸面や皿状ビットの周辺にみられる浅い窪みは、遺構確認よりも低く遺構確認の段階では溝状遺構として判断された。そしてこの溝状遺構を掘り下げていく過程において波板状凹凸面や皿状ビットが検出され、その時点で道路状遺構と命名された。

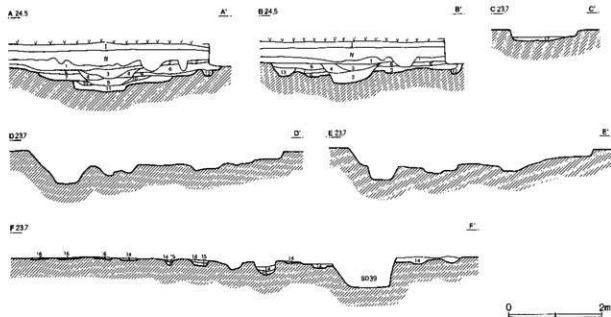
第1号道路状遺構でも、この溝状の窪みが波板状凹凸面や皿状ビットと同じ方向に、南北に検出されている。そして、この窪みはこの方向だけではなく106-104グリッド杭のすぐ西あたりから、SD34に平行するかのよう、西北西に延びているのが検出されている。この道路状遺構は分岐していたのであろうか。周辺から紡錘車出土したが、本遺構との関連は不明である。



第196图 道路状遺構



第197図 道路状遺構



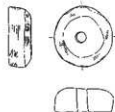
## 基本土層

- I 暗灰褐色シルト 白色バミヌ層  
II 黒褐色シルト F A 位上

## 道路状遺構土層

- |                                 |                                  |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 におい黄褐色土 F e・M n 多             | 10 褐色土 灰白色土ブロック(φ0.5cm)少、遊散充填土   |
| 2 灰黄褐色土 F e・M n 多、1層より薄い        | 11 褐色土 灰白色土ブロック(φ1~3cm)多、人為的な埋土か |
| 3 灰黄褐色土 F e・M n 多、2層よりやや明るい     | 12 褐色土 混入物なし、旧地表面                |
| 4 褐色土 6層の最上層上、混入物なし             | 13 褐色土 F e 多                     |
| 5 褐色土 粘性强、混入物なし                 | 14 灰白色土 シルト質、混入物なし               |
| 6 褐色土 F e・M n 少                 | 15 褐色土 1層より粘性强、硬い、深いピットの下層、馬糞    |
| 7 褐色土 灰白色土小ブロック                 | 16 褐色土 1層と暗褐色土ブロックとの強合層          |
| 8 褐色土 6層に互斜、灰白色土ブロック(φ1cm)少、遊路状 | 17 褐色土 シルト質、炭化植物下・土層片を含む(S D 55) |
| 9 灰白色土 遊路充填上 混入物のない純層           |                                  |

第198図 道路状遺構付近出土遺物



0 10cm  
1:3

紡錘車である(凝灰岩製)。材質は砥石で用いられているものと一致すると思われる。上面側にマンガンが付着していると思われる。

平面形状はやや歪んだ円形を呈し、断面は下面側が直立し、上面側が湾曲する。穿孔は垂直方向ではなく僅かに傾いてしまっている。

明橙褐色。表面は調整痕が僅かに残っているが、各面とも滑らかである。側面と下面に、僅かに表面刺蝋がみられる。

各面とも線刻などの痕跡はみられない。

上径3.6cm・下径5.1cm・孔径0.9cm・厚さ21cm、現存重量93.9gを測る。現存率95パーセント。

## (7) 性格不明遺構

今回の調査で検出された遺構のうち、性格不明遺構(SX)としたのは、併せて11基である。その内訳は第14地点：4基、第16地点：7基であった。

これらの他にも、性格不明遺構とすべき遺構は数多くあるが、その都度ピットや土塚、井戸跡、溝跡などと命名して扱ってきた。

本項に掲載する遺構についても、それらの遺構に含むべきであろうというものもあるが、発掘調査時点での名称を原則的に踏襲して、SX=性格不明遺構として扱った。

### 第1号性格不明遺構(第199図)

115-94グリッドに位置する。SJ53を切る。SD8も切っていると思われるが、SX2との新旧関係については不明である。

SX1は、SJ53のプラン確認中に確認された。発掘調査行程の都合上、SJ53と重複関係にある範囲内でのみの調査となったため、全体の形状や規模は不明である。検出し得た範囲内からみると、SJ53の北西コーナー際を扇頂部として、南東方向へ扇状に展開していると思われる。SX1の覆土は地山を起源としており、プランの確認は非常に困難であった。

覆土は概ね2層に層分けできる。2層は厚さ5~20cm程で、底面にのり、その上位が1層となる。1層は暗褐色土で、焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。2層は黒褐色土で、炭化物粒子と灰が少量含まれる。

SJ53と重複している範囲しかプランが判明していないため、これ以外の部分に関しては周囲の状況からの推定となる。南東部については、SJ53の南東コーナーが遺存しているため、この先にまで延びることはないといえよう。但し、北東方向と南西方向については、どの程度広がっているのかは不明である。

調査区南端部に掘削した排水溝の壁面を観察してみたが、すぐ南を流れている新屋川的作用によるものが、土層は堆積状況が非常に乱れていた。

そのため、この地積層の中にSX1の覆土が含まれているのか否かは判断できなかった。従って、SX1

の南限については特定できず不明である。北限については、SB40のピット8が遺存しており、このピット8が明瞭に地山を掘り込んでいることから、SX1はこれ以前で納まっていると判断される。因みに、SJ53からSB40までの距離は約3mである。

全体的に、形状はきわめて不明瞭である。調査し得た範囲内では北東-南東方向：現状で5.9m、北西-南東方向は確定した数値で6.0mで、深さは0.47mであった。

性格不明遺構として扱ったが、平面形状からみても意図的なものが感じられにくく、果たして人為的なものか否かという疑問が生じよう。地形的にみると、遺跡は主として自然堤防上に立地しており、平坦面と傾斜の緩い斜面部分からなり、全体的に起伏は緩やかである。

SX1は、断面図上では起伏が緩やかな印象を受ける。しかし、斜面自体はある程度の凹凸をもっており、砂地やシルト質の土壌を主体とする自然堤防という立地条件では、自然作用で形成されにくいのではないかと、この調査時の印象であった。

また今回の調査範囲内からみても、平面規模では例があるものの、ここまでの深度をもつ例はなく、内部の起伏の状況も異なる。根拠は薄いが以上の事柄から、SX1は微地形学的な窪みといった性格の自然地形ではなく、人為的に掘られたものであると判断した。

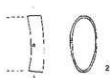
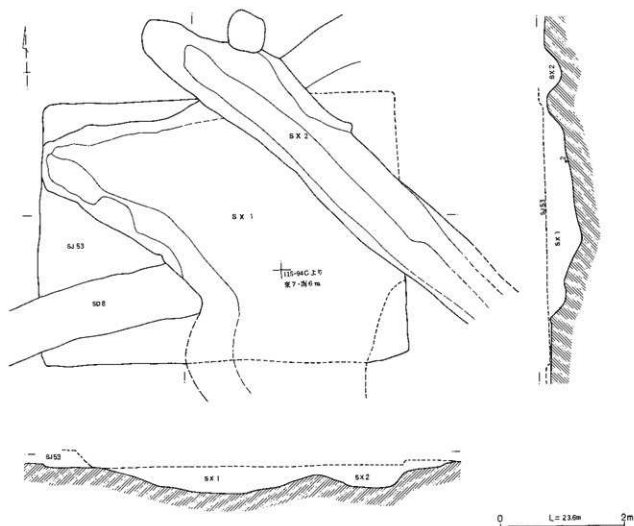
1つの可能性として、粘土などの土取りをしたものであろうか。

出土遺物は少なく、図化し得た遺物は2点であった。

1はSX1からの出土。土錘である。下端を一部欠損する。現存長2.6cm・幅1.1cm・孔径0.3cm、現存重量2.9gを測る。灰褐色。胎土はA+C+Hである。焼成は普通である。

2もSX1からの出土。確認面から32cm下位の斜面部にのるかたちで検出された。糟灰と思われる。図の左方向(波線方向)に糟が装着される方向となる。銅製。全面を緑錆に覆われているが、遺存状況は比較的良好であり、原形を良くとどめている。

第199図 第1・2号性格不明遺構



長さ1.1cm・径4.5×2.1cmの長楕円形を呈する。重量12.03g。側面に径0.3cmの小孔が2箇所、互い違いになるように穿たれている。側面に用いられている板材を内側に曲げ、底板をはめ込んでいると思われる。内外面ともに、装飾の痕跡はみられない。

#### 第2号性格不明遺構 (第199図)

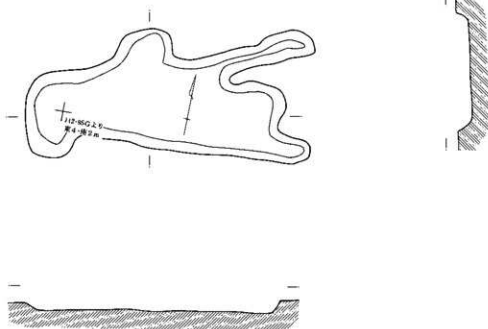
115-94グリッドに位置する。S J 53とSB40(P 8)を切っているが、SD 8とSX 2との新田関係については不明である。

SX 1と同様に、S J 53との重複部分とその近辺のみの調査のため、全体の形状と規模については不明である。

S J 53の北側壁面の北から始まり、南東方向へ延びる。性格不明遺構(SX)として扱うよりも、溝跡(SD)

第200図 第3・4号性格不明遺構

SK3



として扱うべきであったかも知れない。

規模は、調査し得た範囲で長さ6.1m・幅0.7~1.25m。深さは深い部分で0.38m、テラス部分で0.12mを測る。方向はN-49°-Wである。

覆上は分層できず、基本的に1層のみと思われる。暗褐色土で、焼土粒子を少量含む。しまり強で、粘性は弱である。遺物は出土しなかった。

第3号性格不明遺構 (第200図)

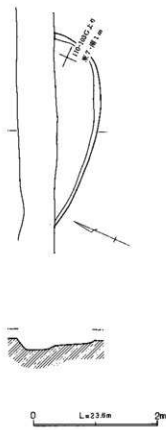
112-95グリッドに位置する。重複する遺構はない。規模は長さ4.7m・最大幅1.45m・深さ0.2mを測る。平面形状は不整形である。

断面形状は底面がほぼ平坦であり、立ち上がりはやや急な箇所があるものの、全体的には緩やかであるといえよう。人為的なものではなく、微地形的な窪みである可能性も否定できない。遺物は出土しなかった。

第4号性格不明遺構 (第200図)

110-103グリッドに位置する。SD4と重複するが新川関係は不明である。北側のプランはSD4の中に収まっているとも思われるが、深さが浅いことから、プランがSD4の北側で飛んでしまっている可能性も考えられる。SXよりもSKとすべきであったかも知れない。遺物は出土しなかった。

SK4



## (8) ビット

ここでビットとして扱ったのは、土壌(SK)として扱わず、さらに掘立柱建物跡や櫓列跡の柱穴となったビットを除いたものである。

土壌とビットとの区分も明確なものではなく、概ね平面規模が50×50cm以下の小穴をビットとして扱った。規模のみでビットとしているため、遺構の性格は様々であろうと思われる。

ビットとした中には柱痕の明瞭なものも存在しており、掘立柱建物跡や櫓列跡を想定して、周辺のビットとの位置関係や並びについて検討してみたが、結果的にそのどちらとも結論できなかった例も少なからずあった。

関連する柱穴などが既に失われているため、柱痕を残す柱穴が、本来存在したビットから途切れた状態で遺存している場合も十分に考えられる。

これらについては、発掘調査中のみでなく整理作業

中においても、掘立柱建物跡や櫓列跡などの可能性の基に検討したが、これらの遺構とするには不十分であった。こうした小穴についてもビットとして扱い、本項に掲載することとした。

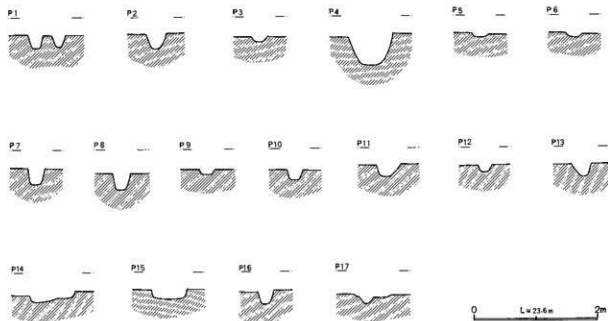
第14地点において検出されたビットは358基である。今回の調査で検出されたビットは、第15地点では139基、第16地点では704基、総計1201基による。

各地点ごとのビット数の比率は、第14地点：30パーセント、第15地点：11パーセント、第16地点：59パーセントである。

ビットの多くは、一部を除いて調査中に遺構番号を付さなかった。そこで、整理作業の段階で新番号を付すこととした。

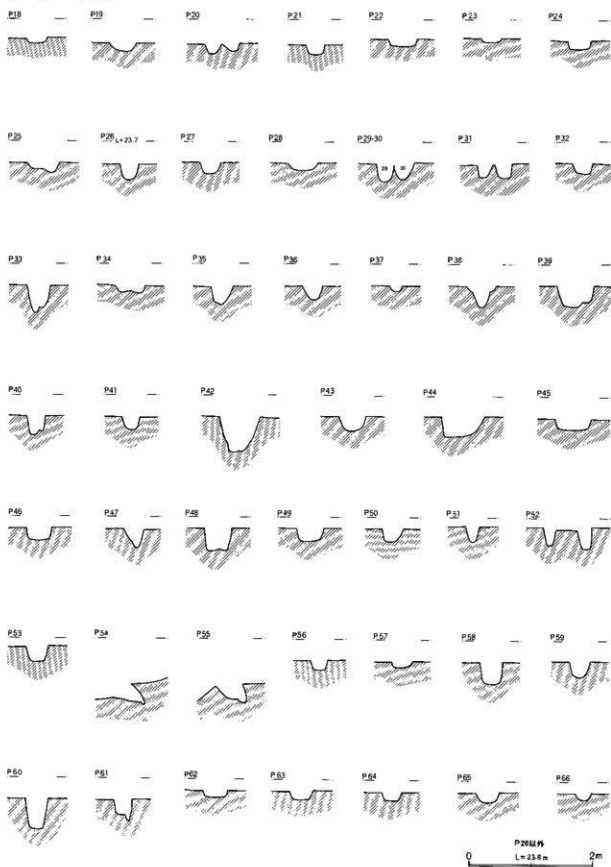
ビットの番号付けは他の遺構と同様に、原則的に北西端から東に送り、また西へ戻る工程を繰り返しながら、順次南に下っていく方法を採用した。しかし、都合により一部例外も存在する。

第201図 ビット(I)

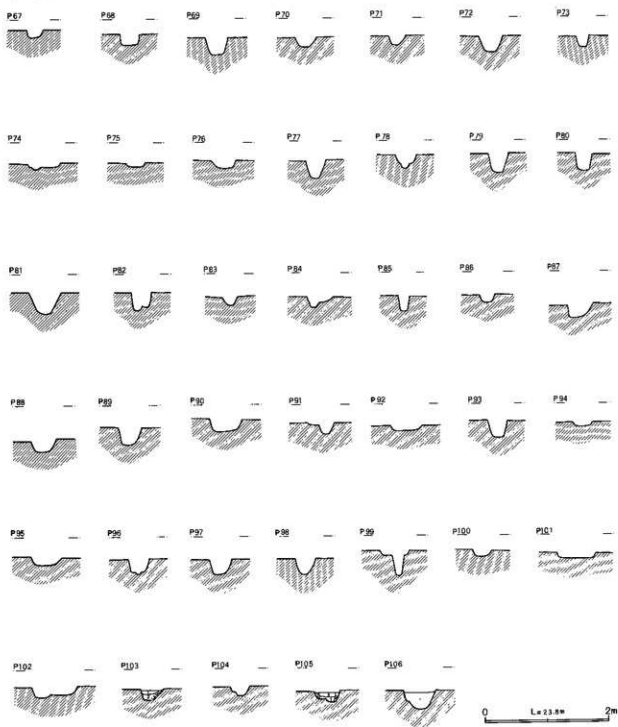




第202図 ビット(2)



## 第203図 ビット(3)



## ビット103

- 1 明灰褐色土 灰色粘土・褐色土ブロック混入、焼土少
- 2 灰褐色土 粘質土、ロームブロックやや多
- 3 褐色土 砂質土

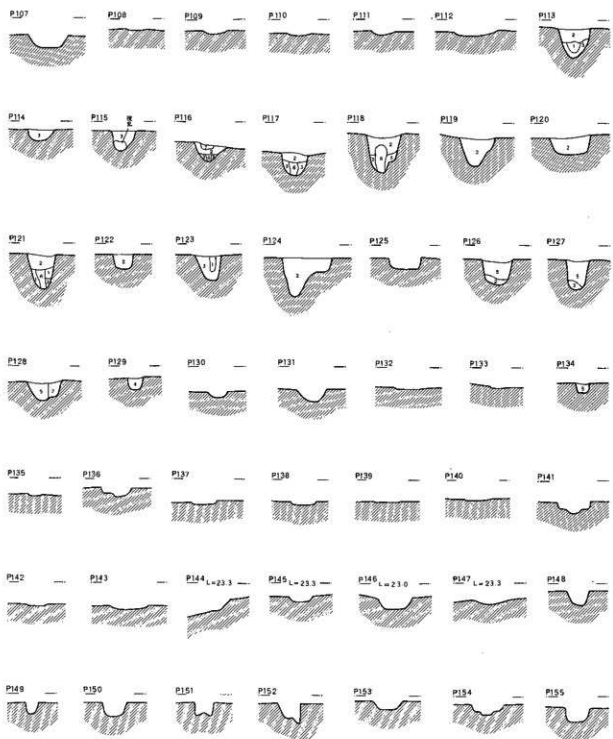
## ビット105

- 1 褐色土 灰色粘土・焼土粒子多
- 2 褐色土 灰色粘土少
- 3 黒色土 灰・焼土多

## ビット106

- 1 黒色土 灰・焼土多

第204図 ビット(4)



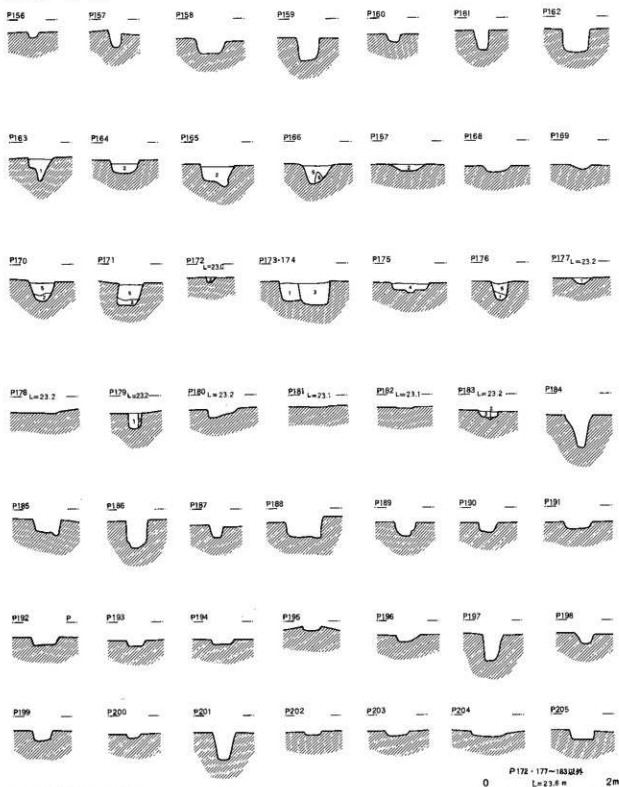
ビット土層誌記(各土層番号は共通)

- 1 黒灰色土 粘質シルト、褐色上に灰色土を混入、しまり強
- 2 黒褐色土 シルト質、褐色土と地山ブロック、柱状埋上、しまり強
- 3 灰白色土 シルト質、地山よごれ土、しまり強
- 4 暗褐色土 シルト質、塊上粒下少、しまり強
- 5 暗灰色土 シルト質、塊上粒、均一な土層、しまり強
- 6 暗灰色土 シルト質、粒子粗い、均一な土層、しまり強
- 7 暗灰色土 シルト質、粒子粗い、均一な土層、しまり強

P144~147以外  
L=23.6m

0 2m

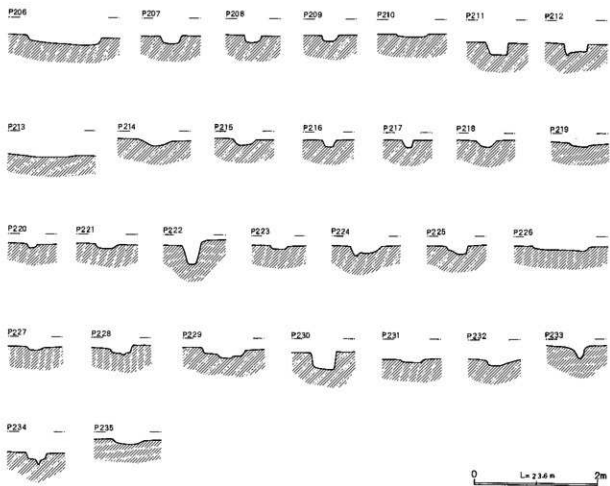
## 第205図 ピット(5)



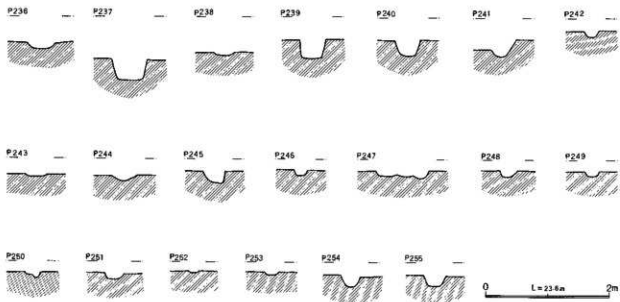
## ピット土層註記(各土層番号は共通)

- |        |                           |        |                       |
|--------|---------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒灰色土 | 粘質シルト、黒色土に灰色土を混入、しまり強     | 6 暗灰色土 | シルト質、粒子細かい、均一な土層、しまり強 |
| 2 黒褐色土 | シルト質、黒色土と黄山ブロック、柱穴埋土、しまり強 | 7 暗灰色土 | シルト質、粒子粗い、均一な土層、しまり強  |
| 3 灰白色土 | シルト質、黄山よごれ土、しまり強          |        |                       |
| 4 暗褐色土 | シルト質、混土粒子少、しまり強           |        |                       |
| 5 暗灰色土 | シルト質、混土粗い、均一な土層、しまり強      |        |                       |
- ※ P 173 は典型的な抜取土層と考えられる

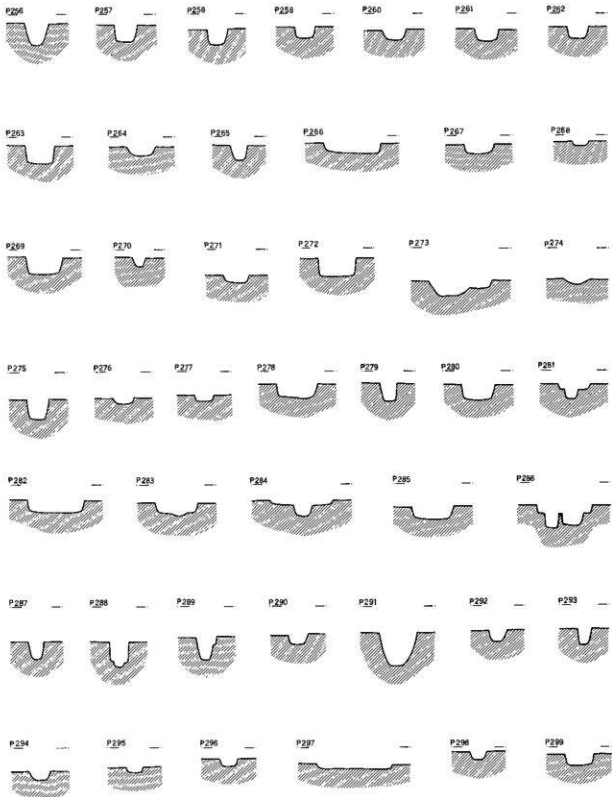
第206図 ビット(6)



第207図 ビット(7)

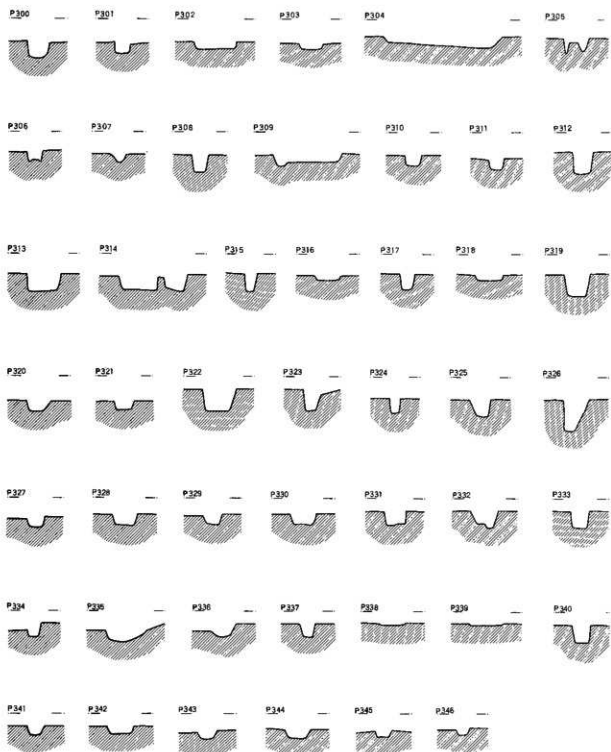


第208図 ビット(B)



0 L=23.6 m 2m

第209図 ビット(9)



0 L=23.7m 2m

第77表 第14地点ビット一覧表 (第201~209図)

番号	田番	検出グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	田番	検出グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1		103-107	60	49	19	59	1	106-92	36	30	25
2		103-107	33	29	23	60	8	106-92	37	31	25
3		104-107	26	21	8	61	7	106-92	30	26	33
4		104-108	75	53	45	62		107-66	42	34	11
5		105-107	26	23	5	63		107-66	36	18	13
6		105-107	25	21	5	64		107-66	33	32	12
7		105-107	25	21	23	65		107-66	35	28	13
8		105-107	32	31	25	66	16	107-66	25	25	10
9		105-107	29	21	6	67	20	107-66	29	27	11
10		105-107	36	36	13	68	6	107-66	23	19	18
11		105-107	37	26	18	69	13	107-66	34	32	26
12		105-107	21	21	11	70	12	107-66	35	31	15
13		105-107	34	32	19	71	18	107-66	26	25	15
14		105-108	70	62	12	72	11	107-66	35	28	24
15		105-108	59	55	15	73	9	107-66	22	22	18
16		106-107	32	25	21	74	10	107-88	51	30	9
17		107-107	71	52	14	75	11	107-88	30	23	6
18		103-87	31	28	8	76	9	107-88	39	28	12
19	1	104-92	42	34	13	77	7	107-88	29	22	28
20	2	104-92	52	28	16	78	4	107-88	32	31	18
21	4	104-92	31	29	15	79	5	107-88	32	29	30
22		105-86	44	40	9	80	8	107-88	24	22	25
23		105-87	32	26	6	81		107-89	49	39	31
24	5	105-92	36	35	12	82		107-89	34	32	27
25	4	105-92	49	22	14	83	1	107-91	24	22	12
26	8	105-92	29	27	25	84	4	107-91	42	34	17
27	9	105-92	51	36	18	85	2	107-91	19	18	24
28	2	105-92	45	29	11	86	8	107-91	24	23	12
29	6	105-92	35	30	27	87	5	107-91	40	29	19
30		105-92	43	37	25	88	6	107-91	40	33	19
31	12	105-92	51	32	21	89	1	107-92	35	32	28
32	10	105-92	34	32	18	90		108-86	52	26	17
33	27	105-92	39	36	41	91		108-86	41	34	16
34	26	105-92	47	20	11	92		108-86	38	31	7
35	19	105-92	37	35	28	93	3	108-88	30	29	26
36	20	105-92	29	22	22	94	1	108-88	31	30	5
37	21	105-92	19	18	7	95	1	108-89	48	27	12
38	15	105-92	46	43	33	96		108-89	34	30	24
39	16	105-92	57	49	34	97		108-89	34	33	23
40	17	105-92	28	25	20	98		108-89	33	32	25
41	22	105-92	31	25	19	99	9	109-86	45	43	40
42	18	105-92	59	45	56	100	8	109-86	27	25	10
43	13	105-92	42	31	21	101	7	109-86	51	47	9
44	14	105-92	58	38	29	102	4	109-86	71	45	16
45	24	105-92	57	32	15	103	3	109-86	39	34	18
46	12	106-87	46	23	19	104	5	109-86	29	25	13
47	17	106-88	30	29	28	105	2	109-86	42	40	17
48	7	106-88	44	32	36	106	1	109-86	56	51	18
49	20	106-88	42	20	18	107		104-94	60	45	20
50	21	106-88	30	20	20	108		104-94	33	26	3
51		106-89	22	20	23	109		104-94	36	35	4
52		106-89	76	49	32	110		104-94	35	32	3
53		106-89	35	24	23	111		104-94	37	23	7
54	1	106-90	31	29	30	112		104-94	69	41	5
55	2	106-90	55	37	28	113		104-95	51	38	45
56	2	106-92	31	22	14	114	18	104-95	41	39	17
57	2	106-91	47	31	8	115	17	104-95	44	41	22
58	3	106-91	34	32	34	116	15	104-95	63	48	25



番号	旧番	検出グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	番号	旧番	検出グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
117	11	104-95	48	43	32	175	1	105-96	58	57	16
118	6	104-95	56	43	60	176		105-96	48	29	27
119	10	104-95	56	42	45	177	9	105-96	31	29	10
120	7	104-95	65	43	25	178	8	105-96	48	23	3
121	13	104-95	44	36	52	179	10	105-96	21	20	23
122	14	104-95	39	32	21	180		105-96	52	41	14
123	16	104-95	45	41	37	181	11	105-96	40	34	3
124		104-95	80	39	56	182	12	105-96	34	30	3
125	4	104-95	53	37	17	183	7	105-97	36	32	10
126	2	104-95	62	44	37	184	1	105-97	50	47	50
127	3	104-95	62	39	44	185		106-94	45	44	23
128	20	104-95	54	52	30	186		106-94	35	31	43
129		103-95	41	24	18	187		106-94	22	18	16
130		104-95	31	27	10	188		106-94	60	37	31
131		104-95	52	46	17	189		106-95	34	30	21
132	1	104-96	60	45	5	190		106-95	35	30	13
133	4	104-96	24	21	3	191		106-95	45	38	12
134	8	104-95	30	23	15	192		106-95	45	40	13
135	5	104-96	23	21	3	193		106-97	32	29	8
136		105-93	47	36	14	194		106-97	36	29	7
137	3	104-96	51	47	6	195		107-94	30	24	6
138	2	104-96	41	41	5	196		107-95	31	28	12
139	6	104-96	51	32	2	197		107-96	33	32	40
140	7	104-96	42	30	3	198		107-96	30	29	15
141	10	104-96	56	52	17	199		107-96	33	30	15
142	9	104-96	34	33	3	200		107-97	28	23	7
143	8	104-96	57	52	4	201		107-97	37	33	41
144		104-98	39	39	17	202		107-97	26	25	5
145		104-98	38	32	7	203		107-97	37	37	7
146		104-98	55	48	16	204		107-97	55	49	5
147		104-99	58	39	7	205		107-97	38	37	8
148		105-103	35	26	22	206		107-98	114	38	12
149		105-93	21	20	16	207		107-98	35	30	12
150	10	105-93	39	30	21	208		107-98	27	26	11
151	11	105-93	31	30	20	209		107-98	26	25	7
152		105-93	43	37	30	210		107-99	60	34	4
153		105-93	46	42	12	211		107-99	37	33	18
154		105-94	50	38	15	212		107-99	38	32	17
155		105-94	40	39	22	213		107-99	79	68	3
156		105-94	19	18	8	214		108-97	56	46	10
157		105-94	20	18	23	215		108-97	36	35	10
158		105-94	48	36	22	216		108-97	22	20	12
159		105-94	35	34	37	217		108-97	19	15	11
160		105-94	22	22	11	218		108-97	33	30	8
161		105-94	25	23	30	219		108-98	31	28	4
162		105-94	43	49	33	220		108-98	17	17	7
163	7	105-95	40	40	35	221		108-99	37	35	8
164	8	105-95	46	43	21	222		108-99	41	40	32
165	4	105-95	60	51	32	223		108-99	25	22	5
166		105-95	55	45	30	224		108-99	50	35	15
167		105-95	59	47	10	225		108-99	35	23	13
168		105-95	43	37	8	226		108-99	90	36	7
169		105-95	32	28	6	227		108-99	26	23	5
170	6	105-95	49	41	28	228		108-99	34	33	12
171	1	105-95	76	38	35	229		108-99	70	55	14
172	12	105-95	19	16	9	230		109-94	40	34	27
173	3	105-96	43	37	30	231		109-94	34	29	4
174	2	105-96	50	34	36	232		109-94	25	20	8

番号	旧番	検出グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	旧番	検出グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
233		109-97	36	31	19	290		111-92	30	26	15
234		109-98	32	30	16	291		111-92	62	50	52
235		109-99	47	45	5	292		111-92	27	21	18
236		105-100	50	33	8	293		111-92	20	17	26
237		105-103	55	45	31	294		111-92	31	25	3
238		105-103	33	26	4	295		112-91	27	24	7
239		106-100	41	38	28	296		112-92	27	27	12
240		106-100	38	37	25	297		112 92	114	73	7
241		106-104	56	37	17	298		115-90	28	20	13
242		107-100	22	21	9	299		115-91	43	34	17
243		107-102	32	31	3	300		110-94	34	32	24
244		108 100	41	31	8	301		110-94	24	22	17
245		108-100	40	39	18	302		110-94	68	56	11
246		108-100	23	19	7	303		110-94	38	34	8
247		108-100	85	24	12	304		110-95	194	92	16
248		108-100	28	22	9	305		110-96	41	33	24
249		108-100	23	22	7	306		110-96	25	22	17
250		108-100	26	19	8	307		111-93	32	23	13
251		108 100	30	30	9	308		111-93	28	26	27
252		108-100	17	16	3	309		111-93	108	96	17
253		108-100	26	22	5	310		111-94	26	25	17
254		108-100	35	30	16	311		111 95	24	24	18
255		108-102	35	31	15	312		111-95	33	30	35
256		110 86	38	36	35	313		111-95	54	20	27
257		110-86	35	30	26	314		111-95	110	33	26
258		110-86	30	25	24	315		111-95	20	19	27
259		110-86	32	31	17	316		111-95	40	20	6
260		110-86	38	38	16	317		111-95	23	21	24
261		110 86	37	36	18	318		111-95	48	33	8
262		110-86	32	26	19	319		111-95	43	31	34
263		110-87	43	37	29	320		111-96	32	28	15
264		110-87	49	40	15	321		111-95	31	30	15
265		110-87	27	26	23	322		111-96	53	45	35
266		110-87	90	42	17	323		111 95	28	27	31
267		110-87	59	50	13	324		111-96	18	17	23
268		110-87	27	25	5	325		111-96	35	31	26
269		110-87	58	51	26	326		111-96	48	35	49
270		110-87	21	18	13	327		113-95	29	24	16
271		110-87	46	41	12	328		113-95	41	36	18
272		110-87	60	43	17	329		113-95	31	30	15
273		110-91	98	37	23	330		113-95	41	32	16
274		110-91	45	40	7	331		113-95	35	34	21
275		110-92	33	27	32	332		111-96	43	15	26
276		110-92	31	24	8	333		111-96	31	29	25
277		110-92	35	30	8	334		114-93	21	20	18
278		111-87	80	52	23	335		114-93	65	52	18
279		111-87	31	30	27	336		114-93	42	40	14
280		111-87	54	45	22	337		114-94	24	24	21
281		111-88	51	44	22	338		114-96	42	31	4
282		111-88	90	50	19	339		114-96	52	45	3
283		111-88	66	51	20	340		115-93	29	28	37
284		111-88	103	48	23	341		115-93	28	23	14
285		111-88	73	65	20	342		115-93	42	39	12
286		111-89	89	41	35	343		115-95	32	30	12
287		111-91	23	22	26	344		115-95	41	38	13
288		111-91	30	30	37	345		115 95	27	26	11
289		111-91	32	26	35	346		115-95	22	21	8

## (9) 溝跡

第14地点地点で検出された溝跡は102条である。但し、別個の溝跡として数えたものの中にも、同一の遺構である可能性をもつ例があり、逆に同一遺構として扱ったが、別個の遺構である可能性も存在する。

従って、この数が溝跡数の実体を示すものとはいえないが、取って発掘調査時に数え上げた数値のままとした。

溝跡についても調査を開始した順に遺構番号を振っていたが、その際に遺構番号の重複を避けるため、番号をとばして命名した例もある。

但し、煩雑化を避けるため新たに遺構番号を付すことをせず、旧番号のままとした。

図化し得る遺物が出土した溝跡を中心に、主な溝跡について遺構番号順に記述していくこととする。

溝跡は検出例が多く、しかも規模も様々である。そこで、個々の溝跡を検索するには不向きではあるが、やむを得ず遺構平面図は各々の溝跡を個別に掲げるの

ではなく、グリッドの配置に基づいた分割方式で掲載することとした。

つまり、第14地点を7分割し、この内の北西端のものを(1)として東へ(4)まで送り、また西に戻って南西端から東へ(7)まで送った(第210図)。

溝跡の平面図は、主に空中写真測量による成果を用いている。しかし、第14地点は1度に全面調査を行った後、1度に全体を測量できたものではない。

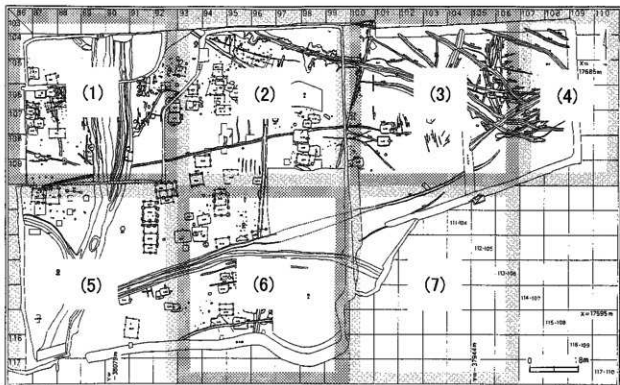
残土処理の問題などもあったため、都合4回に分けて調査し、その都度空中写真測量を行った。調査区内に走る細い排水溝は、この際の境界線である。

これらの図を合成して1つの図にしたため、溝跡の上場線・下場線のつながりや本数に、若干の齟齬をきたした箇所があることを予めお断りしておく。

### 第1号溝跡(第211・212・219・220・226~232区)

104-89-90グリッドから116-87-88グリッドにかけて検出された。第14地点を南北に縦断するかたちとなる。

第210図 第14地点溝跡紙割図



SJ1・2を切り、SD2~4に切られる。SD14との新田関係は不明である。

但しSD1は、SD2やSD3・4に切られているため、これらの溝跡との合流部分以南についてはSD1という単独のものではない。

SD1は、X軸(東西)方向110グリッドあたりまでほぼ直線状に南下し、ここでSD2と合流する。そしてこの位置からやや西に振れながら南下して、現在機能している用水路に合流する(写真図版1参照)。

さらにこの用水路は新星川へと注いでいる。SD2~SD4も113・114・88・89グリッド付近でSD1に合流する。

SD2~4の平面形状(流路)や、SD1との位置関係をみると、それぞれの溝は、既存であったSD1に合流させ、さらに河川(現:新星川)へと接続させているような印象を受ける。

SD1の検出し得た長さは117mを測る。主な部分における溝跡の幅×深さは、北端部で6.5×1.4m、東西106グリッド線付近では9.95×1.75m、断面図(第220図)H-H'では8.5×2.6m、J-J'では9.90×1.70mである。

X軸(東西)方向110グリッド以南の掘り下げを行った期間は、時期的にまだ地下水位が高く、溝跡の壁上および壁面・底面は泥濘化する結果となった。

そこで調査の安全性をはかるために、溝跡内部を小型のバックホーで掘り直し、仕上げを人力で行うという方法を採らざるを得なかった。

そのため、X軸(東西)方向の110グリッド以北の計測線とはやや食い違ってしまう結果となった。

またこのことは、東西方向106グリッド線を境として、北側と南側における計測線の違いについてもいえる事柄である。

溝の掘り下げを行う小型バックホーの傍らで、土層断面を観察した結果、SD2が木溝跡を切っているのが確認できた。

P223に、東西105グリッド付近の土層断面を模式化し、土層の註記をしてみた。1層の暗灰褐色上の上部

には、浅間B軽石(1108 天仁元年)が含まれていた。

浅間B軽石については、東西104グリッド線付近でも確認面近くの覆土に混入しているのが確認された。

また、このやや南に当たる東西106グリッド線近くの土層断面G-G'(第212図)の1層中の白色粒子も、前者との位置関係からみても浅間B軽石と判断できると思われる。

さらに、東西114グリッド線近くの土層断面E-E'(第220図)では、22層中に浅間B軽石と覚しき火山灰が、比較的多く確認されている。

この土層断面中で、SD1に相当するのは9~21層であろうが、9層は別個の溝跡でSD1を切っている可能性と、SD1を掘り直していると考えられる。いずれにせよ9層は、浅間B軽石と思われる白色粒子を混入した11層を切っている。

因みに、22~26層はSD2、27層はSD3、そして1~8層はSD4に相当する。

以上の事柄をまとめると、SD1は浅間B軽石降下時には、当時の生活面のレベルが不明ではあるものの、その大部分が埋まって浅い溝になっていたと考えられる。

そして、浅間B軽石降下以後にSD4に切られた。SD1も浅くはあるが掘り直しが行われるか、または別な溝(ともに9層)に切られたと思われる。

ついで、この溝もSD2に切られることとなった。なお、SD2もSD3を切った後順次埋まっていき(24~26層)、掘り直しが行われた(22・23層)と考えられる。

土層断面G-G'(第212図)の5~11層は須臾器や土師器が含まれるが、3・4層は土師器質土器、灰輪陶器、緑釉陶器、羽釜などが含まれていた。

なお、3・4層からの遺物は溝の中心よりも西寄りに多く、炭化物や灰も混入しているのが認められた。この点から、溝の西側からの投棄によるものと推定される。

#### 第2号溝跡(第211・212・219・220・234図)

104・90・91グリッドから116・87・88グリッドにかけ

で検出された。SD1とSD3を切る。SD14との新旧関係については不明である。

SD2は、東西110グリッド線付近でSD1と合流し、東西113・114グリッド線付近でSD3・4と合流する。SD4との新旧関係については確認できなかった。

SD2の検出状況からみて第16地点まで続くと推

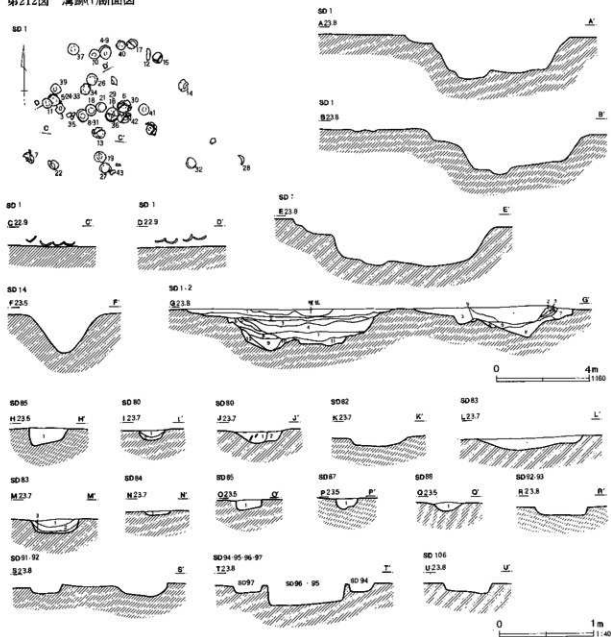
定され、そのSD2の推定範囲も一部今回の調査範囲の中に含まれていた。しかし、調査区の西隣にある家屋に接近しており、この部分に排水溝を掘削するには問題があるとして、5m程東へ逃がして排水溝を掘削した。

この排水溝を掘削する際に、SD2の続き部分の有無を確認するため、南北91グリッド線の3m程西まで

第211図 溝跡(1)



第212図 溝跡(1)断面図



第1号溝土層

- 1 黒色土 炭・炭化物粒、焼土粒子多、白色粒子混入
- 2 茶褐色土 焼土粒子、炭化物粒子やや少、F<sub>o</sub>多
- 3 灰褐色粘質土 炭・炭化物、焼土多、土師質土層包囲
- 4 灰褐色粘質土 炭化物粒子、焼土粒子散見、黄褐色砂粒含、土師質土層少
- 5 黄褐色土 地山崩落土、ブロック状の灰褐色粘質土
- 6 灰褐色粘質土 黄褐色土、炭化物粒子少
- 7 暗褐色粘質土 炭化物粒子少
- 8 黄褐色土 粘土ブロック混在、層右手は還元して緑色
- 9 黄灰色砂層 炭化物粘土結状に埋埋
- 10 緑灰色砂質土 黒色土ブロック混在
- 11 暗灰色粘質土 層と同一、粘質土やや多

第2号溝土層

- 1 褐色土 細砂層
- 2 褐色土 砂質
- 3 明灰色土 粘質土、黄褐色土、ブロック混入
- 4 茶褐色土 カーボン粒子やや多
- 5 青灰色砂質土 褐色砂質土・粘土に埋埋
- 6 灰色土 粘質土

7 明褐色土

- 炭化物粒子やや多
  - 8 暗褐色粘質土 炭化物粒子少
  - 9 暗灰色粘質土 黄褐色土ブロック・炭化物粒子少
- 第3号溝土層
- 1 明褐色土 焼土粒子少、やや砂質
  - 2 暗褐色土 炭化物粒子多
- 第3号溝土層
- 1 暗褐色土 ロームブロック(φ4~5cm)・灰褐色粘土多
  - 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック(φ4~5cm)・灰褐色粘土層多
- 3 明黄褐色土
- ローム粒子多、ロームブロック(φ4cm)少
- 第4号溝土層
- 1 暗褐色土 焼土粒子、カーボン少
- 第5号溝土層
- 1 暗褐色土 粘質土、ローム粒子・ロームブロック多
- 第7号溝土層
- 1 暗褐色土 粘質土、ローム粒子少
- 第8号溝土層
- 1 褐色土 やや砂質、灰色粘土ブロック少

トレンチ掘りを行ってみた。その結果トレンチの断面に、東側から西側に落ち込むラインを観察できた。

しかし、地表面に溜まった30cm程の水と、トレンチ壁面の崩落のため、断面実測や写真撮影をする余裕はなく記録は残すことができなかった。

参考程度でしかないが、この落ち込みはSD2と同一の遺構であると推定される。

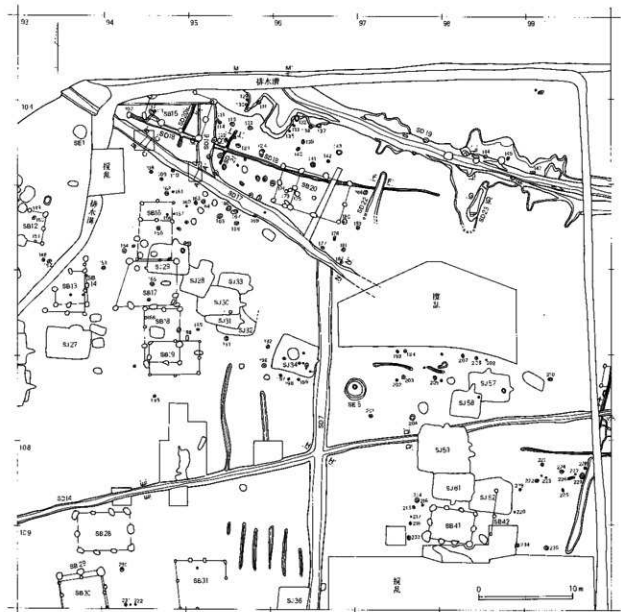
また、第13地点で検出されたSD25(大谷1991)も、位置関係からみて今回検出されたSD1と同一の溝跡

であると思われる。

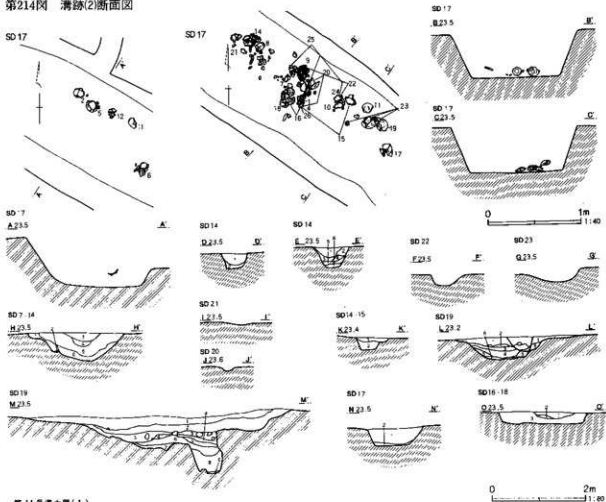
土層断面D-D'(第212図)をみると、6～9層を覆土とする部分と1～5層を覆土とする部分が存在すると思われる。

前者では須恵器などが検出されているが、後者では須恵器は出土しておらず、函化には及ばなかったものの、常滑産の甕の破片が検出されている。おおまかに、前者は古代の溝跡であり、後者は中世の溝跡と推定される。古代からの溝を、中世の段階で掘り直しを行っ

第213図 溝跡(2)



第214図 溝跡(2)断面図



## 第14号溝土層(1)

- 1 暗褐色土 ロームブロック少
- 2 褐色土 灰色粘土ブロック状少

## 第14号溝土層(2)

- 1 黒褐色土 FA混入。上面にFAをのせる黒褐色土をベースとする。しまり強、粘性弱
- 2 暗褐色土 砂粒か、FAをのせる黒褐色土の下部にある砂層をベースとする。しまり強、粘性弱
- 3 暗褐色土 黒褐色土か、FAをのせる黒褐色土の下にある砂層をベースとする。しまり強、粘性弱
- 4 黒褐色土 FA混入。1層と共通。しまり強、粘性弱
- 5 暗褐色土 砂層中に黒褐色土か。しまり強、粘性弱
- 6 暗褐色土 3層に共通

## 第7・14号溝土層

- 1 黒褐色土 カーボン(遺物多)・Fe少。しまり強、粘性弱
- 2 暗褐色土 カーボン豊富
- 3 暗褐色土 Fe多。焼土粒多・カーボン少。しまり強、粘性弱
- 4 暗褐色土 Fe多。カーボン少
- 5 黒褐色土 砂の埋土。5層の以上にFAをのせる
- 6 灰褐色土 砂層、地山

## 第14-15号溝土層

## 第16号溝土層

- 1 灰褐色土 (SPB-B')の3層に相当)

## 第14号溝土層土

- 2 暗褐色土 シルト質、Fe少。人為的埋戻し土

## 第19号溝土層(1)

- 1 暗褐色土 砂質、炭化粒多・焼土粒少
- 2 灰褐色土 砂質、炭化粒少、地山ブロック(大)多、塊土か
- 3 暗褐色土 砂質上に炭化物を層状に含む
- 4 暗褐色土 砂質、炭化粒下・焼土粒少
- 5 暗褐色土 砂質、炭化粒多、一時停滞水したと思われる

## 6 灰白色土

## 7 暗褐色土

## 8 暗褐色土

## 9 灰褐色土

## 砂質、砂粒多や大、炭化粒多

## 地山、灰白色土、砂質土、砂層によりやや粘性帯

## びる部分あり、基本層位の7層以下と思われる

## 第19号溝土層(2)

- 1 暗褐色土 砂質、洗削5層石砂少、焼土粒少・炭化粒少
  - 2 灰褐色土 砂質、炭化粒少
  - 3 灰褐色土 砂質、炭化粒少
  - 4 灰褐色土 シルト質、地山ブロック少
  - 5 灰褐色土 シルト質、炭化粒少
  - 6 灰褐色土 シルト質、炭化粒少、灰様大
  - 7 灰褐色土 シルト質、地山ブロック(炭灰色)多
  - 8 灰褐色土 粘質、比較的均、ややシルト質
  - 9 暗褐色土 粘質、腐植質粘上
- ※ 灰白色土、砂質土、場所によりやや粘性帯を帯びる部分あり、基本層位の7層以下と思われる

## 第17号溝土層

- 1 暗褐色土 粘質
- 2 暗褐色土 粘質

## 第16-18号溝土層

## 第18号溝土層

## 第16号溝土層

## 第18号溝土層

## 第16号溝土層

## 第18号溝土層

## 第16号溝土層

## 第18号溝土層

## 第16号溝土層

## 第18号溝土層



ているとみることができよう。

上層断面E-E'(第220図)においても、SD 2は2～3段階をもつ可能性が考えられる(下層:24～26層、上層:22・23層)。これは上層断面D-D'(第212図)で大きく2段階に分かれる層序と対応するのであろうか。

因みに、SD 2の下層の溝跡では確認面からの深さは0.8mを測り、底面は非常に平坦で壁面の立ち上がりも緩やかである。

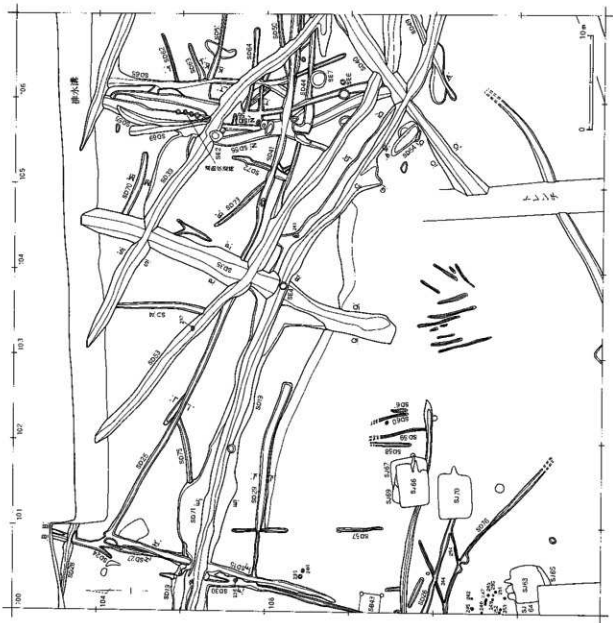
上層の溝跡では幅5.3m・深さ0.7mを測り、底面は平坦で、壁面の立ち上がりも非常に緩やかであると思われる。

なお、土層断面D-D'(第212図)9層下面はややテラス状を呈するが、この部分には杭列の痕跡が認められたが図化するには至らなかった。

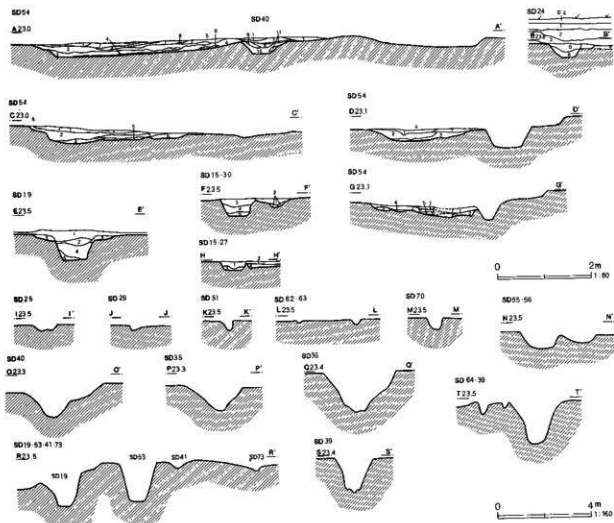
この杭列の範囲・規模・性格については特定することができなかった。

この土層断面に見える上層(中世)の溝跡は幅4.2

第215図 溝跡(3)



第216図 溝跡(3)断面図



## 第15・27号溝土層

## 第15号溝土層覆土

- 1 灰色土 粘質シルト質、炭化粒子・地山ブロック少
- 2 黄灰色土 粘質シルト質、地山ブロック大

## 第27号溝土層覆土

- 3 白灰色土 シルト質、Mn粒子微量
- 4 黄灰色土 シルト質、2層に近似

## 第15・30号溝土層

## 第30号溝土層

- 1 黄灰色土 シルト質、Fa・Mn微量、白色炭粒粒子(式内A)、しまり強
- 2 灰色土 粘質、滲入物なし

## 第15号溝土層

- 3 黄灰色土 シルト質、Fe少、Mn微量、白色炭粒粒子、3層より1層のほうがFe多、しまり強
- 4 暗灰色土 粘質、暗灰色土少
- 5 明暗灰色土 粘質、地山ブロック多、底面薄移層

## 第19号溝土層

- 1 暗黄灰色土 砂質、炭化粒子・粘土粒子少
- 2 灰褐色土 砂質、酸化鉄多、一時潤滑水
- 3 灰白色土 砂質、焼土含まず
- 4 暗灰色土 砂質、炭化物、焼土粒子微量
- 5 暗灰色土 砂質、地山ブロック多、ローリングしている早稲層上

## 第24号溝土層

- 1 灰白色土 表土水田耕作土、下部に浅凹A粒石粒子多
- 2 灰黄色土 粘質シルト、Fe多
- 3 灰色土 粘質シルト、Mn少
- 4 暗灰色土 粘質シルト、Mn多
- 5 暗灰色土 粘質シルト、Mn少、粘質や砂
- 6 暗灰色土 粘土、地山ブロックと灰色粘土の褐色土

## 第40・54号溝土層

- 1 灰色土 砂質、炭化物含む、炭屑片(生)・塵少
- 2 褐灰色土 シルト質、炭化物・塵少
- 3 黄褐色土 砂質、炭化物・土層薄片少(下面)
- 4 灰白色土 砂層(粗砂)、土層薄片・塵少、下面は炭化シルト質、炭化物少、下面に土層薄片が広がる、焼けた炭屑か
- 6 暗灰色土 シルト質、地山の灰白色シルトブロック(5層)
- 7 灰黄褐色土 シルト質、炭化物少、土層薄片あり
- 8 灰白色土 炭化物層
- 9 灰白色土 粘土質、黄色土ブロック混入
- 10 黄褐色土 粘土質、黄色土に灰白土ブロック混入
- 11 灰白色土 地山シルトブロック

m・確認面からの深さは0.9mを測り、底面には凹凸をもつが比較的平坦であり、壁面の立ち上がりも緩やかであるといえる。

今回の発掘調査にはいる以前の段階では、概ね東西106～109グリッド線付近には、部分的にアスファルト舗装の道路が残っていた。

そして調査のため、このアスファルト舗装を除去したところ、砂が客土されている箇所が認められた。この砂地の部分は、幅6～7mで南北方向に延びており、地元の方に聞いたところ「ここには溝があったが、道路をアスファルト舗装する際に砂で埋めた場所」とのことであった。

後日、この周囲を表土掘削した際に、砂が客土されていた箇所の下位面から検出されたのがSD2であった。

言い換えるならば、このSD2は現代までその痕跡をとどめていたといえるのである。

第13地点のSD25を、第14地点におけるSD2と考えたが、このSD25の西隣にみられるSD26は、第14地点SD2の古代もしくは中世の部分の続き部分であろうか。

SD1に比べ、遺物の出土はきわめて少ないといえる。円化した遺物は併せて7点であった。

#### 第3号溝跡 (第219・220・234・333～335図)

111-86グリッドから116-87グリッドにかけて検出された。第15地点で検出されているSD3は、位置関係・規模からみて第14地点のSD3とは同一の溝であると推定される。そこで遺構名もSD3と命名した。第15地点におけるSD3の検出範囲は、110・111-79グリッドから110・111-85グリッドである。

SD3は、第15地点からやや南に振れながらほぼ東西に延び、111-86グリッド付近でカーブを描いて南下してSD1に合流する。そしてこのSD1は、さらに南下をして河川(新星川)へと注ぎ込む。

因みに、SD1～4の、検出されている範囲内の南端部のすぐ南側は、現・新星川の河川敷にあたる部分であり、この位置から南約20mで新星川の現水流と

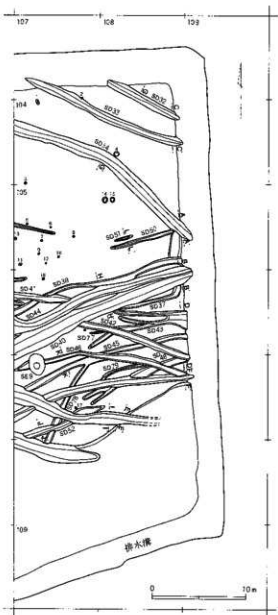
なる。

SD3は第14地点では、SD1を切っている以外は他の遺構との重複関係はみられない。第15地点では、S J 13、SD15・16・29を切っているが、SD4・5・11・17との新旧関係は不明である。

SD3の各部分における幅・深さは、第15地点の西端部(第333・334図)で4.3×1.6m、底面での幅は1.7mを測る。

底面は平坦で、南側壁面は底面から70cm程急激に立

第217図 溝跡(4)



ち上がり、屈曲して開くように立ち上がる。北側壁面にはほぼ直線的に立ち上がる。第15地点内のSD 3からの出土遺物は、大部分が1層もしくは2層上部からのものであった。

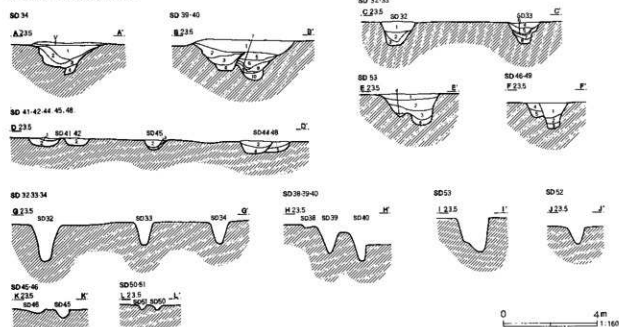
東端部(同図)で4.2×1.5m、底面での幅は2.1mを測る。

底面は平坦で、南側壁面は急激に立ち上がるが、北側壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。

本地点でのSD 3からの出土遺物はきわめて少なかった。

第14地点の断面A-A'(第219・220図)では、3.44×1.12m、底面での幅は0.6mを測る。

第218図 溝跡(4)断面図



## 第34号溝土層

- 1 黒灰色土 粘土質、灰褐色粘土少
- 2 暗褐色土 Fe 沈着
- 3 暗灰色土 地山ブロック(φ3~5cm)多、炭化物粒子(φ0.5~0.8cm)少
- 4 灰褐色土 地山ブロック(φ2cm)少

## 第39・40号溝土層

- 1 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)多、炭化物粒子少
- 2 黒褐色土 灰褐色粘土少、ロームブロック(φ1~2cm)多
- 3 黒灰色土 粘土質、灰褐色粘土少
- 4 灰褐色土 粘土質、ロームブロック(φ3~5cm)多
- 5 灰褐色土 炭化物と灰褐色粘土の互層(層状)、炭化物粒子多
- 6 灰褐色土 炭化物と灰褐色粘土の互層(層状)、炭化物粒子少
- 7 暗灰褐色土 炭化物の純層
- 8 暗灰褐色土 炭化物と灰褐色粘土の互層(層状)、粘土多
- 9 暗灰色土 砂質
- 10 暗灰色土 粘土質

## 第32・33号溝土層

## 第32号溝土層

- 1 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)多、炭化物少
- 2 黒灰色土 粘土質、灰褐色粘土少
- 3 灰褐色土 粘土質、ロームブロック(φ3~5cm)多

## 第33号溝土層

- 4 黒褐色土 灰褐色粘土少、ロームブロック(φ1~2cm)多
- 5 黒褐色土 ロームブロック粒子(φ0.5cm)多、炭化物粒子少
- 6 暗灰色土 粘土質
- 7 黒灰色土 粘土質、灰褐色粘土少
- 8 灰褐色土 粘土質

## 第41・42・44-45-48号溝土層

- 1 灰褐色土 砂質
- 2 黒褐色土 SD 32の1層に近似
- 3 黒灰色土 SD 32の2層に近似(炭褐色粘土多)
- 4 黒褐色土 砂質、SD 32の1層に近似
- 5 灰褐色土 Fe 沈着多、SD 32の3層に近似

## 第53号溝土層

- 1 黒褐色土 Fe 沈着多、SD 32の1層に近似
- 2 黒灰色土 粘土質、灰褐色粘土少
- 3 黒灰色土 ロームブロック(φ3~5cm)少、SD 32に近似
- 4 灰褐色土 灰褐色粘土ブロック(φ5~8cm)多、SD 32の3層に近似

## 第46-49号溝土層

- 1 黒褐色土 灰褐色粘土多、SD 32の1層に近似
- 2 黒灰色土 砂質、灰褐色粘土少
- 3 灰褐色土 砂質、ロームブロック(φ3cm)多
- 4 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)多、炭化物粒子少
- 5 灰褐色土 ロームブロック(φ2~3cm)多、SD 32に近似

底面は南側がやや窪み、壁面の立ち上がりも第15地点に比べ緩やかである。この断面は、形状的にも別個の溝跡が存在したか、または掘り直しによる断面形状の変形かとも思われる。1・2層がこれに相当するのだろうか。

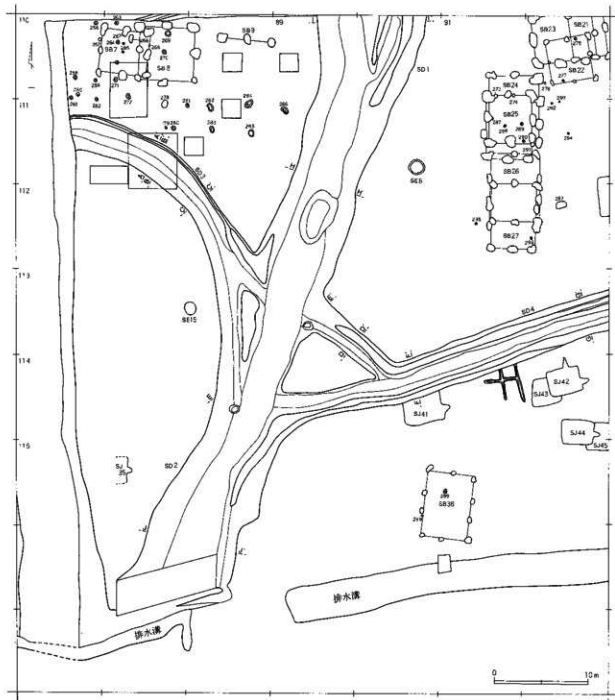
上層断面を観察することができなかったが、位置的

にみても断面D-D'にかかる溝跡が、SD 3に続くであろうことは、断面E-E'(第220図)からも明らかである。

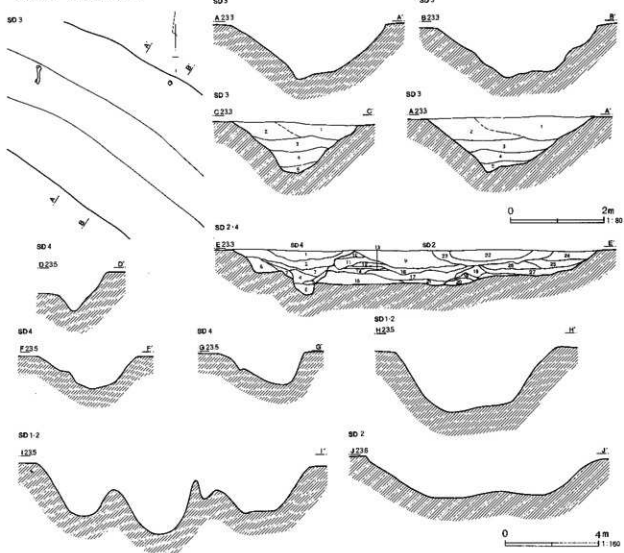
そこでD-D'にかかる部分もSD 3として判断をした。この部分からの遺物の出土はない。

断面E-E'での規模は5.04×1.80mを測る。底面

第219図 溝跡(5)



## 第220図 溝跡(5断面図)



- 第3号溝土層  
第3号溝土層上層  
1 灰褐色土 灰褐色粘土  
2 灰褐色土 灰白色粘土  
第3号溝土層下層  
3 暗青灰色土 白色の粘土、部分的に砂粒少  
4 灰色土 緑灰色の粘土粒、砂粒少  
5 暗緑灰色土 粘土粒、砂粒多  
※ 点線部分…SD2は二時期に掘削されて埋塞したものか  
第4号溝土層  
第4号溝土層上層  
1 灰褐色土 灰白色の粘土、(φ0.5cm)前後の粒が多、(細粒~φ0.1cm)少  
2 灰褐色土 灰白色の粘土多、(細粒~φ4cm)少  
3 灰褐色土 灰色粘土(細粒~φ0.5cm)多、粘性強、砂粒少  
4 灰色土 粘性強、有機物若干  
5 灰褐色土 緑灰色の粘土ブロック(細粒~φ5cm)多  
6 灰色土 4層より暗い、含有物少、粘質強  
7 灰褐色土 灰白色の粘土ブロック多  
8 灰褐色土 灰白色の粘土粒子多

- 9 灰褐色土 緑色の砂多、含有物少  
10 灰褐色土 灰白色粘土粒(φ0.3cm)少  
11 灰褐色土 灰白色粘土粒、火山灰多(浅層B礫石か)  
12 灰色土 灰色の砂層  
13 灰褐色土 灰白色粘土ブロック、灰色の砂層  
14 灰褐色土 灰白色の粘土ブロック、砂層  
15 灰褐色土 緑灰色粘土と暗青灰色粘土の混入、底部には緑灰色の砂粒多  
16 暗青灰色土 砂粒多  
17 暗青灰色土 砂は1層よりやや少、緑灰色の粘土ブロック若干  
18 暗灰色土 緑灰色の粘土粒子多  
19 緑灰色土 砂層  
20 緑灰色粘土 18層土が混入、暗灰色あり  
21 暗灰色土 青灰色の粘土ブロック  
22 灰色砂層 灰色粘土(φ1~3cm)輪状を呈す  
23 灰白色土 灰色の砂粒少  
24 灰褐色土 灰白色の粘土ブロック(細粒~φ1cm)少  
25 灰褐色土 灰色砂層との互層、両面に砂粒多  
26 灰色土 砂粒少  
27 灰褐色土 黄灰色の粘土粒子多、底部に砂粒多

は必ずしも一様ではなく、6層の部分では幅80cm、深さ50cm程の窪みをもつが、8層の部分では幅100cm程の平坦面をなしている。

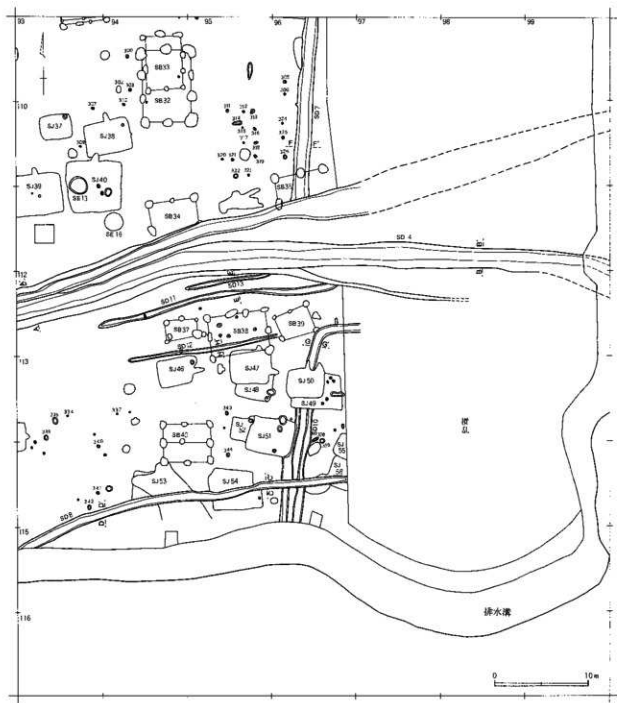
これはお溝の掘り直しなどの結果と思われるが、そのうちのある段階の溝跡が、第15地点で検出されているSD29であろうか。

なおこの部分では、SD3がSD1の覆土中、浅間B軽石を混入する層（11層）を明瞭に切っているのが観察された。

全体的に出土遺物はきわめて少なかった。3の緑釉陶器は近江産であろうか。

第4号遺跡（第215・219～223・234図）

第221図 溝跡(6)



SD 4についてもSD 1～3と同様の理由で、小型バックホーで掘掘りしたため、溝跡底面のレベルについて確認がない。しかし、ほぼ同レベルである遺構確認面での溝幅の規模から、西南西に流れ下ると思われる。

111-94グリッド付近で2条の溝跡が合流しているが、遺構名については、どちらもSD 4のままとした。

北側の溝跡は、108-106グリッド以東ではプランが失われていた。深い部分で深度は0.9m、底面は平坦面に近い。

南側の溝跡については、103-101グリッド以東は調査区外に続く。規模は幅・深さともに北側の溝を上回る。そしてこの2条の溝跡は合流して西南西に流れ、114-96グリッド付近でSD 1～3と合流したのち屈曲して南に向かう。

SD 4の断面A-A'(第222図)をみると、南側の溝が切ついているといえよう。この箇所での南溝の規模は、幅3.9m・深さ1.3mを測る。

SD 4はSD 1～3との位置関係からみて、SD 1～3と重複しているというよりも、接続させているといえるのではなからうか。

第14地点・第16地点をみると、多くの溝跡は北西から南東方向に向かって走っているのがわかる。これは第14地点東端部が南西方向に広がる埋没谷に位置し

ているため、第16地点の溝もこの谷地形に向かって注いでいたと推定される。

これに対して遺構の数は少ないものの、これらの溝跡とは直行するかのように北東から南西に向かうものを存在する。SD 4も後者の部類であり、SD 1～3を念頭に置いていると思われる。

遺物の出土はきわめて少なかった。

#### 第5号溝跡(第211・235図)

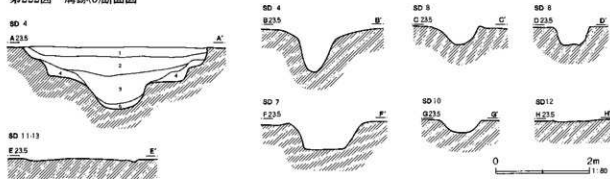
104-88・89グリッドに位置する。北側は調査範囲外に続き、南側はSD 1と重複している。

検出された範囲は、全長8.5mときわめて小規模である。この範囲内では幅2.0～2.6mを測り、調査区境界線付近で西方へ屈曲すると思われる。溝跡底面は平坦ではなく凹みが多く、壁面の立ち上がりは弱い。溝跡として扱ったが、不整形の土壌としての可能性も考えられる。

SD 5は深さ5～10cmときわめて浅いため、SD 1に合流して終わっているのか、本来はSD 1の東側にまで続いていたのか、SD 1の東側ではプランが失われてしまっているのかは判断できなかった。

遺構の調査範囲は小規模で、遺存度も悪いものの、遺物の出土は比較的多く、図化し得た遺物は18点であった。

第222図 溝跡(6)断面図



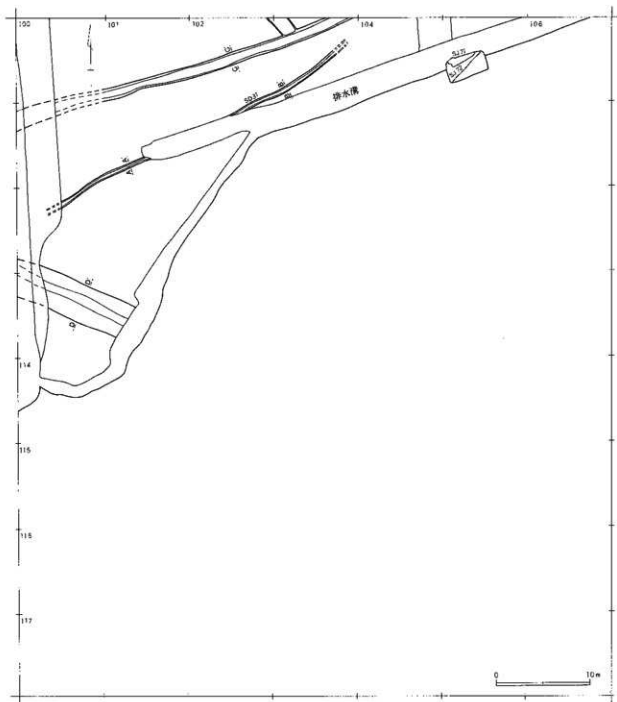
#### 第4号遺土層

- 1 灰褐色土 カarbon少、やや砂質、しまり強、粘性強  
2 暗灰褐色土 砂粒・Carbon少、F e沈着、しまり強、粘性強

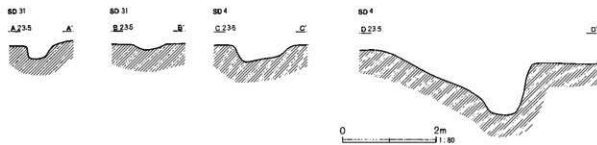
- 3 黒灰色土 粘質土層にCarbon・砂粒少、しまり・粘性強  
4 暗灰褐色土 砂粒(φ3mm)をブロック状に少、炭化物粒予少、しまり・粘性強  
5 茶褐色土 砂層中に粘土ブロック(φ1～3cm)散在、しまり・粘性強



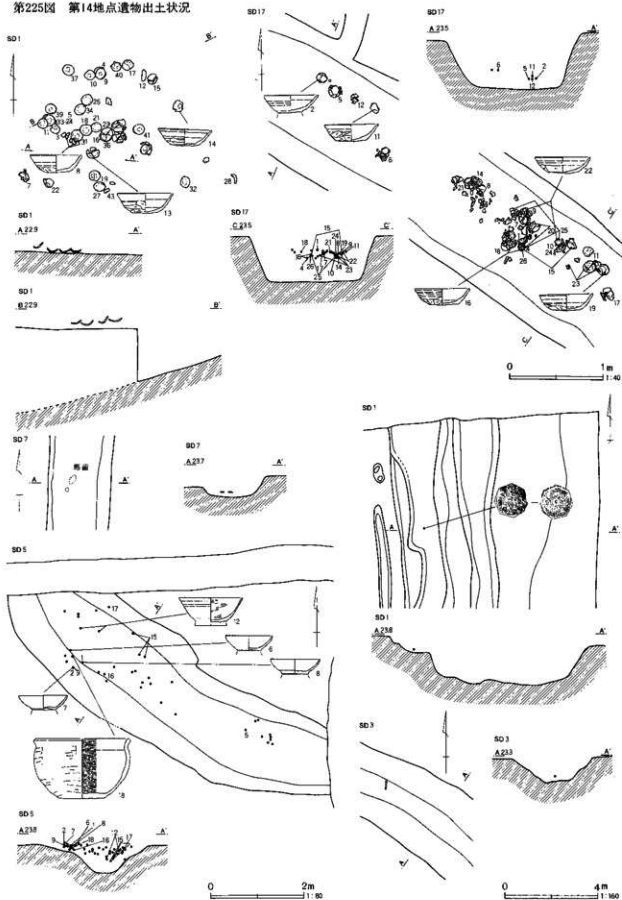
第223图 沟迹(7)



第224图 沟迹(7)断面图



第225図 第14地点遺物出土状況



#### 第7号溝跡 (第213・214・221・222・236図)

ほぼ南北に走る。SD14を切り、SD17に切られる。

SB35との新田関係は不明であるが、これを切っている可能性が高いと思われる。

この溝の北端部については、SD17の測線が途切れる手前あたりから埋没谷となり、SD7のプランを見失う結果となった。但し、SD19との重複関係は認められなかった。SD7と、第16地点のSD114・115との関連性については不明である。

南側についてはSD4に合流して終わるものと思われる。検出し得たSD7の全長は57.6mであり、幅1.2~1.8m・深さ0.6mを測る。平面形状はほぼ直線に近く、N-177-Wの方位で南流する。

断面形状については、底面は概ね平坦で逆台形を呈する部分が多い。

東西グリッド線の、108・109グリッド以北は埋没谷の端部に相当しており、この谷を覆う土と遺構覆土との識別は困難であった。このためこの近辺での遺構検出作業の段階において、SD7を検出する以前に何点かの遺物が出土した。

これらの遺物は、帰属遺構が確定する以前に原位置を失う恐れが生じたため、グリッド-15遺物として取り上げざるを得なかった。この際、9×9mの大グリッド内に3×3mの小グリッドを設定して9分割し、a-iと命名して遺物取り上げを行った。

第242図1~11として掲げた土師器質土器は、この際に取り上げを行ったものであるが、その小グリッドの位置からみると、これらの遺物はSD7の覆土上層からの出土である可能性が高いと思われる。

SD7の覆土から出土した遺物は比較的多く、その中で図化し得たのは計25点であった。

#### 第8号溝跡 (第221・222・236図)

115-93グリッドから114-96グリッドにかけて検出された。西側は、調査のために掘削された排水溝によって切られているが、さらに調査範囲外に続くと思われる。東側は、土取りによる擾乱のために切られているが、擾乱以东は調査範囲外であるためSD8の有無に

ついては不明である。

SJ53・54・56を切っているがSX1・2との重複関係については不明である。SD10を切っていると思われる。

検出し得た範囲内での長さは35.4m、幅は0.8~1.2m、深さは0.4m前後である。溝跡の平面形状は直線的ではなくやや湾曲するが、概ねN-102-Wの方位で西流する。

底面は平坦面またはやや凹面状を呈する。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形状は逆台形に近いといえる。

溝は南北に振れながら、東西に走り、西側が「下」であると思われる。

覆土中には多量の炭化物が混入しているのが認められた。

遺物の出土は少なく、このうち図化し得た遺物は計3点であった。

#### 第17号溝跡 (第213・214・237・238図)

103-93グリッドから106-97グリッドにかけて検出された。SD17は、北西から南東方向に開く埋没谷を縦走するかたちで検出された。N-123-Eの方位で東流するが、これに近い傾きをもつ溝跡は多く、第14地点のみにとどまらず、第16地点にも共通する。

これらの溝跡は、地形的に南東方向に存在した谷地形に向かって溝が設けられていると推定される。

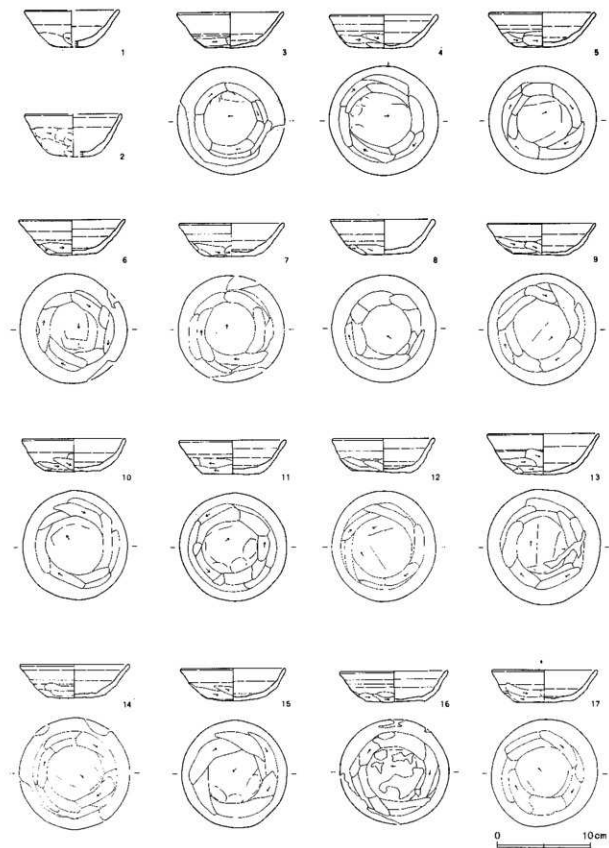
SD17は、西側は調査範囲外に続くが、第16地点内には及んでいない。第16地点の西側を通過していると思われる。

東側は埋没谷の内部で消えてしまっている。SD17は、恐らく谷に接続させて終わっている遺構であると思われる。

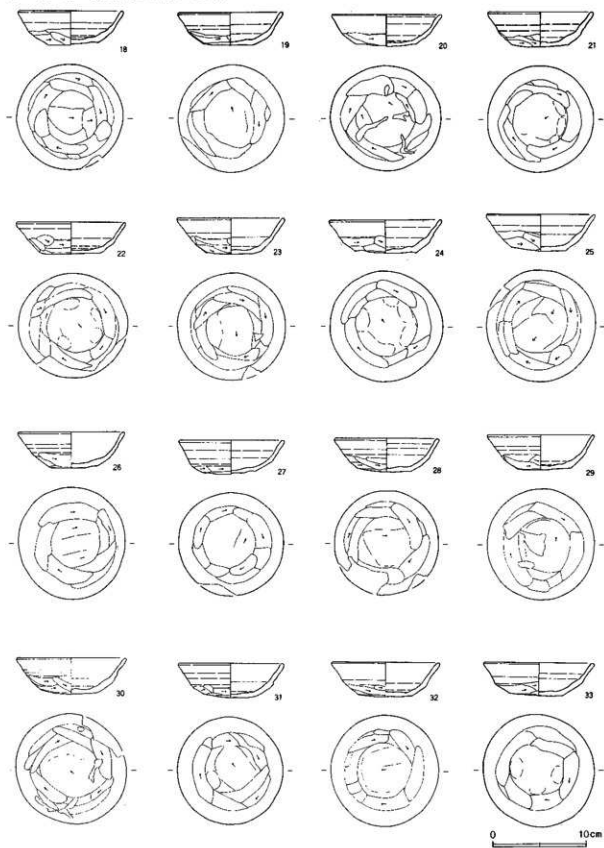
SD7・16を切る。検出し得た範囲内での長さは36.5m、幅は1.3~1.6m・深さは0.4~0.5mを測る。溝跡底面は平坦であり、壁面の立ち上がりも直線的で比較的急勾配に立ち上がる。断面形状は、明確な逆台形を呈する。

104-94グリッド付近では、土師器質土器が溝跡底面よ

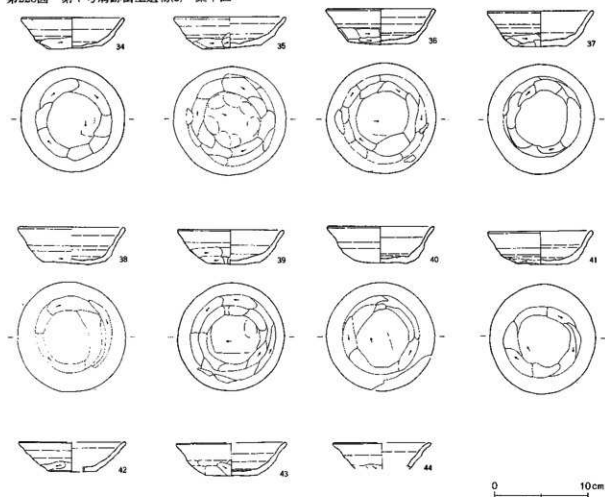
第226图 第1号溝跡出土遺物(1) 集中区



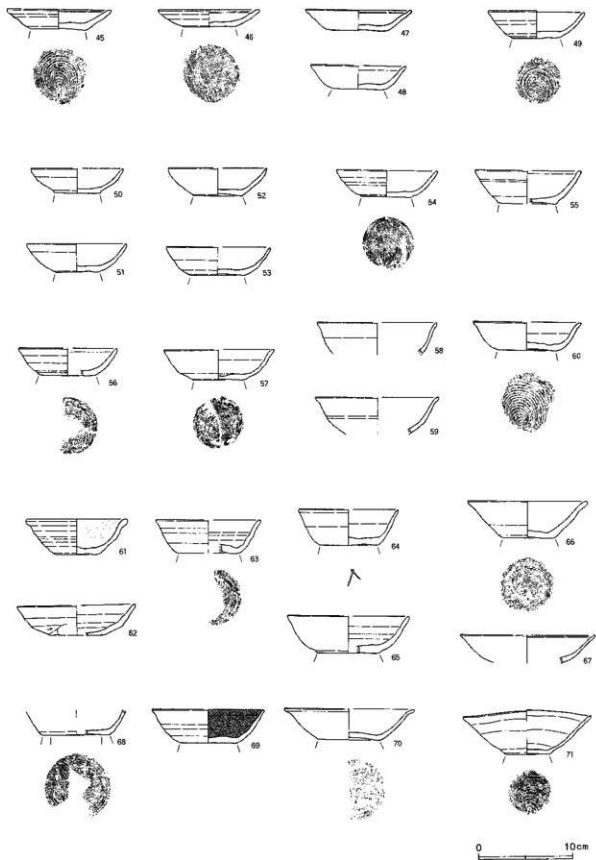
第227图 第1号溝跡出土遺物(2) 集中区



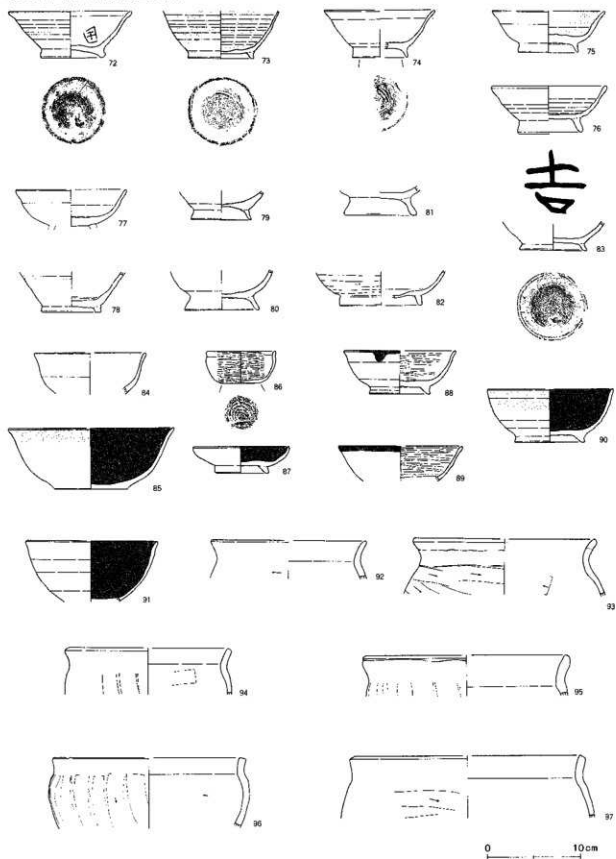
## 第228図 第1号溝跡出土遺物(3) 集中区



第229図 第1号溝跡出土遺物(4)

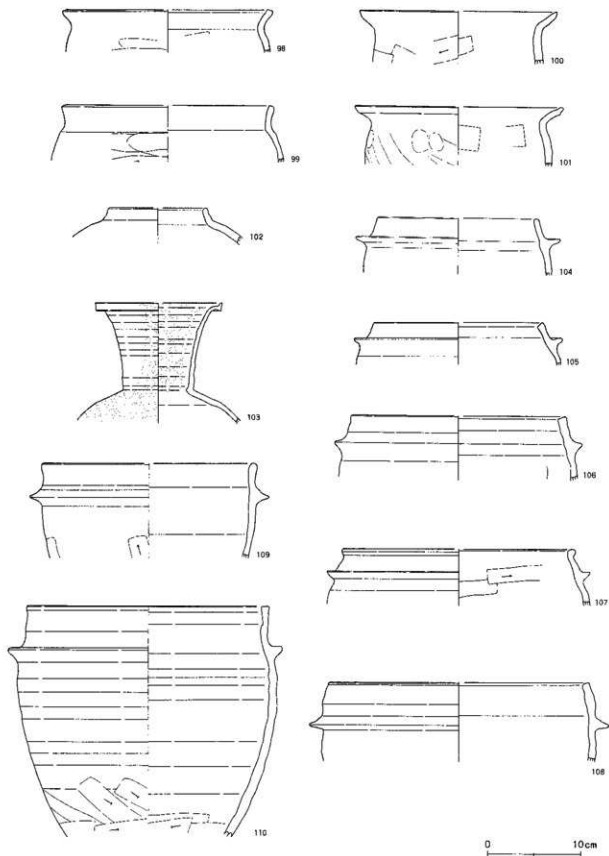


第230图 第1号溝跡出土遺物(5)

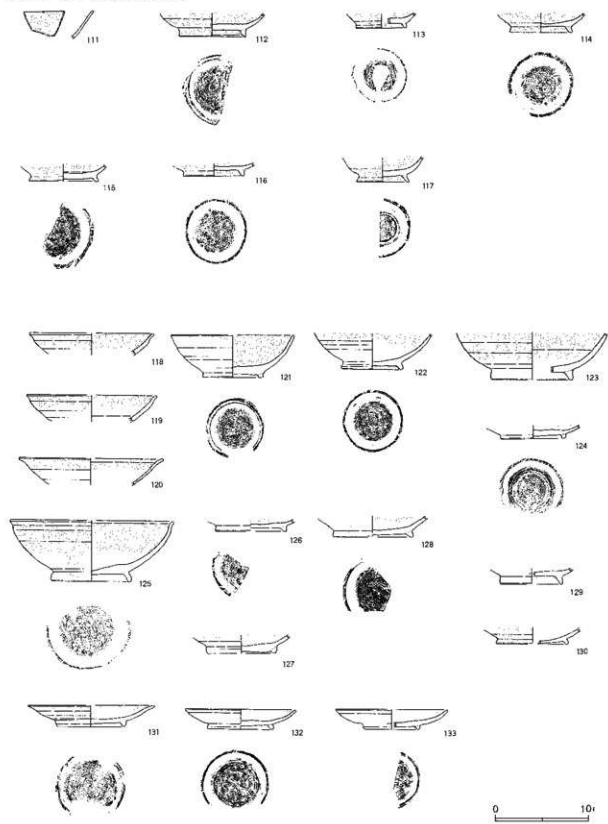




第231图 第1号溝跡出土遺物(6)



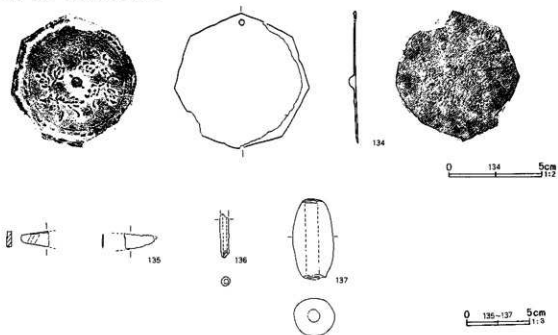
第232図 第1号溝跡出土遺物(7)



りやや浮いたレベルでまとも出土した。一括作業  
された遺物であろうか。これ以外にSD17から出上

た遺物はほとんどなかった。

第233図 第1号溝跡出土遺物(8)



第78表 第1号溝跡出土遺物観察表(第226~228図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師質環	(10.2)	3.9	(3.8)	AEF	普通	橙褐色	口20	ロクロ成形の後 体部一底部外面施削り
2	土師質環	(10.4)	4.4	(4.2)	AEFH	普通	黄橙褐色	底30	ロクロ成形 体一底(外):施削りか 器面風化
3	土師質環	11.4	3.8	5.6	AEFH	普通	黄橙褐色	底100	ロクロ成形 体F(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
4	土師質環	11.6	3.6	6.7	AEFH	普通	明橙褐色	完形	ロクロ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押えか
5	土師質環	11.5	3.7	5.8	AEF	普通	明橙褐色	完形	ロクロ成形 体一底(外):施削り
6	土師質環	11.4	3.8	5.1	AEF	普通	黄橙褐色	口85	ロクロ成形 体一底(外):施削り
7	土師質環	11.3	3.5	5.4	AEFH	普通	黄橙褐色	口65	ロクロ成形 体一底(外):施削り
8	土師質環	11.2	3.8	5.3	AEF	普通	橙褐色	完形	ロクロ成形 体一底(外):施削り
9	土師質環	11.8	3.4	6.0	ACEF	普通	黄褐色	完形	ロクロ成形 体下半一底(外):施削り後 底ナデ
10	土師質環	11.1	3.5	5.7	AEFH	普通	明橙褐色	完形	ロクロ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後ナデ
11	土師質環	11.4	3.7	6.0	AEFH	普通	黄橙褐色	完形	ロクロ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
12	土師質環	11.0	3.6	6.2	ADE	普通	明橙褐色	完形	ロクロ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後ナデか
13	土師質環	12.0	4.4	5.5	ACEF	普通	黄橙褐色	完形	ロクロ成形 体一底(外):施削り
14	土師質環	11.8	3.6	6.2	AEF	普通	黄橙褐色	口60	ロクロ成形 体一底(外):施削り
15	土師質環	11.3	3.4	5.5	AEF	普通	黄橙褐色	完形	ロクロ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
16	土師質環	11.6	3.3	6.2	AEF	普通	明褐色	口70	ロクロ成形 体一底(外):施削り
17	土師質環	11.3	3.5	6.0	AEF	普通	黄橙褐色	完形	ロクロ成形 体一底(外):施削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
18	土師甕環	11.3	3.7	5.4	-	普通	明橙褐色	底100	クロコ成形 体-底(外):施削り
19	土師甕環	11.3	3.5	5.3	AEF	普通	明橙褐色	口85	クロコ成形 体-底(外):施削り
20	土師甕環	11.7	3.4	6.4	ACEF	普通	黄橙褐色	口95	クロコ成形 体下半(外):-底:施削り
21	土師甕環	11.3	3.7	5.9	AEF	普通	黄橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
22	土師甕環	11.7	3.4	6.0	AEF	不良	黄橙褐色	口60	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
23	土師甕環	11.5	3.8	4.9	AEF	普通	黄橙褐色	口90	クロコ成形 体-底(外):施削り
24	土師甕環	12.0	3.5	6.4	AEF	普通	黄橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
25	土師甕環	11.7	3.9	5.7	AEF	普通	明橙褐色	底100	クロコ成形 体-底(外):施削り
26	土師甕環	11.4	3.8	5.1	AEF	普通	明橙褐色	完形	クロコ成形 体-底(外):施削り 底部中央(外):ナデ
27	土師甕環	11.2	3.7	5.5	AEFH	普通	明橙褐色	口90	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後ナデか
28	土師甕環	11.1	3.6	5.7	AEF	普通	明橙褐色	底100	クロコ成形 体-底(外):施削り
29	土師甕環	11.4	3.7	5.6	AEF	普通	暗橙褐色	口100	クロコ成形 体-底(外):施削り
30	土師甕環	11.7	3.8	6.1	AEF	普通	黄橙褐色	口80	クロコ成形 体-底(外):施削り
31	土師甕環	11.2	3.7	5.8	AEF	普通	明橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後周辺指押え
32	土師甕環	11.6	3.6	5.7	AEF	普通	橙褐色	完形	クロコ成形 体部下-底部(外):施削り(中心まで及ぼす)
33	土師甕環	11.8	3.6	5.1	AEF	普通	明褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):指押えとナデ
34	土師甕環	11.0	3.4	5.9	AEF	普通	明橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後 粗いナデ
35	土師甕環	12.0	3.5	6.3	AEF	普通	黄橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 内面スス付着(灯明皿)
36	土師甕環	11.7	3.8	5.6	ACEF	普通	黄橙褐色	底100	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後ナデ
37	土師甕環	11.3	3.8	5.7	AEFH	普通	橙褐色	完形	クロコ成形後 体-底(外):施削り
38	土師甕環	11.5	4.0	5.5	AEF	普通	黄橙褐色	完形	クロコ成形後 体部下半(外):施削り 底(外):ナデ
39	土師甕環	11.3	3.7	5.8	AEFH	普通	黄橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 口(内):タール状のスス付着
40	土師甕環	11.5	3.9	5.3	AEF	普通	黄橙褐色	-	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後ナデ
41	土師甕環	11.2	3.5	5.6	AEF	普通	黄橙褐色	完形	クロコ成形 体(外):施削り 底(外):施削り後ナデ
42	土師甕環	(11.4)	3.1	(5.1)	AEFH	普通	橙褐色	口25	クロコ成形後 体部-底部外面施削り 覆土
43	土師甕環	(11.7)	3.5	5.5	AEF	普通	橙褐色	口15	クロコ成形後 体部-底部外面施削り 覆土
44	土師甕環	(10.5)	2.8	-	AE	普通	白褐色	口25	口:内外面横ナデか 体(外)上半:ナデか 下半:施削り

第79表 第1号溝跡出土遺物観察表(第229~233回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
45	土師器皿	11.2	3.2	5.9	AEII	普通	明茶褐色	完形	クロコ成形 RC
46	土師器皿	10.9	1.8	5.7	ACE	良	明茶褐色	完形	クロコ成形 底:回転系切り離し
47	土師器皿	11.4	3.2	6.0	ADH	不良	橙褐色	底100	口:内外面横ナデか 体(底):内外面とも横ナデ
48	土師甕環	(10.2)	2.6	(5.3)	AD	不良	明茶褐色	口20	クロコ成形 器面風化著しい
49	陶器皿	10.3	3.0	5.1	E	良	赤橙色	底100	クロコ水洗き成形 RC 器形歪む (内):タール状のスス付着
50	土師甕環	(9.9)	3.5	(5.0)	AEF	普通	明褐色	口40	クロコ成形 C 器面風化著しい 覆土
51	土師甕環	10.8	3.0	4.7	AE	普通	明褐色	口55	クロコ成形 C 器面風化
52	土師甕環	(10.6)	3.0	3.2	AE	不良	明褐色	底100	クロコ成形 RC 器面風化
53	土師甕環	(11.1)	3.0	3.6	AEF	不良	明褐色	底100	クロコ成形 C 器面風化
54	土師器皿	10.8	2.8	5.3	AE	不良	橙褐色	口95	クロコ成形 RC 器面風化
55	土師器皿	(11.3)	3.5	(6.1)	AE	不良	明茶褐色	口20	クロコ成形 C 器面風化
56	土師器皿	10.6	2.9	6.0	AEF	不良	明褐色	底60	クロコ成形 RC 器面風化
57	土師甕環	(11.8)	3.2	5.3	AE	普通	明褐色	底90	クロコ成形 C 器面風化
58	土師甕環	(12.8)	3.4	-	AH	普通	明茶褐色	口20	クロコ成形 器面風化
59	土師甕環	(13.2)	4.0	-	AE	普通	明茶褐色	口15	クロコ成形
60	土師甕環	(11.5)	3.0	6.2	ACDEF	不良	橙褐色	底80	クロコ成形 RC
61	土師甕環	11.0	3.8	4.8	ABEH	不良	白灰色	底100	クロコ成形 RC (内):漆付着
62	土師甕環	(12.7)	3.2	(4.8)	AEF	普通	明橙褐色	口15	クロコ成形後 体部-底部外面施削り
63	土師甕環	(11.2)	3.5	(6.4)	AEFH	普通	橙褐色	底35	クロコ成形 C
64	土師甕環	(10.6)	3.8	6.2	ADEF	普通	黄褐色	底95	クロコ成形 RC 施記号あり「メ」
65	土師甕環	(13.1)	4.0	6.7	E	普通	明褐色	口35	クロコ成形 器面風化著しい
66	土師甕環	(12.8)	3.9	5.5	ACEF	普通	灰褐色	完形	クロコ成形 RC
67	土師甕環	(14.3)	3.0	-	AE	普通	明褐色	口25	クロコ成形 器面風化著しい
68	須恵器環	-	2.6	7.2	CDE	普通	青灰色	底60	クロコ成形 RB

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
69	須恵器環	(11.9)	3.6	6.2	BH	普通	灰青色	底90	クロロ成形 RC 内面:自然釉付着
70	須恵器環	13.7	3.3	6.6	AFH	不良	黒黄/暗茶	底145	クロロ成形 RC
71	須恵器環	(13.7)	4.7	4.6	ADE	不良	橙褐色	底100	クロロ成形 RC 器形大きく歪む
72	須恵高台環	13.2	5.0	6.6	DEF	不良	白灰色	台100	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付 内面に線刻有
73	須恵高台環	—	5.1	6.9	ACEF	不良	緑灰色	台100	クロロ成形 RC 後 高台貼付 内裏処理
74	須恵高台環	11.7	5.0	(5.9)	ACDEF	不良	暗赤褐色	底155	クロロ成形 C 付付高台 器面風化
75	土師高台環	(12.0)	4.4	5.3	AEF	不良	橙褐色	底55	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 付付高台
76	土師高台環	12.3	5.2	7.0	ABRF	普通	明茶褐色	95	クロロ成形
77	土師高台環	(11.9)	3.9	—	ACEF	不良	白棕色	底115	クロロ成形 底:糸切り離し後 貼付高台か
78	土師高台環	—	4.3	6.4	ADE	普通	白棕色	台100	クロロ成形 底:回転糸切り離し(R)後 高台貼付か
79	土師高台環	—	3.1	6.4	ACDE	不良	橙褐色	台100	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付か 器面風化著
80	土師高台環	—	4.2	9.0	ACE	不良	橙褐色	台100	クロロ成形 底:糸切り離し後 付付高台か 器面風化著しい
81	土師高台環	—	2.7	7.7	ACD	普通	明茶褐色	底90	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付
82	灰釉高台碗	—	3.7	(8.6)	DEF	良	白灰色	底35	クロロ成形 (外):回転器ナテか 底:回転糸切り離後 高台貼付
83	須恵土師環	—	3.2	7.6	ACE	良	黒灰色	底80	底:回転糸切り離し(R)後 高台貼付 内面:単苔「吉」
84	土師器鉢	(12.0)	4.4	—	AEH	不良	明褐色	底25	クロロ成形(水洗きか) 器面風化著しい
85	土師器鉢	(17.8)	6.5	7.9	ACE	不良	茶褐色	底100	口:内外面横ナテ 体一底:内外面ナテか 器面風化著しい
86	土師器小鉢	(7.3)	3.5	4.0	AE	普通	黒色	底80	口一底(外):鏡磨き 底(外):糸切り離し 内外面黒色処理
87	土師器高皿	10.3	2.8	5.7	ACE	不良	橙灰色	台100	クロロ成形か 底:糸切り離し後 貼付高台 器面風化著しい
88	土師高台環	(12.0)	4.6	6.5	AE	不良	明褐色/黒	底95	クロロ成形 C 貼付高台 内面磨き 内裏処理 器面風化
89	土師器碗	(13.4)	3.7	—	AEFH	不良	橙褐色	底15	クロロ成形 (内):鏡磨き 内裏処理 器面風化
90	土師高台碗	(13.6)	5.6	7.5	AEH	不良	明褐色/黒	底100	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付 器面風化著
91	土師器碗	(13.9)	6.4	—	ACEH	不良	明橙褐色	底30	クロロ成形 (内):鏡磨き 内裏処理 器面風化
92	土師器鉢	(16.3)	4.0	—	ACDEF	普通	黒褐色	底20	口:内外面横ナテ 胴(外):鏡磨り 外面スス付着
93	土師器鉢	(19.4)	5.9	—	ACEF	普通	灰橙褐色	底45	口:内外面横ナテ 胴(外):鏡磨り 外面スス付着 器面風化
94	土師器鉢	(17.9)	5.0	—	ACEH	普通	明褐色/黒	底30	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨り (内):鏡ナテ
95	土師器鉢	(21.4)	4.3	—	AEH	普通	明赤褐色	底15	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨りか 外面赤色化
96	土師器鉢	(20.6)	7.4	—	ACEH	普通	橙褐色	底35	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨りか (内):鏡ナテ
97	土師器鉢	(24.2)	6.4	—	AE	普通	明橙褐色	底15	口:内外面横ナテ 胴(外):鏡磨りか (内):鏡ナテか
98	土師器鉢	(22.5)	4.5	—	AEH	不良	橙褐色	底15	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨りか (内):鏡ナテ
99	土師器鉢	(22.8)	6.0	—	ACE	普通	明褐色	底30	器面風化著 口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨りか
100	土師器鉢	(21.0)	5.6	—	ACDEF	普通	橙褐色	底15	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨りか
101	須恵器鉢	(22.3)	15.0	—	ABEH	普通	暗橙褐色	—	口:内外面横ナテ 体(外):鏡磨り 招納痕有 外面スス付着
102	須恵器鉢	(10.3)	3.8	—	BEGH	普通	白灰色	底45	クロロ成形 外面に自然釉付着
103	須恵長頸壺	(13.6)	12.7	—	BEGH	良	暗灰色	底55	クロロ水挽き成形 口一底:内外面と胴(外):自然釉付着
104	土師器割釜	(17.0)	5.9	—	ABEH	普通	灰褐色	底15	内外面とも横位のナテ 器面風化著しい
105	土師器割釜	(17.9)	4.5	—	ACE	普通	暗橙褐色	底15	内外面とも横位のナテか 器面風化
106	土師器割釜	(22.9)	6.8	—	ACEH	普通	明橙褐色	底15	クロロ成形か 底:糸切り離し後 貼付高台 器面風化著しい
107	土師器羽釜	(24.6)	6.0	—	AEH	普通	黒褐色	底15	内外面スス付着 外:横位のナテ 内:鏡ナテ後横位のナテ
108	土師器割釜	(27.7)	8.4	—	ACEH	普通	明褐色	底15	クロロ成形か 器面風化 覆土
109	土師器羽釜	(22.7)	10.0	—	ABC	普通	暗橙褐色	底20	外(上):横位ナテ中(以下):鏡磨りか 内:横位ナテ 割貼付
110	土師器割釜	26.1	24.4	—	ACE	普通	灰白色	底60	クロロ成形 胴(下):鏡磨り (内):鏡ナテ
111	緑釉碗	—	2.9	—	E	普通	濃緑色	—	クロロ成形
112	緑釉高台皿	—	2.5	(7.2)	E	普通	濃緑色	台40	クロロ成形 底:回転糸切り離後 高台貼付 底部に捺痕有
113	緑釉高台環	—	1.6	5.3	—	普通	明緑色	底75	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付か
114	緑釉高台環	—	—	6.7	—	—	—	—	回転糸切り離し後 周辺鏡磨り 不鮮明
115	緑釉高台碗	—	1.8	(7.4)	E	良	濃緑色	台40	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付
116	緑釉高台環	—	1.4	6.5	E	良	濃緑色	台100	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 周辺鏡磨り 高台貼付
117	緑釉高台碗	—	2.7	(5.3)	CE	普通	黄緑色	底50	クロロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付
118	灰釉環	(13.3)	2.3	—	E	良	灰褐色	底20	クロロ水挽き成形
119	灰釉環	(13.9)	2.9	—	DE	良	灰黄色	底20	クロロ水挽き成形
120	灰釉環	(14.5)	2.8	—	DE	良	白灰色	底25	クロロ水挽き成形
121	灰釉高台環	(13.2)	4.5	6.3	DE	良	灰白/灰緑	底80	クロロ成形 底:糸切り離し後全面鏡磨り 貼付高台
122	緑釉高台環	—	3.8	6.2	DE	良	白灰色	底100	クロロ水挽き成形 底:回転糸切り離し(R)後 高台貼付
123	緑釉高台碗	—	5.0	(8.7)	DE	良	灰白色	底20	クロロ水挽き成形 底:回転糸切り離後 高台貼付 台:スス付着

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
124	緑釉高台碗	—	1.4	6.8	E	良	灰白色	台55	口ロ成形 底:回転糸切り離し後 回転蓋取り
125	緑釉高台碗	(17.4)	6.5	8.4	DEH	普通	緑灰色	台35	口ロ成形 底:回転糸切り離し後 周辺部ナデ 高台貼付
126	緑釉高台碗	—	1.3	(7.6)	DE	普通	白灰色	台25	口ロ成形 底:回転糸切り離し(R)後 高台貼付
127	緑釉高台碗	—	2.0	(7.2)	DE	普通	白灰色	台45	口ロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付
128	緑釉高台碗	—	2.3	(8.5)	E	良	白灰色	台25	口ロ成形(外面部ナデ) 底:回転糸切り離し後 高台貼付
129	緑釉高台碗	—	1.7	(6.5)	E	良	白灰色	台35	口ロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付
130	緑釉皿	—	1.8	(8.7)	EIH	普通	白灰色	台25	口ロ水挽き成形 底:回転糸切り離し(R)後 高台貼付
131	緑釉高台皿	(13.6)	2.3	7.2	E	普通	白灰色	台55	口ロ成形 底:回転蓋取り(R)後 高台貼付
132	緑釉高台皿	11.9	2.1	6.7	DE	良	橙灰色	台75	口ロ水挽き成形 底:回転蓋取り後 高台貼付 釉薬:漬け掛け
133	緑釉高台皿	(12.1)	2.2	(5.8)	E	良	橙灰色	台30	口ロ水挽き成形 底:糸切り離し後 高台貼付 釉薬:漬け掛け
134	八稜鏡								

134: 八稜鏡(銅製)。この銅鏡は、106-89-dグリッドにおいて検出された。SD1西側のテラス部分の底面より10cm程浮いた位置から、鏡背面を上に向け、溝跡底面に平行するかたちで出土した。

推定直径7.2cm、内区径5.2cm、縁厚1mm、紐厚3mm、現存重量18.9gを測る。薄くて軽い凹面鏡で、表面には研磨の痕跡がみられる。外区の3分の2が欠損している。縁形は蒲葺式細縁、界区は単園細縁、紐形は龍頭円錐形糸紐である。紐には孔がなく、鏡縁部に穿孔

#### 第19号溝跡 (第213~217・239図)

103-95・96グリッドから108-107グリッドにかけて検出された。第16地点におけるSD99はSD19の続きであろうか。東端部については、埋没谷を南東に縦走するが、調査区南東端の手前で溝跡壁面の立ち上がりが消滅した。

検出し得た範囲内で長さは116.4m、幅は1.5~1.8m・深さは0.5~0.6mを測る。N-105 -Eの方で東流する。

底面はほぼ平坦で、壁面は溝跡が深く残っている部分(断面E-E'、R-R'=第227図)では比較的急勾配で立ち上がり、断面は逆台形を呈する。

断面M-M'(第214図)は、SD19を直する断面ではなく斜めに切っているために、図上では実際のSD19よりも幅広いものとなっている。1層~3層は覆土的にも、底面のレベル的にもSD19といえよ

がされている。文様は外区が飛雲文、内区は一對の瑞花文であろうか。

135: 鉄製の刀子と思われる。錆化著しく原形をとてもめない。欠損部分も非常に多く、切先と基部の一部が遺存しているのみであった。鍛造。

136: 土鏝。CH、一方の端部を欠く。灰褐色。焼成: 普。現存長3.4cm・最大径0.7cm、現存重量1.8g。

137: 土鏝。ACDH、完形、明褐色。焼成: 普。長さ6.4cm・最大径3.3cm・孔径1.0cm、重さ54.2g。

う。しかし4層以下については、砂質よりもシルト質が強くなり覆土の様相も異なっている。

4層以下は、SD19に切られている別個の遺構である可能性が高いと思われる。1層中には浅間B軽石が混入しているのが観察できた。

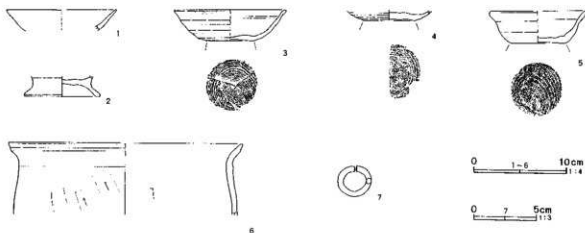
既に述べたように、調査期間と調査時における安全性の問題から、幅や深さがある程度の規模をもつ溝跡については、小型バックホーによる掘掘りを行わざるを得なかった。そのため、数多くの溝跡が重複関係にあるが、その大部分については残念ながら新旧関係をとらえることができなかった。

SD19についても同様で、重複するいずれの溝跡とも新旧関係は不明である。

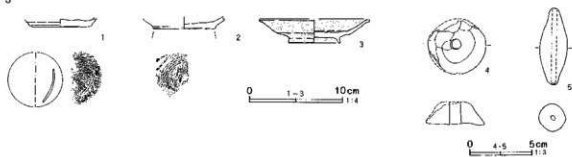
遺物の出土は比較的多く、凶化し得た遺物は計28点であった。

第234図 第2・3・4号溝跡出土遺物

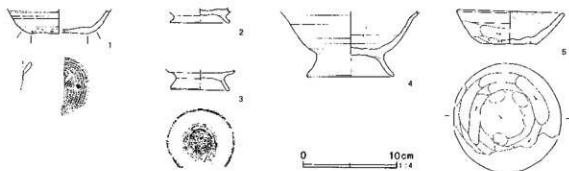
SD 2



SD 3



SD 4



第80表 第2号溝跡出土遺物観察表(第234図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(11.8)	2.3	—	ACE	—	—	口15	(外):横ナテ
2	土師高台環	—	2.2	8.2	ACE	不良	明茶褐色	台50	口クロ成彩 C跡付高台
3	須恵器環	12.0	3.3	5.2	BEH	普通	暗灰青色	底100	口クロ成彩 RC
4	須恵器環	—	1.0	(5.6)	BDE	普通	白灰色	底30	口クロ成彩 RC
5	土師器環	(10.4)	3.6	5.8	ADEF	普通	白橙褐色	底100	口クロ成彩 RC
6	土師器壺	(25.1)	7.6	—	ACE	普通	暗茶褐色	口730	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):篋削りか(内):莚ナテ

7は耳環である。鉄製であるが、木米は鉄地金銅貼りであり、現況では地金の部分のみが遺存している

思われる。地金部分は完形といえる。遺存状況は比較的良好。直径2.5cm・芯径0.5cm、現存重量11.4g。

第81表 第3号溝跡出土遺物観察表(第234図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	—	1.0	6.0	AEH	不良	黄橙褐色	底50	ロクロ成形 C 底:施記号	
2	須恵器環	—	1.4	6.4	BEH	普通	暗青灰色	底25	ロクロ成形 RC	
3	緑釉皿	(11.9)	5.6	2.5	—	普通	濃緑色	底100	ロクロ水挽き成形 釉の剥離多	

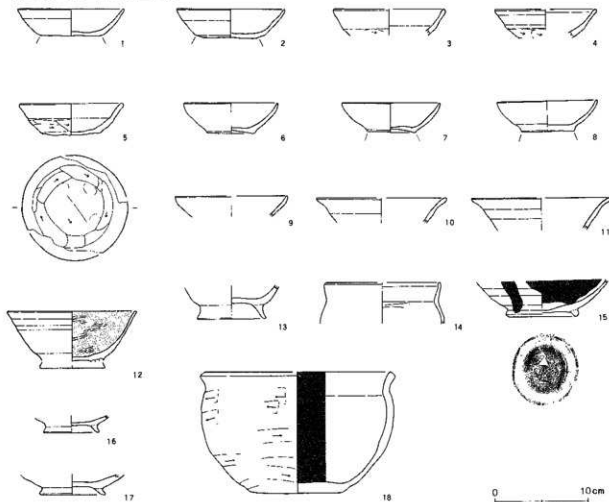
4は紡錘車である(土製)。ACEH、残存率65パーセント。黒褐色、下面は黒色。焼成:普通。造りは粗く、

形状は歪んでおり、表面は荒れている。上径(2.2)cm・下径4.7cm・厚さ1.8cm・孔径1.0cm、現存重量28.3g。

第82表 第4号溝跡出土遺物観察表(第234図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	—	2.6	6.0	BCE	普通	白灰色	底50	ロクロ成形 底:糸切り離し後環部(外)端部を手持鋸削り	
2	土師高台碗	—	1.6	6.3	ACDE	普通	明橙褐色	台100	ロクロ成形 C後貼付高台 内黒処理	
3	土師高台環	—	2.2	6.3	ACE	普通	明茶褐色	底85	ロクロ成形 底:回転糸切り離し後高台貼付	
4	土師高台碗	—	7.0	9.2	AE	不良	明褐色	台100	ロクロ成形 底:回転糸切り離し後高台貼付	
5	土師器環	11.5	3.5	6.0	AEFII	普通	黄橙褐色	底100	ロクロ成形 内面にケール状のヌス付着 灯明皿?	

第235図 第5号溝跡出土遺物





第83表 第5号溝跡出土遺物観察表(第235図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師甕環	11.3	2.9	6.3	AE	不良	黄褐色	L155	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
2	土師甕	(11.6)	3.1	6.0	AE	普通	暗黄褐色	底70	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化
3	土師甕環	(12.0)	2.8	—	AEF	普通	暗褐色	L145	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
4	土師甕環	(11.0)	3.1	—	AEF	普通	明褐色	口25	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
5	土師甕環	11.2	3.4	6.2	AEF	普通	明褐色	底95	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
6	土師甕環	10.1	3.3	5.0	ADE	不良	黄褐色	底90	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
7	土師甕環	10.5	3.1	5.1	ADE	不良	明褐色	口55	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
8	土師甕環	10.7	3.2	5.5	AE	不良	明褐色	底100	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
9	土師甕環	(12.0)	2.2	—	ADE	不良	明褐色	口30	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
10	土師甕環	(13.9)	2.7	—	AEF	不良	明褐色	L115	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
11	土師甕環	(14.8)	3.4	—	ADEF	不良	明褐色	口25	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
12	土師高台環	13.8	5.3	—	ABE	不良	明褐色	L170	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
13	土師高台環	—	3.6	7.6	ACD	普通	白褐色	台45	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
14	土師甕	(12.3)	4.4	—	AEF	普通	茶褐色	L120	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
15	灰唾壺	—	3.7	7.7	DE	普通	灰白色	台95	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
16	土師高台環	—	1.8	5.9	ACE	不良	黒灰色	底90	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
17	土師高台環	—	2.2	6.9	ADEF	不良	明褐色	底95	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
18	土師甕鉢	(19.8)	12.9	8.8	ADE	不良	黄褐色	底95	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい

第84表 第7号溝跡出土遺物観察表(第236図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器壺	(4.6)	2.7	(12.6)	DEH	不良	白灰色	底25	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
2	土師甕環	(11.1)	2.2	—	AEFH	普通	黄褐色	口15	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
3	須恵器環	—	2.7	(6.0)	—	普通	灰褐色	—	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
4	須恵器環	—	1.5	5.6	AEH	普通	白灰色	底65	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
5	須恵器環	—	0.7	(5.8)	CEH	普通	灰白色	底45	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
6	須恵器環	—	2.0	(7.6)	DF	普通	灰白色	底40	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
7	須恵高台環	—	2.9	(7.8)	BE	普通	黄褐色	底25	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
8	須恵器環	—	2.6	6.7	ABCEH	良	青灰色	台95	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
9	土師高台環	12.8	4.8	6.3	CDE	普通	黄褐色	口95	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
10	土師高台環	12.3	4.9	6.6	AEH	不良	灰褐色	完形	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
11	土師高台環	(11.0)	3.2	6.0	AEFH	普通	白褐色	底100	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
12	土師高台環	(14.5)	4.6	—	ADEF	普通	明褐色	口30	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
13	土師高台環	(13.5)	5.6	6.8	ACE	不良	黄褐色	台100	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
14	土師高台環	14.7	5.5	—	AEFH	普通	白褐色	口40	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
15	土師甕環	(12.2)	3.0	—	ADEF	普通	白褐色	口20	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
16	土師高台環	—	3.1	6.8	ADEF	普通	白褐色	台100	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
17	土師高台環	—	2.3	7.6	ADEF	普通	白褐色	台8	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
18	土師高台環	—	3.6	9.0	ADEF	不良	黄褐色	底35	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
19	土師甕鉢	(10.5)	3.3	5.4	—	普通	黄褐色	底100	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
20	土師甕環	11.8	3.7	5.8	ACDE	普通	白褐色	口50	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
21	須恵長頸甕	8.5	8.2	—	DEH	普通	暗灰色	口15	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
22	土師甕鉢	(18.1)	3.9	—	ADEF	普通	黄褐色	口55	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
23	土師甕鉢	(19.9)	4.1	—	ACEF	普通	明褐色	口10	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい

24: 砥石。(凝灰岩製)。両端部を欠損する。4面とも使用しており、細かな条線がみられる。現存長8.0

cm・幅4.0cm・厚さ3.9cm、現存重量149.0g。

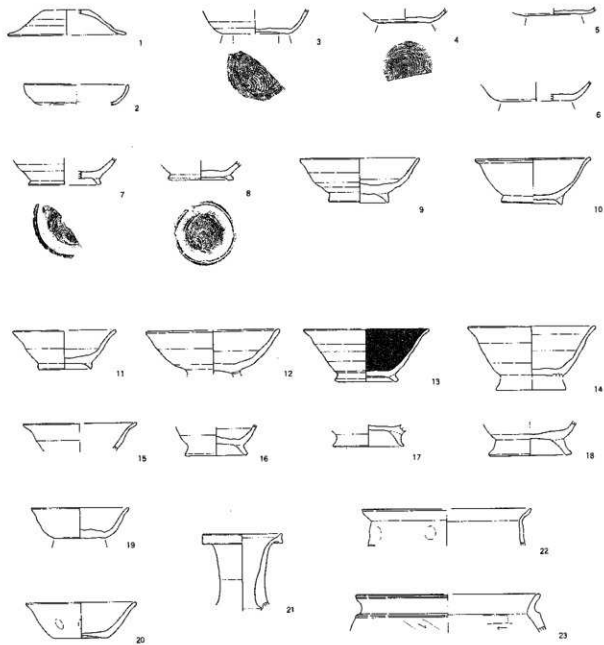
25: 土師。ACF、黒褐色。焼成:普、現存重量3.7g。

第85表 第8号溝跡出土遺物観察表(第236図)

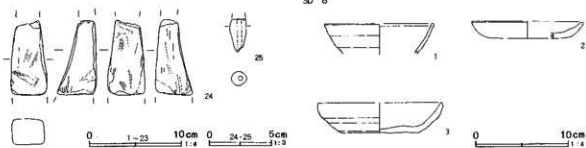
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	(11.8)	3.2	—	ADE	不良	白灰色	L115	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
2	土師甕鉢	(11.9)	1.7	(7.8)	ADE	普通	明褐色	底25	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい
3	土師甕環	(13.3)	3.1	(8.0)	E	普通	明褐色	底30	口:内外面とも横ナテ	底:器面風化著しい

第236図 第7・8号溝跡出土遺物

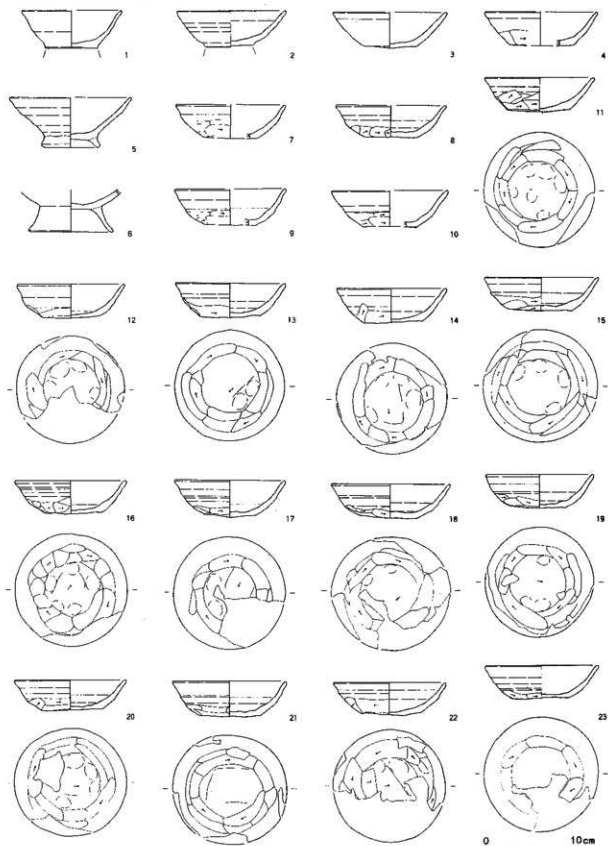
SD 7



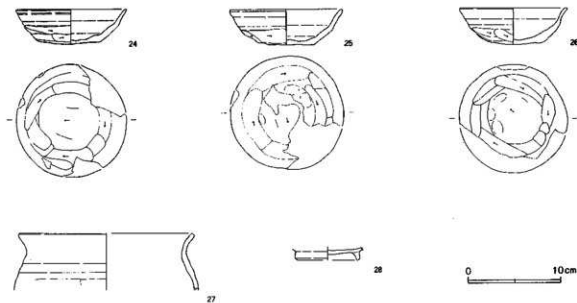
SD 8



第237图 第17号溝跡出土遺物(1)



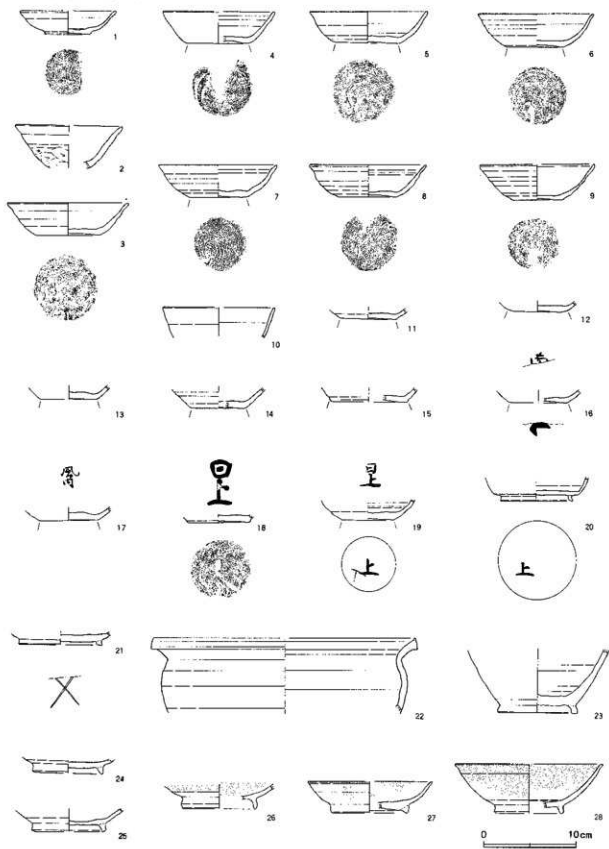
第238図 第17号溝跡出土遺物(2)



第86表 第17号溝跡出土遺物観察表(第237・238図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(10.7)	4.0	5.8	ACDE	不良	明茶褐色	底55	ロクロ成形 C
2	土師器環	11.7	3.8	5.0	ADE	不良	明褐色	底100	ロクロ成形 RC
3	須恵器環	(12.2)	3.9	5.6	AEF	不良	白棕色	底60	ロクロ成形 底: 甌削りか
4	土師器環	(12.0)	3.6	6.6	AEFH	普通	黄橙褐色	底115	ロクロ成形 体-底(外): 甌削り
5	土師高台環	(13.1)	5.3	6.2	ADE	不良	黄橙褐色	底70	ロクロ成形 底: 屈折糸切り跡し後高台貼付
6	土師高台碗	—	4.6	9.0	AE	不良	明褐色	台50	ロクロ成形 底: 糸切り跡しか 貼付高台 器面風化
7	土師器環	(11.7)	3.6	(5.6)	AEF	普通	黄橙褐色	口20	ロクロ成形 体-底(外): 甌削り
8	土師器環	(11.8)	3.5	(5.5)	ACEF	普通	黄橙褐色	底40	ロクロ成形 体-底(外): 甌削りか
9	土師器環	(12.0)	3.9	(5.4)	AEFH	普通	暗橙褐色	底55	ロクロ成形 体-底(外): 甌削り
10	土師器環	(12.5)	3.9	(5.8)	AEF	普通	黄橙褐色	底25	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後指押えか
11	土師器環	11.8	3.7	6.6	ACEF	普通	明橙褐色	底100	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 指押えとナテか
12	土師器環	11.6	3.6	5.9	AEF	普通	黄橙褐色	底65	ロクロ成形 体下(外): 甌削り 底(外): 甌削り後指押えか
13	土師器環	11.8	3.7	6.4	AEH	普通	明橙褐色	—	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後指押え
14	土師器環	11.8	3.7	6.2	AEF	普通	黄橙褐色	底95	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
15	土師器環	12.2	4.6	5.7	ABEF	普通	黄橙褐色	底95	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後ナテか
16	土師器環	11.9	3.6	6.1	AEF	普通	明橙褐色	口70	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
17	土師器環	11.9	4.0	5.6	AEFH	普通	明褐色	底60	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
18	土師器環	12.8	3.6	6.1	AEF	普通	明橙褐色	口45	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
19	土師器環	(11.6)	3.6	5.8	AEFH	普通	黄橙褐色	底95	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
20	土師器環	12.0	3.3	6.5	AEFH	普通	明橙褐色	口80	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
21	土師器環	12.3	3.8	6.4	ACEF	普通	黄橙褐色	底100	ロクロ成形 体-底(外): 甌削り
22	土師器環	12.0	3.5	6.1	AEF	普通	黄橙褐色	口35	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
23	土師器環	12.1	3.6	6.1	AEFH	普通	黄褐色	底75	ロクロ成形 器面風化著しい 体下-底(外): 甌削り
24	土師器環	11.9	4.7	6.6	AEF	普通	明褐色	口70	ロクロ成形 体-底(外): 甌削り
25	土師器環	12.1	3.8	6.0	AEF	不良	灰褐色	口70	ロクロ成形 体(外): 甌削り 底(外): 甌削り後周辺指押え
26	土師器環	11.6	3.9	5.9	AEF	普通	明橙褐色	口50	ロクロ成形 体-底(外): 甌削り
27	土師器袋	(18.8)	6.0	—	ACEF	不良	暗茶褐色	口15	器面風化 口: 内外面ナテか 胴上(外): ナテか
28	灰釉高台環	—	1.4	(7.0)	DE	普通	白灰色	台40	ロクロ成形 C

第239图 第19号清淤出土遗物



第87表 第19号溝跡出土遺物観察表(第239図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	上脚貫瓦	(10.2)	2.5	5.0	ACE	普通	黄橙褐色	底80	ロクロナデ 底:回転糸切り難し
2	土師貫瓦	(11.4)	4.5	—	ACEF	普通	黄橙褐色	口30	口:内外面とも横ナデ 内外面とも少量のスス付着
3	上脚貫瓦	12.8	3.5	6.6	ACDE	不良	白灰色	底100	ロクロ成形 RC
4	須恵器環	(12.0)	3.4	6.4	AEH	普通	青灰色	底65	ロクロ成形 RC
5	須恵器環	12.6	3.4	6.7	ACE	普通	灰白色	底100	ロクロ成形 RC
6	須恵器環	12.2	3.6	5.8	EH	普通	黒灰色	底95	ロクロ成形 RC
7	須恵器環	(12.6)	3.4	6.0	EII	普通	青灰色	底100	ロクロ成形 RC
8	須恵器環	12.5	3.4	6.1	EFH	普通	灰白色	底90	ロクロ成形 RC
9	須恵器環	(12.3)	3.8	5.9	EH	普通	暗灰色	底85	ロクロ成形 RC 体(外):磨痕判読不可
10	須恵器環	(12.1)	3.2	—	DEH	普通	黒灰色	口30	ロクロ成形
11	須恵器環	—	1.2	5.9	EH	不良	暗灰色	—	ロクロ成形 RC
12	須恵器環	—	1.2	6.5	AEEII	不良	灰橙褐色	底100	ロクロ成形 RC
13	須恵器環	—	1.5	(6.0)	AEH	普通	暗茶褐色	底45	ロクロ成形 RC
14	須恵器環	—	2.2	5.8	CDEII	不良	灰白色	—	ロクロ成形 RC
15	須恵器環	—	1.5	(4.3)	EH	普通	青灰色	底25	ロクロ成形 RC
16	須恵器環	—	1.4	(6.2)	DE	不良	灰白色	底35	ロクロ成形 RC 底:内外面に磨痕 内面は「南」か
17	須恵器環	—	1.4	6.1	AEH	普通	暗赤褐色	底90	ロクロ成形 RC 底(内):磨痕「風筒」か
18	須恵器環	—	0.8	6.7	EH	普通	白灰色	底95	ロクロ成形 RC 底(外):磨痕「口上」か
19	須恵器環	—	2.3	5.6	BEII	普通	赭灰色	底100	ロクロ成形 RC 底(内):磨痕「口上」(外):磨痕「上」
20	須恵器高台	—	2.5	7.7	—	良	青灰色	底100	ロクロ成形 RBa 後高台貼付 磨痕(外):「上」
21	須恵器碗	—	1.4	(8.9)	ADEII	普通	青灰色	底45	ロクロ成形 底:回転糸切り(R)後 高台貼付
22	須恵器鉢	(28.0)	8.0	—	CEH	不良	灰白色	—	ロクロ成形
23	須恵器甕	—	6.8	8.5	BEH	普通	灰白色	口100	ロクロ成形 回転糸切りか 貼付高台
24	灰釉高台環	—	1.6	(7.1)	ACE	普通	灰白色	底35	ロクロ水挽き成形 底:回転糸切り難し(R)後 高台貼付
25	灰釉高台碗	—	2.5	(8.0)	DE	普通	白灰色	口40	ロクロ水挽き成形 底:露削り後 高台貼付
26	灰釉高台環	—	2.7	(7.7)	DE	普通	白灰色	底35	ロクロ水挽き成形 底:回転糸切り難し(R)後 高台貼付
27	灰釉皿	(13.4)	3.4	(8.0)	BDE	普通	灰白色	口40	ロクロ成形 底:回転糸切り難し(R)後 高台貼付
28	灰釉環	(15.8)	5.3	(6.8)	DE	普通	薄緑灰色	底25	ロクロ水挽き成形 貼付高台

## 第22号溝跡(第213・240図)

104・105-97グリッドにかけて検出された。SD18と重複するか新旧関係は不明である。やや西に振れながら南に流れ、谷地形に届いて終わると思われるが、北側については溝跡壁面の立ち上がりが見失われており、どこから始まっているかは不明である。

検出し得た範囲内で長さは4.5m、幅0.7m・深さ0.2mを測る。N-162 -Wの方で南流する。

溝跡底面はほぼ平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかであり、断面形状は逆台形を呈する。

遺物の出土は少なく、図化し得た遺物は計3点であった。

## 第32号溝跡(第217・218・240図)

103・104-108グリッドにおいて検出された。第14地点の北東端に相当する。第16地点のSD93が、本溝跡と同一遺構との可能性も考えたが、むしろSD33がより可能性が高いと推定した。

第16地点では、本溝跡の痕跡が失われているのであろうか。東側については調査範囲外に続き、谷地形を縦断するように東流すると思われる。

検出し得た範囲内で長さは8.6m、幅1.45m・深さは0.95-1.45mを測る。N-118 -Eの方で東流する。

溝跡底面は平坦面または凹面状であり、断面形状は逆台形もしくはU字状を呈し、後者では壁面の立ち上がりかきわめて急勾配である。

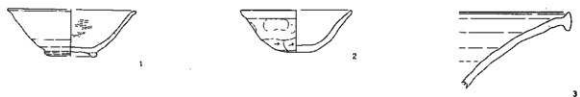
調査範囲の小規模さに較べて遺物の出土は比較的多く、底面から30cm程のレベルで、投棄されたと思われる状況で検出された。その中で、図化し得た遺物は計7点であった。

## 第34号溝跡(第215・217・218・240図)

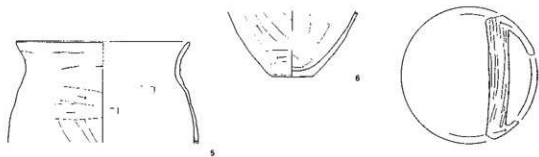
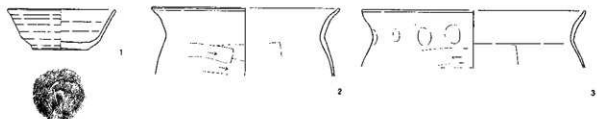
第14地点では103-105グリッドから105-109グリッドにかけて検出された。第16地点のSD110は本溝跡と同一遺構であると思われる。

第240图 第22・32・34・35号溝跡出土遺物

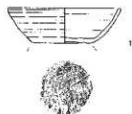
SD 22



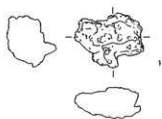
SD 32



SD 34



SD 35



0 50 22-32-34 10cm

0 5cm

第88表 第22号溝跡出土遺物観察表(第240図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師高穴坏	(13.8)	5.0	台5.6	AEFII	不良	暗褐/黒色	白45	ロクロ成形	器面風化著 C 後高台貼付か
2	土師器坏	12.0	4.5	4.3	AEFH	不良	暗橙褐色	底95	器面風化	口:内外面横ナテ 柄(外):底ナテ
3	須恵大甕	—	8.1	—	—	良	黒灰色	—	ロクロ成形	—

第89表 第32号溝跡出土遺物観察表(第240図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器坏	11.6	4.3	5.9	BDE	良	青灰色	底100	ロクロ成形 RC	器形並む
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3	土師器甕	(24.0)	6.1	—	ADEF	普通	明茶褐色	口15	器面風化	口:内外面横ナテ 柄(外):底割り(内):底ナテ
4	土師器甕	21.0	12.2	—	ACEF	普通	明茶褐色	口80	器面風化著	口:内外面横ナテ 柄(外):底割り(内):底ナテ
5	土師器甕	18.6	10.8	—	AEFH	普通	明茶褐色	口95	器面風化著	口:内外面横ナテ 柄(外):底割り(内):底ナテ
6	土師器甕	—	7.0	4.4	ACEF	普通	明茶褐色	底100	—	柄(外):底割り(内):底ナテ
7	土師器甕	—	12.2	(14.6)	E	普通	白灰色	底15	柄・肩部:内外面ナテ	底:内外面底調整

第90表 第34号溝跡出土遺物観察表(第240図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器坏	12.1	3.8	6.0	DE	普通	白灰色	底100	ロクロ成形 RC	—

まず第14地点内でのSD34では、長さは38.0m・幅は1.2~1.3m・深さは0.9~1.1mを測る。N-118°-Wの方位で東流する。ほぼ直線状であるが南北108グリッド線付近で南に屈曲する。

第16地点 S D 110は、96・97-94グリッドから102-102グリッドにかけて検出されている。検出されている範囲内での長さは84.2m・幅は0.8~1.2m・深さは1.3~1.6mを測る。南北98グリッド線付近でやや屈曲するが、ほぼ直線状を呈する。溝跡はN-120°-Wの方位で東流する。

溝跡底面は幅30cm程の平坦面で、壁面はやや緩やかではあるものの、直線的に立ち上がる。

第14・16地点合わせた長さは、両地点の中間部分を含めて約150mで、今回の調査で検出された溝跡の中でも、最も長い溝跡の1つである。SD34は部分的にやや蛇行するものの、全体的にはほぼ直線状であるといえよう。

断面A-A' (第218図)・断面F-F' (第405図)によると、基本土層VI層を掘り込み、V層に覆われているのがわかる。

遺物の出土はきわめて少なく、図4化し得た遺物は第14地点のSD34では1点のみ、第16地点SD110では

3点であった。

#### 第35号溝跡 (第215・216・240・408・409・417図)

SD35も、第16地点から第14地点に亘っている。第16地点では、96-107グリッドから102-105グリッドにかけて検出され、第14地点では103-104グリッドから107-103グリッドにかけて検出された。

また、第13地点のSD3も本溝跡と同一遺構であると思われる。第13地点の北側の第10地点内は通らず、東側にそれいていると考えられる。南側は谷地形に合流して、溝の立ち上がりが消滅する。

第13地点も含めて、検出された長さは117.8m・幅は2.3~3.05m・深さは0.95~1.7mを測る。

溝跡底面は幅30~40cm程の平坦面で、壁面は直線状に開き、プランは非常に明瞭である。N-158°-Wの方位で南流する。

出土遺物はきわめて少なく、図4化し得た遺物は第14地点・第16地点とも各1点の、計2点であった。

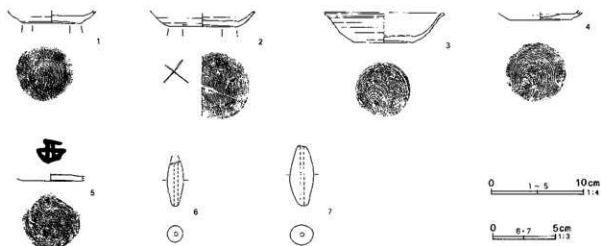
SD35出土の遺物は鉄滓と思われる。鐵滓か。茶褐色~暗茶褐色。

全体的に凹面が多くみられるが、発泡は少ないといえよう。法量は5.5×4.3×3.0cm、重さ37.4gを測る。

#### 第54号溝跡 (第215・216・241図)



第241図 第54号溝跡出土遺物



107-105グリッドにおいて検出された。土壌とすべきであるかも知れないが、北西から南東へ走る溝跡の1つが、谷地形に合流することによって立ち上がりが見えなくなった状態と判断して溝跡として扱った。

検出し得た範囲内の長さは4.2m・幅は1.2m・深

さは0.25mを測る。N-133 一の方で南流する。

投げ込みと思われる獣骨は2箇所で見つかり出した。

図化した遺物は計7点であった。

第91表 第54号溝跡出土遺物観察表(第241図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	—	1.4	6.2	CEH	普通	青灰色	底100	クワロ成形	RbB
2	須恵器環	—	1.7	7.1	DEH	普通	白灰色	底60	クワロ成形	RbB 底に宛記号
3	須恵器環	(12.8)	3.2	6.1	ABE	不良	暗灰色	底100	クワロ成形	C
4	須恵器環	—	1.0	6.7	BDE	普通	白灰色	底100	クワロ成形	RC
5	須恵器環	—	0.8	5.9	ACE	普通	白灰色	底85	クワロ成形	RC 底(内):黒痕「西」

6は土鉢である。一方の端部を欠損する。橙褐色を基調として黒斑がみられる。胎土はACHを混入する。残存率は85パーセントである。

焼成は普通。表面は荒れており、ザラザラしている。現存長は3.6cm・最大径は1.3cm・孔径0.3cm、現存重量は6.9gを測る。断面形は円形を呈する。SD54南土器群からの出土。

7は土鉢。一方の端部を僅かに欠損している。明茶褐色を基調として黒斑がみられる。胎土はACHを混入する。残存率は95パーセントである。

焼成はやや不良。表面は荒れており、ザラザラしている。全長は4.8cm・最大径は1.9cm・孔径0.3cm、現存重量は13.5gを測る。断面形は楕円形を呈する。

## (10) グリッド出土遺物・表面採集遺物

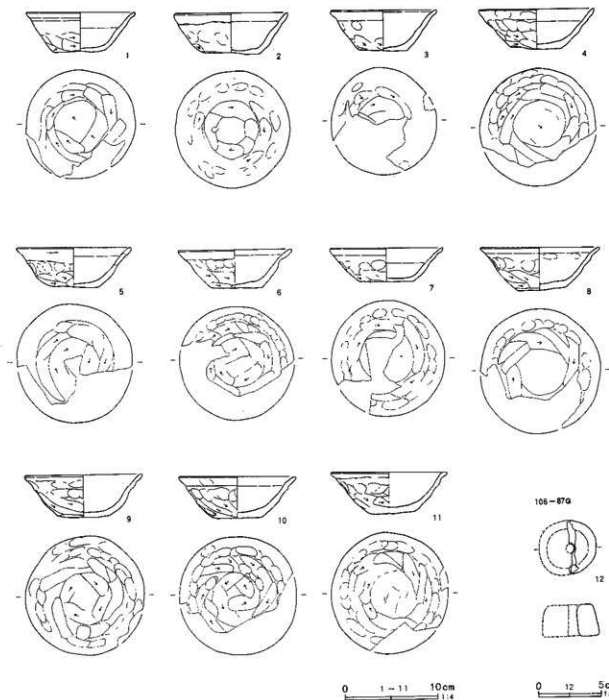
今回の発掘調査において、表土掘削以前・掘削中、さらに遺構確認作業中に数多くの遺物が検出された。第14地点でも数多くの遺物が確認された。表土掘削

中に少なからぬ遺物が出土したが、この時点では遺構確認以前であるため、その大部分が明確な遺構を特定できなかった。

遺構確認作業中に検出された遺物のうち、基準点測

第242図 グリッド出土遺物

105-960



第92表 グリッド出土遺物観察表(第242図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	11.6	4.2	5.5	AEFII	普通	白橙色	底95	口:内外面横ナテ 体一底(外):露削り(内):盤ナテ
2	土師器環	12.2	4.4	6.2	ACEF	普通	明橙褐色	完形	口:内外横ナテ 体上半(外):指押えとナテ 体一底(内):ナテ
3	土師器環	11.4	4.4	5.2	ADE	普通	白橙色	口70	口:内外横ナテ 体上半(外):指押えとナテ 体一底(内):ナテ
4	土師器環	12.4	4.2	5.4	AEF	普通	黒色/黒灰	底100	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ
5	土師器環	12.3	5.2	5.2	AEF	不良	暗灰褐色	口450	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押えとナテ 体一底(内):ナテ
6	土師器環	(12.3)	4.1	5.3	AEF	普通	黒色/暗灰	底90	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ
7	土師器環	12.1	3.6	3.7	AEF	普通	白橙色	口85	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ
8	土師器環	12.8	4.6	5.1	ACEF	普通	黒色/暗灰	口70	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ
9	土師器環	12.5	4.5	5.5	AEF	普通	明橙/白橙	口490	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ
10	土師器環	(12.6)	4.4	5.3	AEF	普通	黒灰/白橙	底100	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ
11	須恵器環	12.5	4.4	4.8	ACEF	不良	黒色/黒灰	底100	口:内外面横ナテ 体上半(外):指押え 体一底(内):ナテ

量以前のものと、原位置を失う可能性のある遺物は表面採集遺物として取り上げを行った。

基準点測量終了後、調査範囲内にグリッド杭が設置されて遺構に検出された遺物については、帰属遺構が確定するまで極力出土位置に残すこととした。

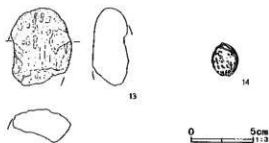
最終的に帰属遺構が確定できなかった遺物、および遺物周辺に遺構が検出できなかった遺物については、グリッド名を付して取り上げを行うこととした。

ここではこれらの中から、図化し得る遺物を掲載する。グリッド出土遺物は12点、表採遺物2点の計14点である。

1~11(第242図)はいずれも土師器製の環である。これらの遺物については大グリッドをさらに小グリッドに分けて取り上げを行った。

まず9×9mの大グリッド内に、3×3mの小グリッドを9つ設定し、これに北西端から西へ小文字でa~c、中段を西からd~f、さらに南西端を西からg~iとした。

第243図 表面採集遺物



こうして大グリッドと小グリッドを組み合わせて、108-96-gGといった表記を行った。

1~11は、いずれも遺物観察表(第92表)内では表記の余裕がなかったため、ここに列挙しておきたい。

以下、1:108-96-e.g, 2:108-96-h, 3:108-96, 4:108-96-h, 5:108-96-h, 6:108-96-e, 7:108-96, 8:108-96-e.g, 9:108-96-g.h, 10:108-96-h, 11:108-96-eである。

この付近は谷部に接近しており、遺構確認面に達するまで、谷の埋没土が顕著であった。そのため、遺構としてのSD7を認識し得た時点にはかなりの数の遺物が出土してしまう結果となった。

1~11の遺物はこうした状況で出土した物であり、位置的にみて、SD7の覆土上層に位置していた可能性が高いと思われる。

12は土製紡錘車である。外面は黒褐色で、焼成は良好。遠心性45パーセント程度で、これからみた法量は、上径(3.3cm)・下径(4.4cm)、厚さ2.5cm、孔径(0.7cm)、現存重量23.5gである。なお、括弧( )付の数値は推定値を意味する。

紡錘車の胎土はC+D+E+Hである。

13は表採遺物である。不明石製品、軽石製。側面底部と下面を一部欠損している。現存長8.0cm、現存幅6.2cm、現存厚3.7cm、現存重量108gを測る。

14は表採遺物である。モモの種。乾燥しており、遺存状況は比較的良好。法量は、長さ2.7cm、幅2.2cm、厚さ1.5cm、重量3.4gを測る。

### 3. 第15地点

#### 概要

今回調査を行った3地点の中で、第15地点は最も面積の小さな調査地点であり、位置的には第14地点とともに北島遺跡の最南端部に相当する。本地点のすぐ南側は現：新星川の河川敷で、この部分での遺構確認調査においても、遺構はまったく検出されなかった。

調査区は全体的に平坦で、本地点最南端部付近から、新星川の河川敷に向かって緩やかな下り勾配となる。

他の調査地点と同様に湧水の影響は大きく、冠水と排水の繰り返しによって遺構が損傷したり、遺物が現位置を失うことが少なからずあった。

本地点でも8世紀代から11世紀代、および中近世に亘っているか概ね9世紀代を中心とし、溝跡に対し住居跡群が時期的に先行しているといえる。

10～11世紀代の遺物は、主として第14地点北西部・第15地点・第16地点の西部を主としており、分布域が

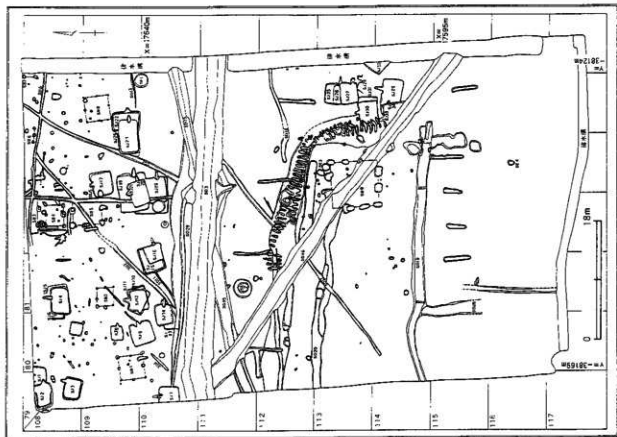
ある程度限られているといえる。

検出された遺構は住居跡34軒・掘立柱建物跡9棟・溝跡29条・土壇28基・ピット141基、および道路状遺構1基であった。

この他に遺構は検出されていないものの、縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器・石器が検出されている。

注目される遺構として、古代の道路状遺構が挙げられる。この道路状遺構は、SB9（2×3間底付・第331図）を回り込むように116度の角度で屈曲して、東西辺は西に向かう。両者は併存していた可能性が高いと思われる。そして、南北辺は南へ向かっている。当時の流路と現：星川の流路が一致しているとまではいえないが、基本的に現在の河川敷の内側であると考えられる以上、この道路状遺構は川の方向へ向かっていると思われ、河川と道路との関係は興味深いといえる。

第244図 第15地点全体図



# (1) 住居跡

## 第1号住居跡 (第245・247図)

108-79・80グリッドに位置する。本遺構の北半部は調査区北側に続く。S J 2を切る。コーナー部分はやや丸味をもつ。東西×深さは4.23×0.15mである。主軸方向はN-3°-WもしくはN-87°-Eを指す。検出し得た南北規模は1.93mである。

調査し得た範囲内では、幅15~20cm・深さ5cm前後の周壁溝が巡るが、全体的に不明瞭である。

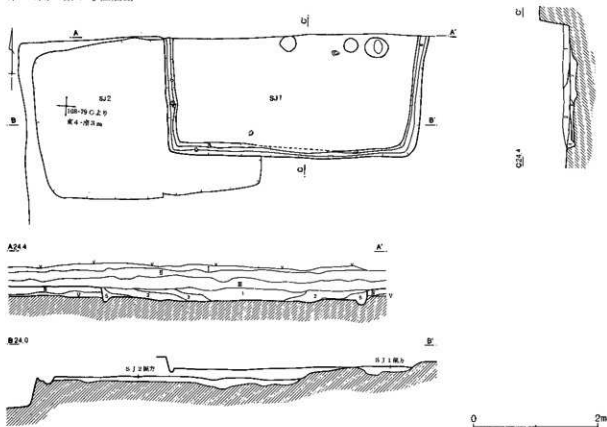
住居中央部を掘り残すドーナツ状の掘り方をもち、

地山ブロックと黒色土からなる混合土で埋め戻している。床面は比較的柔らかいものであった。

S J 2を埋め戻して、本住居跡を構築していると思われる。土層断面の観察からは、壁外構造物は認められなかった。西南コーナー付近では、確認面から床面にまで、炭化物が分布していた。遺物はいずれも覆土中からの出土である。

図化し得た遺物は、土師器杯1・甕2、須恵器杯1・甕1、土鐘1の、計6点であった。

第245図 第1号住居跡



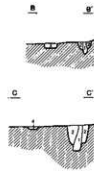
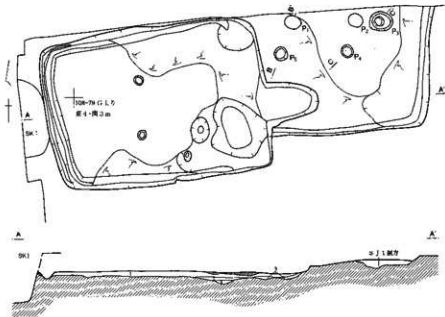
### 基本土層

- |            |        |
|------------|--------|
| I 暗褐色シルト   | 白色パミス層 |
| II 黄褐色シルト  | 白色パミス層 |
| III 灰褐色シルト |        |
| IV 黄褐色シルト  | FA面上   |
| V 黒褐色シルト   | 遺構被覆面  |

### 第1号住居跡土層

- |        |   |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・炭化物粒子少                  |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子(φ0.8cm)多、ロームブロック(φ2cm)・焼土粒(φ0.8cm)少 |
| 3 黄褐色土 | ローム粒子(φ0.8cm)多、焼土ブロック(φ1cm)・炭化物粒子少        |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック(φ2~3cm)多                          |
| 5 灰褐色土 | ローム粒子(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1~2cm)多、炭化物少        |
| 6 暗褐色土 | ローム粒(φ0.8cm)・ロームブロック(φ1~2cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少 |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック(φ3~5cm)・炭化物粒子少                    |

第246図 第1・2号住居跡



## 第1号住居跡ヒット土層

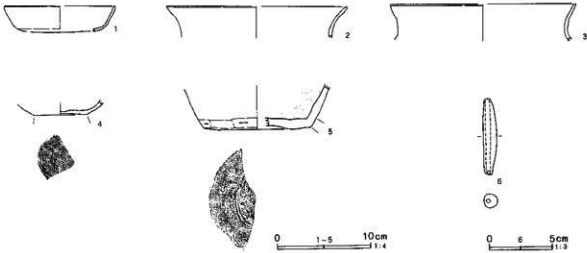
- 1 黒褐色土 ローム粒子(φ5~0.8cm)・炭化物粒子少
- 2 黒褐色土 1層に泥状、粘性あり、灰褐色粘土少
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)多
- 4 黒色土 焼土粒下(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1cm)・炭化物粒子多

## 第2号住居跡掘方

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・ロームブロック(φ1cm)少、焼土ブロック(φ1~2cm)多
- 2 暗褐色土 燃焼部埋め戻し(灰土加)、ロームブロック(φ1~2cm)少
- 3 黒色土 炭化物粒子・焼土粒子(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1cm)多

0 L=24.0m 2m

第247図 第1号住居跡出土遺物



第93表 第1号住居跡出土遺物観察表(第247図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.0)	2.7	—	ACE	普通	茶褐色	Π15	器面風化 口:内外面横ナデか 体(外):底削りか 掘方
2	土師器甕	(19.4)	3.3	—	ACDEFH	普通	茶褐色	Π15	口:内外面とも横ナデ
3	土師器甕	(20.0)	3.9	—	AEPH	普通	明茶褐色	Π15	口:内外面とも横ナデ
4	須恵器環	—	1.5	(5.7)	DEH	普通	灰白色	底25	ロクロ成形 RC
5	須恵器甕	—	4.7	(11.6)	EGH	良	暗灰褐色	—	ロクロ成形 胴下端部(外):底削り 胴~底:一部自然輪付着

6は十鉢である。茶褐色を基調として黒斑がみられる。完形。

胎土はAEFHを混入する。焼成はやや不良。表面は荒れており、ザラザラしている。

全長は6.0cm・最大径は1.1cm・孔径は0.3cm、重量は7.60g。中央がやや膨らむものの細長く、最大径に対して孔径の比率が高いといえよう。断面形は円形を呈する。掘り方内からの出土である。

#### 第2号住居跡 (第246・249・248図)

108-79グリッドに位置する。S J 1に切られる。プランは隅丸長方形を呈する。長径×短径×深さは3.60×2.56×0.24mである。主軸方向はN-81°-Eである。S J 1によって、埋め戻されている状況であった。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央よ

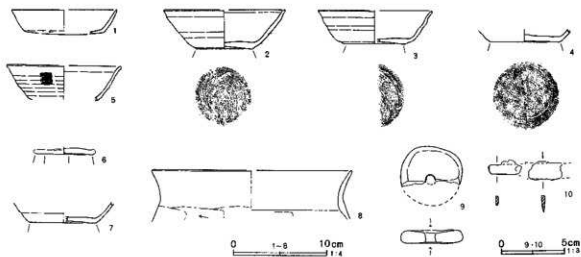
り、やや南寄りに設けられている。全長0.99m・焚口幅0.64mを測る。7・8層は掘り方、3層は焚口部～燃焼部、4層は煙出しに相当すると思われる。1層は、天井部の崩落上であろうか。燃焼部は箱形を呈して僅かに窪み程度であり、緩やかに煙道部に続き、煙出し部に至る。燃焼部はほとんど焼けていない状況であった。軸部は確認されていない。

カマド前面が特に掘り下げられた掘り方は、地山ブロックと黒褐色土との混合上で埋め戻されている。住居跡中央は、床面の硬化が認められた。貼り床は不明瞭ではあるものの、2枚までは確認できた。周壁溝では、板材と思われる壁材の痕跡が、部分的にはあるが認められた。

図化し得た遺物は、計10点であった。

9は紡錘車である(凝灰岩製)。緑白色。残存率55パー

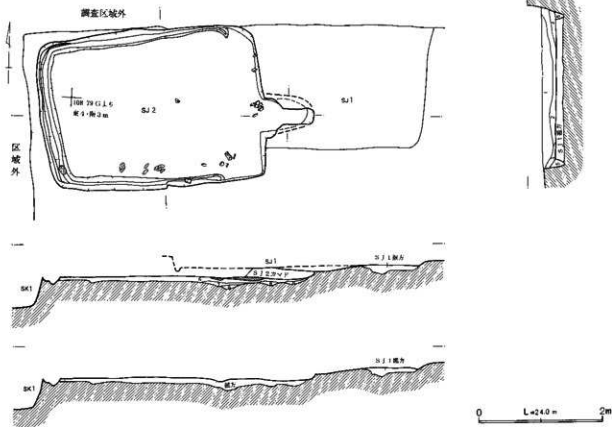
第248図 第2号住居跡出土遺物



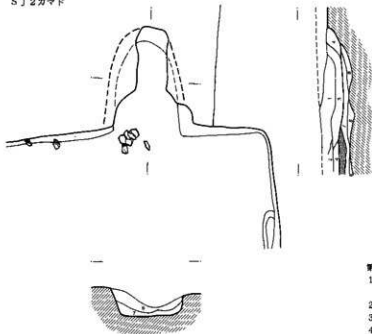
第94表 第2号住居跡出土遺物観察表(第248図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(11.3)	2.5	—	ACDEF	不良	暗褐色	Ⅱ15	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):篋削リ 内:ナテか 掘方
2	須恵器環	(13.0)	4.1	6.0	AETI	普通	灰白色	底100	ロクロ成形 C 掘方
3	須恵器環	(12.2)	3.5	6.1	ADEH	普通	灰白色	底40	ロクロ成形 C
4	須恵器環	—	1.4	7.3	EH	普通	乳白色	底100	ロクロ成形 A 掘方
5	須恵器環	(12.3)	3.7	—	ADEH	普通	青灰色	Ⅱ25	ロクロ成形 環(外):扇形有「田」か
6	須恵器環	—	0.7	6.1	DEH	普通	青灰色	底100	ロクロ成形 R B a 欠け口を面取紡錘車へ転用未製品か
7	須恵器環	—	2.2	(7.0)	CDEH	不良	暗灰色	底40	器面風化著 ロクロ成形か A 掘方
8	土師器甕	(21.5)	6.1	—	ACDEH	普通	茶褐色	—	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削リ (内):篋ナテ

第249図 第2号住居跡



S J 2 カマド



## 第2号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(φ1cm)多、粘土粒子少
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・ロームブロック(φ1~2cm)多、粘土ブロック(φ1cm)少
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ1cm)少
- 4 暗褐色土 ローム粒子少、粘性強
- 5 暗褐色土 3より粘性強
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少、粘土ブロック(φ1~2cm)多
- 7 暗褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)少、燃焼厚埋め(粘床)
- 8 黒色土 炭化物粒子・粘土粒子(φ0.8cm)・粘土ブロック(φ1cm)多

## 第2号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ2~3cm)多、粘土粒子少、天井部
- 2 赤褐色土 粘土粒子少、硬質
- 3 灰黑色土 炭化物粒子多、粘土ブロック(φ2~3cm)少
- 4 暗灰褐色土 ローム粒子(φ0.3cm)・粘土粒子少、炭化物粒子多



セント。直径(4.9)cm・厚さ1.1cm・孔径0.8cm、現存重量23.6gを測る。内側が窪んである。両方向からの穿孔であると思われる。

10は 刀子の破片であると思われる。錆化著しく、原形をとどめない。刃部の大部分と切先付近を欠く。平棟造り。現存長さ5.2cm・基部幅0.7cm・基部厚0.2cm、残存範囲内で刃幅1.3cm・刃厚0.3cmを測る。

### 第3号住居跡 (第250・251図)

108-79グリッドに位置する。ほかの遺構との重複関係はない。

プランは隅丸に近い長方形を呈する。長さ×短径×深さは3.26×2.70×0.13mである。主軸方向はN-13°-Eを指す。

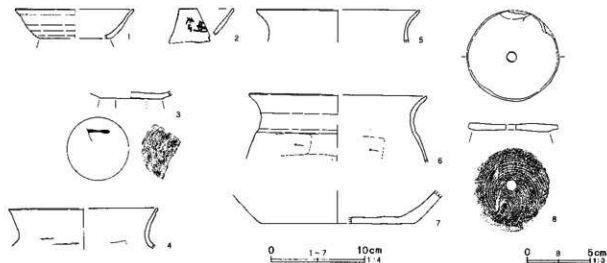
カマド1基が検出されている。カマドは北壁の東寄

りに設けられている。カマドは全長1.39m・焚口幅0.47mを測る。4層は焚口部・燃烧部、2層は煙出し部に相当すると思われる。また、1層は天井崩落土であろうか。燃烧部は土塊状に掘り窪められている。燃烧部も掘り方を有するが、住居跡掘り方と同時に埋め戻されたのであろうか。焚口部には、炭化物・焼土が分布していた。燃烧部は部分的に赤変硬化が認められた。

ドーナツ状の掘り方をもつが、中央の掘り残し部分は全体的に不明瞭である。掘り方は、粘土ブロックを含む暗黄褐色土で埋め戻されているが、貼り床は確認されなかった。幅が狭く、比較的深い周壁溝の底面には、壁材の痕跡と思われる落ち込みが検出された。

図化し得た遺物は、計8点であった。

第250図 第3号住居跡出土遺物



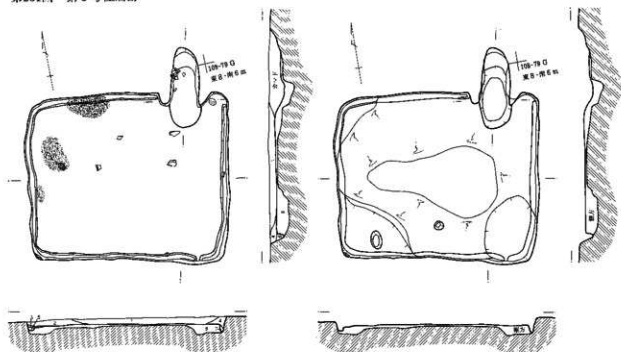
第95表 第3号住居跡出土遺物観察表(第250図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	現存	備考
1	須恵器杯	(12.7)	3.1	7.5	DEH	普通	灰褐色	Π15	ロクロ成形 A
2	須恵器杯	—	2.9	—	DEH	普通	石灰色	—	ロクロ成形 外面に黒書「明知」又は「明知」か
3	須恵器杯	—	0.9	6.6	EH	普通	灰褐色	底30	ロクロ成形 B b 墨書有?
4	土師器壺	(16.0)	4.3	—	AEFH	普通	茶褐色	Π25	口:内外面横ナデ 胴(内):籠ナデ
5	土師器壺	(17.4)	3.4	—	ADEFH	普通	茶褐色	Π20	口:内外面横ナデ カマド
6	土師器壺	(19.1)	7.0	—	ACEFH	普通	茶褐色	Π15	口:内外面横ナデ 胴(外):籠ナデ (内):籠ナデ
7	須恵器壺	—	3.5	(16.3)	BCEH	不良	灰白色	—	器面風化著 ロクロ成形

8は紡錘車である。須恵器杯の底部を穿孔し、欠け口を丁寧に面取りして転用したもの。底部は全面糸切

り離し。灰褐色、BCEH、焼成:普通。直径7.1cm・厚さ0.6cm・孔径0.7cm・重量42.8gを測る。

## 第251図 第3号住居跡

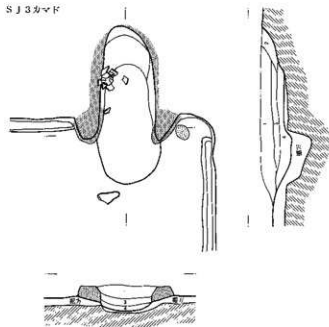


## 第3号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8$  cm)多、ロームブロック( $\phi 2$  cm)・焼土粒子・炭化物粒子少、Fe沈着
- 2 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8$  cm)多、ロームブロック( $\phi 1$  cm)・焼土粒子少
- 3 黒色土 焼土粒子・炭化物粒子少
- 4 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)・焼土粒子( $\phi 0.5 \sim 0.8$  cm)多、炭化物粒子少
- 5 黒色土 3層より炭化物粒子・炭化材多
- 6 暗褐色土 4層より炭化物粒子・焼土粒子多
- 7 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.9 \sim 1$  cm)多、焼土粒子少
- 8 暗褐色土 粘土ブロック多、カーボン少、しまり・粘性やや強

0 L=239cm 2m

## S J 3カマド

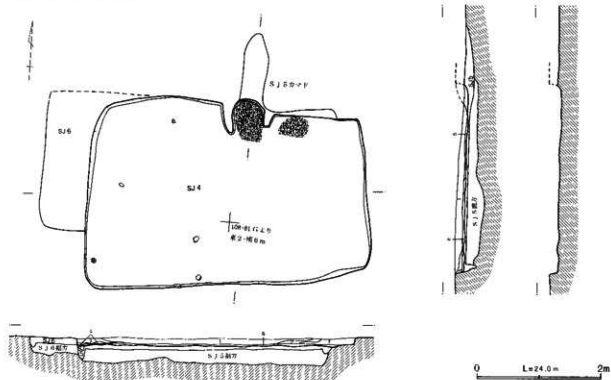


## 第3号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)少、ロームブロック( $\phi 1 \sim 2$  cm)多、Fe沈着
- 2 赤褐色土 粘土ブロック( $\phi 1$  cm)多
- 3 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8$  cm)多、焼土ブロック( $\phi 1 \sim 3$  cm)少
- 4 黒色土 炭化物粒子・焼土粒子( $\phi 0.8$  cm)多、部横断面のみしか?

0 L=239cm 1m

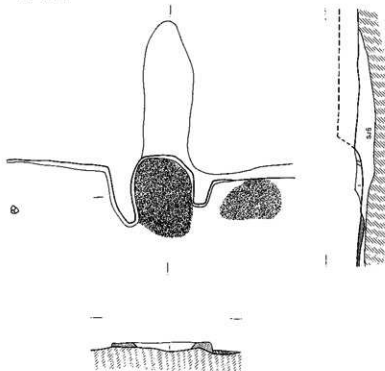
第252図 第4号住居跡



第4号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子多、焼土粒子(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1cm)・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)・焼土ブロック(φ1cm)・炭化物少
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・焼土粒子(φ0.8cm)・炭化物少
- 4 黒色土 炭化物粒子・炭化材・焼土ブロック(φ1cm)多
- 5 暗褐色土 黒色土とロームブロック(φ1~2cm)の混合土、蒸り床
- 6 暗褐色土 硬質(踏み跡りか)

S J 4 カマド



第4号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 灰色味強い、ローム粒子(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ2cm)・炭化物粒子多
- 2 黒色土 焼土ブロック(φ1~2cm)・炭化物粒子多

## 第4号住居跡 (第252・253図)

108・80・81グリッドに位置する。S J 5・6を切る。本遺構は位置的にみて、S J 5のつた状態で構築されており、S J 5を拡張したものであろうか。

プランはコーナー部分に丸味をもつ長方形を呈する。長径×短径×深さは4.57×3.03×0.13mである。主軸方向はN-4°-Wを指す。

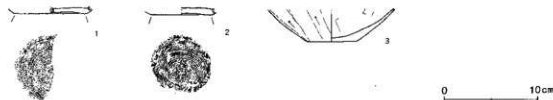
カマドが1基検出されている。カマドは北壁中央よりやや東寄りに設けられており、S J 5のカマド位置

とも一致している。カマドは、全長0.55mときわめて短いタイプであり、焚口幅は0.5mを測る。カマド軸部が一部分遺存している。1・2層は焚口部・燃焼部に相当すると思われる。

S J 5の上位に、暗黄褐色土と暗褐色土(5・6層)を充填して、床面を構築していると思われる。5層(貼り床)・6層は踏み締めによるものか、硬質であった。

凶化し得た遺物は須恵器環2、土師器甕1の、計3点であった。

第253図 第4号住居跡出土遺物



第96表 第4号住居跡出土遺物観察表(第253図)

番号	器種	口径	底高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	—	0.7	(7.4)	CEH	普通	灰褐色	底45	ロクロ成形	RC
2	須恵器環	—	0.8	6.3	CDEH	不良	暗灰色	底95	ロクロ成形	RC
3	土師器甕	—	3.5	5.2	ACEFH	普通	明褐色	底80	外面:スス付着	底削り 内面:底ナデ

## 第5号住居跡 (第254~256図)

108・80・81グリッドに位置する。S J 6を切り、S J 4に切られる。住居跡のコーナーは少し丸味をもつ。プランは、全体的にやや歪んでいる。S J 5とS J 4は、カマドの位置・北壁・南壁・西壁がほぼ一致しており、S J 4は本遺構を拡張して構築された住居跡であると思われる。長径×短径×深さは4.20×3.05×0.2mである。主軸方向はN-3°-Wを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは、北壁中央よりやや東寄りに構築されている。カマドの遺存度は比較的良好で、天井部と軸部の一部が残っている箇所もあった。全長1.52m・焚口幅0.54mを測る。7層はカマド掘り方、3層は焚口部・燃焼部、4層は煙道に相当すると思われる。燃焼部はやや鉛錐状に窪み、煙

道に続く。燃焼部は比較的良好に焼けている。

掘り方は全体的に掘り窪めるものであるが、凹凸が多く、深さは10~20cmを測る。

凶化し得た遺物は、計5点であった。

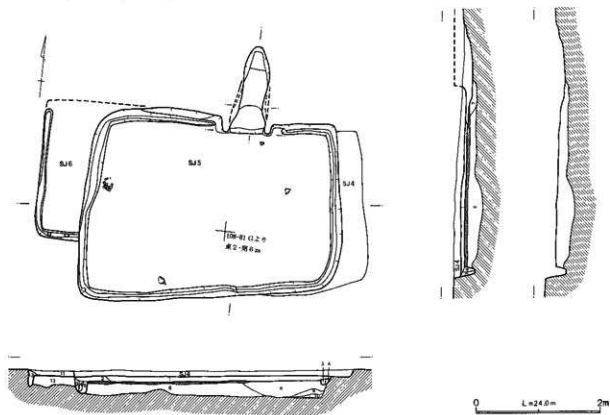
## 第6号住居跡 (第254・255図)

108・80・81グリッドに位置する。S J 4・5に切られる。北壁は、S J 5のカマド西側に僅かではあるが遺存していたために、南北規模を得ることができた。

プランは、方形を呈すると思われる。南北2.2m、深さ0.1mを測り、東西については1.0mまで調査できたにとどまる。主軸方向はN-6°-Eを指す。幅10cm前後・深さ15cmの周壁溝が、西壁と南壁を巡る。周壁溝は、掘り方を埋め戻した後に掘られたものと思われる。

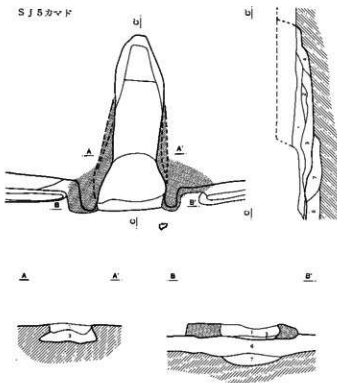
遺物は出土しなかった。

第254図 第5・6号住居跡(1)



第5・6号住居跡土層

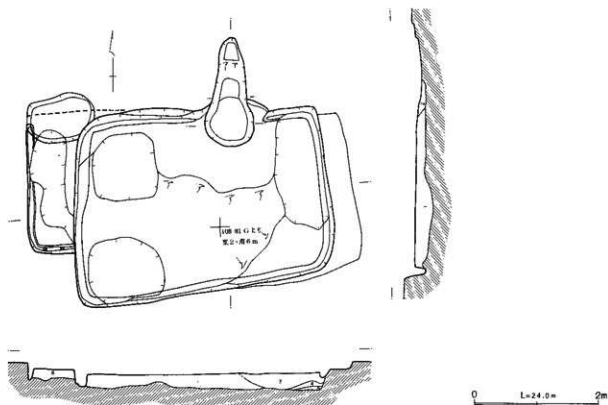
- 1 暗褐色土 焼土粒下(φ0.5~0.8cm)・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 ロームブロック(φ2~3cm)・焼土粒子・炭化物粒子多
- 3 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・焼土粒子(φ0.5cm)少、粘性強
- 4 黒褐色土 ロームブロック(φ1cm)多、焼土粒子少
- 5 灰褐色土 灰褐色粘土粒子少、ロームブロック(φ1cm)多、粘性強、理め戻しか
- 6 黒褐色土 ロームブロック(φ3~5cm)多、焼土粒子(φ0.5cm)少(縦方)
- 7 黒褐色土 ロームブロック(φ3~5cm)・焼土ブロック(φ1~2cm)多、焼土粒下(φ8cm)・炭化物粒子少(縦方)
- 8 黒褐色土 ロームブロック(φ3~5cm)・焼土粒下(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1~2cm)多(縦方)
- 9 暗褐色土 地山に近似、ローム粒下(φ0.5cm)多(縦方)
- 10 暗褐色土 地山に近似、炭化物粒下多(縦方)
- 11 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、炭化物粒下・黒褐色土ブロック(φ1~2cm)少
- 12 黒褐色土 炭化物粒下・焼土少、硬質
- 13 暗褐色土 ロームブロック(φ5cm)多(縦方)



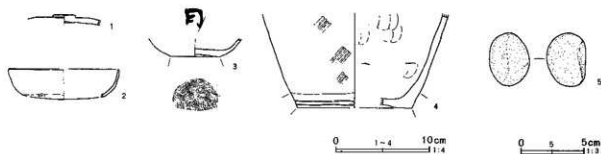
第5・6号住居跡カマド

- 1 灰褐色土 焼土粒子(φ0.5~0.8cm)・炭化物粒下少、天井部
- 2 灰褐色土 焼土ブロック(φ1cm)少、天井部
- 3 黒灰色土 焼土粒下(φ0.5cm)・炭化物粒子多
- 4 暗褐色土 焼土粒下(φ0.3~0.5cm)・炭化物粒子少

第255図 第5・6号住居跡(2)掘方



第256図 第5号住居跡出土遺物



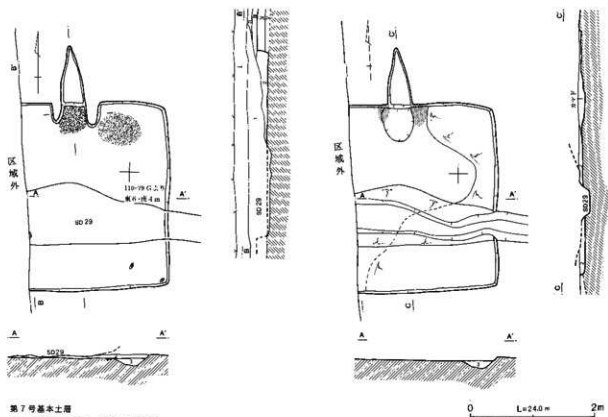
第97表 第5号住居跡出土遺物観察表(第256図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	楕(2.4)	1.1	—	CEH	普通	灰白色	揃45	ロクロ成形 外弁部:彫削り 掘方
2	土師器環	(11.9)	2.9	—	ACEFH	普通	明茶褐色	I125	円:内外面横ナテ 体(外)上半:ナテ 下半:彫削り (内):ナテ
3	須恵器環	—	2.0	5.1	CEH	普通	灰褐色	揃55	ロクロ成形 R C 底(内)に蓋蓋「月」か 掘方
4	須恵器鉢	—	10.1	(12.1)	DEH	良	灰緑色	底25	ロクロ水挽き成形 胴(外):平行叩き文を施した後ナテ

5は磨石であろうか。小型で、やや扁平な長楕円を呈する。乳白色、安山岩製。規模は長さ4.1×幅3.1×

厚さ2.9cm、重量65.0gを測る。磨面は凸面と思われるが、痕跡は明瞭ではない。

第257図 第7号住居跡



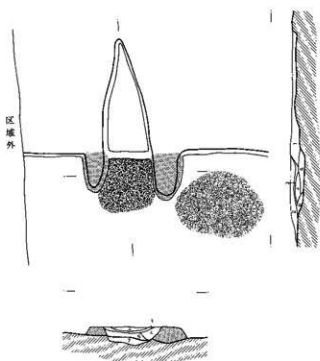
第7号基本土層

- I 暗灰褐色シルト 白色パミス酸礫
- II 黒褐色シルト 白色パミス酸礫
- III 灰褐色シルト
- IV 黒褐色シルト
- V 黒褐色シルト

第7号住居跡土層

- 1 暗褐色土 SD 29層上
- 2 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )・炭化物粒子( $\phi 0.2\text{cm}$ )少、焼土粒子( $\phi 0.8\sim 1\text{cm}$ )多
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多、焼土粒子微量(鋸刀)

SJ7カマド



第7号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.6\text{cm}$ )・炭化物粒子少、焼土粒子( $\phi 0.8\sim 1\text{cm}$ )多
- 2 暗褐色土 Fe沈着、ローム粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )少、硬質
- 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少
- 4 暗褐色土 焼土粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )少、天井跡層上
- 5 暗褐色土 1層に互傾、焼土ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )少
- 6 黒灰色土 灰層、炭化物粒子多
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多、焼土粒子微量(鋸刀)

## 第7号住居跡 (第257・258図)

110-79グリッドに位置する。SD29に切られているため、遺構検出時点では南壁は確認されなかったが、掘り方調査の段階で、南壁の位置を確定することができた。住居跡西半部は調査範囲外に続く。プランは方形か長方形かは不明である。南北2.97m・深さ0.35mを測るが、東西規模については2.35mまで調査できたにとどまる。主軸方向はN-1'-Wを指す。今回の調査で検出された最西端の住居跡である。

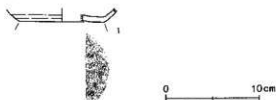
カマド1基が検出されている。カマドは北壁に構築

されている。全長1.48m・焚口幅0.44mを測る。両袖とも削り出しによるものではなく、黒色土と粘土の混合土によって構築されている。燃焼部に、壁面のラインに続く段を有する。5・6層は焚口部・燃焼部、1層は煙道部、4層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部は長方形を呈して窪み、平坦な煙道部へと続く。燃焼部・煙道部ともに焼け方はきわめて弱い。

北東コーナー付近に掘り方が検出された。

出土遺物は少なく、同化し得た遺物は須恵器坏片1点のみであった。

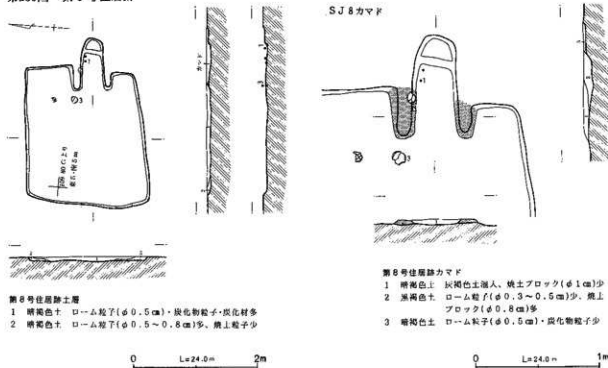
第258図 第7号住居跡出土遺物



第98表 第7号住居跡出土遺物観察表(第258図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器坏	—	1.5	9.0	DEH	普通	灰青色	底25	ロクロ成形 A

第259図 第8号住居跡



第8号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒了(φ0.5cm)・炭化物粒少・炭化材多
- 2 暗褐色土 ローム粒了(φ0.5~0.8cm)多、焼上粒少

第8号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 灰褐色土混入、焼土ブロック(φ1cm)少
- 2 黒褐色土 ローム粒了(φ0.3~0.5cm)少、焼上ブロック(φ0.8cm)多
- 3 暗褐色土 ローム粒了(φ0.5cm)・炭化物粒少



### 第8号住居跡 (第259・260図)

109-80グリッドに位置する。ほかの遺構との重複関係はみられない。今回の調査で検出された住居跡の中で、最も規模の小さな住居跡である。

プランは、やや歪んだ方形に近い長方形である。長径×短径×深さは2.20×1.97×0.09mである。主軸方向はN-86°-Eである。

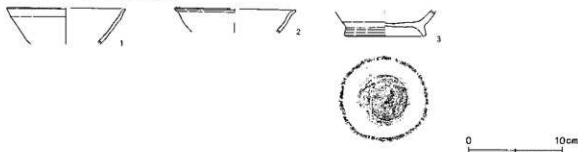
カマドが1基検出された。カマドは、東壁中央より僅かに南寄りに設けられている。袖部の実測線は復元

的なものであり、崩壊している可能性が高く、カマドとして疑問の余地もある。1・2層は焚口部・燃焼部、3層は煙出しに相当すると思われる。燃焼部内面はほとんど焼けていなかった。

掘り方をもたず、砂粒を主体とする地山直上に構築しているため、床面は全体的に柔らかい。但し、遺構検出段階ですでに掘り方に達してしまっている可能性も否定できない。床面直上の遺物は出土しなかった。

図化し得た遺物は、須恵器片3点であった。

第260図 第8号住居跡出土遺物



第99表 第8号住居跡出土遺物観察表(第260図)

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存	備 考
1	須恵器坏	(12.7)	3.8	—	DEH	普通	灰白色	ロ20	ロクロ成形
2	須恵器坏	(13.0)	2.5	—	EH	普通	白灰色	ロ15	ロクロ成形
3	須恵高台坏	—	3.8	台8.8	ADEH	不良	灰白色	白100	ロクロ成形 底:回転系切り離し後貼付高台か

### 第9号住居跡 (第261・262図)

109-110-80グリッドに位置する。ほかの遺構との新旧関係はない。プランは、コーナー部分に丸味をもった方形を呈する。

住居跡の覆土は、他の住居跡よりも地山への同質化が進行しているためか、色調による確認は難しく、床面や壁面の検出は困難であった。

長径×短径×深さは3.49×3.37×0.18mを測る。主軸方向はN-74°-Eを指す。

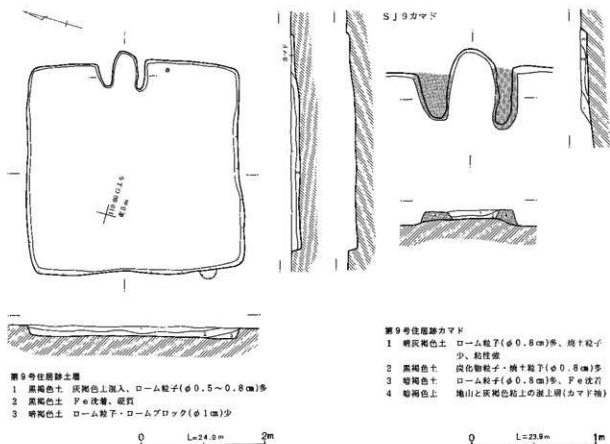
カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、やや北側に設けられている。住居跡本体と同様に、カマドも掘り方をもたない。

粘土を含む上層が、カマド袖部に相当する位置に検出されたことにより、その面的な分布範囲から、復元的に実測線を引きいた。そのため、図上では実際の遺構よりも明瞭なカマドとの印象を受けることになった。2層は焚口部・燃焼部に相当すると思われる。焚口部・燃焼部は、地山を僅かに掘り陥めたのみであり、ほとんど平坦である。カマド内部はほとんど焼けていない状況であった。

砂粒を主体とする地山直上に構築しているため、床面は全体的に柔らかい。但し、遺構検出段階ですでに掘り方に達してしまっている可能性も否定できない。

図化し得た遺物は、2点のみであった。

第261図 第9号住居跡



第262図 第9号住居跡出土遺物



第100表 第9号住居跡出土遺物観察表(第262図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	—	1.3	(6.5)	CEH	普通	青灰色	底15	ロクロ成形 Bb
2	須恵器杯	—	1.4	6.5	EII	不良	白灰色	底20	ロクロ成形 RC

第10号住居跡 (第263・264・266図)

109・110・80・81グリッドに位置する。S J 10-12は重複するが、地山と住居跡の覆土との色調的な違いが小さく、しかも重複関係は複雑であった。そのため、各住居跡の検出および、床面や壁面の確定はきわめて

困難であった。S J 11-12を切る。3軒の住居跡の内、主軸方向に違いがあり、プランはやや歪んだ長方形を呈する。床面については、部分的な硬化面を検出して、そのレベルを床面として認定した。

住居跡の長径×短径×深さは4.03×2.97×0.2mで

ある。主軸方向はN-16°-Eを指す。本遺構の主軸方向は、S J 11 (N-4°-W)・S J 12 (N-7°-W)とは異なるものの、3軒の住居跡は規模・形態の違いがあるものの、カマド位置はほとんど一致している。

カマド1基が検出されている。全長1.34m・焚口幅9.42mを測る。燃焼部の左側面は、大きく外側に湾曲している。

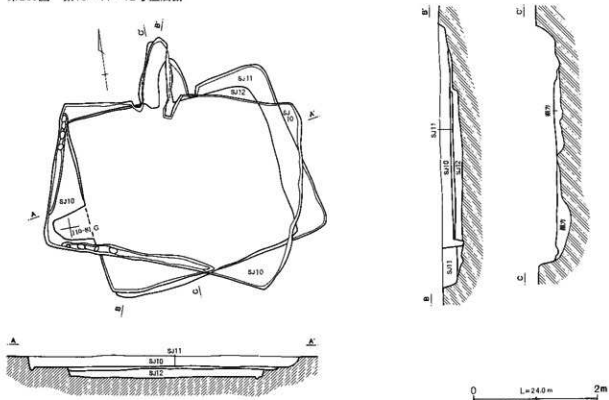
部分的に、地山と暗灰褐色粘土との混合土からなる、カマド袖が遺存している。2層は焚口部・燃焼部、3

層は煙道部・煙出し部、1層は天井崩落土に相当すると思われる。カマドの左側面は被熱のため赤硬化しているが、全体的に炭化物粒子・焼土粒子が少なく、焼け方は弱い。

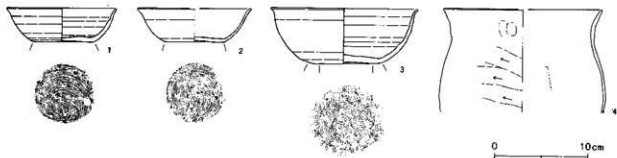
西壁と南壁の一部に、幅10~15cm・深さ5~15cmの周壁溝が巡るが、ほかの部分では検出できなかった。

出土遺物は比率的に小破片が多いが、カマド付近に集中する傾向をもつ。図化した遺物は土師器1・須恵器3の計4点であった。

第263図 第10・11・12号住居跡



第264図 第10号住居跡出土遺物



第101表 第10号住居跡出土遺物観察表(第264図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	11.9	3.6	6.3	DEH	普通	灰白色	口70	ロクロ成形	RC
2	須恵器環	(12.1)	3.6	6.3	EII	普通	灰白色	底95	ロクロ成形	RC
3	須恵器鉢	15.6	6.0	5.8	EI	普通	黒灰色	底100	ロクロ成形	RBb
4	土師器甕	(16.9)	10.9	—	AEFII	不良	橙褐色	口15	器面風化著	口:内外面横ナデ 胴(外):流削り (内):莚ナデ

## 第11号住居跡(第263・267図)

109・110-81グリッドに位置する。S J 12を切り、S J 10に切られる。プランは、コーナー部分に丸味をもった方形に近い長方形を呈する。長径×短径×深さは3.65×2.92×0.25mを測る。主軸方向はN-4°-Wを指す。本遺構はS J 12と、カマド位置・西壁・南壁がほとんど一致しており、S J 12を拡張した住居跡であると思われる。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。S J 12のカマドを埋め戻して、本遺構のカマドを構築していると思われる。カマド内には、焼上粒子や炭化物粒子が多量に分布しているが、内面の焼け方はきわめて弱いものであった。

S J 12を僅かに埋め戻して、床面も構築している。

土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

## 第12号住居(第263・265・268・269図)

109・110-81グリッドに位置する。S J 10・11に切

られる。コーナー部分に丸味をもつ長方形を呈するもので、プランは比較的整っている。長径×短径×深さは3.16×2.6×0.10mを測る。主軸方向はN-7°-Wを指す。

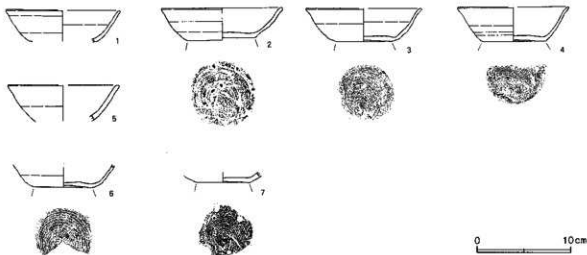
カマド2基が検出されている。カマド(1)は北壁中央に設けられている。全長0.6m・焚口幅0.5mを測る。カマド(2)は西壁中央より、やや南寄りに設けられている。今回の調査で検出された、西カマドをもつ住居跡は本遺構のみである。全長0.6m・焚口幅0.52mを測る。

カマド(1): 4~6層は燃焼部に、1~3層はS J 10またはS J 11のカマドを構築する際に、埋め戻された上層であると思われる。内面の焼け方はきわめて弱い。カマド(2): 3・4層は燃焼部に相当すると思われる。このカマド(1)は、(2)より焼上粒子・炭化物粒子が多く分布しており、焼け方もやや強い。

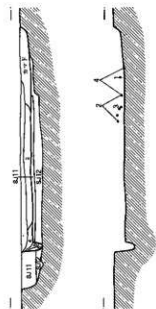
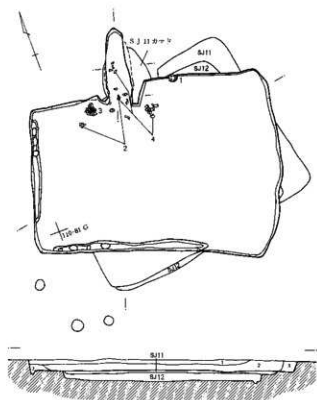
掘り方は全体的に掘り下げるもので、凹凸に富む。

図化し得た遺物は、須恵器環7点であった。

第265図 第12号住居跡出土遺物



第266図 第10号住居跡

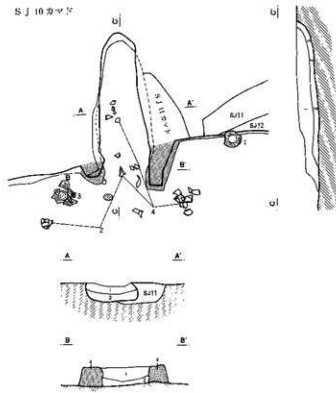


0 L=24.0m 2m

第10号住居跡土層

- |         |  |
|---------|--|
| 1 暗褐色土  | ローム粒子(φ0.5cm)多、焼土粒子(φ0.8cm)少             |
| 2 暗褐色土  | ローム粒子(φ0.5~0.8cm)・焼土ブロック(φ1cm)・炭化物粒子少    |
| 3 黒褐色土  | ローム粒子(φ0.8cm)少                           |
| 4 暗褐色土  | ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ2cm)多、炭化物粒子・焼土粒子少 |
| 5 暗灰褐色土 | ローム粒子(φ0.3~0.5cm)・ロームブロック(φ1cm)多、粘性強     |
| 6 暗灰褐色土 | ローム粒子(φ0.3cm)・炭化物粒子少、粘性強                 |

S J 10 カマド

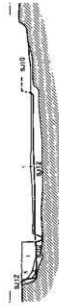
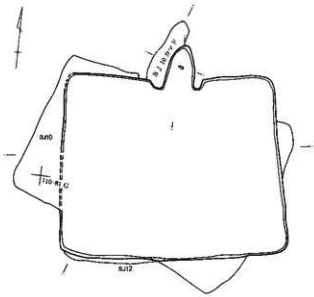


第10号住居跡カマド

- |        |  |
|--------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(φ0.3cm)・炭化物粒子少、焼土ブロック(φ1cm)多、天井部 |
| 2 灰褐色土 | 炭化物粒子多、焼土ブロック(φ1cm)少、軟質                |
| 3 黒褐色土 | 炭化物粒子・焼土粒子(φ0.3cm)少                    |
| 4 暗褐色土 | 地山と暗灰褐色粘土の混合土(カマド舗)                    |

0 L=24.0m 1m

第267図 第11号住居跡

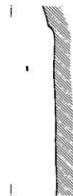
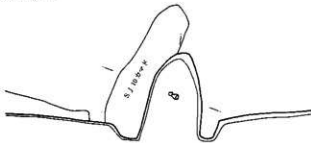


## 第11号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi$ 0.5~0.8cm)・ロームブロック( $\phi$ 1~2cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 1層より薄い
- 3 黒色土 炭化物粒子・焼土粒子( $\phi$ 0.8cm)多軟質
- 4 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子多
- 5 暗褐色土 ローム粒子( $\phi$ 0.5cm)多、焼土粒子少

0 L=24.0= 2m

SJ11カマド

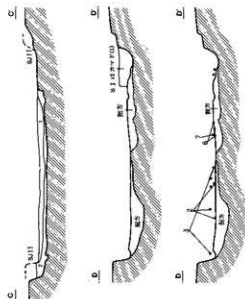
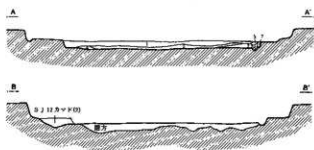
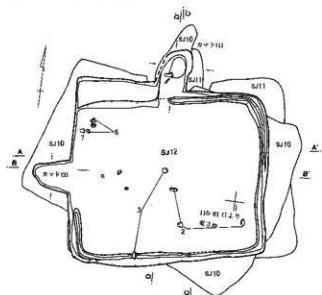


## 第11号住居跡カマド

- 1 暗赤褐色土 ローム粒子( $\phi$ 0.5cm)・焼土ブロック( $\phi$ 1~2cm)・炭化物粒子多
- 2 暗赤褐色土 焼土粒子( $\phi$ 0.5cm)・焼土ブロック( $\phi$ 1~2cm)・炭化物粒子多
- 3 黒褐色土 ローム粒子( $\phi$ 0.8cm)・焼土ブロック( $\phi$ 1cm)多
- 4 暗褐色土 ローム粒子( $\phi$ 0.5cm)・焼土粒子少

0 L=24.0= 1m

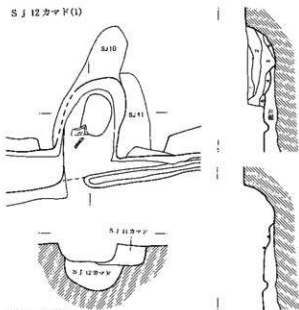
第268図 第12号住居跡(1)



第12号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm)多、焼上粒子・炭化物粒子(φ0.8cm)少
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.2~0.3cm)・黒褐色上ブロック(φ1~2cm)多、灰褐色粘土少
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)多、焼土粒子少
- 4 黒色土 炭化物粒子層中にローム粒子(φ0.8cm)多
- 5 黒褐色土 ローム粒子(φ0.3cm)少
- 6 黒褐色土 ローム粒子(φ0.2~0.3cm)多、焼土粒子(φ0.2cm)少
- 7 黒褐色土 焼土粒子少、煙灰

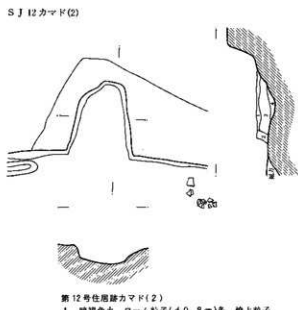
S J 12カマド(1)



第12号住居跡カマド(1)

- 1 暗褐色土 灰褐色粘土・ローム粒子(φ0.5cm)多、Fe沈着
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)多、焼上粒下少
- 3 黒褐色土 黒褐色上ブロック(φ2cm)・ローム粒子(φ0.5cm)多、焼土粒子・ロームブロック(φ1cm)少
- 4 黒色土 炭化物粒子・焼土粒子少
- 5 黒褐色土 灰褐色粘土・ローム粒子(φ0.3cm)多
- 6 暗褐色土 ローム粒子(φ0.3cm)多、炭化物少、粘性强

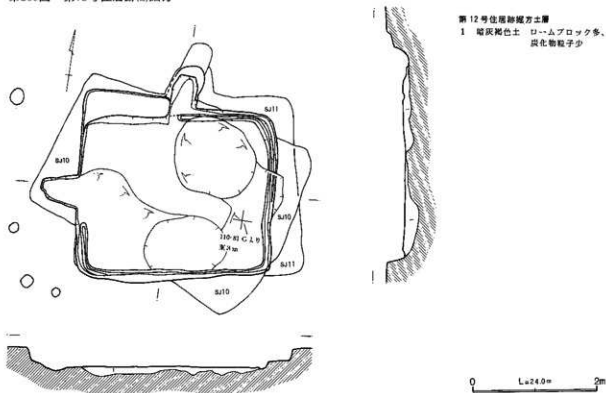
S J 12カマド(2)



第12号住居跡カマド(2)

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、焼上粒子・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、Fe沈着
- 3 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・炭化物粒子少、焼上ブロック(φ1~2cm)多
- 4 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・焼土粒子少

第269図 第12号住居跡(2)掘方



第12号住居跡掘方土層  
 1 暗灰褐色土 ロームブロック多、炭化物粒子少

第102表 第12号住居跡出土遺物観察表(第265図)

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	(12.2)	3.3	—	EH	普通	灰白色	1130	ロクロ成形 掘方カマド
2	須恵器環	12.9	3.4	7.1	BEH	不良	暗灰色	完形	ロクロ成形 RC
3	須恵器環	(12.4)	3.5	6.0	CDEH	不良	乳灰白	底100	ロクロ成形 RC
4	須恵器環	(11.9)	3.6	(6.7)	AEH	普通	暗灰褐色	底45	ロクロ成形 RC
5	須恵器環	(12.0)	3.8	—	DEH	不良	灰褐色	口15	ロクロ成形 カマド 掘方
6	須恵器環	—	2.5	6.2	AEH	普通	暗灰色	—	ロクロ成形 RC
7	須恵器環	—	1.1	5.6	EH	不良	灰白色	底80	ロクロ成形 RC

## 第13号住居跡(第270・271図)

110・80・81グリッドに位置する。S J 14を切り、S D 2・S D 11・S D 29を切る。住居跡の南半部は失われており、プランが方形を呈するのか、または長方形を呈するのかは不明である。

東西幅4.7m・深さは8cmであるが、南北幅については2.7mまで調査できたにとどまる。主軸方向はN-10°-Wを指す。

カマドが1基検出されている。カマドは北壁中央よりやや東寄りに設けられている。全長1.02m・焚口幅0.5mを測る。遺存度はよくないものの、両軸とも検出できた。1・3層は天井崩落上、4層は燃焼部に相当

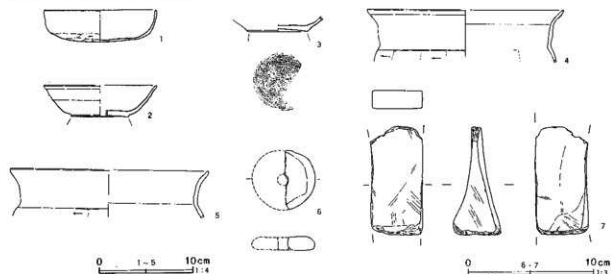
すると思われる。燃焼部は僅かに掘り下げられ、煙出し部にいたって立ち上がるもので、平面形は箱形に近い。燃焼部・焚口部および、その周辺に焼土粒子・炭化物粒子が広く分布しているが、カマド内部はほとんど焼けていない状況であった。

本住居跡周辺の地山は、黒褐色に近い暗褐色で、暗褐色または茶褐色の覆土をもつ住居跡が、地山から浮き上がるような様相を呈していた。本住居跡は掘り方をもっており、砂粒を主体とした地山を、床面としていると思われる。

図化し得た遺物は、土師器3、須恵器2のほか、土製品1、石製品1の計7点である。



第270図 第13号住居跡出土遺物



第103表 第13号住居跡出土遺物観察表(第270図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	12.9	3.4	—	AEFH	普通	明茶褐色	口55	口:内外面横ナテ 体(外):鹿削り (内):ナテ
2	須恵器環	(12.1)	3.3	(6.0)	EFH	不良	暗灰褐色	口30	口:内面横ナテ C カマド
3	須恵器環	—	1.6	6.1	ACEII	普通	灰褐色	底75	口:内面横ナテ RC カマド
4	土師器袋	(21.2)	5.0	—	ACEFH	普通	明茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):鹿削り (内):鹿ナテか
5	土師器壺	(21.0)	5.5	—	ACDEII	普通	明茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):鹿削り (内):鹿ナテか

6は紡錘車(土製)である。AEH、明褐色、現存率45パーセント。焼成：普通。形状はやや歪み、断面形は台形というよりも円盤状に近い。上径(3.8)cm・下径(5.0)cm・孔径(0.9)cm、現存重量15.9gを測る。

7は砥石(凝灰岩製)である。両端部を欠損する。表裏面と両側面の4面を研ぎ面として使用しているが、とくに表裏面の磨減が著しい。現存長8.7cm・幅4.1cm・厚さ3.7cm、現存重量128.8gを測る。

#### 第14号住居跡(第272・273図)

110・80・81グリッドに位置する。S J 13とSD 2に切られる。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは3.11×2.63×0.36mである。主軸方向はN-79°-Eを指す。

土層断面の観察から、本住居跡は2次にわたる遺構であると推定された。8層は掘り方で、その直上が1次床面であり、7層はカマド燃焼部の最下面であろうか。この上位面に、ロームブロックやローム粒子を多

く含んだ暗褐色土(3・4層)で埋め戻して2次床面としていられる。

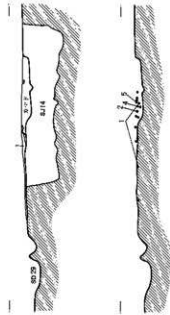
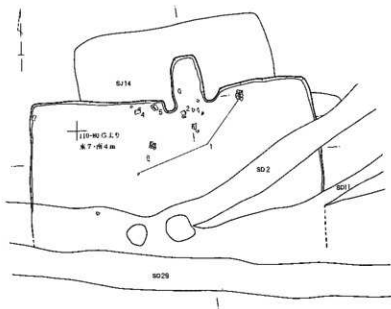
1:30で図示したカマドは、この2次床面に設けられているものである。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、僅かに南寄りに設けられている。左側袖部の基底部が遺存していた。5層は1次床面を埋め戻した土層、3・4層は燃焼部・煙道部、1・2層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部の左側側面は比較的良く焼けているが、天井部下面や燃焼部底面は、ほとんど焼けていない状況であった。煙道部(4層)下位は、地山を掘り残していると思われる。

北東コーナー付近以外は、凹凸の多い掘り方をもつ。掘り方の埋め戻し土は地山に近く、床面の検出が困難であったため、硬化面を床面として判別した。

凶化し得た遺物は土師器2、須恵器2の計4点であった。

第271図 第13号住居跡



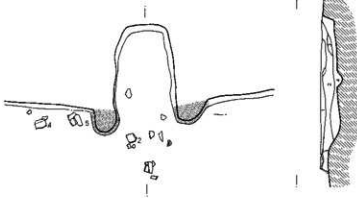
第13号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粘土多、炭化物粒子・焼土粒子少、Fe沈澱、硬質
- 2 茶褐色土 ローム粘土(φ0.5cm)・焼土粒子(φ0.3cm)多、炭化物粒子少
- 3 黒褐色土 粘土ブロック(φ1cm)少、炭化物粒子(φ0.5cm)・焼土粒子(φ0.8cm)多

0 L=24.0m 2m



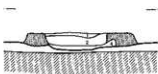
S J 13カマド



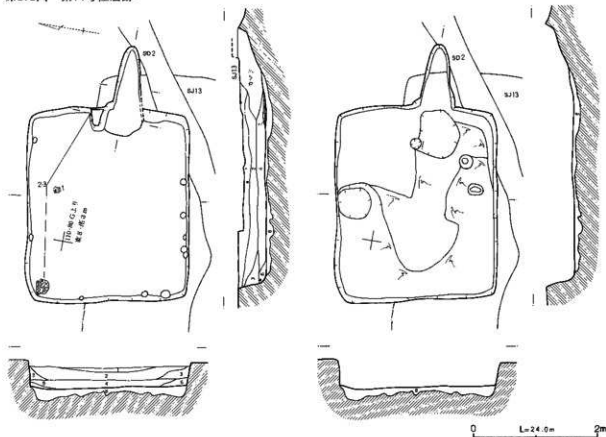
第13号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少、天井部
- 2 黒褐色土 粘土ブロック(φ1cm)少、焼土粒子(φ0.8cm)・炭化物粒子多、暗灰褐色粘質土層入、軟質
- 3 暗褐色土 1層に近似、1層より焼土粒子少、天井層上
- 4 灰褐色土 燃焼部炭灰質、炭化物粒子・灰・焼土粒子(φ0.5~0.8cm)多

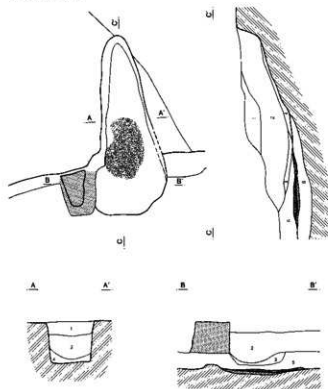
0 L=24.0m 1m



第272図 第14号住居跡



S J 14カマド



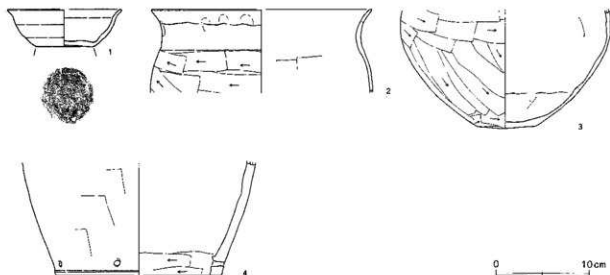
第14号住居跡土層

- 1 褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )・ロームブロック( $\phi 1\text{cm}$ )多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5\sim 0.8\text{cm}$ )・焼土粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )・炭化物粒子少
- 3 黒褐色土 暗褐色土ブロック( $\phi 1\sim 2\text{cm}$ )少、ローム粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )多、F・Mn沈着
- 4 強褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )・ロームブロック( $\phi 3\sim 5\text{cm}$ )・焼土粒子少
- 5 強褐色土 ロームブロック( $\phi 1\sim 2\text{cm}$ )・焼土ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )少
- 6 黒褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )多、黒褐色土ブロック( $\phi 4\sim 6\text{cm}$ )少
- 7 黒色土 炭化物層
- 8 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒子多(西方)

第14号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5\sim 0.8\text{cm}$ )多、炭化物粒子少、天井部
- 2 黒褐色土 黒褐色土ブロック( $\phi 2\sim 3\text{cm}$ )・ローム粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )多、天井部
- 3 黒色土 焼土ブロック・炭化物粒子少、粘性強
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子少
- 5 黒褐色土 ロームブロック( $\phi 3\sim 5\text{cm}$ )・ローム粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )多、焼土粒子少

第273図 第14号住居跡出土遺物



第104表 第14号住居跡出土遺物観察表(第273図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	(12.1)	3.9	5.9	DEFH	普通	灰白色	底100	ロクロ成形 RC
2	土師器鉢	(23.5)	8.8	—	ADEFH	普通	暗褐色	口25	口:内外面横ナデ 胴(外):鹿削り (内):鹿ナデか
3	土師器鉢	—	12.5	6.5	ACEFII	普通	暗褐色	底100	外:鹿削り 内:鹿ナデ 外面スス付着
4	須恵器瓶	—	12.1	(17.7)	CEH	普通	黒灰色	底15	胴(外):鹿ナデ後指ナデ(内):ナデ 下端部付近:鹿ナデ後穿孔

## 第15号住居跡 (第274・275図)

109・110-81・82グリッドに位置する。S J 16を切り、SD 11も切っていると思われる。プランは長方形を呈する。

本住居跡は、S J 16とカマドの位置・東壁・南壁が一致している。床面もS J 16の上面に、部分的に5cm程埋め戻しているのみであることから、本遺構はS J 16を拡張した住居跡であると考えられる。

住居跡の長径×短径×深さは、4.12×3.6×0.22mである。主軸方向はN-74°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは、東壁中央より南側、南東コーナー近くに設けられている。全長1.36m・焚口幅0.51mを測る。焚口部付近は、貼り床の上のっているが、この貼り床はS J 16のものであろうか。遺存度は良くないものの、左右の袖ともに検出することができた。

4・6層は焚口部・燃焼部、5層は煙出し部、1・

4層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部内にあるピットは、本住居跡に伴うものと判断した。

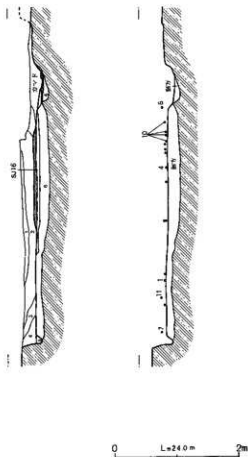
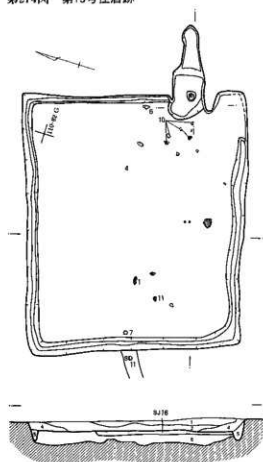
燃焼部・焚口部およびカマド周辺に、炭化物粒子や焼土粒子が広く分布しているが、カマド内部の焼け方は弱い。

本住居跡周辺の地山は、黒褐色に近い暗褐色で、暗褐色または茶褐色の覆土をもつ住居跡が、地山から浮き上がるような様相を呈していた。

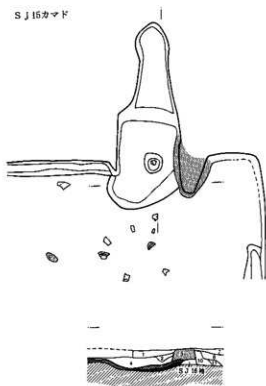
本住居跡は掘り方をもつが、S J 16の掘り方と区分することはできなかった。掘り方は東側が若干浅いものの、全体的に掘り窪めるもので、深い箇所では20cmを測る。全体的に凹凸が多い。

南東コーナー付近を除いて、幅10~20cm・深さ10~15cmの周壁溝が巡っている。周壁溝は断面U字形を呈し、直線的であり、立ち上がりも明瞭であった。

図化し得た遺物はいずれも須恵器の蓋もしくは環で計11点であった。



S15カマド



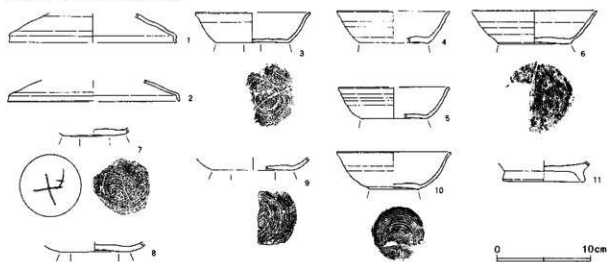
第15号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、焼上  
粒子少、F0沈着
- 2 暗褐色土 黒褐色土ブロック(φ5cm)・ローム  
粒子(φ0.5~0.8cm)多、  
ロームブロック(φ1cm)少
- 3 黒褐色土 ローム粒下(φ0.5cm)・ローム  
ブロック(φ1~2cm)・炭化物  
粒子・焼土粒子(φ0.5cm)少
- 4 暗灰褐色土 黒褐色土ブロック(φ2~3cm)・  
ローム粒下(φ0.3cm)少
- 5 暗黄褐色土 壁基礎上(地山)、F0沈着部著
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多(四方)

第15号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 砂質、ロームブロック(φ2~  
3cm)多、天井部
- 2 暗褐色土 1層に近似、焼土粒子(φ0.5  
cm)多、天井部
- 3 暗黄褐色土 焼上粒子少、天井部炭化物部分
- 4 灰黒色土 燃焼部炭灰層、炭化物粒子多
- 5 暗褐色土 焼上粒子(φ0.8cm)多
- 6 暗褐色土 焼土粒子(φ0.8cm)多、粘粒面
- 7 灰黒色土 炭化物粒子層、灰褐色粘質土ブロック(φ3cm)多
- 8 灰黒色土 炭化物層、7層に近似、焼土粒子(φ0.8cm)多
- 9 黒褐色土 ローム粒子多、ロームブロック・焼土少、天井基礎  
上か
- 10 暗黄褐色土 地山近似、焼土粒子少
- 11 黒色土 S15埋土、炭化物層、焼土粒子(φ0.8cm)少

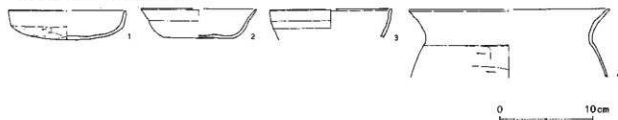
第275図 第15号住居跡出土遺物



第105表 第15号住居跡出土遺物観察表(第275図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器壺	(16.9)	3.1	—	EH	普通	灰青色	口30	ロクロ成形
2	須恵器壺	(18.4)	2.3	—	DEH	普通	灰褐色	—	ロクロ成形 内外面とも端部黒色
3	須恵器環	(12.2)	3.2	(7.3)	AEH	普通	灰白色	底45	ロクロ成形 B a
4	須恵器環	(11.9)	3.4	(7.3)	ABH	普通	暗灰褐色	口35	ロクロ成形 A
5	須恵器環	(11.9)	3.3	(7.0)	EH	不良	暗茶褐色	口35	ロクロ成形 C
6	須恵器環	13.4	3.5	7.7	DEH	不良	灰褐色	底65	器面風化 ロクロ成形 C
7	須恵器環	—	0.8	(6.6)	CEII	普通	青灰色	底70	ロクロ成形 R B 底に竪記号2カ所
8	須恵器環	—	1.0	(7.4)	AEH	普通	灰青色	底50	ロクロ成形 R B b
9	須恵器環	—	1.4	(8.6)	ACDEII	不良	灰褐色	底20	ロクロ成形 B b
10	須恵器環	12.2	3.9	5.2	AEH	普通	灰褐色	底95	ロクロ成形 RC
11	須恵高台陶	—	2.2	8.8	CDEH	不良	灰白色	底85	器面風化著 ロクロ成形 底:回転糸切り離し後 高台貼付か

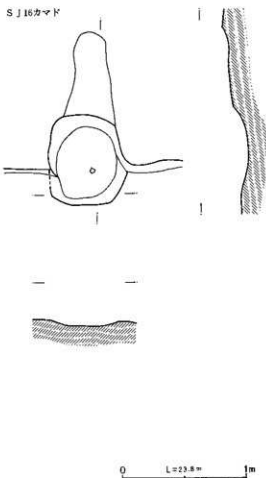
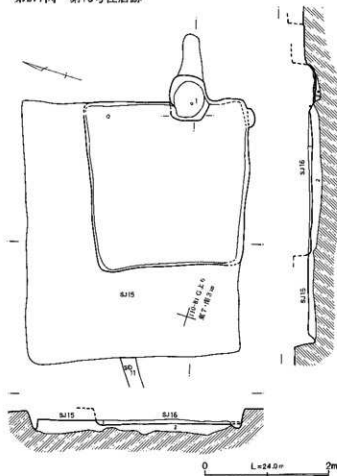
第276図 第16号住居跡出土遺物



第106表 第16号住居跡出土遺物観察表(第276図)

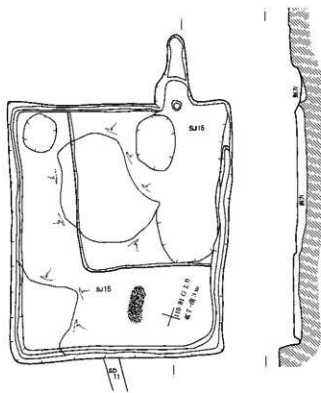
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.5)	3.2	—	CDEH	普通	赤褐色	口35	口:内外面横ナテ 作(外):寛削り (内):ナテ 器面風化
2	土師器環	(12.3)	3.1	—	AEFH	良	橙褐色	口30	口(上):内外面横ナテ (下):内外面ナテ 炭(外):寛削り
3	須恵器環	(13.0)	3.2	—	EH	良	青灰色	口15	ロクロ成形
4	土師器壺	(21.4)	7.4	—	ACE	普通	明褐色	口25	口:内外面横ナテ 胴(外):寛削り (内):寛ナテか 圓方

第277図 第16号住居跡



第15号住居跡カマド

- 1 紫褐色土 ローム粒下(φ0.8~0.9cm)・  
ロームブロック(φ1~2cm)多
- 2 紫黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多



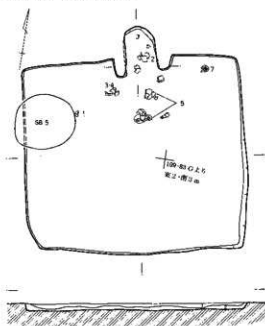
0 L=24.0m 2m

## 第16号住居跡 (第276・277区)

109・110-81・82グリッドに位置する。S J 15に切られる。S J 15は、本住居跡を拡張した住居跡と思われる。プランはコーナー部分にやや丸味をもつ方形を呈する。長径×短径×深さは2.67×2.63×0.27mである。主軸方向はN-73°-Eを差し、S J 15の主軸方向N-74°-Eと共通する。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より南寄りに設けられている。カマドは、全長72cm・焚

第278図 第17号住居跡



第17号住居跡土層

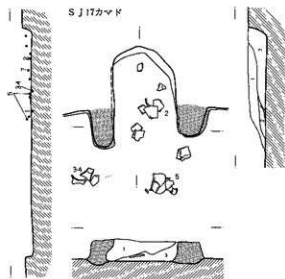
- |   |       |                                   |
|---|-------|-----------------------------------|
| 1 | 褐色土   | ローム粒子多、炭土粒子・炭化物粒子少                |
| 2 | 暗褐色土  | 黒褐色土ブロック・ローム粒子多、炭土少               |
| 3 | 暗灰褐色土 | ローム粒子多、灰褐色粘土粒子少、F <sub>0</sub> 石灰 |

0 L=24.0m 2m

口幅60cmを測る。住居跡本体と同様に、カマドも掘り方をもつ。S J 15のカマドは、本カマドを埋め戻して構築されている。燃焼部は、浅い土壌状を呈する。燃焼部内面には、焼土粒子・炭化物粒子が分布しているが、全体的にカマド内部の焼け方は弱い。

掘り方は全体的に掘り深めるもので、凹凸が多く、深さは5~20cmを測る。貼り床の厚さは5cm弱である。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは土師器、須恵器を合わせて計4点であった。



第17号住居跡カマド

- |   |       |                    |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 暗褐色土  | ローム粒子・炭土粒子少、天井部遺層土 |
| 2 | 暗赤褐色土 | 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子多 |
| 3 | 暗褐色土  | ローム粒子・炭化物粒子少、焼土粒子多 |

0 L=23.9m 1m

## 第17号住居跡 (第278・279区)

109-82-83グリッドに位置する。SB 5に切られる。プランはほぼ方形を呈する。長径×短径×深さは3.57×3.12×0.12mである。主軸方向はN-9°-Wを指す。

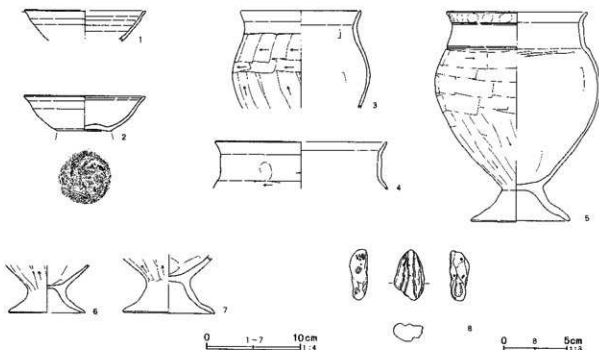
カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より、僅かに東寄りに設けられている。カマド袖は、地山と粘土の混合土で構築されているが、住居跡覆土にきわめて近いものであった。袖部は遺存度は良くない

ものの、内側ともに検出された。2・3層は燃焼部・煙出し部、1層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部内は、焼土粒子や炭化粒子が比較的多く分布するが、内面の焼け方は弱く、赤変硬化はほとんどみられない。住居跡は掘り方をもたず、砂粒を主体とする地山を、床面として使用していると思われる。

図化し得た遺物は土師器5、須恵器のほか、貝罌穴灰泥岩1の計8点であった。



第279図 第17号住居跡出土遺物



第107表 第17号住居跡出土遺物観察表(第279図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	(13.0)	3.2	—	EH	不良	明茶褐色	Π25	ロクロ成形
2	須恵器杯	13.0	3.7	5.9	ACDE	不良	暗灰褐色	—	ロクロ成形 RC
3	土師器甕	(12.9)	10.3	—	AEH	普通	茶褐色	Π85	口:内外面横ナテ 胴(外):籠割り (内):籠ナテ
4	土師器鉢	(18.3)	5.0	—	ABEFH	普通	暗茶褐色	Π25	口:内外面横ナテ 胴(外):籠割り (内):籠ナテ
5	土師台付甕	15.1	22.2	10.6	AEH	普通	黄褐色	Π85	口:内外面横ナテ (外):肩部指押え 胴(外):籠割り
6	土師台付甕	—	5.1	(8.2)	ADEH	普通	赤褐色	底40	胴(外):籠割り (内):籠ナテ 脚台:内外面とも横ナテ
7	土師台付甕	—	6.2	9.6	AEFH	普通	明褐色	底80	胴(外):籠割り (内):籠ナテ 脚台:内外面とも横ナテ

8は貝塚穴底泥岩である。今回の調査で検出された貝塚穴底泥岩の中でも、貝塚穴が明瞭な部類の1つであるといえよう。認められる貝塚穴は、縦方向が4箇所、横方向が2箇所の計6箇所である。

またこれらの他にも1~2mm程の小穴が多数みられる。規模は長さ3.9cm・幅2.5cm・厚さ1.4cm、重さ5.4gを測る。明赤褐色を呈し、被熱していることが明瞭である。

#### 第18号住居跡 (第280・281図)

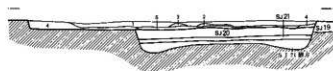
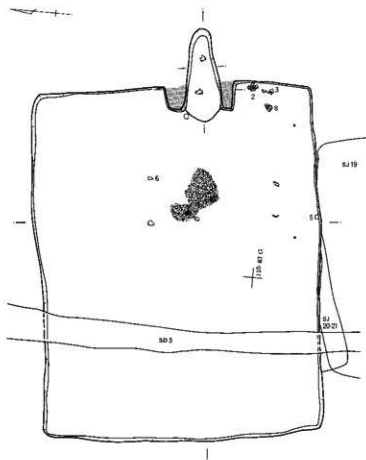
109・110・82・83グリッドに位置する。S J 19~21を切り、SD 5に切られる。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは5.63×4.61×0.13mである。主軸方向はN-84°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央よりやや南寄りに設けられている。全長1.49m。焚口幅0.66mを測る。遺存度は良くないものの、粘土と地山上の混合土で構築された袖部が、両袖とも検出された。8層は焚口部・燃焼部、9層は煙道部・煙出し部、4・6層は天井崩落土に相当すると思われる。焚口部・燃焼部とも、焼土粒子・炭化物粒子からなる層が観察されるが、底面はほとんど焼けておらず、赤変変化はみられなかった。

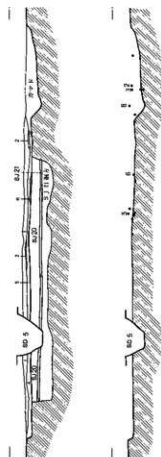
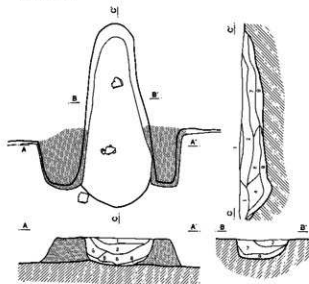
炭化物層が少なくとも2層存在し、床面の検出は困難であった。掘り方をもたず、砂粒を主体とする地山を床面としていると思われる。

図化し得た遺物は計8点であった。

第280図 第18号住居跡



S.J.18カマド



第18号住居跡土層

- 1 褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5 \sim 0.8$  cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 2 黒色土 炭化物多、焼土粒子少
- 3 暗褐色土 焼土ブロック( $\phi 2$  cm)・炭化物粒少
- 4 暗褐色土 黒褐色土ブロック( $\phi 3 \sim 5$  cm)・焼土粒少、Fe沈着
- 5 暗褐色土 焼土ブロック( $\phi 1$  cm)・焼土粒子( $\phi 0.5$  cm)多、ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)・炭化物粒子少
- 6 黒色土 炭化物層

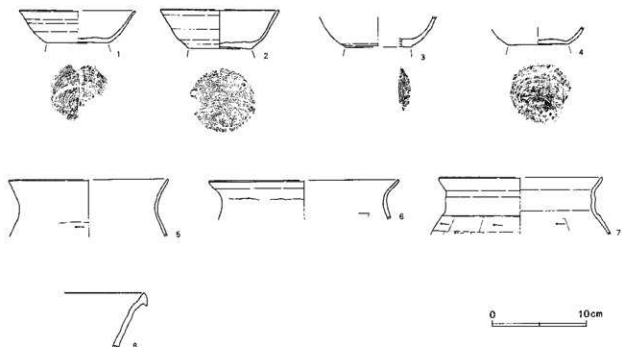
0 L=24.0m 2m

第18号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)・ロームブロック( $\phi 1$  cm)少
- 2 黒色土 焼土粒子( $\phi 0.5 \sim 0.8$  cm)・焼土ブロック( $\phi 2 \sim 3$  cm)・炭化物多
- 3 暗赤褐色土 焼土ブロック( $\phi 1 \sim 2$  cm)多
- 4 黒色土 ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)・焼土粒子( $\phi 5 \sim 0.8$  cm)・焼土ブロック( $\phi 2$  cm)少、炭化物多
- 5 暗褐色土 1層より軽い炭化物多、天井部
- 6 暗褐色土 焼土粒子( $\phi 0.5$  cm)少、天井部(地山露出)
- 7 黒褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)・焼土粒子・焼土ブロック( $\phi 1$  cm)・炭化物少
- 8 黒色土 炭化物層、ローム粒子( $\phi 0.3$  cm)・焼土ブロック( $\phi 1 \sim 2$  cm)少
- 9 暗褐色土 黒褐色土ブロック( $\phi 1 \sim 2$  cm)多、灰褐色砂粒・焼土粒子( $\phi 0.5 \sim 0.8$  cm)少、炭質

0 L=23.6m 1m

第281図 第18号住居跡出土遺物



第108表 第18号住居跡出土遺物観察表(第281図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	(12.4)	3.4	6.5	ABEH	不良	橙褐色	底70	ロクロ成形 RC
2	須恵器環	(12.6)	4.2	6.6	EH	普通	灰白色	底95	ロクロ成形 RC
3	須恵器環	—	3.2	(7.0)	DEH	普通	暗灰色	底15	ロクロ成形 C
4	須恵器環	—	1.8	6.4	CEH	不良	橙褐色	底85	ロクロ成形 RC
5	土師器鉢	(17.0)	6.1	—	ACEFH	普通	明褐色	口15	器面風化著 口:内外面横ナデ 胴(外):蓋割り (内):蓋ナデか
6	土師器鉢	(20.3)	4.2	—	ACEFH	普通	明褐色	口15	器面風化 口:内外面横ナデ 胴(外):蓋割り (内):蓋ナデ
7	土師器鉢	(17.5)	6.1	—	ACEH	普通	明褐色	口15	口:内外面横ナデ 胴(外):蓋割り (内):蓋ナデ
8	須恵器残	—	6.0	—	EH	良	黒灰/灰青	—	ロクロ水挽き成形 器形は歪む

第19号住居跡 (第282・283図)

110-82・83グリッドに位置する。S J 20・21を切り、S J 18・S K 16・S D 5に切られる。プランはコーナー部分に丸味をもった長方形を呈する。長径×短径×深さは3.91×2.97×0.17mである。主軸方向はN-86°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、やや南寄りに設けられている。全長1.5m・焚口幅0.41mを測る。焚口部と燃焼部を土壇状に掘り下げ、その上に粘土と地山土からなる混合土で、袖部と燃焼

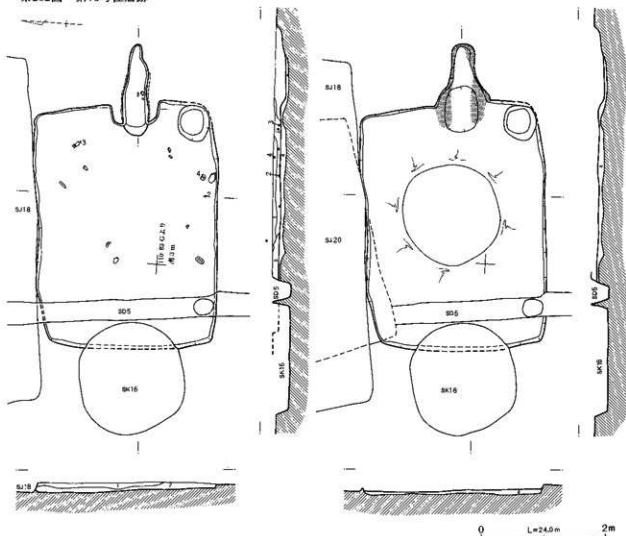
部などを構築している。状況は良くないものの、両袖とも検出できた。

カマドも掘り方をもつ。3層は燃焼部・煙道部、4層は煙出し部、1・2層は大井崩落土に相当すると思われる。焼土や炭・灰を主体とする層(3・4層)は厚く、燃焼部の左側面は赤色硬化が顕著にみられる。

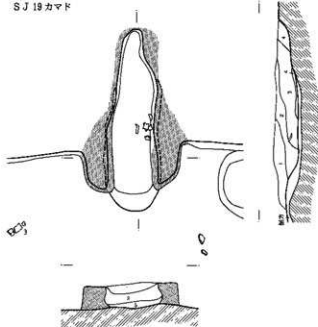
南東コーナーに貯蔵穴が検出された。住居掘り方は、中央を浅く掘り残すタイプである。

図化し得た遺物は、土師器1、須恵器2・須恵器環の底部を転用した紡錘車1の計4点であった。

第282図 第19号住居跡



S J 19 カマド



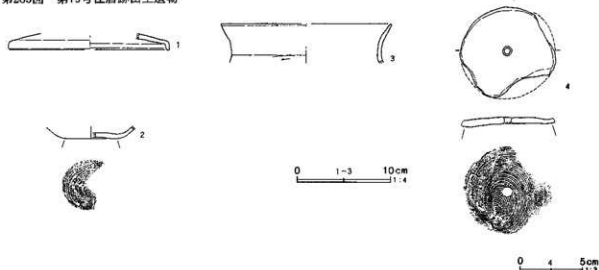
第19号住居跡土層

- 1 褐色土 ローム粒子( $\phi 0.3 \sim 0.5$  cm)多、炭化物粒子・焼土粒子少
- 2 暗褐色土 黒褐色土ブロック( $\phi 2 \sim 3$  cm)多、焼土ブロック( $\phi 1 \sim 2$  cm)・炭化物粒子少
- 3 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.3$  cm)・ロームブロック( $\phi 1$  cm)多、炭化物粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子少
- 4 暗褐色土 ロームブロック( $\phi 2 \sim 3$  cm)多、カーボン少

第19号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 褐色粘土粒子・焼土粒子少、天井部
- 2 暗褐色土 1層に近似、灰褐色粘土多、焼土粒子少、天井部
- 3 暗褐色土 焼土粒子( $\phi 0.8$  cm)・焼土ブロック( $\phi 1$  cm)多、炭化物粒子・灰褐色粘土少
- 4 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5$  cm)・焼土粒子( $\phi 0.5$  cm)・炭化物粒子少
- 5 黒色土 炭化物層、焼土少

第283図 第19号住居跡出土遺物



第109表 第19号住居跡出土遺物観察表(第283図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(17.1)	1.7	—	EH	不良	暗赤灰色	口15	ロクロ成形
2	須恵器坏	—	1.3	5.5	AEH	普通	灰赤色	底50	ロクロナデ C
3	土師器甕	(18.3)	4.3	—	ACEFH	普通	明茶褐色	口20	内外面とも横ナデ 胴(外):彫削り

4は紡錘車である。須恵器坏の底部を穿孔し、欠け口を面取りして転用したもの。但し、面取りの仕方は雑であるといえる。底部は全面糸切り離し。灰褐色、胎土はDEHを混入する。焼成：普通。直径7.3cm・厚さ0.6cm・孔径0.6cm・重量36.7gを測る。欠損している部分が多いが、転用以前か以後であるのかは不明。

第20号住居跡 (第284・285図)

109・110-82・83グリッドに位置する。S J 21を切り、S J 18・19、S D 5に切られる。プランは長方形を呈する。長径×短径×深さは3.75×2.85×0.29mである。主軸方向はN-73°-Eを指す。S J 19に切られているためか、南壁と西壁は不明確であった。

本住居跡は掘り方をもたず、S J 21の床面を2~4cmの暗褐色土で埋め戻しているが、両者のプランは一致している。本遺構は、S J 21の規模をそのままに、カマドを移動して、立て替えたものであろうか。

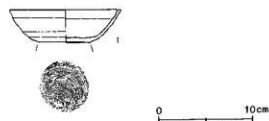
カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、南寄りに構築されている。状況は良くないものの、

両袖とも検出できた。袖部は、粘土と地山土からなる混合土で構築されている。5層は被熱のため赤変硬化した部分、3・4層は焚口部・燃焼部に相当すると思われる。1・2層はS J 18を構築する際に、埋め戻された土層であろうか。燃焼部は平坦な箱形を呈し、やや細長く平坦な煙道に続き、緩やかな立ち上がりをもつ円形の煙出しに至る。

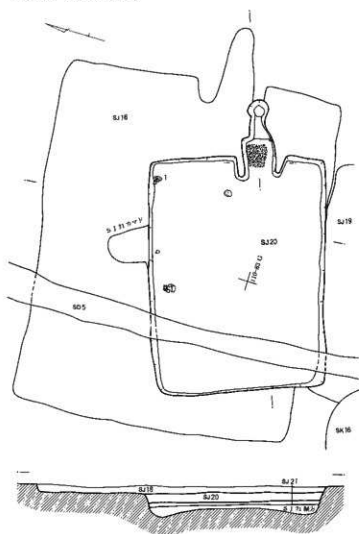
S J 21の床面を暗褐色土で、2~4cm程埋め戻して床面としている。

凶化し得た遺物は、須恵器坏1点のみであった。

第284図 第20号住居跡出土遺物



第285図 第20号住居跡

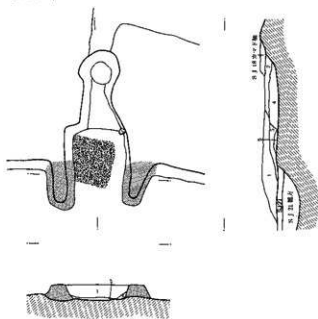


第20号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒下( $\phi 0.5 \sim 0.8 \text{ cm}$ )多、焼土粒下・炭化物粒下少
- 2 暗褐色土 1層に近似、ロームブロック( $\phi 1 \sim 2 \text{ cm}$ )多
- 3 暗褐色土 黒褐色土ブロック( $\phi 1 \sim 2 \text{ cm}$ )・ローム粒子( $\phi 0.8 \text{ cm}$ )・ロームブロック( $\phi 1 \sim 2 \text{ cm}$ )多、S J 22層上

0 L=240= 2m

S J 20 カマド

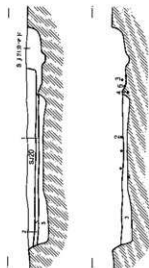
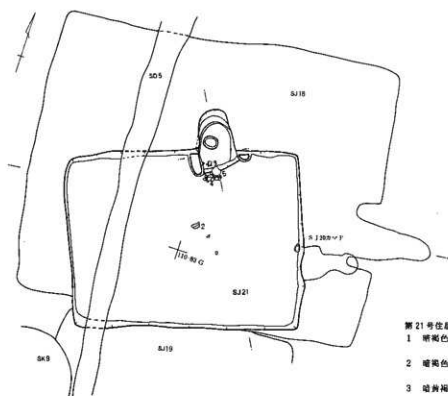


第20号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.3 \sim 0.5 \text{ cm}$ )多、焼土粒下( $\phi 0.8 \text{ cm}$ )・炭化物粒下少
- 2 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5 \text{ cm}$ )・ロームブロック( $\phi 1 \text{ cm}$ )・焼土粒下( $\phi 0.3 \text{ cm}$ )・炭化物粒下少
- 3 黒褐色土 ローム粒下( $\phi 0.3 \text{ cm}$ )・焼土粒下少、炭化物粒下多
- 4 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5 \text{ cm}$ )多、ロームブロック( $\phi 1 \sim 3 \text{ cm}$ )・焼土ブロック( $\phi 1 \sim 2 \text{ cm}$ )・炭化物粒下少
- 5 暗褐色土 焼土粒下(1・2層は埋め戻し)多、焼褐色土化範囲

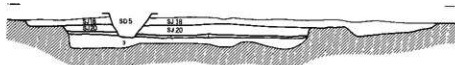
0 L=240= 1m

第286図 第21号住居跡(1)



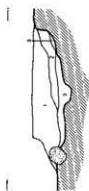
第21号住居跡土層

- 1 黄褐色土 ローム粒子(φ5~0.8cm)多、  
焼土粒子・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 1層に近頃、ロームブロック多、  
焼土粒子・炭化物粒子少
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック(φ3cm)多、カ  
ーボン少(縦方)



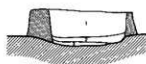
0 L=24.0m 2m

SJ21カマド



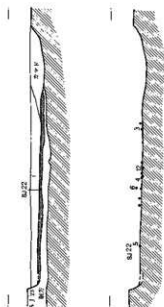
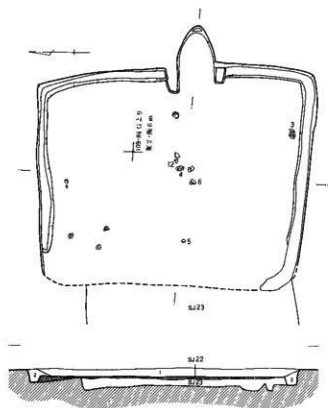
第21号住居跡カマド

- 1 暗黄褐色土 ローム粒子(φ0.3~0.5cm)多、焼土粒子  
(φ0.8cm)・炭化物粒子少
- 2 黄褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・ロームブロック(φ  
1cm)・焼土粒子(φ0.3cm)・炭化物粒子少
- 3 黒色土 ローム粒子(φ0.3cm)・炭化物粒子多、焼  
土粒子少



0 L=23.9m 1m

第287図 第22号住居跡

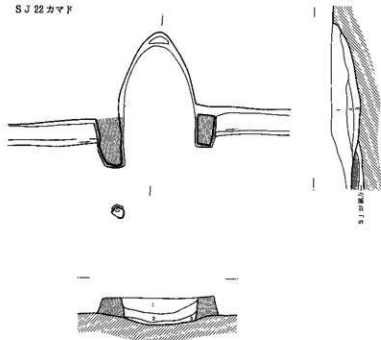


第22号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子多、焼土粒子少
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子少

0 L=2.40m 2m

S J 22 カマド

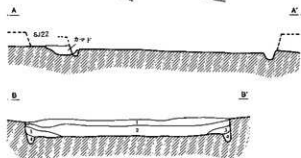
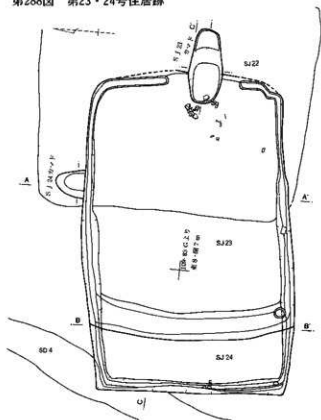


第22号住居跡カマド

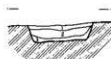
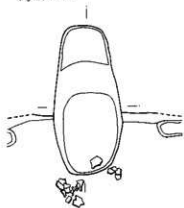
- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ5cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少、Fe・Mn沈着
- 2 暗褐色土 焼土粒子(φ0.5cm)多、焼土ブロック(φ1~2cm)・炭化物粒子少
- 3 黒色土 炭化物層、焼土ブロック(φ2cm)多

0 L=2.38m 1m



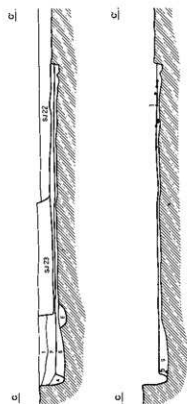


S J 23 カマド



第23号住居跡カマド

- 1 灰褐色土 竈床、粘土、暗黄褐色土との互層
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少
- 3 黒色土 炭化物粒子層、ロームブロック(φ2cm)少

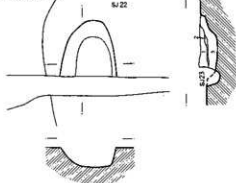


第23号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、焼土粒子(φ0.8cm)、炭化物粒子少、Fe・Mn 沈着
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少
- 3 暗褐色土 灰褐色粘土若干、ローム粒子(φ0.3~0.5cm)、炭化物粒子少
- 4 暗褐色土 ローム粒子(φ0.3~0.5cm)・ロームブロック(φ1cm)・炭化物粒子少
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック(φ2~3cm)多
- 6 黒褐色土 灰褐色粘土少、粘砂層、S J 21 灰黄褐色住跡

0 L=2.40m 2m

S J 24 カマド

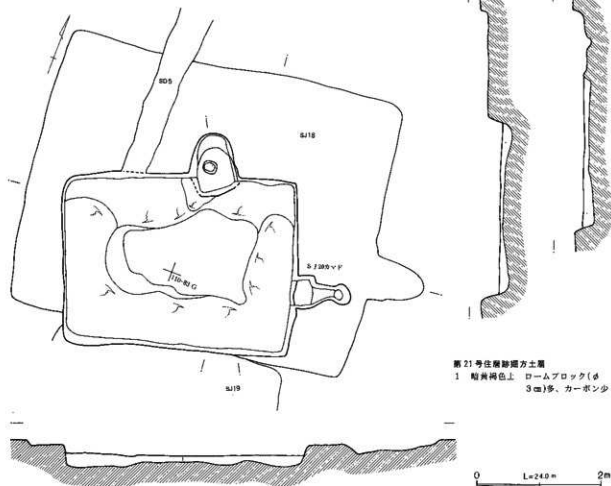


第24号住居跡カマド

- 1 黒褐色土 砂質、灰・焼土粒子・焼土ブロック(φ1~2cm)多
- 2 黒色土 炭化物粒子層、灰多
- 3 黒褐色土 砂質、焼土粒子(φ0.8cm)・焼土ブロック(φ1cm)多

0 L=2.35m 1m

第289図 第21号住居跡(2)掘方



第21号住居跡掘方土層  
 1 暗黄褐色土 ロームブロック(厚  
 3cm)多、カーボン少

第110表 第20号住居跡出土遺物観察表(第284図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器杯	11.9	3.5	5.6	EH	普通	孔灰色	底95	ロクロ成形	RC

## 第21号住居跡 (第286・289・290図)

109・110-82・83グリッドに位置する。S J 18-20、SD 5に切られる。プランは、コーナー部分に丸味をもつ長方形を呈する。長径×短径×深さは3.78×2.82×0.33mである。主軸方向はN-19°-Wを指す。本住居跡の上位面にS J 20がのっている。カマドの位置が異なるものの、両者のプランはきわめて良く一致している。これらの点から、S J 20は本住居跡のカマド付け替えに伴う建て替えであると推定される。

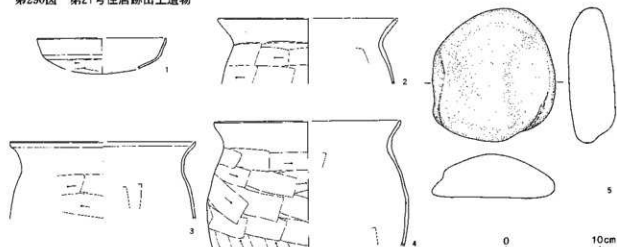
カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央より、やや東寄りに設けられている。状況は良くないも

の、両袖とも検出できた。袖部は、粘土と地山土からなる混合土で構築されている。燃焼部はやや箱形を呈するもので、浅く掘り窪められ、煙出し部に至って急勾配に立ち上がる。1層は天井崩落土、3層は燃焼部に相当すると思われる。燃焼部の右側壁は比較的良く焼けており、赤変硬化している。

掘り方は全体的に掘り窪めるタイプであるが、ドーナツ状に深く掘り下げ、中央部は浅い。床面には、踏み締めによると思われる硬化が認められた。周壁薄や貯蔵穴は確認されなかった。

図化し得た遺物は、計5点であった。

第290図 第21号住居跡出土遺物



第111表 第21号住居跡出土遺物観察表(第290図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	(13.9)	3.3	—	ADEH	普通	明茶褐色	U35	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):荒削り(内):ナテか
2	土師器甕	(19.2)	7.0	—	ACDEPH	普通	明茶褐色	U25	口:内外面横ナテ 胴(外):荒削り(内):ナテ
3	土師器甕	(19.9)	8.1	—	ACEH	普通	明茶褐色	U30	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):荒削り(内):荒ナテ
4	土師器甕	(19.9)	13.3	—	ACEH	普通	茶褐色	U25	口:内外面横ナテ 胴(外):荒削り(内):荒ナテ 外:スス付着

5は石皿であろうか。安山岩製。石材は、全体的に風化のため灰褐色に変色しているが、未風化の部分は帯緑灰色を呈する。

S J 21のカマド焚口部付近(第286図)から出土した。但し、この遺物そのものには被熱の痕跡は認められず、S J 21が廃棄された以降投棄されたもので平面形は楕円形に近い。一方の面は扁平で、他方は山形を呈する。14.1cm×13.1cm×4.5cm、1,251g。

#### 第22号住居跡(第287・291・292図)

109-83-84グリッドに位置する。S J 23-24を切る。西壁を第1次調査によるトレンチによって切られている。プランは方形に近い長方形を呈する。長径×短径×深さは4.48×3.57×0.14mである。主軸方向はN-88°-Eを測る。

カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、やや南寄りに設けられている。状況は良くないものの、両袖とも検出できた。袖部は、青灰色粘土と地山土からなる混合上で構築されている。2・3層は焚口部・燃焼部、1層は大井崩落土に相当すると思われ

る。左側の袖部～燃焼部側面に、赤色硬化がみられるが、全体的に焼け方は弱い。

幅15～20cm・深さ10cm前後の周壁溝が巡っているが、北西コーナー付近では途切れる可能性がある。

掘り方は部分的であり、暗黄褐色の地山ブロックを混入した暗褐色土で、埋め戻している。遺物は、床面から若干浮いた状態で出土した。

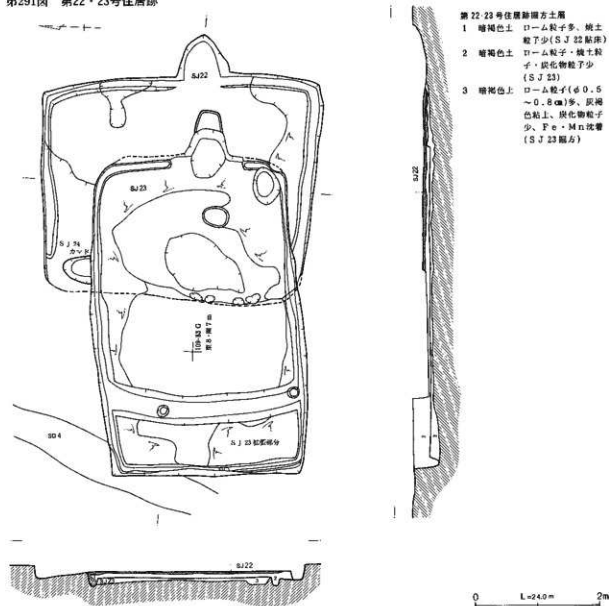
遺物の出土は比較的多く、同化し得た遺物は土師器・須恵器合わせて、計14点であった。

#### 第23号住居跡(第288・291・292図)

109-83-84グリッドに位置する。S J 24を切り、S J 22に切られる。プランは長方形を呈する。壁面は全体的に外側に膨らむが、西壁では顕著である。南東コーナー付近では、間壁溝がやや乱れる。長径×短径×深さは4.25×3.38×0.3mである。主軸方向はN-89°-Eを測る。

カマド一基が検出されている。カマドは東壁中央より、やや南寄りに設けられている。袖部は検出されなかった。2・3層は焚口部・燃焼部に相当すると思われ

第291図 第22・23号住居跡



れる。1層は上層が薄く分層できなかったが、天井崩落土の上面にS J 22の貼り床がのっている様子が観察された。カマド内面の焼け方は弱い。

掘り方をもたず、S J 22のほぼ直上になっている。北壁と南壁の多くの部分が共通しているほか、周壁溝も連続している。S J 22の東壁の位置は不明であるが、本住居跡の東壁と一致するとはプラン・規模からは考えにくい。本住居跡は、S J 22を東にずらし、カマドを付け替えて、立て替えをした遺構であろうか。

図化した遺物は、土師器2、須恵器3の計5点であった。須恵器環の1点には、墨書が認められた。

#### 第24号住居跡 (第288・292図)

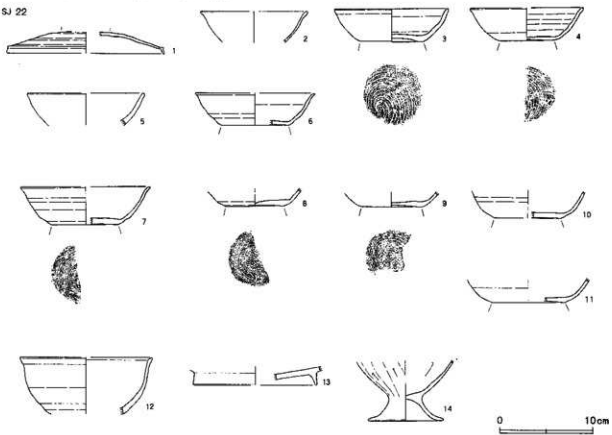
109-83・84グリッドに位置する。SD 4を切り、S J 22・23に切られる。プランは、カマドの位置から見て長方形を呈すると思われる。南北3.18m・深さ0.3mであるが、東西規模については不明であり、0.9mまで検出できたにとどまる。主軸方向はN-4°-Wを指す。カマド1基が、北壁に検出されている。カマドは検出位置からみて、中央より東寄りに構築されていると思われる。

全体的に、カマド内面の焼け方は弱い。

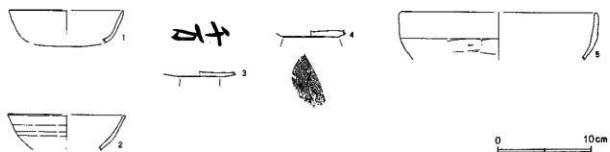
遺物は少なく、図化したのは1点のみであった。

第292图 第22·23·24号住居跡出土遺物

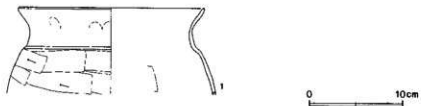
SJ 22



SJ 23



SJ 24



第112表 第22号住居跡出土遺物観察表(第292図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	(16.8)	2.3	—	EH	普通	灰青色	口15	口口成形 大井部:寛削り(R)
2	須恵器環	11.4	3.4	—	AEFH	不良	暗褐色	口15	口口成形
3	須恵器環	12.2	3.5	6.7	CFPH	不良	灰白色	底100	口口成形 RC
4	須恵器環	(12.0)	3.5	(5.8)	AEH	普通	雑茶/灰褐色	口145	口口成形 RC
5	須恵器環	(12.5)	3.4	—	CEH	良	灰白色	口115	口口成形
6	須恵器環	(12.7)	3.4	(7.1)	AEH	普通	暗灰青色	口125	口口成形 RC
7	須恵器環	(13.7)	4.0	7.0	AEH	普通	灰白色	底40	口口成形 RC
8	須恵器環	—	1.9	6.1	AEH	普通	青灰色	底50	口口成形 RC
9	須恵器環	—	1.6	(6.3)	ADEH	普通	灰白色	底50	口口成形 RC
10	須恵器環	—	3.0	(7.0)	CEH	普通	灰褐色	底20	口口成形 底:遺存範囲は寛削り
11	須恵器環	—	2.6	(7.8)	DEH	普通	灰褐色	底30	口口成形 底:回転糸切り難し 周辺寛削りか
12	須恵器鉢	(14.1)	6.0	—	EH	普通	暗灰色	口35	口口成形
13	須恵器碗	台(13.1)	2.0	—	ACEH	不良	明褐色	台30	器面風化著 口口成形 貼付高台
14	土師台付鉢	—	6.4	台8.1	AEFH	普通	黒褐色	台35	胴(外):寛削り(内):寛ナテ 脚台上下:内外面ナテ 下半:横ナテ

第113表 第23号住居跡出土遺物観察表(第292図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(12.1)	3.5	—	ADEH	普通	橙褐色	口15	器面風化著 口:内外面とも横ナテ
2	須恵器環	(12.6)	3.7	—	ACEH	良	青灰色	口15	口口成形
3	須恵器環	—	0.6	(7.6)	DEH	普通	灰白色	底90	口口成形 RC (内):墨書「千方」か 攝方
4	須恵器環	—	0.8	(6.0)	ACEH	不良	灰白色	底45	口口成形 RC
5	土師器碗	(20.8)	5.0	—	AEFH	不良	明褐色	口30	器面風化著 口:内外面横ナテか 体(外):寛削りか(内):ナテか

第114表 第24号住居跡出土遺物観察表(第292図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
1	土師器壺	19.9	9.1	—	ADEH	普通	明茶褐色	口55	口:内外面横ナテ 胴(外):寛削り(内):寛ナテ

## 第25号住居跡(第293・294図)

113-84グリッドに位置する。S J 26・27を切る。プランは隅丸の長方形を呈する。

本住居跡は、S J 26と床面を共有しており、西壁も一致している。またカマドの位置や、南壁も同じであると考えられる。これらの点から、本住居跡はS J 26を北側と東側に、拡張した遺構であると推定される。S J 25のカマド北側の東壁の位置から考えて、S J 26を拡張する(S J 25)際、カマドも外(東)側に少しずらしていると思われる。

長径×短径×深さは4.18×3.12×0.08mである。主軸方向はN-94°Eを指す。

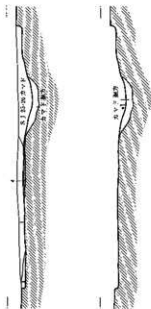
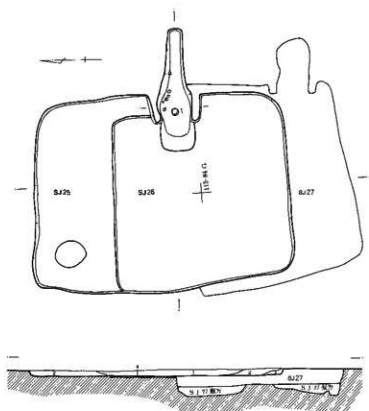
カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より、やや南側に構築されている。前述のように、S J 26のカマド位置をほぼ踏襲していると判断した。

8層はカマド掘り方であり、地山ブロックを多く含んだ暗黄褐色土で埋め戻されている。7層は燃焼部に相当すると思われるが、この層の上位面は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子などを含む暗褐色土で埋め戻されている可能性がある(5層)。6層は煙道部・煙出し部、4層は燃焼部を一旦埋め戻した後の、2次的な燃焼部、3層は大井崩落土に相当すると思われる。

大井崩落土(3層)の下位面の焼け方は弱い。状況はあまり良くないものの、両袖とも遺存していた。袖部は、粘土と地山土からなる混合土で構築されており、両袖とも内側は赤変硬化が認められた。

掘り方は存在しないが、S J 27の上位面では、貼り床状の部分から小範囲ではあるが確認された。

遺物は少なく、固化した遺物は3点であった。

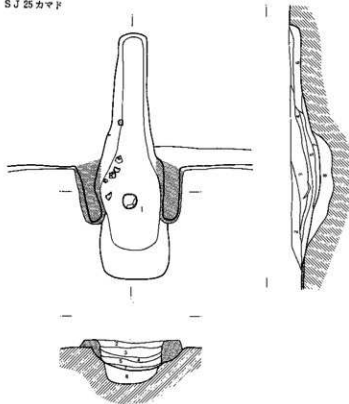


第25・26号住居跡土層

- 1 暗褐色土 灰色砂礫、ローム粒子(φ0.8cm)・炭化物粒子・焼土ブロック少
- 2 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm)多
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)多、焼土粒子(φ0.5cm)・炭化物粒子少
- 4 暗褐色土 S J 5 粘床

0 L=24.0m 2m

S J 25 カマド

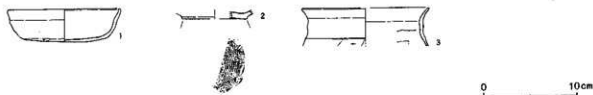


第25・26号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 砂質、焼土ブロック(φ1cm)少
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・炭化材少
- 3 暗褐色土 砂質、ローム粒子(φ0.5cm)多、焼土粒子少、天井部
- 4 灰色土 炭化物層、焼土粒子(φ0.3cm)・焼土ブロック(φ1cm)少
- 5 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)多、ロームブロック(φ1cm)・焼土粒子(φ0.1cm)少
- 6 暗褐色土 焼土ブロック(φ1~2cm)多、炭化物粒子少
- 7 灰色土 炭化物層、焼土粒子(φ0.5cm)少
- 8 暗褐色土 焼土ブロック40%、焼土粒子・炭化物粒子少(埋め戻し土・カマド側方)

0 L=24.0m 1m

第294図 第25号住居跡出土土遺物



第115表 第25号住居跡出土土遺物観察表(第294図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器鉢	12.0	3.5	—	ACEH	普通	橙褐色	口95	器面風化 口:内外面横ナテ 作(外):寛削り (内):ナテ
2	須恵器鉢	—	1.0	(6.8)	ABE	普通	白灰色	底35	口クロ成形 RC
3	土師器鉢	(13.6)	4.1	—	ACDEFH	普通	茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):寛削り (内):寛ナテ

## 第26号住居跡 (第293図)

113-84グリッドに位置する。S J 27を切り、S J 25に切られる。プランは、コーナー部分に丸味をもつ方形を呈するが、西壁の南半部は歪みをもつ。

本住居跡は、S J 25と床面を共有しており、西壁も一致している。またカマドの位置や、南壁も同じであると考えられる。これらの点から、S J 26は本住居跡を北側と東側に、拡張した遺構であると推定される。

北壁・東壁は拡張のため、南壁はS J 27との重複のため、プランの検出は困難であった。

本住居跡の東壁については、S J 25のカマド北側にある東壁が本来の位置であり、S J 25として建て替える際に、東側にも拡張したものと判断した。また、東壁の位置から考えて、本住居跡を拡張する際、カマドも外(東)側に少しずらしていると思われる。

長径×短径は2.85×2.8mを測り、床面についてはS J 25と共有しているため、S J 25と同じく0.10mである。S J 25は、本住居跡を北側に125cm・東側に35cm程拡張したことによる。

カマドについても、住居を拡張する際に、ある程度位置をずらして作り替えていると推定されるため、本住居跡に伴うカマドは遺存しておらず、従って詳細は不明である。

住居跡の遺存度は悪く、S J 25と重なる南壁でも、

立ち上がりは10cm程しか残っていない。柱・貯蔵穴・間壁跡はみられなかった。

掘り方は存在しないが、S J 27の上位面では、貼り床状の部分が小範囲ではあるか確認された。

本住居跡の床面を、S J 25の床面として踏襲しているため、本住居跡としての出土土遺物はなかった。

## 第27号住居跡 (第295図)

113-84グリッドに位置する。S J 30を切り、S J 25・26に切られる。プランは長方形を呈する。北壁・南壁の規模が異なること、東壁・西壁が平行していないことなどから、プランは歪んでいる。

長径×短径×深さは3.35×2.75×0.26mである。主軸方向はN-88°Eを指す。

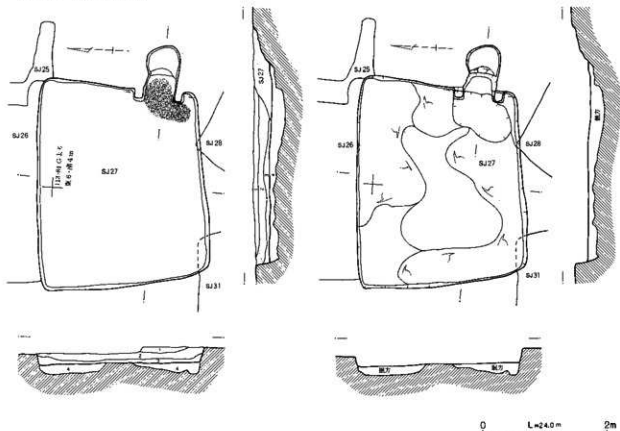
カマド1基が検出されている。カマドは東壁中央より南寄り、南東コーナー付近に設けられている。全長86cm・焚口幅51cmを測る。4・6-8層は燃焼部・煙出し部、1・3層は天井崩落土に相当すると思われる。袖の構築土は、僅かに粘土が含まれるのみでほとんど埋土と変わらなかったが、炭化物の分布から袖部の範囲が推定できた。

掘り方は、中央を浅く周囲を深く掘り下げるタイプであり、深い箇所では20cmを測り、凹凸が多くみられる。貼り床は存在しないと思われる。

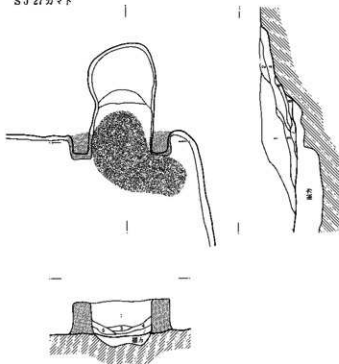
遺物は出土しなかった。



第295図 第27号住居跡



SJ27カマド



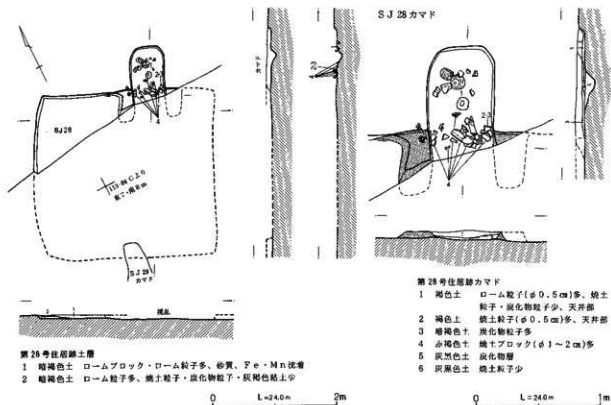
第27号住居跡土層

- 1 暗褐色土 硬質
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ5cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 3 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ1~2cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 4 黒褐色土 ロームブロック多、ローム粒子・焼土粒子豊富(藍方)

第27号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ3~5cm)多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(φ1cm)少
- 3 暗黄褐色土 地山に近似、ローム粒子(φ0.8cm)多
- 4 暗褐色土 焼土ブロック(φ1~2cm)多
- 5 暗褐色土 4層に近似、4層より焼土少
- 6 黒色土 炭化物層、灰白色灰土少
- 7 黒色土 炭化物層、焼土粒子少
- 8 黒褐色土 黒褐色土ブロック(φ1cm)・ローム粒子(φ0.5cm)多、焼土粒子少

第296図 第28号住居跡



第28号住居跡 (第296・297図)

113-84グリッドに位置する。S J 27を切り、S J 29を切っていると思われるが、S J 31との新旧関係は不明である。

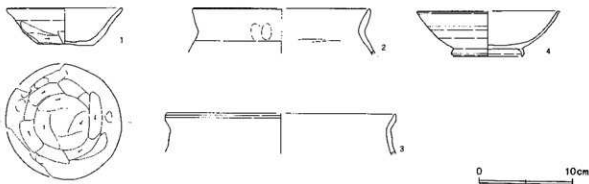
耕作による攪乱のため、北西コーナー付近以外は壁面がほとんど失われていたが、僅かな壁面の痕跡からプランを復元した。プランは方形を呈すると思われる。長径×短径は2.89×2.65mを測り、主軸方向はN-27-Eを指すと推定される。

カマド1基が検出されている。カマドは北壁中央よ

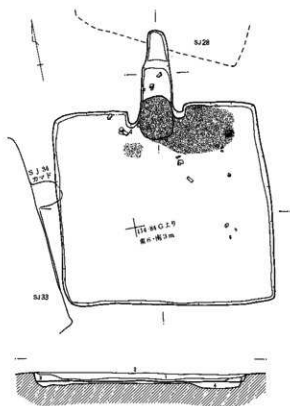
り、東寄りに構築されていると見なされる。袖部の構築土は埋土とほとんど変わらず、不明確であった。あるいは無袖のカマドであろうか。燃焼部中央にビットがあり、炭化物粒子が多量に混入していた(8層)。3~5層は焚口部・燃焼部、1・2層は天井崩落土に相当すると思われる。石製の支脚が、燃焼部底面に突き刺さった状態で検出された。カマド内は、底面・側面ともに焼け方は弱い。

本住居跡は掘り方をもち、地山を床面としている。灰輪陶器も含め、固化した遺物は計4点であった。

第297図 第28号住居跡出土遺物



第298図 第29号住居跡(1)

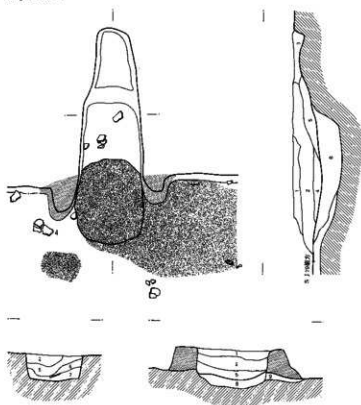


第29号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.3\text{cm}$ )・ロームブロック( $\phi 1\text{cm}$ )多、焼土粒子・炭化物粒子少、砂質
- 2 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.3\sim 0.5\text{cm}$ )・ロームブロック( $\phi 1\sim 2\text{cm}$ )・炭化物粒子多
- 3 暗褐色土 やや細かい、ローム粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )多、焼土粒子・炭化物粒子少
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多、ローム粒子・炭化物粒子少(屈方)

0 L=240m 2m

SJ29カマド



第29号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.3\text{cm}$ )多、焼土ブロック( $\phi 2\sim 3\text{cm}$ )少、天井部
- 2 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5\sim 0.8\text{cm}$ )多、焼土ブロック・炭化物粒子少、天井部
- 3 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )少、焼土粒子( $\phi 0.5\sim 0.8\text{cm}$ )多
- 4 黒色土 炭化物層、焼土粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )・焼土ブロック( $\phi 1\sim 2\text{cm}$ )多
- 5 灰黒色土 炭化物層、4層に近似、灰褐色粘土少
- 6 暗褐色土 焼土ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )多
- 7 暗褐色土 焼土・焼土粒子( $\phi 0.5\sim 0.8\text{cm}$ )・焼土ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )少
- 8 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )・焼土粒子( $\phi 0.8\text{cm}$ )・焼土ブロック( $\phi 1\sim 2\text{cm}$ )少、炭化物粒子多
- 9 暗褐色土 ローム粒子( $\phi 0.5\text{cm}$ )・焼土ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )・炭化物粒子多

0 L=240m 1m

第116表 第28号住居跡出土遺物観察表(第297図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	12.3	4.0	5.8	ACEF	普通	白橙褐色	口60	口:内外横ナテ 体上(外):ナテ部分指押え 下半~底:底削り
2	土師器甕	(18.8)	4.9	—	ADEFH	普通	橙褐色	口15	器面風化著 口:内外面横ナテ 胴(外):底削りか(内):底ナテ
3	土師器甕	(24.3)	4.3	—	AEFH	普通	茶褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):底削りか(内):底ナテか
4	灰釉碗	(15.2)	4.8	7.3	DE	普通	白灰色	底70	ロクロ水挽き成形 底:回転底削り(R)後 高台貼付

## 第29号住居跡 (第298~300図)

114-84グリッドに位置する。S J 28に切れ、また S J 34にも切られていると思われる。プランは方形を呈する。

長径×短径×深さは3.43×3.22×0.14mを測り、比較的小型の住居跡であるといえる。主軸方向はN-12°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは、北壁のほぼ中央に構築されている。全長1.76m・焚口幅0.52mを測る。遺存度は良くないが、両袖ともに検出された。

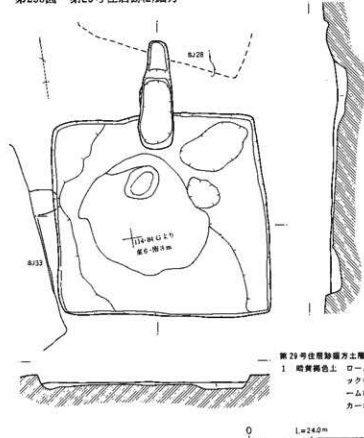
8・9層はカマド掘り方であり、炭化物を多量に含む黒褐色または暗褐色上で埋め戻されているが、とくに

9層では炭化物が層状に分布しているのが観察された。4・5層は焚口部・燃焼部、3層は煙道部・煙出し部、1・2層は天井崩落土に相当すると思われる。燃焼部は土壌状に浅く窪んで緩やかな勾配で煙道へと続き、煙出しの部分で急激に立ち上がる。燃焼部の左側側面が若干赤変硬化しているほかは、燃焼部・煙道部内面の焼け方は弱い。

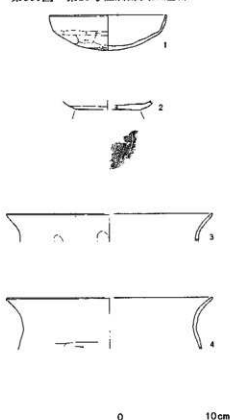
掘り方は中央を浅く、周囲を深く掘り下げるタイプであり、土層断面に貼り床が2枚検出されたが、図示できないほどの薄い土層であった。

出土した遺物はいずれも小破片で、図化し得た遺物は計4点であった。

第299図 第29号住居跡(2)掘方



第300図 第29号住居跡出土遺物



第117表 第29号住居跡出土遺物観察表(第300図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	12.5	3.7	—	ACEH	普通	茶褐色	口50	口:内外面横ナテ 体(外):甕削り(内):ナテ
2	須恵器環	—	1.0	(6.8)	DEF	普通	白灰色	底35	口:内外面とも横ナテ
3	土師器甕	(22.0)	3.0	—	ABEFH	普通	暗茶褐色	口15	口:内外面とも横ナテ
4	土師器甕	(21.9)	5.4	—	ACEH	普通	明茶褐色	口10	器面風化著 口:内外面横ナテ 胴(外):甕削り(内):甕ナテカ

## 第30号住居跡(第301・302・303図)

113・114-84グリッドに位置する。S J 31を切り、道路状遺構に切られる。住居跡西側は、道路状遺構に切られているため、僅かな痕跡からプランを判断したものである。プランはコーナー部分に丸みをもつ長方形を呈する。壁面が、南北方向と東西方向では直行しておらず、全体的にプランは歪んでいる。長径×短径×深さは3.89×3.18×0.18mを測る。主軸方向はN-7°-Wを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは全長1.22m・焚口幅0.5mを測る。カマドは貼り床面についていると思われる。部分的にはあるが、両袖が遺存しているのが確認された。16・17層は焚口部・燃焼部、18層は煙出し部、そして1層は天井崩落上に相当すると思われる。燃焼部の左側側面は、若干赤変硬化が認められた。

住居跡の掘り方は、中央を略方形に浅く掘り残り、周辺を深く掘り深めるタイプで、凹凸が多くみられる。

掘り方はカマド近くではとくに深く、25cm前後を測る。上層断面に、黄褐色の地山ブロックを含む2枚の貼り床が観察された。

出土した数少ない遺物はいずれも遺存度が悪く、円化し得たのは計4点であった。

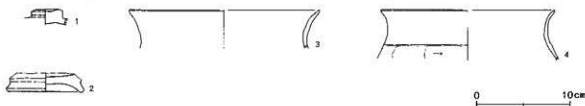
## 第31号住居跡(第302図)

113・114-84グリッドに位置する。S J 30および道路状遺構に切られる。住居跡西側は大部分失なわれているため、僅かな痕跡からプランを想定して、波線で図示した。プランは長方形を呈すると思われる。短径×深さは3.10×0.17mであり、長径については4.5mを測られると思われる。主軸方向はN-2°-Wと推定される。

住居跡の遺存していた範囲内では、カマドは検出されなかった。プランからみて、S J 30のカマドの位置と一致しているのであろうか。遺構の遺存度は非常に悪く、深い箇所でも壁面の立ち上がりは10cmに満たなかった。掘り方をもたず、地山を床面としている。

遺物は出土しなかった。

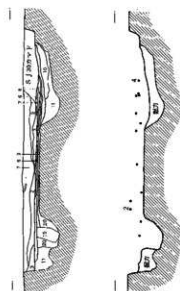
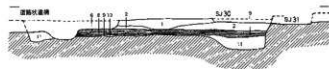
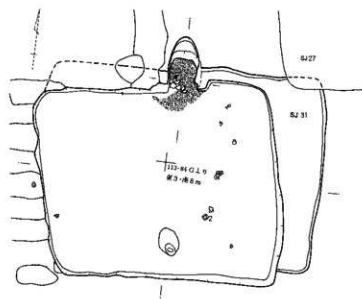
第301図 第30号住居跡



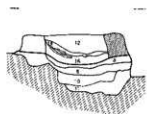
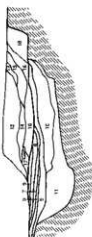
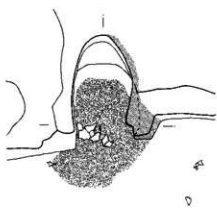
第118表 第30号住居跡出土遺物観察表(第301図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	幅3.3	1.7	—	AEH	普通	灰褐色	幅100	掘方
2	土師高合陶	—	2.0	台8.0	ABE	普通	明褐色/黒色	台90	器面風化著 ロクロ成形か 内黒処理
3	土師器甕	(20.3)	4.1	—	BCEH	普通	茶褐色	口15	口:内外面とも横ナテ 掘方
4	土師器甕	(18.6)	5.3	—	ABEF	普通	茶褐色	口15	口:内外面とも横ナテ 胴(外):甕削り(内):甕ナテカ

第302図 第30・32号住居跡



S J 30 カマド

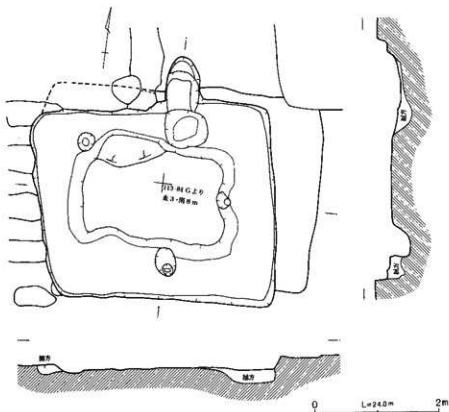


## 第30・31号住居跡土層

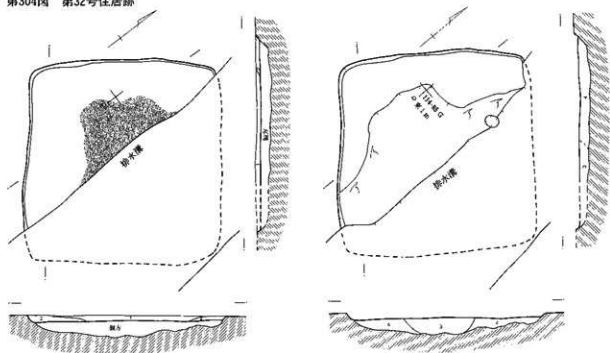
- |          |  |
|----------|--|
| 1 暗褐色土   | 砂質、ローム粒子( $\phi 0.2$ cm)・焼土粒子少                     |
| 2 暗褐色土   | ローム粒子( $\phi 0.5$ cm)・炭化物粒子少、Fe沈着、しまり強             |
| 3 暗褐色土   | 黒褐色土ブロック( $\phi 1\sim 2$ cm)多、炭化物粒子少、しまり強          |
| 4 黒褐色土   | ローム粒子( $\phi 0.5$ cm)・炭化物粒子少、粘性強                   |
| 5 暗褐色土   | ローム粒子・炭化物粒子少                                       |
| 6 暗赤褐色土  | S J 33 跡床  |
| 7 暗褐色土   | ロームブロック・ローム粒子少                                     |
| 8 暗赤褐色土  | S J 33 跡床  |
| 9 暗褐色土   | ロームブロック・ローム粒子多                                     |
| 10 黒褐色土  | ローム粒子・カーボン少(埋め戻しか)                                 |
| 11 暗褐色土  | ロームブロック・炭化物粒子少(S J 31 風方)                          |
| 12 暗褐色土  | ローム粒子・焼土粒子少、天井部                                    |
| 13 暗赤褐色土 | ローム粒子多、焼土粒子少                                       |
| 14 暗褐色土  | 焼土ブロック少、焼土粒子多                                      |
| 15 赤褐色土  | 焼土ブロック多、炭化物粒子少                                     |
| 16 黒色土   | 炭化物層、焼土粒子多   |
| 17 暗褐色土  | 焼土粒子・炭化物粒子少、砂質                                     |
| 18 暗褐色土  | 焼土粒子・焼土ブロック多                                       |
| 19 黒褐色土  | ロームブロック( $\phi 1$ cm)少、ローム粒子( $\phi 0.5$ cm)多      |
| 20 黒褐色土  | ロームブロック( $\phi 4\sim 5$ cm)・ローム粒子( $\phi 0.8$ cm)多 |

0 L=24.0m 1m

第303図 第30号住居跡



第304図 第32号住居跡



第32号住居跡土層

- 1 暗褐色土 ローム・ローム粒子(φ0.5cm)多、炭上・炭化物粒子少、硬質
- 2 暗褐色土 黒褐色上ブロック(φ1~2cm)多、ローム粒子(φ0.5cm)・炭化物粒子少、Fe沈着
- 3 黒褐色土 炭化物・焼土少(七層か)
- 4 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm)少

0 L=240m 2m

## 第32号住居跡 (第304・305図)

113-114-85グリッドに位置する。後代の水田耕作によって擾乱が顕著であり、プランは非常に不明瞭である。また、第1次調査によるトレンチによって、住居跡の東半部が失われている。

本住居跡は不明瞭な土質ではあるものの、掘り方をもつ。掘り方は比較的深く、浅い部分でも10cm弱、深い部分では30cmに達するものである。掘り方が全体的にこの規模であったとすると、住居跡のプランがトレンチの東側まで及んでいた場合、検出されると推定できるのではなかろうか。しかし、実際にはトレンチの東側には、本住居跡のプランもしくは掘り方は検出されなかった。この点から、本住居跡のプランは、トレンチ内に収まる規模であると判断した。

プランは、方形を呈すると思われる。長径×短径は概ね3.2×3.2mと推定され、深さは0.12mを測る。主軸方向については、N-53°-WまたはN-37°-Eである。

遺存範囲内では、カマドは検出されなかった。住居跡掘り方は、中央部を深く掘り下げるタイプであるが、3層の部分は土壌の可能性も考えられる。掘り残した箇所では地山を床面としており、全体的に柔らかい。

図化し得た遺物は1点のみであった。

第305図 第32号住居跡出土遺物



第119表 第32号住居跡出土遺物観察表(第305図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器甕	—	5.9	4.1	ADEH	普通	黒褐色	藍55	外面スス付着 (外): 藍削り (内): 藍ナデ

## 第33号住居跡 (第306・307図)

114-84グリッドに位置する。後代の耕作により、住居跡上面は擾乱を受けている。さらに住居跡西側を、第1次調査によるトレンチによっても擾乱されており、ほとんど床面まで届いている状況であった。

S J 34を切るが、道路状遺構とSD16に切られ、遺構の南西半部を失っている。そのため、プランが方形か長方形かについては不明である。

但し、住居跡の北壁と東壁は直角を呈しておらず、またごく狭い範囲内ではあるが、南壁も北壁と平行していない。これらの点から、本住居跡のプランは歪んでいたものと推定される。

住居跡の、南北規模と深さは3.35×0.23mであり、東西規模については、最大幅3.35mまでの遺存にとどまる。主軸方向はN-16°-Wを指す。

カマド1基が北壁に検出されている。全長90cm・焚口幅60cmを測る。住居跡本体〜カマド焚口部は、S J 34の上ののっている形となる。

カマド焚口周辺では、50×120cmの範囲に炭化物が分布しているのが検出された。この炭化物の分布状況を観察すると、焚口右側で僅かではあるが、凹字状に炭化物が途切れる箇所が認められた(=住居跡のプランが、カマド右側で屈曲する部分)。

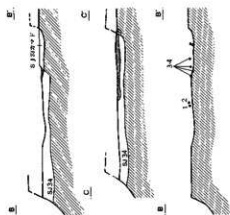
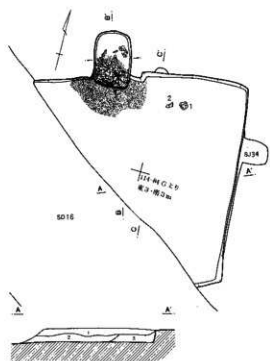
この屈曲部分の、遺存状況は明瞭なものではないが、その位置・形状からみて、カマドの袖部であると判断した。カマド掘り方は存在しない。1〜3層は焚口部・燃焼部・煙出し部に相当すると思われる。燃焼部内の層序は典型的なもので、上面から焼土層→炭化物層→灰層となっている。焼土や炭化物は明瞭に遺存しているものの、全体的にカマド内面の焼け方は弱い。

トレンチが、ほとんど床面にまで及ぶ状況であったため、床面の帰属は不明瞭であった。調査時の所見から、本住居跡はS J 34直上に、部分的に貼り床して構築されていると推定した。

図化し得た遺物は土師器甕3、須恵器環1の計4点であった。



第306図 第33号住居跡

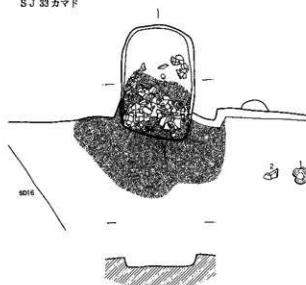


第33号住居跡土層

- 1 暗褐色土 炭化物粒子少、しまり強
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ1~2cm)多、焼土粒子・若干、しまり強
- 3 黒褐色土 ローム粒子(φ0.2cm)少、しまり強

0 L=24.0m 2m

SJ 33カマド

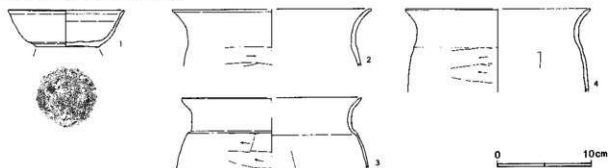


第33号住居跡カマド

- 1 赤褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)・焼土ブロック(φ1cm)多
- 2 灰黒色土 炭化物と灰かなる、ロームブロック(φ2~3cm)少、焼土粒子(φ0.5~1cm)多
- 3 黒色土 炭化物層、ロームブロック(φ1cm)・焼土粒子(φ0.8cm)少

0 L=23.9m 1m

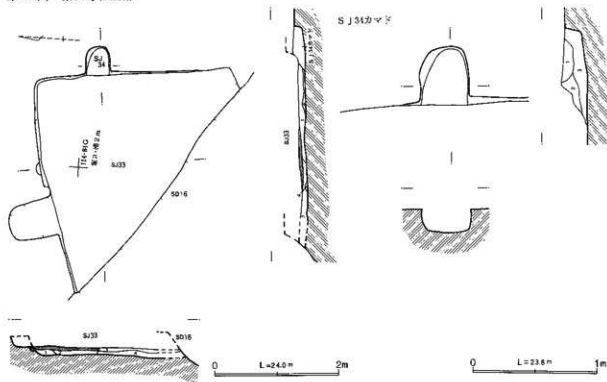
第307図 第33号住居跡出土遺物



第120表 第33号住居跡出土遺物観察表(第307図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	12.3	3.9	6.6	CEII	良	青灰色	底100	ロクロ成形 C
2	土師器甕	(21.3)	6.0	—	ABCEF	普通	橙褐色	口15	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り (内):篋ナテ
3	土師器甕	(19.1)	7.5	—	AEFII	普通	地茶褐色	口35	口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り (内):篋ナテか
4	土師器甕	(19.7)	8.8	—	ACDEFH	普通	茶褐色	口30	器面風化 口:内外面横ナテ 胴(外):篋削り (内):篋ナテ

第308図 第34号住居跡



第34号住居跡土層

- 1 暗褐色土 粘土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子少
- 2 暗褐色土 1層に近似、ローム粒子多
- 3 暗褐色土 黒褐色土ブロック少、ロームブロック多、層め戻しか
- 4 暗褐色土 地山に近似、ローム粒子多、層め戻しか

第34号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 焼土ブロック多、硬質
- 2 暗褐色土 粘土粒子・炭化物粒子少、硬質
- 3 暗褐色土 ロームブロック多、炭化物粒子少、硬質

## 第34号住居跡 (第308・309図)

114-84グリッドに位置する。後代の水田耕作による擾乱が顕著であり、遺構の遺存状況はきわめて悪い。

S J 29を切っていると思われる。南北S J 33とSD 16には切られている。これらの重複関係のほかに、南北方向の土層断面では、焼土ピットを切っているのが観察された。コーナー部分が1箇所しか遺存していないため、プランが方形か長方形であるのかについては不明である。

但し、北壁はS J 33のカマド付近でやや屈曲してい

るほか、東壁とは直角を呈していない。これらの点から、住居跡のプランは比較的歪んだものであると推定される。

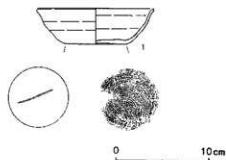
住居跡の規模は、遺存していた範囲内で東西・南北ともに3.5m、深さは10cm前後であった。主軸方向はN-85°-Eを指す。

カマド1基が検出されている。カマドは、東壁の中央から北寄り、北東コーナーに近くに構築されている。全長78cm・燃焼部幅40cmを測る。1～3層は焚口部・燃焼部に相当すると思われる。全体的に、カマド内面

第121表 第34号住居跡出土遺物観察表(第309図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	12.5	3.8	6.5	BEH	普通	暗灰褐色	底90	ロクロ成形 RC 宛記号「ノ」有

第309図 第34号住居跡出土遺物



の焼け方は弱い。

焚口部・燃焼部ともに、底面はほぼ平坦で短く、煙出し部は急勾配に立ち上がる。袖部に該当するあたりの上質はほとんど地山であり、無袖の可能性も考えられる。

本住居跡の床面については、第1次調査によるトレンチによって、ほとんど床面が現れてしまったためS J 33・34のいずれに帰属するのであるか不明瞭であった。

本住居跡は、プラン的にはカマド1基と北壁・東壁の一部が遺存していたにとどまる。可能性としては2点が挙げられる。

- (1) 本住居跡は、カマドが遺存するのみでS J 33構築の際、掘り方掘削によって完全に破壊されてしまった。従って、床面も遺存していない。この場合、1～4層はS J 33の掘り方ということになる。カマドの付け替えによる建て替えであろうか。
- (2) 本住居跡の床面については、掘り方をもち地山をそのまま床面としている。この場合、1～4層は本住居跡の埋土ということになる。

調査時の印象では、(1)の可能性がより高いと思われた。

出土した遺物はきわめて少なく、図化し得た遺物は須恵器環1点のみであった。

なお、焼土ピット内からの出土遺物はなかった。

## (2) 掘立柱建物跡

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、合わせて67棟であった。内訳は第14地点：43棟（64.2パーセント）、第15地点：9棟（13.4パーセント）、第16地点：15棟（22.4パーセント）、である。

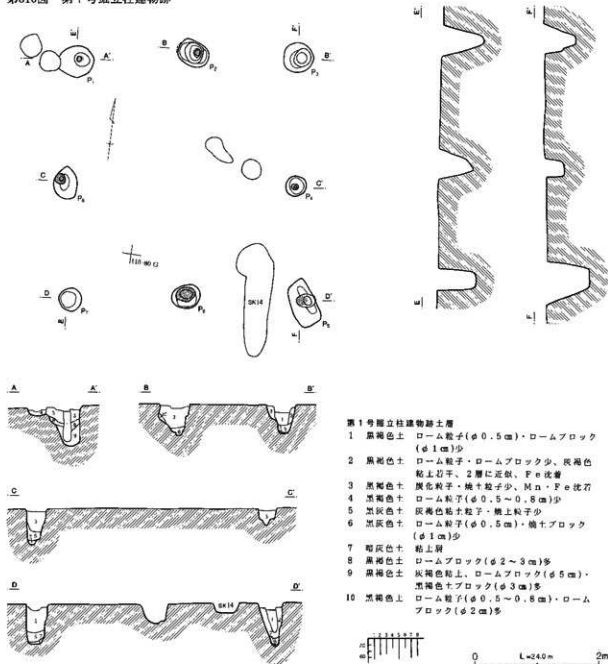
9棟のうちSB9を除いた8棟は、調査区北部に集

中している。検出し得た範囲内では、掘立柱建物跡同士や住居跡との重複例はないと思われる。

SB9はこれらの掘立柱建物跡とはやや離れて位置する大型のもので、 $2 \times 3$ 軒で東側に庇をもつ。

そしてこのSB9を回り込むようにして道路状遺構が検出された。両者は併存関係にあったと思われる。

第310図 第1号掘立柱建物跡



### 第1号掘立柱建物跡 (第310図)

109・110-79・80グリッドに位置する。今回の発掘調査で検出された遺構のうちで、最西端に位置する掘立柱建物跡である。ピットの新旧関係は不明である。

規模は2×2間で桁行3.9m・梁行3.7mを測り、柱間距離は、桁行で芯々1.9m、梁行では芯々1.9mと2.0mを測る。

P4・P8は桁行線上より西側にずれている他、P2・P6は梁行線上よりやや北側にずれており、プランは全体的に歪んである。主軸方向はN-4°-Wを指す。

柱穴は、35×35cm～60×50cmの円形もしくは楕円形を呈するものであるが、南東のコーナー・ピット (P

5)のみは85×40cmの長方形を呈するものが混在している。柱穴の掘り方は、比較的小規模である。

8本の柱穴のうち、5本で柱痕を検出できた。直径は、15×15cm前後である。1層は柱痕に相当すると思われるが、その周囲には黒褐色土が充填されている。

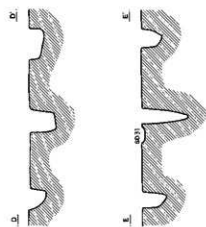
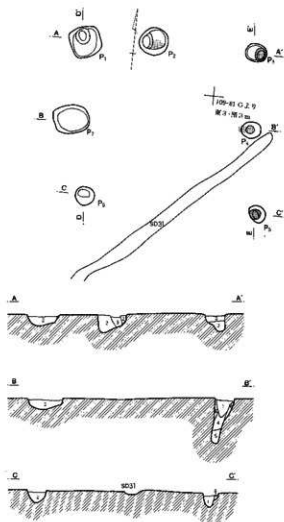
土師器甕と須恵器環の小破片が出土したが、円化には至らなかった。

### 第2号掘立柱建物跡 (第311図)

109-81グリッドに位置する。SD31と重複するが、新旧関係は不明である。

P5-P6間にピットはみられない。可能性として a：P5-P6間のピットが、SD31と重複して失われている。 b：プランはP5・P6以南に続くが、ピッ

第311図 第2号掘立柱建物跡



#### 第2号掘立柱建物跡土層

- 1 黒褐色土 ローム砂子(φ0.5cm)・ロームブロック(φ1cm)少
- 2 黒褐色土 炭化砂子、焼上砂子少、Mn・Fe沈着
- 3 黒褐色土 ローム砂子少、2層に近接
- 4 黒灰色土 灰褐色粘土・焼上砂子少
- 5 暗灰色土 粘土層
- 6 暗褐色土 黒褐色土ブロック(φ1~2cm)少、地山に近接



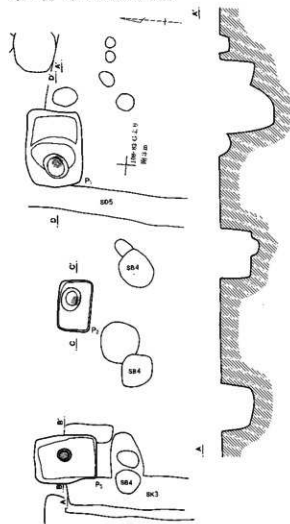
0 L=24.0m 2m

トが既に失われている。両方の可能性を想定して、周辺の精査を繰り返したが、ピットは検出されなかった。a・bいずれとも確定はできなかった。従って規模は、桁行は2間までできたに留まり2.5m、梁行は2間で2.8mを測る。柱穴の並びは比較的悪く、プランはやや歪みがある。主軸方向はN-4°-Wを指す。

柱穴は、30×25cm～45×55cmの円形を呈するものと、50×50cmと60×45cmの、方形あるいは長方形を呈するものとが混在している。深度は概ね40cm前後であるが、P4のみは70cmを越える。柱穴の掘り方は、比較的小規模であるといえる。1層が柱痕に相当すると思われるが、抜き取りされているとみられるピットも存在する。

須恵器環の小破片が出上したが、凶化には至らなかった。

第312図 第3号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡 (第312図)

108-82グリッドに位置する。SD5やSK3と重複しているが、新旧関係については不明である。

検出できたのは東西方向の2間のみであるが、掘り方の規模からみても柵列とは考えにくい。遺構としては掘立柱建物跡であり、プランは調査区外に続くと判断した。

柱穴掘り方の規模の大きさから、他の遺構との重複や表土削平等によって柱穴が吹かれた可能性は低いと思われる。東西規模は2間で、芯々2.7mを測る。軸方向はN-84°-Eを指すが、P1～P3が梁行である場合の主軸方向は、N-6°-Wを指す。

柱穴は、いずれも長方形を呈するもので、深度も深く掘り方は明瞭であった。1・7層は柱痕に相当すると思われる。P3では柱穴底面から浮いた状態で、直



第3号掘立柱建物跡土層

- |          |   |
|----------|---|
| 1 黒褐色土   | ロームブロック(φ2~3cm)多、粘性强                                |
| 2 黒褐色土   | ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ1~2cm)多、F+沈着                 |
| 3 黒褐色土   | ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ5~10cm)多                     |
| 4 暗褐色土   | ロームブロック(φ3cm)多                                      |
| 5 黒灰色土   | 灰褐色粘土・黒褐色土ブロック(φ2~3cm)多、粘性强                         |
| 6 黒褐色土   | 灰褐色粘土層、ローム粒子(φ0.8cm)多、ロームブロック(φ1cm)・黒褐色土ブロック(φ1cm)少 |
| 7 灰褐色粘土層 |   |



径十数cmほどの川盤形の石が検出された。柱痕は直径約20cmで、周囲は黒褐色または黒灰色の号級な充填土であった。

土師器甕の小破片が出上したが、固化するには至らなかった。

#### 第4号掘立柱建物跡 (第313図)

108-82グリッドに位置する。SB3・5に挟まれる位置に当たる。SK3、SD32およびピットと重複するが、新川関係は不明である。

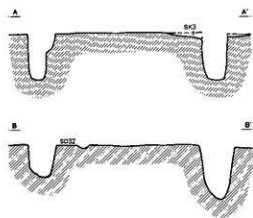
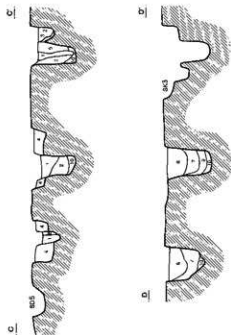
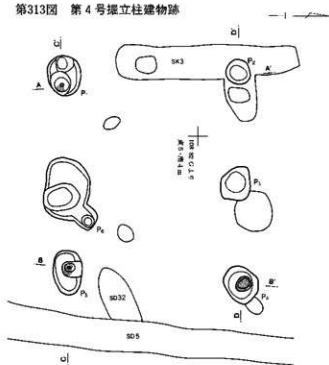
規模は1×2間で、桁行は芯々で3.3m(北側)と2.9m、梁行は芯々で2.8mを測る。柱間距離はP5-P

6間が1.2mである他は、概ね1.7mである。梁行での柱間距離は大きく、桁行規模に等しい。P1-P2間・P4-P5間にも柱穴が存在したのであろうか。

本遺構の柱穴の深度は深く、深いものでは85cm、浅いものでも50cmを越えている。表土削平やプラン確認による削平によって、柱穴が失われたとは考えにくい。この位置に柱穴があったとすれば、補助的なものであったと思われる。柱痕の位置から見ても、プランは歪んでいるといえよう。主軸方向は、N-88°-Eを指す。

柱穴は、P6を除いて比較的小規模な掘り方で、円

第313図 第4号掘立柱建物跡



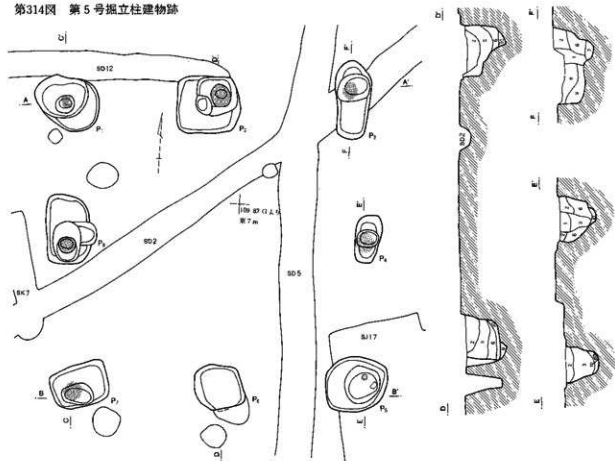
#### 第4号掘立柱建物跡土層

- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| 1 黒褐色土  | ローム粒子(φ0.5cm)・ロームブロック(φ1cm)少 |
| 2 黒褐色土  | 炭化粒子・焼土粒子少、Mn・Fe沈着           |
| 3 黒褐色土  | ローム粒子(φ0.5~0.8cm)少           |
| 4 黒灰色土  | 灰褐色粘土・焼土粒子少                  |
| 5 黒灰色土  | ローム粒子(φ0.5cm)・焼土ブロック(φ1cm)少  |
| 6 緑灰色土  | 粘土層                          |
| 7 黒褐色土  | ロームブロック(φ2~3cm)多             |
| 8 黒褐色土  | 灰褐色粘土・ロームブロック(φ5cm)・黒褐色土多    |
| 9 暗灰色粘土 | ローム粒子(φ0.5cm)多               |
| 10 暗褐色土 | 黒褐色土ブロック少、地山に近似              |



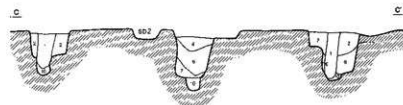
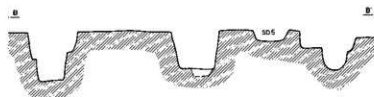
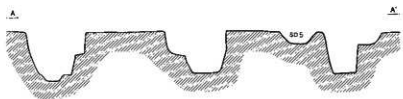
0 L=24.0m 2m

第314図 第5号掘立柱建物跡



## 第5号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色土 粘土粒子・炭化粒子少
- 2 黒褐色土 焼土粒子少、Fe・Mn 斑石
- 3 黒色土 粘性強、褐色粘土層
- 4 黒褐色土 ローム粒下(φ0.5cm)、ロームブロック(φ5cm)多
- 5 黒褐色土 ロームブロック(φ2~3cm)多
- 6 黒褐色土 灰褐色粘土・黒褐色土ブロック(φ4~5cm)多
- 7 黒灰色土 灰褐色粘土少、粘性強
- 8 暗褐色土 ロームブロック(φ4~5cm)、黒褐色土ブロック(φ3~4cm)多
- 9 黒褐色土 ローム粒子(φ0.8cm)・ロームブロック(φ2~3cm)多
- 10 暗灰褐色土 粘土質





形もしくは楕円形を呈するものと、長方形を基本としたものが混在する。1層は、柱底に相当すると思われる。黒灰色の充填土（3層）は堅緻であった。

土師器甕の小破片が出土したが、図化できなかった。

#### 第5号掘立柱建物跡（第314・317図）

108・109-82グリッドに位置する。S J 12を切っているが、それ以外に重複関係にある遺構との新旧関係は不明である。

規模は2×2間であり、桁行4.7m・梁行4.5mを測る。柱間距離は、桁行で概ね芯々2.3m、梁行で2.1mと2.4mである。桁行西側と梁行北側では、柱底がそれぞれ線上にのっているが、両者は直角を呈しておらず、またP4も桁行線上から外（東）側にずれている。プランは全体的にやや歪んでいるといえよう。主軸方向はN-5°-Wを指す。

柱穴は、80×40cm～110×70cmの方形もしくは長方形を呈するものが基本となっているが、P5は110×90cmの楕円形に近い。深度は55～100cmで、概ね60～70

cmと深い。掘り方は全体的に大規模である。1層は、柱底に相当すると思われる。柱穴への充填土は、黒褐色または暗褐色の堅緻なものであった。P8は内側に張り出しているが、柱の抜き取りの底跡であろうか。

土師器環と須恵器環の小破片が出土したが、図化し得たのは、P5から出土した1点のみであった。

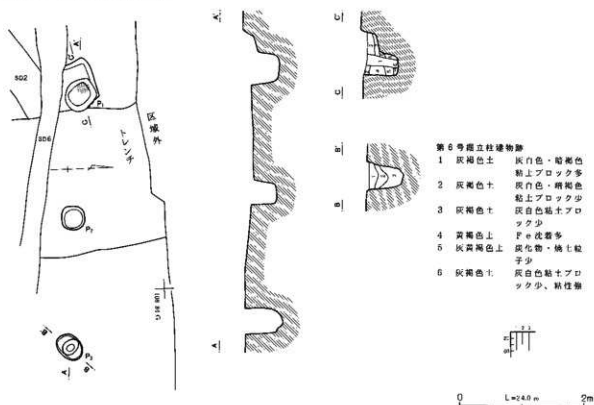
#### 第6号掘立柱建物跡（第315図）

108-83・84グリッドに位置する。周囲の精査を繰り返したが、これらの他にビッドは検出されなかった。

調査担当者として、掘立柱建物跡である判断したが、構列跡の可能性も否定できない。掘立柱建物跡であれば、遺構は北側に続くと考えられる。

検出されたのは東西方向に2間（4.0m）であり、この範囲内でみる限り、柱穴の並びは整っているといえる。この2間の他には、東側にも西側にも続かないものと思われる。この軸方向はN-86°-Wであるが、この柱穴の並びが梁行である場合、主軸方向はN-4°-Eである。

第315図 第6号掘立柱建物跡



柱穴の平面規模×深度・平面形態は、P1:50×60cm・円形、P2:40×35×40cm・円形、P3:45×35×60cm・長方形である。全体的に、柱穴の掘り方は小規模である。P1の1層は、柱痕に相当すると思われる。2～6層は、焼上粒子や灰白色の粘土ブロックを少量含む、灰褐色または黄褐色の堅緻な充填土であった。

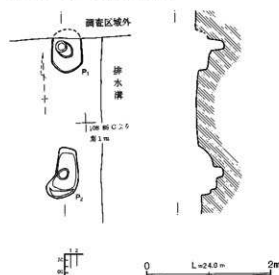
遺物は全く出土しなかった。

#### 第7号掘立柱建物跡 (第316図)

107・108-84グリッドに位置する。第15地点北東端において南北方向の1間が検出されたのみである。

棚列跡の可能性も考えたが、a:柱穴の掘り方が比較的大きいこと、b:P2が礎状を呈しており、コーナー・ピットの可能性が考えられる点などから、掘立柱建物跡であると判断した。この場合、プランは北側と東側に続くと思われるが、P2の形態から、掘立柱建物跡の南東コーナーに相当する可能性もある。ピット

第316図 第7号掘立柱建物跡



は既に尖われていたのであろうか。柱間距離2.0mで、軸方向はN-2°-Eを指すが、この方向が梁行の場合、主軸方向はN-88°-Wとなる。検出された柱痕は、掘り方底面よりもさらに深く掘り下げられている。P2の規模は、80×35cmで、深度はそれぞれ40cm程度である。

遺物は全く出土しなかった。

#### 第8号掘立柱建物跡 (第318図)

109-84グリッドに位置する。いくつかのピットと重複するが、それ以外の遺構との重複関係はない。なお、ピットとの新旧関係は不明である。

規模は2×2間で、桁行は東側で3.8m・西側で3.2m、梁行は北側で3.7m・南側で3.6mを測る。桁行同士は平行しているものの、梁行同士は平行していない上に、桁行と直角を呈していない。全体的にプランは大きく歪んでいる。主軸方向はN-4°-Wを指す。

柱間距離は、桁行P3-P4間=2.1m・P4-P5間=1.7m、P7-P8間=1.3m・P8-P1間=1.9m、梁行P1-P2間=1.7m・P2-P3間=2.0m、P5-P6間=2.5m・P6-P7間=2.1mを測る。柱間距離はきわめて不規則である。とくにP7は位置的にもずれており、掘り方も他のピットに比べ浅い。

柱穴は、30×25cm～35×30cmと一定した規模の、円形もしくは楕円形を呈するものである。深度は約20～45cmであるが、概ね30～40cmを測る。全体的に、柱穴の掘り方は小規模である。3本の柱穴で、柱痕を検出することができた。柱痕は、直径約10×10cmである。1層は柱痕に相当すると思われる。

遺物は全く出土しなかった。

第122表 第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第317図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	-11.9	3.4	-5.6	DEH	普通	灰白色	円30	ロクロ成形	C

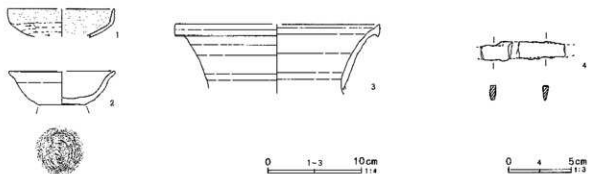
第123表 第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第317図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器環	-11.5	3	-	AEF	普通	明茶褐色	-	口:内外面とも横ナテ 体(外):篋倒り 内面-口縁(外):赤彩	
2	土師器環	-11.4	3.6	5	AHE	不良	橙灰色	円15	器面風化 ロクロ成形 RC 二次的な熟を受け赤色化	
3	須恵器環	-21.9	7.4	-	EH	良	緑灰色	円15	内外面とも自然粘付着 ロクロ成形	

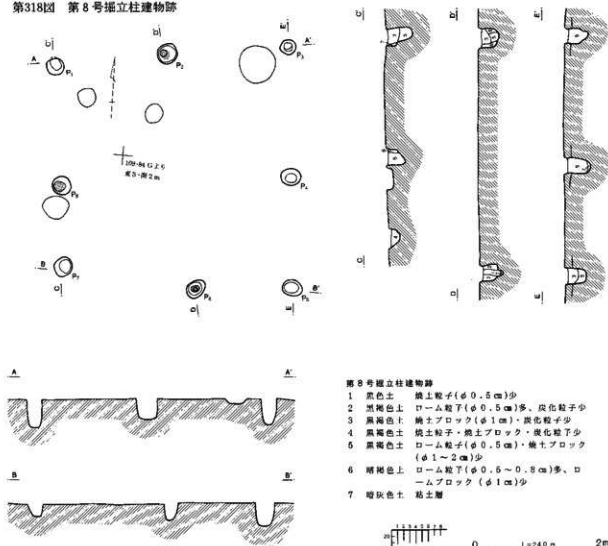
4 は刀子 (鉄製) と思われる。錆化著しく原形をとどめない。平棟造り、平開造りで閃は直角に近いと思われる。現存長6.5cm・基部幅1.1cm・基部厚0.4cm・刃部幅1.1cm・刃部厚0.4cm、16.8gを測る。

第317図 第5・9号掘立柱建物跡出土遺物

SB 9



第318図 第8号掘立柱建物跡

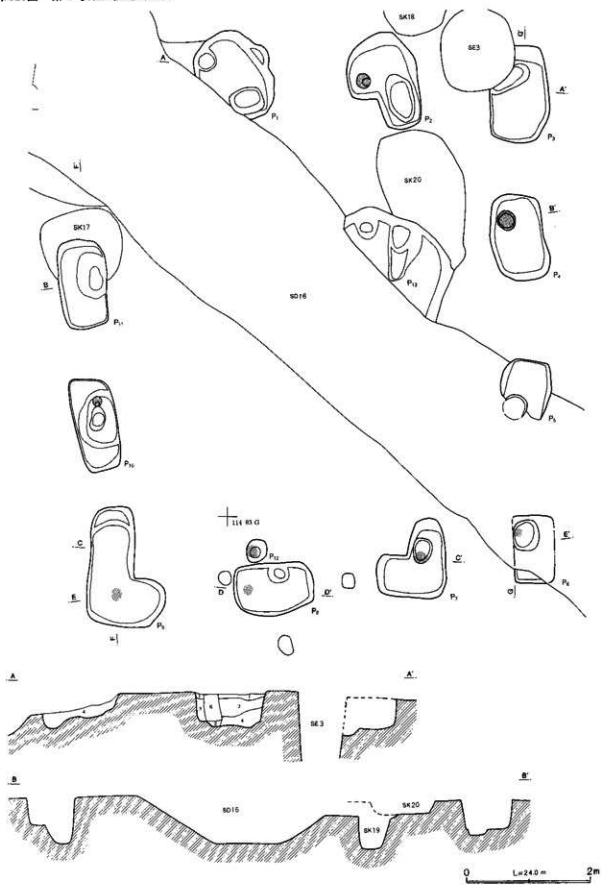


第8号掘立柱建物跡

- 1 黒色土 焼土粒子(φ0.5cm)少
- 2 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)多、炭化粒子少
- 3 黒褐色土 焼土ブロック(φ1cm)・炭化粒子少
- 4 黒褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子少
- 5 黒褐色土 ローム粒子(φ0.5cm)・焼土ブロック(φ1~2cm)少
- 6 暗褐色土 ローム粒子(φ0.5~0.8cm)多、ロームブロック(φ1cm)少
- 7 暗灰色土 粘土層



第319図 第9号掘立柱建物跡(1)



第9号掘立柱建物跡 (第317・319・320図)

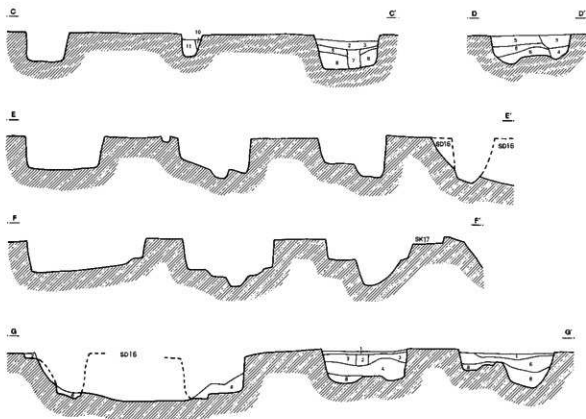
113・114-82・83グリッドに位置する。SD16・SE3・SK17・SK20に切られている。道路状遺構が本遺構を廻り込むようにして存在するが、その位置関係からみて両者は併存していたと思われる。

北西隅と、P7-P13間の柱穴がSD16によって切られており、SD16底面には柱穴の痕跡はなかった。柱穴の深度はSD16 (75cm) よりも浅かったと推定される。遺存していた柱穴の深度は、40~70cmであった。

規模は2×3間で、東側に庇をもつ。桁行7.5m、梁第320図 第9号掘立柱建物跡(2)

行4.9mで底を含めると6.5mを測る。主軸方向はN-5°-Wを指す。南側の梁(P6-9)は柱痕がほぼ直線に並んで検出されたが、桁行と直角を呈しておらずプランは歪んでいる。P8の北側には小規模な柱穴(P12)が確認された。柱間距離は、桁行で2.5mと3.0m程で、P9-P10間では芯で3.0mであった。梁行ではP7-P8間で2.7m、P8-P9間で2.1m、P7-P12間では2.6mを測る。掘り方は基本的に長方形で、規模は比較的大きいといえる。

円化し得たのは計4点であった。



第9号掘立柱建物跡

- |    |        |  |
|----|--------|--|
| 1  | 暗褐色土   | Fe 沈着、ローム粒子 (φ0.5cm)・ロームブロック (φ1cm)多、硬質        |
| 2  | 暗褐色土   | ローム粒子 (φ0.5cm)・ロームブロック (φ1cm)多、炭化物粒下少、硬質       |
| 3  | 暗褐色土   | 灰褐色粘土層、炭化粒子少、ロームブロック (φ1~2cm)・褐色土ロロック (φ1cm)多  |
| 4  | 暗褐色土   | 灰褐色粘土層、炭化粒子豊富、ロームブロック (φ1~2cm)少                |
| 5  | 黒褐色土   | ロームブロック多                                       |
| 6  | 黒褐色土   | ローム粒子 (φ0.5~0.8cm)・ロームブロック (φ5~10cm)多、炭化粒子少、硬質 |
| 7  | 黒色土    | 灰褐色粘土粒下少、粘性強                                   |
| 8  | 黒褐色土   | ロームブロック (φ5~7cm)少、硬質                           |
| 9  | 灰褐色粘土層 |  |
| 10 | 黒色土    | ローム粒子 (φ0.3cm)少、硬質                             |
| 11 | 黒褐色土   | ローム粒子 (φ0.5~0.8cm)・ロームブロック (φ3~5cm)少           |



0 L=240cm 2m

**(3) 土 墳**

今回の発掘調査で検出された土墳は、第14地点：78基、第15地点：28基、第16地点：48基の計154基であった。各地点の土墳数の比率は、第14地点：51パーセント、第15地点：18パーセント、第16地点：31パーセントである。

全体的に各土墳からの出土遺物は少なく、円化し得る遺物が出土した土墳はさらに少数であった。なお、ここで土墳として扱った中には、ピットとした方がよいと思われるもの、あるいは1基の土墳として数えたが、複数の土墳が存在している可能性をもつ遺構も存在する。さらに、遺構ではなく窪み状の微地形である可能性をもつ例も少なからず存在する。しかし、これらについても敢えてそのままとした。

以下順を追って記述していくこととする。

括弧( ) 付の数値は、推定値または現状における法量を意味する。

**第1号土墳 (第321・324図)**

108-79グリッドから検出した。調査区外に続くため、全体のプランは不明である。現状での規模は112×(37)×105cm。平面形状は円形を呈すると思われる。土墳としたが、形状と規模からみて、断面形状が窪鉢状を呈した井戸跡の可能性が高いと思われる。円化し得た遺物は1点であった。

**第2号土墳 (第321図)**

108-109-80グリッドから検出した。規模は193×190×8cm。主軸方向はN-78°-Wを指す。平面形状は略方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第3号土墳 (第321図)**

108-82グリッドから検出した。SB3・4と重複しているが、本土墳が両者を切っていると思われる。本土墳は形状からみて、2基の土墳が重複していると思われる。規模は290×53×27cm。主軸方向はNを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第4号土墳 (第321図)**

108-82グリッドから検出した。1基の土墳としたが、幾つかの遺構が重複していると思われる。規模は

決めがたいが、長さ幅という点から182×54×11cm。主軸方向はN-60°-Eを指す。現状における平面形状は不整形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第5号土墳 (第321図)**

108-82グリッドから検出した。規模は350×84×35cm。主軸方向はNを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第6号土墳 (第321・324図)**

109-82グリッドから検出した。規模は96×(80)×17cm。主軸方向はN-90°-Wを指す。平面形状は長楕円形を呈すると思われる。円化し得た遺物は1点であった。

**第7号土墳 (第321図)**

109-82グリッドから検出した。規模は202×37×13cm。主軸方向はN-11°-Wを指す。平面形状は長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第8号土墳 (第321図)**

108-83グリッドから検出した。規模は141×32×6cm。主軸方向はNを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

**第9号土墳 (第321図)**

108-83グリッドから検出した。規模は(97)×43×31cm。主軸方向はN-27°-を指す。平面形状は長方形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

**第10号土墳 (第321図)**

108-83グリッドから検出した。形状からみて2基の土墳が重複していると思われる。規模は167×50×27cm。主軸方向はN-8°-Wを指す。平面形状は不整形を呈す。土師器・須恵器の小破片が出土したが、円化には至らなかった。

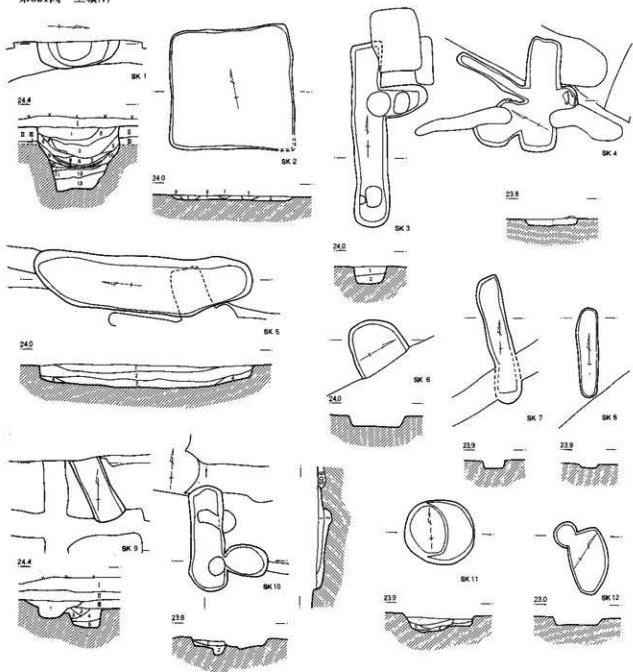
**第11号土墳 (第321・324図)**

108-83グリッドから検出した。規模は112×104×28cm。平面形状は楕円形を呈す。円化し得た遺物は1点であった。

**第12号土墳 (第321図)**

108-83グリッドから検出した。土墳とピットが重複している可能性が高い。規模は105×62×14cm。主軸方向はN-39°-Wを指す。平面形状は不整形を呈す。遺

第321回 土壌(I)



第1号土壌土層

- 1 褐色土 焼土粒子・炭化物多
- 2 褐色土 焼土粒子・炭化物少
- 3 灰黄褐色土 灰白色粘土ブロック少
- 4 褐色土 焼土粒子層
- 5 褐色土 2層に近縁、灰白色粘土多
- 6 褐色土 焼土粒子・炭化物少
- 7 灰白色土 灰白色粘土層
- 8 褐色土 焼灰物粘土少
- 9 褐色土 焼灰物粘土層
- 10 灰黄褐色土 炭化物・鉄分少
- 11 褐色土 8層に近縁
- 12 黄褐色土 鉄分多
- 13 黄褐色土 混入物なし

第2号土壌土層

- 1 灰黄褐色土 焼土粒子・炭化物多
  - 2 褐色土 粘質土、混入物なし
- 第3号土壌土層
- 1 褐色土 混入物なし
  - 2 褐色土 灰白色土ブロック混合土

第4号土壌土層

- 1 灰白色土 炭化物・鉄分多

第5号土壌土層

- 1 褐色土 土器片少
- 2 灰黄褐色土 鉄分少
- 3 褐色土 混入物なし、粘性強
- 4 褐色土 黄褐色土ブロック混合土

第9号土壌土層

- I 粘灰褐色シルト 白色バミス散見
- II 黄褐色シルト 白色バミス散見
- III 灰褐色シルト

第6号土壌土層

- 1 灰黄褐色土 混入物なし
- 2 褐色土 灰白色粘土ブロック
- 3 褐色土 灰白色粘土ブロック
- 5 灰黄褐色土 混入物なし

第10号土壌土層

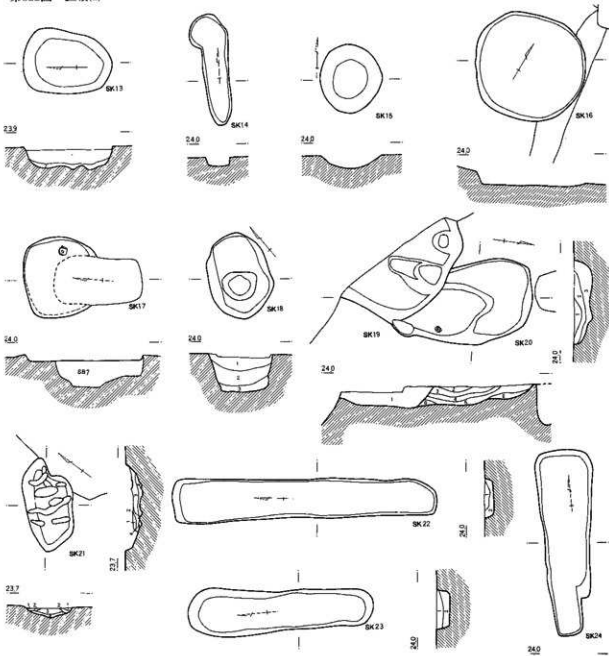
- 1 灰黄褐色土 炭化物
- 2 褐色土 灰白色粘土ブロック多

第11号土壌土層

- 1 黄褐色土 炭化物・焼土粒子・土器破片多
- 2 褐色土 混入物なし
- 3 褐色土 炭化物粒子少
- 4 褐色土 焼土粒子少

0 2m

第322図 土壇(2)



第13号土壇土層

- 1 褐灰色土 炭化物粒子・粘土粒子多
- 2 褐灰色土 炭化物粒子多

第16号土壇土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多、Fe 沈着
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多、炭化物粒子少
- 3 黒褐色土 2層よりロームブロック多

第19号土壇土層

- 1 褐灰色土 粘質土・暗褐色・灰白色土ブロック混合

第20号土壇土層

- 1 褐灰色土 砂質、炭化物層の底底部は粘土化している
- 2 褐灰色土 シルト質、湿人物なし
- 3 褐灰色土 粘質土、暗褐色土ブロック(φ1~2cm)多

- 4 褐灰色土 粘質土、湿人物なし
- 5 暗褐色土 粘質土、Fe 少
- 6 暗褐色土 粘質土、Fe・Mn 少

第21号土壇土層

- 1 褐灰色土 シルト質、焼土粒子少
- 2 黄褐色土 粘質土、灰白色粘土ブロック多
- 3 褐灰色土 シルト質、灰白色粘土ブロック少
- 4 褐灰色土 粘質土、灰白色粘土ブロック少

第22号土壇土層

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子多、やや砂質、しまり強
- 2 暗褐色土 シルト質、地山ブロック多、しまり強

第23号土壇土層

- 1 暗褐色土 地山ブロック多、シルト質、しまり強
- 2 暗褐色土 地山ブロック横大、シルト質、しまり強

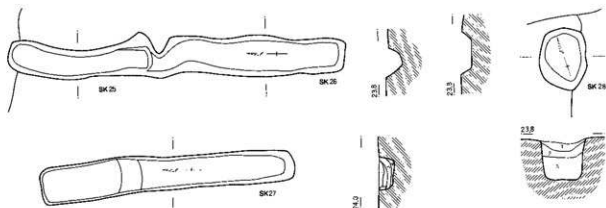
第24号土壇土層

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子多、やや砂質、しまり強
- 2 暗褐色土 地山ブロック多、シルト質、しまり強
- 3 暗褐色土 地山ブロック横大、シルト質、しまり強
- 4 暗褐色土 地山粒子・褐色粒少、砂質





第323図 土壌(3)



第27号土壌土層

- 1 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多
- 2 暗黄褐色土 黒褐色土ブロック多
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多
- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少

第29号土壌土層

- 1 暗灰褐色土 白色粒・ロームブロック少、砂質、しまり強
- 2 暗灰褐色土 白色粒・ロームブロック少
- 3 暗灰褐色土 ロームブロック少、F<sub>0</sub>沈着

0 2m

物は出土しなかった。

第13号土壌 (第322・324図)

108-84グリッドから検出した。土壌の規模は143×97×37cm。主軸方向はN-6°-Eを指す。平面形状は楕円形を呈す。図化し得た遺物は3点であった。

第14号土壌 (第322図)

109-110-80グリッドから検出した。規模は177×38×14cm。主軸方向はN-8°-Wを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第15号土壌 (第322図)

110-82グリッドから検出した。規模は110×100×22cm。平面形状は川形を呈す。遺物は出土しなかった。

第16号土壌 (第322図)

110-82グリッドから検出した。規模は178×175×20cm。平面形状は円形を呈す。遺物は出土しなかった。

第17号土壌 (第322・324図)

113-82グリッドから検出した。SB9を切っていると思われる。土壌の規模は127×(120)×11cm。平面形状は楕円形を呈すと思われる。土鏝1点を含め、図化し得た遺物は計6点であった。

第18号土壌 (第322図)

113-83グリッドから検出した。規模は136×98×60

cm。主軸方向はN-29°-Eを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

第19号土壌 (第322図)

113-82-83グリッドから検出した。SK20を切るが、SD16との新旧関係は不明。土壌の規模は206×(98)×22cm。主軸方向はN-40°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第20号土壌 (第322図)

113-83グリッドから検出した。SK19に切られる。規模は208×(200)×30cm。平面形状は楕円形を呈すと思われる。遺物は出土しなかった。

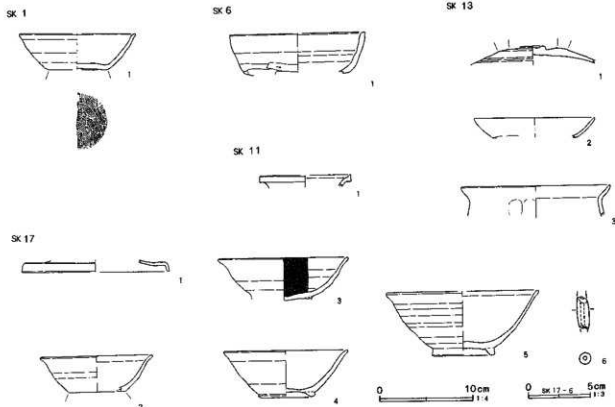
第21号土壌 (第322図)

113-83グリッドから検出した。規模は148×73×28cm。主軸方向はN-47°-Eを指す。平面形状は不整形楕円形を呈す。道路状遺構に伴う遺構であると思われる。遺存度が悪く図化には至らなかったが、馬歯数点が出土した。この馬歯については、付録3に分析結果を掲載した。

第22号土壌 (第322図)

115-81グリッドから検出した。土壌の規模は420×60×15cm。主軸方向はN-10°-Wを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第324図 第1・6・11・13・17・20号土壇出土遺物



第124表 第1号土壇出土遺物観察表(第324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	(12.5)	3.8	(6.0)	ABCF	普通	白灰色	底45	ロクロ成形	R C

第125表 第6号土壇出土遺物観察表(第324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器環	(14.5)	4.4	(10.3)	DEH	良	暗灰色	口20	ロクロ成形 底:手持ち鋸削りか (内):自然釉わずかに付着	

第126表 第11号土壇出土遺物観察表(第324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵長頸壺	(9.7)	1.3	—	BE	普通	灰白色	口20	ロクロ成形	

第127表 第13号土壇出土遺物観察表(第324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器蓋	2.7	2.0	—	ACE	不良	白灰色	—	ロクロ成形 天井部:鋸削り	
2	土師器環	(13.0)	2.1	—	AEF	普通	明茶褐色	—	口:内外面とも横ナテ 体(外):鋸削りか	
3	土師器蓋	(16.1)	2.4	—	AEF	普通	明茶褐色	口20	口:内外面とも横ナテ 底:内外面ともナテ	

第128表 第17号土壇出土遺物観察表(第324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器蓋	(15.7)	1.3	—	EH	普通	青灰色	口15	ロクロ成形	
2	土師器環	(2.1)	3.8	6.0	ACEF	不良	暗黄褐色	底45	ロクロ成形か C 器面風化	
3	土師高台環	14.0	4.5	—	ADE	不良	明茶褐色	口50	ロクロ成形か 底:糸切り難しか 貼付高台 内黒処理	
4	須恵高台環	13.3	5.0	6.0	ABCE	不良	黄褐色	口100	ロクロ成形か 底:糸切り難しか 高台貼付	
5	須恵高台環	(16.2)	6.8	6.7	ABCE	不良	緑灰色	口100	ロクロ成形か 底:同輪糸切り難しか 高台貼付	

6は十垂である。BCE, 灰褐色。焼成:やや不良。現 存長2.6cm・最大径0.9cm・孔径0.3cm, 現存重量2.3g。

第23号土壌 (第322図)

115-82グリッドから検出した。規模は295×62×22cm。主軸方向はN-3°-Eを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第24号土壌 (第322図)

115-82・83グリッドから検出した。規模は294×71×19cm。主軸方向はN-7°-Eを指す。平面形状は不整長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第25号土壌 (第323図)

114・115-83グリッドから検出した。SK26との新旧関係は不明。規模は229×45×24cm。主軸方向はNを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第26号土壌 (第323図)

115-83グリッドから検出した。規模は(300)×52×16cm。主軸方向はNを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第27号土壌 (第323図)

115-83グリッドから検出した。規模は406×52×24cm。主軸方向はN-5°-Wを指す。平面形状は略長方形を呈す。遺物は出土しなかった。

第28号土壌 (第323図)

116-83グリッドから検出した。規模は85×74×65cm。主軸方向はN-5°-Eを指す。平面形状は楕円形を呈す。遺物は出土しなかった。

第129表 第15地点土壌一覧表

番号	旧番	検出グリッド	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
1	2	108-97	円形か	1.12	(0.37)	1.05	—	
2	10	108-109-80	略長方形	1.93	1.90	0.08	N-78°-W	
3	13	108-82	略長方形	2.90	0.53	0.27	N	
4	24	108-82	不整形	1.82	0.54	0.11	—	
5	12	108-82	楕円形	3.50	0.84	0.35	N	
6	23	109-82	長楕円形	0.96	(0.80)	0.17	N-90°-E	
7	14	109-82	長方形	2.02	0.37	0.13	N-11°-W	
8	19	108-83	略長方形	1.41	0.32	0.06	N	
9	16	108-83	長方形か	(0.97)	0.43	0.31	—	
10	18	108-83	不整形	1.67	0.50	0.27	N-8°-W	
11	20	108-83	楕円形	1.12	1.04	0.28	N-54°-W	
12	21	108-83	不整形	1.05	0.62	0.14	N-39°-W	
13	22	108-84	楕円形	1.43	0.97	0.37	N-6°-E	
14	11	109-110-80	略長方形	1.77	0.38	0.14	N-8°-W	
15	15	110-82	円形	1.10	1.00	1.22	—	
16	32	110-82	円形	1.78	1.75	0.20	—	
17	26	113-82	楕円形か	1.27	(1.20)	0.11	—	
18	27	113-83	楕円形	1.36	0.98	0.60	N-29°-E	
19	28	113-83	—	2.06	(0.78)	0.22	—	
20	31	113-83	楕円形か	2.08	(2.00)	0.30	—	
21	30	113-83	不整楕円形	1.48	0.73	0.28	N-47°-E	
22	4	115-81	略長方形	4.20	0.60	0.15	N-10°-W	
23	5	115-82	略長方形	2.95	0.62	0.22	N-3°-E	
24	6	115-82・83	不整楕円形	2.94	0.71	0.19	N-7°-E	
25	7	114・115-83	略長方形	2.29	0.45	0.24	N	
26	8	115-83	略長方形	(3.00)	0.52	0.16	—	
27	9	115-84	略長方形	4.06	0.32	0.24	N-5°-W	
28	1	116-83	楕円形	0.85	0.74	0.65	N-5°-E	

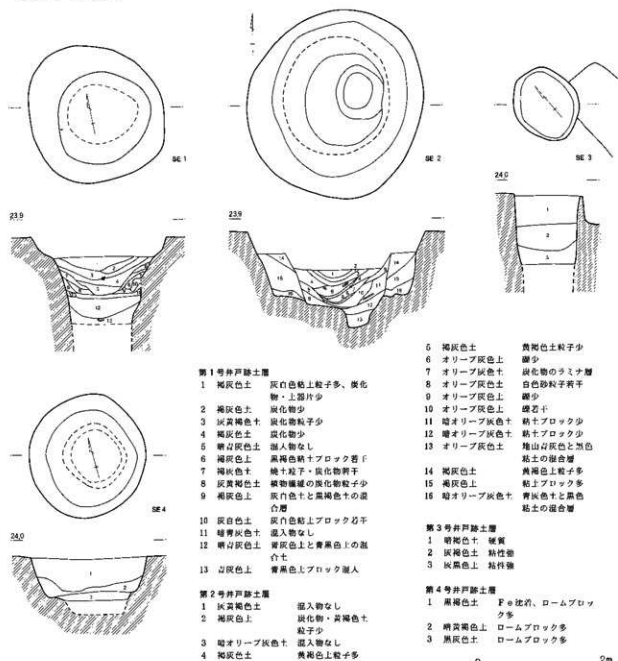
## (4) 井戸跡

15地点において検出された井戸跡、または井戸跡の可能性のあるものは、併せて5基であった。

## 第1号井戸跡(第325・326図)

109・110・84・85グリッドに位置する。調査のために掘削した排水溝に接する位置に検出されたが、遺構のプランと規模を得ることはできた。他の遺構との重複関係はない。

第325図 井戸跡(1)



井戸跡壁面の崩落の危険性と湧水のために、確認面から130cm程掘り下げた段階から、小型のバックホーによる掘り下げに切り替えた。その結果、深度約180cmで井戸跡底面を確認できたが、実測は断念せざるを得なかった。木井戸跡は、青灰色粘上層を掘り込むかたちで穿たれていた。

規模は2.35×2.05×(1.80)mを測り、平面形状は円形を呈する。深さ20cm程の位置に段をもち、この部

第130表 第1号井戸跡出土遺物観察表(第326図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器杯	12.2	3.7	5.9	ACDEH	不良	灰青色	藍100	クロ成彩 R B a
2	須恵器杯	—	1.2	6.6	ABDE	不良	灰白色	—	クロ成彩 R C
3	須恵高台碗	—	2.9	8.0	BF E	普通	青灰色	青95	クロ成彩 底: 回転糸切り難し(R)後 高台貼付
4	須恵高台碗	—	4.5	(8.3)	AE	不良	灰白色	藍35	クロ成彩 底: 回転糸切り難しか 高台貼付 器面風化
5	土師器甕	(19.0)	6.0	—	ACEFH	普通	明褐色	口45	口: 内外横ナデ 胴(外): 籠削り(内): 籠ナデ
6	土師器甕	(19.7)	5.3	—	ACEFII	普通	明茶褐色	口15	口: 内外横ナデ 胴(外): 籠削り(内): 籠ナデか
7	須恵器甕	—	—	—	ABE	良	暗緑灰色	—	(外): 「平行叩き」の後ナデ(内): 青濁波文

分での規模は1.15×1.25m、平面形状は円形を呈する。段よりも上位の部分における遺存度が低いため明確さは欠くが、断面形状はロート状を呈すると思われる。

8層以上は人為的な埋め戻しと思われる。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

出土遺物は比較的多く、それらの内から土師器甕2、須恵器杯4・甕1の計7点を実測することができた。1～6の遺物については土層断面の1～4層内からの出土である。

#### 第2号井戸跡(第325図)

111-81グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

本井戸跡は、調査中の状況や土層断面から見て、円形の井戸枠をもっていただけと思われる。但し、井戸枠は遺存していなかった。

まず、確認面での規模が3.0×2.65mで、円形を呈する深さ1.2m程の逆台形の掘り方を掘り、次いで井戸枠を設定し、さらに井戸枠と掘り方壁面との間に粘土ブロックを含む土で裏込め(14～16層)を行っている。

1～11層が堆積している部分が井戸側内面に相当し、12・13層の井戸底面が穿入している部分が水溜めに相当すると考えられる。本井戸跡の井戸側は、井戸跡中央より50cmほどずれた位置に設けられている。

井戸側の規模は、開口部で2.2×2.45×1.2m、底面

第131表 第15地点井戸一覽表

番号	山番	検出グリッド	平面形状	断面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
1	2	109-110-84-85	円形	ロート状か	2.35	2.05	(1.80)	N-40°-W	S B 7を切る
2	3	111-81	円形	円筒状か	3.00	2.65	1.52	N-6°-W	
3	1	113-83	不整形円形	円筒状	1.20	0.98	(1.13)	N-10°-E	
4	4	116-83	円形	ロート状か	2.00	1.35	(0.93)	N-23°-E	

では1.2×1.5mを測り、平面形状はともに円形、断面形状は円筒状を呈すると思われる。

そしてこの下部に、0.78×0.85×0.3mの水溜めが設けられている。裏込めは概ね40cm程の厚みをもつ。

井戸跡上層部に、人頭大～犬頭大の礫が、多量に投げ込まれているのが確認された。

遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

土器などの出土はほとんどなかった。1～4層のレベルで青磁の小破片が1片検出された。

図化した遺物はなかった。

#### 第3号井戸跡(第325・326図)

113-83グリッドに位置する。S B 3のP 3を切っている。井戸壁面・土層断面の崩落の可能性と、湧水のため完掘には至らなかった。規模は1.20×0.98×(1.13)mを測る。平面形状は楕円形、断面形状は円筒状を呈する。遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図化したのは1点であった。

#### 第4号井戸跡(第325・326図)

116-83グリッドに位置する。規模は2.0×1.35×(0.93)mを測る。平面形状は円形、断面形状はロート状を呈すると思われる。深度に疑問があるが井戸と判断した。遺構内や周辺部に、本井戸跡に伴うと思われるピットなどの施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図化したのは1点であった。

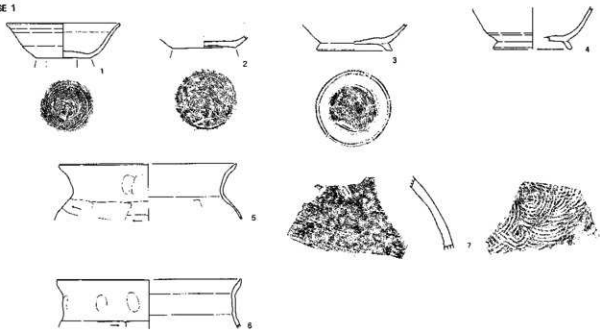
5は石皿であろうか。安山岩製。石材は、全体的に風化のため灰褐色に変色しているが、未風化の部分は帯緑灰色を呈する。

S J 21のカマド茨口部付近 (第286図) から出土し

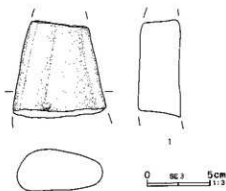
た。但し、この遺物そのものには被熱の痕跡は認められず、S J 21が廃棄された以降投棄されたもので平面形は楕円形に近い。一方の面は扁平で、他方は山形を呈する。14.1cm×13.1cm×4.5cm、1,251g。

第326図 第1・3・4号井戸跡出土遺物

SE 1



SE 3



SE 4



SE 5



第132表 第4号井戸跡出土遺物観察表(第326図)

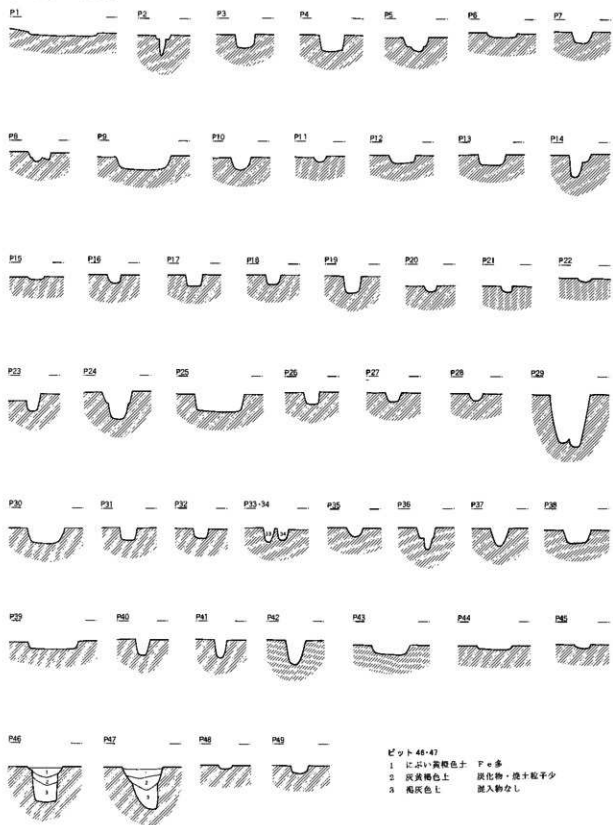
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	粗器碗	—	2.1	2.9	E	良	暗灰色	台95	ロクロ水挽き成形 底:回転器削り(R)縁高台貼付

第133表 第5号井戸跡出土遺物観察表(第326図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	灰釉皿	—	1.8	(7.6)	EF	普通	白灰色	底45	ロクロ成形 底:回転糸切り離しか貼付高台

(5) ピット

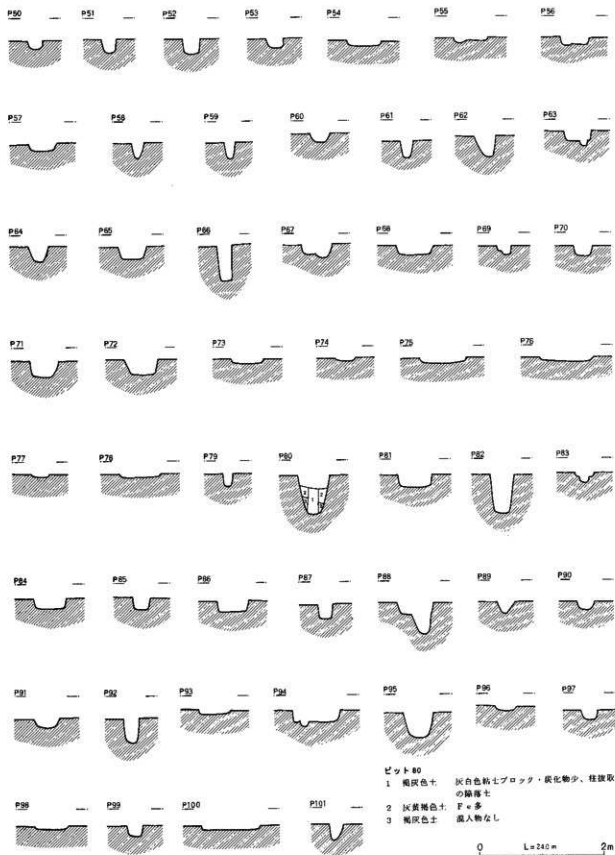
第327図 ピット(I)



ピット 46・47  
 1 にぶい黄褐色土 F+多  
 2 灰黄褐色土 炭化物・焼土粒子少  
 3 褐色土 混入物なし

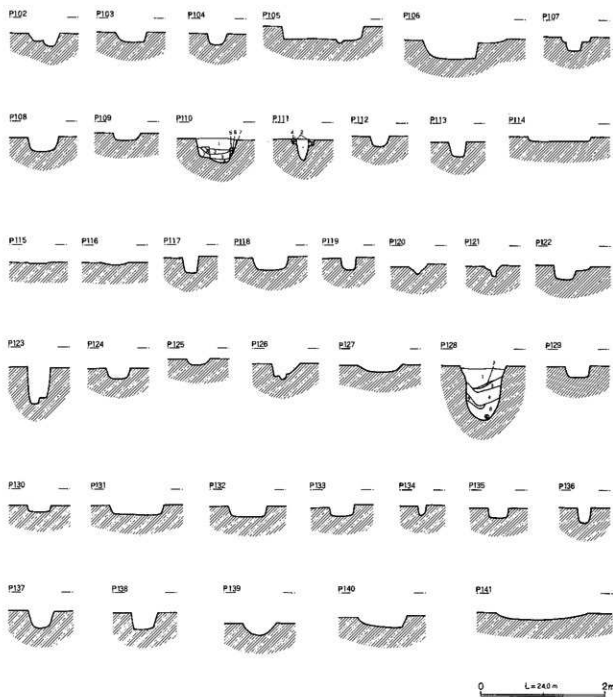
0 L=200m 2m

## 第328図 ビット(2)





第329図 ビット(3)



ビット110

- 1 灰黄褐色土 砂質、混入物なし
- 2 灰黄褐色土 砂質、灰白色粘土ブロック・褐色粘土ブロック少
- 3 灰黄褐色土 砂質、褐色粘土ブロック少
- 4 褐色粘土 粘土質、灰色シルトと灰白色粘土の混合層
- 5 にぶい黄褐色土 粘土質、灰白色粘土の混入層
- 6 褐色土 粘土質、褐色粘土主体
- 7 灰黄褐色土 粘土質、混入物なし

ビット111

- 1 褐色土 粘土質、混入物なし
- 2 褐色土 シルト質、混入物なし
- 3 灰黄褐色土 シルト質、混入物なし

ビット128

- 1 褐色土 灰化物・黄土・土器断片を多
- 2 褐色土 灰化物層
- 3 灰白色土 灰化物少
- 4 褐色土 粘土少、上部に土断片・礫少
- 5 褐色土 灰化物層
- 6 褐色土 粘土少、下部に土器・骨片・礫少、粘性・しまり強

ここでピットとして扱ったのは、土壇（SK）として扱わず、さらに掘立柱建物跡や欄列跡の柱穴となったピットを除いたものである。土壇とピットとの区分も明確なものではなく、概ね平面規模が50×50cm以下の小穴をピットとして扱った。規模のみでピットとしているため、遺構の性格は様々であろうと思われる。

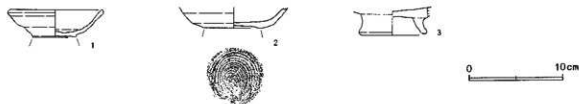
第15地点において検出されたピットは139基である。今回の調査で検出されたピットは、第14地点では

358基、第16地点では704基、総計1201基に上る。

各地点ごとのピット数の比率は、第14地点：30パーセント、第15地点：11パーセント、第16地点：59パーセントである。

ピットの多くは、一部を除いて調査中に遺構番号を付さなかった。そこで、整理作業の段階で新番号を付すこととした。

第330図 ピット128出土遺物



第135表 ピット128出土遺物観察表(第330図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師質皿	10.4	2.8	4.5	AEH	普通	橙褐色	95	ロクロ成形、RC
2	土師質杯	—	2.2	6.0	ADEF	良	黄褐色	底100	ロクロ成形 C
3	土師高台碗	—	3.0	7.3	ADE	普通	乳白色	底90	ロクロ成形

第135表 第15地点ピット一覧表(第327~329図)

番号	旧番	検出グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	旧番	検出グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1		108-79	113	38	6	21		108-81	18	14	10
2		108-80	26	23	33	22		108-81	21	18	6
3		108-80	36	31	25	23		108-82	28	19	20
4		108-80	40	34	24	24		108-82	33	24	41
5		108-80	36	32	22	25		108-82	76	28	27
6		108-80	48	22	6	26		108-82	26	18	20
7		108-80	33	29	18	27		108-82	28	24	14
8		108-80	37	34	14	28		108-82	23	21	12
9		108-80	87	30	20	29		108-82	65	61	80
10		108-80	35	30	17	30	63	108-83	56	47	23
11		108-80	21	20	9	31		108-83	27	22	19
12		108-80	40	32	13	32		108-83	24	19	5
13		108-80	43	42	17	33		108-83	18	16	21
14		108-80	35	34	34	34		108-83	18	17	15
15		108-80	41	32	5	35		108-83	26	16	14
16		108-81	22	21	13	36		108-83	29	27	35
17		108-81	26	21	19	37		108-83	29	25	27
18		108-81	24	20	15	38		108-83	51	43	21
19		108-81	28	27	24	39		108-83	79	37	13
20		108-81	18	17	9	40		108-83	24	21	24

番号	旧番	検出グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	番号	旧番	検出グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
41		108-83	20	19	26	92		109-84	23	19	37
42		108-83	32	31	36	93		110-79	50	49	7
43		108-84	63	44	17	94		110-80	82	70	27
44		108-84	59	56	5	95		110-84	49	41	37
45		108-84	26	21	6	96		111-80	34	31	7
46	84	108-84	56	49	55	97		111-81	26	24	15
47		108-84	66	52	66	98		111-81	54	50	5
48		108-84	21	19	6	99		111-81	25	24	15
49		108-84	29	27	13	100		111-81	93	72	7
50		108-84	28	24	13	101		111-82	23	22	15
51		108-84	31	23	22	102		112-80	59	24	20
52		108-84	23	27	23	103		112-80	48	30	16
53		108-84	27	21	15	104		112-80	32	32	17
54		108-84	54	52	9	105		112-80	110	59	25
55		108-84	54	51	8	106	114	112-80	133	89	30
56		108-84	54	45	12	107		112-81	43	41	22
57		108-84	45	21	12	108		112-82	47	26	22
58		108-84	20	19	25	109		112-82	47	36	20
59		108-84	18	16	25	110	134	112-82	76	54	36
60		109-79	31	28	15	111	142	112-83	40	34	32
61		108-84	19	17	26	112		112-83	30	29	16
62		109-79	34	32	33	113		112-83	44	25	23
63		109-80	45	42	24	114		112-83	101	49	27
64		109-80	31	30	23	115		112-84	33	20	4
65		109-80	50	45	20	116		112-84	43	21	5
66		109-80	25	22	55	117		113-80	26	24	24
67		109-80	45	44	21	118		113-81	55	41	22
68		109-80	60	37	15	119		113-81	24	24	19
69		109-80	23	21	13	120		113-82	31	29	14
70		109-80	30	22	15	121		113-82	29	28	18
71		109-80	51	41	25	122		113-82	57	42	22
72		109-80	53	35	25	123		113-82	40	31	57
73		109-80	53	29	7	124		113-83	42	35	17
74		109-80	31	31	5	125		113-83	48	36	9
75		109-80	74	17	9	126		113-83	48	40	25
76		109-81	85	18	7	127		113-83	68	53	10
77	54	109-81	30	27	5	128	124	114-81	76	73	85
78		109-81	66	33	6	129		114-81	40	32	18
79	55	109-81	17	15	19	130		114-81	43	37	10
80		109-82	51	45	61	131		114-81	86	42	13
81		109-82	55	48	21	132	127	114-81	64	59	17
82		109-82	41	36	60	133		114-82	39	37	15
83		109-82	31	29	17	134		114-82	31	18	14
84		109-82	53	48	17	135		114-83	31	21	15
85		109-82	31	30	18	136		114-83	22	21	23
86		109-83	51	18	17	137		114-83	42	41	27
87		109-84	23	23	24	138		114-83	40	40	25
88		109-84	58	51	49	139		114-83	51	45	18
89		109-84	29	27	18	140		114-83	76	42	18
90		109-84	29	29	13	141		115-81	147	55	8
91		109-84	42	35	14						

## (6) 道路状遺構

### 第1号道路状遺構 (第331・332図)

道路状遺構として波板状凹凸面や皿状ピットが検出されている範囲は、112-81グリッドから始めて東に向かい、112-84グリッド付近で屈曲して南に向かう。そして、SD16と重複する114-83・84グリッド付近まで続いて終わる。この間の距離はおよそ32.5mを測る。側溝はもたないと思われる。

第1号道路状遺構は、現：新屋川の河川敷の北約30m。現在の水溝からは50mに位置している。N-5°-Wの方位で北上し、住居跡群とはやや離れた大型の掘立柱建物跡であるSB9を回り込むように116°の角度をもって西に屈曲している。両者の位置関係からみて、併存の可能性が高いと考えられる。

第1号道路状遺構は、SJ26・29、SD17・22を切る。確証はないものの、SD16には切られていると思われる。

本遺構は、検出当初溝跡と判断してSD21と命名し、遺物の取り上げもSD21で行った。しかし、掘り下げていく過程で波板状の凹凸面が、浮かび上がり、道路状遺構であることが判明した。

但し、この第1号道路状遺構を2次的に切っている溝跡(第332図A-A'-C-C'の土層断面1~4層)についてもSD21として遺物取り上げを行ったほか、SD21の南側延長線上付近からの遺物も同様にSD21として一括する結果となった。

そこで、第1号道路状遺構に伴う遺物を特定できなかったため、これらの遺物は(8)溝跡(P334-)に掲載することとした。本遺構を記述する便宜上、道路状遺構の112-84グリッド付近での屈曲部分よりも西側を北辺、南側を東辺と仮称する。

当初SD21とした部分の覆上には土器片や礫が混入していたが、波板状凹凸面の充填上の中にも混入しているのが認められた。北辺で、波板状凹凸面が分布する部分での道路状遺構の幅は2.7~3.8m、深さは波板状凹凸面のない部分で20cm前後、波板状の部分では30~40cmを測る。波板状凹凸面は細長い土塊状を呈す

るが、北辺の波板状凹凸面には、2つの軸方向が重複した状態で存在している。

1つは軸方向がN-15°-Eを指すもので、道路状遺構内では北側に位置する。今1つはN-4°-Wの軸方向をもち、南側に位置している。路盤整備のために基盤を掘り直していると思われるが、波板状凹凸面同士の新旧関係については判断できなかった。北辺自体の主軸方向はN-74°-Wである。

112-82グリッドの東半部から、112-83グリッドの西半部にかけての範囲では、1つ1つの波板状凹凸面は明確ではなく重複するかたちで検出された。

東辺の東側は比較的明瞭に遺存している箇所があり、この部分での波板状凹凸面や皿状のピットには、北辺と異なった特徴が見られる。つまり、113-83・84グリッド北側の波板状凹凸面は、長いものと短いものと交互に並び、短い波板状凹凸面の東側には、皿状ピットが1つずつ検出された。皿状ピットの規模はまちまちであるが、概ね20×30cm~40×60cmの楕円形もしくは長楕円形を呈し、深さは20~30cm程である。

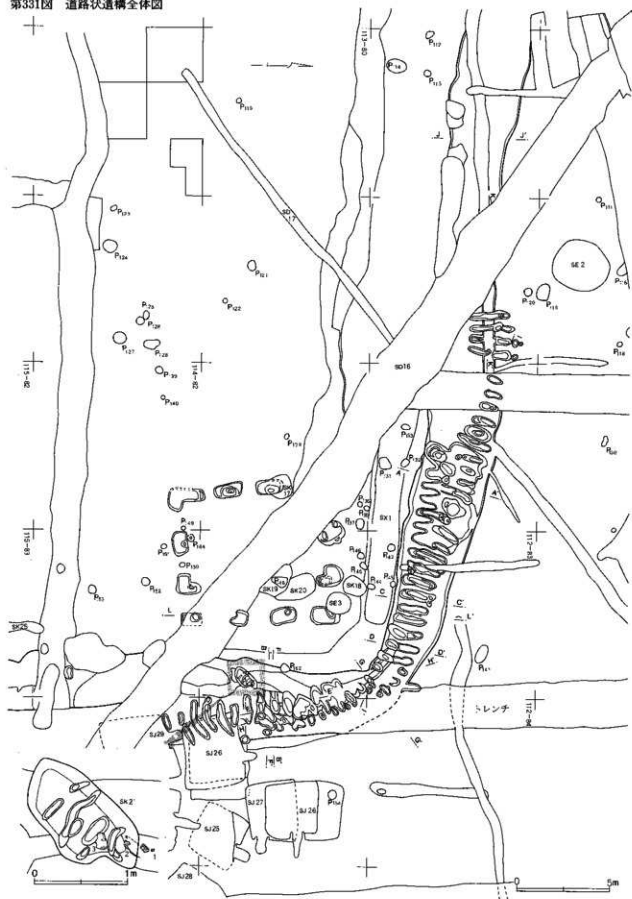
これらの波板状凹凸面の西側半分については、波板状凹凸面同士の複雑な重複のため形状は不明瞭であった。

113・114-84グリッド付近の波板状凹凸面は「く」字状を呈しており、一方の波板状凹凸面はN-50°-Eを指し、他方はN-88°-Eを指している。北辺でみられたように路盤の掘り直しによる重複であろうか。

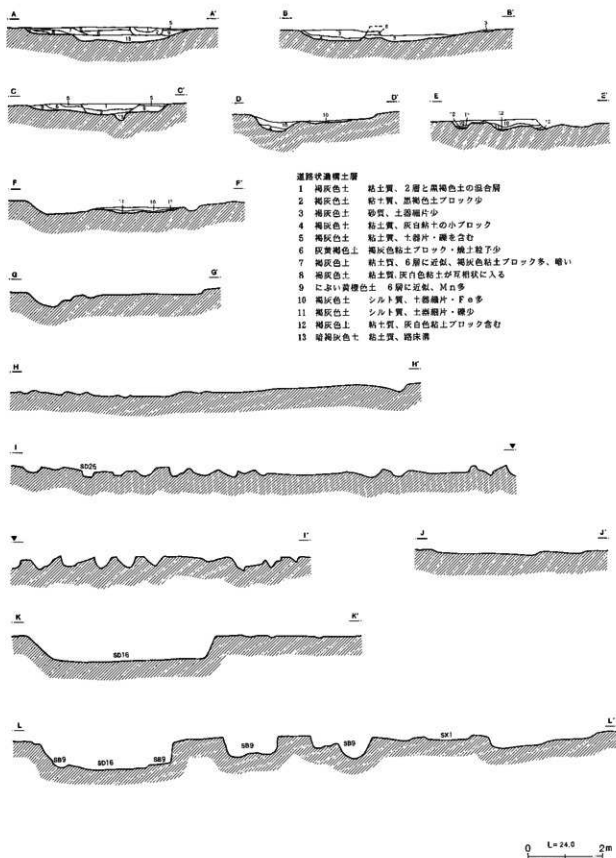
東辺の南側延長線上にあたる114・115-83グリッド内には、楕円形を呈する土塊状の窪みが連続しており、後ほど土塊群として扱ったが、既に述べたように検出当初SD21として遺物取り上げを行った。この部分は道路状遺構を切っているが、SD21内にみられる2次掘削溝との新旧関係は不明である。

SK21はSD21内の2次掘削溝の覆土内に検出された土塊で、馬の頭蓋骨が裏返った状態で出土し、さらにその下位からは人頭骨片が検出された。両者の関係、および道路状遺構との関連は不明である。道路状遺構に直接関わる遺物で、図化できるものはなかった。

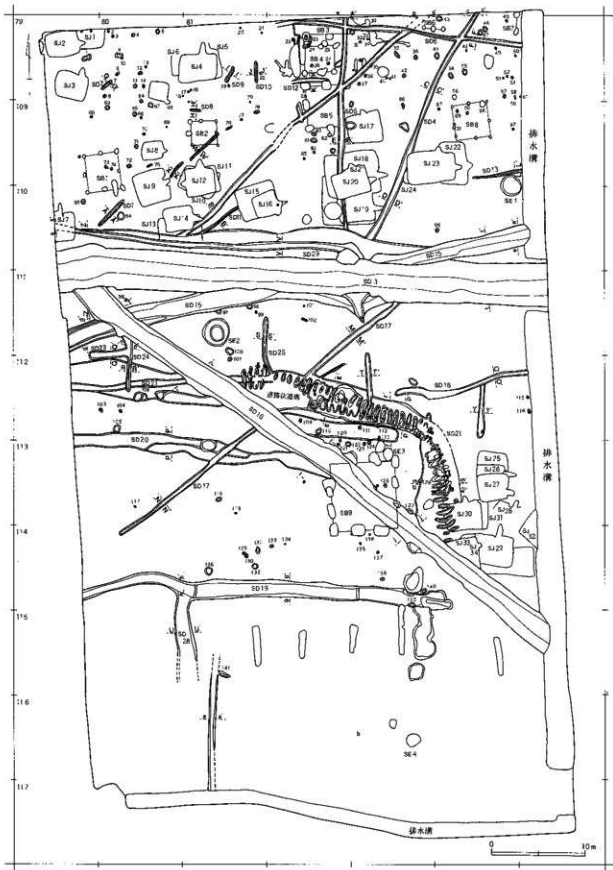
第331図 道路状遺構全体図



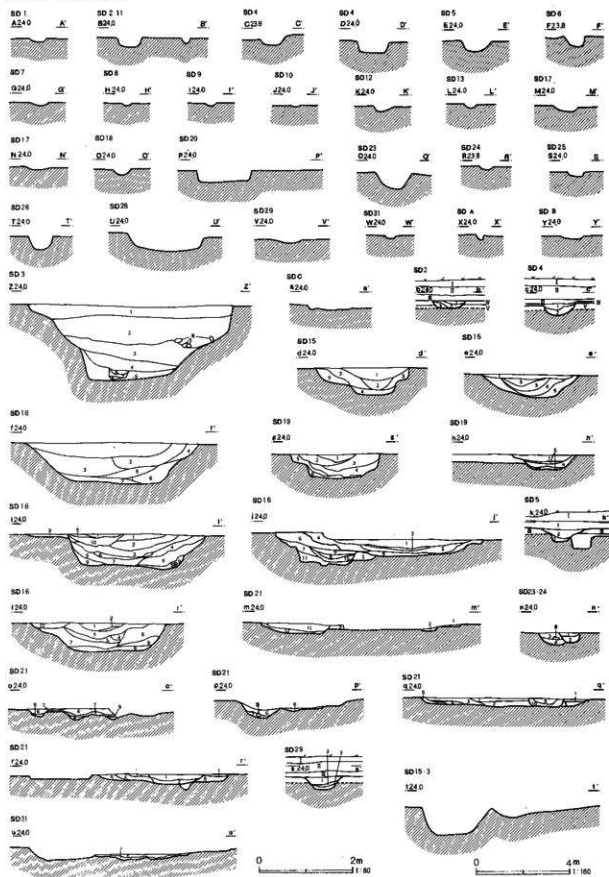
第332図 道路状遺構断面図



第333圖 溝跡



第334图 溝跡断面图





## 第2号黄土層

- 1 黄褐色土 灰褐色土ブロック少
- 2 褐色土 混入物なし
- 3 黄褐色土 砂粒少

## 第3号黄土層

- 1 褐色土 土層片・礫少
- 2 灰黄褐色土 混入物なし
- 3 黄褐色土 4層上の境に木片少
- 4 暗褐色土 軟質の白色砂粒少
- 5 暗黄褐色土 植物遺体を少
- 6 暗褐色土 混入物なし
- 7 灰黄褐色土 木片を多
- 8 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを多

## 第4号黄土層

- 1 黄褐色土 灰白色土ブロック少
- 2 褐色土 軟質白色砂粒少(浅間日礫石ca)

## 第5号黄土層

- 1 灰黄褐色土 浅間日礫石少
- 2 灰黄褐色土 浅間日礫石・粘土粒・炭化物・土層碎片
- 3 灰黄褐色土 浅間日礫石・Fe多

## 第15号黄土層①

- 1 暗褐色土 ローム粒(φ0.5cm)・炭化物少
- 2 暗褐色土 1層に近似
- 3 暗褐色土 Fe沈着、ロームブロック粒子(φ0.8~0.9cm)少
- 4 灰褐色土 ローム粒(φ0.2~0.5cm)・ロームブロック(φ0.2~0.3cm)少
- 5 黒褐色土 ローム粒(φ0.2~0.3cm)多

## 第15号黄土層②

- 1 暗褐色土 硬質、ローム粒(φ0.8cm)多
- 2 暗褐色土 ローム粒(φ0.8~0.9cm)・粘土粒(φ0.8cm)多、炭化物少
- 3 黒色土 炭化物層、焼土粒(φ0.8~0.9cm)多
- 4 灰褐色土 粘土層、ローム粒(φ0.5cm)少
- 5 灰褐色土 粘土層、ローム粒(φ0.5~0.8cm)多、焼土少

## 第16号黄土層①

- 1 暗褐色土 ローム粒(φ0.1cm)多
- 2 暗褐色土 Fe沈着、ローム粒(φ0.8~0.9cm)多
- 3 灰黒色土 粘土層
- 4 灰褐色土 ローム粒(φ0.5~0.9cm)・ロームブロック(φ0.2~3cm)多、炭化物粒少
- 5 灰褐色土 粘土、Fe沈着、ローム粒(φ0.8~0.9cm)・ロームブロック(φ2~3cm)多、炭化物粒少
- 6 灰褐色土 Fe沈着、ローム粒(φ0.5~0.8cm)多
- 7 灰色土 粘土、ローム粒(φ0.5~0.8cm)少

## 第16号黄土層②

- 1 暗褐色土 ローム粒(φ0.5cm)・白色粒(φ0.1~0.2cm)少
- 2 暗褐色土 灰褐色粘土多、ローム粒(φ0.4~0.5cm)少
- 3 黒褐色土 ローム粒(φ0.5~0.8cm)多、炭化物粒・焼土粒少
- 4 黒褐色土 3層よりローム粒少
- 5 黒色土 炭化物層、炭化材少
- 6 暗褐色土 灰褐色土少、ローム粒(φ0.3cm)多
- 7 灰黒色土 粘土層、ローム粒(φ0.5cm)少
- 8 灰褐色土 Fe沈着、黒褐色土ブロック(φ0.3~0.5cm)少
- 9 灰褐色土 粘土、ローム粒(φ0.5~0.8cm)少
- 10 暗褐色土 1層に近似、Fe沈着

## 第16号黄土層③

- 1 暗褐色土 黒褐色土ブロック(φ2cm)・炭化物少、ロームブロック粒子(φ0.2~0.3cm)多
- 2 暗褐色土 Fe沈着、ローム粒(φ0.2~0.3cm)多、ロームブロック(φ0.1cm)少
- 3 灰褐色土 ②3層に近似、ローム粒(φ0.2~0.3cm)多、ロームブロック(φ0.1cm)少
- 4 灰褐色土 砂質、Fe沈着、ローム粒(φ0.5~0.8cm)多
- 5 灰褐色土 砂質、下層に黒褐色土ブロック(φ1cm)少
- 6 灰褐色土 粘土層、ローム粒(φ0.5cm)少
- 7 灰色土 粘土、ローム粒(φ0.5~0.8cm)少
- 8 暗褐色土 砂質、黒褐色土ブロック(φ0.1cm)・ローム粒(φ0.3cm)・ロームブロック(φ0.2~0.3cm)少
- 9 暗褐色土 ロームブロック(φ0.2cm)多
- 10 暗黄褐色土 地山に近似、ロームブロック(φ2~3cm)多

## 第15号黄土層④

- 1 暗褐色土 Fe沈着、灰褐色粘土・ローム粒(φ0.5cm)・ロームブロック(φ1~2cm)多
- 2 灰褐色土 ロームブロック多、炭化物粒少
- 3 灰褐色土 粘土層、炭化物粒少、ロームブロック(φ2cm)多
- 4 灰褐色土 Fe沈着、ローム粒(φ0.3~0.5cm)少、粘性強
- 5 灰黒土 ローム粒(φ0.8cm)・ロームブロック(φ2~3cm)多
- 6 暗褐色土 Fe沈着、ローム粒(φ0.2~0.3cm)多、ロームブロック(φ0.1cm)少
- 7 灰褐色土 砂質、Fe沈着、ローム粒(φ0.5~0.8cm)多
- 8 灰褐色土 砂質、下層に黒褐色土ブロック(φ1cm)少
- 9 灰褐色土 粘土層、ローム粒(φ0.5cm)少
- 10 灰色土 粘土、ローム粒(φ0.5~0.8cm)少
- 11 暗褐色土 砂質、黒褐色土ブロック(φ0.1cm)・ローム粒(φ0.3cm)・ロームブロック(φ0.2~0.3cm)少

## 第19号黄土層

- 1 暗褐色土 砂質、Fe沈着、ローム粒(φ0.5~0.8cm)少
- 2 暗褐色土 砂質、地山に近似、Fe沈着
- 3 暗褐色土 砂質、ローム粒多
- 4 灰色土 炭化物層
- 5 黒褐色土 ロームブロック(φ1cm)・炭化物粒・粘土粒少
- 6 黒褐色土 ローム粒(φ0.8cm)・ロームブロック(φ5cm)多

## 第21号黄土層

- 1 褐色土 粘土質、上面片・礫少
- 2 灰黄褐色土 粘土質、黄褐色粘土ブロック・粘土粒少
- 3 褐色土 粘土質、2層に近似、黄褐色粘土ブロック多
- 4 灰褐色土 粘土質、灰褐色粘土が互層状に入る
- 5 黄褐色土 粘土質、2層に近似、M多
- 6 褐色土 シルト質、Fe灰多、土層碎片少
- 7 褐色土 シルト質、上面片・礫少
- 8 褐色土 粘土質、灰褐色粘土ブロック少
- 9 褐色土 粘土質、2層と黒褐色土との混合層
- 10 灰色土 粘土質、ブロック少
- 11 褐色土 砂質、土層碎片少
- 12 褐色土 粘土質、灰白粘土・ブロック少

※ 6~8層…踏間堀込遺構  
9~12層…2次掘削溝

## 第23-24号黄土層

- 1 褐色土 浅間日礫石少
- 2 褐色土 灰白色粘土ブロック・焼土少
- 3 灰黄褐色土 浅間日礫石・礫少
- 4 灰黄褐色土 浅間日礫石少

## 第25号黄土層

- 1 灰黄褐色土 浅間日礫石・土層片少
- 2 褐色土 混入物なし
- 3 褐色土 黄褐色土ブロック少

## (7) 溝跡

## 第2号溝跡 (第333~335図)

108-83グリッドから110-80グリッドにかけて検出された。北側は調査範囲外に続くと思われる。南側については、SD3以南には検出されていない。SD3に合流して終わっていると思われる。SJ13・14を切り、SD5・トレンチによって切られる。確認された範囲内で長さ31.8m・幅0.4~0.6m・深さ0.2mを測る。溝跡は直線的であり、N-132°-Wの方位で、南流すると思われる。溝跡の底面は比較的平坦である。壁面は直線的で、比較的急勾配に立ち上がる。

図化し得た遺物は計3点であった。

4は軽石製品である。合計3箇所が欠けている他は、比較的表面は滑らかである。

法量は7.5cm×7.0cm×3.2cm、76.0gを測る。乳灰色である。

## 第3号溝跡 (第333~335・219・220・234図)

第14地点のSD3と同一の溝跡であると推定される。第14地点の、溝跡の項(P220~221)を参照のこと。

## 第4号溝跡 (第333~335図)

108-84グリッドから110-83グリッドにかけて検出された。北側は調査範囲外に続く。南側はSD3と重複する部分で止まり、SD3以南ではSD4はみられない。SD4は遺構の遺存度が非常に悪く、SD3より南側では溝跡の痕跡が失われている可能性もある。

検出された範囲内で長さは26.8m・幅0.5~0.7m・深さ0.15~0.2mを測る。溝跡底面は平坦であるといえる。溝跡は直線的で、N-156°-Wの方位で南流する。断面形状は逆台形を呈する。

図化し得た遺物は2点であった。

## 第5号溝跡 (第333~335図)

79-82グリッドから110-82グリッドにかけて検出された。北側は調査範囲外に続き、南側はSD3との重複箇所が終わっている。SD5は、SD3以南では検出されていない。しかし、SD5は遺構の遺存度が非常に悪く、SD3より南側では溝跡の痕跡が失われて

いるが、SD26が同一の溝跡である可能性もある。SJ18~20を切り、SD2・6との新旧関係は不明。検出し得た範囲で長さ22.0m・幅0.5~0.7m・深さ0.25mを測る。溝跡底面は平坦または平坦に近い凹面で、壁面は緩やかに立ち上がる。溝跡は直線状に南流する。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは1点であった。

## 第6号溝跡 (第333~335・211・212図)

108-82グリッドから108-84グリッドにかけて検出された。西側は調査範囲外に続く。第14地点のSD83と同一の遺構であると思われる。このSD83は、109-89グリッドでSD1に合流して終わると推定される。

第15地点と、第14地点の中間部分にもSD6があったことを前提にした長さは確認範囲で約60m、SD6がSD1にまで及んでいるとすれば約65mとなる。幅は0.65m・深さは0.25mを測る。溝跡はほぼ直線状で、N-96°-Eの方位で東流する。溝跡底面は平坦もしくはそれに近い凹面で、壁面の立ち上がりは比較的急勾配であるといえる。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは2点であった。

## 第15号溝跡 (第333・334・336・337図)

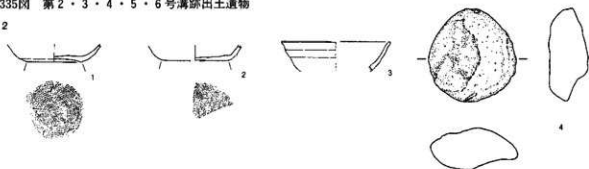
111-79グリッドから110-85グリッドにかけて検出された。西側は調査範囲外に続く。第14地点のSD14は本溝跡と同一遺構であると思われる。この場合、東側は107-102グリッドまで続くことになる。SD3・16に切られる。そしてこの溝跡は、谷地形に及んで終わっていると思われる。検出し得た範囲内で長さは約208m・幅は2.0m・深さは0.5~0.6mを測る。SD15は、直線的にN-78°-Eの方位で東流し、第14地点の107-100グリッド付近でやや南に振れる。溝跡底面は緩やかに窪み、壁面の立ち上がりも緩やかであるといえる。

SD15の遺物取り上げについては、平面的に西から1~5区まで設定して、区ごとに取り上げを行った。

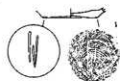
その内訳は、西端部~南北81グリッド：1区、南北81グリッド~同82グリッド：2区、同82グリッド~83グリッド：3区、同83グリッド~同84グリッド：4

第335图 第2・3・4・5・6号溝跡出土遺物

SD 2



SD 3



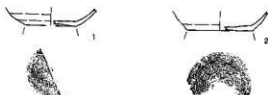
SD 4



SD 5



SD 6



0 10 cm  
SD 2-4 1:3

0 10 cm  
1:4

第136表 第2号溝跡出土遺物観察表(第335图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器环	—	2.0	6.0	AEH	普通	青灰色	底85	ロクロ成形	RC
2	須恵器环	—	1.7	(7.2)	ACEH	普通	暗茶褐色	底25	ロクロ成形	RC
3	須恵器环	(11.7)	3.2	—	ACEH	普通	暗灰色	口20	ロクロ成形	

第137表 第3号溝跡出土遺物観察表(第335图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器环	—	1.1	5.8	EII	普通	白灰色	底100	ロクロ成形	RC 底(外): 寛記号(内): 照成判読不可

第138表 第4号溝跡出土遺物観察表(第335图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器环	(15.1)	4.4	—	EH	普通	暗赤灰色	口115	ロクロ成形	
2	須恵器环	—	1.5	(6.0)	DEFH	普通	灰青色	底35	ロクロ成形	RC

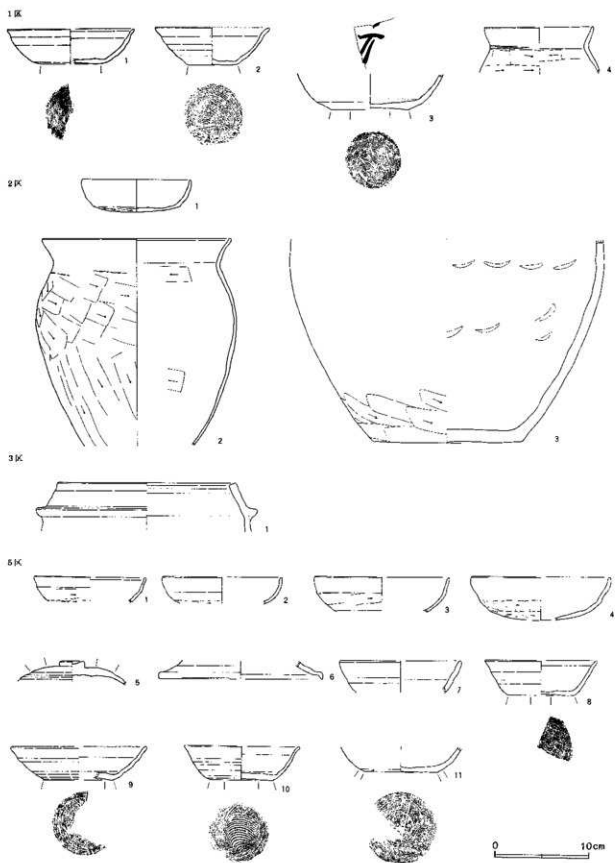
第139表 第5号溝跡出土遺物観察表(第335图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	灰釉碗か	—	3.3	(8.8)	BDE	普通	灰白色	口25	ロクロ水挽き成形	貼付高台

第140表 第6号溝跡出土遺物観察表(第335图)

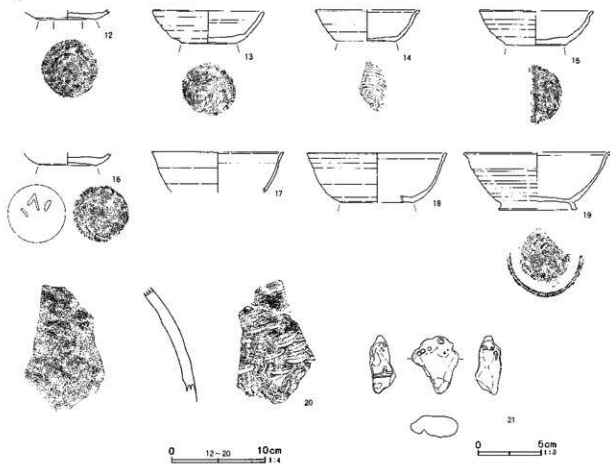
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器环	—	2.1	7.1	ADE	不良	白灰色	底55	ロクロ成形	RC
2	須恵器环	—	2.0	(5.5)	ACDE	不良	白灰色	底30	ロクロ成形	RC

第336图 第15号溝跡出土遺物(I)

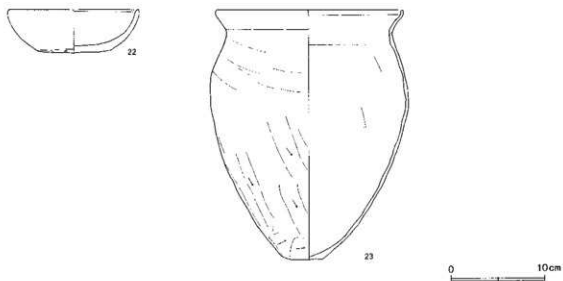


第337团 第15号海跡出土遺物(2)

6K



その他



第141表 第15号溝跡1区出土遺物観察表(第336図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	須恵器杯	(13.6)	3.8	(6.4)	EH	普通	灰白色	底30	口口成形 A	
2	須恵器碗	(12.2)	4.0	6.3	EH	普通	灰白色	底100	口口成形 RC	
3	須恵器碗	—	4.8	(8.1)	DEH	不良	灰白色	底25	口口成形 RB b 底(内):墨痕判読不明	
4	土師器甕	(11.7)	5.0	—	ACEF	普通	暗茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 内外面共にスス付着	

第142表 第15号溝跡2区出土遺物観察表(第336図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器杯	11.6	3.5	—	AEF	普通	暗褐色	口45	口:内外面とも横ナテ 体(外):ナテ 底(外):匱ナテ	
2	土師器甕	20.1	22.0	—	ADE	普通	明茶褐色	口85	口:内外面とも横ナテ 胴(外):匱削り 胴下半(外):スス付着	
3	須恵器甕	—	21.3	16.1	CEG	良	青灰色	底100	胴(外):平行叩き目文 下端部髹調整 (内):当て其痕	

第143表 第15号溝跡3区出土遺物観察表(第336図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器羽釜	(18.8)	5.7	—	ACE	普通	黄褐色	—	口口成形	

第144表 第15号溝跡5区出土遺物観察表(第336~337図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器杯	(11.9)	2.6	—	ACEF	普通	黄橙褐色	口20	器面風化 口:内外面横ナテ 体(外):匱削り(内):ナテ	
2	土師器杯	(12.7)	2.8	—	ACDE	普通	暗茶褐色	口45	口:内外面横ナテ 体(外):ナテ 底(外):匱削り	
3	土師器杯	14.4	3.6	—	AEF	普通	明茶褐色	口25	口:内外面横ナテ 体(外):匱削り 体(内):ナテ	
4	土師器杯	(14.9)	4.5	—	ACEF	普通	明茶褐色	口25	器面風化 口:内外面横ナテ 体~底(外):匱削り	
5	須恵器盃	2.7	2.2	—	CDE	普通	灰褐色	口65	口口成形 天井部:部分的に回転系切り成残る (R)匱削り	
6	須恵器甕	—	1.9	(17.3)	DEH	普通	青灰色	底15	口口成形	
7	須恵器杯	(13.0)	3.4	—	CEH	不良	灰褐色	口30	口口成形	
8	須恵器杯	(11.9)	3.7	(7.0)	ABE	普通	灰白色	口25	口口成形 RB a	
9	須恵器杯	(14.5)	3.5	(8.4)	DEH	普通	灰褐色	底30	口口成形 B b	
10	須恵器碗	(12.3)	3.7	6.7	DEH	普通	灰白色	底95	口口成形 RB b	
11	須恵器碗	—	2.7	7.7	BEH	良	灰青色	底80	口口成形 体部下端:回転匱削り(R)底:匱削り	
12	須恵器杯	—	1.0	6.1	ABCEH	普通	灰白/暗茶	底100	口口成形 RB b	
13	須恵器杯	11.9	3.5	5.9	EH	良	灰青色	底100	口口成形 RC	
14	須恵器杯	(11.1)	3.4	(6.0)	DEH	普通	灰白色	底35	口口成形 RB b 底(内):墨痕判読不明	
15	須恵器杯	(12.2)	3.7	6.1	ACEH	普通	灰青色	底55	口口成形 RC	
16	須恵器杯	—	1.4	6.1	EII	普通	灰白色	底100	口口成形 RC 匱削りあり	
17	須恵器杯	(14.0)	4.3	—	AEH	普通	灰白色	口15	口口成形	
18	須恵器碗	15.0	5.2	7.9	BEH	普通	灰白色	口30	口口成形 C	
19	須恵器高台杯	(15.8)	6.1	8.4	DEH	普通	灰白色	底50	口口成形 底:回転系切り離L(R)後 高台貼付 スス付着	
20	須恵器甕	—	—	—	ADE	普通	黒灰色	—	外:平行叩き目文(?) 内:青濁液文	

第145表 第15号溝跡その他出土遺物観察表(第337図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	土師器杯	(14.0)	4.5	—	ACEFH	普通	明茶褐色	口30	口:内外面横ナテ 体(外):ナテ 底(内):匱削り	
2	土師器甕	19.9	26.5	5.4	AEF	普通	明茶褐色	口95	口:内外面横ナテ 胴~底(外):匱削り 器面風化	

区、同84グリッド~同85グリッド:5区である。

土層断面の3層は炭化層であり、5区から出土した遺物はいずれもこの3層上面から出土した。

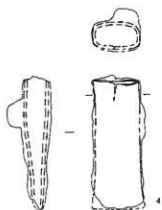
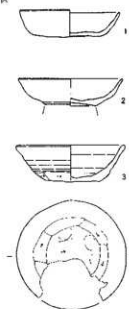
10は貝果穴底泥岩である。明瞭に貝果穴と思われる痕跡が10箇所ほど存在する。明赤褐色をしており、被熱しているためと思われる。長さ4.6cm・幅3.8cm・厚さ1.9cm、重量15.8gを測る。

#### 第16号溝跡 (第333・334・338~340図)

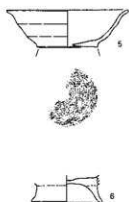
111-79グリッドにかけて検出された。西側は調査範囲外に続き、東側は排水溝や、現行の悪水路によって切られている。空中写真測量のために撮影された写真を観察したところ、悪水路は117-88グリッドから119-90グリッド方向に流れており、SD16の方位・規模とも一致していることがわかった(写真図版1・

第338図 第16号溝跡出土遺物(1)灰層上

1区



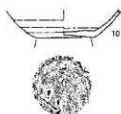
2区



0 4 10 cm  
1:3

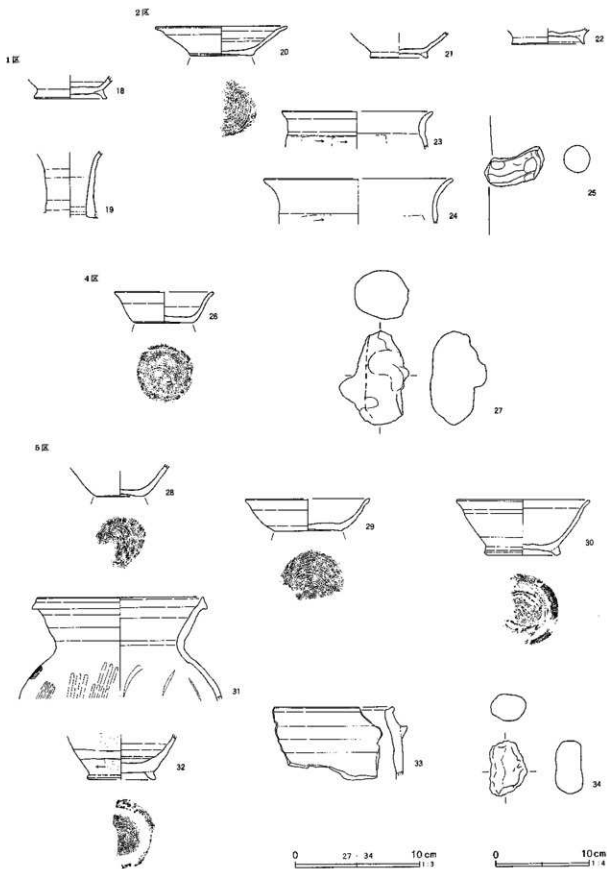


3区



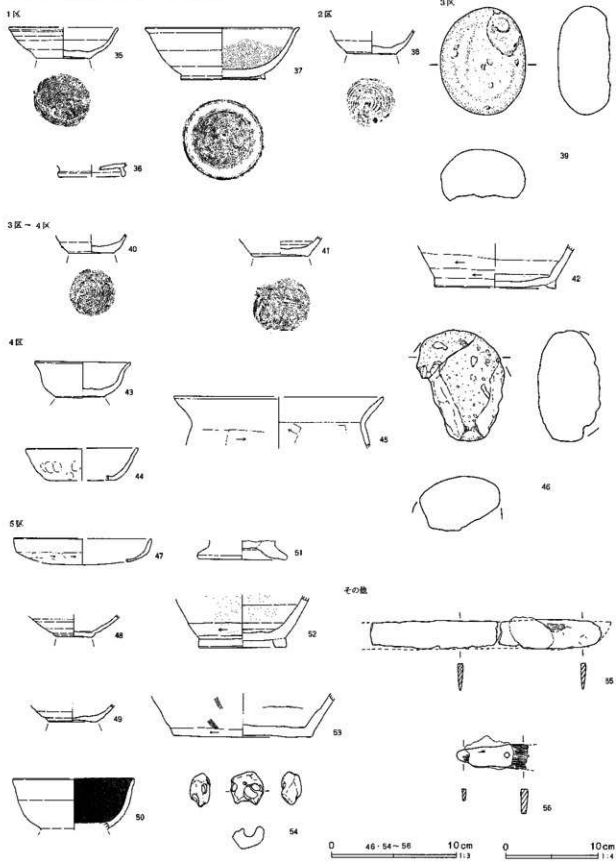
0 10 cm  
1:4

第339図 第16号溝跡出土遺物(2)灰層中





第340図 第16号溝跡出土遺物(3)灰層下



第146表 第16号溝跡出土遺物観察表(第338~340図)

番号	器種	口径	器高	口径	出土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器皿	10.7	2.9	7.1	AE	不良	明褐色	口90	クロコ成形 C 器面風化 器形歪む
2	土師器皿	11.2	2.9	5.4	ADE	普通	明褐色	底100	クロコ成形 C 器形歪む
3	土師器杯	11.7	3.9	5.8	ACEF	普通	黄褐色	底100	クロコ成形(R) 体下(外): 施削り 底(外): 施削り後指押え
5	須恵器杯	(13.0)	4.0	6.6	ABEH	普通	暗灰色	底60	クロコ成形 RC
6	土師高台碗	—	3.0	(7.5)	AEF	普通	白灰色	台45	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか高台貼付
7	土師器壺	(19.6)	6.5	—	ACEF	普通	暗赤褐色	口125	口: 内外面横ナテ 胴(外): 施削り スス付着(内): 施ナテ
8	土師器杯	(9.9)	2.8	(6.0)	ACEF	普通	黄褐色	底35	クロコ成形 RC 器面風化
9	土師器杯	(12.0)	3.4	6.1	ACEH	不良	灰褐色	底100	クロコ成形 RC
10	土師器杯	—	3.6	6.0	AEH	普通	白褐色	底100	クロコ成形 RC
11	須恵器杯	(14.6)	4.5	—	ACDE	不良	黄灰色	口15	クロコ成形
12	土師高台碗	—	4.1	8.0	AEF	不良	暗褐色	台95	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか 貼付高台 器面風化
13	土師高台碗	—	2.5	(8.3)	AEF	普通	白褐色	台30	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか 貼付高台
14	須恵高台碗	—	3.3	(8.1)	—	良	青灰色	台45	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか 貼付高台
15	土師羽割釜	(20.0)	6.7	—	BCE	普通	暗褐色	口15	口: 胴: 横ナテ 胴: 内外面ともナテか 器面風化著しい
16	土師羽割釜	(23.1)	14.1	—	ABD	普通	暗褐色	口25	クロコ成形 口: 胴部下(外): 丁寧なナテ
17	土師器壺	—	6.8	(14.2)	ACDE	不良	暗褐色	底30	クロコ成形 器面風化著しい
18	須恵高台碗	—	2.5	7.7	ACDE	普通	白灰色	台75	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか 貼付高台
19	須恵長狭壺	—	7.1	—	DE	普通	暗褐色	—	クロコ水挽き成形か
20	須恵器皿	14.1	3.1	6.6	BEH	普通	灰白色	底50	クロコ成形 底: 回転糸切り難し(R)
21	須恵高台碗	—	2.8	6.1	CEH	不良	白灰色	台65	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか 貼付高台 器面風化著しい
22	須恵高台碗	—	1.7	7.8	ACDE	不良	白灰色	底75	クロコ成形 底: 回転糸切り難しか 貼付高台
23	土師器壺	(16.1)	3.8	—	AEF	普通	茶褐色	口25	口: 内外面横ナテ 胴: 内外面ナテ 胴(外): 施削り 器面風化
24	土師器壺	(20.1)	4.8	—	ACDEH	普通	明褐色	口15	口: 内外面横ナテ 胴(外): 施削り(内): 施ナテ 器面風化
25	土師器杯	(10.7)	3.3	6.0	ACE	不良	灰褐色	底100	クロコ成形 RC
26	土師器杯	—	3.3	5.2	ACE	不良	暗褐色	底65	クロコ成形 C 内黒処理 器面風化著しい
29	須恵器杯	(13.3)	3.4	7.4	BDEH	普通	灰白色	口20	クロコ成形 RC
30	須恵高台碗	24.2	5.9	7.4	BEII	普通	青灰色	口75	クロコ成形 底: 回転糸切り難し(R) 後高台貼付
31	須恵器壺	17.8	11.1	—	BEH	普通	灰青色	口195	口: 内外面ともクロコナテ 胴(外): 平行甲き目文
32	須恵器壺	—	4.9	(7.2)	EII	普通	白灰色	台45	クロコ成形 底: 回転置削りか 貼付高台
33	土師羽割釜	—	7.7	—	CEF	普通	暗赤褐色	—	口: 胴: 半(外): 丁寧なナテ 胴下半(外): ナテ
35	土師器杯	(11.7)	3.3	5.6	AEF	不良	灰白色	底100	クロコ成形 RC
36	灰輪碗	—	1.4	(7.2)	DE	良	白灰色	台40	クロコ水挽き成形 底: 回転置削りか 貼付高台
37	灰輪碗	16.6	5.5	9.0	DE	良	白灰色	台100	クロコ水挽き成形 底: 回転置削りか 高台貼付
38	土師器杯	—	2.7	5.3	ADEF	普通	白褐色	底100	クロコ成形 RC
40	土師器杯	—	2.0	4.8	AEF	不良	暗褐色	底100	クロコ成形 RC
41	土師器杯	—	2.2	5.9	ACEF	普通	白褐色	—	クロコ成形 RC
42	須恵器壺	—	4.8	(13.0)	BDEH	普通	灰白色	底35	クロコ水挽き成形 底: 施削り後高台貼付 底(内): 自然釉付着
43	土師器杯	10.3	3.8	5.2	ACEF	普通	明褐色	口10	クロコ成形 RC 器形やや歪む
44	土師器杯	(12.0)	3.4	(7.2)	ADE	普通	黄褐色	口125	口: 内外面横ナテ 胴(外): ナテと指痕による押え
45	土師器壺	(22.5)	5.5	—	ACE	普通	黄褐色	口15	口: 内外面横ナテ 胴(外): 施削り(内): 施ナテ
47	土師器杯	(14.6)	2.5	—	CDE	普通	明褐色	口15	口: 内外面横ナテ 体(外): 施削り(内): ナテ 器面風化
48	須恵器杯	—	2.4	3.8	AEH	不良	白灰色	底80	クロコ成形 RC
49	須恵器杯	—	1.9	(5.3)	ACEH	普通	黒灰色	底45	クロコ成形 RC
50	土師高台碗	(13.0)	5.5	—	ACDE	不良	暗灰色	口35	クロコ成形 貼付高台か 内面: 施磨きの後内黒処理
51	土師台付壺	—	2.0	(9.1)	ACEF	普通	黄褐色	台45	脚上部: 内外面とも横ナテ
52	須恵器壺	—	5.5	9.4	BEH	普通	灰白色	台80	クロコ水挽き 胴(外)最下端: 回転置調整(R) 内外面自然釉
53	須恵器壺	—	4.7	(14.9)	EH	良	暗灰色	底30	胴(外): 平行甲き目文 (内): ナテ 底: 施削りか

下段写真)。現行のこの排水路の一部は、SD16の痕跡を現在にまで残していると思われる。

検出し得た範囲内で長さは62.7m・幅は2.5~3.0m・深さは0.6~0.8mを測る。溝跡は直線的に、N-126-Eの方位で東流する。溝跡底面は平坦または凹面状で、壁面は直線状に立ち上がる。

SD16の遺物取上げについては、平面的に西から1~5区まで設定して、区ごとに取り上げを行った。その内訳は、西端部~南北81グリッド: 1区、南北81グリッド~同82グリッド: 2区、同82グリッド~83グリッド: 3区、同83グリッド~同84グリッド: 4区、同84グリッド~溝跡西端部: 5区である。また広

い範囲で灰層が認められたため、この区分けの中で灰層上、灰層中、灰層下と分けて遺物取り上げを行った。

遺物の出土は多く、図化し得たのは計56点であった。

4：有袋鉄斧（鉄製）。銹化著しく、図はX先写真からの推定。刃部は基部より僅かに幅広で、湾曲も僅か。両刃か。袋部の断面形は、長楕円形で閉じていると思われる。現存長10.2cm・現存刃部幅3.9cmを測る。

27：不明鉄製品。銹化著しい上に堅固で、クリーニングしても銷落としできず、X線でも形状は不明であった。現状で7.3cm×5.0cm×3.8cm、168.3gを測る。

34：不明鉄製品。銹化著しい上に堅固で、クリーニングしても銷落としできず、X線でも形状は不明であった。現状で4.3cm×2.8cm×2.1cm、33.0gを測る。

39：磨石か。安山岩製、灰褐色。片面は表面が一部剝離している。8.6×6.8×3.8cm、162.0gを測る。

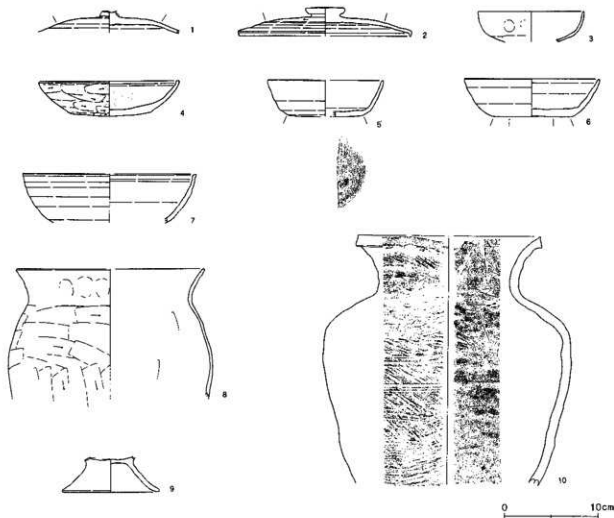
46：軽石製品。表面は風化している上に欠損部分も多い。8.8×7.0×4.9cm、現存重量139.3gを測る。

54：貝巣穴痕泥岩。明瞭な貝巣穴がみられる。被熱による明赤褐色。2.6×2.6×1.6cm、6.5g。

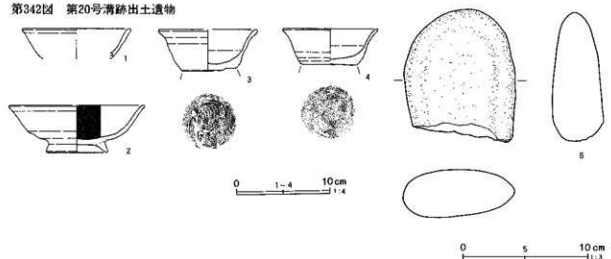
55：鉄刀か。切先と基部欠損。多数の破片よりの復元実測である。平棟造り。現存長18.3cm、切先付近棟幅0.4cm、刃幅2.1cm、最大刃幅2.2cm棟幅0.4cm、21.8g。

56：鉄刀の基部か。55と同一個体の可能性があるが、刃部棟幅の差が大きいため別々に図化をした。現存長5.8cm・茎幅1.9cm・茎厚0.6cm、25.2g。目釘穴が確認された。

第341図 第19号溝跡出土遺物



第342図 第20号溝跡出土遺物



## 第19号溝跡 (第333・334・341図)

114-79グリッドから114-84グリッドにかけて検出された。SD16・20に切られる。西側は調査範囲外に続き、東側も調査範囲外まで続いていると思われる。調査し得た範囲内での長さは38.4m・幅2.0m・深さ0.6mを測る。南北80グリッド以西では若干屈折するが、それ以外の部分はN-92°-Eの方位で東流する。溝跡底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

遺物の大部分は中層からの出土であり、図化した遺物は10点であった。

## 第20号溝跡 (第333・334・342図)

112・113-79グリッドから113-82グリッドにて検出された。西側は調査範囲外に続き、東側はSD16に合流して終わると思われる。検出し得た範囲での長さは27.0m・幅は0.9m・深さは0.4mを測る。N-96°-Eの方位で東流する。溝跡底面は浅い窪み状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。

図化した遺物は計5点であった。

5は磨石か。安山岩製。平面形は長楕円形を呈すると思われる。断面形はやや扁平である。磨面は表裏面の2面と考えられるが、方向などの痕跡は明瞭ではない。周縁に敲打痕。10.3×9.0×4.0cm、558.0g。

第147表 第19号溝跡出土遺物観察表(第341図)

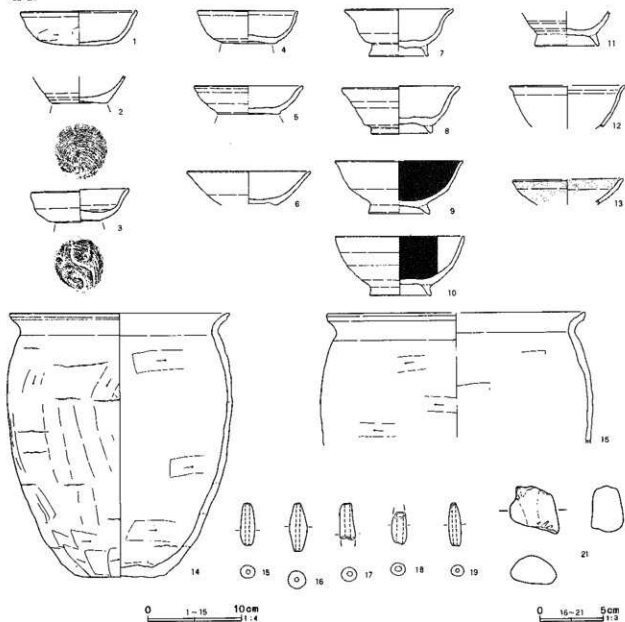
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	—	2.3	—	AEH	普通	灰青色	—	ロクロ成形 天井:回転施削り
2	須恵器蓋	(18.4)	3.0	4.2	AELI	普通	灰白色	ロ25	ロクロ成形 天井:回転施削り(R)
3	土師器環	(11.3)	3.2	—	AEFH	普通	橙褐色	ロ20	ロ:内外面横ナテ 体(外):ナテ 底(外):施削りか
4	土師器環	(15.1)	3.8	—	ACEH	普通	赤褐色	ロ40	ロ(外):横ナテ後施削り(内):横ナテ 内外面ともに赤形
5	須恵器環	(12.4)	3.9	(8.1)	EH	普通	白灰色	底30	ロクロ成形 底:施削り
6	須恵器碗	(14.4)	4.0	8.0	ADE	不良	黄橙褐色	底90	ロクロ成形 B b
7	須恵器碗	(18.6)	5.2	—	EH	普通	暗灰褐色	ロ15	ロクロ成形
8	土師器蓋	(20.2)	8.8	—	ADEF	普通	明茶褐色	ロ140	ロ:内外面横ナテ 胴(外):施削り(内):施ナテ
9	土師台付罌	—	3.8	10.3	ACEF	普通	暗茶褐色	台55	脚台部下端部:内外面横ナテ 外面スス付着
10	須恵器蓋	(19.4)	26.4	—	BEH	普通	青灰色	ロ35	ロクロ成形(外):平行叩き目文と横位の平行沈線

第148表 第20号溝跡出土遺物観察表(第342図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器環	(11.6)	3.2	—	ACEFH	不良	暗橙褐色	ロ20	ロクロ成形か
2	土師高台環	(14.6)	5.0	6.7	ACEFH	不良	明茶褐色	台55	ロクロ成形 体部(内):施削り 底:回転糸切り難しか粘付高台
3	土師器環	(10.6)	4.4	5.9	ACEFH	普通	黄橙褐色	底100	ロクロ成形 RC 外面スス付着
4	土師器環	(10.2)	3.9	6.0	ADEF	普通	橙褐色	底100	ロクロ成形 RC 内外面にわずかにスス付着

第343图 第21・26・28号沟跡出土遺物

SD 21



SD 26



SD 28



## 第21号溝跡 (第333・334・343区)

112-79グリッドから114-83・84グリッドにかけて、L字状に検出された。本遺構は当初溝跡として扱い、遺物取り上げを行った。掘り下げていくに従って、2次的に掘削された溝跡が検出された。またこの下位から、波状遺構が検出されるに及んで道路状遺構であることが明らかになった。しかし、出土遺物は道路状遺構の部分と、これを切る溝跡ともにSD21で取り上げる結果となった。そのため、これらから出土した遺物は道路状遺構の項ではなく、ここで掲載することとした。

図化し得た遺物は計21点。遺構については(6)道路状遺構(P341-343)を参照されたい。

## 第26号溝跡 (第333・334・343区)

111-83グリッドから112-83グリッドにかけて検出された。SD21を切る。SD5と、方位・規模・断面形・覆土が類似することから、同一の溝跡である可能性

高い。検出し得た範囲内で長さは5.5m、SD5を同一遺構とすればこれを含めて40.3m、幅は0.5m、深さは0.25mを測る。N-178-Eの方位で南流すると思われる。溝跡底面は窪み状で、壁面は急勾配に立ち上がる。断面形はU字状を呈する。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは1点であった。

## 第28号溝跡 (第333・334・343区)

114-80・81グリッドから115-80・81グリッドにかけて検出された。遺構の残りはきわめて悪く、深度はきわめて浅い。SD19に切られるが、これより北側には認められない。南側は溝跡の痕跡は失われているものの、現・新屋川方向に続いていいたと思われる。

検出し得た範囲で長さは7.3m・幅は1.6m・深さは0.3mを測る。N-177-Eの方位で南流すると思われる。溝跡底面は平坦に近く、断面形はU字状を呈する。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは1点であった。

第149表 第21号溝跡出土遺物観察表(第343区)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師甕環	12.5	3.6	—	ADE	普通	明茶褐色	U70	器面風化著しい。口:内外面とも横ナテ 体-底(外):施削りか
2	土師甕環	—	2.9	5.7	ADE	普通	明茶褐色	底95	ロクロ成形か RC
3	土師甕皿	10.4	3.5	5.2	—	普通	明橙褐色	底100	ロクロ成形 RC 底部に焼成時の亀裂あり
4	土師甕環	10.6	3.3	5.4	ACDE	不良	明茶褐色	底100	ロクロ成形 器面風化著しい RC
5	土師甕皿	(11.6)	3.1	6.5	AE	不良	明橙褐色	底95	ロクロ成形 器面風化 底:回転糸切り難し
6	土師高台環	(13.2)	3.6	—	ACDE	不良	黄茶褐色	U30	ロクロ成形
7	土師高台環	11.6	5.0	6.3	AEF	普通	明茶褐色	U55	ロクロ成形 C 後高台貼付
8	土師高台環	12.6	5.1	6.6	ADEF	普通	白褐色	台100	ロクロ成形 底:回転糸切り難し後高台貼付か 器形歪む
9	土師高台環	(13.7)	5.6	6.5	ACEH	不良	暗黄褐色	台95	ロクロ成形 器面風化著 底:回転糸切り難し後高台貼付か
10	土師高台環	13.7	6.3	6.5	ADE	普通	明橙褐色	U80	ロクロ成形 内部処理 底:糸切り難しか貼付高台 (内):施削
11	土師甕環	—	4.7	6.7	ADEF	普通	白褐色	台75	ロクロ成形 底:回転糸切り難し後高台貼付
12	須恵器環	(12.4)	4.6	—	DE	不良	灰白色	U20	ロクロ成形
13	灰釉皿	(11.9)	2.7	—	DE	普通	灰白色	U20	ロクロ水挽き成形 漬け掛け
14	土師甕甕	23.3	28.1	9.6	ACEH	普通	暗褐色	底90	口:内外面横ナテ 胴-底(内):施ナテ スス付着
15	土師甕甕	(27.7)	13.9	—	ACEH	普通	暗茶褐色	U35	口:内外面横ナテ 胴:施削りか 外面:スス付着

第150表 第26号溝跡出土遺物観察表(第343区)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	灰釉高台環	—	1.2	(5.9)	D	普通	白褐色	台30	ロクロ水挽き成形 底:回転糸切り難しか 貼付高台

第151表 第28号溝跡出土遺物観察表(第343区)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	—	1.4	(8.0)	BE	良	青灰色	底30	ロクロ成形 B b

## (8) グリッド出土遺物・表面採集遺物

今回の発掘調査において、表土掘削以前・掘削中、さらに遺構確認作業中に数多くの遺物が検出された。

第15地点でも第14・16地点と同様に、表土掘削中にも少なからぬ遺物が出土したが、この時点では遺構確認以前であったため、その大部分が帰属遺構を特定することはできなかった。

遺構確認作業中に検出された遺物のうち、基準点測量以前のもので、原位置を失う可能性のある遺物は表面採集遺物として取り上げを行った。

基準点測量終了後で、調査範囲内にグリッド杭が設置されて以降に検出された遺物については、帰属遺構が確定するまで極力出土位置に残すこととした。

こうした中で、遺物周辺に遺構が検出されなかった遺

物については、グリッド名を付して取り上げを行うこととした。

また、最終的に帰属遺構を確定できなかった遺物についても、グリッド名を付して一括で取り上げを行った。

ここではこれらの中から、図化し得る遺物を掲載する。表面採集遺物では7点、グリッド出土遺物では6点の計13点である。

なお、グリッドについては9×9mの大グリッド一括であり、大グリッド内を3×3mで9分割する小グリッド名までは付さずに、遺物取り上げを行った。

因みに、小グリッド名まで付した遺物取り上げを行ったのは、第14地点のみであった。

第152表 グリッド・表採出土遺物観察表(第344図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器杯	(14.2)	4.4	—	ACEF	普通	暗茶褐色	口20	口:内外面とも横ナテ 体-底(外):露削りか(内):ナデか
2	須恵器杯	(12.3)	3.5	(5.7)	RH	普通	灰白色	口25	口25 口25
3	土師高台杯	(12.8)	4.2	(7.3)	ADE	普通	黄褐色	口25	口25 口25
4	陶器高台碗	10.7	4.6	—	AEH	普通	明茶褐色	口55	口55 口55
5	須恵器杯	(12.7)	3.4	6.0	DEH	不良	白灰色	底80	底80 底80
6	灰輪高台杯	—	1.9	(7.1)	EH	普通	灰白色	口45	口45 口45
7	土師器甕	(22.2)	11.7	—	ABE	不良	暗橙褐色	口30	口30 口30
8	須恵器杯	(13.0)	3.8	6.0	AEH	不良	黄灰色	底70	底70 底70
9	土師器甕	(11.7)	4.3	—	AEF	普通	明茶褐色	口20	口:内外面とも横ナテ 胴(外):露削り(内):ナデか

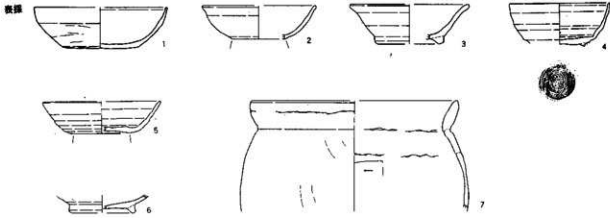
10: 磨石か。乳白色、安山岩製。扁平な長楕円形を呈する。磨面は表裏面の2面と思われるが、方向などの痕跡は明確ではない。周縁には一部敲打痕が観察される。長さ12.3cm・幅8.3cm・厚さ3.2cm、重量463.0gを測る。被熱していると思われる。

11: 磨石か。乳灰色、安山岩製。一方の面の3分の1程を欠く。拳大程の磨石である。磨面は表裏面の2面と思われるが、方向などの痕跡はきわめて明確ではない。周縁の上下の面と左の面に、一部敲打痕が観察される。長さ10.5cm・幅7.5cm・厚さ3.9cm、重量439.3gを測る。

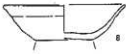
12: 石皿か。置いた状態で使用されたと考えられる、比較的大型品であることから石皿として分類した。扁平な長楕円形を呈する。灰褐色、安山岩製。表裏面の2面を磨面として使用していると思われるが、方向などの痕跡は明確ではない。下面の周縁部に敲打痕がみられる。

13: 石皿か。全体の4分の3程を欠損している状態であると思われる。灰褐色、安山岩製。表面を磨面としてしていると思われるが、方向などの痕跡は明確ではない。現存長13.5cm・現存幅10.1cm・現存厚5.8cm、現存重量908.3gを測る。

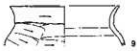
第344図 グリッド・表面採集出土遺物



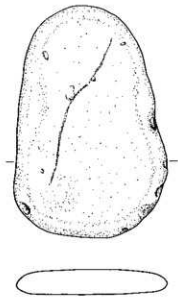
103-83G



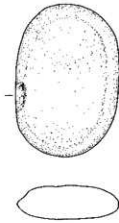
115-84G



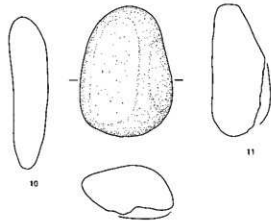
108-83G



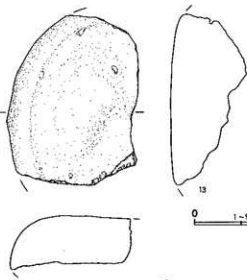
112-80G



113-81G



113-80G



0 1-9 10cm 1:4

0 10-13 10cm 1:3



## 報告書抄録

ふりがな	きたじまいせき							
書名	北島遺跡IV							
副書名	上之調節池建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告〈第1分冊〉							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第195集							
編著者名	鈴木孝之 書上元博 上野真由美							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1					TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
きたじまいせき 北島遺跡	さいたまけんくまがやし 埼玉県熊谷市 北野町大字上川上字金下 443-1番地他	59	168	36°09'31"	139°24'39"	1994(平成6)年9月1日～ 1996(平成8)年7月31日	31,830㎡	上之調節池建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北島遺跡	集落跡	縄文時代晩期 弥生時代中期 古墳時代前期 奈良時代 平安時代 中近世	住居跡 掘立柱建物跡 標列 土壇跡 井戸跡 溝跡 ピット 道路状遺構	116軒 62棟 8基 144基 41基 253条 1,201基 2基	縄文土器 石器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 土師質土器 灰種陶器 緑釉陶器 石製品 鉄製品 銅製品 陶器・磁器 獣骨 帯金具 線刻 紡錘車	掘立柱建物跡を回り込むようにして道路状遺構が存在。コ字状に配置された掘立柱建物群の内側に住居跡が共存したと思われる。		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第196集

---

熊谷市

## 北島遺跡Ⅳ

(第14～16地点)

上之調節池建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告

〈第1分冊〉

平成10年3月25日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県入里郡大里村船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／朝日印刷工業株式会社